

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第85集

田村遺跡群Ⅱ

高知空港再拡張整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第9分冊

総論

田村遺跡群Ⅱ

第九分冊

総論

第85集

二〇〇六・三

高知県教育委員会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

2006.3

高知県教育委員会

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第85集

田村遺跡群Ⅱ

高知空港再拡張整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第9分冊

総論

2006.3

高知県教育委員会

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

例 言

1. 本書は平成8年度から平成16年度までに発掘調査、報告書作成を行なった『田村遺跡群Ⅱ』（第1～8分冊）の『田村遺跡群Ⅱ 第9分冊』である。内容は総論として全体のまとめである。
2. 本書は高知県教育委員会から委託を受け、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが作成したものである。
3. 本書の編集は、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが行なった。
編集・執筆担当者は小野由香、久家隆芳、坂本憲昭、筒井三菜、出原恵三、前田光雄、森田尚宏、吉成承三(以上(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター)、坂本裕一(高知県教育委員会)、小島恵子(高知市立小高坂小学校教諭)、畠中宏一(高知県立追手前高等学校吾北分校教諭)、浜田恵子(高知市教育委員会)、二宮修治・菊地一弥・會方絵里・新免歳靖(東京学芸大学・文化財科学研究室)である。本文執筆者名は目次に記した。
4. 本書は2004年3月に発行した『田村遺跡群Ⅱ』（第1～8分冊）を基に論巧、遺構、遺物の集成を行なった。遺物等についての観察事項等が本書では若干異なっていることがある。遺構・遺物は膨大な数に上り、報告者全員による統一見解を得ないものもあり、観察者により相違する点を御容赦願いたい。
5. 本書に添付したCDは『田村遺跡群Ⅱ』（第1～8分冊）のPDFを再集録、及び第9分冊のPDFを収録した。
6. 目次には、本編目次とともに『田村遺跡群Ⅱ』（第1～8分冊）の各分冊本文目次を再掲し、全体目次とした。

本文目次

I	田村遺跡群の概要 森田尚宏……………	1
	調査前の状況/今次の発掘調査	
II	田村遺跡群の縄文時代後期の様相 前田光雄……………	11
	はじめに/南四国中央部の遺跡群/田村遺跡群内の時期別占地/出土土器/出土石器/まとめ	
III	弥生時代の遺構 前田光雄 坂本裕一 ……	49
	竪穴住居跡/掘立柱建物跡/土坑	
IV	田村遺跡群弥生時代中後期の集落 前田光雄……………	97
	時期区分・遺構群の設定について/下位単位の抽出/各群の特徴/まとめ	
V	弥生時代前期の土器 出原恵三……………	137
	前期土器編年研究の略史と形態分類/分析と編年/高知平野の弥生前期土器	
VI	弥生時代中後期の土器群 坂本憲昭……………	171
	概要/各時期の状況/最後に	
VII	南四国型甕について 久家隆芳……………	197
	はじめに/田村遺跡群出土の南四国型甕/遺構との関係/まとめ	
VIII	弥生時代の石器・石製品 小野由香 小島恵子 畠中宏一 前田光雄……………	207
	石庖丁/石鎌/大型直縁刃石器/太型蛤刃石斧/柱状片刃石斧/小型方柱状片刃石斧/扁平片刃(両刃)石斧/小型石斧/叩石/砥石/台石/石錘/石錐/楔形石器/礫錐/磨製石鎌/打製石鎌/石槍/石剣/環状石斧/投弾/石製紡錘車/杵状石器/石棒/石製装飾品/剥片が出土する竪穴住居跡について/収穫具の使用痕について/まとめ	
IX	弥生時代の土製品 小野由香 ……	299
	土錘/漁撈具について	
X	田村遺跡群出土の青銅器 坂本憲昭……………	305
	銅鏡/銅鐸/銅矛/銅劍/銅戈/銅釧	

XI	古代の掘立柱建物跡と遺物 筒井三菜……………	315
	はじめに/田村遺跡群の調査概要/掘立柱建物跡の存続時期と遺跡の消長/田村遺跡群と周辺の 古代遺跡/出土遺物について/まとめ	
XII	近世田村遺跡群の景観と陶磁器需要 浜田恵子……………	343
	近世田村遺跡群とその景観変遷/陶磁器組成にみる近世の田村遺跡群	
XIII	放射化分析による近世陶磁器の生産地推定……………	355
	-尾戸窯製品の同定をめぐる- 二宮修治・菊地一弥・會方絵里・新免歳靖・浜田恵子 はじめに/尾戸窯関連陶器の生産地推定の視点/分析資料/分析結果からみた陶磁器の生産地推 定/おわりに	
XIV	まとめ 久家隆芳 小野由香 前田光雄……………	387
	弥生時代前期について/弥生時代中期について/弥生時代中後期について/弥生時代後期につい て	

弥生時代竪穴住居跡集成図

報告書抄録

挿図目次

- I 田村遺跡群の概要
 - I -1図 田村遺跡群位置図
 - I -2図 調査対象地図
 - I -3図 調査区設定図
- II 田村遺跡群の縄文時代後期の様相
 - II -1図 南四国中央部縄文後期の遺跡群
 - II -2図 田村遺跡群内縄文時代遺物の分布
 - II -3図 南四国中央部縄文時代後期の型式相
 - II -4図 土坑内出土縄文土器
 - II -5図 土坑内、包含層出土縄文土器
 - II -6図 土坑内出土縄文土器(1)
 - II -7図 土坑内出土縄文土器(2)
 - II -8図 土坑内出土縄文土器(3)
 - II -9図 土坑内、M1区SX100出土縄文土器
 - II -10図 M1区SX101出土縄文土器(1)
 - II -11図 M1区SX101出土縄文土器(2)
 - II -12図 M1区SX101出土縄文土器(3)
 - II -13図 包含層出土縄文土器(1)
 - II -14図 包含層出土縄文土器(2)
 - II -15図 包含層出土縄文土器(3)
 - II -16図 包含層出土縄文土器(4)
 - II -17図 包含層出土縄文土器(5)
 - II -18図 包含層出土縄文土器(6)
 - II -19図 包含層出土縄文土器(7)
 - II -20図 包含層出土縄文土器(8)
 - II -21図 包含層出土縄文土器(9)
 - II -22図 包含層出土縄文土器(10)
 - II -23図 包含層出土縄文土器(11)
 - II -24図 包含層出土縄文土器(12)
 - II -25図 包含層出土縄文土器(13)
 - II -26図 土坑内、包含層出土石器
 - II -27図 包含層出土石器(1)
 - II -28図 包含層出土石器(2)
 - II -29図 包含層出土石器(3)
 - II -30図 包含層出土石器(4)
 - II -31図 包含層出土石器(5)
 - II -32図 包含層出土石器、石製品
- III 弥生時代の遺構
 - III -1図 前期の住居跡配置図
 - III -2図 中期の住居跡配置図
 - III -3図 中後期の住居跡配置図
 - III -4図 後期の住居跡配置図
 - III -5図 住居跡集成図(1)
 - III -6図 住居跡集成図(2)
 - III -7図 住居跡集成図(3)
 - III -8図 住居跡集成図(4)
 - III -9図 住居跡集成図(5)
 - III -10図 住居跡集成図(6)
 - III -11図 住居跡集成図(7)
 - III -12図 住居跡集成図(8)
 - III -13図 中期の掘立柱建物跡配置図
 - III -14図 中後期の掘立柱建物跡配置図
 - III -15図 中期掘立柱建物跡(1)
 - III -16図 中期掘立柱建物跡(2)
 - III -17図 中後期掘立柱建物跡(1)
 - III -18図 中後期掘立柱建物跡(2)
 - III -19図 中後期掘立柱建物跡(3)
 - III -20図 中後期掘立柱建物跡(4)

Ⅲ-21図 前期・前期末土坑配置図
Ⅲ-22図 中期土坑配置図
Ⅲ-23図 中後期・後期土坑配置図
Ⅲ-24図 前期前葉の土坑
Ⅲ-25図 前期の土坑(1)
Ⅲ-26図 前期の土坑(2)
Ⅲ-27図 前期の土坑(3)
Ⅲ-28図 前期の土坑(4)
Ⅲ-29図 前期の土坑(5)
Ⅲ-30図 前期末の土坑
Ⅲ-31図 中期の土坑(1)
Ⅲ-32図 中期の土坑(2)
Ⅲ-33図 中後期の土坑(1)
Ⅲ-34図 中後期の土坑(2)
Ⅲ-35図 中後期の土坑(3)
Ⅲ-36図 中後期の土坑(4)
Ⅲ-37図 中後期の土坑(5)
Ⅲ-38図 中後期の土坑(6)
Ⅲ-39図 後期の土坑

Ⅳ 田村遺跡群弥生時代中後期の集落

Ⅳ-1図 中後期全体図
Ⅳ-2図 F区下位単位
Ⅳ-3図 F区下位単位の組み合わせ(1)
Ⅳ-4図 F区下位単位の組み合わせ(2)
Ⅳ-5図 K区下位単位
Ⅳ-6図 K区下位単位の組み合わせ(1)
Ⅳ-7図 K区下位単位の組み合わせ(2)
Ⅳ-8図 K区下位単位の組み合わせ(3)
Ⅳ-9図 K区下位単位の組み合わせ(4)
Ⅳ-10図 1群全体図
Ⅳ-11図 2群全体図
Ⅳ-12図 3群全体図

Ⅳ-13図 4・5群全体図

Ⅴ 弥生時代前期の土器

V-1図 I b期中型壺
V-2図 I b期大型壺
V-3図 I b～I d期小型壺
V-4図 I b期甕(1)
V-5図 I b期甕(2)
V-6図 I b期
V-7図 I b期
V-8図 I b期
V-9図 I c期
V-10図 I c期・I d期大型壺
V-11図 I c期甕
V-12図 I c期鉢、蓋
V-13図 I d期中型壺
V-14図 I d期甕
V-15図 I d期鉢、蓋、高坏
V-16図 II a期壺、甕、鉢、蓋
V-17図 II b期壺、甕、鉢、蓋

Ⅵ 弥生時代中後期の土器群

Ⅵ-1図 Ⅲ期後半の土器様相
Ⅵ-2図 Ⅳ-1期の土器様相
Ⅵ-3図 Ⅳ-2期の土器様相
Ⅵ-4図 Ⅳ-3期の土器様相
Ⅵ-5図 V-1期の土器様相
Ⅵ-6図 甕形土器変遷図
Ⅵ-7図 壺形土器変遷図
Ⅵ-8図 鉢・高坏形土器変遷図

Ⅶ 南四国型甕について

Ⅶ-1図 南四国型甕変遷図

- Ⅶ-2図 I・N区集落跡模式図
- Ⅷ 弥生時代の石器・石製品
- Ⅷ-1図 石庖丁・石鎌平面形模式図
- Ⅷ-2図 石庖丁
- Ⅷ-3図 石鎌
- Ⅷ-4図 大型直縁刃石器
- Ⅷ-5図 太型蛤刃石斧
- Ⅷ-6図 加工斧
- Ⅷ-7図 叩石
- Ⅷ-8図 砥石
- Ⅷ-9図 台石
- Ⅷ-10図 石錘
- Ⅷ-11図 石錘分類
- Ⅷ-12図 楔形石器分類
- Ⅷ-13図 礫錘
- Ⅷ-14図 磨製石鎌(1)
- Ⅷ-15図 磨製石鎌(2)
- Ⅷ-16図 磨製石鎌(3)
- Ⅷ-17図 打製石鎌(1)
- Ⅷ-18図 打製石鎌(2)
- Ⅷ-19図 打製石鎌(3)
- Ⅷ-20図 打製石鎌(4)
- Ⅷ-21図 石槍
- Ⅷ-22図 石剣
- Ⅷ-23図 環状石斧(1)
- Ⅷ-24図 環状石斧(2)
- Ⅷ-25図 投弾
- Ⅷ-26図 石製紡錘車
- Ⅷ-27図 杵状石器
- Ⅷ-28図 石棒
- Ⅷ-29図 石製装飾品
- Ⅷ-30図 使用痕光沢面分布図の基準と凡例
- Ⅷ-31図 No1・2の使用痕光沢面分布範囲
- Ⅷ-32図 No3の使用痕光沢面分布範囲
- Ⅷ-33図 No4の使用痕光沢面分布範囲
- Ⅷ-34図 No5の使用痕光沢面分布範囲
- Ⅷ-35図 No6の使用痕光沢面分布範囲
- Ⅷ-36図 No7の使用痕光沢面分布範囲
- Ⅷ-37図 No8の使用痕光沢面分布範囲
- Ⅷ-38図 No9の使用痕光沢面分布範囲
- Ⅷ-39図 No10の使用痕光沢面分布範囲
- Ⅷ-40図 打製石鎌・大型直縁刃石器
- Ⅷ-41図 I-2期
- Ⅷ-42図 I-2~3期
- Ⅷ-43図 I-3期
- Ⅷ-44図 I-3~5期
- Ⅷ-45図 III期
- Ⅷ-46図 IV期
- Ⅷ-47図 IV-2-V-1期
- Ⅷ-48図 V-1-3期
- Ⅷ-49図 打製石錘出土主要遺跡(参考資料)
- Ⅸ 弥生時代の土製品
- Ⅸ-1図 土錘・鉄製釣針
- X 田村遺跡群出土の青銅器
- X-1図 青銅器出土遺跡分布図
- X-2図 青銅器種別分布図
- X-3図 田村遺跡群出土青銅器分布図
- XI 古代の掘立柱建物跡と遺物
- XI-1図 田村遺跡群と周辺の古代遺跡位置図
- XI-2図 田村遺跡群調査区位置図(古代)
- XI-3図 Loc.30B・Loc.39遺構全体図
- XI-4図 D1区・F4区・I4区・N3区遺構全体図

- XI-5図 下ノ坪遺跡・十万遺跡・曾我遺跡遺構
全体図(「土佐における古代前期の建物
群」より抜粋)
- XI-6図 県内出土陶硯1
- XI-7図 県内出土陶硯2
- XII 近世田村遺跡群の景観と陶磁器需要
- XII-1図 B1・B3・B4区遺構全体図
- XII-2図 A10・B1・B4区出土遺物
- XIII 放射化分析による近世陶磁器の生産地推定
- XIII-1図 クラスタ分析による陶磁器の分類
(機器中性子放射化分析によるデータ：
Ward法)
- XIII-2図 クラスタ分析による陶磁器の分類
(ICP-発光分光分析によるデータ：
Ward法)
- XIII-3図 クラスタ分析による陶磁器の分類②
(機器中性子放射化分析によるデータ：
Ward法)
- XIII-4図 分析資料その1(消費地遺跡出土資料)
- XIII-5図 分析資料その2(消費地遺跡出土資料)
- XIII-6図 分析資料その3(生産地遺跡出土資料-
肥前)
- XIII-7図 分析資料その4(生産地遺跡出土資料-
尾戸窯跡)
- XIII-8図 分析資料その5(生産地遺跡出土資料-
尾戸・能茶山窯跡)
- XIII-9図 分析資料その6(生産地遺跡出土資料-
信楽)

表目次

II 田村遺跡群の縄文時代後期の様相

表II-1 南四国中央部縄文後期の遺跡群

III 弥生時代の遺構

表III-1 時期別住居跡軒数

表III-2 時期別平面形別住居跡軒数

表III-3 時期別規模別住居跡軒数

表III-4 時期別掘立柱建物跡数

表III-5 時期別土坑数一覧表

IV 田村遺跡群弥生時代中後期の集落

表IV-1 群別一覧表

表IV-2 時期別一覧表

V 弥生時代前期の土器

表V-1 田村遺跡群前期土器組成

表V-2 田村遺跡群前期土器中型壺分類

表V-3 田村遺跡群前期甕分類

表V-4 田村遺跡群前期甕E類の変化(I a～I d期)

表V-5 田村遺跡群前期甕E類の口唇部形態と刻目の部位

VI 弥生時代中後期の土器群

表VI-1 実測図掲載遺物一覧表

表VI-2 高知県中央部の弥生土器編年表

表VI-3 高松平野からの搬入土器一覧表

表VI-4 「く」の字甕属性一覧表

表VI-5 器種別組成比率

VII 南四国型甕について

表VII-1 I区出土南四国型甕(1)

表VII-2 I区出土南四国型甕(2)

VIII 弥生時代の石器・石製品

表VIII-1 石庖丁観察表

表VIII-2 石鎌観察表

表VIII-3 大型直縁刃石器観察表

表VIII-4 太型蛤刃石斧観察表

表VIII-5 加工斧観察表

表VIII-6 叩石観察表

表VIII-7 砥石観察表

表VIII-8 台石観察表

表VIII-9 石錘観察表

表VIII-10 礫錐観察表

表VIII-11 磨製石鎌観察表

表VIII-12 打製石鎌観察表(1)

表VIII-13 打製石鎌観察表(2)

表VIII-14 石槍観察表

表VIII-15 石剣観察表

表VIII-16 環状石斧観察表

表VIII-17 投弾観察表

表VIII-18 石製紡錘車観察表

表VIII-19 石杵観察表

表VIII-20 石棒観察表

表VIII-21 石製装飾品観察表

表VIII-22 剥片石器出土遺構一覧表

IX 弥生時代の土製品	表IX-1 漁撈具一覧表	表XII-2 B1SX113出土資料用途別出土点数と組成比
X 田村遺跡群出土の青銅器	表X-1 青銅器一覧表	表XII-3 B1SX113出土資料生産地別出土点数
	表X-2 銅矛一覧表	XIII 放射化分析による近世陶磁器の生産地推定
	表X-3 銅剣一覧表	表XIII-1 分析資料観察表(消費地遺跡出土資料)
	表X-4 銅戈一覧表	表XIII-2 分析資料観察表(生産地遺跡出土資料)
	表X-5 銅鐸一覧表	表XIII-3 京町遺跡関連分析資料観察表(生産地遺跡出土資料)
	表X-6 銅鏡一覧表	表XIII-4 機器中性子放射化分析による諸種微量成分元素の定量
	表X-7 小型ほう製鏡一覧表	表XIII-5 クラスタ分析(INAAデータ：Ward法)による分類結果と諸種微量成分元素存在量
	表X-8 銅釧一覧表	表XIII-6 ICP発光分光分析による諸種主成分元素の定量
XI 古代の掘立柱建物跡と遺物	表XI-1 Loc.30B掘立柱建物跡計測表	表XIII-7 クラスタ分析(ICP発光分光分析：Ward法)による分類結果と諸種主成分元素組成
	表XI-2 Loc.39掘立柱建物跡計測表	表XIII-8 クラスタ分析(INAAデータ：Ward法)による分類結果と諸種微量成分元素存在量②
	表XI-3 D1区掘立柱建物跡計測表	XIV まとめ
	表XI-4 F4区掘立柱建物跡計測表	表XIV-1 弥生時代時期別概要表
	表XI-5 I4区掘立柱建物跡計測表	
	表XI-6 下ノ坪遺跡掘立柱建物跡計測表	
	表XI-7 十万遺跡掘立柱建物跡計測表	
	表XI-8 曾我遺跡掘立柱建物跡計測表	
	表XI-9 土佐国衙跡掘立柱建物跡計測表1	
	表XI-10 土佐国衙跡掘立柱建物跡計測表2	
	表XI-11 土佐国衙跡掘立柱建物跡計測表3	
	表XI-12 土佐国衙跡掘立柱建物跡計測表4	
	表XI-13 白猪田遺跡掘立柱建物跡計測表	
	表XI-14 県内の緑釉陶器・陶硯出土遺跡一覧表	
XII 近世田村遺跡群の景観と陶磁器需要	表XII-1 B1SX113出土資料器種別出土点数と組成比	

グラフ目次

II 田村遺跡群の縄文時代後期の様相

グラフ II-1 石器調査区別出土点数

グラフ II-2 田村・松ノ木遺跡石器対比

IV 田村遺跡群弥生時代中後期の集落

グラフ IV-1 群・時期別住居数

グラフ IV-2 各群の各事項の全体に占める割合

グラフ IV-3 各群内での各事項の占める割合

VIII 弥生時代の石器・石製品

グラフ VIII-1 石庖丁分類別割合グラフ

グラフ VIII-2 加工斧器種別割合グラフ

グラフ VIII-3 打欠石錘・有溝石錘重量別分布グラフ

IX 弥生時代の土製品

グラフ IX-1 土錘時代別数量グラフ

XII 近世田村遺跡群の景観と陶磁器需要

グラフ XII-1 B1SX113陶磁器器種別組成

グラフ XII-2 小籠遺跡廃棄土坑出土の陶磁器器種別組成

グラフ XII-3 陣山遺跡一括廃棄遺物の陶磁器器種別組成

グラフ XII-4 B1SX113磁器の生産地別組成

グラフ XII-5 B1SX113陶器の生産地別組成

グラフ XII-6 陣山遺跡一括廃棄遺物磁器の生産地別組成

グラフ XII-7 陣山遺跡一括廃棄遺物陶器の生産地別組成

『田村遺跡群Ⅱ』各分冊本文目次集

第1分冊

「調査の概要・A・B区の調査」

調査の概要

1 調査に至る経緯と経過 1

(1) 調査に至る経緯 1

空港拡張事業の推移/高知空港と拡張事業 1

(2) 調査の経過 4

発掘調査の経過/発掘調査体制 4

2 遺跡の位置と環境

(1) 遺跡の位置と自然環境 7

遺跡の位置/自然環境/田村遺跡群周辺の地形 7

(2) 歴史的環境 12

(3) 田村遺跡群のこれまでの調査 15

3 調査の概要

(1) 調査の方法 17

調査区基準 18

(2) 調査の概要 21

試掘調査/本調査 21

A区の調査

A1区の調査

1 A1区の概要 35

2 A1区の遺構と遺物 36

A2区の調査

1 A2区の概要 39

2 A2区の遺構と遺物 41

(1) 溝跡 41

A3区の調査

1 A3区の概要 47

2 A3区中世以降の遺構と遺物 47

(1) 掘立柱建物跡 47

(2) 土坑 47

(3) 溝跡 58

(4) 柱穴 64

(5) 遺物包含層出土遺物 64

A4区の調査

1 A4区の概要 67

2 A4区中世の遺構と遺物 67

(1) 土坑 67

(2) 溝跡 76

(3) 自然流路 78

(4) 柵列 78

(5) 柱穴 79

(6) 遺物包含層出土遺物 80

A5～9区の調査

1 A5～9区の概要 83

2 A5区の調査 83

3 A6区の調査 83

(1) 遺構 83

(2) 遺物 84

4 A7区の調査 88

(1) 遺構 88

(2) 遺物 88

5 A8区の調査 89

6 A9区の調査 90

A10区の調査

1 A10区の概要 95

2 A10区弥生時代の遺構と遺物 95

(1) 竪穴住居跡 95

(2) 土坑 101

(3) 溝跡 110

3 A10区中世の遺構と遺物 112

(1) 土坑・性格不明遺構 112

(2) 溝跡 113

(3) 土塁 114

(4) 柱穴 115

4 A10区遺物包含層出土遺物 118

B区の調査

B1区の調査

1 B1区の概要 129

2 B1区弥生時代の遺構と遺物 130

(1) 土坑 130

(2) ピット 142

(3) 遺物包含層出土遺物とその遺物 142

3 B1区中世の遺構と遺物 146

(1) 掘立柱建物跡 146

(2) 土坑 167

(3) 溝跡 183

(4) ピット出土遺物と遺構外出土遺物 195

4 B1区近世・近代の遺構と遺物 196

(1) 土坑 196

B2区の調査

1 B2区の概要 227

2 B2区近世以降の遺構と遺物 227

- (1) 掘立柱建物跡 227
- (2) 土坑 229
- (3) ピット 231
- (4) 井戸跡 233

B3区の調査

1 B3区の概要 239

2 B3区弥生時代の遺構と遺物 240

- (1) 竪穴住居跡 240
- (2) 掘立柱建物跡 250
- (3) 土坑 257

3 B3区中世以降の遺構と遺物 267

- (1) 土坑 267
- (2) 溝跡 269

B4区の調査

1 B4区の概要 281

2 B4区弥生時代の遺構と遺物 282

- (1) 竪穴住居跡 282
- (2) 土坑 301
- (3) 溝跡 312
- (4) ピット・遺物包含層出土遺物とその他の遺物 321

3 B4区古代の遺構と遺物 323

- (1) 溝跡 323

4 B4区中世の遺構と遺物 325

- (1) 土坑 325
- (2) 溝跡 333
- (3) ピット・土坑出土遺物とその他の遺物 335

5 B4区近世以降の遺構と遺物 337

- (1) 土坑・性格不明遺構 337
- (2) 溝跡 376

第2分冊

「C区の調査」

C区の調査

C1区の調査

1 C1区の概要 9

2 C1区弥生時代の遺構と遺物 10

- (1) 竪穴住居跡 10
- (2) 土坑 17
- (3) 溝跡及び自然流路 73
- (4) ピット 80

3 C1区古代以降の遺構と遺物 82

- (1) 土坑 82

- (2) 溝跡 84

- (3) ピット 85

C2区の調査

1 C2区の概要 91

2 C2区弥生時代の遺構と遺物 92

- (1) 竪穴住居跡 92
- (2) 土坑・溝状土坑 98

C2北区の調査

1 C2北区の概要 119

C3区の調査

1 C3区の概要 127

2 C3区弥生時代前期の遺構と遺物 129

- (1) 土坑 130
- (2) 溝跡 150

3 C3区弥生時代中期末～後期の遺構と遺物 152

- (1) 竪穴住居跡 155
- (2) 土坑 162

4 C3区上面検出の遺構と遺物 163

- (1) 溝跡 164
- (2) 性格不明遺構 168

C4区の調査

1 C4区の概要 177

2 C4区弥生時代の遺構と遺物 178

- (1) 竪穴住居跡 178
- (2) 土坑 180
- (3) 溝跡 262

3 C4区中世の遺構と遺物 266

- (1) 井戸跡 266

4 C4区表面採取遺物 269

- (1) 古銭 269

C4北区の調査

1 C4北区の概要 275

2 C4北区弥生時代の遺構と遺物 276

- (1) 土坑 276

3 C4北区中世の遺構と遺物 327

- (1) 溝跡 327
- (2) ピット出土遺物 328

4 C4北区包含層遺物 328

- (1) 古代 328

C5区の調査

1 C5区の概要 333

2 C5区弥生時代の遺構と遺物 334

- (1) 掘立柱建物跡 334
- (2) 土坑 340
- (3) 溝跡 350

- (4) ピット及び表採遺物 350

第3分冊

「D・E区の調査」

D区の調査

D1 区の調査

- 1 D1 区の概要 7
- 2 D1 区弥生時代の遺構と遺物 8
 - (1) 竪穴住居跡 8
 - (2) 掘立柱建物跡 39
 - (3) 土坑 44
 - (4) 溝跡 89
 - (5) ピット 96
 - (6) 性格不明遺構 97
 - (7) 遺物包含層出土遺物 102
- 3 D1 区古代から中世の遺構と遺物 103
 - (1) 掘立柱建物跡 103
 - (2) 溝跡 119
 - (3) ピット 126
 - (4) 遺物包含層出土遺物 127

D2 区の調査

- 1 D2 区の概要 131
- 2 D2 区弥生時代の遺構と遺物 132
 - (1) 竪穴住居跡 132
 - (2) 土坑 136
 - (3) 溝跡 142
 - (4) 包含層出土遺物 145
- 3 D2 区古代の遺構と遺物 146
 - (1) 溝跡 146
 - (2) 包含層出土遺物 151

E区の調査

E1 区の調査

- 1 E1 区の概要 161
- 2 E1 区弥生時代の遺構と遺物 162
 - (1) 竪穴住居跡 162
 - (2) 土坑 168
 - (3) 溝跡 170
 - (4) 性格不明遺構 172
- 3 E1 区近世の遺構と遺物 174
 - (1) 掘立柱建物跡 174
 - (2) 土坑 176
 - (3) 溝跡 178

E2 区の調査

- 1 E2 区の概要 183

- 2 E2 区弥生時代前期の遺構と遺物 184

- (1) 土坑 184

- (2) 溝跡 222

- 3 E2 区近世の遺構と遺物 227

- (1) 掘立柱建物跡 227

- (2) 土坑 227

- (3) 溝跡 233

E3 区の調査

- 1 E3 区の概要 239

- 2 E3 区弥生時代前期の遺構と遺物 240

- (1) 土坑 240

- (2) 溝跡 244

- (3) E3SR302 上層出土遺物 246

E4 区の調査

- 1 E4 区の概要 251

- 2 E4 区弥生時代の遺構と遺物 252

- (1) 竪穴住居跡 252

- (2) 掘立柱建物跡 282

- (3) 柵列跡 296

- (4) 土坑・溝状土坑 299

- 3 E4 区古代以降の遺構と遺物 326

- (1) 掘立柱建物跡 326

E5 区の調査

- 1 E5 区の概要 331

- 2 E5 区弥生時代の遺構と遺物 332

- (1) 竪穴住居跡 332

- (2) 掘立柱建物跡 333

- (3) 土坑 335

- (4) 溝跡 368

- (5) ピット 369

E6 区の調査

- 1 E6 区の概要 375

- 2 E6 区弥生時代の遺構と遺物 376

- (1) 土坑 376

- (2) 性格不明遺構 388

- (3) 溝跡 418

- (4) 包含層出土遺物 424

E7 区の調査

- 1 E7 区の概要 431

- 2 E7 区弥生時代の遺構と遺物 432

- (1) 竪穴住居跡 432

- (2) 掘立柱建物跡 475

- (3) 柵列跡 491

- (4) 土坑・溝状土坑 495

- (5) 性格不明遺構 512

- (6) 溝跡 518

- 3 E7区古代以降の遺構と遺物 521
 - (1)掘立柱建物跡 521
 - (2)土坑・溝状土坑 522
 - (3)溝跡 522
- E8区の調査
 - 1 E8区の概要 533
 - 2 E8区弥生時代の遺構と遺物 534
 - (1)竪穴住居跡 534
 - (2)土坑 535
 - (3)溝跡 539
 - (4)ピット 539
 - (5)包含層出土遺物 540
- E9区の調査
 - 1 E9区の概要 545
 - 2 E9区弥生時代の遺構と遺物 546
 - (1)土坑 546
 - (2)包含層出土遺物 548
 - 3 E9区古代の遺構と遺物 549
 - (1)溝跡(道路状遺構)549
 - (2)包含層出土遺物 551

第4分冊

〔F・G・Hの調査〕

F区の調査

F1区の調査

- 1 F1区の概要 13
- 2 F1区弥生時代の遺構と遺物 14
 - (1)竪穴住居跡 14
 - (2)掘立柱建物跡 26
 - (3)土坑 31
 - (4)溝跡 51
 - (5)性格不明遺構 59
- 3 F1区中世の遺構と遺物 61

F2区の調査

- 1 F2区の概要 69
- 2 F2区弥生時代の遺構と遺物 70
 - (1)竪穴住居跡 70
 - (2)掘立柱建物跡 76
 - (3)土坑 77
 - (4)溝跡 78
- 3 F2区古代・中世の遺構と遺物 82
 - (1)掘立柱建物跡 82

(2)土坑 84

(3)溝跡 85

F3区の調査

- 1 F3区の概要 93
- 2 F3区弥生時代の遺構と遺物 94
 - (1)竪穴住居跡 94
 - (2)掘立柱建物跡 109
 - (3)土坑 116
- 3 F3区古代末から中世の遺構と遺物 142
 - (1)掘立柱建物跡 142
 - (2)土坑 145
 - (3)性格不明遺構 146

F4区の調査

- 1 F4区の概要 153
- 2 F4区弥生時代の遺構と遺物 155
 - (1)竪穴住居跡 155
 - (2)掘立柱建物跡 210
 - (3)柵列 218
 - (4)土坑 218
 - (5)溝状土坑・性格不明遺構 286
 - (6)溝跡 300
 - (7)包含層・ピット・その他の遺物 306
- 3 F4区古代から中世の遺構と遺物 310
 - (1)掘立柱建物跡 310
 - (2)柵列 341
 - (3)土坑 343
 - (4)溝跡 351
 - (5)包含層・ピット・その他の遺物 353

F5区の調査

- 1 F5区の概要 361
- 2 F5区弥生時代の遺構と遺物 362
 - (1)土坑 362
 - (2)溝跡 365
 - (3)ピット 369
 - (4)包含層出土遺物 371
- 3 F5区近世の遺構と遺物 372
 - (1)土坑(近世墓)372
 - (2)包含層出土遺物 386

G区の調査

- 1 G区の概要 389
- 2 G区弥生時代の遺構と遺物 391
 - (1)竪穴住居跡 391
 - (2)土坑 398
 - (3)溝跡 400

3 G区中世の遺構と遺物 402

(1)掘立柱建物跡 402

(2)溝 405

H区の調査

H1 区の調査

1 H1 区の概要 411

2 H1 区縄文時代の遺構と遺物 412

(1)土坑 412

(2)包含層出土の遺物 421

3 H1 区弥生時代の遺構と遺物 435

4 H1 区古代～中世の遺構と遺物 435

H2 区の調査

1 H2 区の概要 443

2 H2 区縄文時代の遺構と遺物 444

(1)土坑 444

(2)包含層出土の遺物 456

3 H2 区弥生時代の遺構・遺物 467

(1)流路跡 467

4 H2 区上面で検出した遺構と遺物 473

(1)掘立柱建物跡 473

(2)土坑 482

(3)集石遺構 488

(4)溝跡 495

H3 区の調査

1 H3 区の概要 507

2 H3 区縄文時代の遺構と遺物 509

(1)土坑・炭化物・焼土部分 509

(2)包含層出土の遺物 511

H4 区の調査

1 H4 区の概要 519

2 H4 区縄文時代の遺構と遺物 520

(1)土坑 520

(2)包含層出土の遺物 527

第5分冊

「I・J区の調査」

I区の調査

I1 区の調査

1 I1 区の概要 9

2 I1 区弥生時代の遺構と遺物 10

(1)竪穴住居跡 10

(2)掘立柱建物跡 18

(3)土坑 34

(4)溝跡 44

I2 区の調査

1 I2 区の概要 55

2 I2 区弥生時代の遺構と遺物 56

(1)竪穴住居跡 56

(2)掘立柱建物跡 89

(3)土坑 114

(4)溝跡 138

(5)その他の遺物 142

3 I2 区古代・中世の遺構と遺物 142

(1)掘立柱建物跡 142

(2)性格不明遺構 146

(3)溝跡 146

I3 区の調査

1 I3 区の概要 153

2 I3 区検出遺構と出土遺物 154

(1)竪穴住居跡 154

(2)土坑 155

(3)溝跡 155

I4 区の調査

1 I4 区の概要 163

2 I4 区弥生時代の遺構と遺物 164

(1)竪穴住居跡 164

(2)掘立柱建物跡 186

(3)土坑 196

(4)溝跡 208

(5)その他の石器 212

3 I4 区古代・中世の遺構と遺物 213

(1)掘立柱建物跡 213

(2)土坑 229

(3)性格不明遺構 230

(4)溝跡 232

(5)ピット出土遺物 235

(6)包含層出土遺物 239

4 I4 区トレンチ調査 240

(1)I4 区TR1240

(2)I4 区TR2240

(3)I4 区TR3240

(4)I4 区TR4240

(5)I4 区TR5240

(6)I4 区TR6240

(7)I4 区TR7241

(8)I4 区TR8

- J区の調査
- J1 区の調査
- 1 J1 区の概要 255
 - 2 J1 区弥生時代の遺構と遺物 256
 - (1) 竪穴住居跡 256
 - (2) 掘立柱建物跡 275
 - (3) 土坑 278
 - (4) ピット 286
- J3 区の調査
- 1 J3 区の概要 291
 - 2 J3 区弥生時代の遺構と遺物 292
 - (1) 竪穴住居跡 292
 - (2) 掘立柱建物跡 308
 - (3) 土坑 318
 - 3 J3 区縄文時代の遺構と遺物 323
 - (1) 土坑・ピット 323
 - 4 J3 区包含層出土の遺物 325
- J4 区の調査
- 1 J4 区の概要 333
 - 2 J4 区弥生時代の遺構と遺物 334
 - (1) 竪穴住居跡 334
 - (2) 土坑 364
 - (3) 溝跡 375
 - (4) 包含層出土遺物 375
- J492 区の調査
- 1 J492 区の概要 381
 - 2 J492 区弥生時代の遺構と遺物 382
 - (1) 掘立柱建物跡 382
 - (2) 土坑 388
- J5 区の調査
- 1 J5 区の概要 395
 - 2 J5 区弥生時代の遺構と遺物 396
 - (1) 竪穴住居跡 396
 - (2) 掘立柱建物跡・柵列 400
 - (3) 土坑 403
 - (4) 溝跡 410
 - (5) 包含層出土遺物 410
 - 3 J5 区古代の遺構と遺物 411
 - (1) 溝跡 411
- J6 区の調査
- 1 J6 区の概要 415
 - 2 J6 区弥生時代の遺構と遺物 416
 - (1) 竪穴住居跡 416
 - (2) 土坑・性格不明遺構 420
 - (3) 包含層出土遺物 421
 - 3 J6 区古代の遺構と遺物・422

- (1) 溝跡 422
- (2) 包含層出土遺物 424

- J7 区の調査
- 1 J7 区の概要 427

第6分冊

「K・L区の調査」

- K区の調査
- K1 区の調査
- 1 K1 区の概要 9
 - 2 K1 区弥生時代の遺構と遺物 10
 - (1) 竪穴住居跡 10
 - (2) 掘立柱建物跡 66
 - (3) 土坑 69
 - (4) 溝跡 96
 - (5) ピット 120
 - 3 K1 区中世の遺構と遺物 122
 - (1) 土坑 122
 - (2) 溝跡 122
 - (3) ピット 123
 - 4 K1 区包含層出土遺物 127
- K2 区の調査
- 1 K2 区の概要 133
 - 2 K2 区弥生時代の遺構と遺物 134
 - (1) 竪穴住居跡 134
 - (2) 掘立柱建物跡 175
 - (3) 土坑 181
 - 3 K2 区中世の遺構と遺物 218
 - 4 K4 区の概要 223
- K3 区の調査
- 1 K3 区の概要 229
 - 2 K3 区弥生時代の遺構と遺物 230
 - (1) 竪穴住居跡 230
 - (2) 掘立柱建物跡 248
 - (3) 土坑 262
 - (4) 溝跡 266
 - (5) ピット 269
 - 3 K3 区古代・中世の遺構と遺物 270
 - (1) 溝跡 270
 - (2) ピット 270

L区の調査

L1 区の調査

- 1 L1 区の概要 283
- 2 L1 区弥生時代の遺構と遺物 285
 - (1) 竪穴住居跡 285
 - (2) 掘立柱建物跡 291
 - (3) 土坑・性格不明遺構 297
 - (4) 溝跡 309
- 3 L1 区中世の遺構と遺物 314
 - (1) 掘立柱建物跡 314

L2 区の調査

- 1 L2 区の概要 321
- 2 L2 区弥生時代の遺構と遺物 322
 - (1) 竪穴住居跡 322
 - (2) 掘立柱建物跡 367
 - (3) 土坑 380
 - (4) 溝跡 405
 - (5) ピット 408
- 3 L2 区中世の遺構と遺物 409
 - (1) 掘立柱建物跡 409

L3 区の調査

- 1 L3 区の概要 417
- 2 L3 区弥生時代の遺構と遺物 418
 - (1) 竪穴住居跡 418
 - (2) 掘立柱建物跡 444
 - (3) 土坑 471
 - (4) 溝跡 482

第7分冊

〔M～Q区の調査〕

M区の調査

- 1 M1 区の概要 7
- 2 M1 区縄文時代の遺構と遺物 8
 - (1) 遺構 8
 - (2) 遺物 8
- 3 M2 区の概要 12
- 4 M2 区縄文時代の遺構と遺物 14
 - (1) 遺構 14
 - (2) 遺物 14
- 5 M3 区の概要 16

6 M3 区縄文時代の遺構と遺物 19

- (1) 遺構 19
- (2) 遺物 20

7 M4 区の概要 23

8 M4 区の遺構と遺物 25

- (1) 遺構 25
- (2) 遺物 27

N区の調査

N1 区の調査

- 1 N1 区の概要 55
- 2 N1 区弥生時代の遺構と遺物 56
 - (1) 竪穴住居跡 56
 - (2) 掘立柱建物跡 64
 - (3) 土坑 67
 - (4) 溝跡 80
 - (5) 包含層出土遺物 82

N2 区の調査

- 1 N2 区の概要 87
- 2 N2 区弥生時代の遺構と遺物 88
 - (1) 竪穴住居跡 88
- 3 N2 区その他の時代の遺構と遺物 92
 - (1) 土坑 92
 - (2) 溝跡 92

N3 区の調査

- 1 N3 区の概要 97
- 2 N3 区古代の遺構と遺物 98
 - (1) 竪穴住居跡 98
 - (2) 溝跡 99
- 3 N3 区中世の遺構と遺物 103
 - (1) 溝跡 103
- 4 N3 区近世の遺構と遺物 105
 - 土坑 105

O区の調査

O1 区の調査

- 1 O1 区の概要 115
- 2 O1 区弥生時代の遺構と遺物 116
 - (1) 竪穴住居跡 116
 - (2) 掘立柱建物跡 117
 - (3) 土坑 120
 - (4) 包含層出土遺物 126
- 2 O1 区古代の遺構と遺物 127
 - (1) 溝跡 127
 - (2) 包含層出土遺物 128

O2 区の調査	2 Q1 区弥生時代の遺構と遺物 252
1 O2 区の概要 135	(1)土坑 252
2 O2 区弥生時代の遺構と遺物 136	(2)溝跡 255
(1) 竪穴住居跡 136	3 Q1 区中～近世の遺構と遺物 257
(2) 掘立柱建物跡 142	(1) 掘立柱建物跡 257
(3) 土坑 149	Q2 区の調査
(4) 包含層出土遺物 162	1 Q2 区の概要 263
3 O2 区古代の遺構と遺物 164	2 Q2 区弥生時代の遺構と遺物 264
(1) 溝跡 164	(1) 竪穴住居跡 264
O3 区の調査	(2) 掘立柱建物跡 276
1 O3 区の概要 171	(3) 土坑 280
O4 区の調査	(4) 溝跡 285
1 O4 区の概要 177	(5) ピット 286
	(6) 包含層出土遺物 288
P 区の調査	3 Q2 区古代～中世の遺構と遺物 289
P1 区の調査	(1) 掘立柱建物跡 289
1 P1 区の概要 187	(2) ピット 291
2 P1 区弥生時代の遺構と遺物 188	(3) 包含層出土遺物 291
(1) 竪穴住居跡 188	Q3 区の調査
(2) 掘立柱建物跡 195	1 Q3 区の概要 297
(3) 土坑 198	2 Q3 区弥生時代の遺構と遺物 298
(4) 溝跡 204	(1) 溝跡 298
(5) ピット 204	
(6) 包含層出土遺物 205	溝・流路
P2 区の調査	溝・流路の概要 305
1 P2 区の概要 211	前期溝 1 307
2 P2 区弥生時代の遺構と遺物 212	前期溝 2 316
(1) 土坑 212	前期溝 3 340
(2) 溝跡 214	大溝 1 347
P3 区の調査	大溝 2 367
1 P3 区の概要 223	大溝 3 392
2 P3 区弥生時代の遺構と遺物 224	大溝 4 398
(1) 溝跡 224	大溝 5 398
(2) 大溝 224	大溝 6 418
(3) 包含層出土遺物 227	大溝 7a・b 428
P4 区の調査	流路 1 439
1 P4 区の概要 233	
P5 区の調査	
1 P5 区の概要 239	第 8 分冊 その 1
2 P5 区弥生時代の遺構と遺物 240	「写真図版－遺物編－」・「自然科学編」
(1) 土坑 240	
(2) 包含層出土遺物 241	巻頭カラー
Q 区の調査	写真図版－遺物編－
Q1 区の調査	A10 区 1～3
1 Q1 区の概要 251	B1 区・3 区・4 区 4～10
	C1 区 11～19

C2区 20～21
C3区 22～23
C4区 24～31
C4北区 32～38
C5・C区鉄器 39
D1・2区 40～47
D区鉄器 48
E1区 49～51
E2区 52～53
E3区 54～55
E4区 56～62
E5区 63～68
E6区 69～78
E7区 79～84
E9区 85
E区鉄器 86
F1区 87～90
F2区 91～92
F3区 93～98
F4区 99～113
F5区 114
F区鉄器 115
G1～4区 116～118
H1～4区 119～129
I1区 130～132
I2区 133～143
I4区 144～153
I4区-TR8 154
I区鉄器 155
J1区 156～158
J3区 159～161
J4区 162～165
J5区 166～167
J区鉄器 168～169
K1区 170～180
K2区 181～198
K3区 199～201
K区鉄器 202
L1区 203～205
L2区 206～214
L3区 215～217
L区鉄器 218
M1～4区 219～223
N1～3区 224～225
O1区 226～227
O2区 228～230

P1・2区 231～232
Q1～3区 233～237
前期溝2 238～242
前期溝3 243～244
大溝1 245～248
大溝2 249～251
大溝4 252
大溝6 253
大溝7 254
図版番号対応表 255～256

自然科学編

田村遺跡群の自然科学分析 パリノ・サーヴェイ株式会社 260～277

高知県、田村遺跡群から出土した炭化米のDNA分析 株式会社古環境研究所 278～282

高知県、田村遺跡群における自然科学分析 株式会社古環境研究所 283～315

田村遺跡群出土の動物遺存体 丸山真史・松井章（京都大学大学院・奈良文化財研究所） 316～322

田村遺跡群出土サヌカイト製遺物の原材産地分析 藁科哲男（京都大学原子炉実験所） 323～335

高知県田村遺跡群出土赤色顔料付着遺物の蛍光X線分析について 魚島純一（徳島県立博物館） 336～339

田村遺跡群出土石臼に付着する赤色粒子の蛍光X線分析 植地岳彦（財団法人徳島県埋蔵文化財センター） 340～343

高知県田村遺跡群から出土した青銅器の自然科学的研究 平尾良光・鈴木浩子（東京文化財研究保存科学部） 344～354

田村遺跡出土ガラス小玉の調査報告 肥塚隆保（独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所埋蔵文化財センター・保存修復科学研究室） 355～368

田村遺跡出土ガラス玉の分析科学的研究 二宮修治・菊池一弥・曾方絵里・新免歳靖（東京学芸大学・文化財科学研究室） 369～373

田村遺跡群出土の鉄器集成 374～378

第8分冊 その2

「写真図版－遺構編－」

巻頭カラー・1～34

写真図版 - 遺構編 -

A区

A区 35 ~ 41

B区

B1区 42 ~ 45

B2区 46

B3区 47 ~ 50

B4区 51 ~ 56

C区

C1区 57 ~ 67

C2区 68 ~ 71

C3区 72 ~ 84

C4区 85 ~ 96

C4北区 97 ~ 98

C5区・99 ~ 101

D区

D1区 102 ~ 115

D2区 116 ~ 117

E区

E1区 118 ~ 119

E2区 120 ~ 122

E3区 123 ~ 126

E4区 127 ~ 135

E5区 136 ~ 141

E6区 142 ~ 146

E7区 147 ~ 156

E8区 157 ~ 159

E9区・160

F区

F1区 161 ~ 167

F2区 168 ~ 171

F3区 172 ~ 181

F4区 182 ~ 205

F5区 206 ~ 207

G区

G区 208 ~ 211

H区

H1区 212 ~ 214

H2区 215 ~ 221

H3区 222 ~ 223

H4区・224

I区

I1区 225 ~ 231

I2区 232 ~ 240

I3区 241 ~ 243

I4区 244 ~ 250

J区

J1区 251 ~ 257

J3区 258 ~ 264

J4区 265 ~ 269

J4-2区・270

J5区 271 ~ 273

J6区・274

J7区・275

K区

K1区 276 ~ 291

K2区 292 ~ 310

K3区 311 ~ 320

L区

L1区 321 ~ 325

L2区 326 ~ 338

L3区 339 ~ 348

M区

M区 349 ~ 352

N区

N1区 353 ~ 359

N2区・360 ~ 361

N3区 362 ~ 363

O区

O1区 364 ~ 366

O2区 367 ~ 370

O4区・371

P区

P1区 372 ~ 374

P2区・375

P3区・376

P4区・377

P5区・378

Q区

Q1区 379 ~ 380

Q2区 381 ~ 383

Q3区・384

住居跡集成図

- 住居跡集成図 1 A10ST1001・1002、B3ST302～309
- 住居跡集成図 2 B3ST310、B4ST401～409、SX409
- 住居跡集成図 3 B4ST410・SX408、C1ST101～103、C2ST202
- 住居跡集成図 4 C2ST201・203、C3ST301・303・3001・3002、C4ST401・402
- 住居跡集成図 5 D1ST101～106
- 住居跡集成図 6 D1ST107～112・117・118
- 住居跡集成図 7 D1ST113～116・119・120・122・123・SX251
- 住居跡集成図 8 D2ST251・252、E1ST101～103・401・403
- 住居跡集成図 9 E4ST404～410
- 住居跡集成図 10 E4ST411～417・422
- 住居跡集成図 11 E4ST418～420、E5ST501、E7ST701～706・734・740・741
- 住居跡集成図 12 E7ST707～714・716・718～720・725
- 住居跡集成図 13 E7ST715・721～724・726・736
- 住居跡集成図 14 E7ST727・728・730・732・733・735・737・738、E8ST801
- 住居跡集成図 15 F1ST101～105・108
- 住居跡集成図 16 F1ST106・202・203
- 住居跡集成図 17 F3ST107・301～303
- 住居跡集成図 18 F3ST304～308、F4ST201・204・205
- 住居跡集成図 19 F4ST401～406
- 住居跡集成図 20 F4ST408～410
- 住居跡集成図 21 F4ST411・413・415
- 住居跡集成図 22 F4ST414・416～419・421・422
- 住居跡集成図 23 F4ST420・425～428、G1ST102・103
- 住居跡集成図 24 G1ST101・104、I1ST101～103
- 住居跡集成図 25 I1ST104、I2ST202～204
- 住居跡集成図 26 I2ST205～209
- 住居跡集成図 27 I2ST210～212
- 住居跡集成図 28 I2ST213～216・218・219
- 住居跡集成図 29 I3ST302、I4ST401～409
- 住居跡集成図 30 I4ST412～416・418～422
- 住居跡集成図 31 J1ST101～106
- 住居跡集成図 32 J1ST107～110、J3ST301・302
- 住居跡集成図 33 J3ST303～305・307～311
- 住居跡集成図 34 J3ST312・313、J4ST401・402・404

- 住居跡集成図 35 J4ST403・405～412
- 住居跡集成図 36 J4ST413・414・416・417・419
- 住居跡集成図 37 J4ST418、J5ST501～503、K1ST101・102
- 住居跡集成図 38 K1ST103～107・109・110
- 住居跡集成図 39 K1ST108・111～115・117
- 住居跡集成図 40 K1ST116・118～121
- 住居跡集成図 41 K1ST122～125・128
- 住居跡集成図 42 K1ST126・127、K2ST201～206
- 住居跡集成図 43 K2ST207～209
- 住居跡集成図 44 K2ST210～213・215～219
- 住居跡集成図 45 K2ST220～222
- 住居跡集成図 46 K2ST223～227、K3ST302・303
- 住居跡集成図 47 K3ST304～309・312
- 住居跡集成図 48 K3ST310・311・313、L1ST101・102
- 住居跡集成図 49 L1ST104・106・107、L2ST201～203
- 住居跡集成図 50 L2ST204～210・213
- 住居跡集成図 51 L2ST211・212・214・215
- 住居跡集成図 52 L2ST216・218～223
- 住居跡集成図 53 L2ST224～228・230
- 住居跡集成図 54 L2ST229・231～233、L3ST301・302
- 住居跡集成図 55 L3ST303～309
- 住居跡集成図 56 L3ST311～317
- 住居跡集成図 57 N1ST101～106、N2ST201・202、N3ST301
- 住居跡集成図 58 O1ST101、O2ST201～203、P1ST101
- 住居跡集成図 59 P1ST102～104、Q2ST201・202・205
- 住居跡集成図 60 Q2ST203・204・206・207・209

I 田村遺跡群の概要

(1) 調査前の状況

高知空港拡張整備事業に伴う田村遺跡群の発掘調査は今回が2回目であり、調査面積は今回の約15万㎡に前回の約12万㎡を合わせれば約27万㎡となる大規模な調査であった。今次調査の期間も平成8年度から平成13年度に及び、平成15年度には報告書が刊行されたところである。発掘調査の成果としては弥生時代前期から後期にかけての集落中心域をほぼ完掘できたことであり、他にも縄文時代後期の遺物包含層や古代の掘建柱建物跡群等も検出され、遺構、遺物ともに膨大な量となった。報告書では弥生時代の遺構、遺物を中心として掲載したが、事実報告の記載が中心となり、遺構、遺物についてはまとめることができなかったため、今回、第9分冊〔総論〕としてまとめを刊行することとなった。

発掘調査に至る経緯と経過、遺跡の立地環境、歴史的環境等については、第1分冊ですでに述べたところであるが、まとめるにあたって再度、簡単に触れておきたい。田村遺跡群の名称が付けられたのは前回の空港拡張による発掘調査時であった。それまでは遺構、遺物の発見された箇所を西見当、見当、カリヤ等のホノギ(小字)により遺跡名称として呼称していたが、空港拡張という大規模な調査の結果、縄文時代後期の遺物包含層、弥生時代前期から後期にわたる集落、古代の建物群、中世の屋敷跡群等の遺構が検出され、広範囲に及ぶ複合遺跡であることが判明したため、これらをまとめて大字である田村の名称により田村遺跡群として新たに設定した。今回の再拡張に伴う調査では前回の調査により設定された田村遺跡群の範囲、内容をさらに確認することによって遺跡の全体像に近づくことが出来たのではないかと考える。

田村遺跡群は高知県中央部、県内最大の平野部である高知平野の東部を市域とする南国市に所在するが、中でも物部川により形成された香長平野(高知平野の東半部を示す)の南部に位置しており、海岸線から北へ約3km、物部川からは西へ約2kmの旧自然堤防上に存在するものと考えられる。現状は平坦に見える水田地帯であるため高低差は感じられないが、現地の標高は6~10mを測り、水田の細かい標高をつなぎ合わせ、等高線を追いかけていくと物部川の扇状地端部の緩やかな傾斜地に存在する微地形をみることができる。弥生集落の東には小河川である現田村川(用水)が浅い窪地として存在し、また、集落の西側にも旧物部川の流路跡を見ることができる。現在の物部川の河道は、江戸時代初期に土佐藩家老であった野中兼山による山田堰等の治水工事により右岸に堤防が築かれ、まとめられたものと言われており、それ以前は土佐山田町の岩積から広がる扇状地上岡川、香我美川、田村川、下田川、介良川、明見川等に分流した幾筋の流路に分かれていたようである。これらの旧河道跡は、現在でも水田地割りや用排水路、窪地列によって知ることができ、田村遺跡群の立地する自然堤防もこのような分流の一部により形成されたものであろう。

田村遺跡群も含め香長平野の中心部には方形地割りを持つ水田が広がっているが、南国市ではこれまで香長平野のほ場整備事業は行われておらず、このような方形地割りは古代における条里制による地割りが一定残されているものと考えられている。方形地割りは新規扇状地の全域に広がって

おり、ほぼ中央部には現在広域農道となっているが、旧香美郡と旧長岡郡の郡境ラインが南北に走っている。方形地割りの方位は真北から約12°東へ振っており、1区画は1辺109m前後であることから条里制との関連が考えられ、前回、今回と発見された古代の掘立柱建物群の方位は地割りと同方向を示しており、その配置もほぼ1町四方の区画の中に収まっていることも、地割りと古代の建物群の密接な関係を窺わせるものであり、現在の水田地形自体が遺跡であると言える。

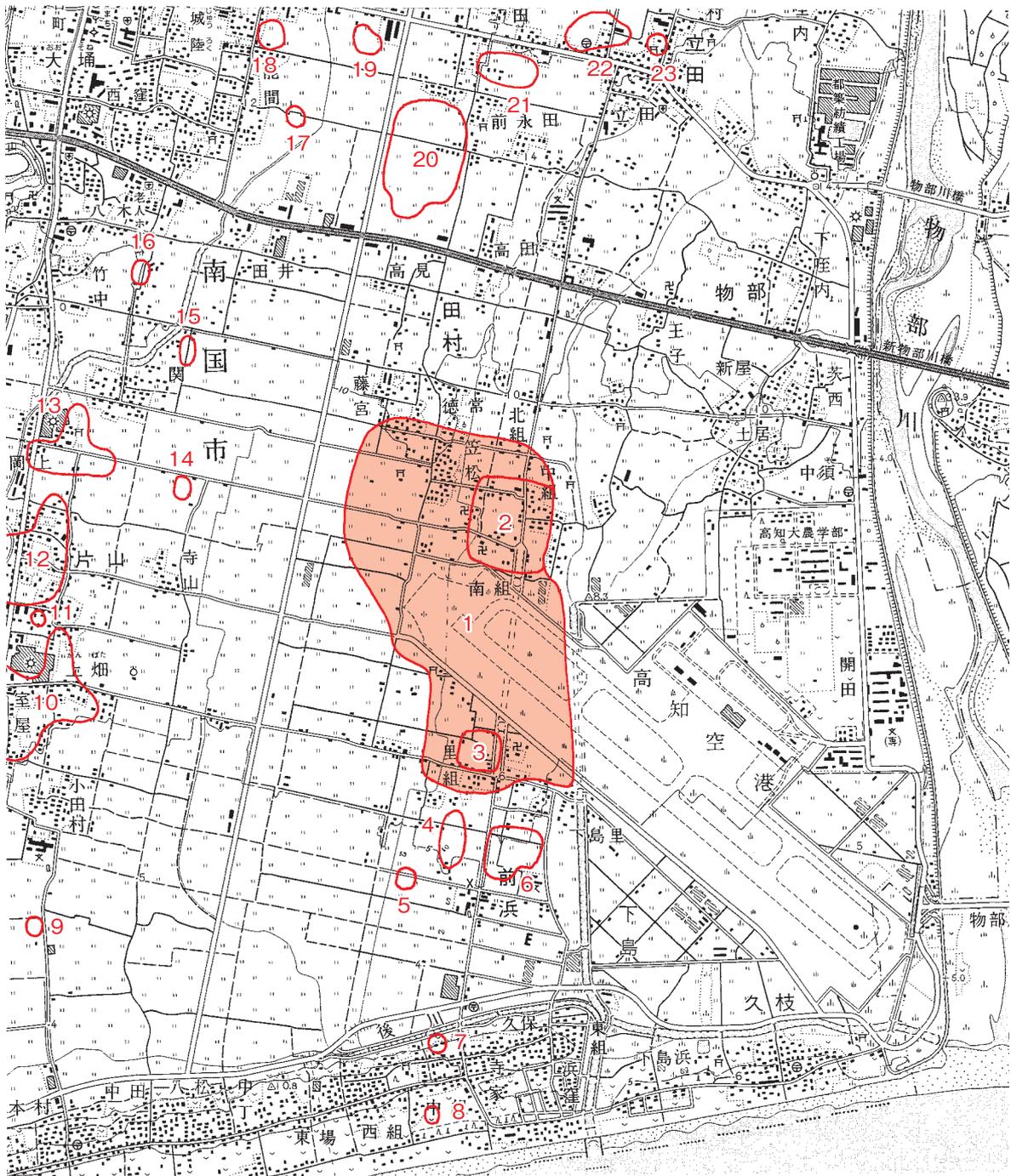
田村遺跡群の発掘調査は先にも述べたように昭和30年の西見当遺跡の調査が始まりとなっているが、それ以前にも重要な遺物の出土が知られている。古くは江戸時代(安永4年)に田村遺跡群の西方約1.5kmの関町田から扁平紐銅鐸1個が出土したことが記録されており、さらに明治15～16年には現空港から北へ約300mの正善(小字ショウゼン)から突帯紐銅鐸1個が出土している。空港の拡張範囲内では明治32年にカリヤ(今次調査E区)地区の水田から5本の広形銅矛が発見されている。また、毎年3月に行われる用排水路の川干では底浚えの土中に土器片、石斧、叩石等が多く見られ、西見当周辺の地域では耕作土直下に遺構が検出されるほど浅いため、耕作土中にも土器等の遺物が多く含まれている状態であった。しかし、西見当以南では耕作土中の遺物はほとんど見られず、遺跡として認識されていたのはより北に位置する見当、西見当、カリヤ、城等の小字の範囲であり、南部への広がりには確認されていなかった。

西見当遺跡の発掘調査は岡本健児氏により行われたが、当時、弥生時代前期の土器を出土する西見当遺跡は中村市の入田遺跡(縄文時代晩期突帯文と遠賀川式土器共伴)に引き続く弥生時代前期前半の遺跡として注目されており、調査の結果、貯蔵穴等の遺構が検出され、その後の調査も含め西見当Ⅰ・Ⅱ式等の土器形式設定がなされている。また昭和51年に行われた西見当B・C地区の調査では環濠の一部が検出され、前期前半の早い段階での環濠集落の存在が確認された。また、周辺部では城、カリヤ、カリヤ西、北カリヤ、北カリヤ第2遺跡等の遺跡が確認されており、弥生時代中期の田村式、城式、北カリヤ式等の土器形式も設定され、前期から中期にかけて広がる集落の存在が推定された。

昭和55年度から開始された第1次空港拡張整備事業は1,500mであった滑走路を2,000mに拡大新設するものであり、これまでの空港区域を南と西に大きく拡張するものであった。当初、滑走路の西方への拡張は西見当遺跡や田村城館跡等にかかることもあり海側(東方)への拡張も考えられたが、物部川の河口が含まれることや高知海岸の保全、気象条件等の検討結果、やはり陸側(西方)への拡張が決定された。

発掘調査は昭和55～58年度にかけて行われ、昭和60年度には報告書が刊行された。調査結果としては縄文時代後期の遺物包含層、弥生時代前期初頭の集落、西見当前期集落の環濠、前期水田、中期～後期の集落、古代の掘立柱建物跡群、中世の溝に囲まれた屋敷跡群、田村城館の堀跡等が検出され、高知県では最初の大規模調査として大きな成果が得られた。拡張範囲の北部では西見当遺跡等の存在がすでに知られており、弥生時代前期の遺構の広がりが予想されていたが、拡張範囲の南部で検出された前期初頭の集落や水田の発見は予想外であり、中期～後期の集落、古代、中世の遺構群もその存在は事前に把握されておらず、これらの遺構、遺物の発見は驚きの連続であった。

縄文時代後期の遺物包含層は空港拡張範囲の西端部、周辺整備工事に伴う市道部分の調査区で検



番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	田村遺跡群	7	中屋敷遺跡	13	岡の上組遺跡	19	カントフリ遺跡
2	田村城跡	8	前浜砲台跡	14	鹿枝遺跡	20	修理田遺跡
3	千屋城跡	9	蚊居田土居城跡	15	関町田遺跡	21	高添遺跡
4	季重遺跡	10	里改田遺跡	16	八木土居遺跡	22	寺ノ前遺跡
5	公家ノ前遺跡	11	片山土居城跡	17	湖ヶ上遺跡	23	徳弘土居城跡
6	司例田遺跡	12	中組遺跡	18	ヌメル遺跡		

I-1図 田村遺跡群位置図(S=1/25,000)

出されている。遺構は少数のピットのみであったが、後期中葉の土器及び多量の打製石斧、石錘、石鏃、石斧、石棒等が出土しており、縄文時代後期における沖積低地への遺跡の進出を知ることができた。

弥生時代前期初頭の集落は竪穴住居跡10棟と掘立柱建物跡15棟で構成されており、南北約220m、東西約130mが集落の範囲となっている。遺構の配置は中央部の空間を半円形に取り囲むように掘立柱建物跡、その外側に竪穴住居跡が見られ、東側には住居跡等の遺構は存在しないが、土器の集中出土地点が確認されている。竪穴住居跡の規模は直径8m以上の大型と3m程度の小型の住居が併存しており、大小1対となるような配置が見られる。また、平面形も円形と方形の2種類であり、円形と方形または方形同士での大小の組み合わせが確認されており、床面には中央ピットとその両側に小ピットを伴う松菊里タイプが多く特徴的である。掘立柱建物跡は高床倉庫と考えられるものの他に2～3間×4～6間の規模を持つ建物が存在しており、住居等の性格が考えられる。掘立柱建物跡では建物跡の軒または妻側に溝状の土坑を伴うものがあり、土坑からは多量の土器が出土しており特徴的である。前期初頭集落からの出土土器には縄文晩期土器の共伴は見られないが、突帯文系の土器がかなりの量を占めており、西見当I式をさかのぼる前期初頭の土器形式として松木式土器とされた。次に続く集落は拡張範囲北端の西見当遺跡で検出された環濠集落であり、西見当地区の用排水路改修に伴う調査区では環濠及び土坑群が確認され、環濠集落の範囲の推定が可能となった。また、前期後半の遺物は流路跡等から出土しており北方向に移動、拡大しているものと考えられる。同時期の集落跡としては空港拡張範囲の南東部で確認された竪穴住居跡4棟からなる小規模な集落が検出されており、中心集落からの分村と考えられる。

弥生時代中期の遺物は包含層や流路跡から多量に出土したが、竪穴住居跡等の遺構はほとんど検出できず、集落の本体はより北方向へ移動したものと考えられる。中期後半から後期前半にかけては再び拡張範囲の北西端部に竪穴住居跡20棟が集中して検出されており、土坑、溝跡、流路等を含む集落範囲がさらに西方へ広がっていることが確認されている。また、空港拡張範囲の先端からさらに西方の進入灯施設建設に伴う発掘調査(今次調査K区)でも竪穴住居跡13棟、掘立柱建物跡1棟、溝状土坑等が検出されており、集落の西方への広がり は 確 実 と な っ た。

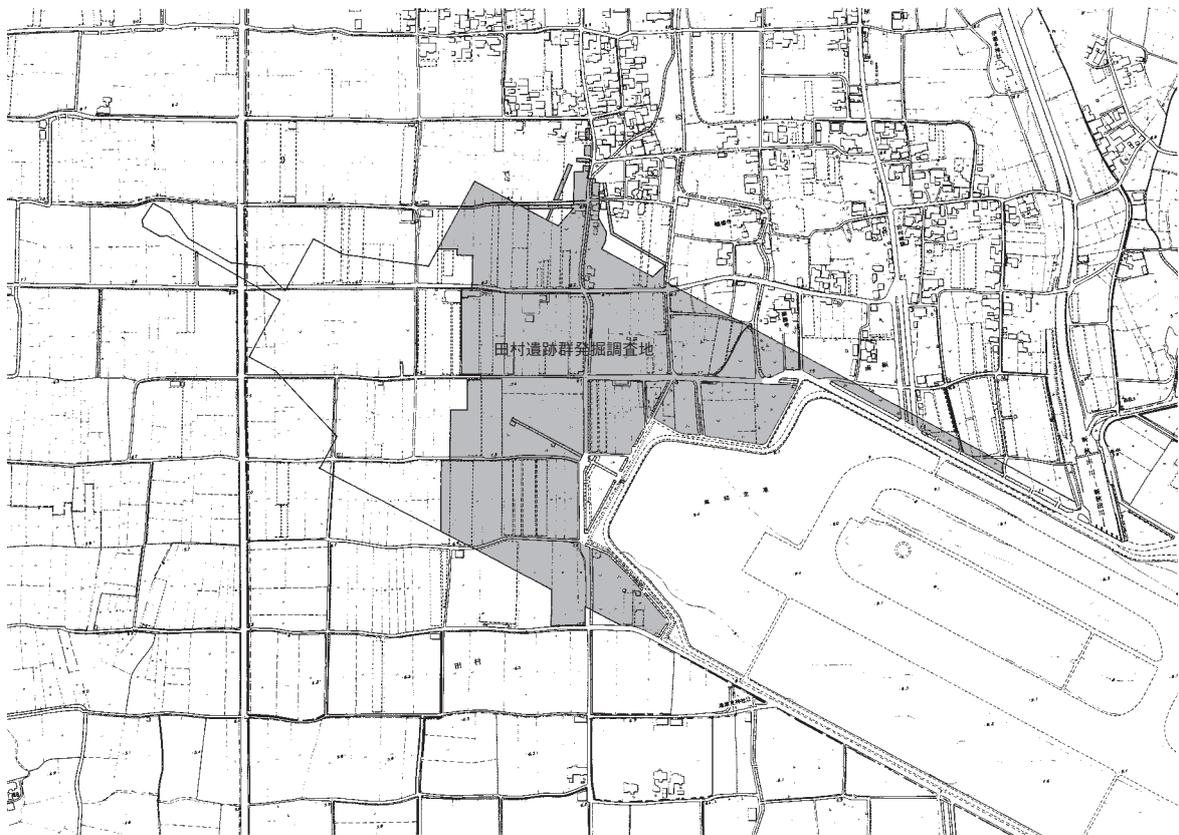
古代の遺構については当初その存在すら予想していなかったが、空港拡張範囲のほぼ中央部北よりの調査区で検出された。遺構は掘立柱建物跡14棟であり、大型の総柱建物と西側に南北に並ぶ4棟の倉庫群等から構成される建物群である。建物跡の方向は約14～22°東へ振っており、先に述べた方形地割りの方向と同じであることから、建物配置及び建物方向に強い統一性が存在していたものと考えられる。時期的には8世紀末～9世紀であり、建物群の性格としては当時存在していた荘園である「田村庄」との関連が指摘されている。

中世では室町時代、土佐の守護代であった細川氏の居館とされる田村城館跡の南側、空港拡張範囲内において31ヶ所の溝に囲まれた屋敷跡が発見されている。検出された溝は幅1m前後、深さも0.5～1mが標準的な規模であり、屋敷地の区画のための溝と考えられる。屋敷跡には円礫を用いた石組みの井戸が掘られている例が16ヶ所存在しており、井戸の深さは4m前後である。井側は底部より楕円礫を螺旋状に組み上げ、井戸底には木を削り抜いた井筒が据えられている。現在でも物部

川の最上層の地下水位は4～5mであり、発掘により井戸を掘り抜くと大量の地下水が湧水しており、中世も同じ状況であったと考えられる。これらの屋敷跡は時期的に14・15・16世紀の3時期にほぼ分類され、守護代細川氏入国以前、守護代細川氏の時期、細川氏退国後の戦国時代にあたり、各時期における屋敷跡の配置を見ることができる。また、田村城館跡は歴史地理学により3重の堀を持つ方形城館として推定復元されており、現地には土塁の一部が残されている。復元された城館の西側から西南コーナーにあたる部分の水路改修工事に伴う調査では堀跡が確認されており、大永年間の護札の出土からも16世紀前半まで堀が機能していたことが判明している。さらに県道地下道化部分でも南堀跡が検出されており、田村城館跡の西及び南堀のラインは概ね確定したが、北及び東のラインは現在のところ不明である。

(2) 今次の発掘調査

今回の発掘調査は2,000mの滑走路を再度500m延長し、2,500mとするものであり、ジャンボジェット機の就航を可能とするものであった。拡張方向も前回と同じく西方向であり、前回調査の状況からすれば弥生時代の集落が拡張範囲に含まれることは確実であったため、事前協議においても全面的な発掘調査の実施を中心に調整が行われた。



I-2図 調査対象地図(S=1/10,000)



I-3 図 調査区設定図(S=1/4,000)

発掘調査は平成8年度から平成12年度まで行われ、平成15年度には発掘調査報告書が刊行された。平成8年度は7～9月に事前に買収されていた旧運輸省用地を中心に試掘調査を行い、その結果、遺構、遺物がほとんど検出されなかった西半部を除き全面発掘調査を実施することとなった。本発掘調査は11月より開始され、これ以後、平成11年度までは年間を通じての発掘調査が続けられた。平成12・13年度には市道地下道化等の工事に伴う調査を行い、最終的にはC区の流路部分の調査を平成13年度末に終了し、すべての現地調査を完了した。

調査方法等については、刊行された報告書第1分冊に記載しており、調査成果についても各分冊によるが、ここではその概要を述べることとする。

縄文時代

前回調査においても、調査範囲の南端部、市道整備に伴う調査区で後期の遺物包含層が検出されていたが、今回の調査でも周辺の調査区であるH区、M区において縄文時代後期の遺物包含層の調査が行われた。また、数少ない資料ではあるがJ区においても後期の土坑が検出されており、縄文時代後期の遺物はより北にも部分的に広がっている状況が確認された。出土した土器は縄文後期中葉から後半を中心としており、鐘崎式、平城式、彦崎K式等の型式が見られる。石器ではやはり打製石斧と石錘が多く出土しているが、前回の調査地点(シマイテン地区)に比べると石錘が多く、遺物集中ブロックにより石器の量的組成に違いが認められる。また、M区では後期だけではなく、小量ではあるが前期や中期の土器が出土し、H区においても中期と考えられる土器が少量出土しており、縄文時代前期から沖積低地への進出も考えられるが、やはり安定的な生活領域として定着したのは縄文時代後期中葉以降からである。

弥生時代前期

弥生時代前期の遺構、遺物はA～F区にかけて検出されており、基本的には西見当遺跡として確認されていた環濠集落を中心とした空港拡張範囲の北東部に集中している。また、今回の調査区であるC区は従前の西見当遺跡にあたり、自然流路とこれに接続する環濠と土坑群が検出されている。前期の遺構群の中でも前回調査が行われた前期初頭の集落(I期集落)に続くものとしてC2区の竪穴住居跡やA～F区の土坑群の中に古い様相をもつものがあり、環濠集落の成立以前にI期集落からの北への移動が考えられる。次に環濠集落は西見当遺跡の調査時には1条の環濠が確認されていたが、今回の調査ではさらに外側に断面V字の環濠が巡ることが確認され、2重の環濠であることが判明した。また、規模的には小さいが外濠の外にも同時期の溝が検出されており、部分的ではあるが3重の環濠の可能性も考えられる。内濠は外濠に比して緩やかなU字形の断面であり、部分的に段部を伴っている。環濠は東に検出された自然流路に接続しており、西側に半円形状に弧を描くものと推定され、内濠では南北160m、東西120mの範囲を占めている。内濠と外濠の間は約30mの間隔であり、さらに外側の溝は60mの間隔であった。内外濠ともに深さは1m程度であり、環濠内外の土坑も耕作土直下で検出されることから、後世にかなりの削平を受けたものと考えられる。また、環濠に切られている土坑が存在することから、やはり環濠が掘られる前段階における集落の存

在が考えられ、環濠集落はその後に成立したものである。しかし、現段階では環濠内、または環濠の間には竪穴住居跡は確認されておらず、逆に環濠外ではF4区等において竪穴住居跡が検出されており、環濠内が居住空間として使用されたか否かについては今後の調査、検討が必要であろう。これに対し土坑は環濠内に集中しているが、内濠と外濠の間、さらにその外側からも検出されており、必ずしも環濠内部だけが土坑の分布範囲ではないようである。土坑の形態には円形、楕円形、方形、隅丸方形、不整形の各形態が存在し、深さも20～30cmの浅いものから1mほどの深いものまで存在しており、複数の機能を持つものと考えられる。中には袋状の断面形の土坑もあり、貯蔵穴と判断されるが、多量の土器が出土する例も確認されている。また、埋土中から焼土、炭化物とともに被熱により白色化した骨片が出土する事例もあった。骨片はシカ、オオカミ、ウサギ等の動物骨、ガン・カモ類の鳥骨、サメ、ニシン類等の魚骨の細片であり、食料残渣を廃棄した可能性が高い。さらに壺、甕等を一括埋納した状況を示す土坑もあり、土壙墓の可能性も考えられる。

弥生時代中期～後期

弥生時代前期末から中期前半については、流路等からの遺物出土が多く見られるが、遺構はI4区(市道地下道北部調査区)以外ではほとんど確認されておらず、集落の中心は北部へ移動したものと考えられる。過去に行われた北部の空港周辺整備事業による水路、道路整備に伴う調査時に中期の竪穴住居跡、土坑等が部分的に確認されており、中期の集落は今次調査区からさらに北方500mの範囲まで広がるものと予想される。

中期中葉以降、集落は再び南下し、中期後半から後期初頭にかけて最盛期を迎え、D～G・I～Lの調査区に展開する。前回及び今回の調査結果から見れば、集落の範囲は東西約300m、南北約450mを占めており、その東限は幅約20m前後を測る自然流路により区切られるが、西側では集落域を示す溝等は確認されていない。集落内には北西から南東へ弧を描きつつ流れる数条の大溝が検出されており、竪穴住居跡もこの大溝に沿った範囲に集中的に検出されている。竪穴住居跡には直径8m以上の大型住居と4～6mの中型住居が存在するが、竪穴住居跡の密集地区では大型住居を中心に中型住居が集中する傾向が見られ、このような住居跡の集中ブロックがD1、E4、E7、F4、K1、K2、L2、L3区に存在しており、I、J区では竪穴住居跡の密度が低く、集落内の空間が構成されている。また、掘建柱建物跡も竪穴住居跡群の分布と重なるが、I、J、K3区では竪穴住居跡の密度が低いこともあり掘建柱建物跡群の集中が明瞭である。竪穴住居跡には数回の建て替えが行われたものが多く、拡張されたものも多い。これは中期末から後期前半の最盛期の住居集中を示しており、集落としての求心力の強さの現れと考えられる。しかし、後期後半になると竪穴住居跡等の遺構は突然消え去り、集落は完全に廃絶される。

竪穴住居跡の構成からみれば飛び抜けた規模を持つ住居跡はなく、大型住居から出土するガラス小玉や鉄器等についても複数の住居跡から一定量が出土しており、特定の住居跡に集中する状況はなく、均質的な状況を示している。このことは集落の最盛期においても単独の有力者が存在するのではなく、複数の有力者による共同体社会が続いていたものと考えられる。田村遺跡群の後期後半における突然の集落廃絶の原因としては、このような弥生社会体制の古墳時代への発展的継承への

限界や洪水等による自然現象による打撃等が大きな理由と考えられる。

古 代

今回の調査においてもF4・D1・I4区等において古代の掘立柱建物群が検出されている。中でもF4区では前回の調査で確認された古代の建物群と同様に掘立柱建物跡がコの字形に配置されており、やはり方形地割りと同じ方向性を持ち、現況の水田地割りの中に収まっている。また、D1・I4で区検出された掘立柱建物跡はF4区の建物跡に比べ規模が小さく、方向性等の規格も緩やかになっている傾向がみられ、時期的な差とその性格の違いがあるものと考えられる。前回も含め古代の建物群は時期を追って移動しつつ、その規模や性格も変化していたものと考えられ、I4区の検出状況からすればさらに北方向への広がりもみられ、田村遺跡群の調査範囲外にも拡大する可能性が高い。また、現況道路部分の調査区であるE9区では2本の溝に挟まれた道路状遺構が検出されている。方向は現状道路から北へ約10°振っており、方形地割りとはややずれを生じているが、溝に挟まれた道路面と考えられる部分には小砂利が敷き詰められていた。

中～近世

今回の調査における中世の遺構、遺物は前回に比べれば非常に少数であったが、溝に囲まれた屋敷跡はB区及びH区の2カ所で検出されている。B区で検出された屋敷跡は2重の溝に囲まれており、規模の大きいものである。また、H区で検出されたのは前回調査で確認されていた屋敷跡の未調査部分であり、いずれも時期的には14世紀代と考えられる。またI区、K区等では弥生時代のピット群中に中世ピットも混在しており、明確な溝による区画等は確認されなかったが、一定規模の屋敷跡の存在が考えられる。空港拡張範囲の北側部分では、今次調査で田村城館の南東コーナー部を斜めに切り取るような形となり、現細勝寺の移転も相まって土塁、堀等の一部が確認、調査された。土塁は細勝寺の寺域西辺に存在しているのもであり、拡張範囲部分の平面調査及び断面調査により上部は近代以降の攪乱・盛土と見られたが、基部では中世遺物の安定した出土もあり、土塁の存在を確認することができた。また、田村城館の南辺では前回に続く堀跡の一部も検出することができた。

近世においては、B区を中心に廃棄土坑から陶磁器の出土があり、高知県で生産された能茶山焼や尾戸焼を中心とした消費地における近世陶磁器のあり方も見るることができた。

II 田村遺跡群の縄文時代後期の様相

1. はじめに

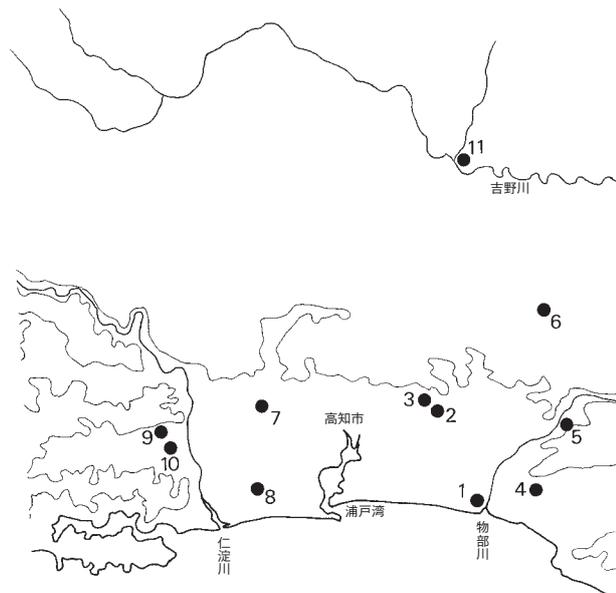
南四国の中央部、高知平野部で縄文時代の遺物が初めてまとまって出土したのが田村遺跡群である。それらの遺物群は縄文時代後期中葉のものと考えられ、余り編年研究は進展していないものの瀬戸内側の彦崎II式におおよそ比定されていた。

西南四国に比して、高知中央部の資料は急激に増えることはほとんどなく、山間部の松ノ木遺跡、晩期の木胎漆器鉢等で居徳遺跡の調査が注目を浴びたものの、基礎研究である土器編年論に寄与し得る遺跡は松ノ木遺跡を除いて極めて少ない。しかしながら、高速道路をはじめとする大規模調査により、わずかではあるが後期の資料は蓄積されつつあると言える。田村遺跡群は其中でも九州の鐘崎式がまとまって出土し、また西南四国を中心に分布する片粕式類似の土器群が出土することにより、高知平野部の後期の様相の一端を知り得る遺跡となっている。

2. 南四国中央部の遺跡群

中央部の地理的環境は東の物部川、西の仁淀川の両河川水系に展開し、所謂沖積平野に立地するものが多い。物部川水系では河口近くの田村遺跡群、右岸の拝原遺跡、林田シタノヂ遺跡、高知平野部の北側山麓の栄エ田遺跡、奥谷南遺跡、仁淀川水系では西分増井遺跡、居徳遺跡、林口遺跡、また物部川・仁淀川水系のどちらにも含まれない平野部に位置する柳田遺跡、中央部山間では飼古屋岩陰遺跡、松ノ木遺跡の合計11遺跡で遺跡群を形成している。これらの遺跡の調査は田村遺跡群の1次調査、飼古屋岩陰遺跡の2遺跡のみが昭和の元号に調査されたものであり、その他の遺跡は平成になってから調査が実施されている(表II-1、II-1図)。

これらの遺跡群の立地は山間部の松ノ木遺跡、飼古屋岩陰遺跡を除き比較的開けた平野部に立地するか、平野部近くに立地するものである。松ノ木遺跡も山間部の遺跡と言えども開けた低位段丘面の立地条件は似ている。しかしながら松ノ木遺跡は吉野川本流と支流汗見川の合流地点に立地するところから、中央部の立地条件とはやや趣を違えて、西部遺跡群の立地条件に似る。飼古屋岩陰遺跡については、縄文早期を主体とする遺跡であり、若干の後期の遺物が出土しており、西部遺跡群の愛媛県側に多



II-1図 南四国中央部縄文後期の遺跡群
(※遺跡番号は表II-1に対応)

	遺跡名	所在地	時期	後期土器型式	調査年	参考文献
1	田村遺跡群	南国市田村	中期、後期初頭～中葉	中津式、平城Ⅰ式、鐘崎Ⅱ式、片粕式	昭和57、平成8～13	田村遺跡群1986、2004
2	栄工田遺跡	南国市岡豊町	後期初頭～後半、晩期	中津式、片粕式、西平式、元住吉山式	平成5	栄工田遺跡1995
3	奥谷南遺跡	南国市岡豊町小蓮	早期～後期前半	中津式、平城Ⅱ式	平成6～8	奥谷南遺跡Ⅲ2001
4	拝原遺跡	香我美町上分拝原	後期前半～中葉	宿毛式、片粕式	平成3年	拝原遺跡1993
5	林田シタノヂ遺跡	土佐山田町林田	後期初頭	中津式	平成4	林田シタノヂ遺跡1993
6	飼古屋岩陰遺跡	土佐山田町繁藤西谷口	早期、中期、後期中葉	型式不明	昭和51	飼古屋岩陰遺跡1983
7	柳田遺跡	高知市朝倉甲	後期前半、晩期	中津式、松ノ木式	平成4	柳田遺跡1994
8	西分増井遺跡	春野町西分増井	後期前半～中葉	平城Ⅱ式、片粕式	平成1、13、14	西分増井遺跡1990、西分増井遺跡Ⅱ2004
9	居徳遺跡	土佐市高岡町乙居徳	後期前半?～晩期	片粕式、西平式、etc?	平成8～10	居徳遺跡群Ⅴ・Ⅳ2003
10	林口遺跡	土佐市高岡町林口	後期前半～中葉、晩期	宿毛式、松ノ木式	平成8、10	天神遺跡Ⅰ・林口遺跡Ⅰ2001
11	松ノ木遺跡	本山町寺家	前期～晩期	宿毛式、松ノ木式、なつめの木式、平城Ⅱ式	平成2～6	松ノ木遺跡Ⅰ1992、松ノ木遺跡Ⅲ1993、松ノ木遺跡Ⅴ2000

表Ⅱ-1 南四国中央部縄文後期の遺跡群

く見られる草創期・早期の遺跡群と同様のあり方である。しかし、岩陰遺跡、洞窟遺跡についても縄文時代後期、弥生時代にも利用された遺跡が多く、同様の類例である。

中央部遺跡群の出土土器の型式を概観すると、後期初頭の中津式が5遺跡認められるものの、全体の出土量は極めて少ない。

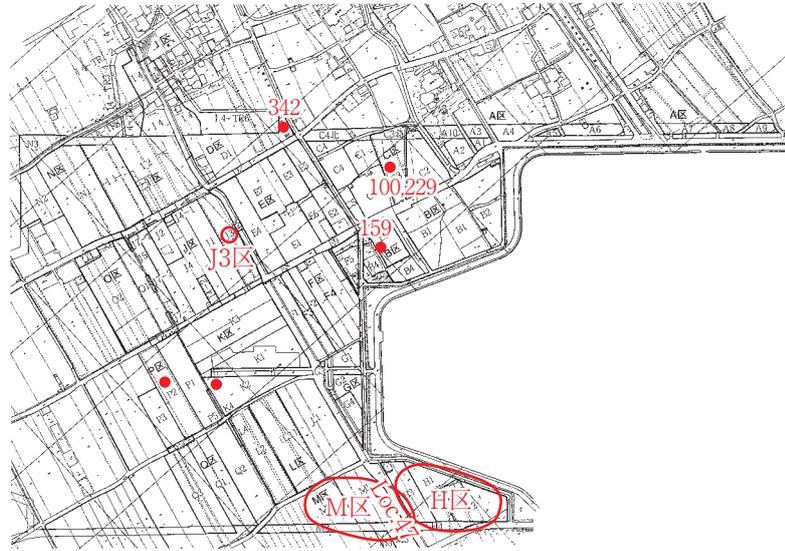
後期前半の宿毛式、松ノ木式は共に3遺跡で認められて、遺跡数としては少ないものの、松ノ木遺跡で多量の両型式の土器がまとまって出土している。柳田遺跡、林口遺跡でも松ノ木式が出土し、その分布域が中央部平野に拡がりを見せているものの、出土量は極めて少なく、土器片が2、3点に出土したに留まる。また、田村遺跡群では中津式は若干出土しているものの宿毛式・松ノ木式が認められておらず、後期前半は空白期を経て平城Ⅰ式から始まり、鐘崎式でピークを迎える。平城式については田村遺跡群、奥谷南遺跡、西分増井遺跡、松ノ木遺跡の4遺跡から出土しており、内訳は平城Ⅰ式が田村遺跡群の1遺跡のみ、他の3遺跡は平城Ⅱ式である。九州系統の鐘崎式については、中央部では田村遺跡群のみである。他の遺跡に鐘崎式は認められないものの、おそらく九州島外で田村遺跡群程、鐘崎式が多量にまとまって出土した例は皆無であろう。鐘崎式は中国四国に該期に移入して来ており、最遠方では三重県の例が知られるが、鐘崎式は西日本の後期前半期に活発な動きを見せており、田村遺跡群例が最たるものである。

次の後期中葉の片粕式は4遺跡で類例が知られている。しかし、注意を要するのは、中央部で出土する片粕式は標式遺跡である土佐清水市片粕遺跡のものやや違っており、片粕式そのものではない。また片粕式と九州側で並行関係にある北久根山式に相当する磨消縄文の一群が田村遺跡群で若干認められている。次の広瀬上層式については、今のところ不明である。後期後半の西平式については居徳遺跡で出土例が知られるものの、実態は不明である。

3. 田村遺跡群内の時期別占地

田村遺跡群では後期は中津式、平城Ⅰ式、鐘崎式、片粕式が出土しており、遺跡内で微妙に個別型式毎に出土地点が相違している。

中津式の段階では調査区南のH3区で微量まとまって出土している。遺物包含層出土で遺構には伴っていない。平城Ⅰ式は調査区北寄りのJ3区及び隣のJ1区で土坑及び遺物包含層から出土している。鐘崎式は調査区南東のH区全域からと、



II-2図 田村遺跡群内縄文時代遺物の分布
(※Loc.47 は 1983年調査地点)

昭和57年に調査が行なわれたLoc.47 から更に西のM区に展開する。しかしLoc.47及びM区では微量である。また鐘崎式期の住居跡は検出していないものの、H区で多数の土坑、焼土跡を検出している。片粕式に相当するものは、M区でまとまっており、遺物集中地点も確認されている。M区では遺構は少ないものの、M4区のM4SK402からは北久根山式相当のものが出土している。後期中葉段階のものはLoc.47からは出土しているものの、隣接するH区からは全く出土していないのが特徴的である。

大まかな変遷は後期前半期平城Ⅰ式が北寄りのJ区に、続いて鐘崎式は南寄りH区に占地を移動し、更に中葉の片粕式・北久根山式は西隣M区に遷移するようである。平城Ⅰ式と鐘崎式の占地の違いは、丁度九州大分県の小池原貝塚の層位を違えて出土するように、時期差によって、占地の違いがあらわれているようである。ただし、若干ではあるが、平城Ⅰ式に近いII-14図130のようなもの僅かであるが、鐘崎式の占地に認められるようである。

J区、H区、M区以外からは遺物の集中地点は認められておらず、散在的にII-24図229の縄文地の鉢がC区の流路から出土し、B3区SD301から鐘崎Ⅱ式と相当する磨消縄文(159)が出土している。またD区D1SK1010の玦状耳飾(342)が弥生前期の土坑に混入品として出土している程度である。

4. 出土土器

(1) 平城Ⅰ式

J3区J3SK301、J3SK306、J1区J1SK106の土坑、及び混入品としてJ1ST101の弥生時代後期の住居跡から橋状把手を有するもの、J3区の遺物包含層から出土例をみる。II-4・5図の1から15まで

が平城Ⅰ式に比定できる。2は口唇部に瘤状突起が付き、口唇外面の沈線下に縄文を施文し、頸部には波頭状文、胴部上半には入組文を施す。表面が落剥しており、実測図では沈線文土器にみえるものの、本来は磨消縄文である。縄文原体もRLで、標式遺跡である平城貝塚、大分県小池原貝塚に見られる平城Ⅰ式そのものである。ただし、口径が極めて大きく、27cmを測る大形品である。3は全縄文地の鉢で、余り口唇の肥厚しないものである。また頸部もくびれず、底部も平底である。全縄文地の鉢は平城Ⅰ式の段階から僅かに伴い始め、平城Ⅱ式、鐘崎式以降に盛行する。9、10は橋状把手を有するもので、鐘崎式の橋状把手よりも幅広である。13はやや盛り上がった部分の口唇部外面に刺突を施し、内面に沈線が巡る。こうしたタイプのものは大月町尻貝遺跡に認められるが量的には少ない。

(2) 鐘崎式

ここで言う鐘崎式は鐘崎Ⅱ式に相当する。H区で土坑、遺物包含層から多く出土している。平城Ⅰ式→鐘崎式の型式変遷は確立しており、田村遺跡内でも時期により占地を違えている。鐘崎式の特徴は口唇部に瘤状突起を有し、頸部に波頭状文か、橋状把手を付加する。胴部は圧縮したような渦巻き文、入組文で磨消縄文か沈線文となり、胴部下半には文様帯を設けない。器形も鉢状の寸詰まりとなる。平城Ⅰ式の器形はややなだらかに立ち上がり、頸部の波頭状文は沈線端部が離れる入組文となり、文様構成が相違する。H区のⅡ-6図16～18、20、Ⅱ-14～16図118～155、及びM区出土の156～158、B3SD301出土の159、Loc.47出土の160が相当する。鐘崎Ⅱ式に伴う縄文地深鉢はⅡ-22図205～229をあげることができる。口唇部外面に縄文を施し、頸部は無文帯となり、緩やかに外反する。胴部は上半に施文する例が多く、RLの同一の原体の回転方向を違えることにより羽状縄文にする例が多い。松ノ木式の段階では条痕文の粗製深鉢が器種として分かれて存在するものの、縄文地の深鉢はほとんど組成に加わらない。鐘崎Ⅱ式の段階になって初めて本格的に縄文地の深鉢・鉢が器種組成の一つとなる画期が認められる。九州側では鐘崎Ⅱ式にこうした縄文地の深鉢、鉢は伴う例は少なく、南四国で顕著に認められる器種組成の特徴である。

(3) 片粕式・北久根山式

片粕式、北久根山式に相当するものは、M区及びLoc.47から出土している。M3SK306、M4SK402の遺構から縄文地、及び磨消縄文の鉢が出土している。Ⅱ-9図60は北久根山式に相当するもので、口縁内文様帯を有する59が伴って出土している。M1区SX100の遺物集中地点からはⅡ-9図61～68、SX101のⅡ-10・11図69～98が出土している。遺物包含層からはⅡ-18～20図165～167、170～172、175～192、Loc.47からは168、173、174が出土しており、北久根山式及び片粕式に並行する一群の深鉢、鉢と考えられる。

その中で165～167の胴部が強く屈曲するものは北久根山式に相当すると考えられる。類例として大分県飯田二反田遺跡5号住居跡、鹿児島県干迫遺跡をあげることができる。

M1区SX101出土のⅡ-10図72、M3区出土Ⅱ-20図179の口唇部を肥厚させ、緩やかな波頂部にキザミを施す一群については、中央部の遺跡群の栄エ田遺跡、西分増井遺跡に散見される。片粕遺跡

に見られるものは、口縁を拡張し口縁部文様帯を有し、瘤状になった波頂部にキザミを施すものが見られ、近似を示しているものの、片粕式そのものには類例は見出し難い。時期的には栄エ田遺跡では明確な片粕式も出土しているところから、編年的には片粕式と並行関係にある一群と思われる。

M3区出土のⅡ-19図175、Loc.47出土の173、174の胴部文様に渦巻き文を有するものは、居徳遺跡、瀬戸内の岡山県四元、広島県桑飼下遺跡等に散見される。また泉拓良の畿内編年の第1様式c1に近似するものと考えられ、北白川上層3式と時間軸で交差する可能性が高い。

尚、Ⅱ-18図169の口縁内文様帯を有するものは、広瀬上層式の可能性が高い。

(4) 中央部遺跡群の型式相

中央部遺跡群の後期初頭から中葉を経て後半に至る型式群の流れは、後期初頭中津式、後期前半宿毛式、松ノ木式、なつめの木式・平城Ⅰ式、平城Ⅱ式・鐘崎Ⅱ式、後期中葉片粕式・北久根山式、(広瀬上層式)、後期後半西平式である(Ⅱ-3図)。

後期初頭については中津式が各遺跡から出土しているものの、微量であるためその様相は判然としていない。

後期前半は4段階に細区分が可能である。平城Ⅰ式、鐘崎Ⅱ式については田村遺跡群のみで認められる現象であり、中央部遺跡群では田村遺跡群以外では今のところ平城Ⅰ式、鐘崎Ⅱ式は認められない。松ノ木遺跡においても、松ノ木式に後続するのは平城Ⅰ式と並行関係にある、なつめの木式から平城Ⅱ式類似土器へと変遷することから、中央部遺跡群における松ノ木式→なつめの木式・平城Ⅰ式→平城Ⅱ式・鐘崎Ⅱ式の変遷過程は一律化できない。松ノ木遺跡では松ノ木式→なつめの木式→平城Ⅱ式、田村遺跡群では(松ノ木式並行段階)→平城Ⅰ式→鐘崎Ⅱ式、他の遺跡では松ノ木式→平城Ⅰ式(なつめの木)→平城Ⅱ式の変遷が想定される。田村遺跡群では鐘崎Ⅲ式に相当する段階が存在する可能性があり、5段階に細分される可能性が残されている。Ⅱ-18図161～164の一群が相当する可能性がある。

南四国では後期中葉については片粕式、広瀬上層式の2段階が確認されている。瀬戸内側では四元遺跡、津島岡大遺跡から彦崎Ⅰ式から彦崎Ⅱ式の間3段階の時期が想定されており、津島岡大遺跡27b層出土、津島岡大遺跡25a層、四元遺跡の段階が設定されている。瀬戸内と南四国の編年対比は津島岡大遺跡27b層が片粕式に並行する可能性が指摘されていることから、中央部の個別型式も将来更に細分されるかもしれない。

5. 出土石器

石器は石鏃、刃器、スクレイパー、楔形石器、石匙、石槍、打製石斧、磨製石斧、叩石・磨石、石錘が出土している。遺構に伴って出土する例は少ないが、H1区で石鏃と石錘が同一土坑から出土する例が2例認められている。土器は出土していないものの、おそらく鐘崎Ⅱ式期の所産と考えられる。

遺跡全体での総数は石錘が最も多く、約420点、次いで石鏃の約130点、打製石斧もほぼ同数出土

している。

先に見たように調査区により時期差が認められることから、石器組成も違ってきているようで、鐘崎Ⅱ式を主体とするH区では石錘、石鏃が多く、打製石斧もややまとまって出土している。石錘308点(59%)、石鏃123点(23.6%)、打製石斧47点(9%)である。

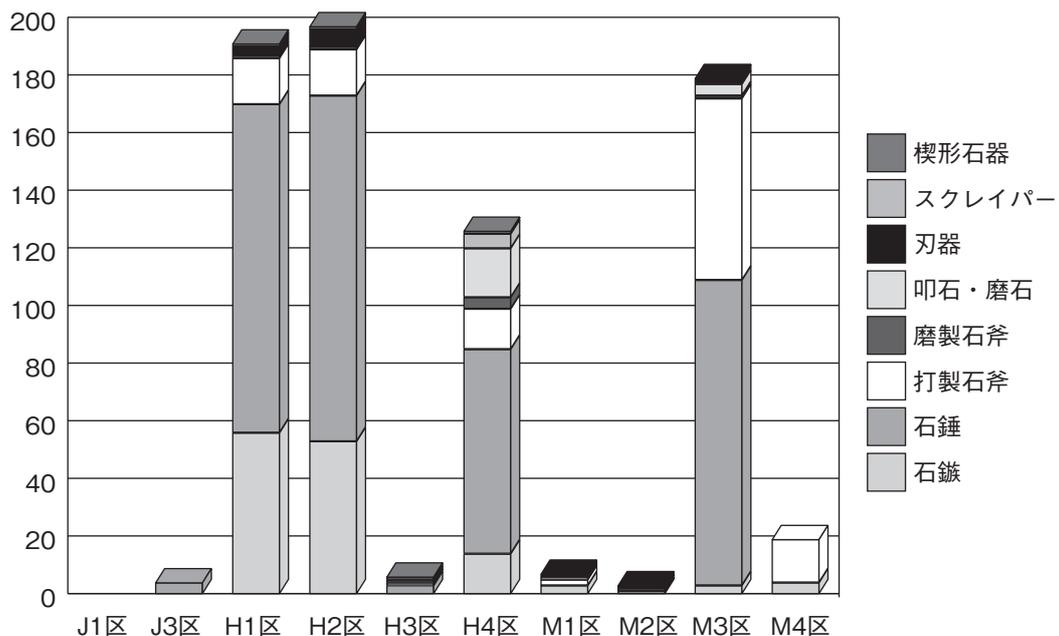
M区では石錘106点(50.7%)、打製石斧80点(38.3%)、石鏃11点(5.2%)である。

石錘は鐘崎Ⅱ式段階、片粕・北久根山式段階でも石器組成の50%余りを占めており、時期的な相違は認められない。石器組成の顕著な相違は、片粕・北久根山式段階になり、石鏃の減少と打製石斧の増加が反比例していることである。打製石斧はM3区で特にまとまって出土している。

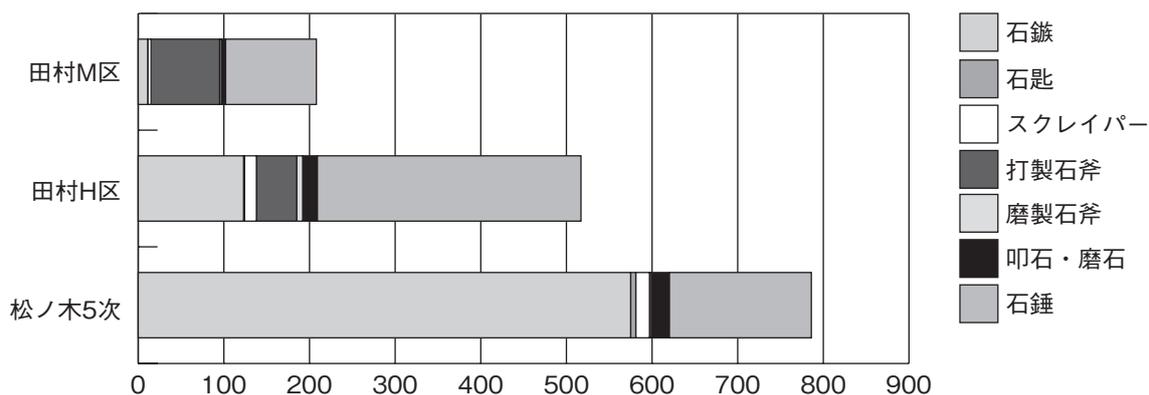
山間部の松ノ木遺跡と石器組成を比較した場合、松ノ木遺跡では石鏃が575点に対して打製石斧は1点も出土していない。田村遺跡群との石器組成の大きな違いは、時期的な変換点によるものか、立地条件による相違による可能性が考えられる。田村遺跡と松ノ木遺跡では時期的には松ノ木式から鐘崎Ⅱ式の間には少なくとも1型式が確実に存在しているところから、こうした石器組成の相違は時期的変化も考えられ、一方また立地的な生業の相違の両方が絡んでの変化と考えられる。打製石斧については、この時期から徐々に増加傾向にあり、生業の多様性がこの時期から顕著になるものと考えられる。

田村遺跡群の後期前半は九州系統の鐘崎Ⅱ式が移入してきているものの、また石鏃の大半がサヌカイトであるという瀬戸内の要素も逃せない。

尚、M3区のⅡ-32図341と同様の岩偶が片粕遺跡から出土している。



グラフⅡ-1 石器調査区別出土点数



	松ノ木5次	田村H区	田村M区
石鏃	166	308	106
叩石・磨石	21	17	5
磨製石斧	2	7	2
打製石斧	0	47	80
スクレイパー	16	14	4
石匙	6	1	0
石鏃	575	123	11

グラフ II-2 田村・松ノ木遺跡石器対比

6. まとめ

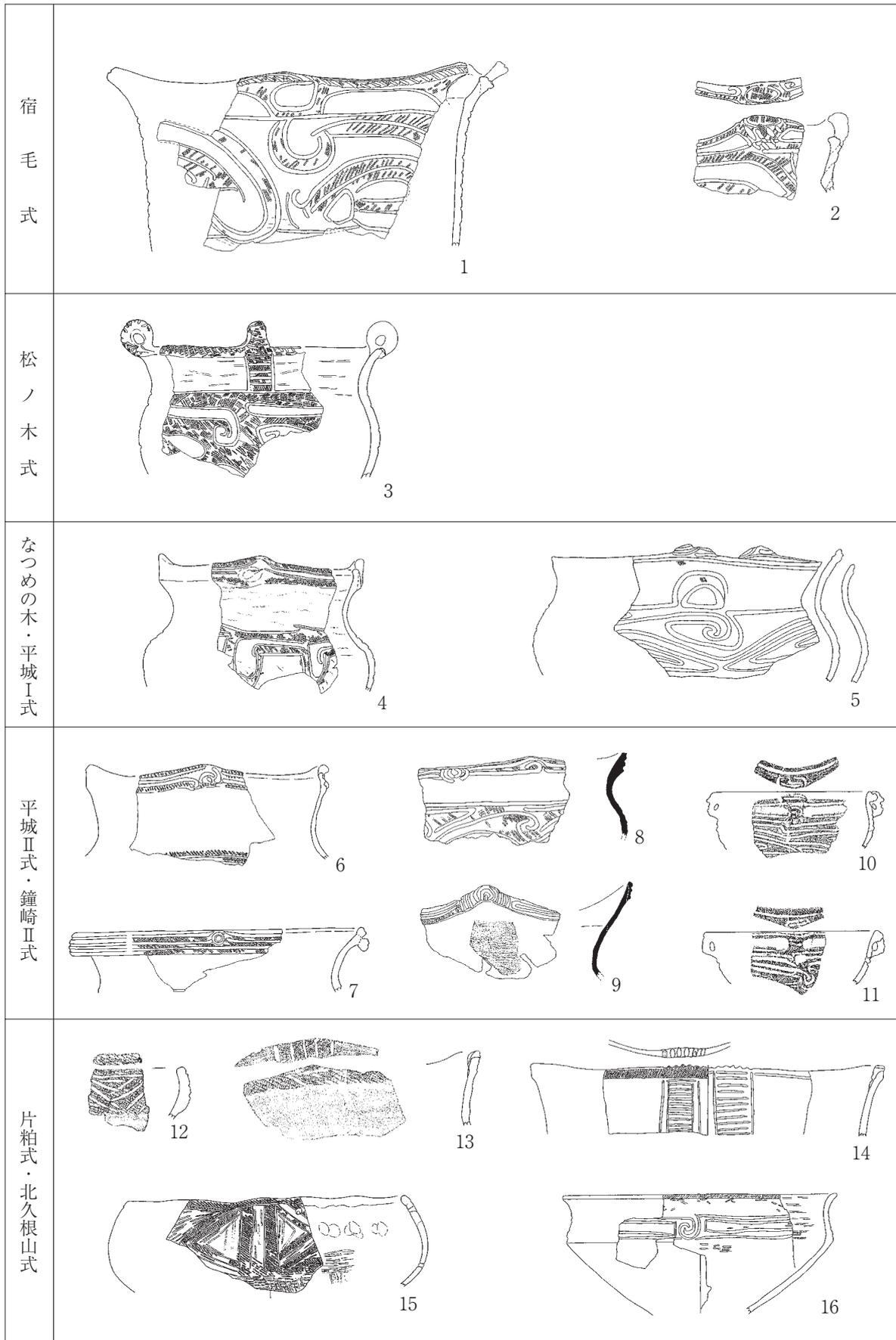
以下、簡単に田村遺跡群縄文時代後期の事象をまとめる。

- 後期前半は九州系統の鐘崎Ⅱ式が移入。
- 後期中葉段階でも北久根山式の移入。
- 鐘崎Ⅱ式段階では住居跡は検出できていないものの、焼土跡、土坑を多数検出。
- 片粕式・北久根山式段階で打製石斧が増加。
- 瀬戸内のサヌカイトの搬入。

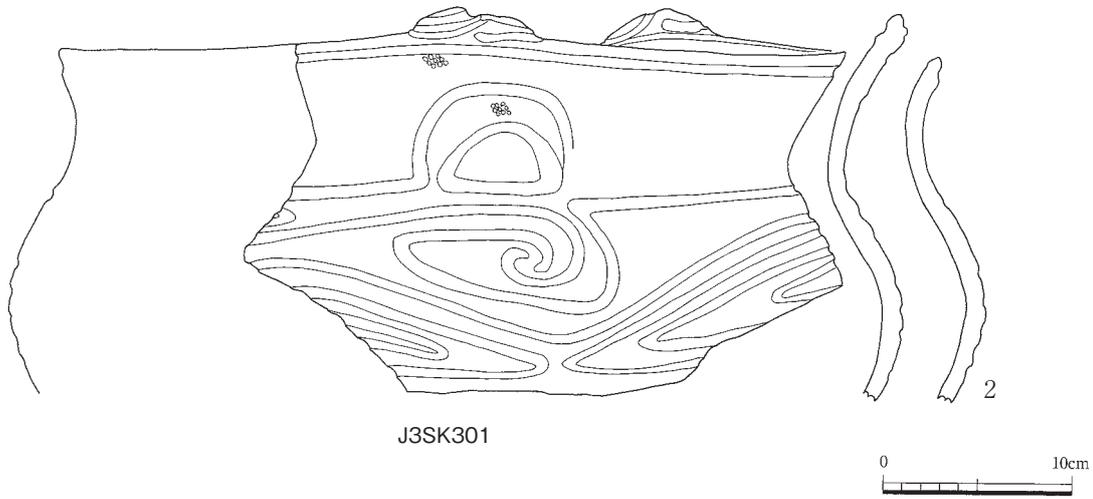
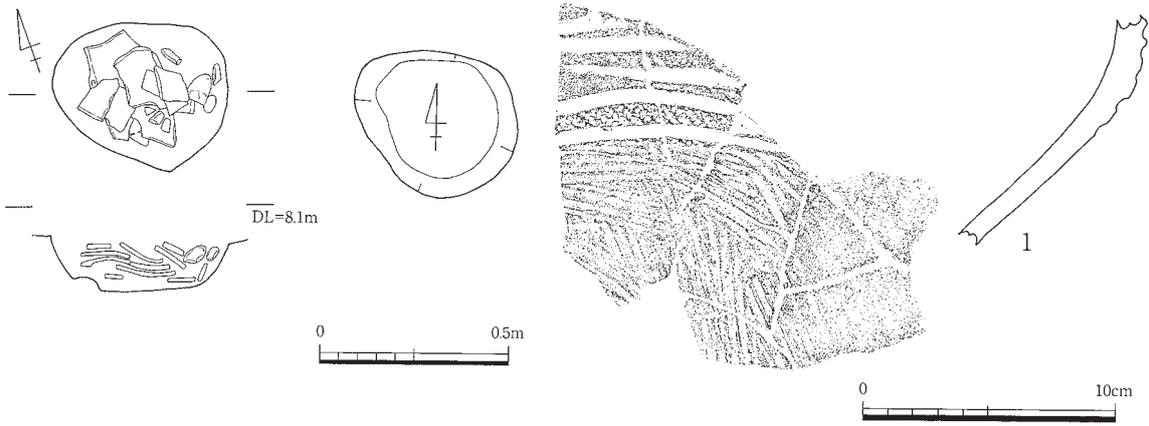
引用参考文献

- 田村遺跡群、Loc.47、第1分冊、高知県教育委員会、1986
- 田村遺跡群Ⅱ、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター、2004
- 柳田遺跡、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター、1994
- 居徳遺跡群Ⅳ、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター、2003
- 拝原遺跡、高知県香我美町教育委員会、1993
- 西分増井遺跡群発掘調査報告書、高知県春野町教育委員会、1990
- 西分増井遺跡Ⅱ、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター、2004

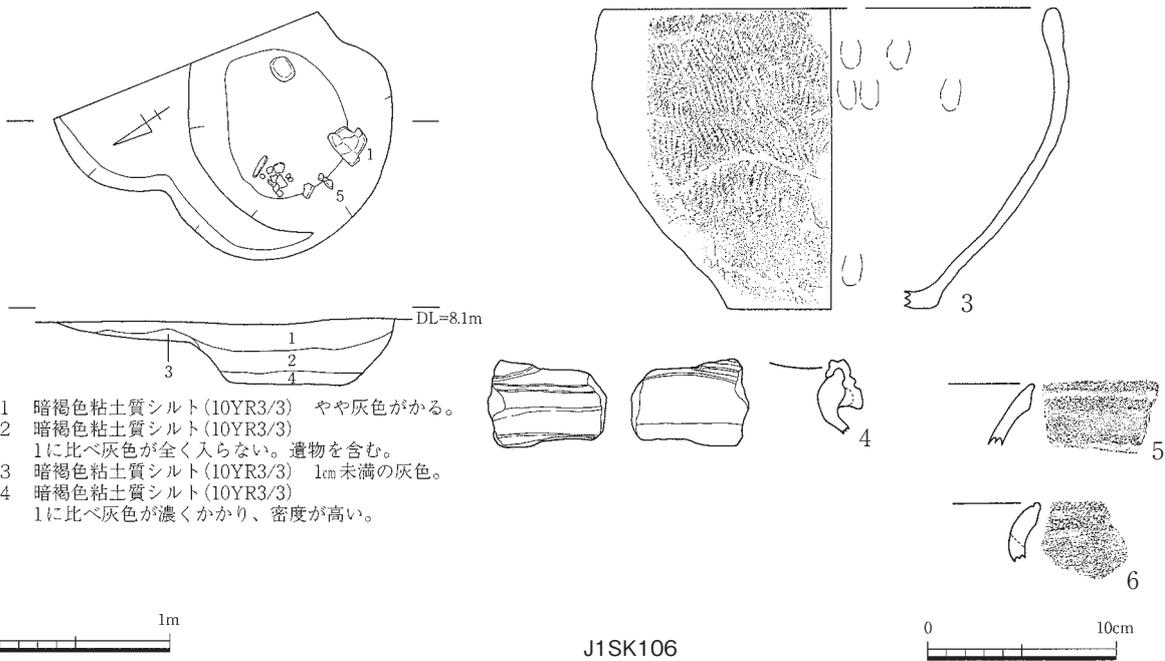
林田シタノヂ遺跡Ⅱ、高知県土佐山田町教育委員会、1993
天神遺跡Ⅰ・林口遺跡Ⅰ、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター、2001
奥谷南遺跡Ⅲ、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター、2001
栄エ田遺跡、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター、1995
飼古屋岩陰遺跡調査報告書、高知県教育委員会、1983
松ノ木遺跡Ⅰ、高知県本山町教育委員会、1992
松ノ木遺跡Ⅲ、高知県本山町教育委員会、1993
松ノ木遺跡Ⅳ、高知県本山町教育委員会、1996
松ノ木遺跡Ⅴ、高知県本山町教育委員会、2000
尻貝遺跡、高知県大月町教育委員会、1991
高知県片粕遺跡、高知県教育委員会、1975
宿毛貝塚、高知県教育委員会、1951
伊豫平城貝塚、愛媛県御荘町教育委員会、1957
平城貝塚、愛媛県御荘町教育委員会、1982
飯田二反田遺跡、大分県教育委員会、1993
干迫、鹿児島県立埋蔵文化財センター、1997
桑飼下遺跡、平安博物館、1975
泉 拓良、縁帯文土器様式、縄文土器大観4、小学館、1989
平井勝、縄文後期・四元式の提唱、古代吉備、第15集、1993
阿部芳郎、後期第Ⅳ群土器の型式学的検討、津島岡大遺跡4、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、1994
前田光雄、土器型式相の試論、西四国の縄文文化、愛媛県歴史文化博物館、2001
山崎真治、縁帯文土器の編年的研究、紀要第18号、東京大学考古学研究室、2003
松本安紀彦、高知県域、中津式の成立と展開、第15回、中四国縄文研究会、2004



II-3図 南四国中央部縄文時代後期の型式相
 (※松ノ木遺跡出土1~4,6,7 西分増井遺跡出土8,9 栄工田遺跡出土12,13 他は田村遺跡群)



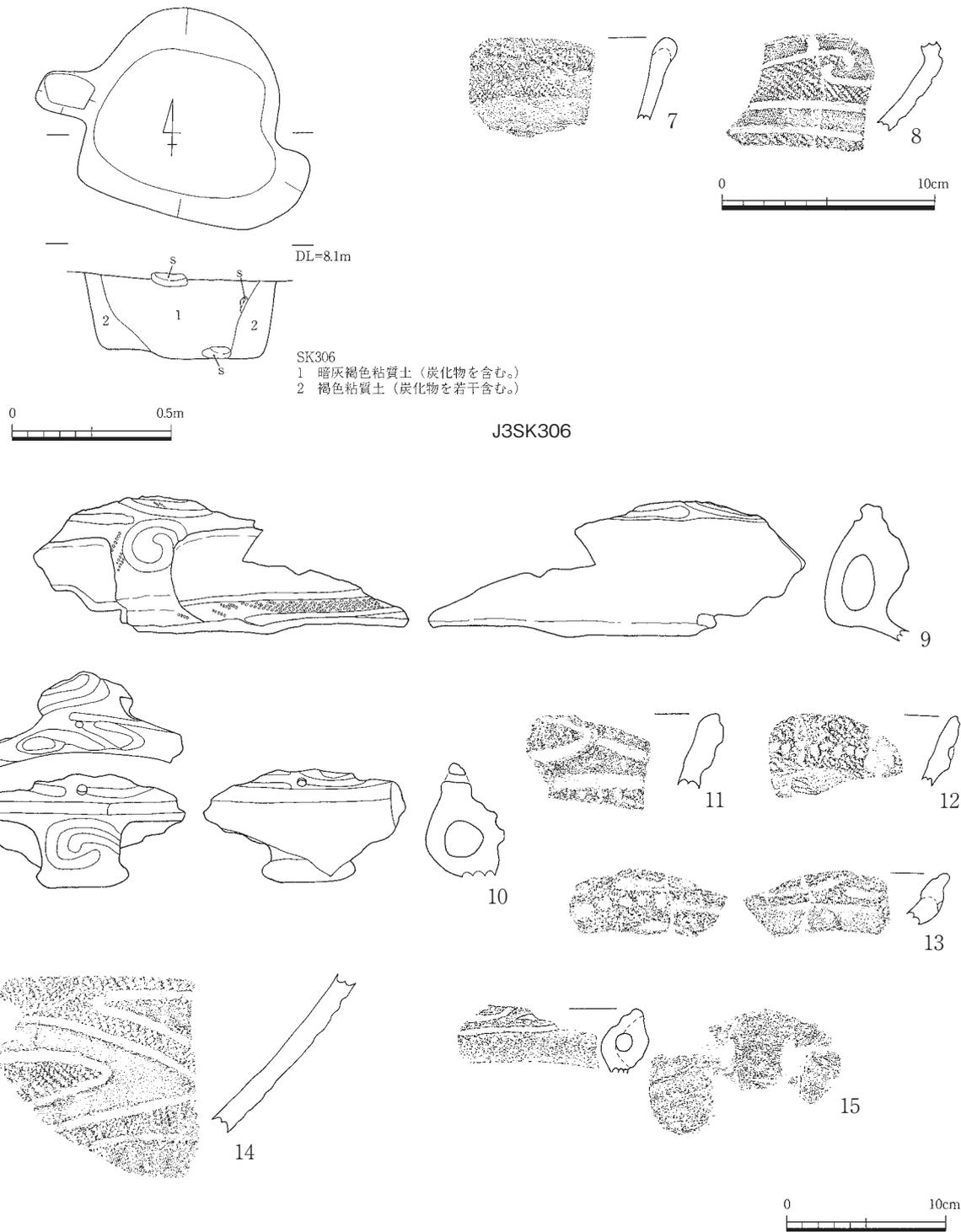
J3SK301



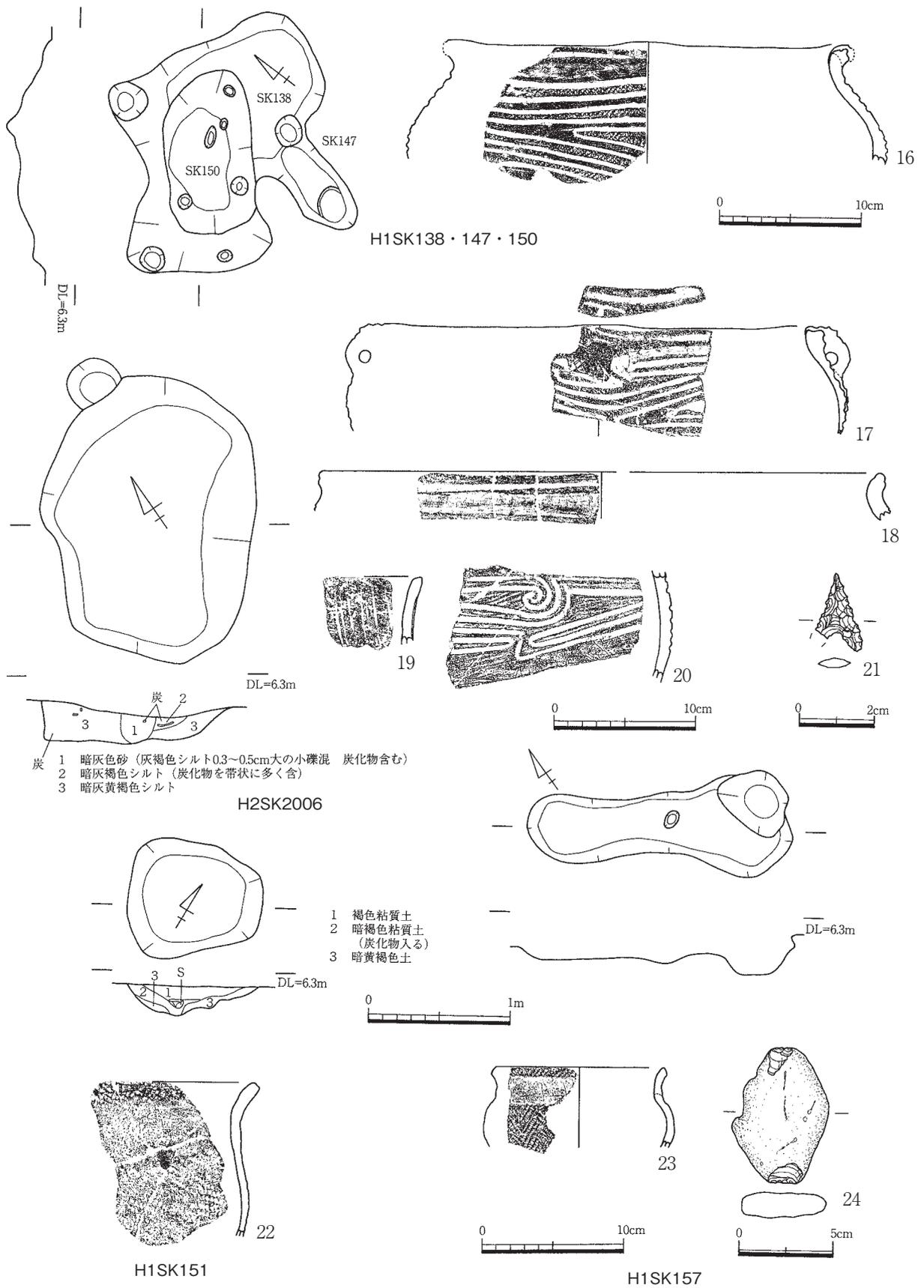
- 1 暗褐色粘土質シルト(10YR3/3) やや灰色がかかる。
- 2 暗褐色粘土質シルト(10YR3/3)
- 1に比べ灰色が全く入らない。遺物を含む。
- 3 暗褐色粘土質シルト(10YR3/3) 1cm未満の灰色。
- 4 暗褐色粘土質シルト(10YR3/3)
- 1に比べ灰色が濃くかかり、密度が高い。

J1SK106

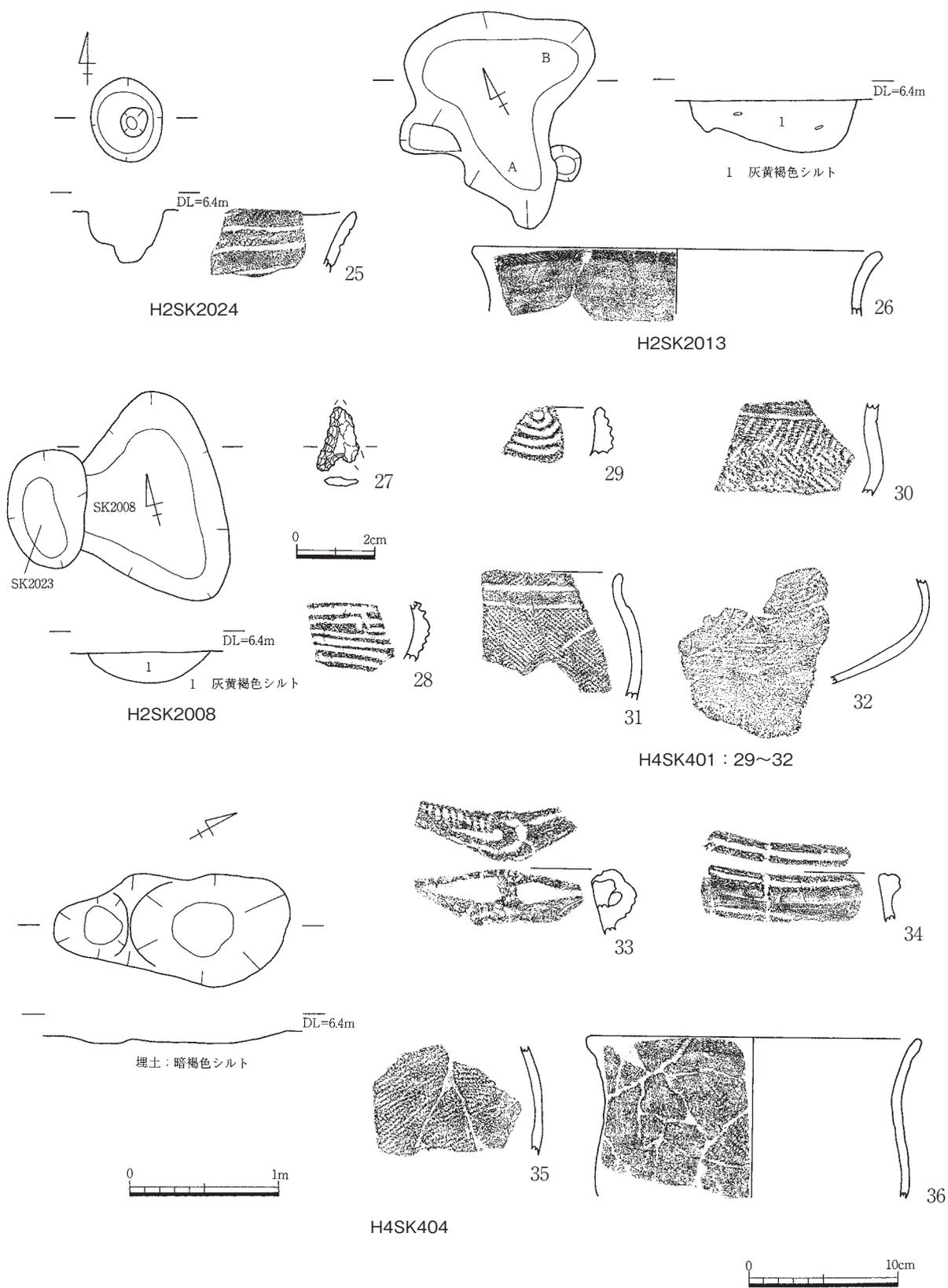
II-4図 土坑内出土縄文土器



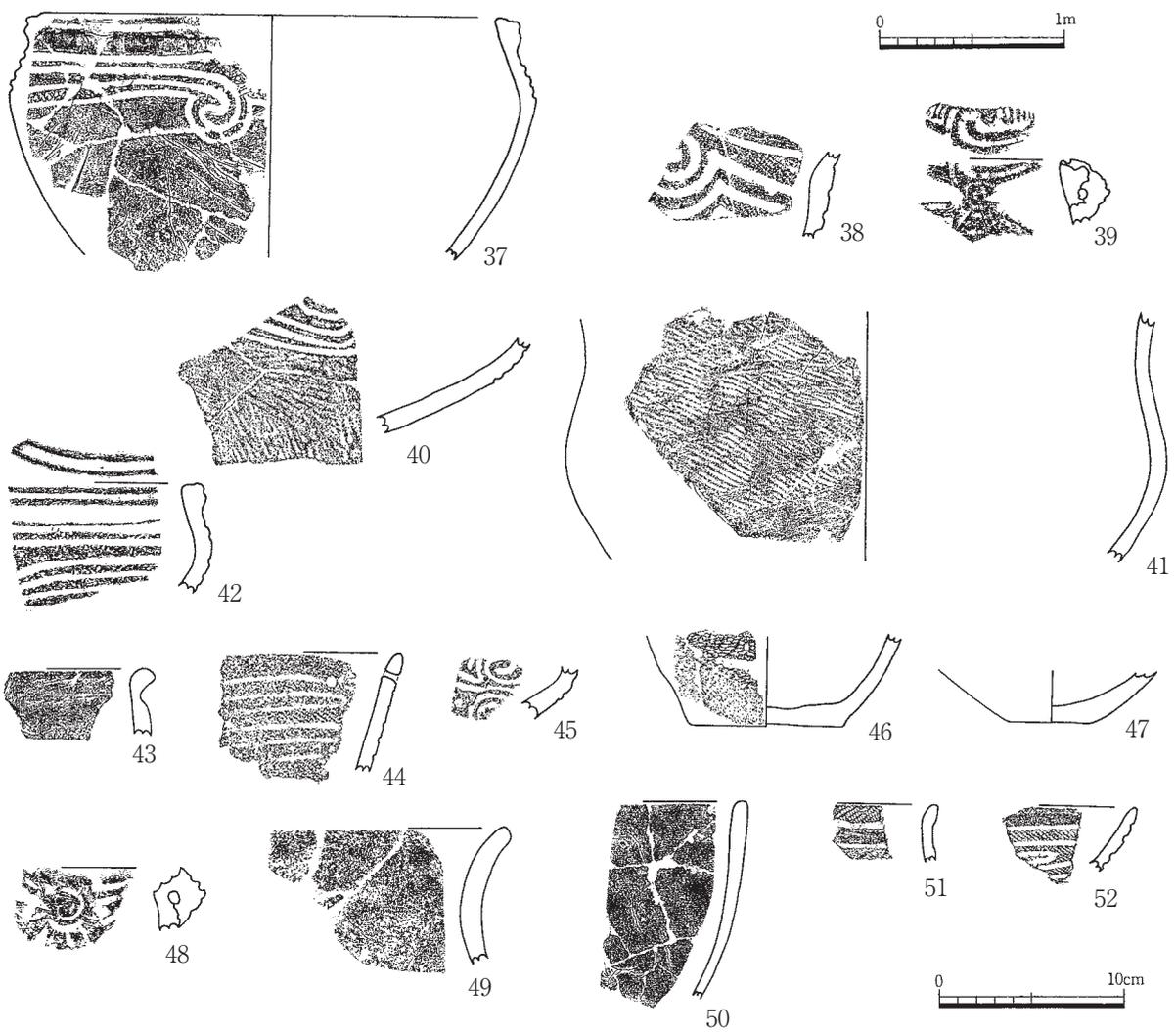
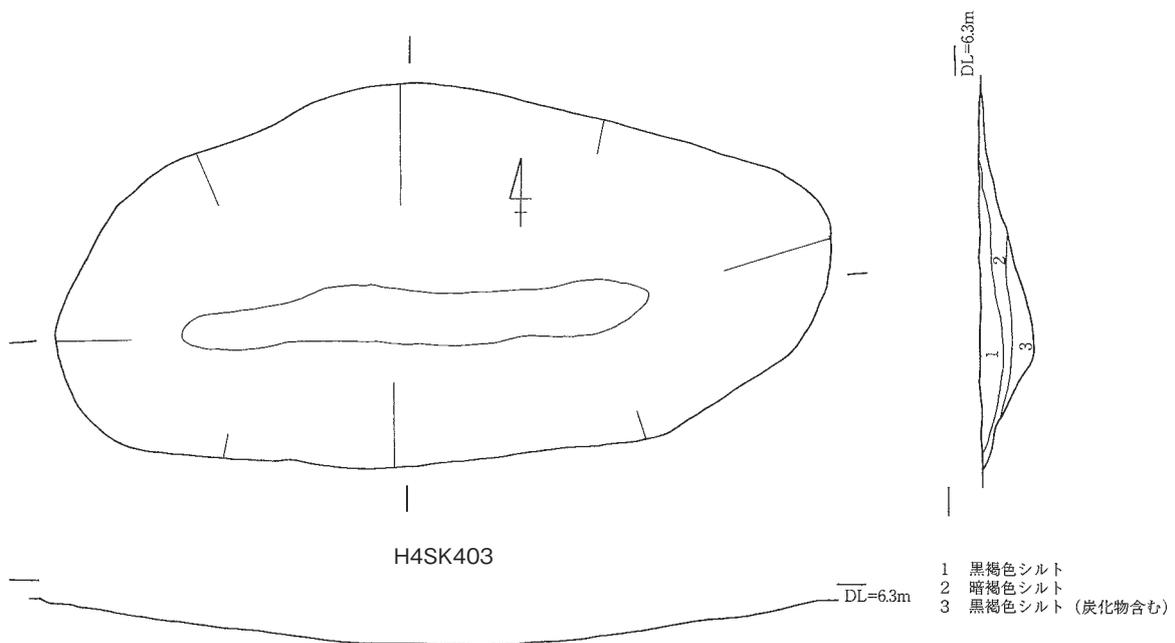
II-5図 土坑内、包含層出土縄文土器
 (J3区包含層：9~14)



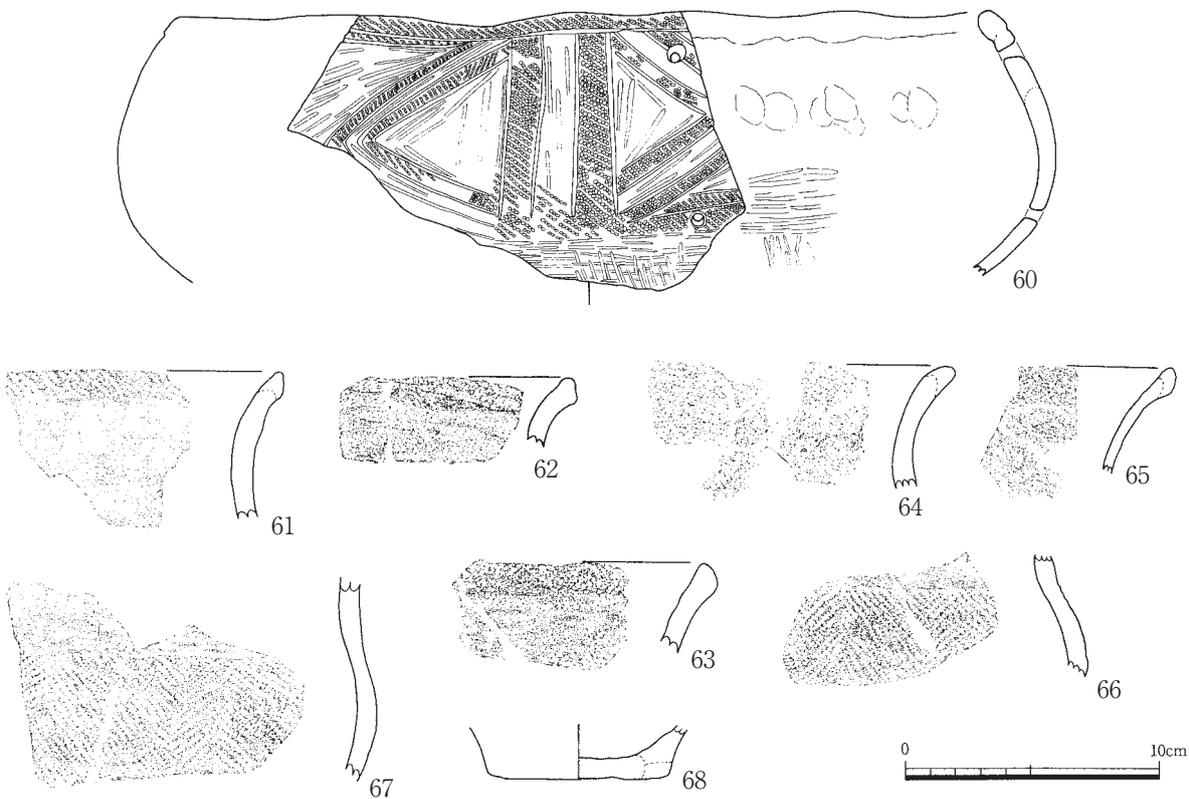
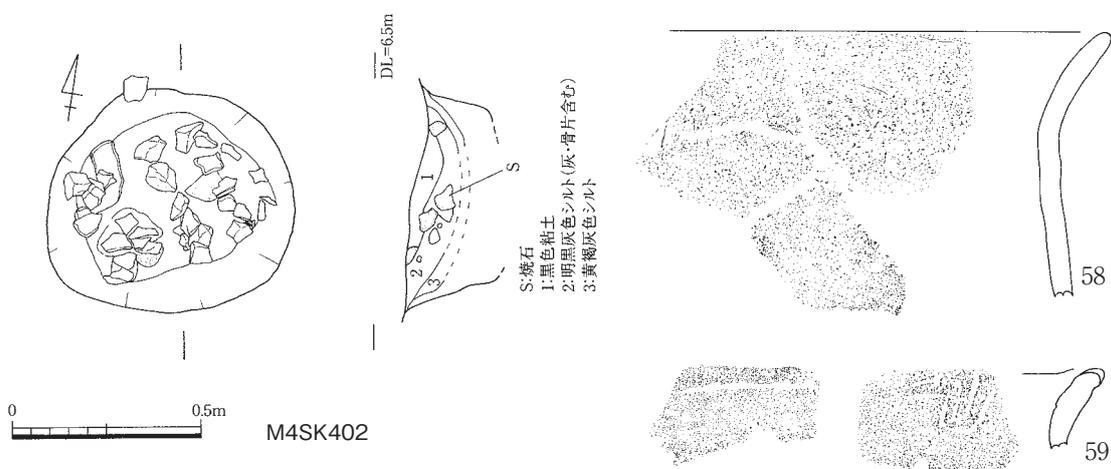
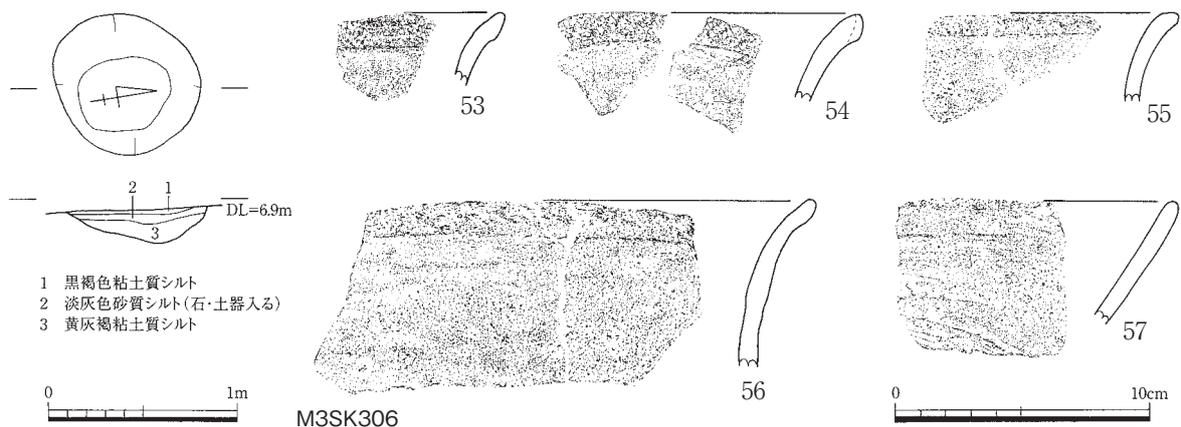
II-6図 土坑内出土縄文土器(1)



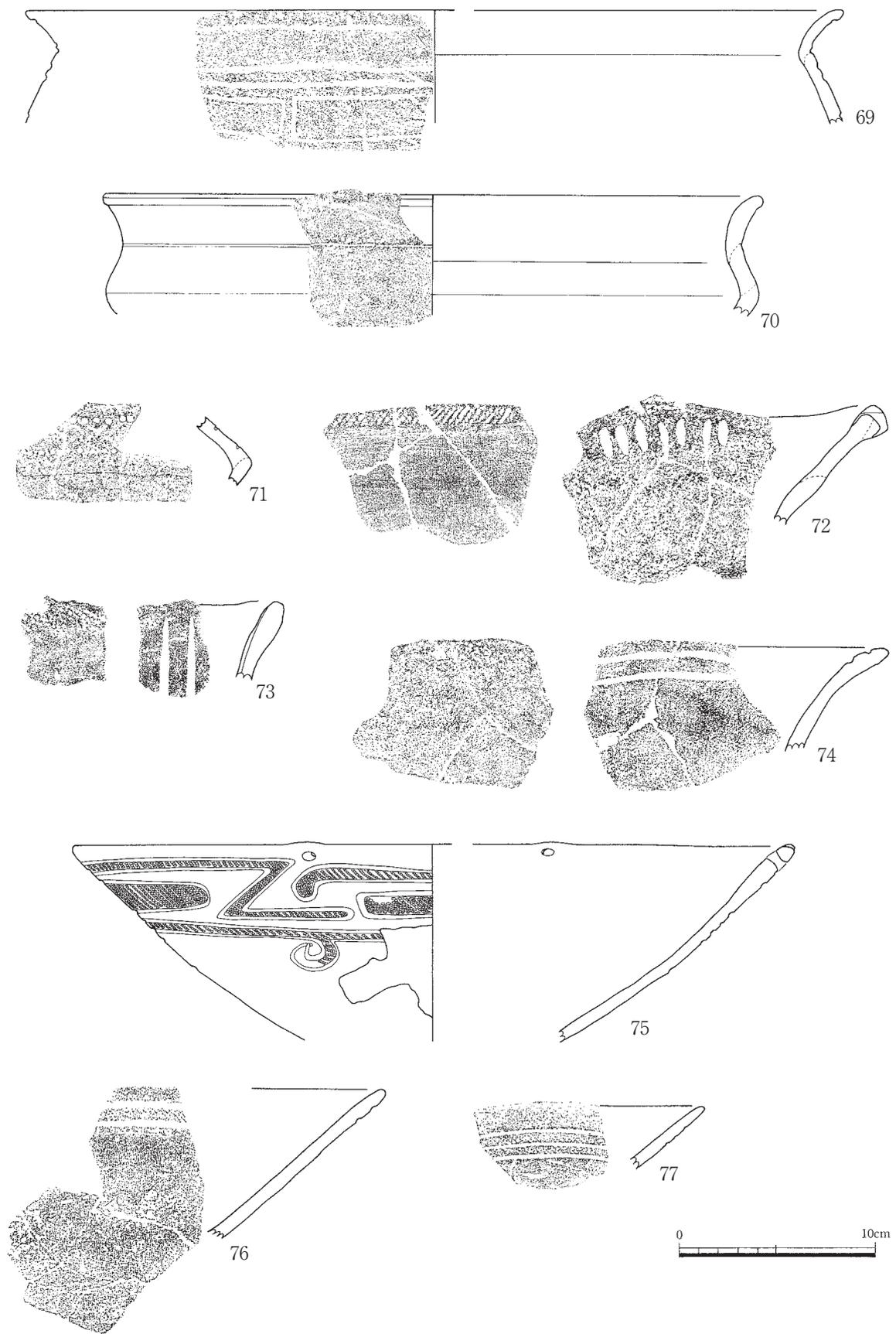
II-7図 土坑内出土縄文土器(2)



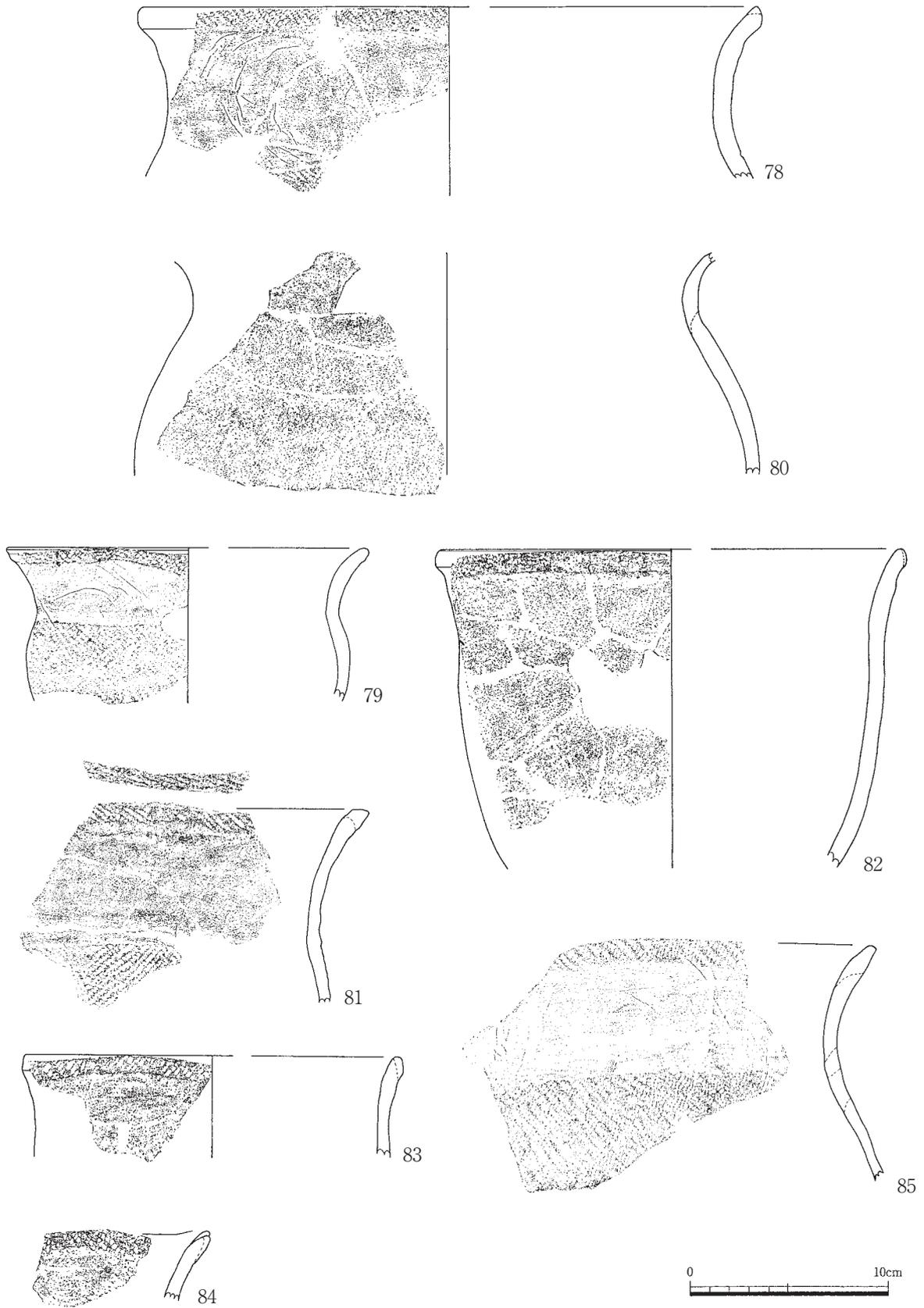
Ⅱ-8図 土坑内出土縄文土器(3)
(H4SK403 : 37~47, H4SK402 : 43~52)



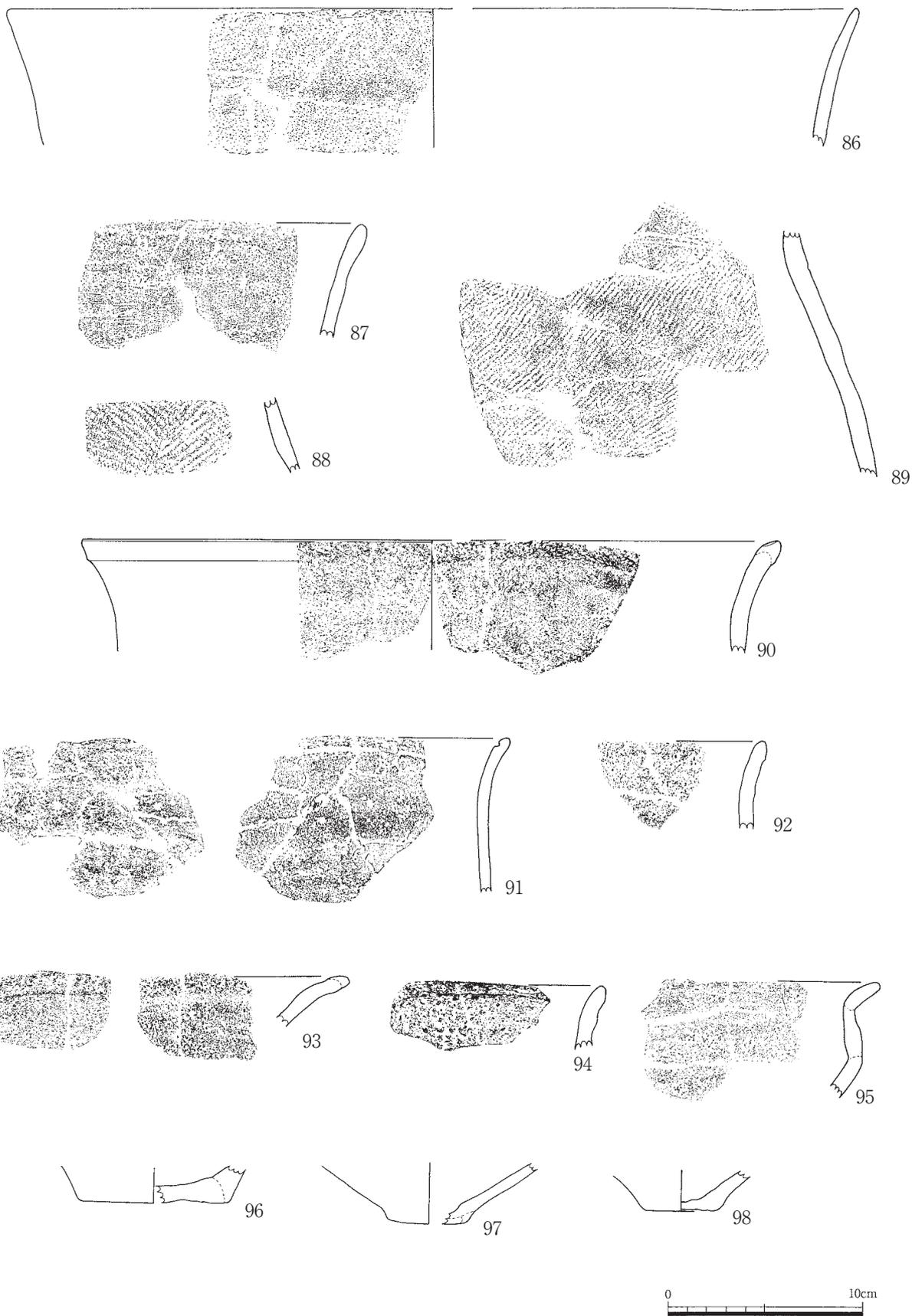
II-9図 土坑内、M1区SX100出土縄文土器
(M3SK306 : 53~57, M4SK402 : 58~60, M1区SX100 : 61~68)



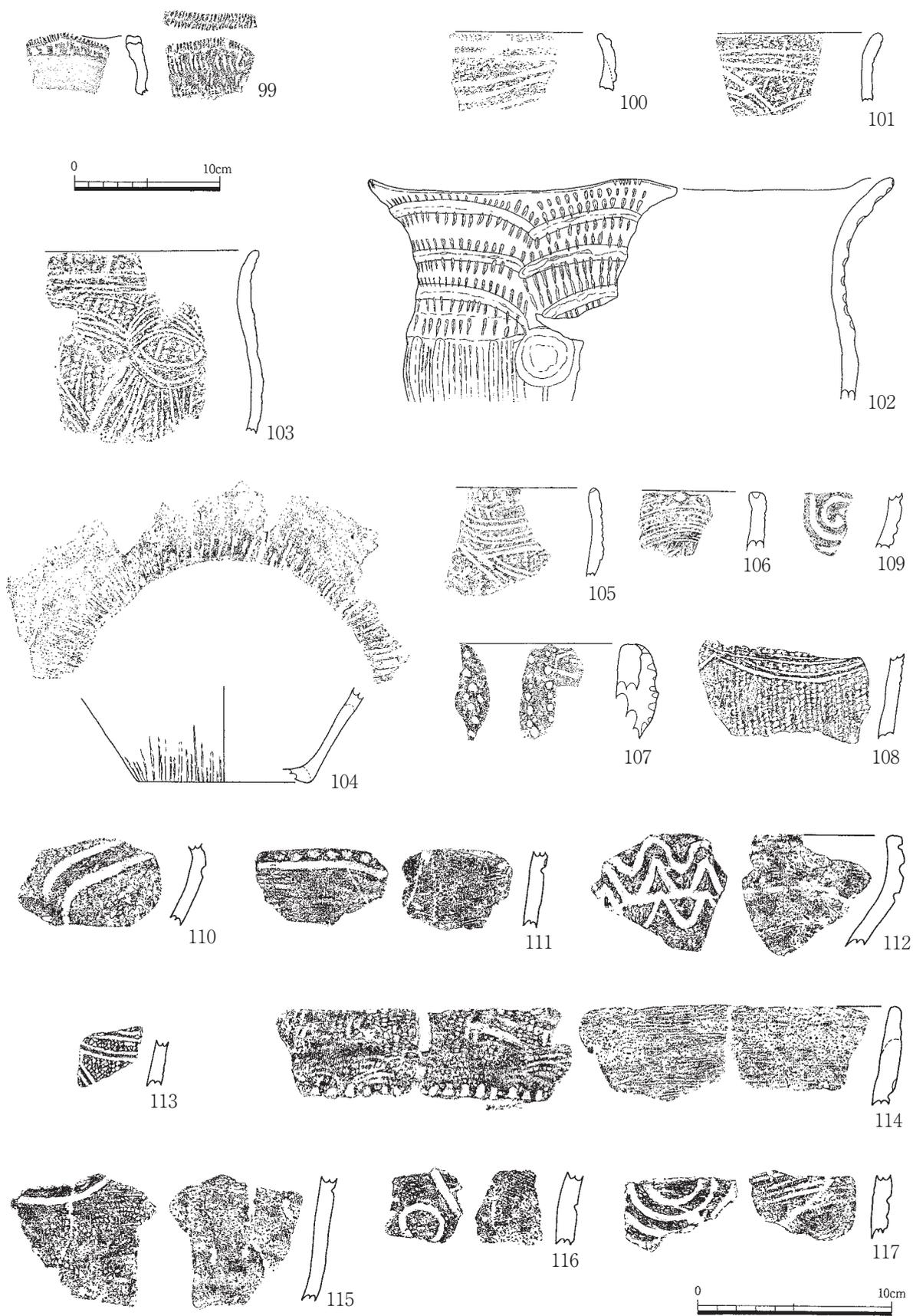
Ⅱ-10図 M1区SX101出土縄文土器(1)



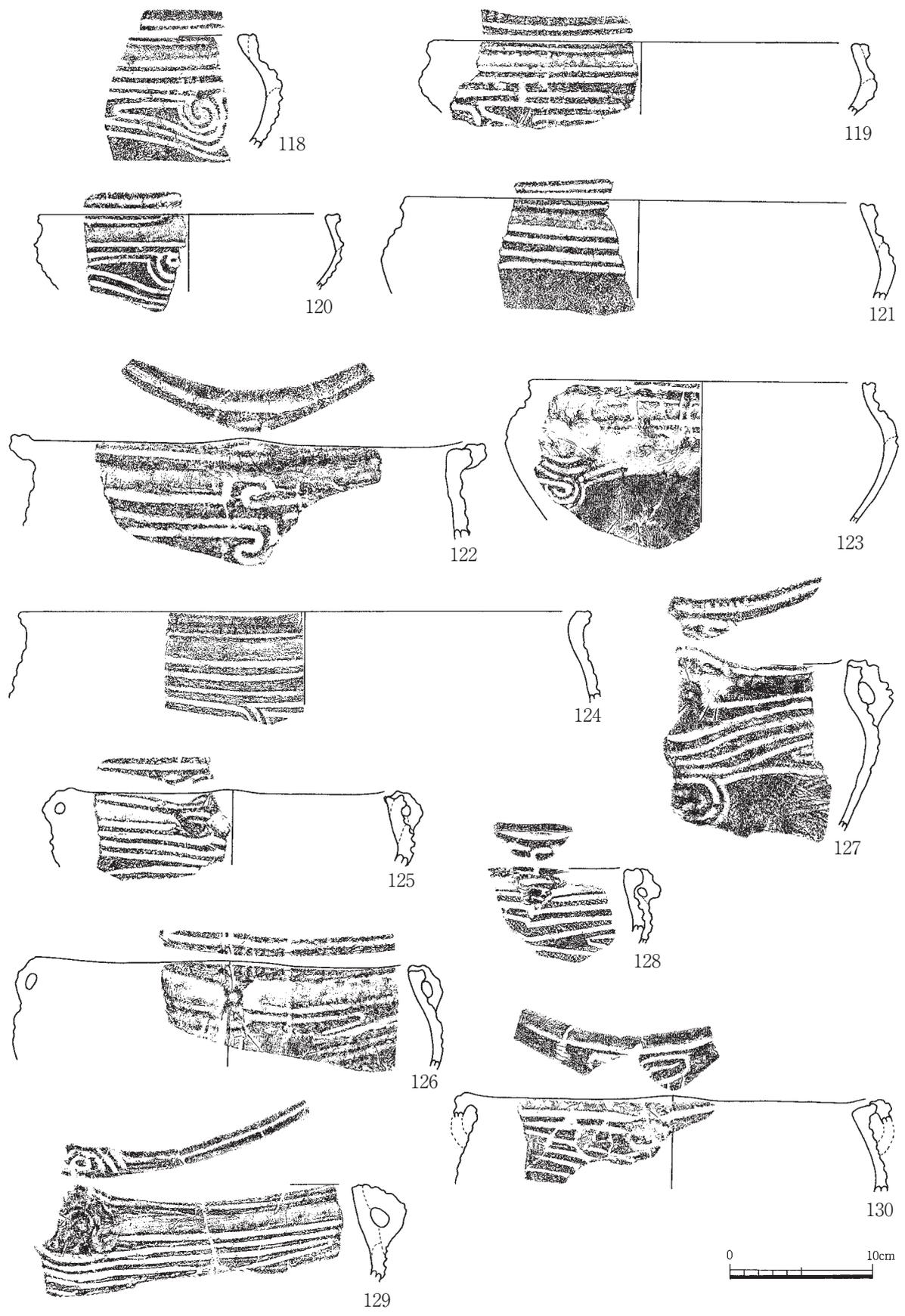
II-11図 M1区SX101出土縄文土器(2)



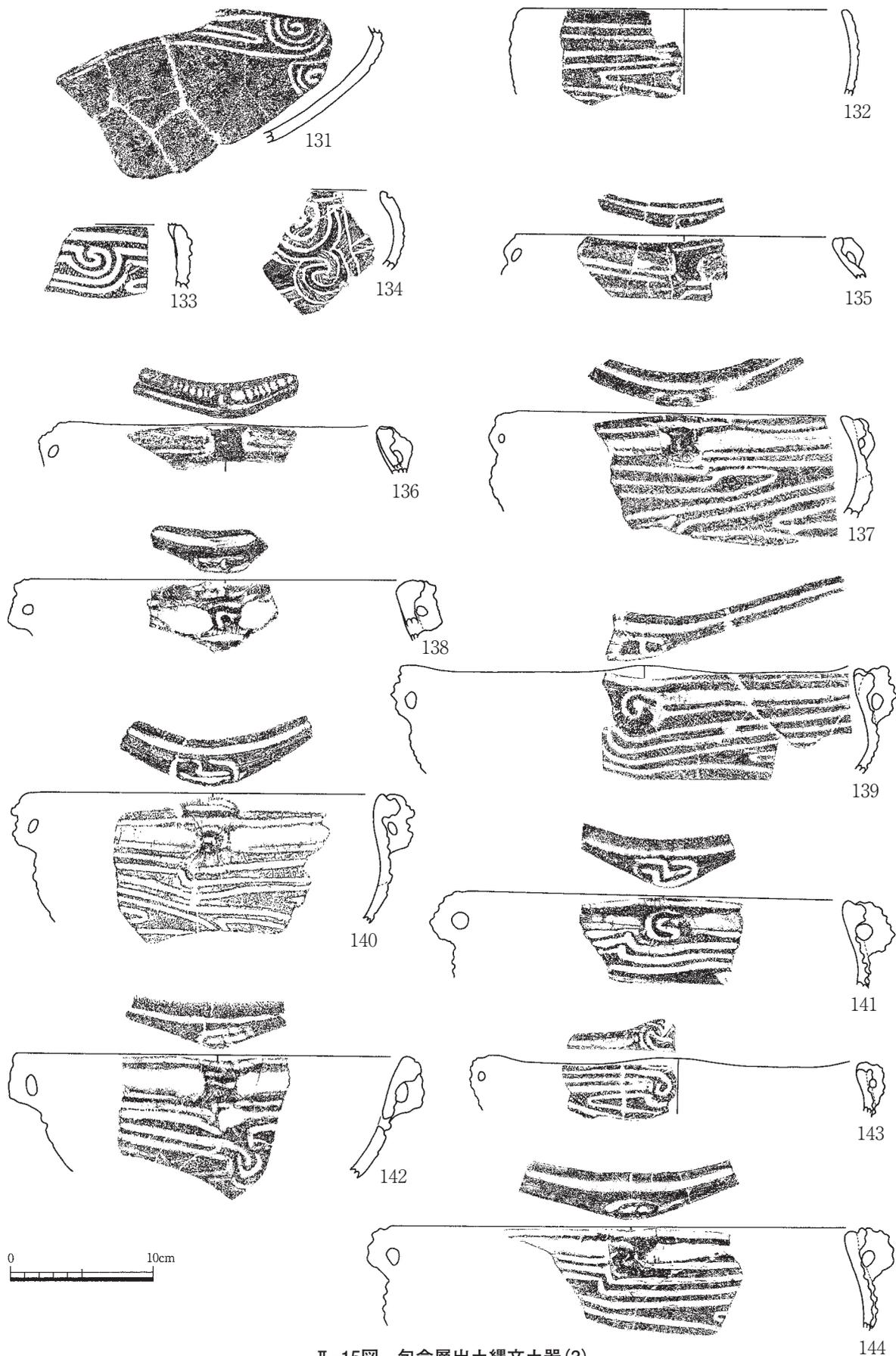
II-12図 M1区SX101出土縄文土器(3)



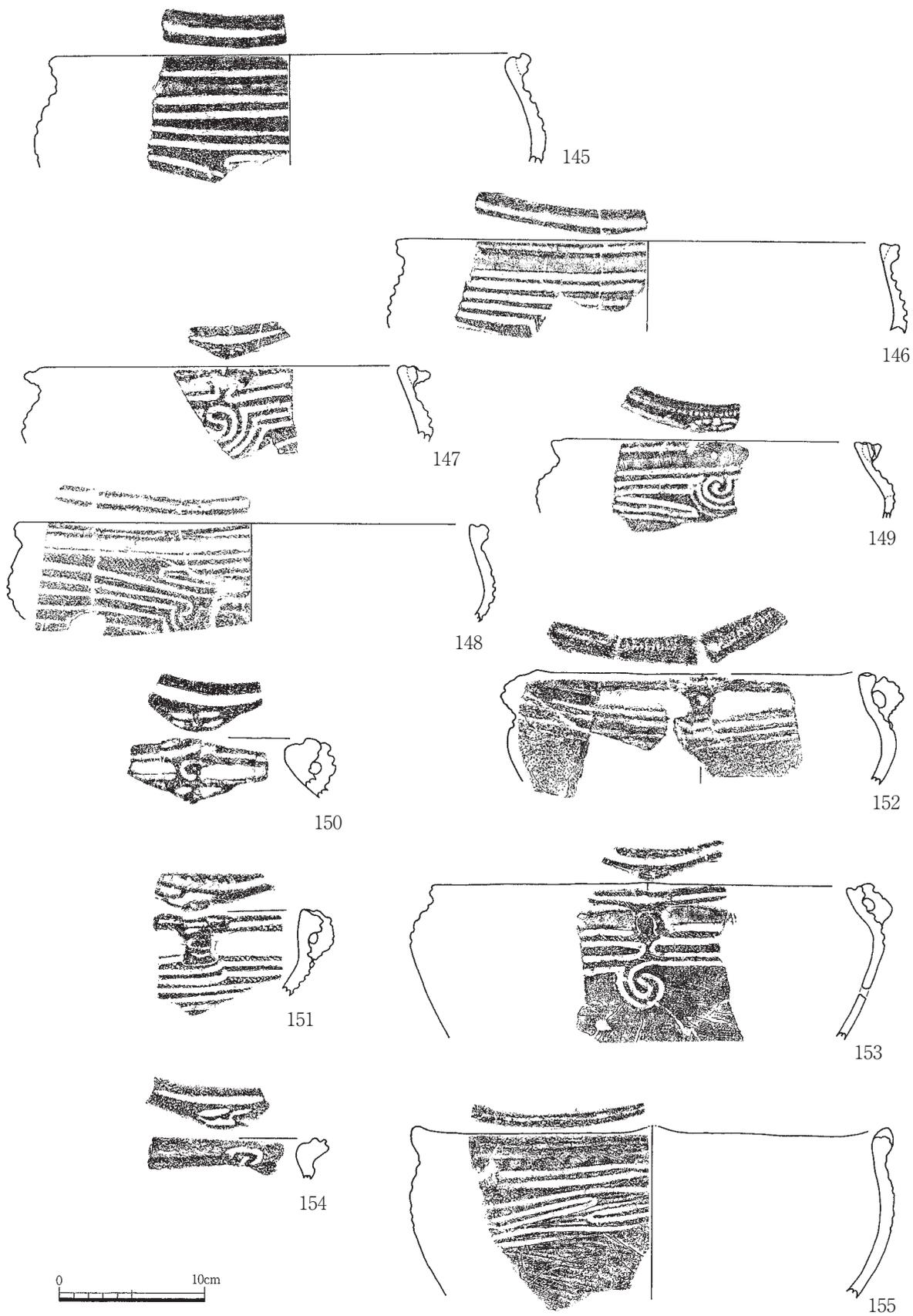
II-13図 包含層出土縄文土器(1)
(M2区: 99~108, H3区: 110~117)



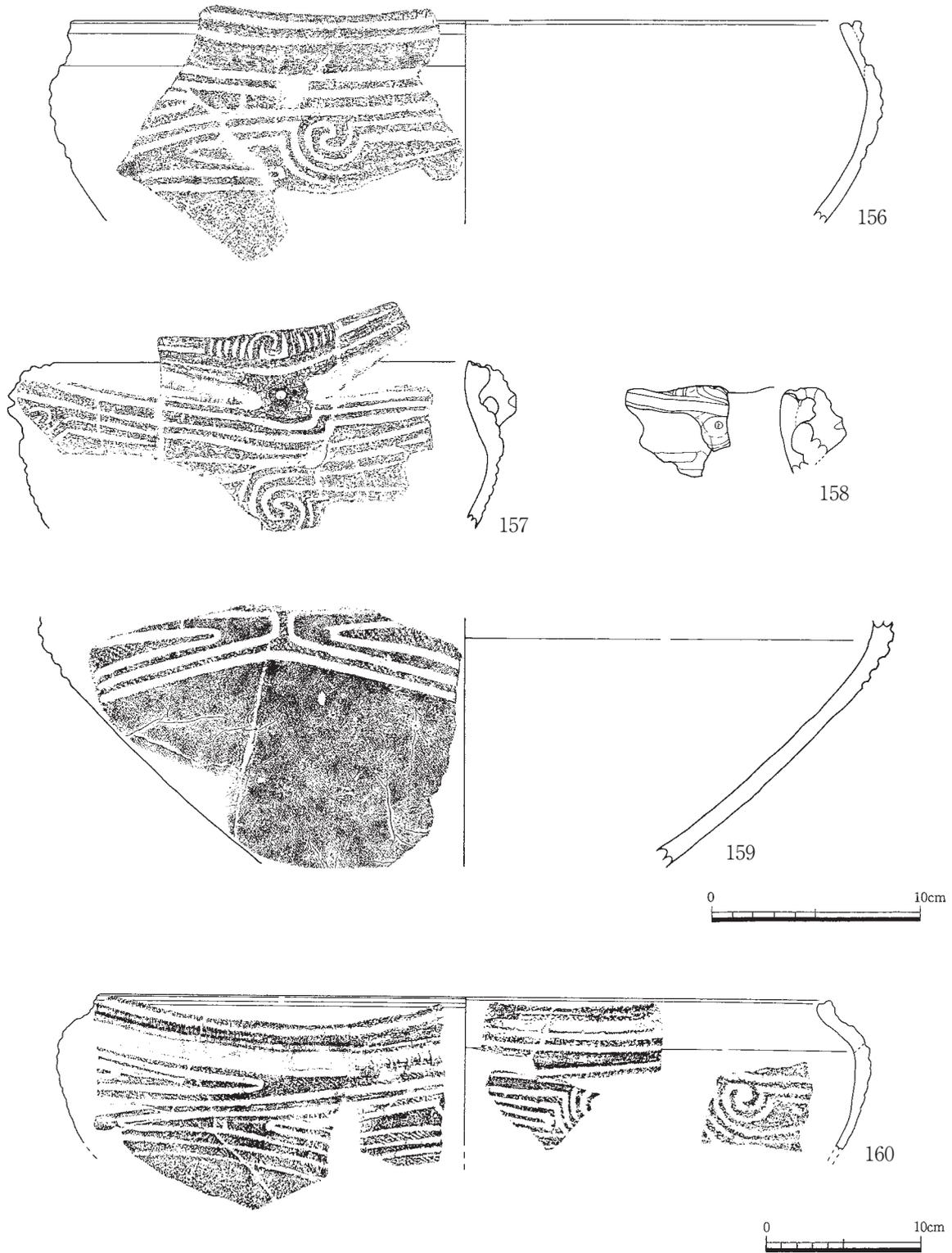
II-14図 包含層出土縄文土器(2)
(M1区: 118~130)



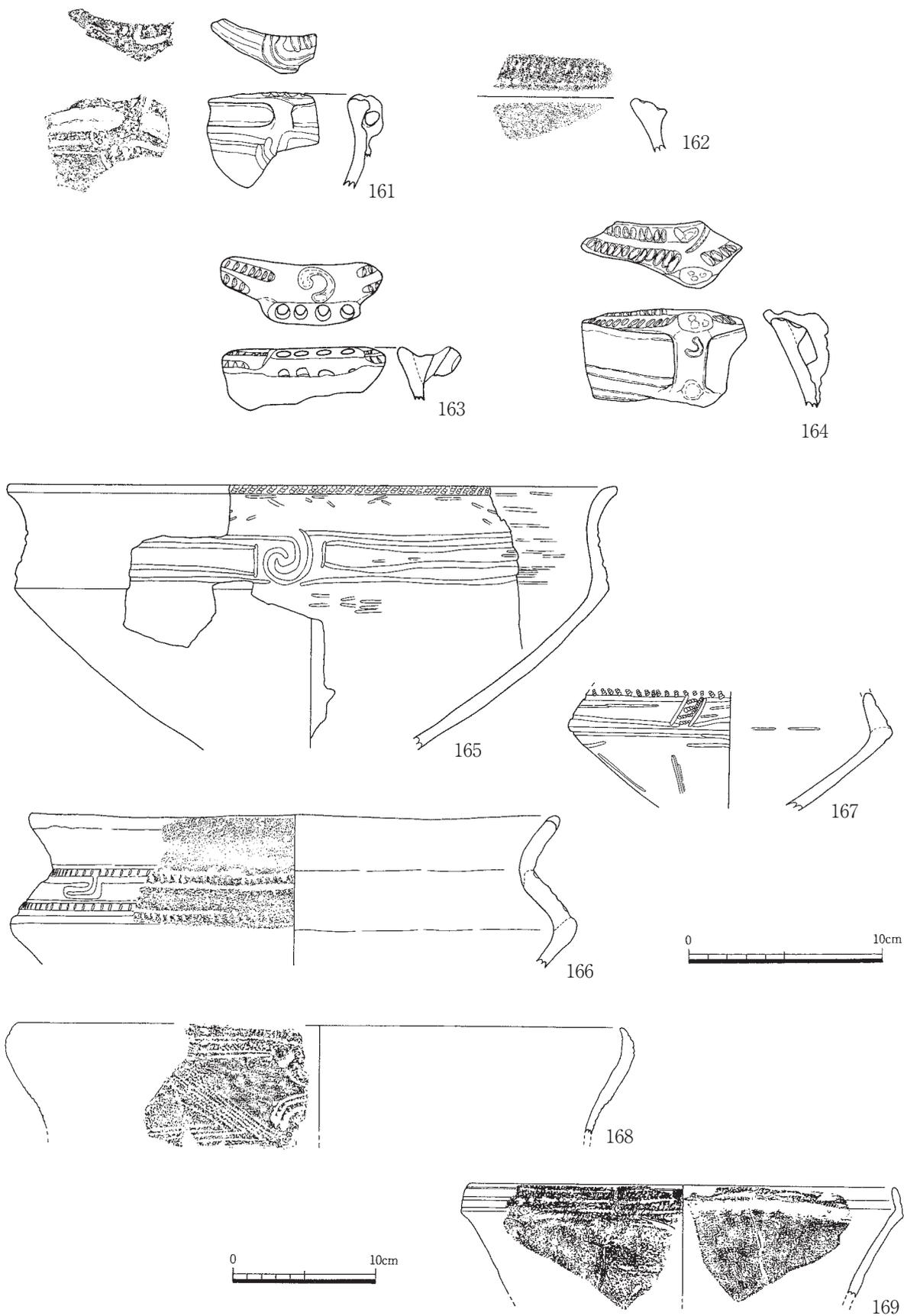
II-15図 包含層出土縄文土器(3)
 (H1区: 131~134, H2区: 135~144)



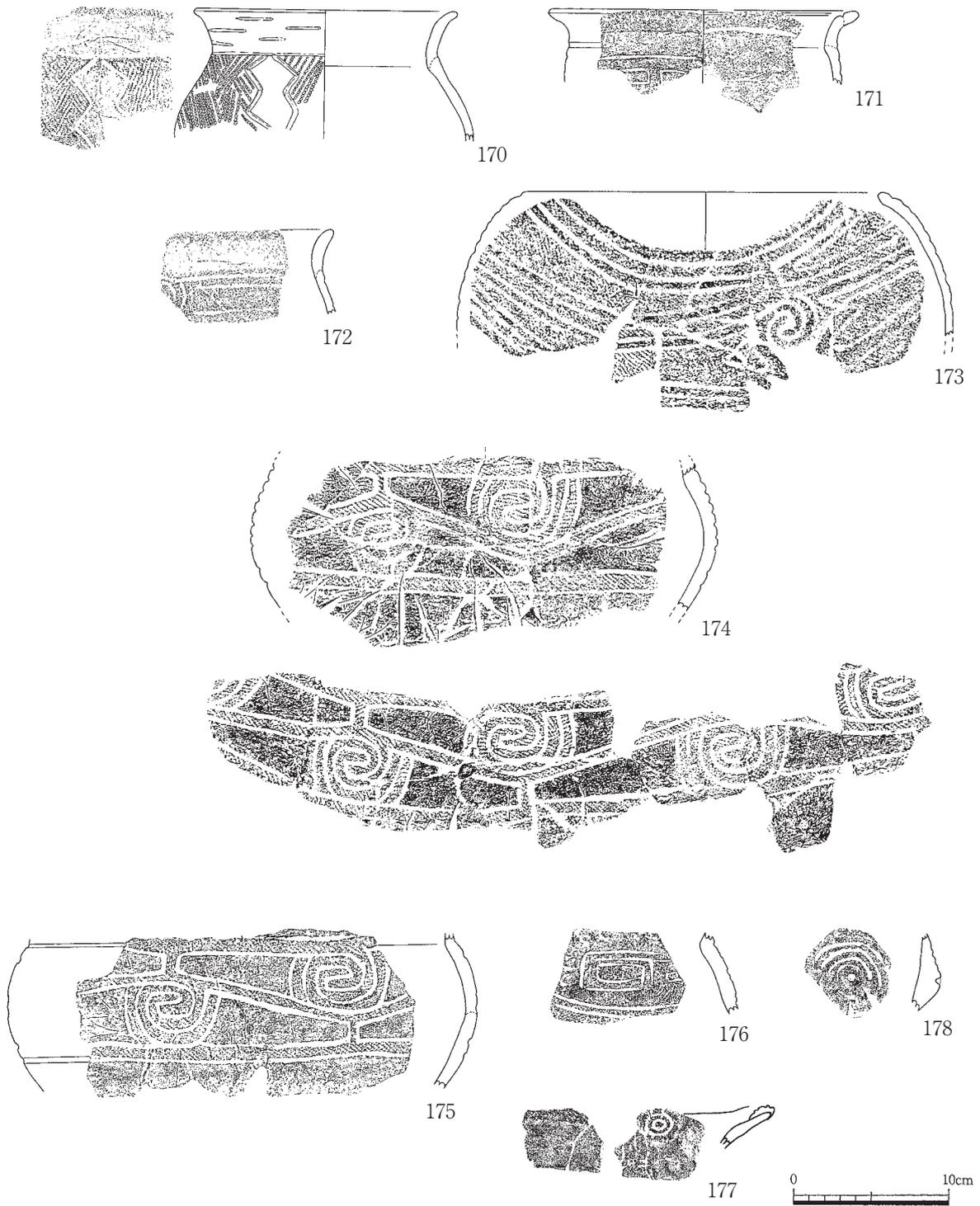
II-16図 包含層出土縄文土器(4)
 (H2区: 145~149, H4区: 150~155)



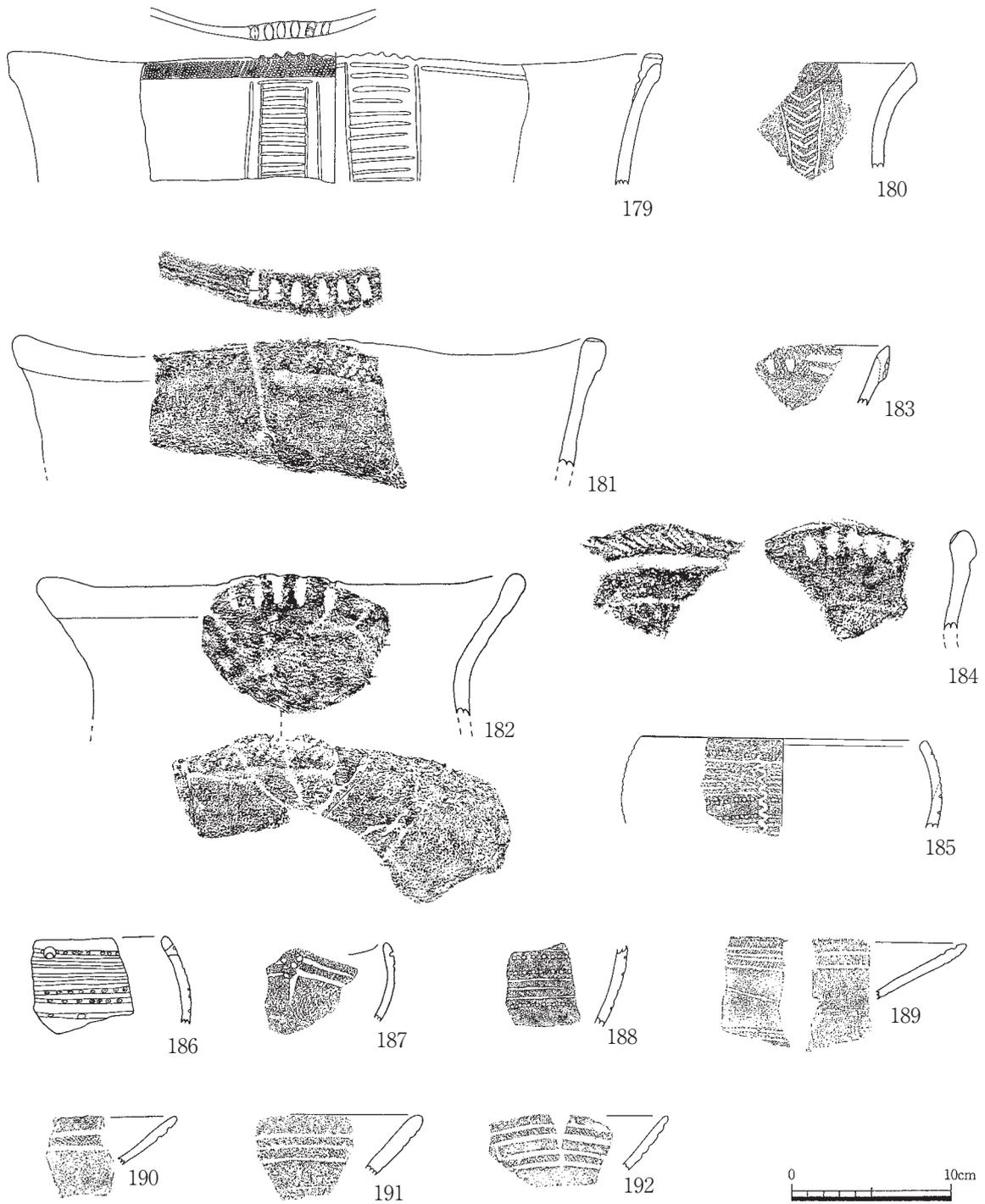
II-17図 包含層出土縄文土器(5)
(B3SD301 : 159, M3区 : 156・157, M4区 : 158, Loc.47区 : 160)



II-18図 包含層出土縄文土器(6)
 (M3区: 161~166, M4区: 167, Loc.47区: 168・169)

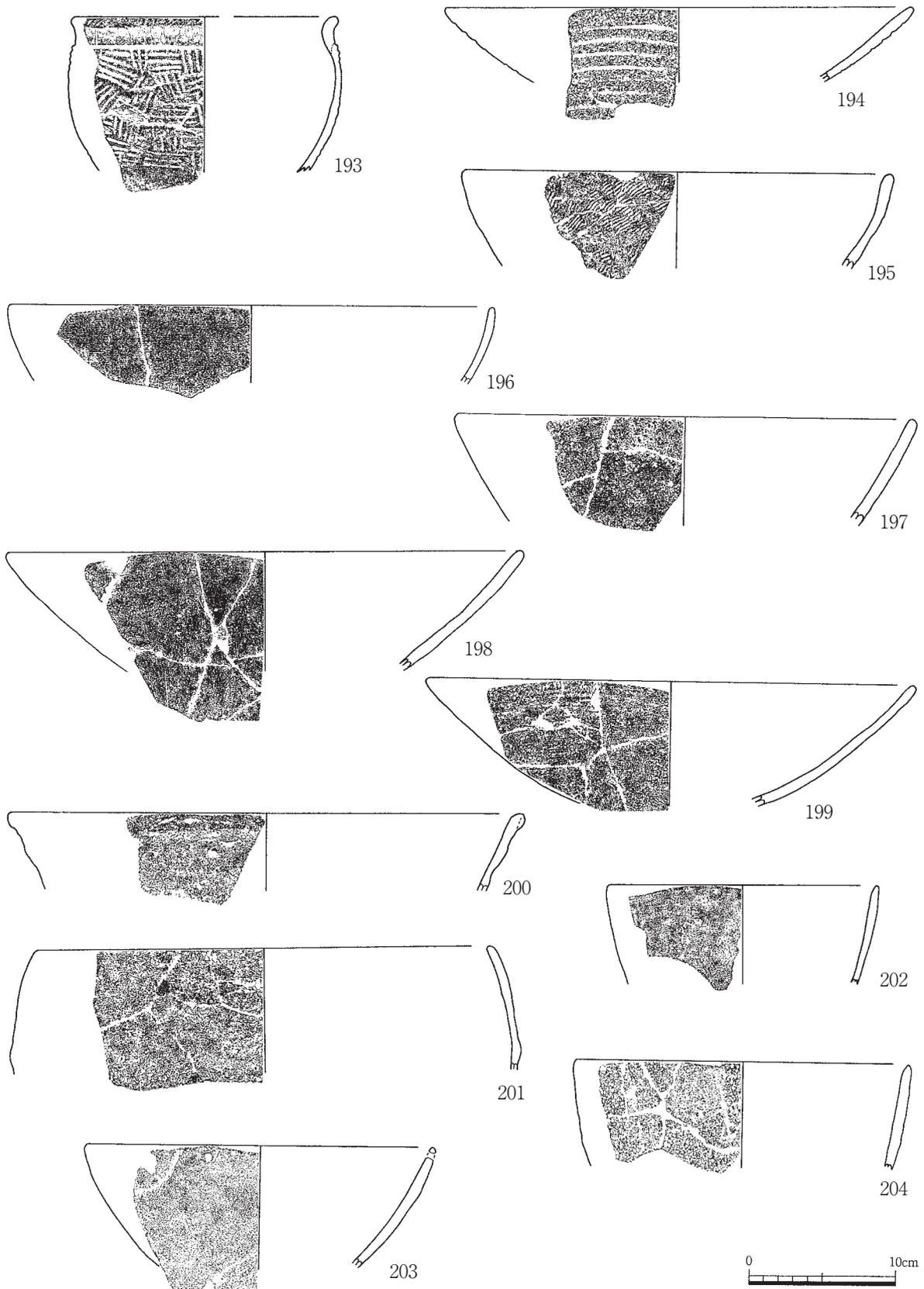


II-19図 包含層出土縄文土器(7)
(M1区: 177, M3区: 171・175・176・178, M4区: 170・172, Loc.47区: 173・174)

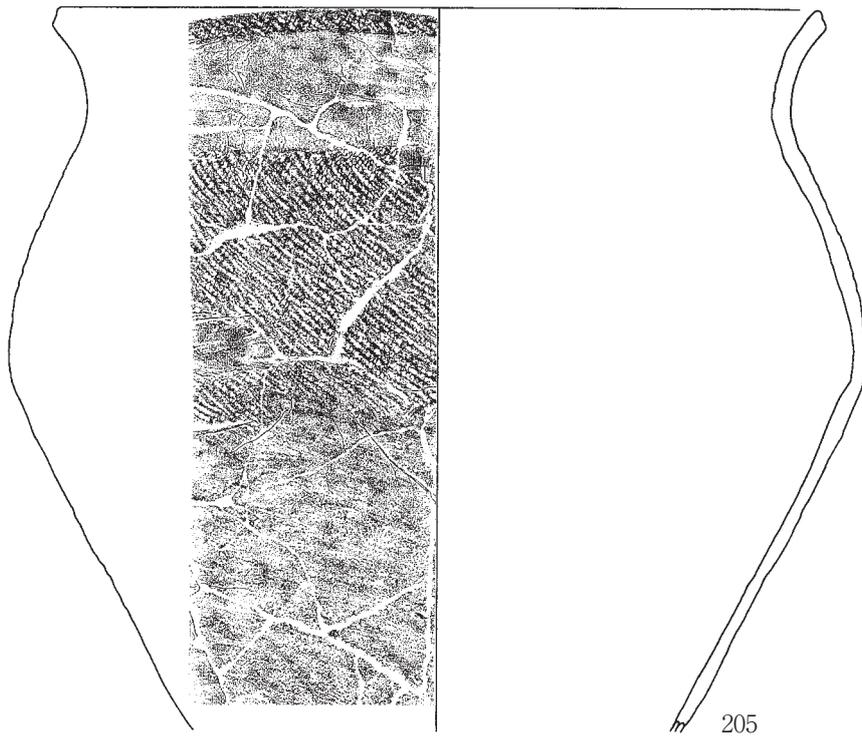


II-20図 包含層出土縄文土器(8)

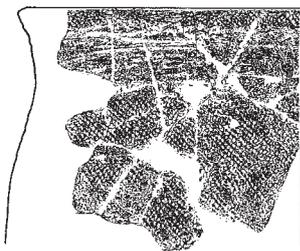
(M1区 : 189・190, M3区 : 179・180・183・185~188・191, M4区 : 192, Loc.47区 : 181・182・184)



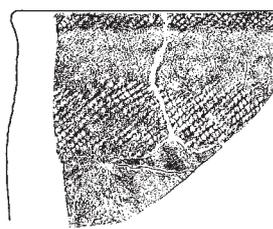
II-21図 包含層出土縄文土器(9)
(M1区：193～201, H2区：202～204)



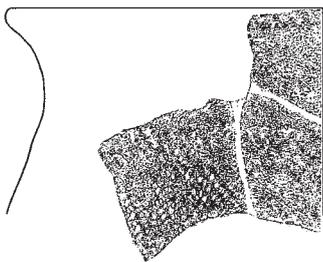
205



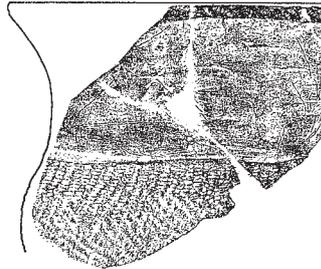
206



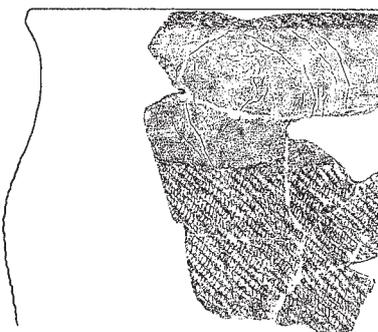
207



208



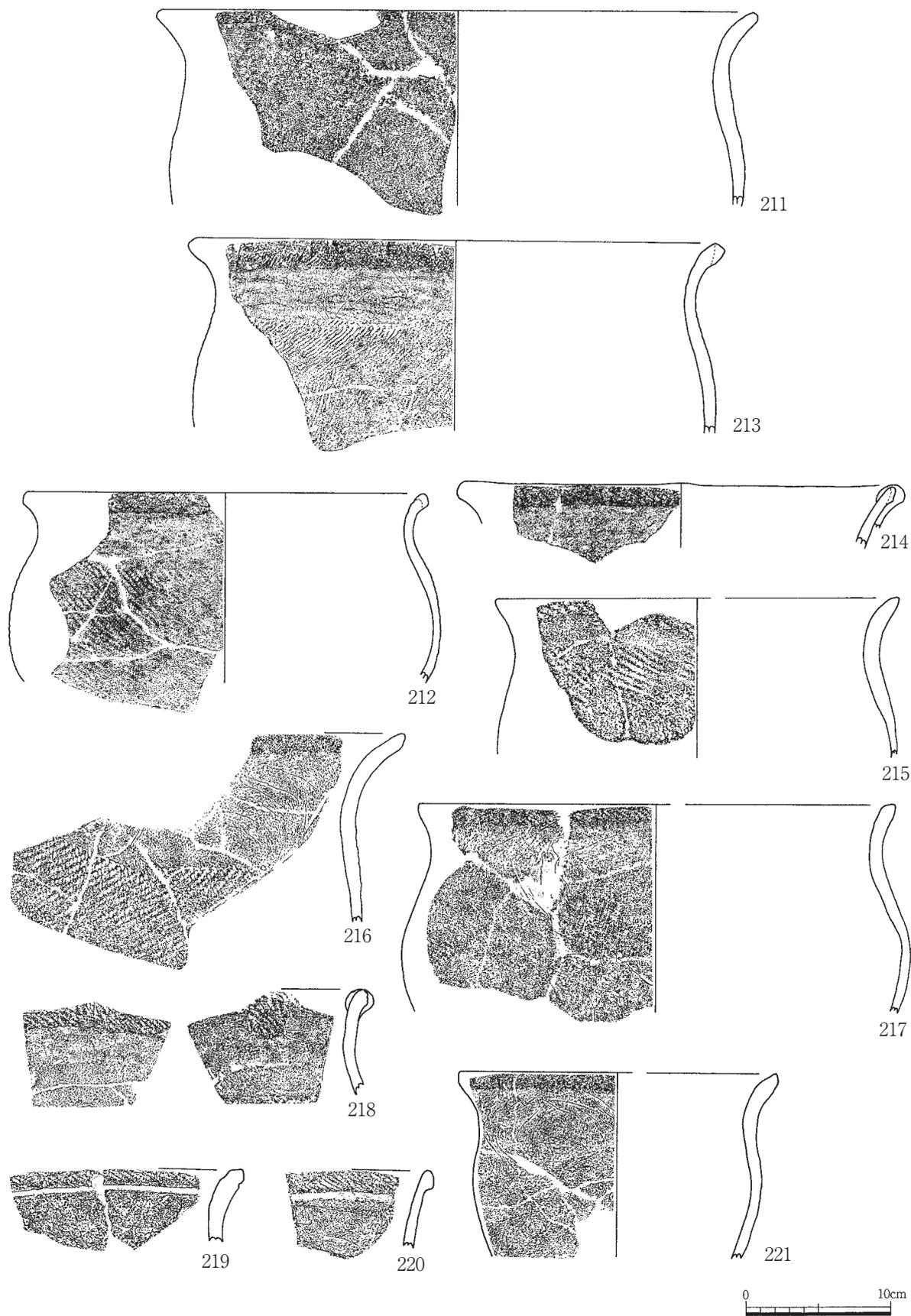
210



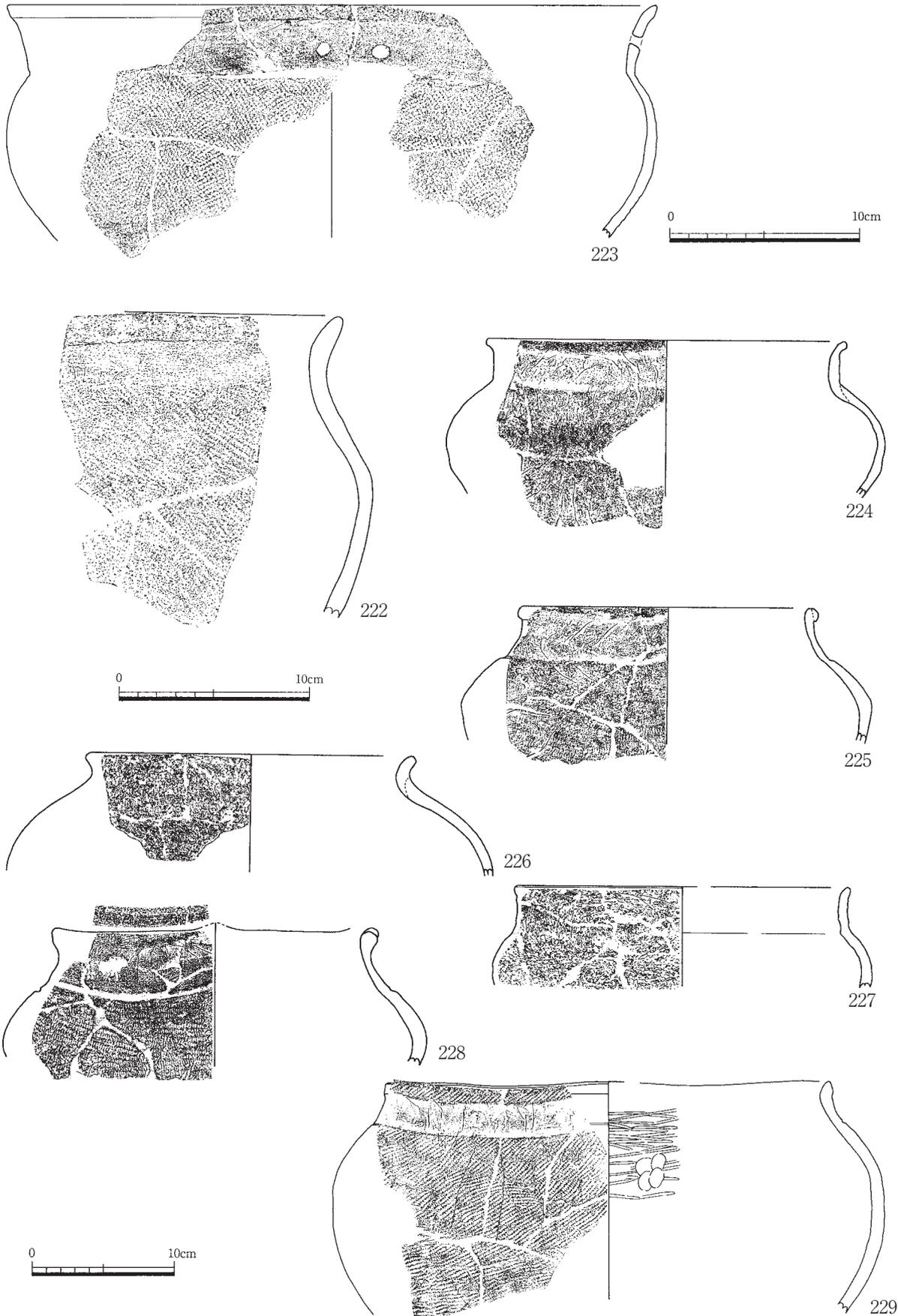
209



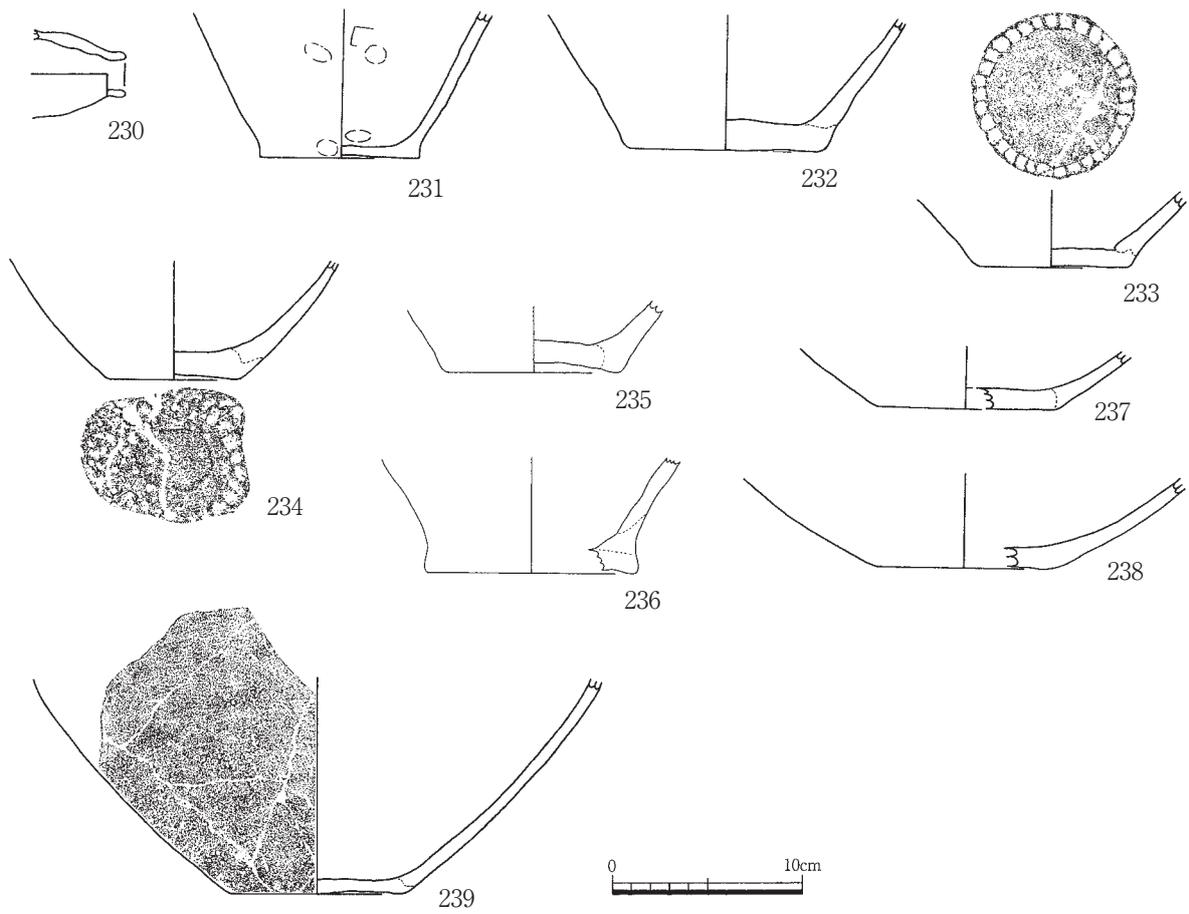
II-22図 包含層出土縄文土器(10)
(H1区：205~209)



II-23図 包含層出土縄文土器(11)
 (H1区：211, H2区：212・213, H4区：214~221)

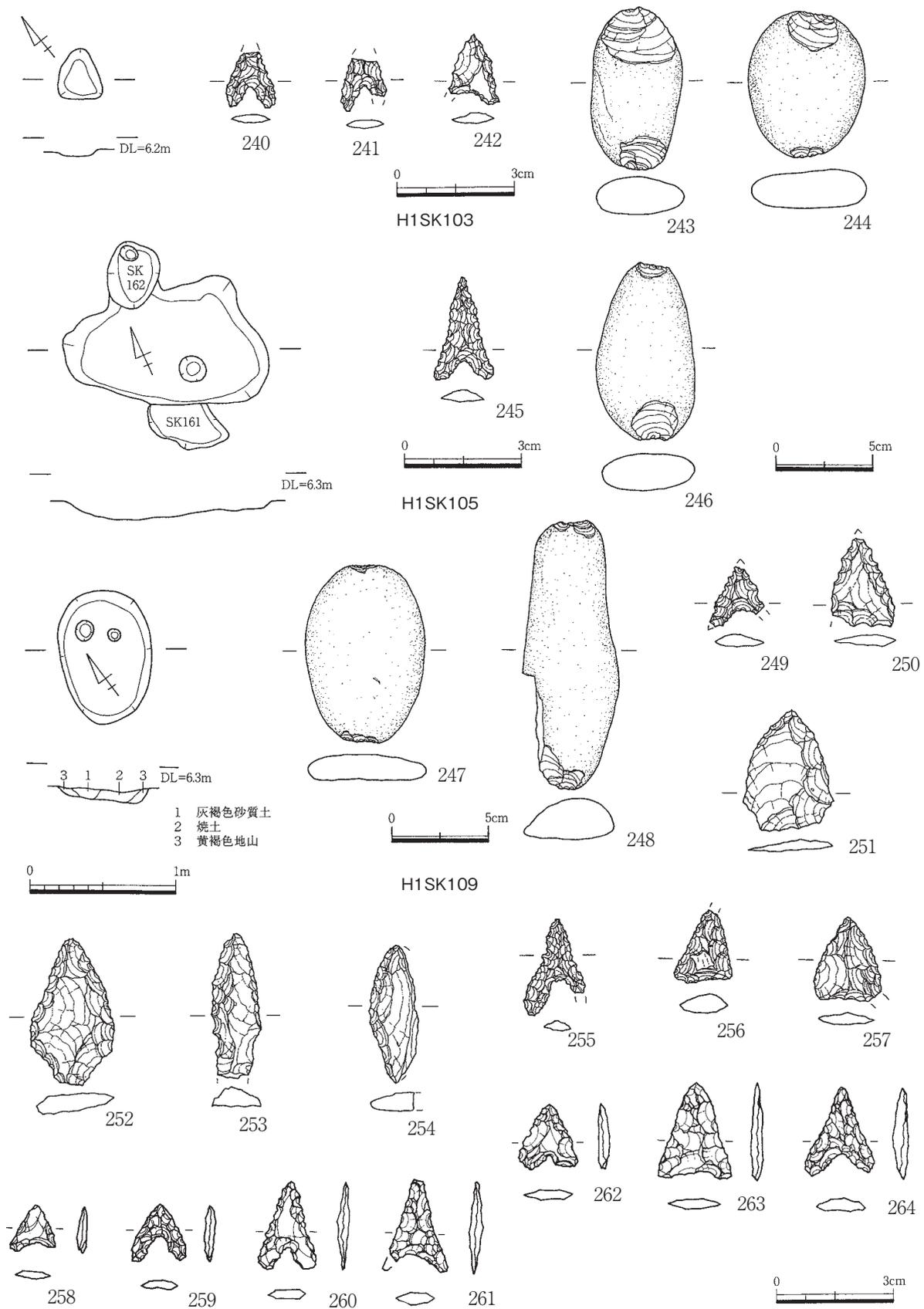


II-24図 包含層出土縄文土器(12)
 (H1区：224~226, H4区：227・228, M3区：222・223, C3区流路：229)

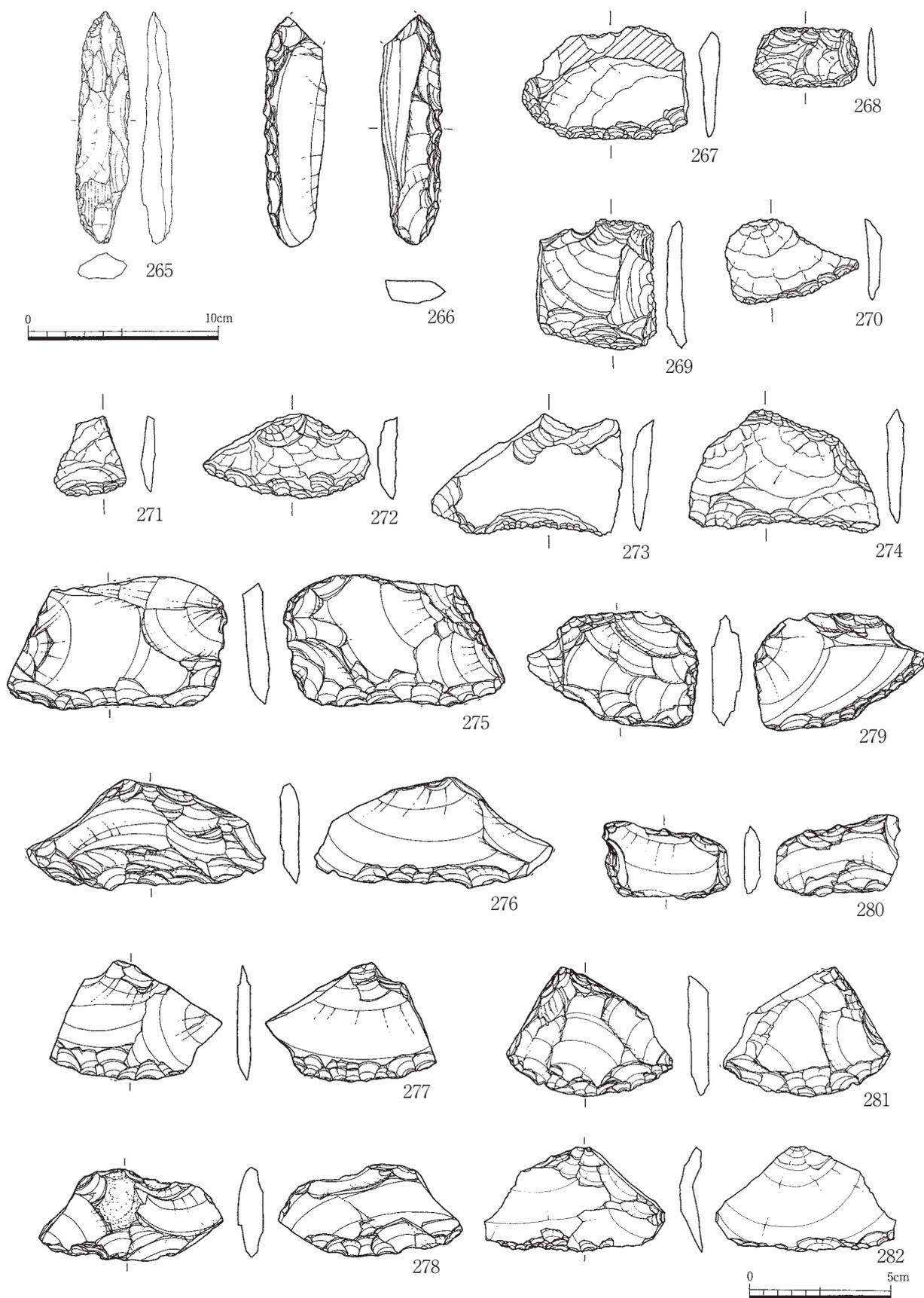


II-25図 包含層出土縄文土器(13)

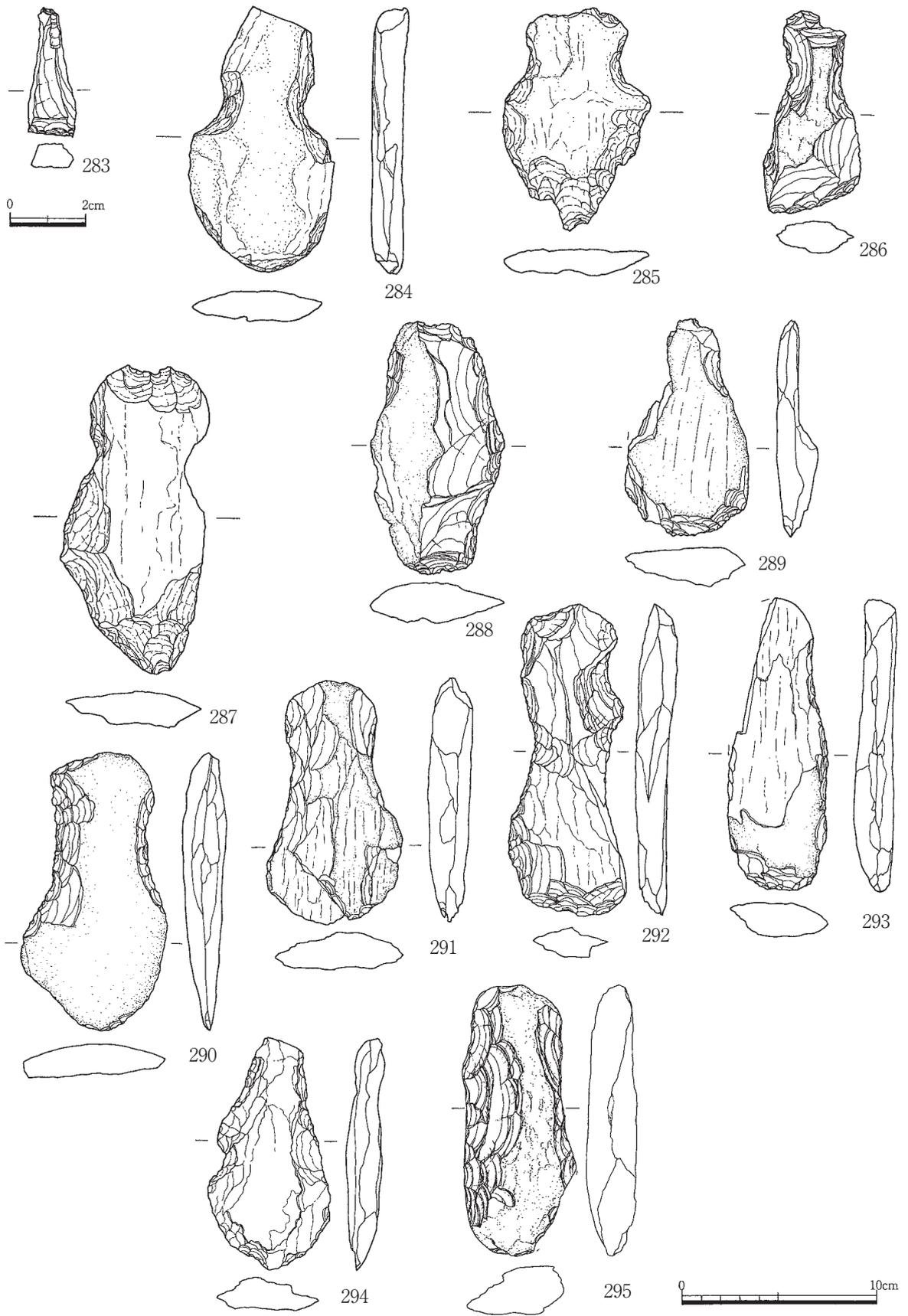
(H1区 : 232・234・238, H2区 : 231・233・237・239, H4区 : 230, M1区 : 236, M4区 : 235)



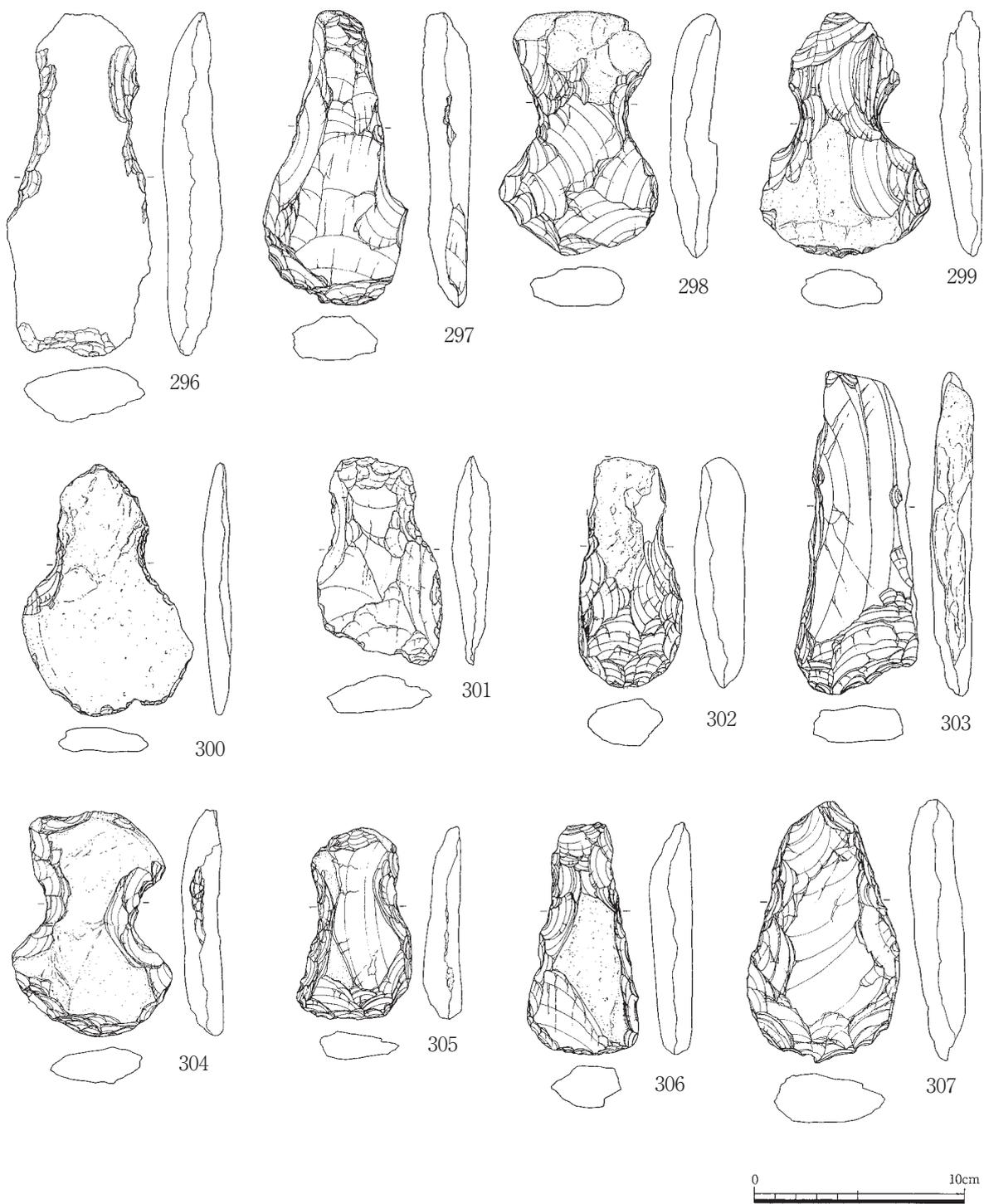
II-26图 土坑内、包含層出土石器
(H1区: 249~254, H2区: 255~257, H4区: 258·259, M1区: 260, M2区: 261, M4区: 262~264)



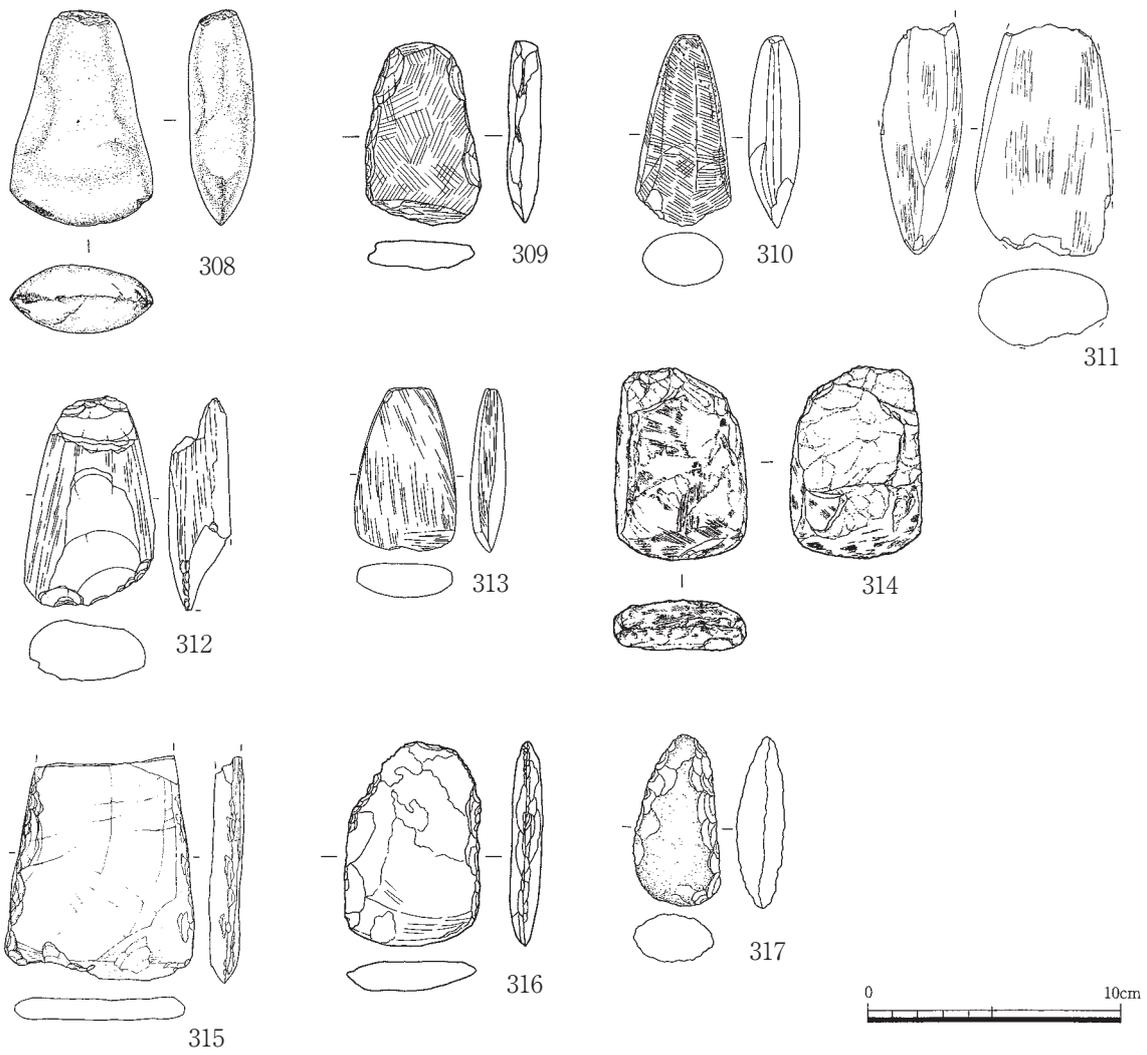
II-27図 包含層出土石器(1)
 (H1区：267～271, H2区：272～274, H4区：275～279, M2区：280, M3区：281・282)



II-28图 包含层出土石器(2)
 (H1区: 283~288, H2区: 289~293, H3区: 294, H4区: 295)

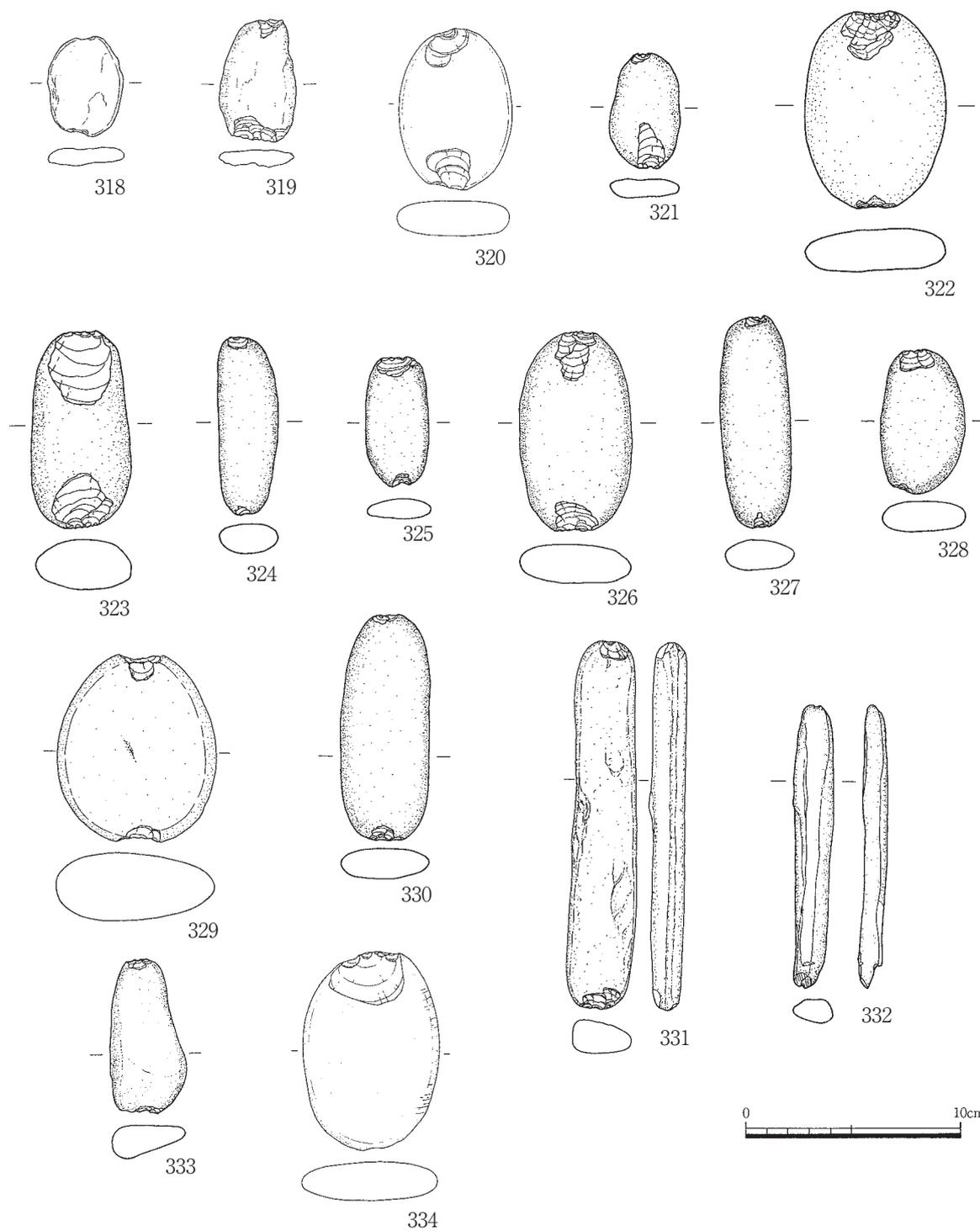


II-29図 包含層出土石器(3)
(M1区: 296, M1区SX101: 297, M3区: 298~303, M4区: 304~307)



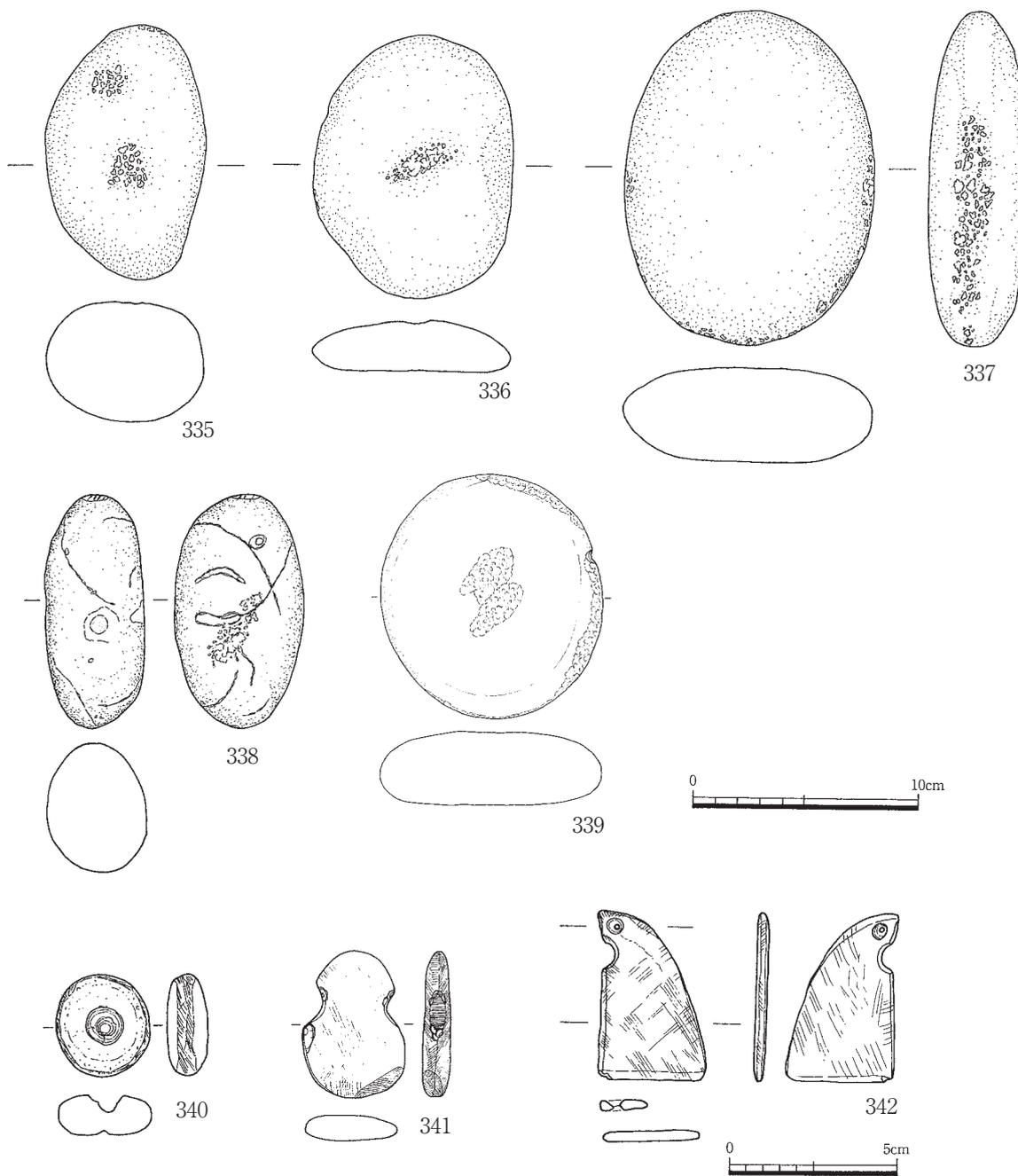
II-30图 包含层出土石器(4)

(H2区: 309, H3区: 316, H4区: 310·312·313·317, M2区: 311, M3区: 315, Loc.47区: 308·314)



II-31図 包含層出土石器(5)

(H1区 : 321~324, H2区 : 325・326, H3区 : 327, H4区 : 328~332, J3区 : 318~320, M3区 : 333・334)



II-32図 包含層出土石器(6)、石製品
 (H1区: 335~337, H4区: 338・340, M1区: 339, M3区: 341, D1SK1010: 342)

Ⅲ 弥生時代の遺構

今回の調査では、弥生時代の遺構は住居跡411軒、掘立柱建物跡240棟、土坑2800基、溝600条、流路14条、柱穴8000基等、極めて多くの遺構を検出している。時期的には弥生前期から後期前半にまたがるもので、弥生前期はⅠ2期から始まり、中期Ⅲ期は少なく、Ⅳ1、2期から後期初頭のⅤ1期にまたがり大規模集落となり、Ⅴ3期頃でほぼ終焉を迎える。

遺構の時期決定は『弥生土器の様式と編年 四国編』(出原恵三2000、木耳社)を編年基準としており、第1分冊から第8分冊に報告された時期をそのまま採用し、それに従う。しかしながら、中期末から後期初頭にかけては土器編年的には明確に区分できないものも多く、中後期として遺構の変遷時期を提示するしかないような状況である。中後期については、住居跡の切り合い関係も多く、少なく見積もっても4細分の可能性があるものの、土器様式変化が漸移的なために、明確な線引きは行わず、中後期として一括りにした。

細かな遺構の変遷までは追究できなかったため、主として資料の基礎的な集約、集成を行なった。住居跡については前田光雄、掘立柱建物跡及び土坑については坂本裕一が分担した。

1. 竪穴住居跡

竪穴住居跡は411軒検出している。古代の住居跡をN区で1軒検出しており、竪穴住居跡としては412軒になる。時期別の内訳は前期(Ⅰ期)27軒、中期(Ⅲ期)34軒、中後期(Ⅳ-Ⅴ期)275軒、後期(Ⅴ2期以降)33軒、時期不明42軒である。住居跡からの出土土器が極めて少ないものも多く、時期の大別は可能なものの、細別にまで至らないものが多い。また先に述べたように中期から後期にかけては土器様式変化が漸移的なために、住居跡変遷図では中期末Ⅳ期から後期初頭Ⅴ1期は中後期として一括した。そのため住居跡変遷図は大別で4葉作成した。

調査区別ではF、K、L区に際立った集中が認められ、煩雑なほどの切り合い関係、拡張が認められる。大溝2、大溝4・5に挟まれるような形で展開する。大溝4の西側に沿うようにD、E区にも集中が認められる。それ以外にはI、J区では住居間隔が拡がりをもって展開する一群のものが存在する。東側の流路1と大溝1に挟まれた区間でも僅かではあるが住居跡が展開している。

時期(前期)	軒数	時期(中期)	軒数	時期(中後期)	軒数	時期(後期)	軒数	時期	軒数
Ⅰ(細分不明)	3	Ⅱ-	3	Ⅳ(細分不明)	47	Ⅴ-2	6	弥生不明	42
Ⅰ-2	3	Ⅲ(細分不明)	14	Ⅳ-1	1	Ⅴ-2~3	5	古代	1
Ⅰ-2~3	2	Ⅲ-1~2	3	Ⅳ-1~2	10	Ⅴ-3	16		
Ⅰ-3	13	Ⅲ-2	1	Ⅳ-2	29	Ⅴ-3~4	2		
Ⅰ-4	2	Ⅲ-2~3	1	Ⅳ-2~Ⅴ-1	23	Ⅴ-3~5	2		
Ⅰ-4~5	1	Ⅲ-3	1	Ⅳ-2~Ⅴ-2	1	Ⅴ-4	1		
Ⅰ-5	3	Ⅲ-4	1	Ⅳ~Ⅴ	55	Ⅵ	1		
		Ⅲ~Ⅳ	5	Ⅳ~Ⅴ-3~4	1				
		Ⅲ~Ⅳ-1	3	Ⅴ(細分不明)	52				
		Ⅲ~Ⅳ-2	2	Ⅴ-1	35				
				Ⅴ-1~2	19				
				Ⅴ-1~3	2				
計	27		34		275		33		43

表Ⅲ-1 時期別住居跡軒数

(1) 前期の住居跡

27軒の住居跡を検出している。細別の内訳はI 2期3軒、I 2～3期2軒、I 3期13軒、I 4期2軒、I 4～5期1軒、I 5期3軒である。細別の不明なものが3軒である。

I 2期の住居跡はC2区に2軒とF3区に1軒認められる。C2ST201は松菊里型のものである。C2ST202

は方形のもので、2軒が対になっていた可能性がある。

I 3期はA10区に2軒、F区に集中が認められ、10軒検出している。近接して立地しているところから更に細分が可能かもしれない。円形または隅丸の住居跡で占められており、F4ST415、421の大型住居跡を中心として、周りに中型、小型の住居跡が取り巻くような形で展開する。

I 4期は前期溝1、2に挟まれた地点で2軒を検出している。共に長方形のものである。

I 5期はF4ST420、調査区の北西部I4ST409、420が含まれる。平面形は円形とならず、楕円、長方形のものである。

I 期に該当するもののN区に1軒飛び地にN1ST105が存在している。細別は不明である。小型の円形住居跡で松菊里型のものである。またII期の可能性のあるものがD区に存在するものの、他の時期の遺物も入っており、断言はできない。

I 期に該当する住居跡は30軒と考えられるものの、細分を行なうとI 3期がやや多いものの、他の時期は1時期せいぜい2軒程度のものであり、環濠内(前期溝1～4)の土坑の多さに比して、その絶対数は少ないと言える。

(2) 中期の住居跡

Ⅲ期を中心とした住居跡群である。総数で34軒を検出している。細分は困難でD1区でⅢ1～2期のものがまとまっているのが判明している程度である。住居跡の集中地点は大きく2ヶ所認められ、調査区中央北側部分のD、E区に6軒、K、L区に13軒まとまっている。その他の調査区では散在的に1、2軒を検出するにとどまっている。K、L区では住居跡は環状を呈し、中央部に大型の掘立柱建物(L2SB201、203、204、L3SB318、319)が配置している。L区の南側では中期の住居跡3軒が切り合っており、単純に一時期の景観を顕したものではなさそうである。調査区北側部分のD、E区の集中個所から溝群を挟んで東側にE5SB501、502の大型掘立柱建物跡が2棟検出されており、環状は呈さないものの、該期の集落は大型掘立柱建物跡とセットになっているようである。尚、F、B区にも該期の住居跡が散在しており、F4SB429の大型掘立柱建物跡が離れて存在しているものの、明確な遺物は出土しておらず時期は中期末から後期初頭としている。中期住居跡の形態は中型の円形住居跡が多く、7mを超える大型のものは4軒を数える。小型のものは方形、または長方形で2軒検出しているが、内1軒はJ5ST501が飛び地に位置している。

	前期	中期	中後期	後期	計
円形	15	26	209	24	274
楕円形	6	3	15	2	26
方形	5	2	34	5	46
長方形	1	1	17	2	21
計	27	32	275	33	367

表Ⅲ-2 時期別平面形別住居跡軒数

	～9㎡	10～39㎡	40～59㎡	60㎡～
前期	6	13	4	0
中期	5	27	1	1
中後期	44	175	28	12
後期	4	23	5	0

表Ⅲ-3 時期別規模別住居跡軒数



Ⅲ-1図 前期の住居跡配置図



Ⅲ-2図 中期の住居跡配置図

(3) 中後期の住居跡

本期の住居跡は275軒である。時期幅を広く設定しているところから軒数も多くなっている。また時期不明とした住居跡42軒の大部分が該期に含まれる可能性が強く、おそらく本期は300軒程度の大規模集落になる。

土器様式ではⅣからⅤ様式に相当し、土器変化が漸移的なために細かな細分は困難なために大きく時期区分をせざるを得なかった。Ⅳ期でも細分不可能なもの、Ⅳ2からⅤ1期にかけてのもの、Ⅴ1期に相当するものを該期に含めた。Ⅴ2期は後期として別途時期区分を行なっている。住居の切り合い、拡張からして少なく見積もっても4細分以上が可能であるものの、住居の継続期間を考慮すると土器様式を基準とした杓子定規な住居跡の変遷は極めて困難である。しかし、とりあえず中後期を大きく3期に分けてみた。Ⅳ様式を保有する住居群、Ⅳ～Ⅴ様式の過渡期の住居跡群、Ⅴ様式前半の住居跡群に時期区分した。しかし、それぞれの小期の中でも住居跡の切り合い関係、近接するために同時併存は無理な住居跡群も有り、全体で5～6期程に分かれる可能性がある。

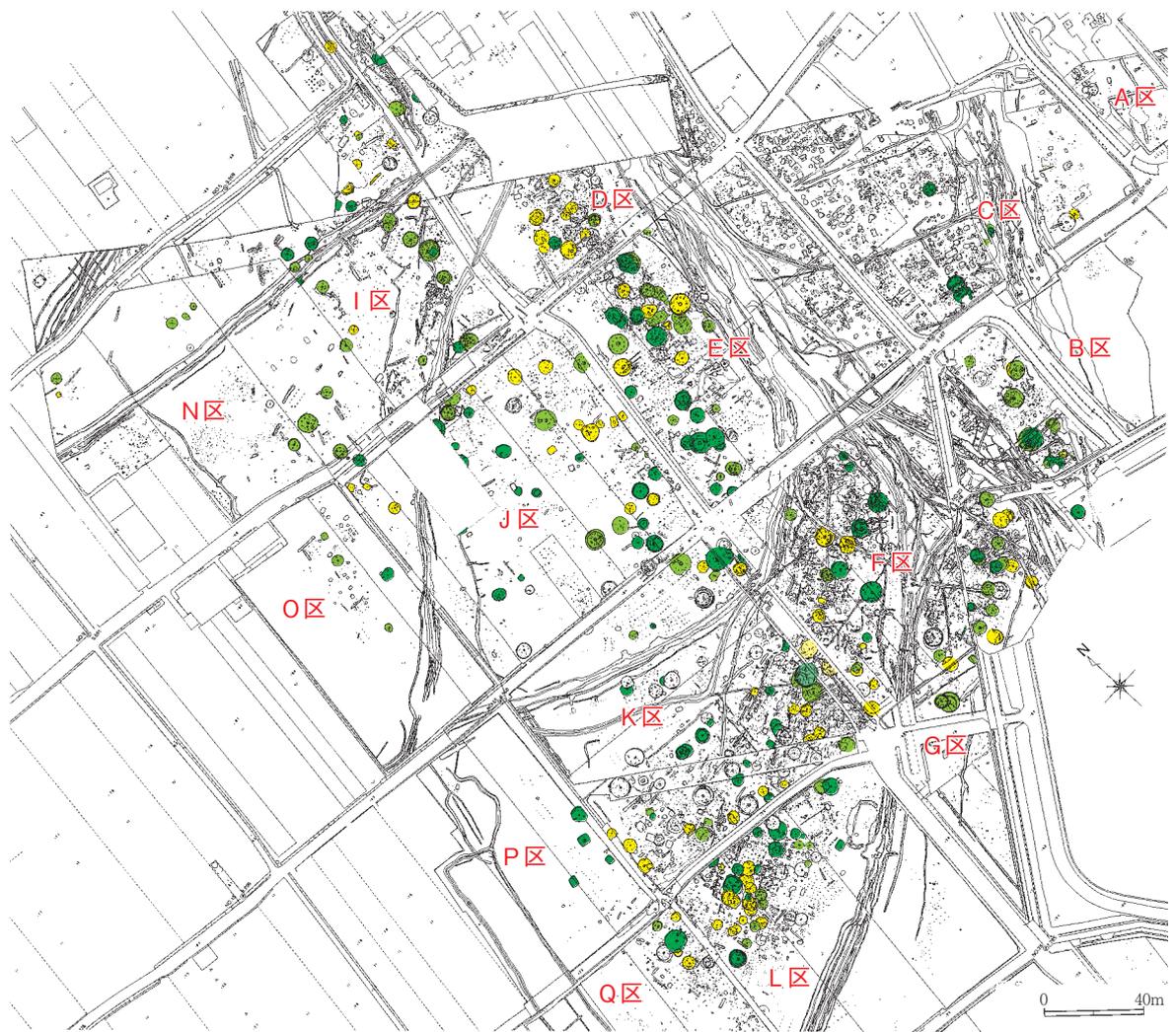
住居跡群は大きく分けて、4群に括することができる。大溝6から北西方向の調査区I、N、O区に展開する住居跡群(1群)、大溝6と大溝4に挟まれたD、E、J区の住居跡群(2群)、大溝4と大溝2に挟まれたF、K、L区の住居跡群(3群)、その東側にやや数が少ないB区に展開する群(4群)である。

それぞれの群の特徴は、1群は散在的に展開し、住居跡同士の切り合い関係が少なく、中型の円形住居跡が多く、中後期の当初から散在的に住居跡が配置しており、中段階の時期に2軒から3軒程度の纏まりを呈するようになるようである。またそれに付随するように溝状土坑と対になった掘立柱建物跡が検出されているのが特徴的である。

2群は大溝5に沿うような形で弓なりに展開する。更にその中でも住居跡群の集中が5ヶ所ほど認められる。Ⅳ期の段階では北側部D区に集中が認められ、短期の内に建て替えが考えられ、切り合い関係が多く認められる。E区ではⅣからⅤ期に多くの切り合い関係が認められている。2ヶ所の集中部分以外にも幾つかの小さな纏まりを持っている。小型、中型、大型の円形の住居跡がそれぞれ認められ、特に大型の住居跡が目立ってくるようである。大型の住居跡については、同一地点で同心円的に2、3回拡張するもの、やや位置をずらしながら建て替えるものがあり、煩雑な切り合い関係を呈するようによく見える。1群の住居跡で認められたような溝状土坑と掘立柱建物跡のセットになるものは少なく、小型の掘立柱建物跡が住居跡群の空間に多い。

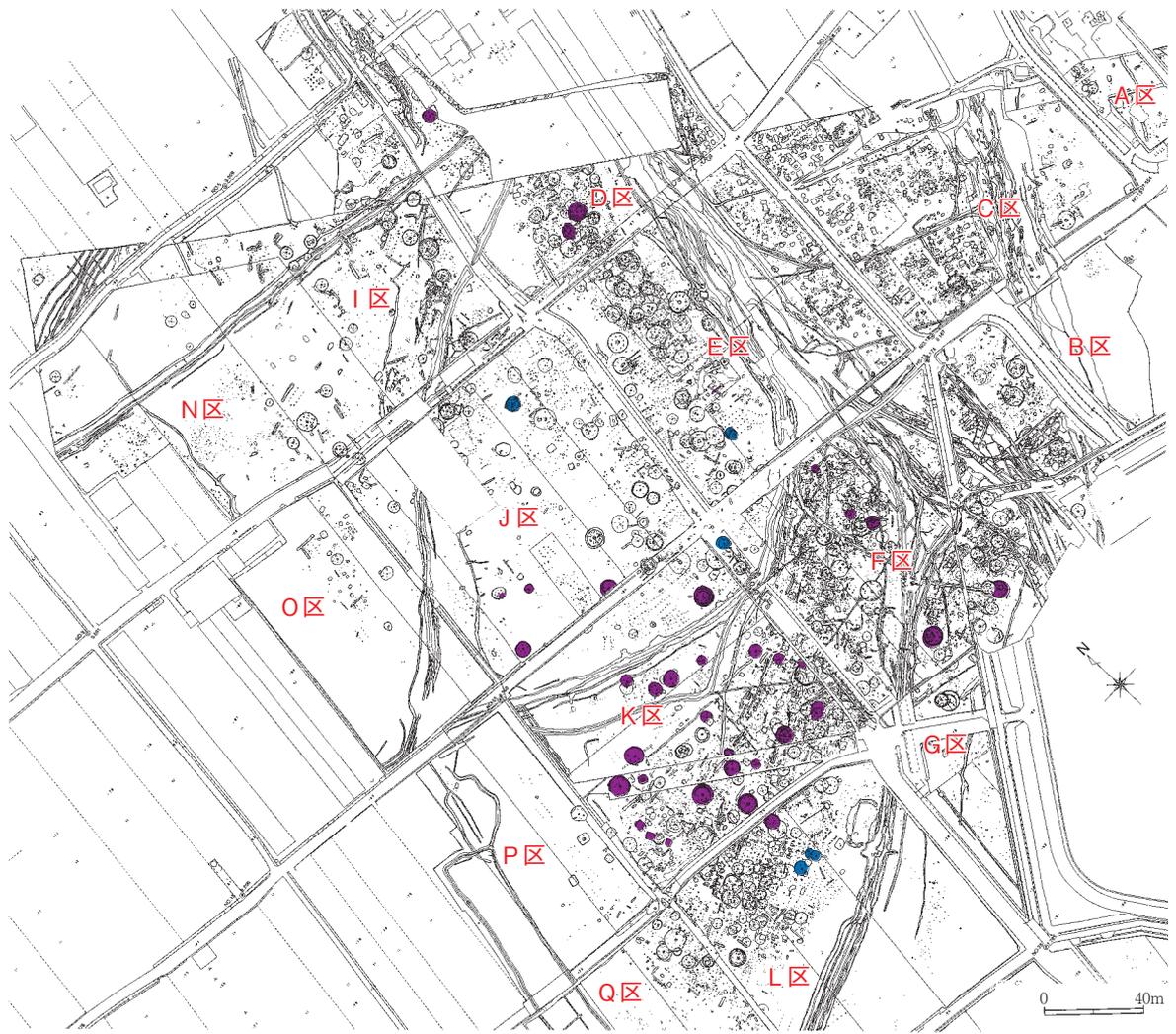
3群は大溝2に沿うように長く展開する。特にL区に集中が認められる。Ⅳ期の住居跡がL区に重複して認められ、その後もⅤ1期まで建て替え、拡張を繰り返している。Ⅳ期の住居跡は円形で小型から中型のものが多く、Ⅴ1期になると大型の住居跡が目立つようになる。小型の長方形の住居跡もやや多くなる。掘立柱建物跡は溝状土坑を伴うものと伴わない両者のものが認められるようである。

4群はB、C区にわずかに纏まりが認められる。B区ではⅣ期の住居跡2軒が共に建て替えを行なっており、C区でもⅤ1期の住居跡が短期間の内に建て替えを行なっているようである。自然流路上に住居跡が構築されており、該期の段階には自然流路は埋没過程にあったようである。



- VI期
- VI~V期
- V 1期

Ⅲ-3図 中後期の住居跡配置図



Ⅲ-4図 後期の住居跡配置図

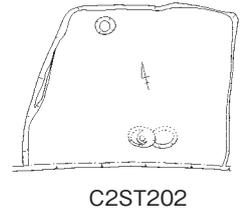
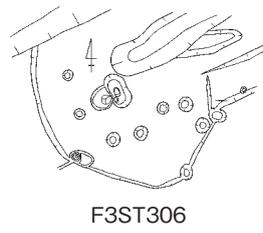
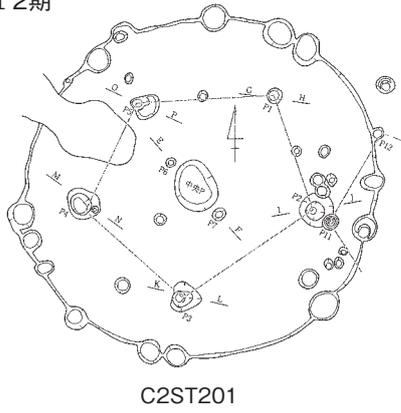
(4) 後期の住居跡

後期はV2～5期の時期のものである。中心はV2～3期である。V4期以降の住居跡はわずか5軒程度である。またVI期のものがわずか1軒検出している。

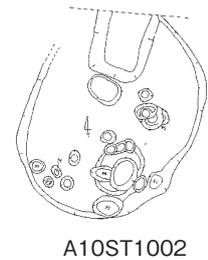
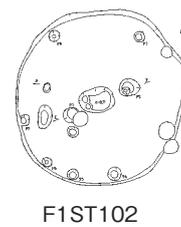
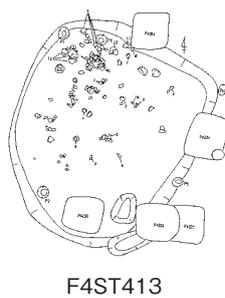
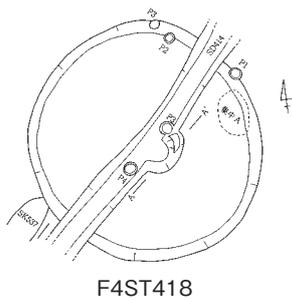
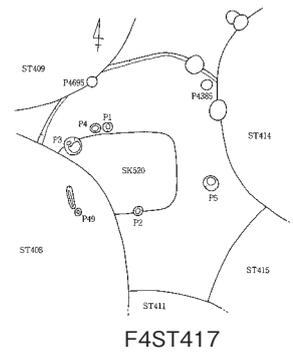
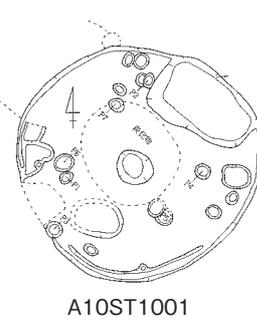
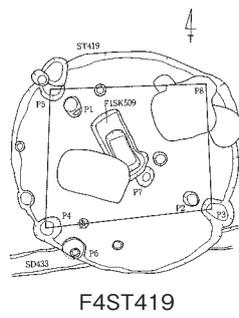
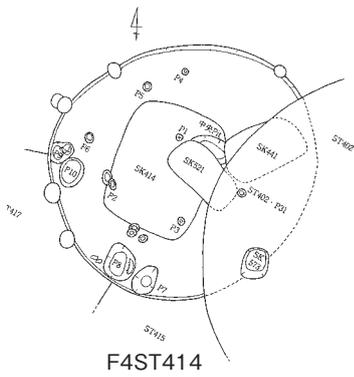
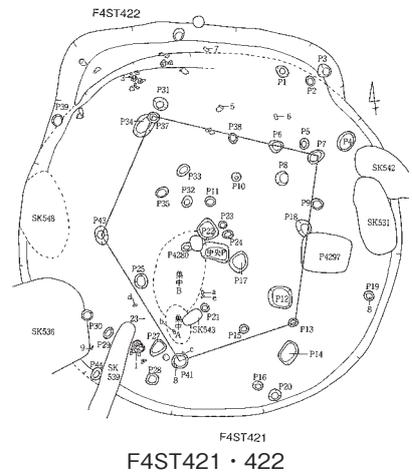
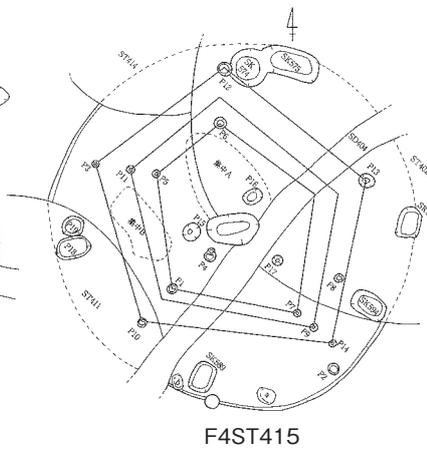
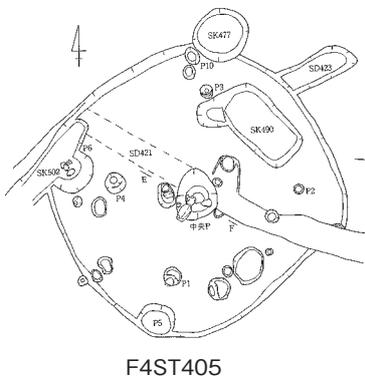
土器様式の過渡的なものも含まれるが、V2期(V3期の過渡的なものを含む)、V3期、V3期以降(V3～5期)、及びVI期の4細分を行なった。中後期の大規模集落から一転して解体、衰退の時期と捉えることができる。

V2期では調査区南側にややまとまりが認められる。大型住居跡が点在し、長方形の小型の小竪穴状遺構のような住居跡が半数ほど占めている。V3期は同規模程度の住居跡が対になるパターンが多い。小規模の長方形住居跡も残存する。V3期以降はわずか5軒のみとなる。更にL区のものも切り合い関係が認められることから、4軒と極めて少なく、長方形の住居跡等はなくなる。VI期については1軒のみを検出したにとどまり、中後期からの継続性は途絶えている。

I 2期

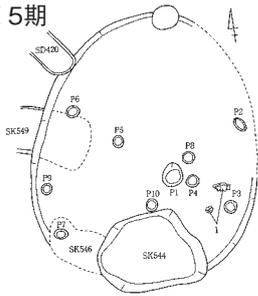


I 3期

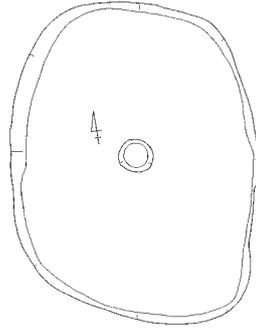


Ⅲ-5図 住居跡集成図(1) S=1/80

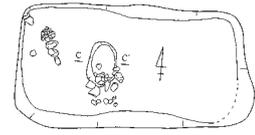
I 5期



F4ST420

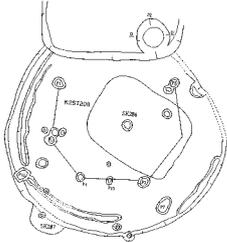


I4ST409

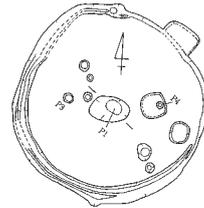


I4ST420

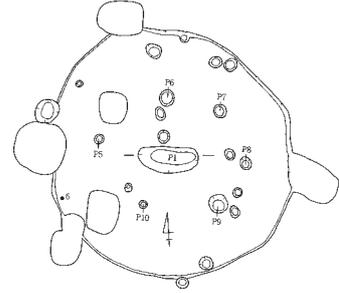
II 2期



K2ST208

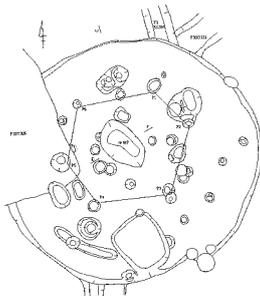


D1ST102

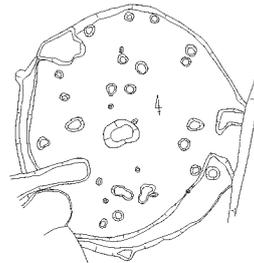


D1ST104

III 3期

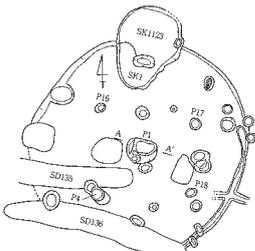


F3ST303

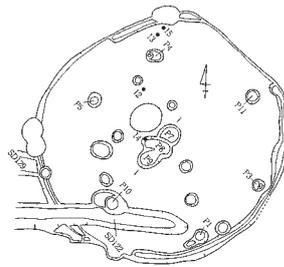


K1ST126

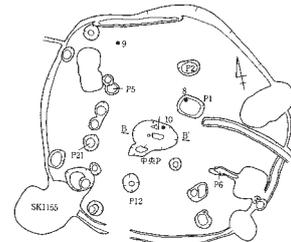
IV 1~2期



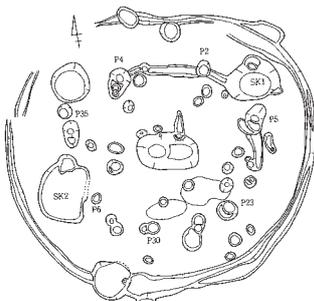
D1ST114



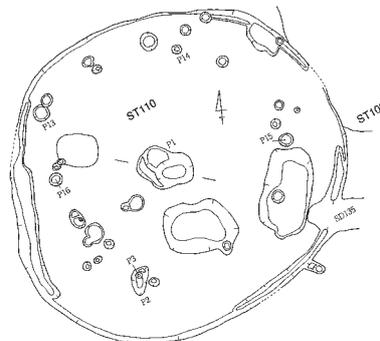
D1ST103



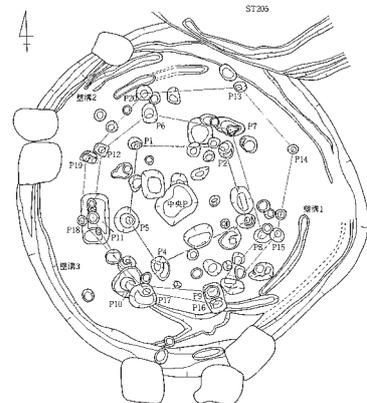
D1ST106



D1ST119



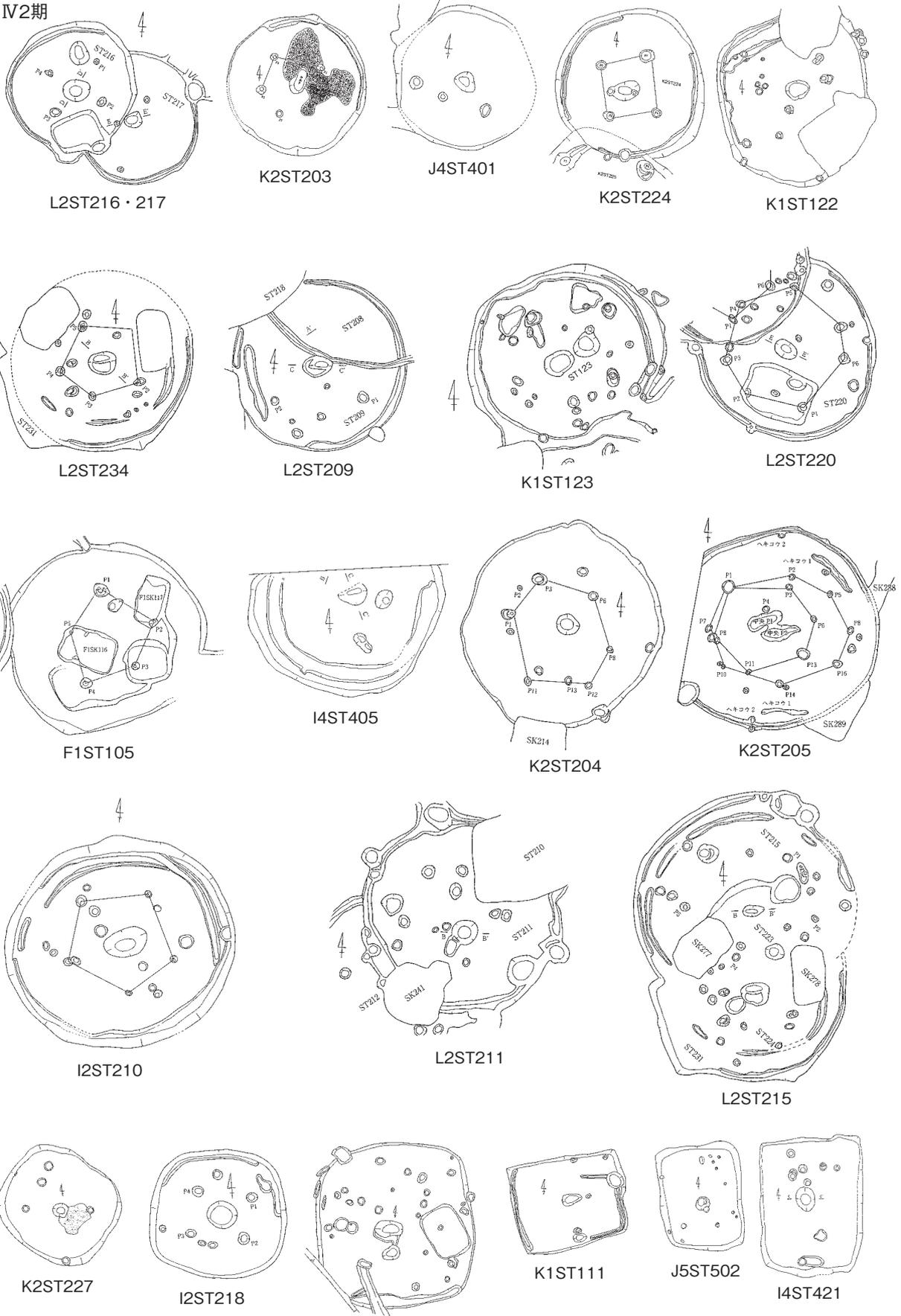
D1ST110



F4ST410

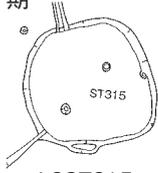
III-6図 住居跡集成図(2) S=1/80

IV2期

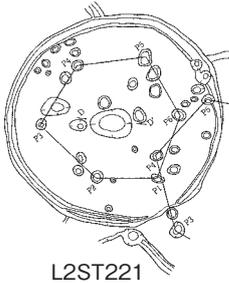


Ⅲ-7図 住居跡集成図(3) S=1/80

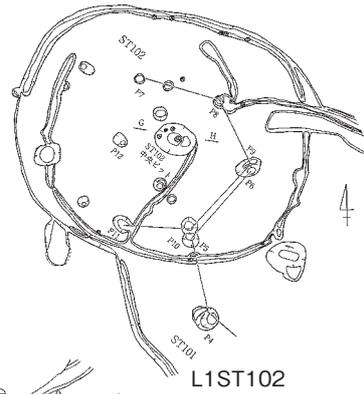
IV2~VI期



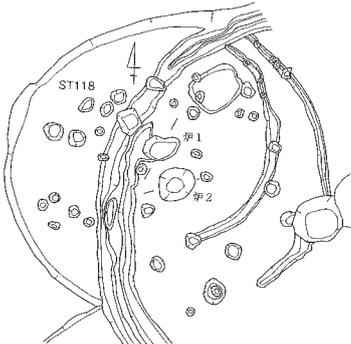
L3ST315



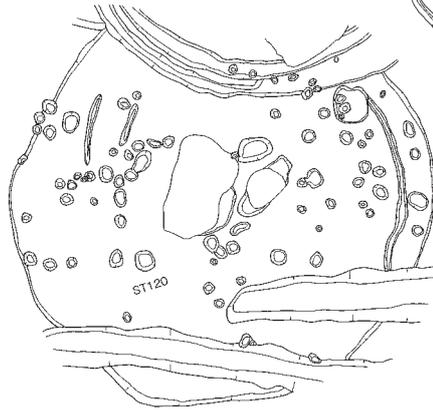
L2ST221



L1ST102

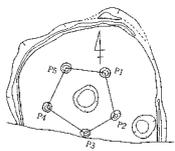


K1ST118

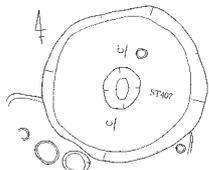


K1ST120

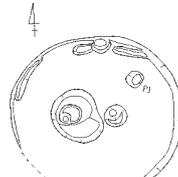
V1期



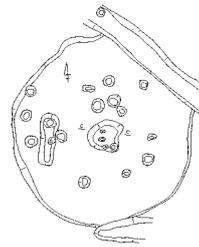
I2ST206



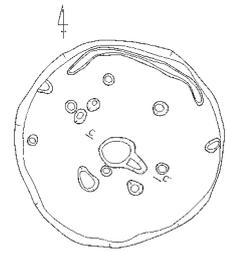
I4ST407



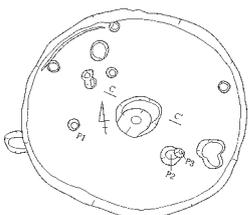
J1ST106



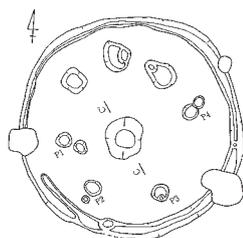
K1ST117



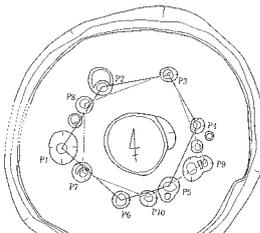
J4ST403



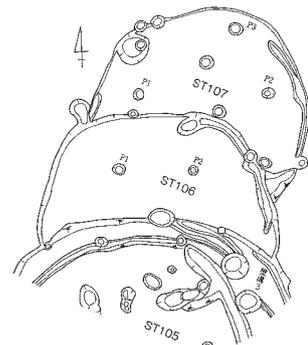
I4ST404



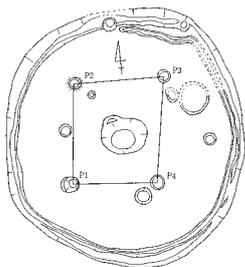
L2ST205



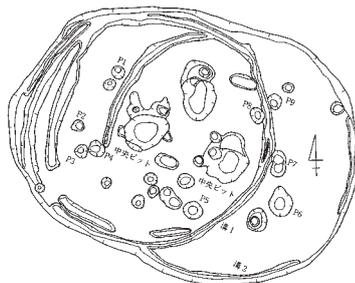
I2ST203



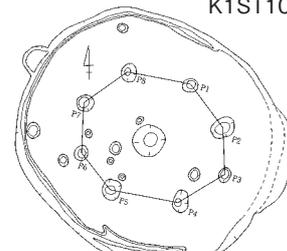
K1ST106·107



I2ST202



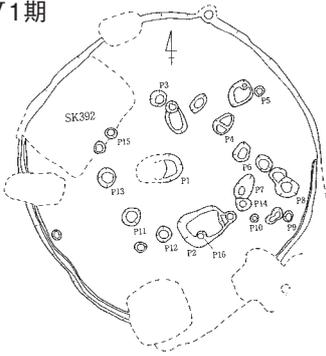
K1ST102



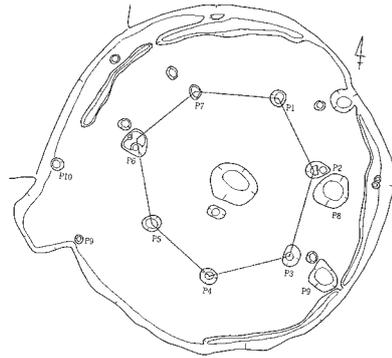
J4ST418

Ⅲ-8図 住居跡集成図(4) S=1/80

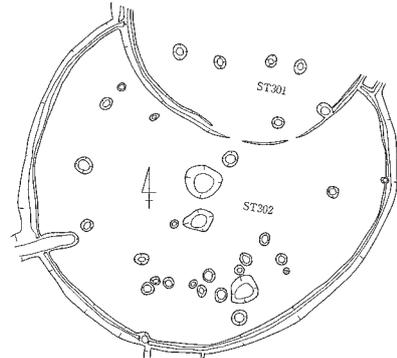
V1期



L3ST304

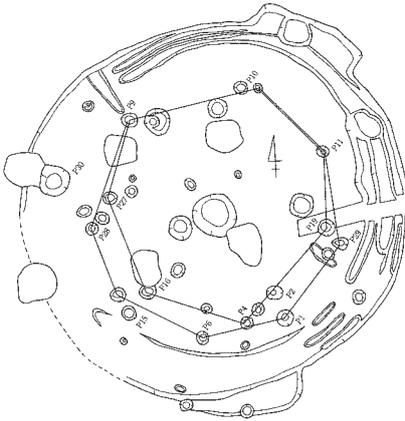


F2ST202

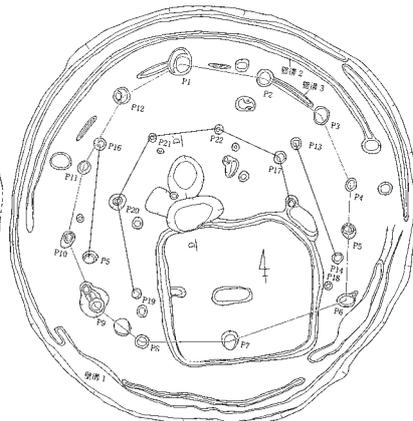


L3ST302

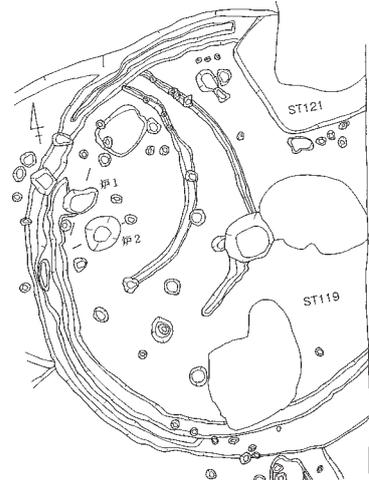
V1期



L2ST201



I2ST214



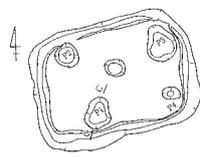
K1ST119



L2ST210



K1ST114・115



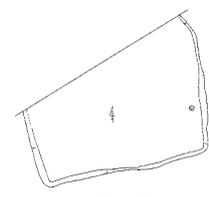
L2ST207



K1ST109

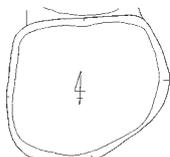


K1ST104

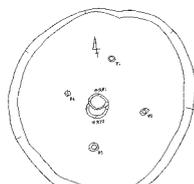


I4ST403

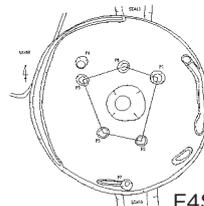
V1~2期



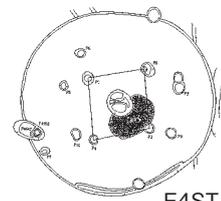
J4ST405



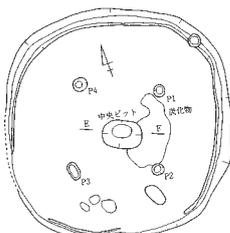
F3ST302



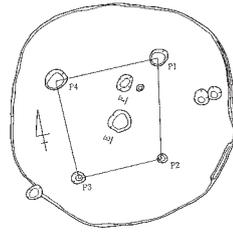
F4ST403



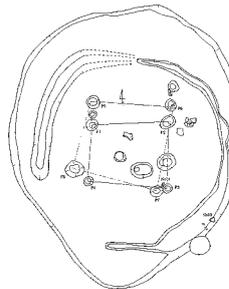
F4ST404



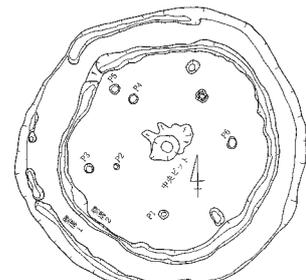
E4ST406



E4ST418



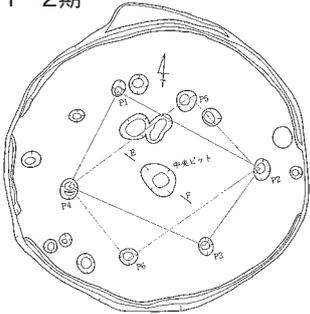
E4ST402



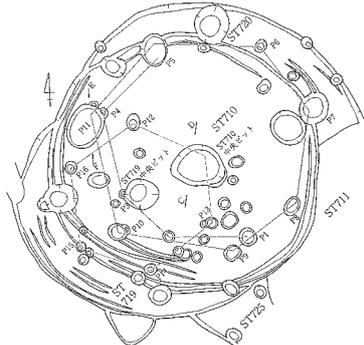
K1ST108

Ⅲ-9図 住居跡集成図(5) S=1/80

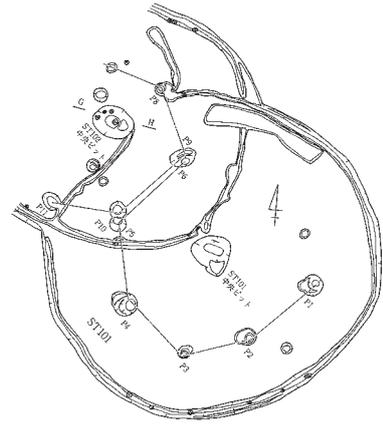
V1~2期



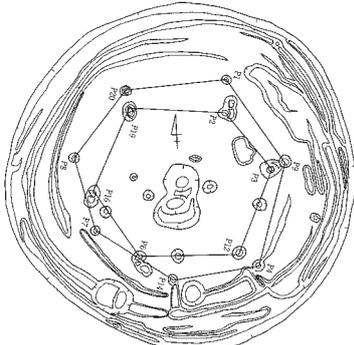
E4ST410



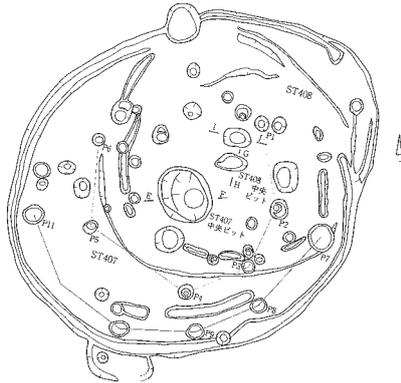
E7ST710



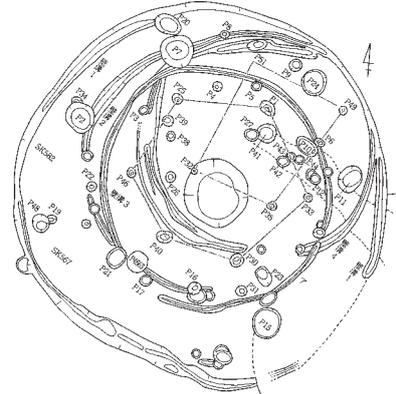
L1ST101



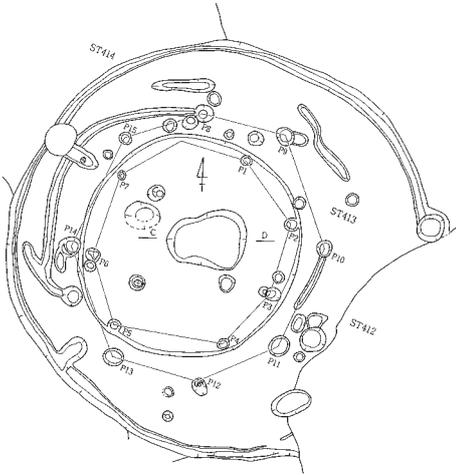
L2ST214



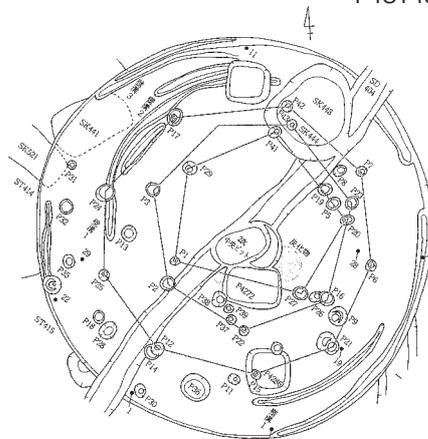
E4ST407



F4ST408

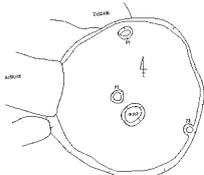


E4ST413

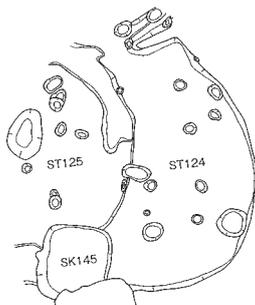


F4ST402

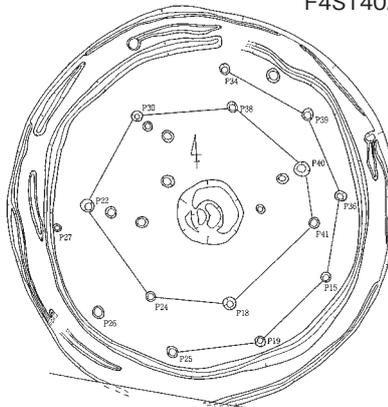
V2期



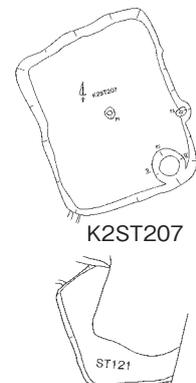
E1ST101



K1ST124



K2ST222



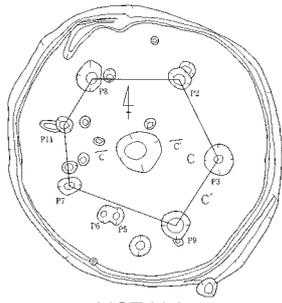
K2ST207

K1ST121

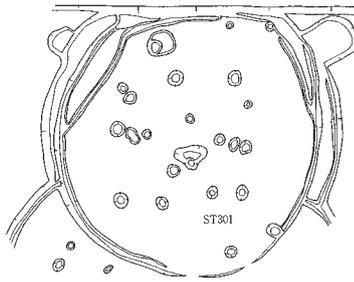
Ⅲ-10図 住居跡集成図(6)

S=1/80

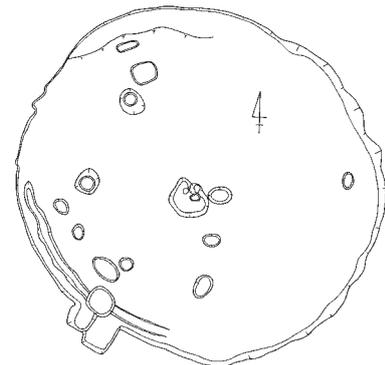
V2~3期



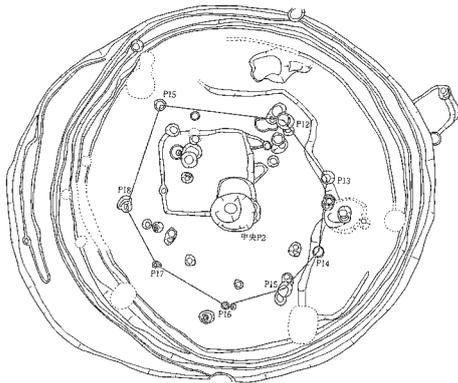
J4ST414



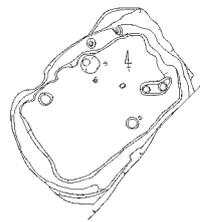
L3ST301



K1ST101

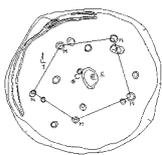


F4ST427

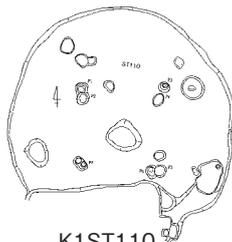


K1ST103

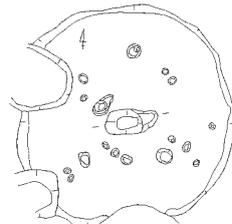
V3期



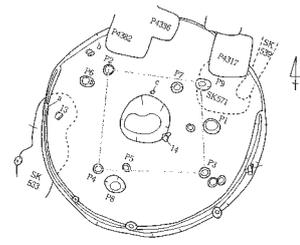
J4ST419



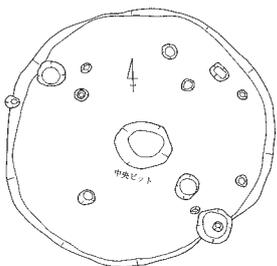
K1ST110



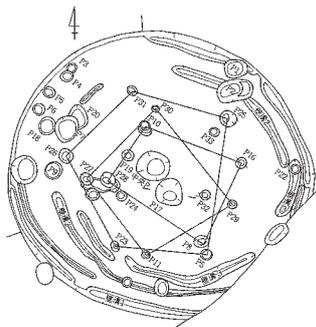
K1ST116



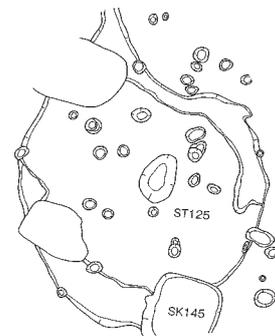
F4ST409



K1ST112



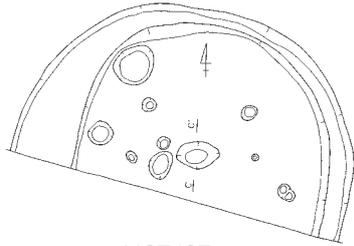
F4ST411



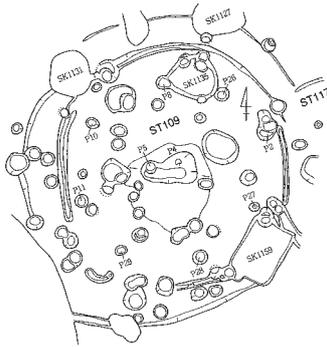
K1ST125

Ⅲ-11図 住居跡集成図(7) S=1/80

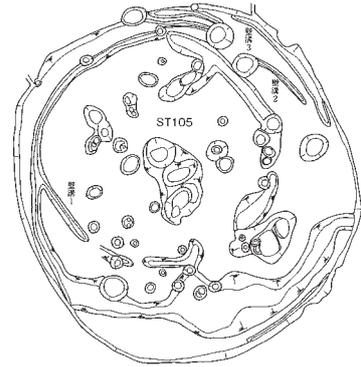
V3期



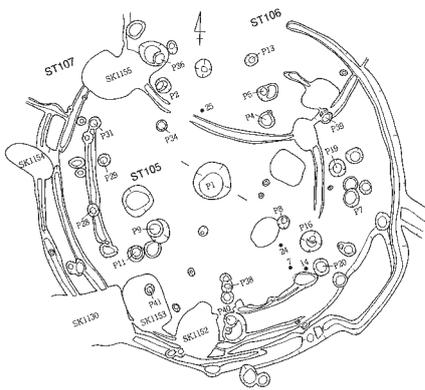
J4ST407



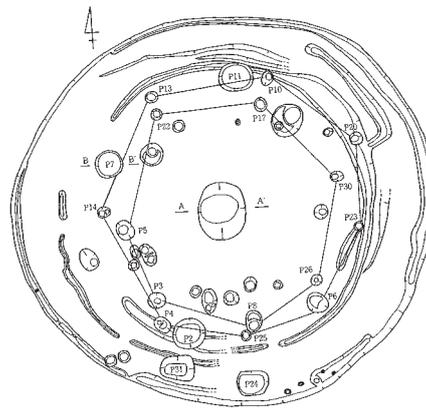
D1ST109



K1ST105



D1ST105



K2ST220



J4ST409

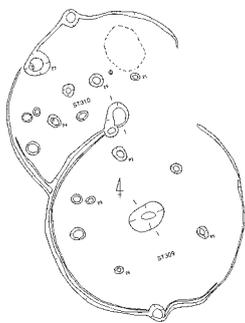


K2ST209

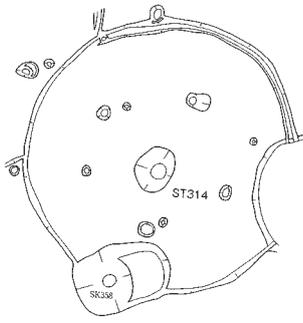


K2ST206

V3~4期

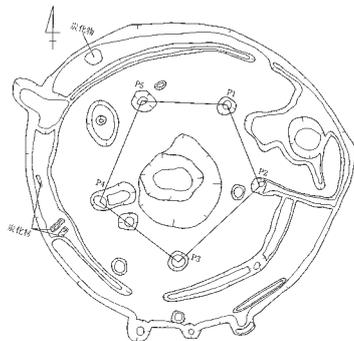


L3ST309・310



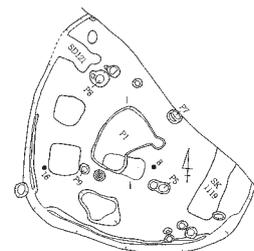
L3ST314

V4期



J1ST102

VI期



D1ST101

Ⅲ-12図 住居跡集成図(8) S=1/80

2. 掘立柱建物跡

今回の調査で確認した弥生時代の掘立柱建物跡は 278 棟である。

後世の削平を受けて検出面が耕作土直下で基盤礫層となる調査区もあり、確認し切れていないものもあると考えられ、本来の掘立柱建物跡の棟数は 300 棟を超えると思われる。ほとんどの調査区で確認しており、特に大溝2の西側のE、F、I、J、K、L区に集中する。また、集中する区域は調査範囲の北部、中部、南部にあり、全体的に竪穴住居跡と同じく集落を区画する大溝に沿って弧状に配置している。

いずれの掘立柱建物跡も柱穴からの遺物の出土は少なく、ある程度時期を確定できたものは 204 棟である。埋土の特徴などから弥生時代の掘立柱建物跡と考えられるが、詳細な時期を確定できないものも大半は中後期のものであると考えられる。掘立柱建物跡配置図(Ⅲ-13・14図)には、ある程度時期を確定できたものだけを掲載している。

前期の掘立柱建物跡は確認しておらず、中期の掘立柱建物跡は前期環濠内のC・E区と調査区中部のJ4-2区、調査区南部のL区で 14 棟を確認しているのみである。集落の最盛期である中後期の掘立柱建物跡は 200 棟を確認し、大半が大溝2の西側に展開する。後期と確認できたものはないが、中後期の掘立柱建物跡のなかには切り合っているものも多数あるため、建て替えを行い後期まで機能していた可能性のあるものもある。

掘立柱建物跡の規模は梁間1間のものがほとんどであり、中後期に2間のものがわずかにみられるのみである。桁行は1間から6間のものがあるが、2間または3間のものが最も多い。規模は梁間2.0～3.5m、桁行2.5～4.5mのものが約1/3を占める。

主軸方向は時期や区域によって異なるが、集落を区画する大溝に平行するものが多くみられる。付属遺構として溝状土坑を伴うものや柱穴プラン内に方形の土坑を伴うものがある。溝状土坑は桁行側に平行して付属する場合が多く、まれに梁間と桁行側の両側に位置するものがみられる。柱穴からの遺物が少ないことから溝状土坑が付属するものについては溝状土坑の時期に準じた。また、柱を抜き取った後に高坏などの土器が埋めたとみられる柱穴も存在することから、建物の廃絶に伴う祭祀的な行為が行われた可能性も考えられる。

各時期の概要については以下のとおりである。

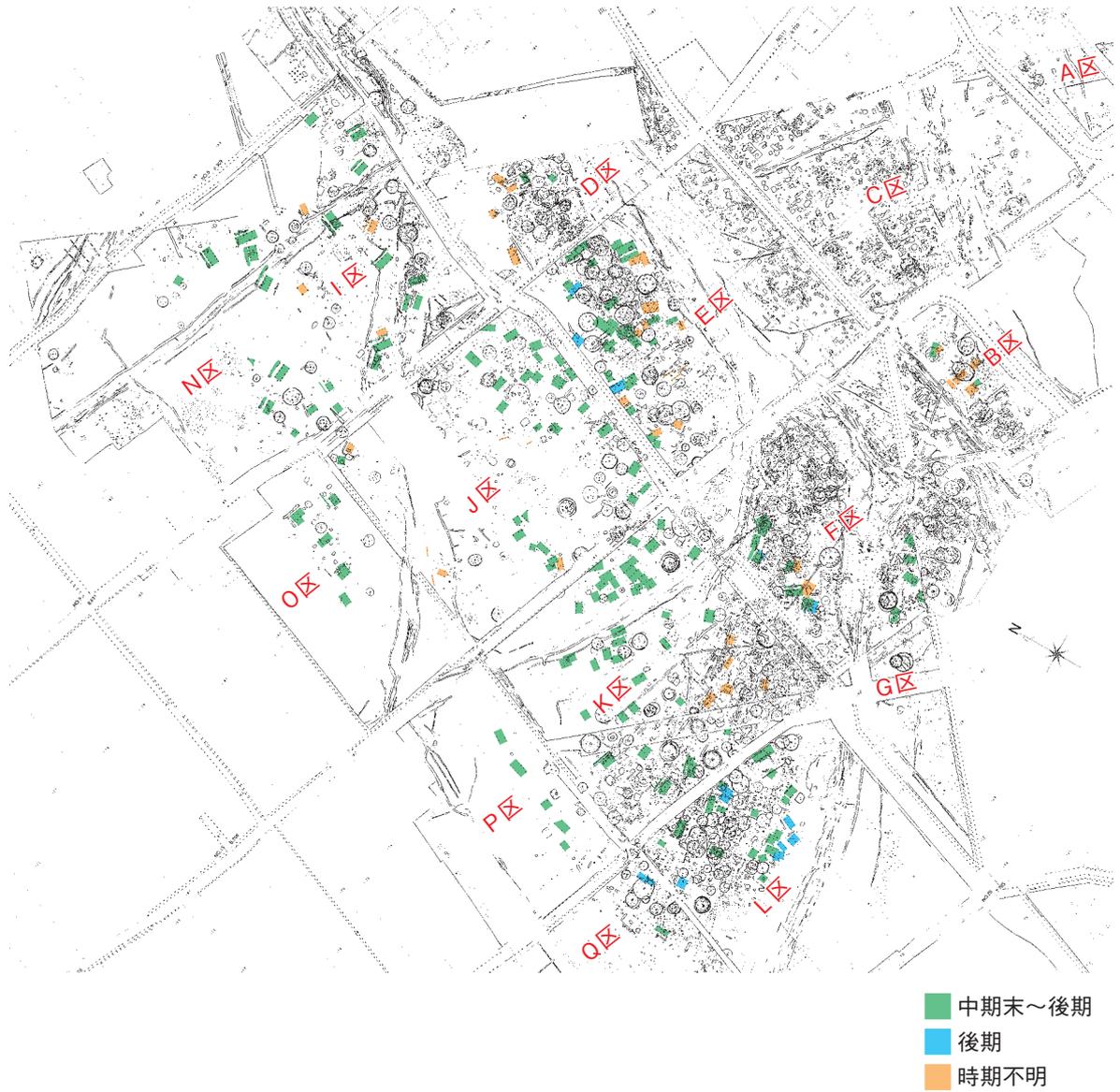
時期	梁行×桁行(間) ※全体のプランが未検出のものは除く										
	1×1	1×2	1×3	1×4	1×5	1×6	2×2	2×3	2×4	2×5	2×6
中期											
16	6	5	5								
中後期											
188	11	69	70	12	7	2	2	2	1	1	1
未確定											
73	15	32	12	5	3		2	1		1	

表Ⅲ-4 時期別掘立柱建物跡数



■ 中期

Ⅲ-13図 中期の掘立柱建物跡配置図

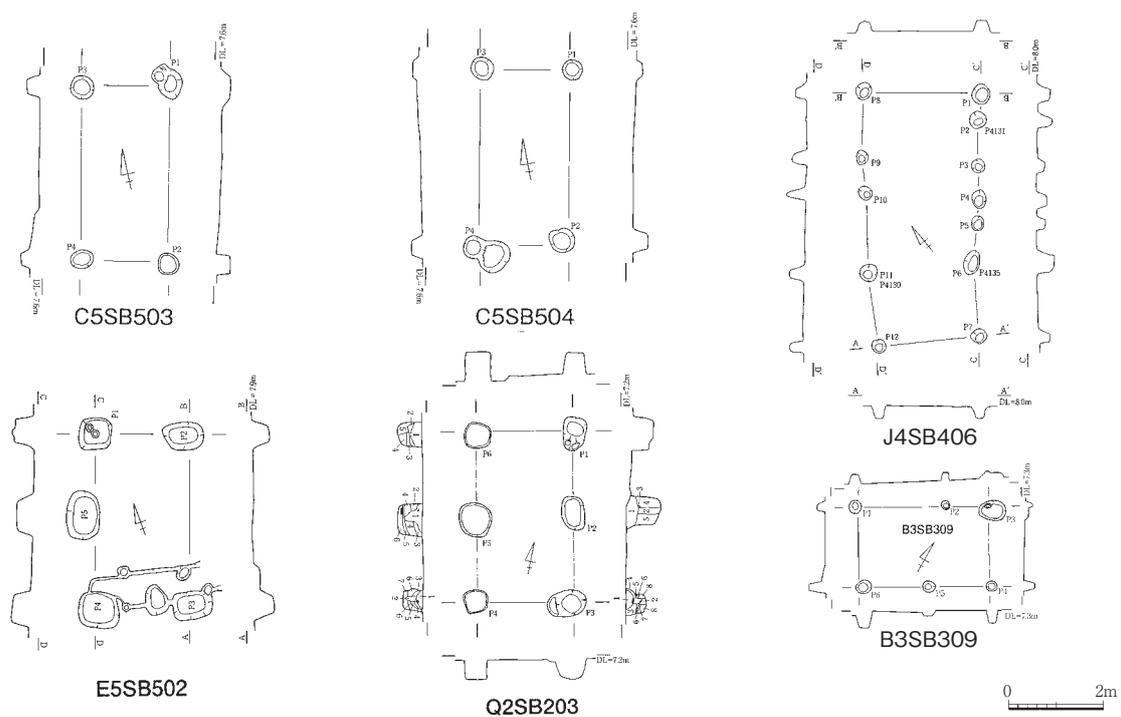


Ⅲ-14図 中後期の掘立柱建物跡配置図

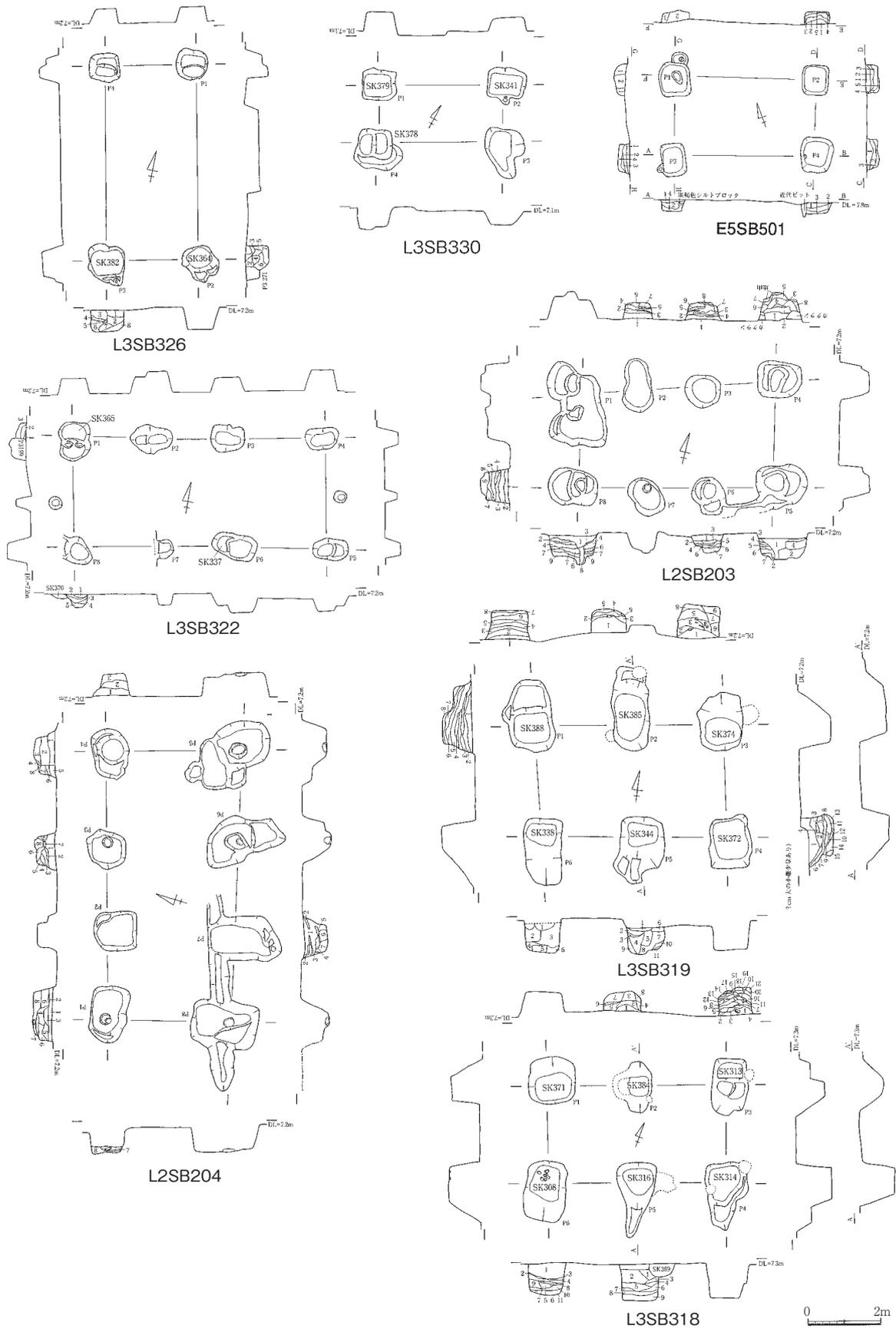
(1) 中期(Ⅲ-15・16図)

中期の掘立柱建物跡は14棟を確認した。前期環濠内のB・C・E区で5棟、J4-2区で1棟、L区で8棟、Q区で1棟確認している。前期環濠内で確認した掘立柱建物跡はL区で確認したものと比べると規模が小さい。B3区で確認したのは1棟で規模は梁間1間で1.7m、桁行2間で2.7mを測る。主軸方向は真北から東に62°傾く東西棟である。中期と思われる竪穴住居跡と切り合っているが、北側でも中期の竪穴住居跡を確認しており、この竪穴住居跡と併存していた可能性がある。また、東側6mほど離れた場所に平行に並んだ2基の溝状土坑との関係も中期の集落構成を考える上で興味深い。C5区では並列する同規模の掘立柱建物跡2棟を確認した。規模は梁間1間で約1.9m、桁行は2間で約3.8mを測る。主軸方向は真北から東に12°と13°であり、この2棟は併存していた可能性がある。柱穴の大きさは直径40~50cmと中期の掘立柱建物跡では小型である。E5区では2棟確認した。2棟の平面規模はほぼ同じであるが、E5SB501は東西棟で梁間1間、桁行1間であり、E5SB502は南北棟で梁間1間、桁行2間である。柱穴の大きさは長軸が70cm~1mである。J4-2区で確認したものは柱穴から弥生Ⅲ期の甕の口縁部が出土しているが、周辺に中期の遺構がほとんどなく、中期以降の可能性はある。

南部のL区で確認した掘立柱建物群(Ⅲ-16図)は1mを超える柱穴を持ち、桁行5mを超える大型のものが集中している。わずかに柱痕を残すものから推定される柱の太さは直径40~60cmを測る。主軸方向は真北から東に70°~80°を傾く東西棟ものが主体で大溝2に平行する。最も規模の大きいものはL3SB322であり、梁間1間で3.2m、桁行3間で10mを測る。また、大型の柱穴を持つ掘立柱建物跡の中では唯一棟持ち柱を持つ。L3区では中期の大型掘立柱建物跡が5棟密集しており、建て替えの可能性もあるが柱穴からの出土遺物が少ないこともあり、先後関係は明確ではない。こうし



Ⅲ-15図 中期掘立柱建物跡(1) S=1/80



Ⅲ-16図 中期掘立柱建物跡(2) S=1/80

た大型の柱穴を持つ掘立柱建物跡は柱間寸法も 1.7～3.8mと広く、太い柱を使った重量物に耐えることのできる構造をしており、大型倉庫や楼などの特殊な建物が想定される。

南部でのこうした大型掘立柱建物跡の集中は中後期でもみられ、集落の中で特別なエリアであったことが窺われる。

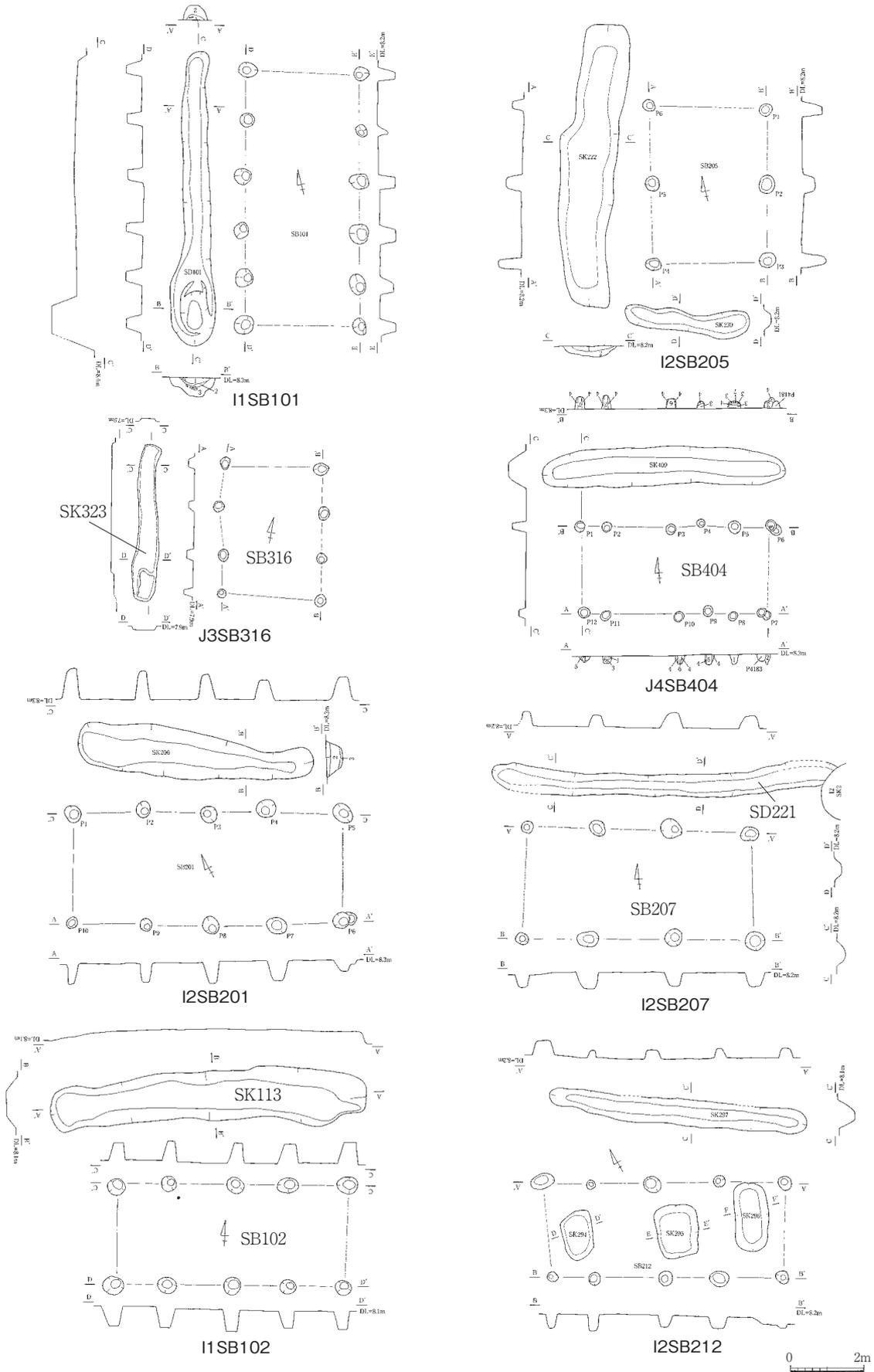
(2) 中後期(Ⅲ-17～20図)

中後期の掘立柱建物跡は 200棟を確認した。規模は梁間1間のものがほとんどであり、梁間2間のものは 7棟である。梁間3間以上のものは確認していない。桁行は 1間～6間のものがある。そのうち桁行2間のものが 69棟と最も多く、次いで 3間のものが 70棟である。掘立柱建物跡の集中する区域は北部、中部、南部に分かれる。北部は大溝6の北側、中部は大溝6と大溝4の間、南部は大溝4と大溝2の間である。規模や主軸方向、配置、付属遺構の有無など各ブロックでの傾向がみられる。

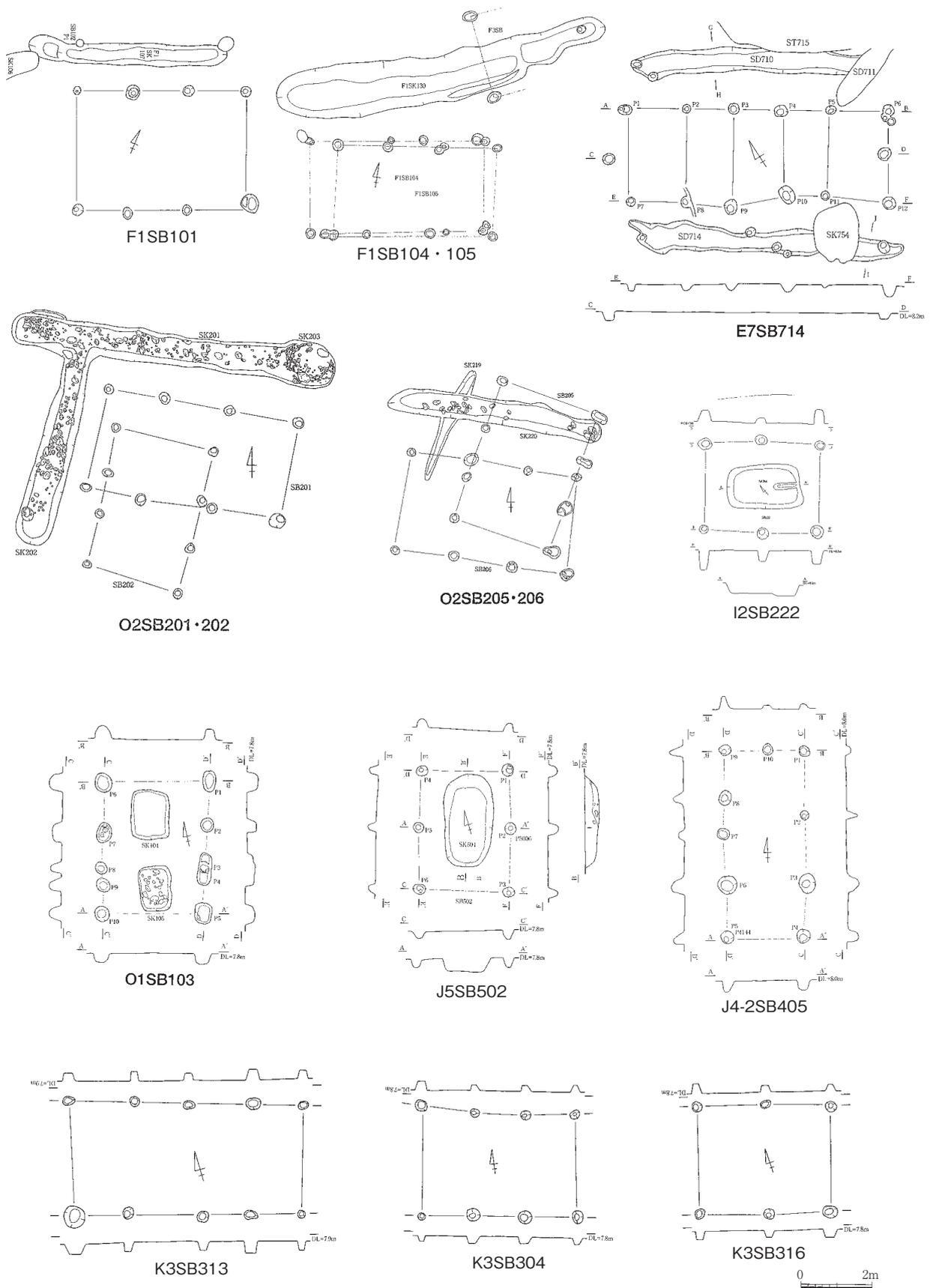
北部は竪穴住居跡群から離れた集落の西北端部にあたり、溝状土坑を伴う掘立柱建物群を確認した。掘立柱建物群の中央に建物のない空間があり、その周囲を囲むように配置されており、掘立柱建物跡同士が切り合うものはほとんどない。規模は小型のものは梁間が 2～3m、桁行 2.5～3.5mを測り、中型のものは梁間 2.5～3.5m、桁行 4～4.5mを測り、大型のものは梁間 2.5～3.5m、桁行 5～8mを測る。主軸方向は南北棟と東西棟のものがあり、東西棟のものが約 2/3 を占める。南北棟のものは主軸が真北から東に 15°～20°傾くものがほとんどであり、東西棟のものは主軸が真北から東に 60°～80°傾くものと、西に 60°～80°傾くものがある。小型と中型のものは東西棟と南北棟がほぼ同数であるが、大型のものは 1棟を除きすべて東西棟である。付属遺構として溝状土坑を伴うものが多くみられ、南北棟のものは桁行の西側、東西棟のものは桁行の北側に平行する。また、階段状の掘方を持った水溜に関連すると考えられる土坑を伴った溝状土坑があり、掘立柱建物群の西端部に等間隔で並んでいることは興味深い。周辺には畑などの水を必要とする土地の利用があった可能性がある。

中部の掘立柱建物跡群は竪穴住居跡が集中するE区の西側に弧状に配置している。桁行 2～3mの小型のものが多く、特に大溝4の北側のK3区では約 20棟が一群となって検出され、切り合うものも多くみられる。主軸方向は南北棟と東西棟のものがある。南北棟のものは主軸が真北から東に 20°または西に 10°以内に傾くものがほとんどであり、東西棟のものは主軸が真北から東または西に 60°～80°傾く。この内側には掘立柱建物跡の認められない空間があるが、J区は検出面が基底礫層であり、著しく後世の削平を受けているため掘立柱建物跡が残存していない可能性もある。この空間を広場として考えると、北部と同じく掘立柱建物群は広場を囲んだ配置となる。付属遺構を伴うものは少ないが、柱穴プラン内に土坑が存在するものがあり、掘立柱建物跡に伴う可能性がある。

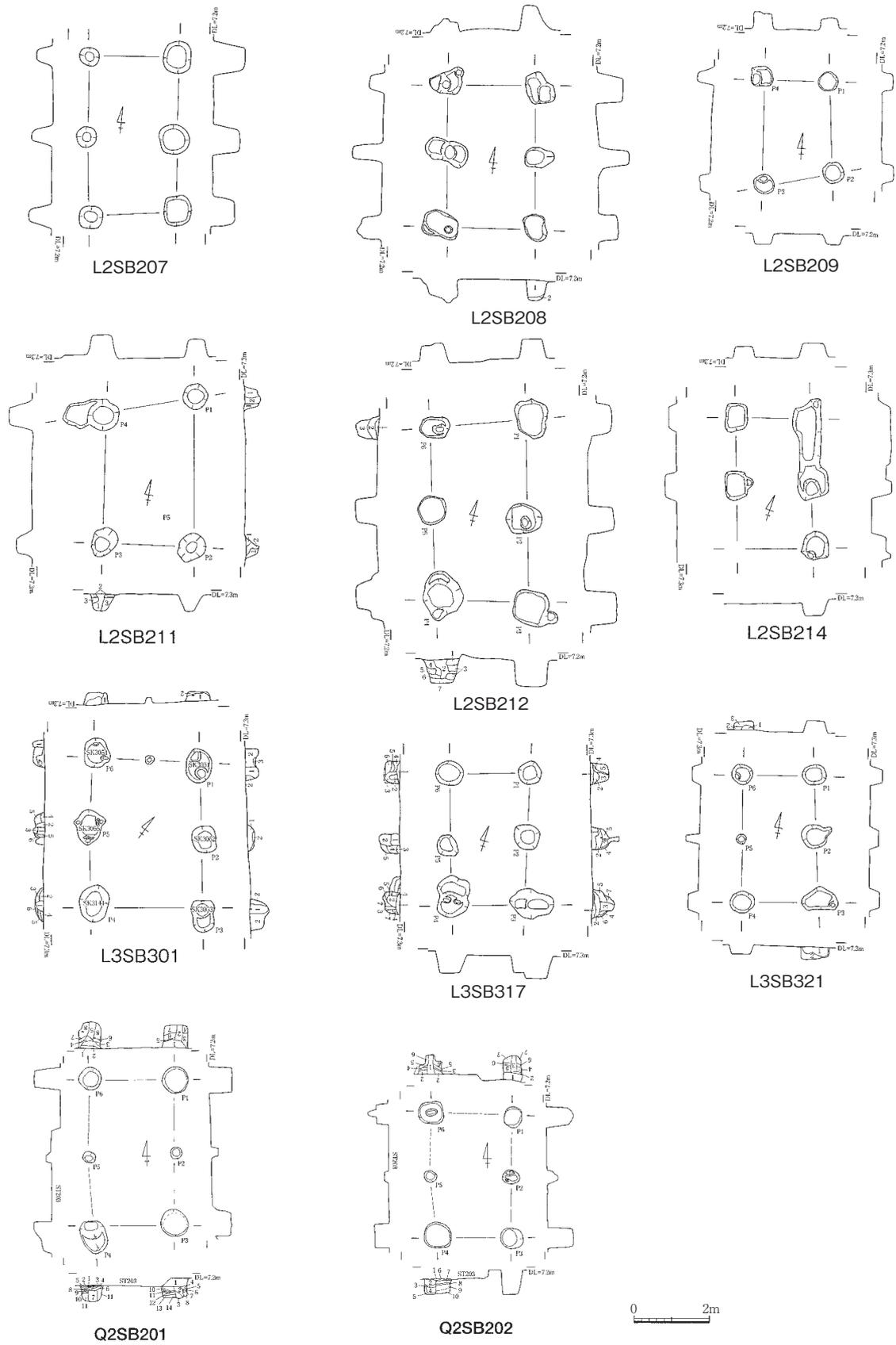
桁行が 6mを超える大型掘立柱建物跡は、竪穴住居跡が集中する大溝2沿いのE4・7区に多くみられる。竪穴住居跡の集中する周囲にあり、最も規模の大きいものは梁間 3m、桁行 8.4mを測る。竪穴住居跡と大溝2との間に平行に並んで確認したE7SB707と 708は規模がほぼ同じであり、併存していた可能性もある。主軸方向は南北棟と東西棟のものがあるが、ほとんどが東西棟であり、主軸が真北から西に 60°～80°傾く。南北棟のものは主軸が真北から東に 10°～30°または西に 10°以内に



Ⅲ-17図 中後期掘立柱建物跡(1) S=1/80



Ⅲ-18図 中後期掘立柱建物跡(2) S=1/80



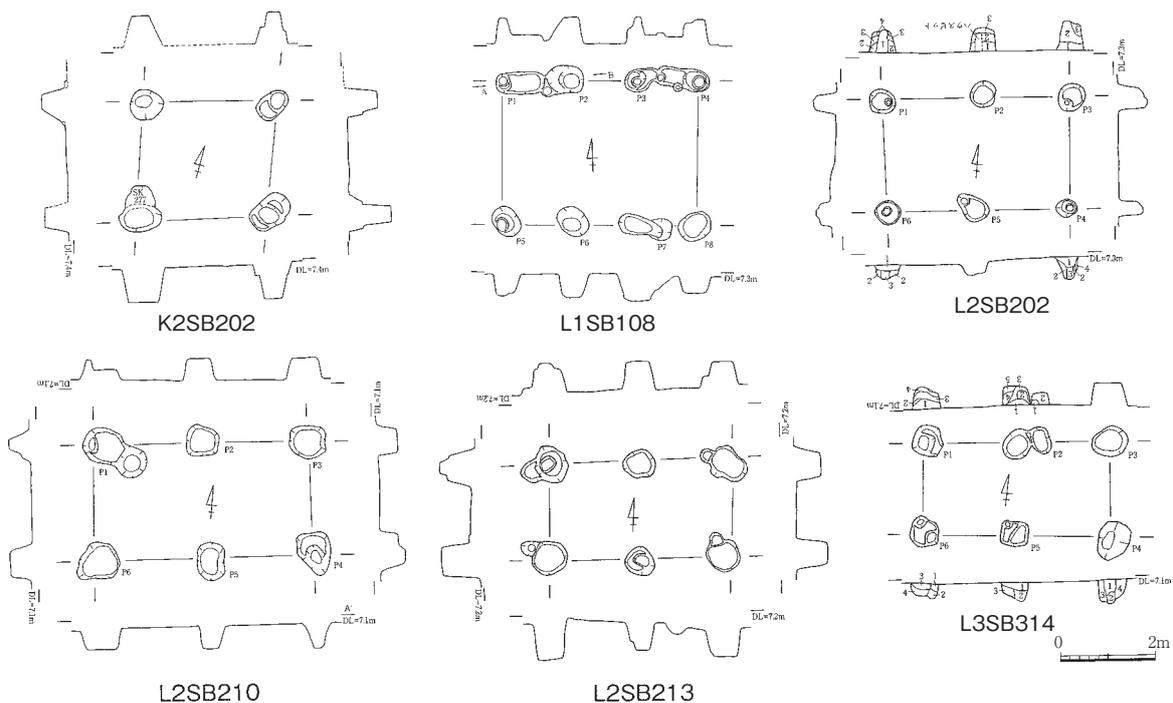
Ⅲ-19図 中後期掘立柱建物跡(3) S=1/80

傾く。付属遺構として溝状土坑を伴うものが多く、南北両側に溝状土坑を伴うものが1棟ある。また、棟持ち柱を持つものもみられる。

南部の掘立柱建物跡は竪穴住居跡の集中する区域と重なるように確認している。主軸方向は集落の南限である大溝2におおむね平行するものが多くみられる。規模は梁間1間で2~3.5m、桁行2~4間で3.5~5mを測る中型ものがほとんどである。主軸方向は南北棟と東西棟のものがみられるが、東西棟のものが多く、東西棟のものは主軸が真北から東に70°~80°または西に50°~80°傾くものがみられ、集落を区画する大溝2に平行するものがほとんどである。南北棟のものは主軸が真北から東または西に20°以内に傾く。付属遺構として溝状土坑を伴うものも多く確認している。竪穴住居跡が集中する北側に多くみられ、棟方向に列をなして配置している。

大型の柱穴を持つ掘立柱建物群(Ⅲ-19・20図)は集落西南端部にあたるL区で確認している。規模は中期のものとは比べると一回り小さくなり、梁間は1間のみで2~3m、桁行は1~3間で3~4mを測り、柱穴は直径40~80cmを測るものが主体となる。主軸方向は東西棟と南北棟がほぼ同数であり、南北棟のものは主軸が真北から東西に20°以内に傾き、東西棟のものは主軸が真北から東に70°~90°傾く。大型竪穴住居跡に隣接して確認しており、併存していた可能性がある。1mを超える大型の柱穴を持つ掘立柱建物跡群は中期からこのエリアでのみみられるため、集落の中でも特別なエリアであったと考えられる。

中後期の掘立柱建物跡については配置状況を概観したが、これらの集中する区域が時期によって分布域が変遷するものであるのか、中後期を通じて全域にわたって機能していたものかは竪穴住居跡を含めた遺構全体のさらなる時期細分を行うことで集落の構造と変遷を明らかにすることが課題である。



Ⅲ-20図 中後期掘立柱建物跡(4) S=1/80

3. 土 坑

今回の調査で弥生時代の土坑は約2,000基を確認した。土坑の分布状況は竪穴住居跡の分布状況とほぼ同じであり、大溝1の西から大溝2周辺に集中する。時期を確定できないものを除いて、前期370基、前期末48基、中期107基、中後期597基、後期29基である。

前期の中でも遺構数の減少が見られる前期末のものは別にカウントした。配置図に示したものは時期を確定できたもののみとした。各時期の概要については以下の通りである。

時期	形状			
	方形・長方形	円形・楕円形	溝状	その他
前期				
369	149	152	28	40
前末～中初				
47	9	22	9	7
中期				
107	24	53	19	11
中末～後初				
595	199	170	170	56
後期				
27	6	9	8	4

※隅丸方形は方形・長方形に含む。

※長楕円形は溝状に含む。

※その他の中には不定形、三角形、逆L字形などを含む。

表Ⅲ-5 時期別土坑数一覧表

(1) 前期

弥生時代前期では田村遺跡群の北東部にあたるC区を中心としてB・D・E・F区の一部で400基を超える土坑の密集部を検出した。特に環濠の内側にあたるB・C・D・E区では200基以上の土坑群を検出している。また、田村遺跡群の南西部にあたるM区で東松木式の鉢が出土した土坑(Ⅲ-24図)を1基検出しており、集落の変遷を考える上で興味深い。

前期前葉～後葉にかけて機能したとみられる溝は四重(前期溝1～4)に巡ることを確認している。土坑群の密度は内濠(前期溝2)の内側で最も高く、前期土坑同士で切り合うものも見られる。外濠(前期溝4)の外側及び外濠と内濠の間ではやや密度は低い。平面形は方形、隅丸方形、楕円形、円形があり、断面形状は袋状、逆台形状、擂鉢状のものなどが見られる。深さは後世の削平の影響があるため、調査区によって様々である。

これらの土坑群の長軸方向をみると、長軸が主に南北方向を示すものと主に東西方向を示すものに分けることができる。南北方向を主軸とする土坑はおおむね2つのグループに分けることができる。真北から西7°～東10°の間に収まるものは方形または隅丸方形の平面プランを呈するものが多く、規模は長軸1～3m、短軸1m以下である。真北から東に約21°～36°傾くものは方形プランを呈するものが多く、長軸2～3.5m、短軸1～2mを測る。この中には比較的大型で床面にピットや壁溝などを検出した土坑(Ⅲ-24図)が含まれ、貯蔵穴の他、作業小屋としての利用を考えることができる。東西方向を主軸とする土坑には方形または隅丸方形プランのものが多く、長軸2～4m、短軸1～2m前後を測る。また、袋状土坑も東西方向を主軸とするものが多い。

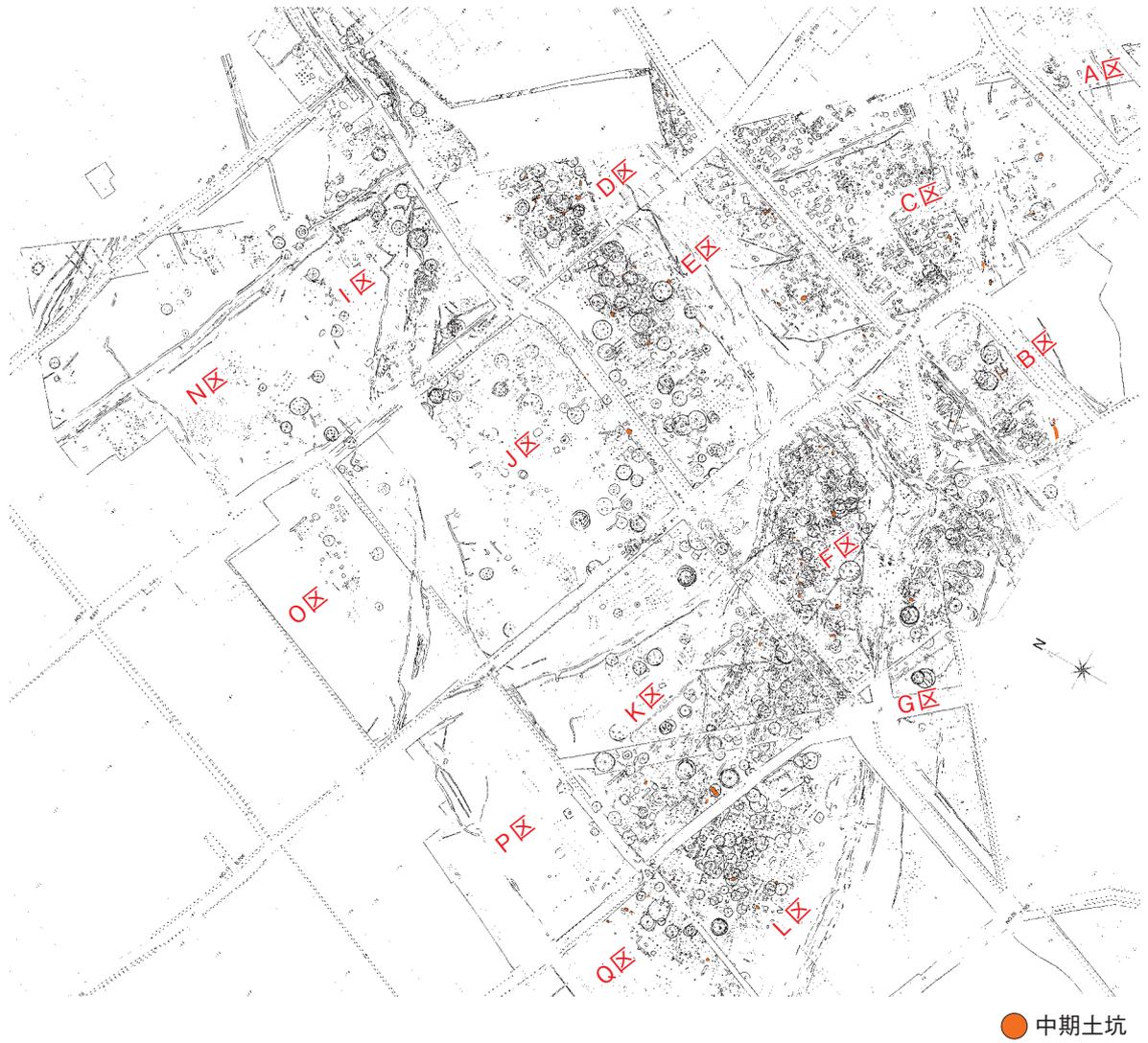
土坑内からは多量の弥生前期土器とともに、大陸系磨製石器をはじめとする石器類や焼けた骨片が多く出土した。骨片は鳥類、ほ乳類の他、魚類の椎骨を多く確認している。

土器では壺、甕、鉢、高坏、蓋、手捏土器、ミニチュア土器などが出土し、量的には壺と甕が最



■ 前期土坑
■ 前期末土坑

Ⅲ-21图 前期·前期末土坑配置图



Ⅲ-22図 中期土坑配置図

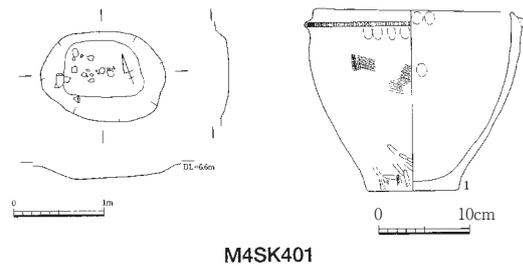


- 中期末～後期
- 後期

Ⅲ-23図 中後期・後期土坑配置図

も多く、いずれも遠賀川式土器であり縄文晩期系の土器はわずかである。

石器類は大陸系磨製石器類が多く出土している。農具類(石鎌、石包丁)、工具類(太型蛤刃石斧、扁平片刃石斧、柱状片刃石斧)、武器類(磨製石鎌、石剣)などバラエティーに富んでいる。また、打製石鎌や石錐などもみられ、いくつかの土坑では埋土中から多量のチャー



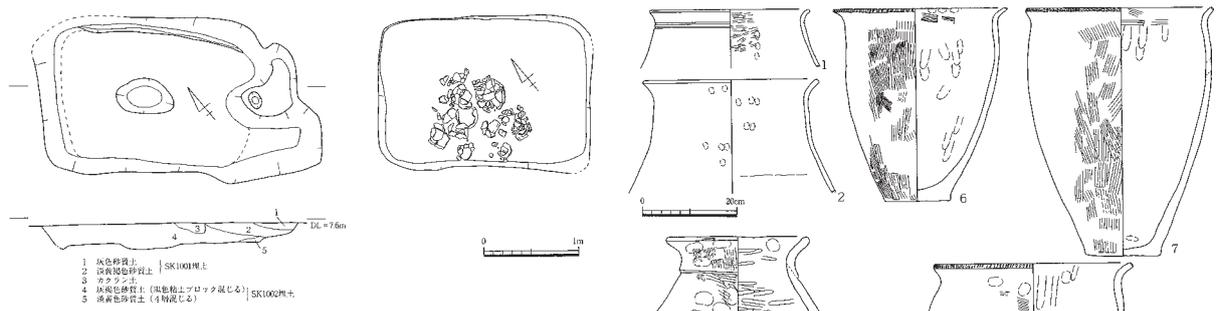
Ⅲ-24図 前期前葉の土坑

ト製の楔形石器、石錐、チップなどが出土しており、内濠内部を中心に石器製作が行われていたと考えられる。また、石棒や基部が細くなる石斧など縄文系石器も若干認められる。

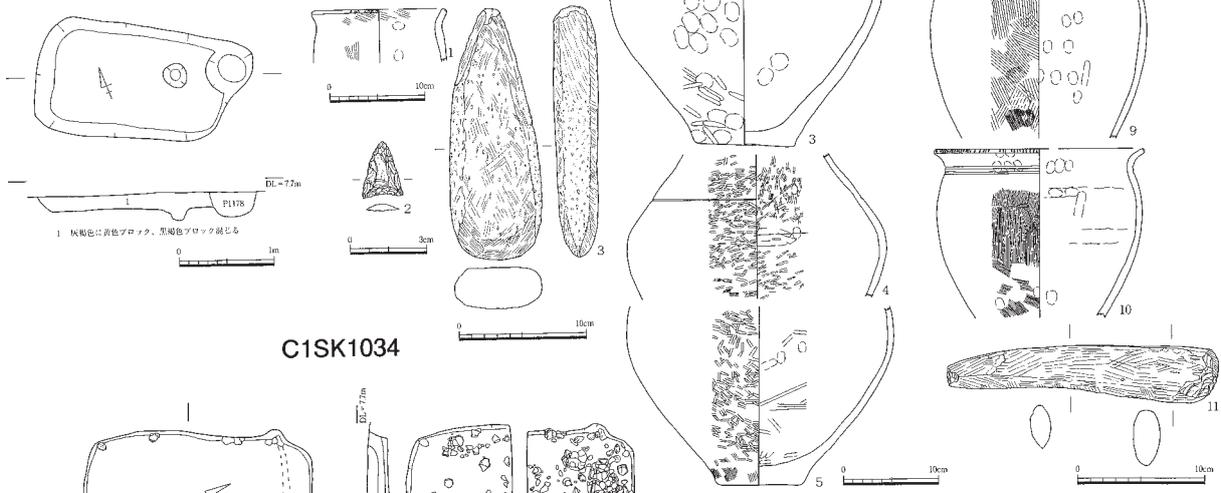
遺物の出土状況は土器が完形に近い形で出土するもの(Ⅲ-26図)や、土器片が礫や石器、石材とともに多量に出土するが、断片的にしか接合できないものが多いもの、埋土中に多量の炭化物と焼土を含み、床面や出土した土器も被熱しているもの(Ⅲ-27図)などがあり、機能や廃絶方法などに違いがみられる。

環濠外のF4区では、I-3~5期の土坑は同時期の住居を取り囲むように集中して検出している。これらの土坑からも大量のチャート片が出土しており、石器製作場としての住居に伴うものと考えられる(Ⅲ-27図)。

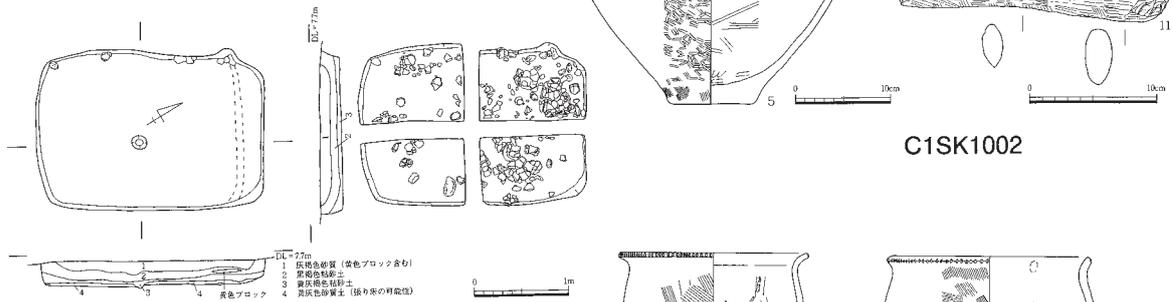
また、C区を縦断する大溝1の西側斜面や底から検出した土坑は、深さ1m以上で階段状に降りていく構造を持つもの、円形や方形の平面プランを持ち、深さ1m程度のもの、不整形な楕円形のものの3タイプがある。これらの土坑は最深部で清水が湧出したものや、完形の壺やミニチュア土器が出土したものがある。その形態、構造から水汲みに関連する遺構と考えられる。埋没状況や出土遺物から中期まで機能していたと考えられるものもある(Ⅲ-29図)。



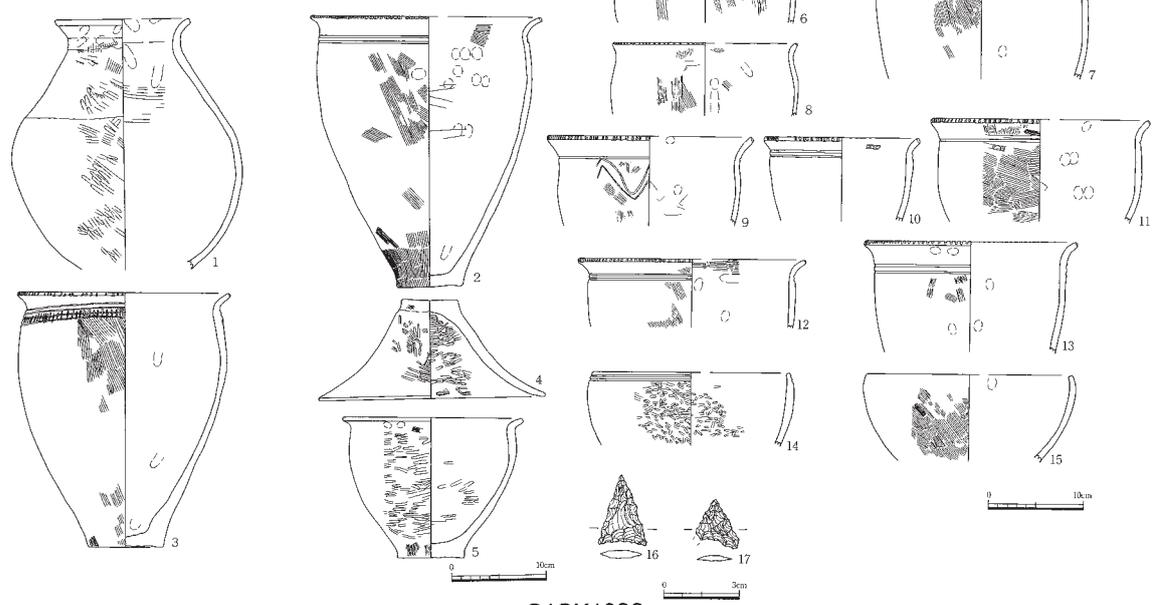
C1SK1002



C1SK1034

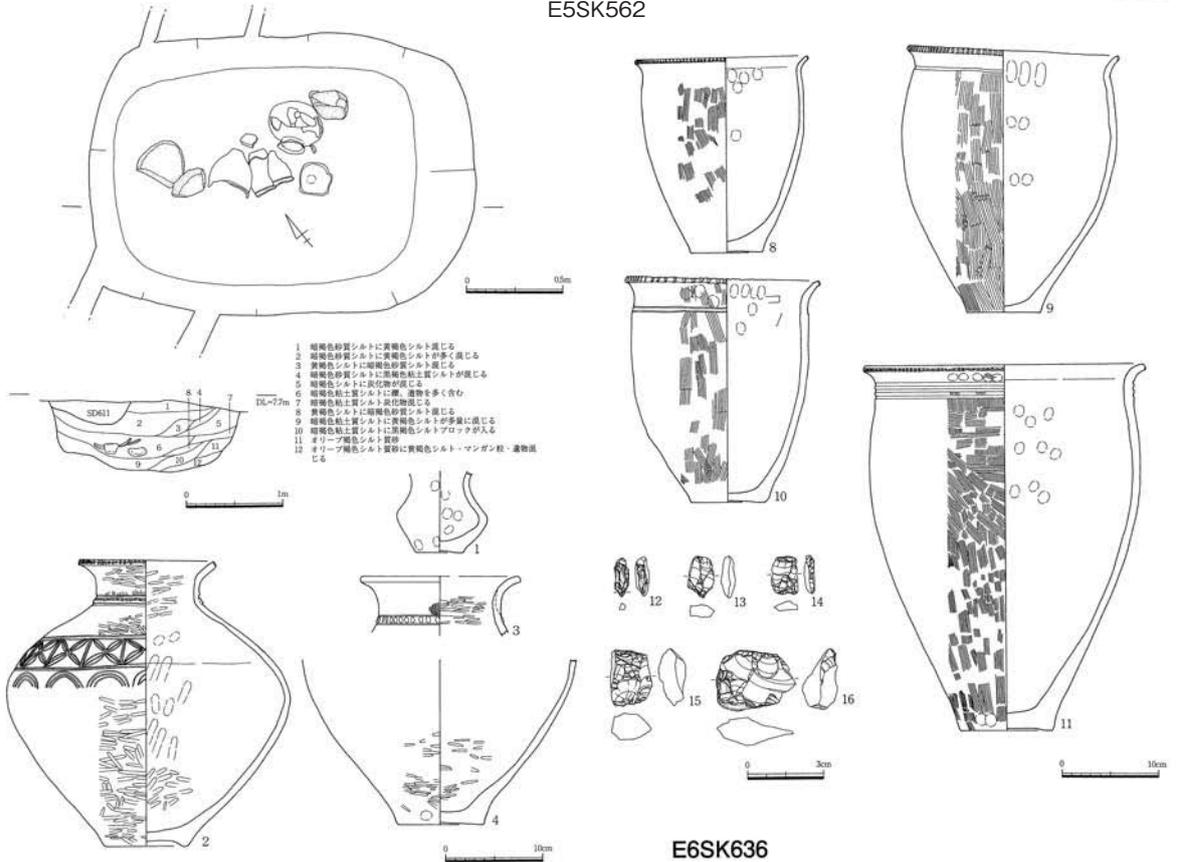
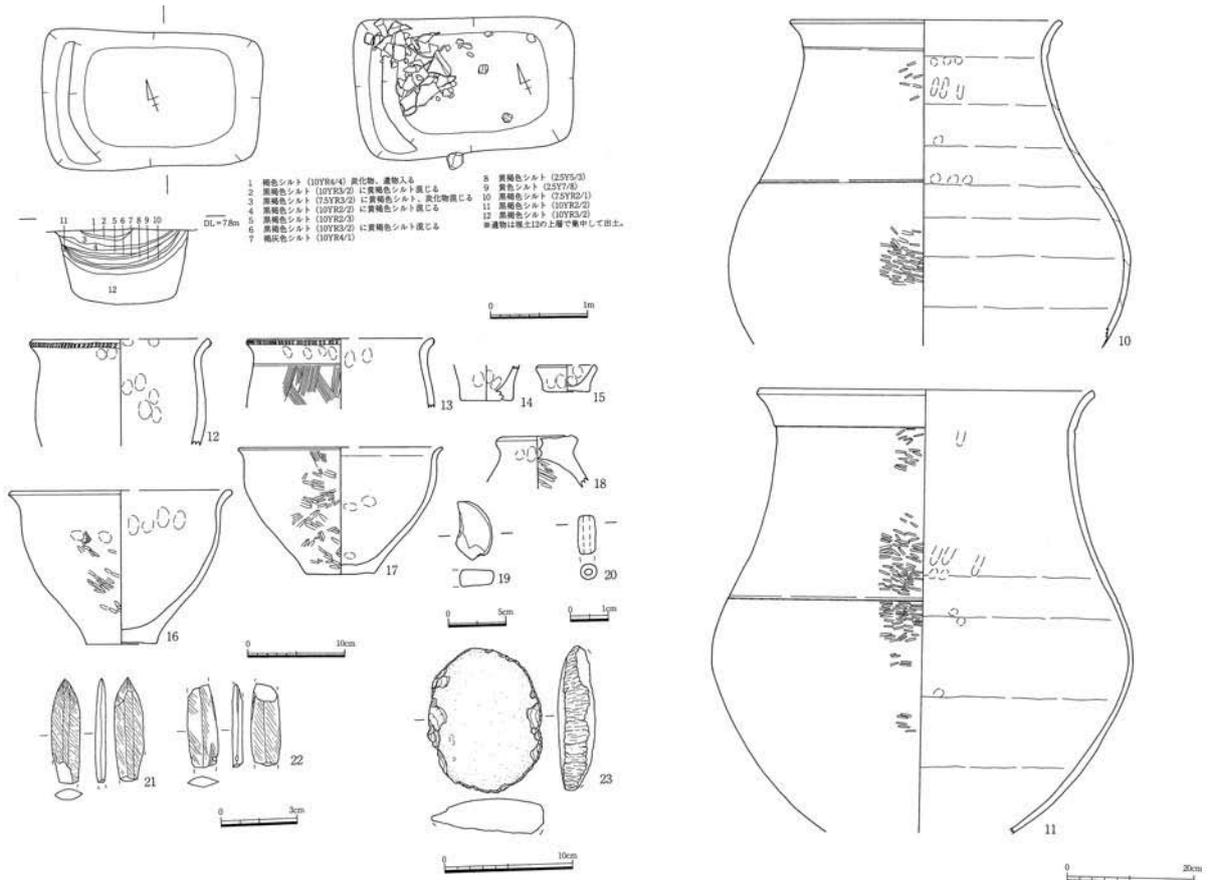


C1SK1002

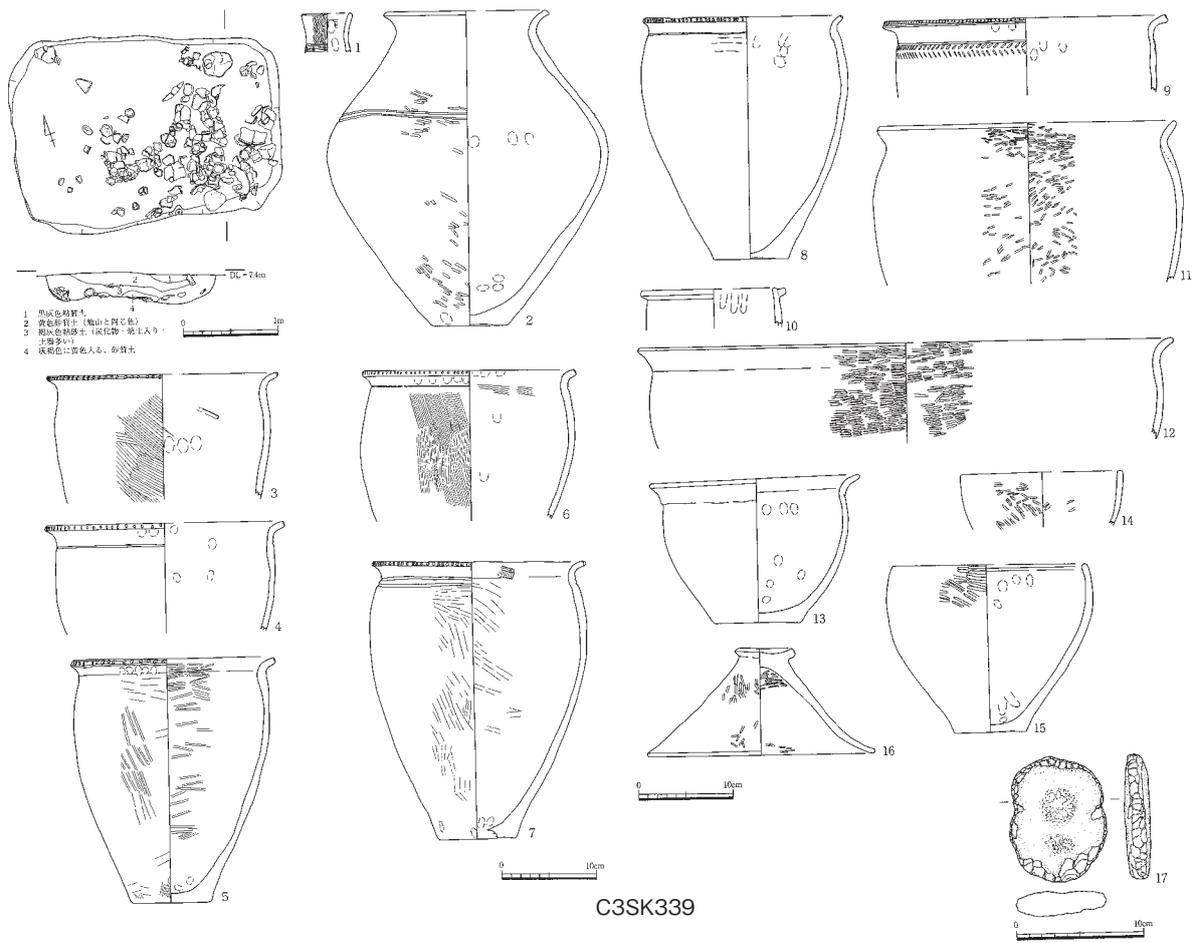


C1SK1036

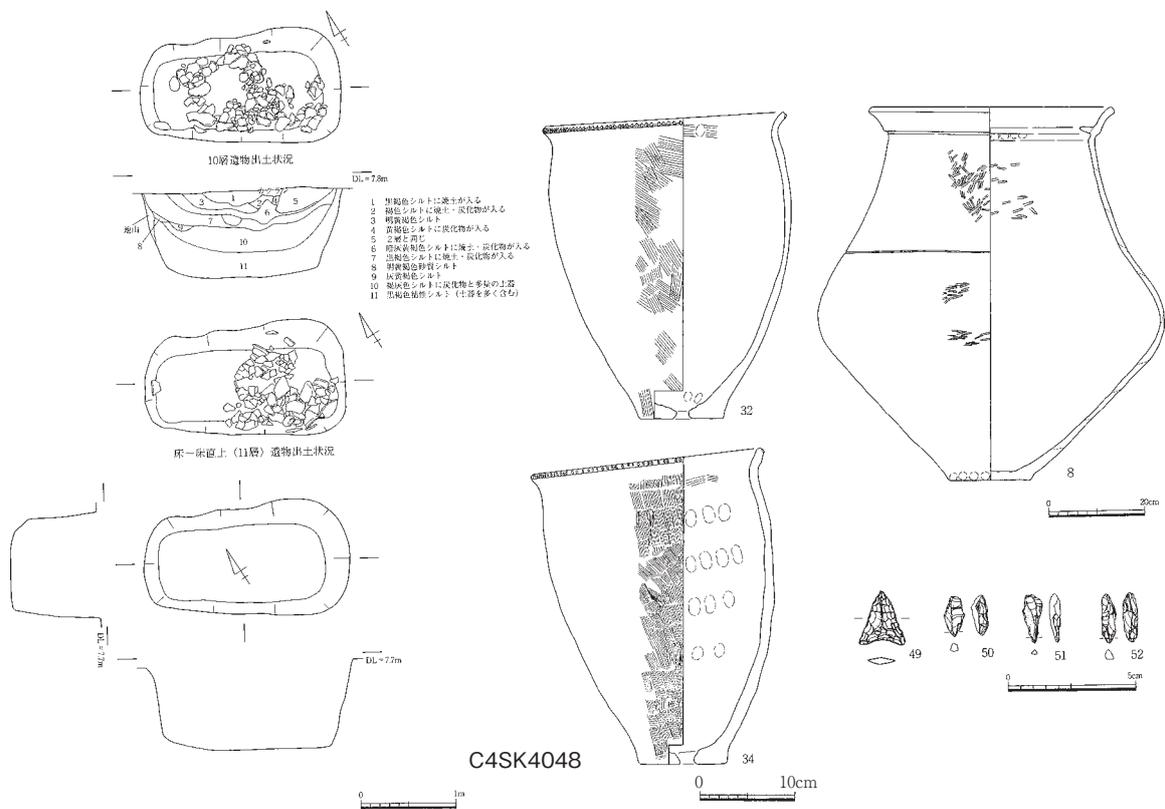
Ⅲ-25図 前期の土坑(1)



III-26図 前期の土坑(2)

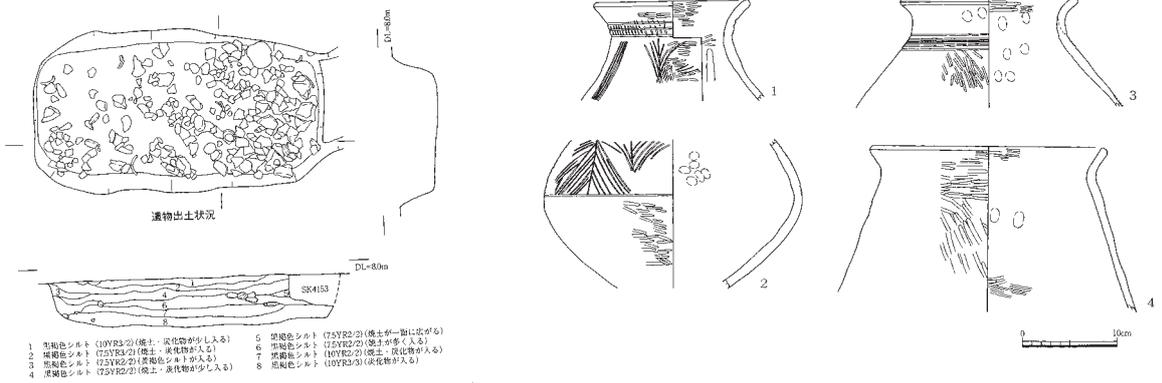


C3SK339



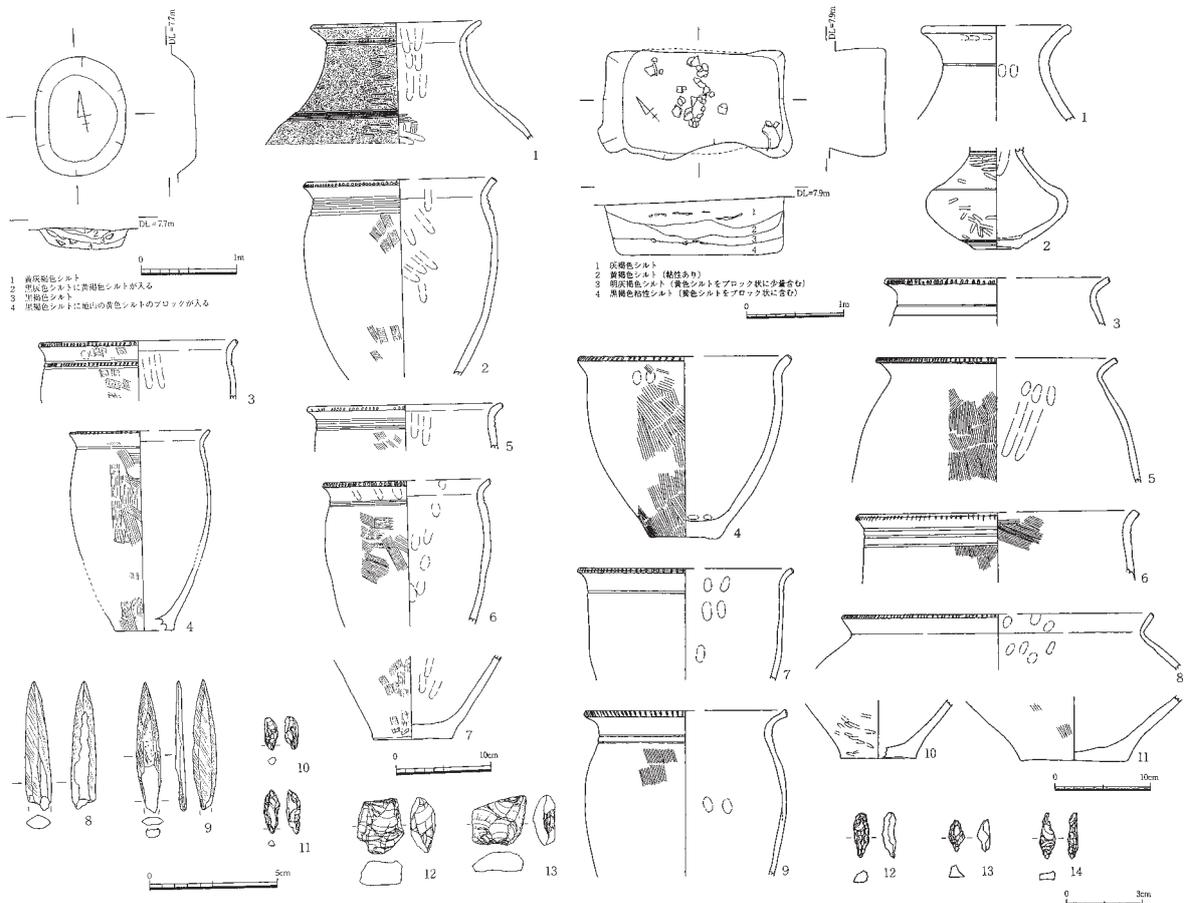
C4SK4048

Ⅲ-27図 前期の土坑(3)



- 1 灰褐色シルト (I09R3/2) (焼土・炭化物が少し入る)
- 2 黒褐色シルト (I25YR3/2) (焼土・炭化物が入る)
- 3 黒褐色シルト (I25YR2/2) (炭化物が少し入る)
- 4 黒褐色シルト (I25YR2/2) (焼土・炭化物が少し入る)
- 5 灰褐色シルト (I75YR2/2) (焼土が一部に広がる)
- 6 赤褐色シルト (I25YR2/2) (焼土が多くなる)
- 7 黒褐色シルト (I09YR2/2) (焼土・炭化物が入る)
- 8 灰褐色シルト (I09YR3/2) (炭化物が入る)

C4北SK4149

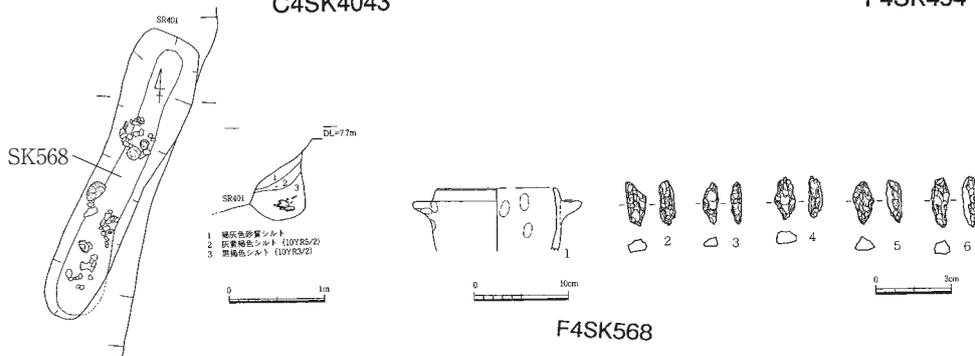


- 1 赤褐色シルト
- 2 黒褐色シルトに赤褐色シルトが入る
- 3 赤褐色シルト
- 4 赤褐色シルトに黒褐色の黄色シルトのブロックが入る

- 1 灰褐色シルト
- 2 黒褐色シルト (粘性あり)
- 3 明灰褐色シルト (黄色シルトをブロック状に少量含む)
- 4 黒褐色粘性シルト (黄色シルトをブロック状に含む)

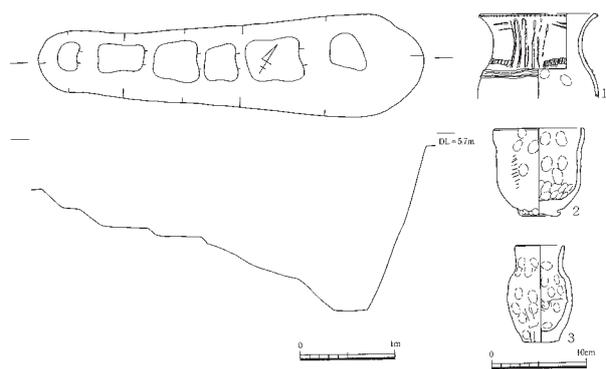
C4SK4043

F4SK454

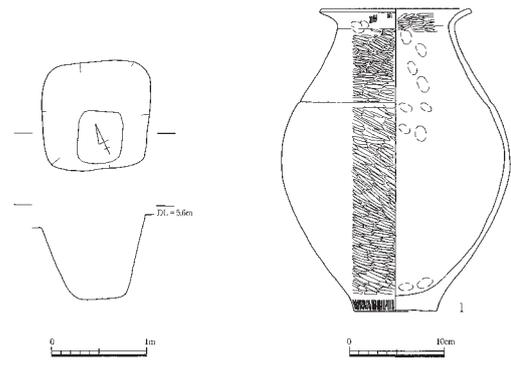


F4SK568

III-28図 前期の土坑(4)



C3-01C-SK302



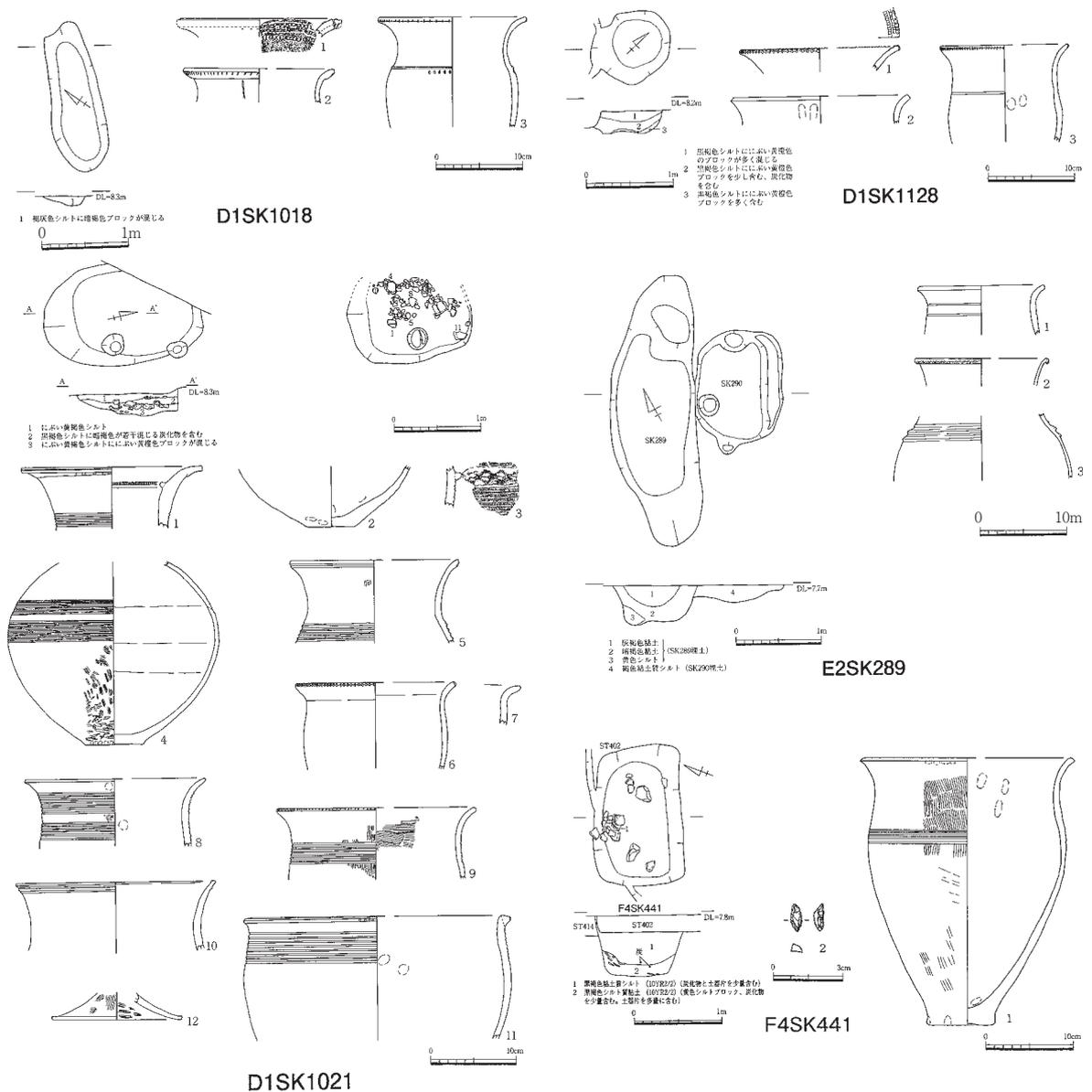
C3-01D-SK328

Ⅲ-29図 前期の土坑(5)

(2) 前期末(Ⅲ-30図)

前期末になると遺構の数は激減し、D・E・F・I区で30基ほどを散発的に検出しているのみである。平面形は楕円形で長径1.5~2m、短径0.6~0.9mを測り、主軸方向は真北から西に40°~50°傾くものがほとんどである。

出土遺物は多くなく、完形近く復元できるものは少ない。しかし、溝や流路の下層埋土中にこの時期の土器片が多量に含まれていることから上流部である田村遺跡群北部には当該時期の集落が存在し、今回確認した土坑は集落縁辺部にあたると考えられる。



Ⅲ-30図 前期末の土坑

(3) 中期(Ⅲ-31・32図)

弥生時代中期の土坑はC・D・E・F・K・L・Q区を中心に約100基を確認している。大溝2に沿った微高地上に分布し、当該時期の竪穴住居跡を中心としたいくつかのまとまりがみられる。

平面形は円形、楕円形、隅丸方形、長方形、溝状のものがある。直径1～2mを測る円形または楕円形のもの半数以上を占める。隅丸方形や長方形のものは長軸1.1～1.8m、短軸0.8～1.2mを測るものがほとんどであるが、長軸約4m、短軸約2mを測る非常に大型のものも検出している。大型土坑の床面には柱穴などの付属遺構は検出していないが、住居跡の可能性もある。溝状のものは長さ1m、幅0.7m未満の小規模のものがほとんどである。主軸方向は真北から西14°～東10°に収まるものと真北から西に60°～70°傾くものがほとんどである。

一般に遺物の出土量は少なく完形近く復元できるものも少ないが、頸部から上胴部にかけて断面三角形の突帯を貼付し、櫛描直線文を巡らせた壺が顕著である。

(4) 中後期(Ⅲ-33～38図)

中後期の土坑は約1,500基を検出している。竪穴住居跡の集中部に多数の土坑が認められることから、住居に伴う性格のものが多いと考えられる。

平面形は方形、長方形、隅丸方形、楕円形、溝状のものがみられる。長方形や隅丸方形のものは長軸0.6～1.6m、短軸0.6～1.5mを測る。長軸が2mを超える大型で平坦な床をもつものもみられる。これらは複数の住居が切り合った地域で主に検出している。ほとんどのものが柱穴を持たないが中には床面に壁溝を巡らせるものもあることから、住居もしくは作業小屋などの住居に伴う補助施設の機能を持っていた可能性もある。また、主軸方向は溝状土坑や掘立柱建物とほぼ一致する。楕円形のもの長径0.7～1.7m、短径0.6～1.6mを測る。東西方向を主軸とするものが2/3を占める。

遺物の出土状況は土器とともに石器、砥石、炭化物、焼土、礫などの多量の遺物を伴うもの、完形の土器が数個つぶれた状態で出土するもの、胴部片などの遺物が少量しかみられないものなどがある。また、土器の他に炭化物や焼土とともに炭化米や種子が出土するものもあり、袋状の断面を持つものとともに貯蔵穴としての機能を持っていたと考えられる。

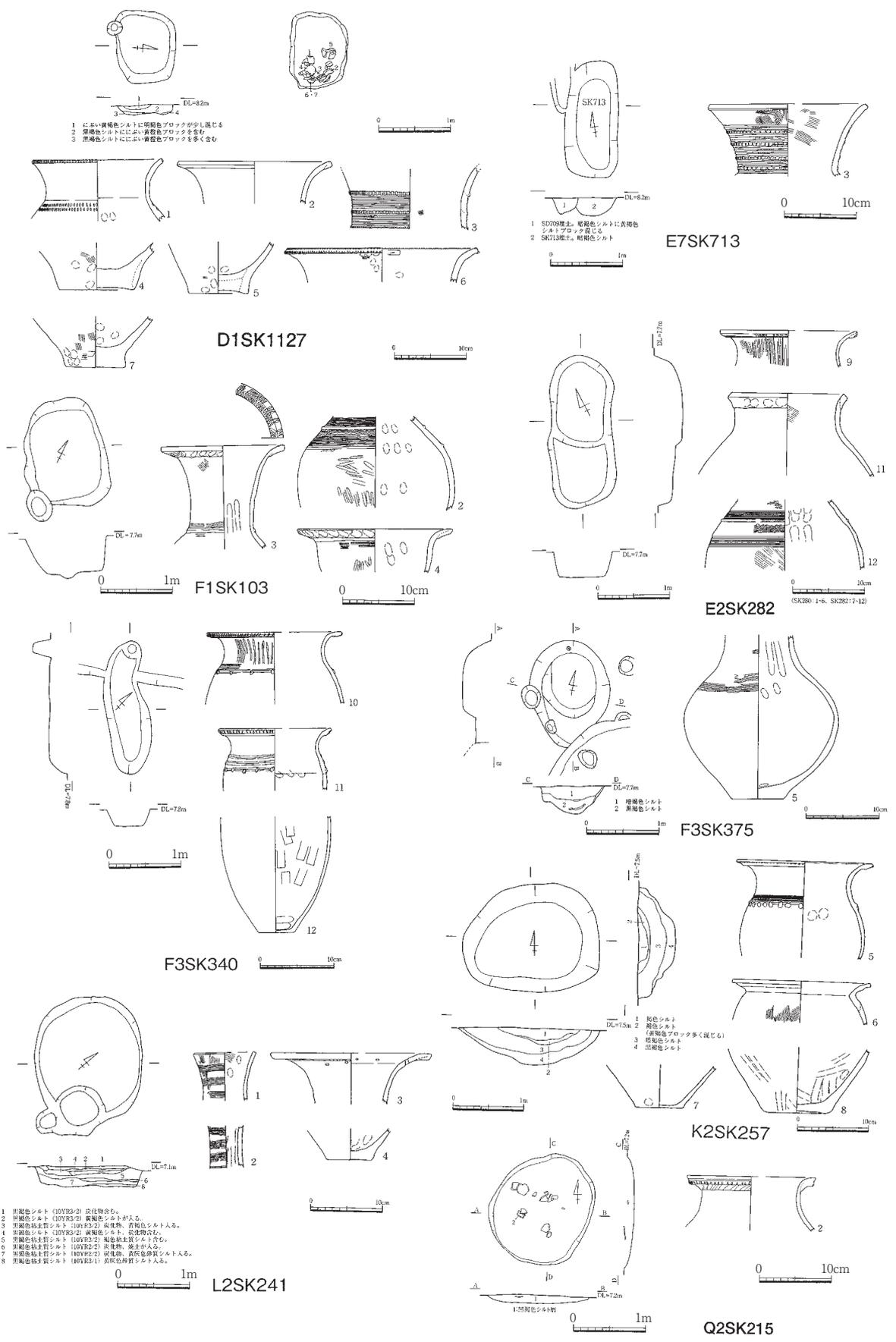
溝状土坑は全長9m以下全幅1m以下のものがほとんどである。掘立柱建物に伴うものが多くみられ、主軸方向はF、K、L区では集落の南側を弧状に流れる大溝2におおむね平行する。遺物の出土状況は全体から大量に出土するもの、一部分からまとまって出土するもの、わずかしか出土しないものがあり、ほとんどが埋土中層以上からの出土であり、中層まで自然埋没した後に一括廃棄したものである。

水溜に関係する土坑として、溝状土坑の端部や中央部に階段状の掘方を持つ土坑を伴うものがある。底は基底礫層を掘り抜いており、完形の甕やミニチュア土器が出土している。確認した3基は集落北西端部に等間隔に並ぶ。また、北側の2基と等距離の位置にも水溜に関係すると思われる土坑を確認している。2.8×2.5mの楕円形プランで深さ1.8mを測り、基底礫層まで掘り込んでいる。完形の甕とミニチュア土器が出土している(Ⅲ-36図)。

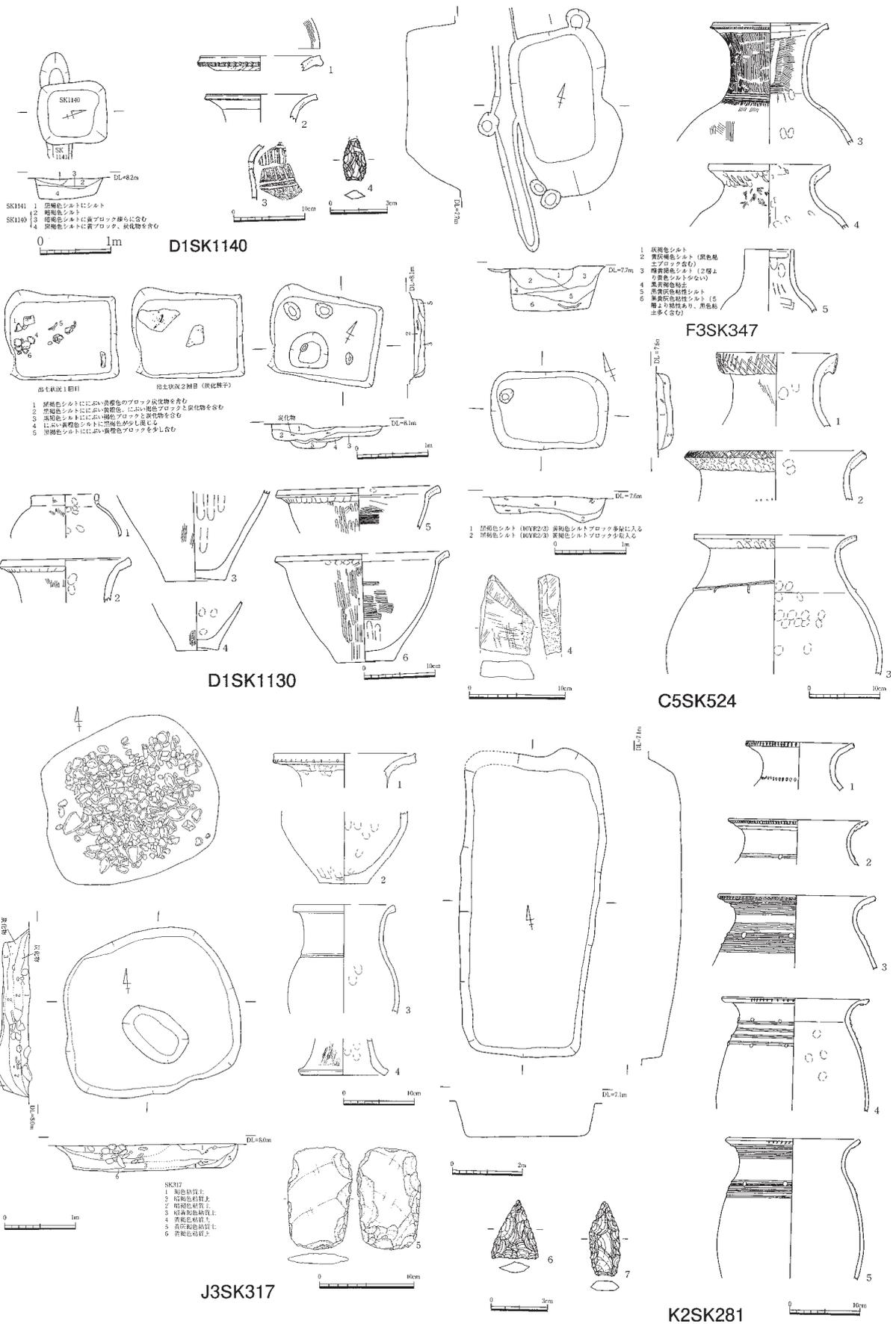
土坑墓については、壺に別個体の壺の底部で蓋をして埋納された状態で出土したもの(K2SK272)

が1基あるが、現在のところほとんど確定していない。遺物のほとんど出土しない土坑の中には木棺直葬の土坑墓である可能性も考えられ、集落の墓域については今後の検討が必要である。

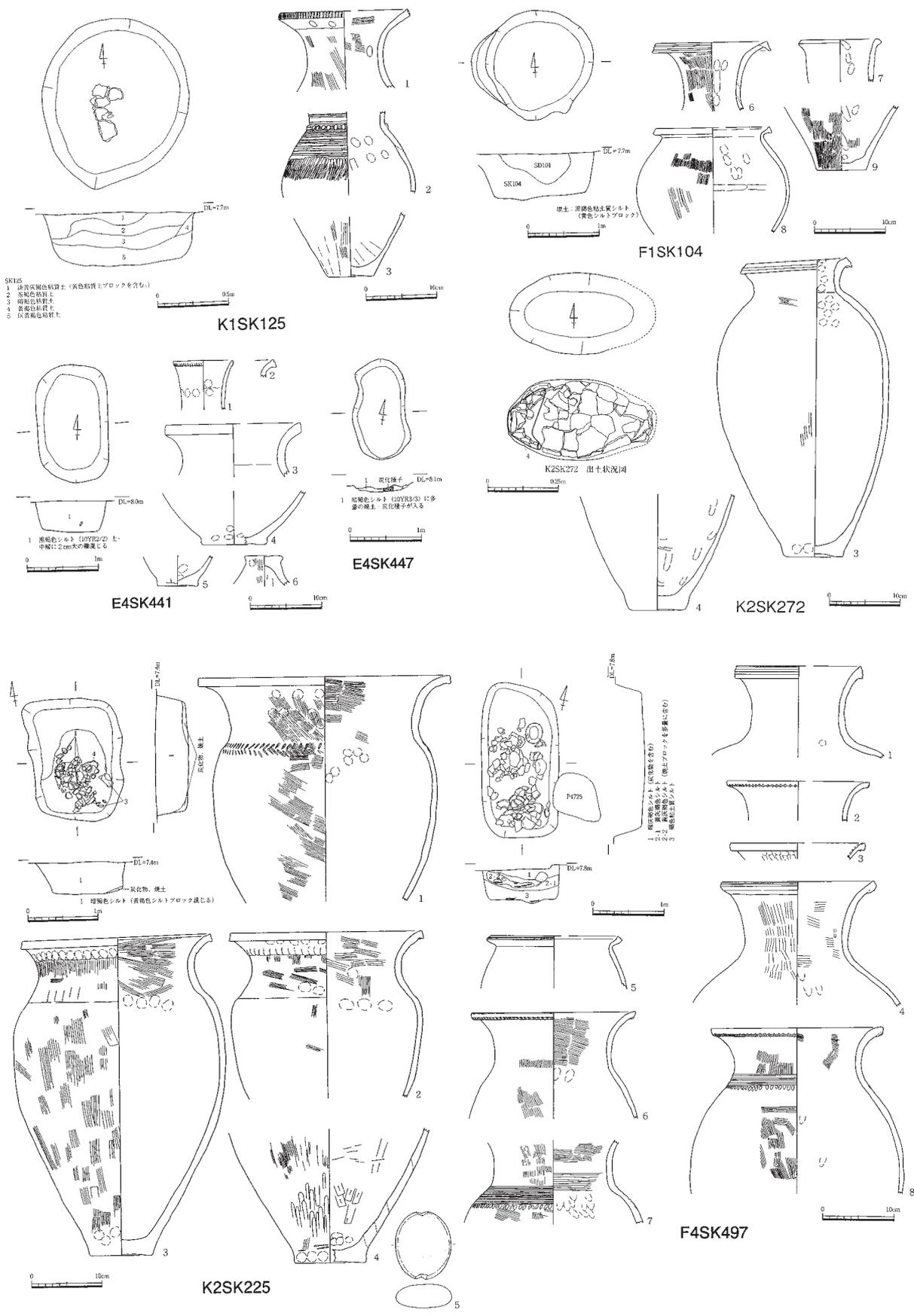
銅矛が出土した埋納土坑(I2SK2314)を確認したことで、過去に出土したカリヤ地区のものと合わせて集落内での青銅管理を知る上での資料となった。



III-31図 中期の土坑(1)



III-32図 中期の土坑(2)



- SK125
 1 深黄褐色粘質土 (黄色粘質 (ブロックを含む))
 2 赤褐色粘質土
 3 暗褐色粘質土
 4 黄褐色粘質土
 5 灰褐色粘質土

K1SK125

F1SK104

E4SK447

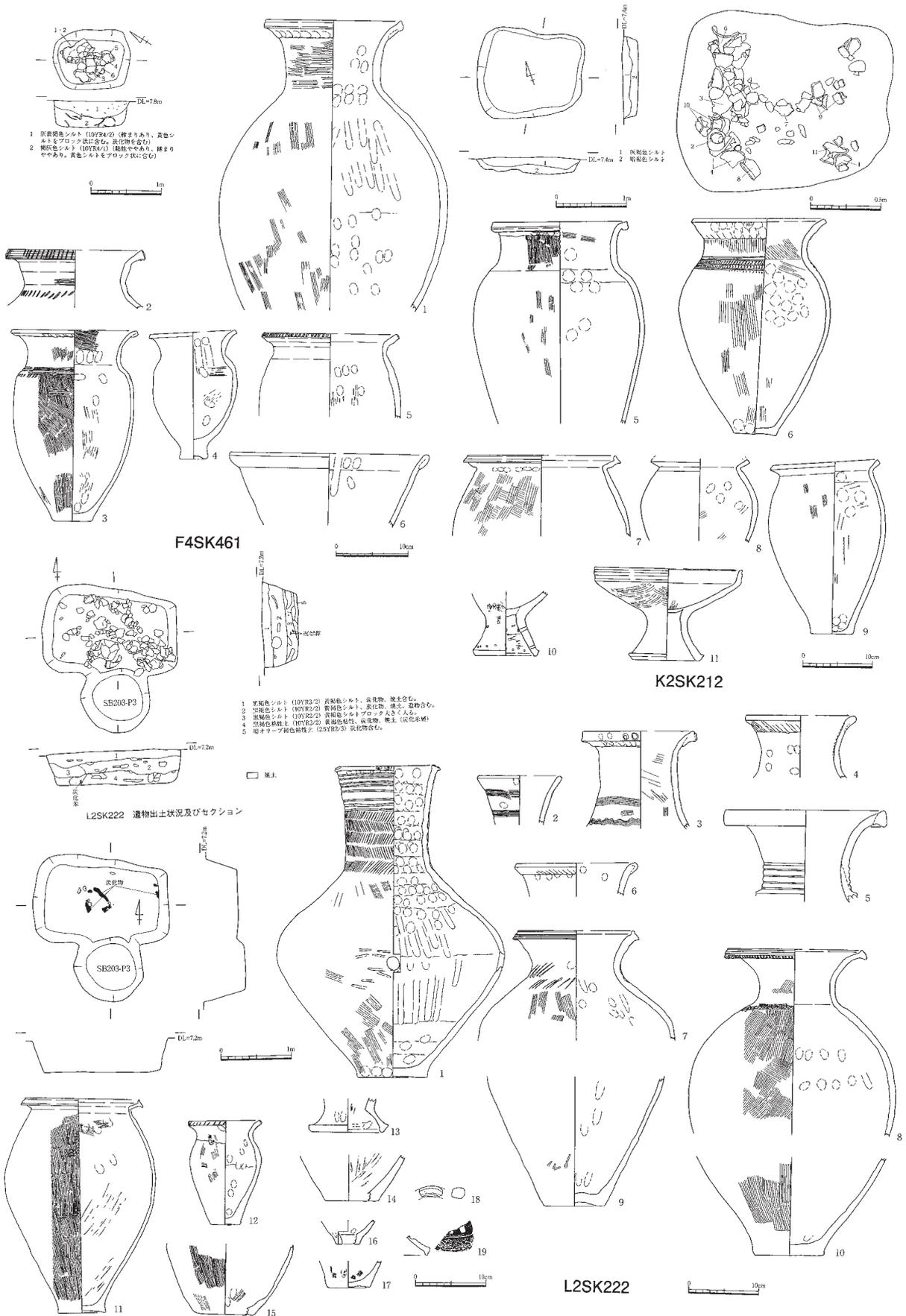
K2SK272

E4SK441

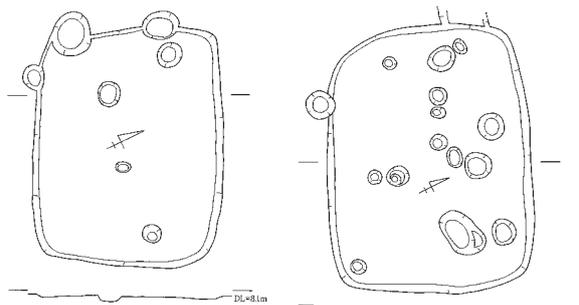
F4SK497

K2SK225

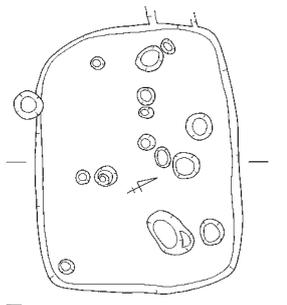
III-33図 中後期の土坑(1)



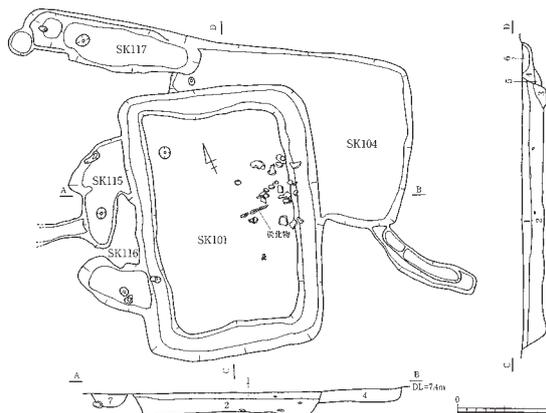
III-34図 中後期の土坑(2)



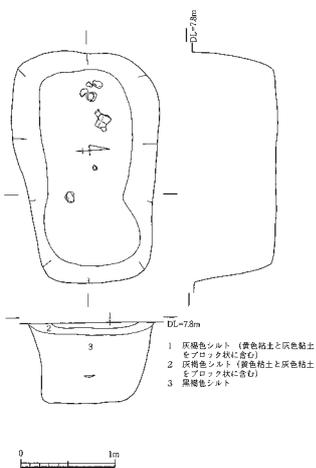
E7SK768



E7SK774

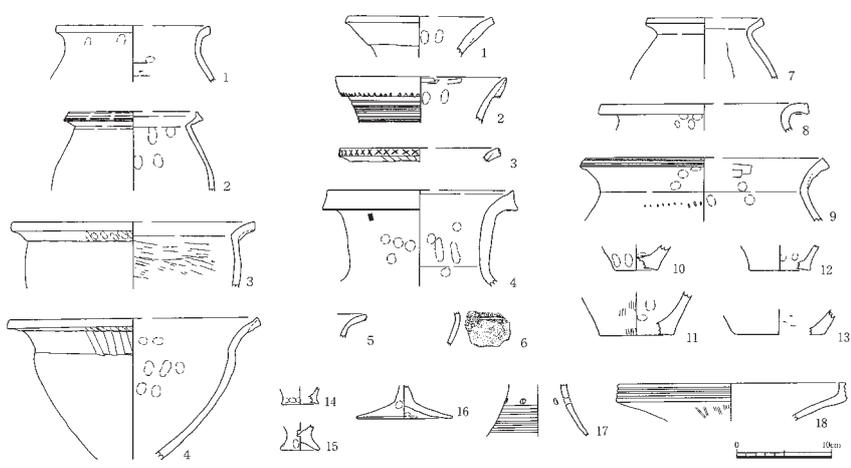


- L1SK104
 1 灰キリーブ褐色シルト (25Y3/3)
 2 黒褐色シルト (10YR2/3) に5cm以下の黄褐色シルトプロット混じる
 3 黒褐色シルト (10YR2/3)
- L1SK104
 4 黒褐色シルト (10YR2/3) に黄褐色シルトが少量混じる
 5 暗褐色シルト (10YR3/3) に3-5cm次の黄褐色シルトプロット混じる
 6 暗褐色シルト (10YR3/3) に褐色シルト混じる
- L1SK115
 7 黒褐色シルト (10YR2/3) に1-3cm次の黄褐色シルトプロットが少量混じる

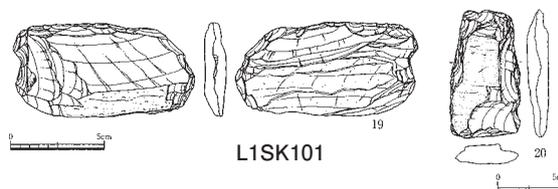


F4SK401

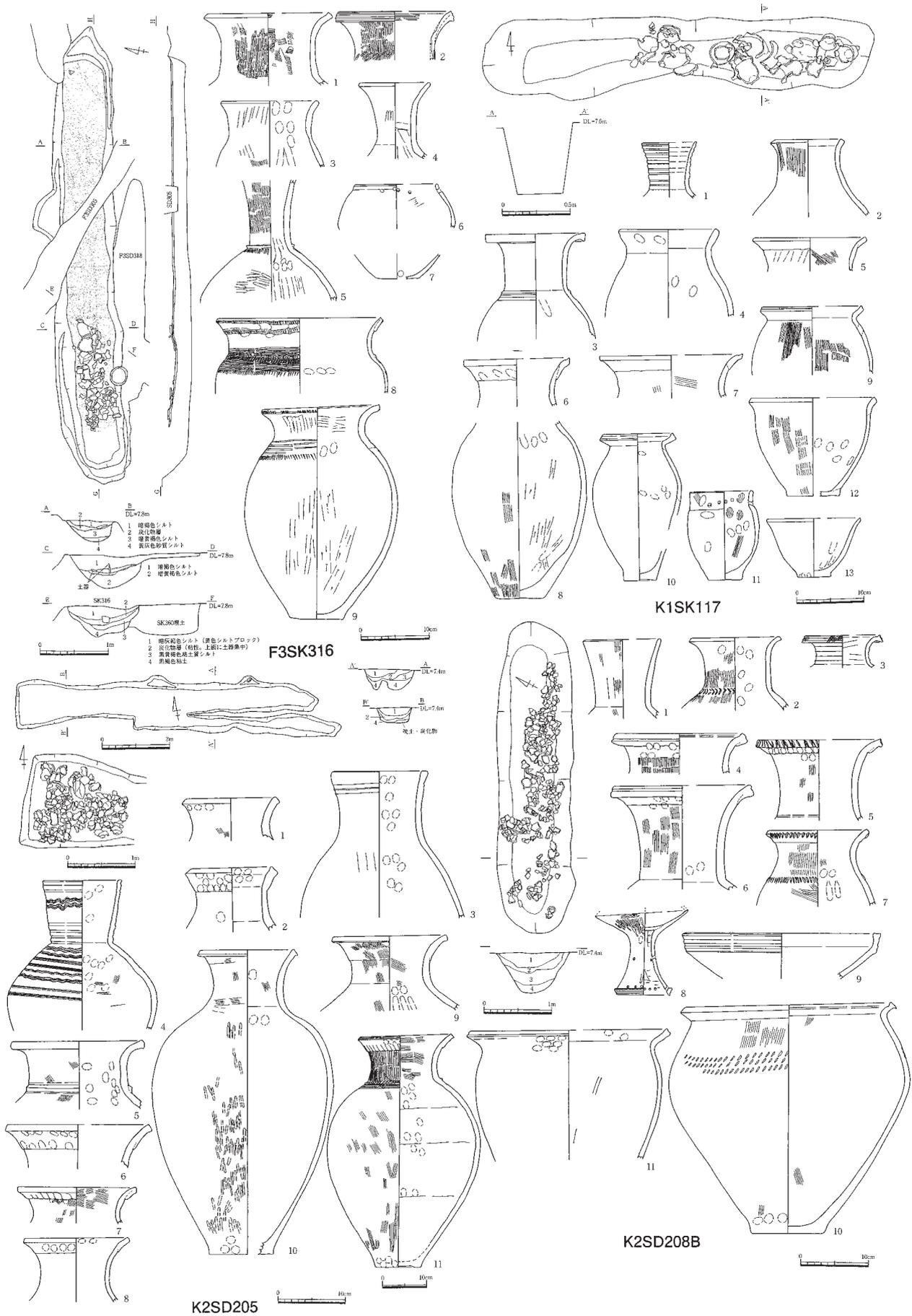
- 1 灰褐色シルト (黄褐色土と灰色粘土をプロット状に含む)
 2 灰褐色シルト (黄褐色土と灰色粘土をプロット状に含む)
 3 黒褐色シルト



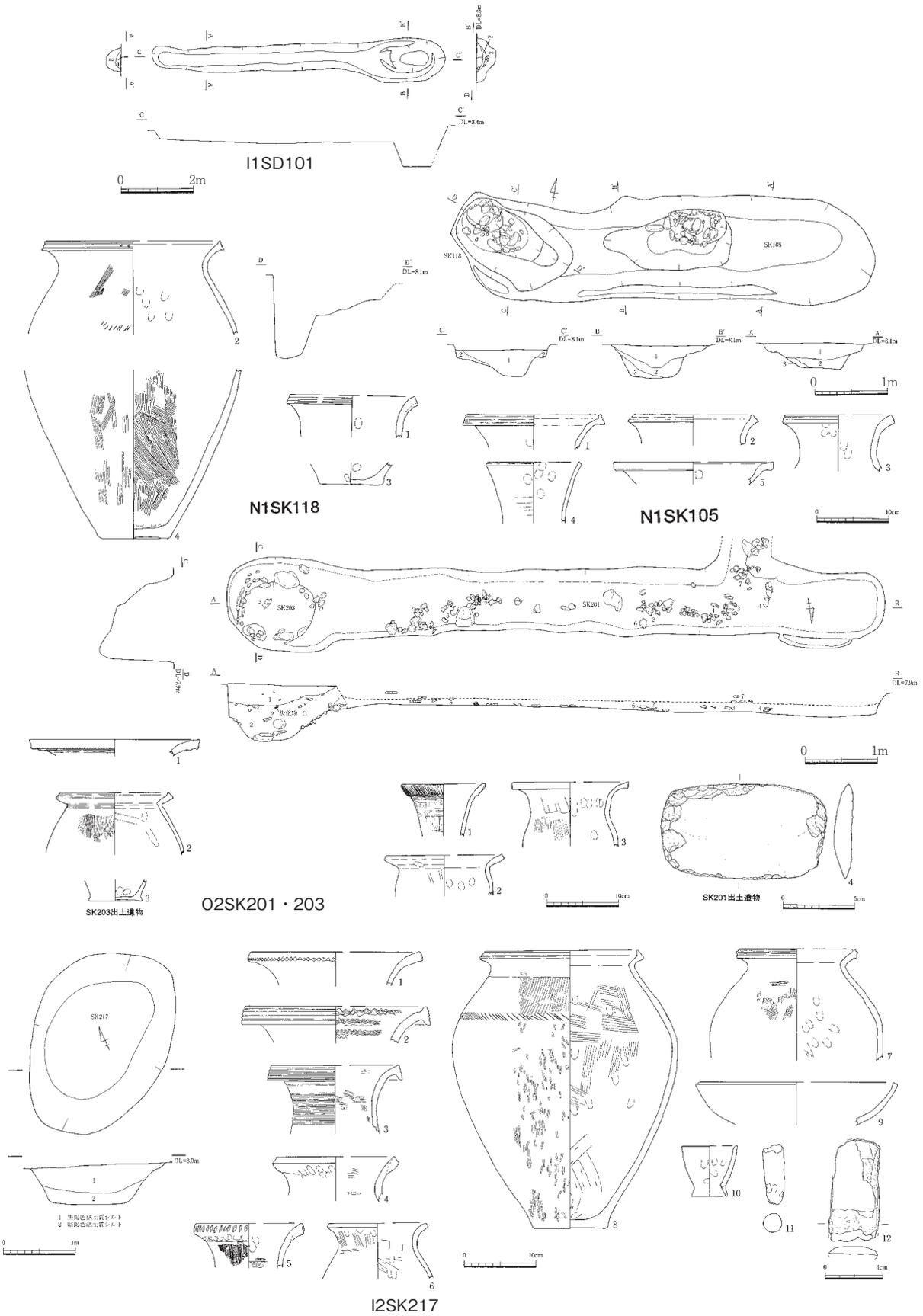
L1SK101



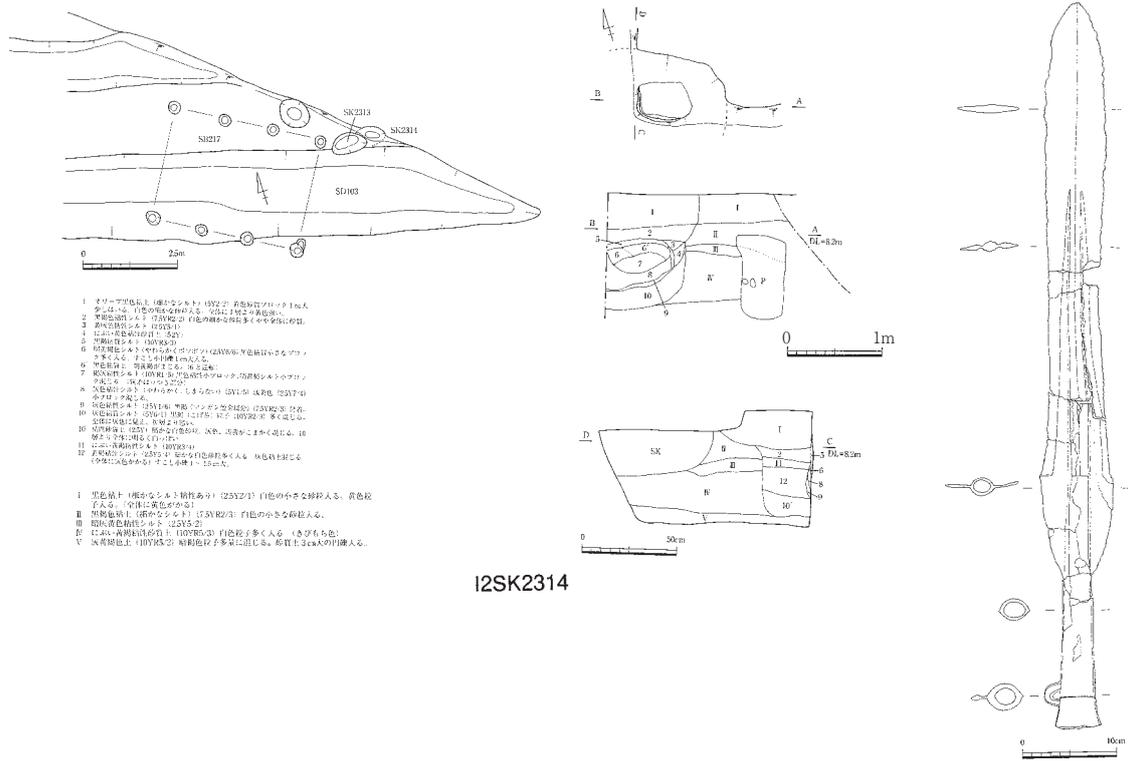
III-35図 中後期の土坑(3)



III-36図 中後期の土坑(4)



Ⅲ-37図 中後期の土坑(5)

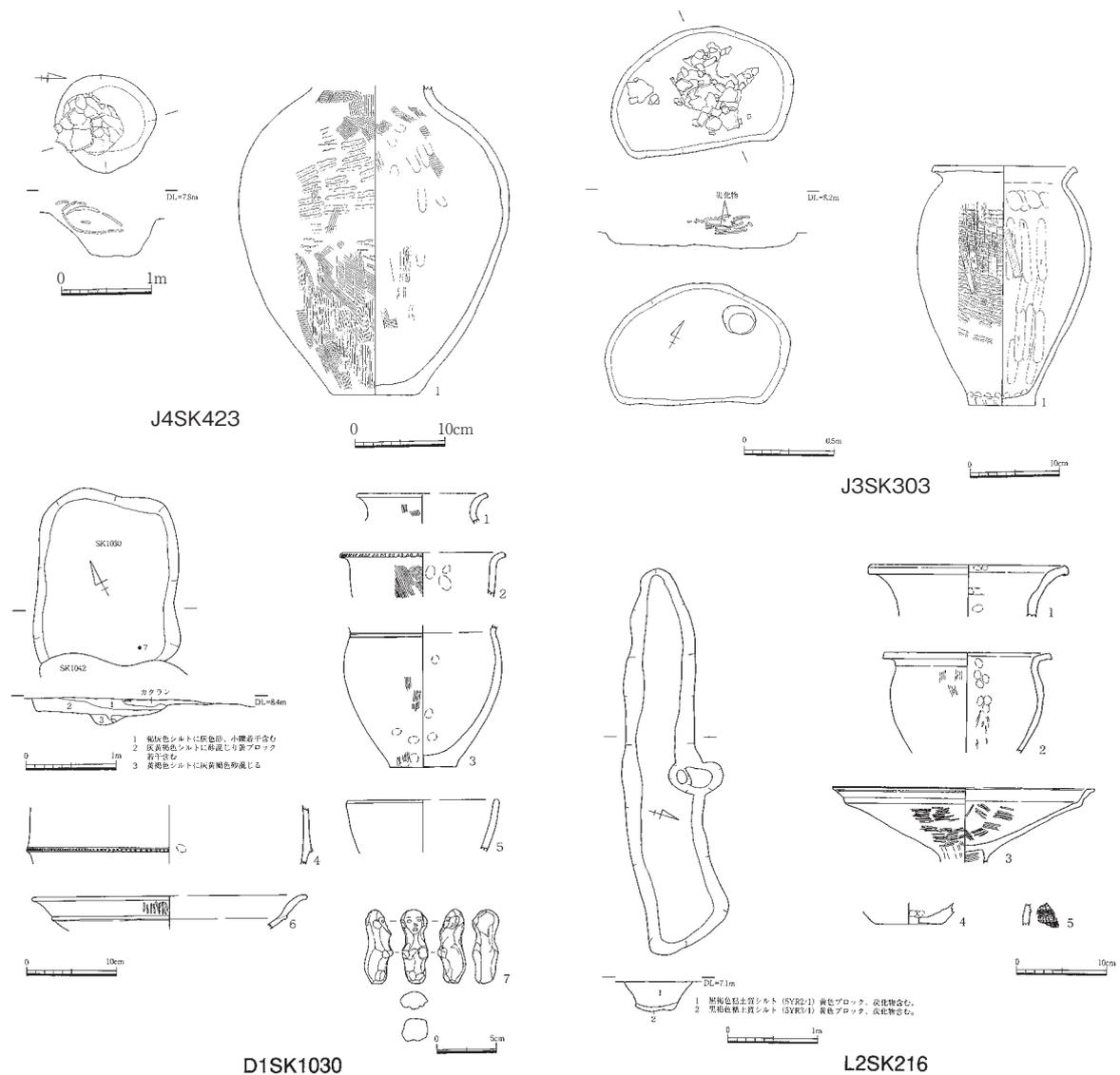


III-38図 中後期の土坑(6)

(5) 後期(Ⅲ-39図)

V-2期以降の土坑も数を激減させる。確実にこの時期の土坑として捕らえられるものは27基である。平面形は長方形、隅丸方形、楕円形、溝状のものがある。長方形、隅丸方形のものは長軸1.5m、短軸1m程の規模で、主軸方向は真北から東に50°~80°または西に60°~80°傾くものが多く、おおむね東西方向を向く。楕円形のもの長径1m前後を測る。

分布状況も散発的であるが、中後期にかけての詳細な時期を推定することのできない土坑の中には、タタキ目を残す胴部片が含まれるものもあり、集落が廃絶されるこの時期まで機能したものが含まれていると考えられる。



Ⅲ-39図 後期の土坑

IV 田村遺跡群弥生時代中後期の集落

〔要旨〕

弥生時代中後期、Ⅲ期からⅤ3期までの小期を分析対象とし、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑等の遺構の組み合わせから下位単位の抽出を行ない、どのような類型があるか分析を行なった。また下位単位は時系列で継続性が認められるものも存在し、それらのグループを中位単位とし、更に中位単位の集合体として、上位概念として「群」を設けた。「群」は大溝により大きく五群に分かれる。各群を構成する下位単位はどのように形成されているか、また鉄製品、銅製品、ガラス小玉の多寡の分析を行なうことにより、「群」の特徴を導き出した。

下位単位の構成は隣接する同一規模2棟1対の円形竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑の組み合わせになるもの、円形竪穴住居跡、小型方形竪穴住居跡、掘立柱建物跡の組み合わせからなるもの、掘立柱建物跡と溝状土坑がセットになり、竪穴住居跡との組み合わせになるものなど、種類の組み合わせパターンが認められ、多様性があることが判明した。大型住居跡を中心とし、それに小型の複数の住居跡が伴うと言った初期階層社会を想起されるような類例はほとんど見出せず、ほぼ等質な下位単位で集落は構成されていると考えられる。

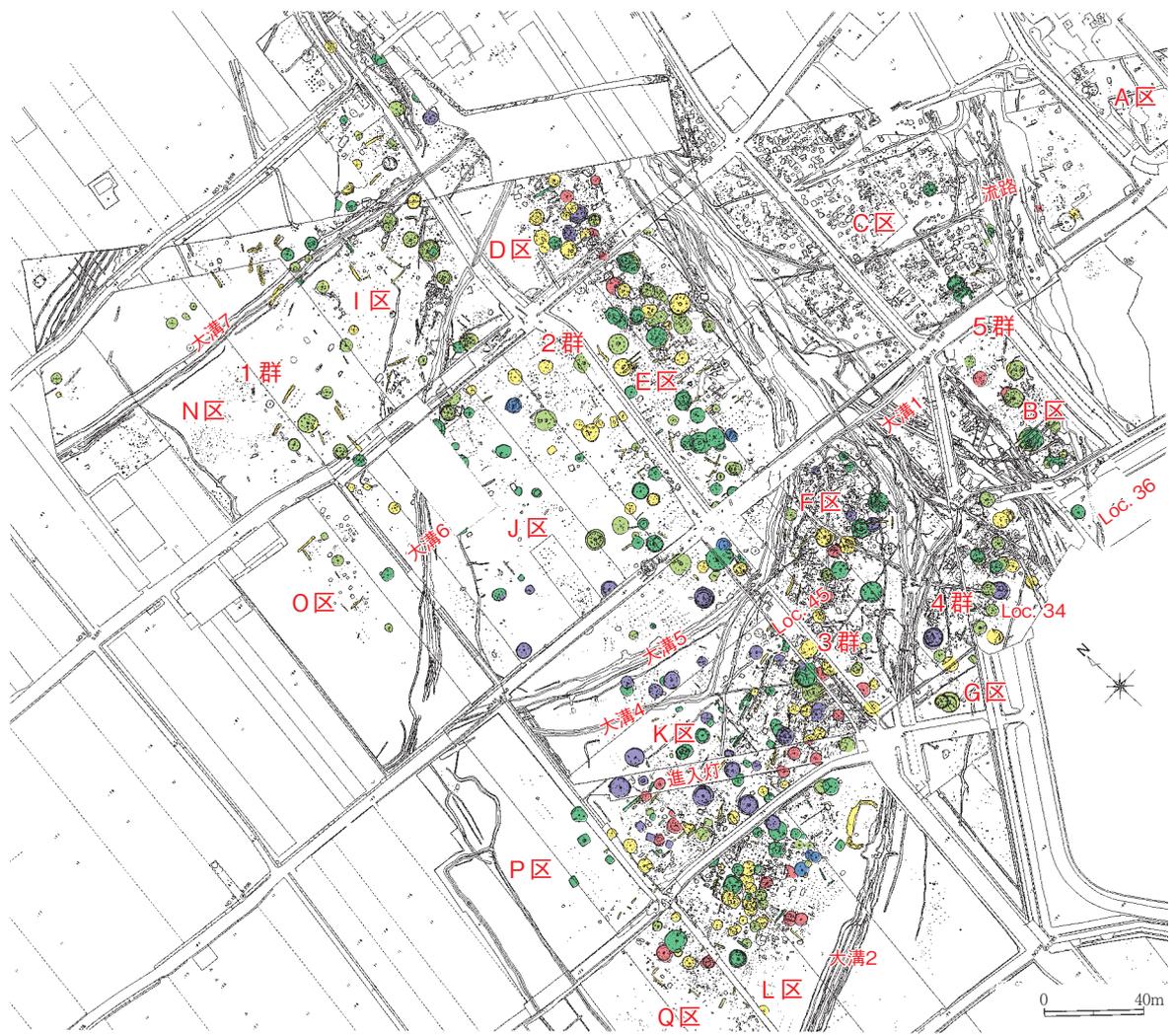
「群別作業」については全てが明解にできたわけではなく、部分的に「群」の相違を導き出せるものも存在した。

はじめに

田村遺跡群では多数の遺構を検出している。大部分の遺構群は中後期に含まれるもので、Ⅳ期からⅤ期にかけての時期に集中する。集落を構成している遺構群は竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝である。それらの遺構群は煩雑なほどの切り合い関係を見せており、集落の時間的変移、空間的差異はそのままではほとんど掴めないような状態である。

時間的変移の視点から集落構造を掴むためには各遺構の時期の細分化を行ない、各時期でどのような展開を見せるのかを把握することが前提となる。ここでは特に竪穴住居跡について、報告書で報告された時期に基づき、時期区分を行ない、各竪穴住居跡同士がどのような紐帯を持つのかの把握に努めた。それにどの様に掘立柱建物跡群、溝状土坑が関わっているか、下位単位の最小単位を抽出してみた。

空間的差異を掴むために、中後期の集落は大溝により視覚上大きく区画されており、遺構群を1～5群に便宜上区分した。それらが有効かどうかを下位単位が「群」毎に相違するのかどうかを探ってみた。



- Ⅲ期
- Ⅳ期
- Ⅳ2～Ⅳ1期
- Ⅴ1期
- Ⅴ2～3期
- Ⅴ3期以降

Ⅳ-1図 中後期全体図

1. 時期区分・遺構群の設定について

(1) 時期区分

中後期のⅢ期、Ⅳ期、Ⅴ期に該当する。小期についてはⅢ期を区別しなかった。ここではⅢ期についての集落については特に触れないが、Ⅳ期への継承過程を知るために継続性があるのかどうか触れるのみである。Ⅳ期はⅣ1期、Ⅳ2期に区分されるもののⅣ期とした。Ⅳ2期からⅤ1期の過渡期で一時期を設けた。Ⅴ期についてはⅤ1期を単独小期に設定し、Ⅴ2期とⅤ3期についてはまとめて小期とした。Ⅴ3期以降についてはここでは特に取り上げない。住居跡の存続期間は長短があると考えられるものの、それらを捨象してある程度の幅を持たせている。各小期に基づき集落変遷図は色分けを行なった(Ⅳ-1図)。掘立柱建物跡については、遺物がほとんど出土していないことから、時期決定はできていないものの、溝状土坑を伴うものは遺物量も多く、時期決定できたものは小期別に色分けを行なっている。

竪穴住居跡の時期別棟数はⅢ期37、Ⅳ期98、Ⅳ2～Ⅴ1期87、Ⅴ1期114、Ⅴ2～3期33棟である。

(2) 遺構群の設定

① 上位の遺構群

中後期に含まれる竪穴住居跡は約370棟である。中後期の集落は大溝により大きく五つの「群」に分かれる。北西から大溝6より北西部I、N、O区に展開する遺構群を1群、次いで大溝6と大溝4・5に囲まれたD、E、J区を2群、大溝4・5と大溝2に挟まれたF、K、L、P、Q区を3群、大溝2と大溝1に挟まれたF区南東部を4群、大溝1より東側のA、B、C区を5群と大きく区分した。尚、前回調査分のF、K区に挟まれた道路部分のLoc.45は3群に、K、L区の間に入る灯部分も3群に、F区の南東部分のLoc.34、36においても中後期の遺構群が展開しており4群に含めて、それぞれのその成果をここに取り入れた。

② 中位の遺構群

各群は更にその中で数カ所の遺構集中部が認められ、中位の遺構群と捉えることができる。特に2、3群についてはその傾向が強く、2群ではD区、E区にそれぞれ纏まりが認められ、またやや散在的に遺構群がJ区に展開する。3群についてはF区、K区、L区に集中部が認められる。また縁辺部のP区、Q区にも遺構は散在する。便宜上、中位の単位は各群の中の調査区名を付した。例えば3群中のF区に纏まりがある場合には、3群F区と中位単位名を付した。

③ 下位の遺構群

更に下位の最小単位として、性格の違う個別遺構から成り立っており、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑で構成されている。個別遺構同士での紐帯を掴み、関連性が認められるものについては最小単位とした。掘立柱建物跡については遺物量が少なく、時期決定が難しいものの他の遺構との距離間、方位等により関連性があるかどうか判断した。下位単位の呼称は例えば3群F区1組と言う具合に「組」を付して、最小単位を呼称した。3群のF区、K区を実際の分析対象とした。

2. 下位単位の抽出

下位単位の具体例を抽出するために遺構が多く検出されているものの、余りに煩雑で遺構の規模、時期が明確化できない密集部は避けた。試論的に条件の良い3群内のF、K区で作業を行なった。

(1) 3群F区の下位単位抽出

F区は3群の北東部に位置する。大溝4・5と大溝2に挟まれた区域で、北側部分では大溝が収斂するために遺構の密集度は比較的少ない。F区中央部周辺に竪穴住居跡が一塊となり、中位の遺構群を形成していると考えられる。弥生前期の竪穴住居跡も8棟検出しているが、中後期に該当するものは20棟余りである。その中でも核となるのは13棟である。時期的な棟数はⅢ期が2棟、Ⅳ期2棟、Ⅳ2～Ⅴ1期1棟、Ⅴ1期6棟、Ⅴ2～3期2棟である(Ⅳ-2図)。図上でそれぞれ時期別に同一規模の竪穴住居跡6組を結線で繋いだ。それぞれの組の竪穴住居跡同士が有意な関係にあるかどうかⅣ-3、4図に竪穴住居跡平面図と規模等の属性表を掲載した。

①3群F区1組

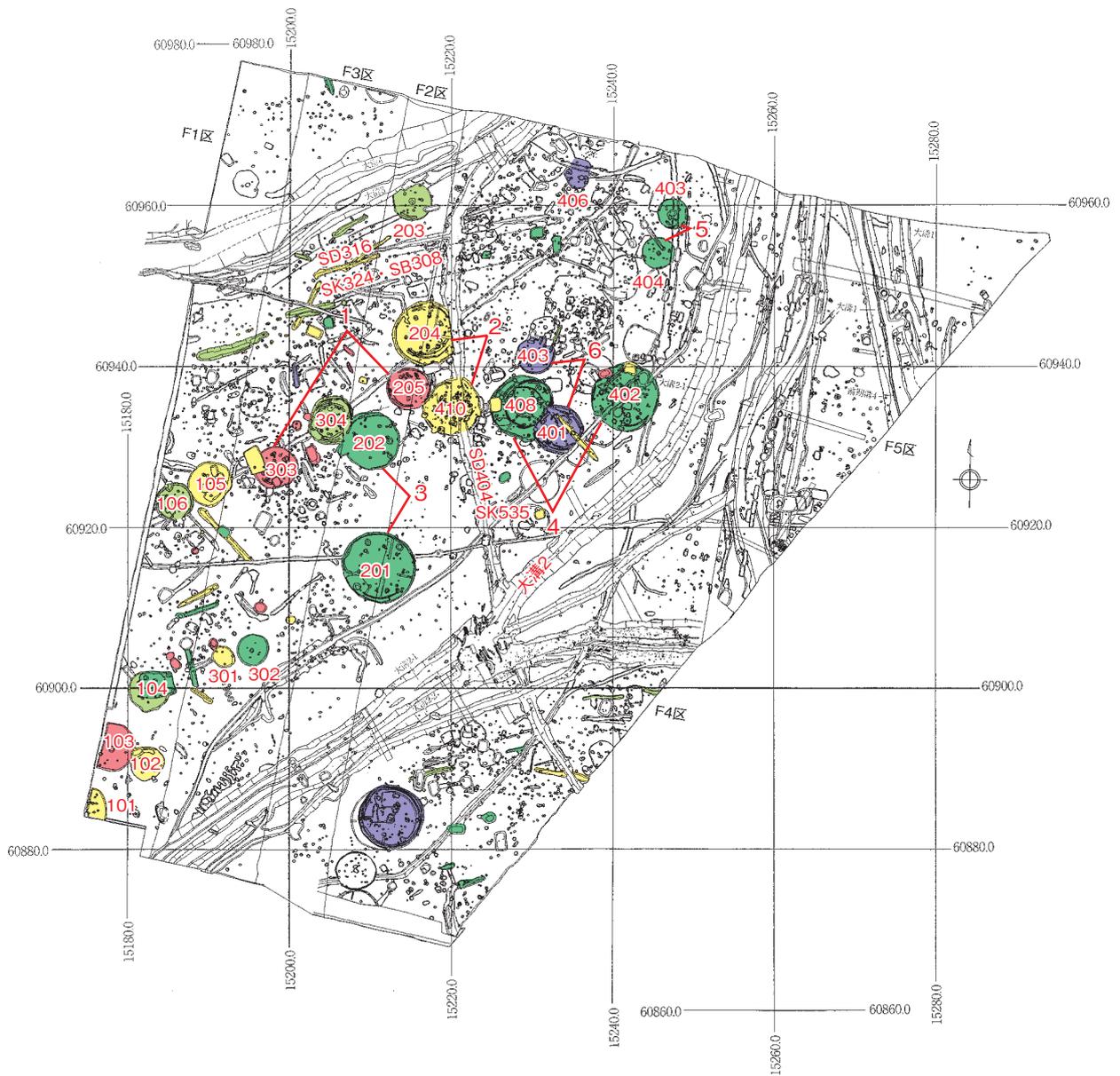
F2ST205とF3ST303の円形竪穴住居跡で構成される。時期はⅢ期である。約13m離れて構築されている。周辺域に同時期の遺構は小規模な土坑がF3ST303を取り巻くように点在するが、特徴のあるものは認められない。また掘立柱建物跡も周辺域には構築されていない。F2ST205の東側にはSD404の溝が南北にやや弧を描いて縦走する。F2ST205とF3ST303共に円形で規模は5m強の中型のもので、支柱穴、炉跡等もほぼ同一規模のもので、2棟の住居跡には紐帯が認められると判断した。

②3群F区2組

F2ST204とF4ST410の円形竪穴住居跡で構成される。時期はⅣ期である。規模は共に拡張を行っており、8mと7mの大型住居跡である。共に東南側部分がやや突出気味な点も共通の住居跡である。それぞれ凹線文の高杯、サヌカイト製石鏃が共通して出土している。2mと近接して構築されているものの、共に拡張を3回行っているところからしても時期差がある住居跡ではなく、同時併存したと考えられる。他に同時期の遺構として、北西に4m程離れた溝状土坑F3SD316と長さ約7mの溝状土坑を伴う掘立柱建物跡F3SB308・F3SK324が、南東に4m程離れてF4SK505それぞれ位置している。F3SD316、F4SK505には掘立柱建物跡が検出されていないものの、周りで多くの柱穴を検出しており、F3SB308・F3SK324と同様の掘立柱建物跡を伴う溝状土坑の可能性が高い。円形竪穴住居跡の3回ほどの拡張に伴い掘立柱建物跡・溝状土坑も複数構築されている。他に長方形の2.04×1.28mの土坑F3SK325が掘立柱建物跡F3SB308・F3SK324近くに位置している。また同時期のF4SK535も1.42×1.16mの方形の土坑を検出している。溝状土坑、土坑からは凹線文壺、口縁部貼付口縁壺等が纏まって出土しており、近似した遺物出土内容を示している。3群F区2組は2棟の大型の円形住居跡、掘立柱建物跡・溝状土坑、長方形土坑の組み合わせである。

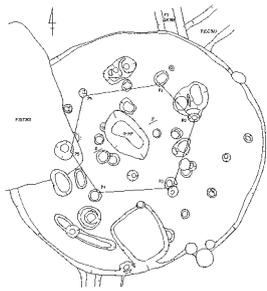
③3群F区3～5組

Ⅴ1～2期に相当する円形竪穴住居跡は8棟検出している。ここでは3組から5組についてまとめ

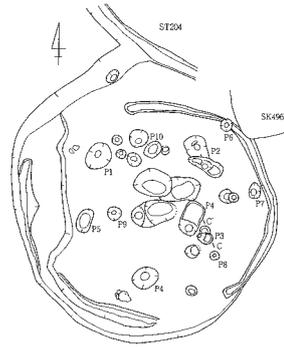


IV-2図 F区下位単位

Ⅲ期



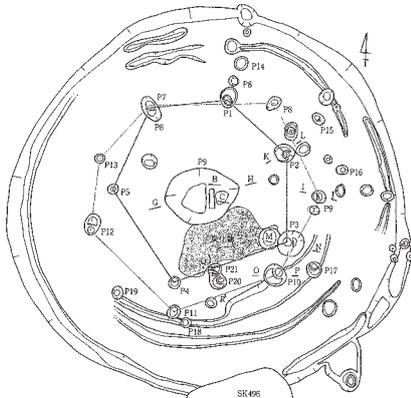
F3ST303



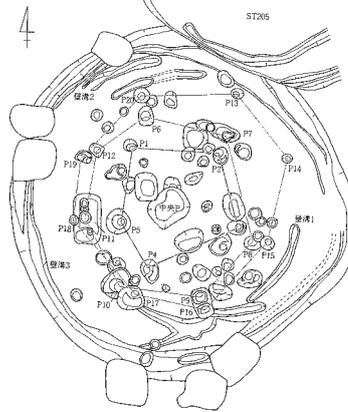
F4ST205

3群F区1組	時期	形状	規模(m)	主柱穴数	炬跡形状	炬跡規模(cm)	炬跡深さ(cm)
F3ST303	Ⅲ2	円形	5.02×5.46	6	楕円	69×180	46
F4ST205	Ⅲ	円形	5.55×6.2	10内6	楕円	55×95	45

Ⅳ1~2期



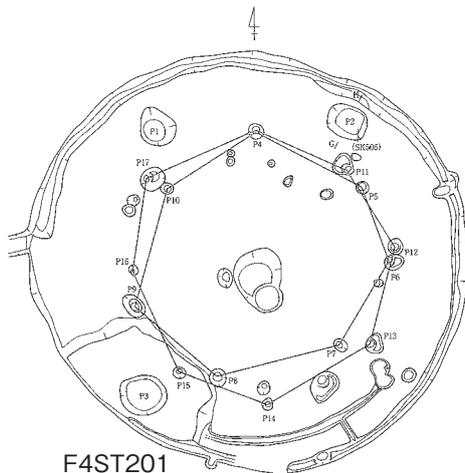
F4ST204



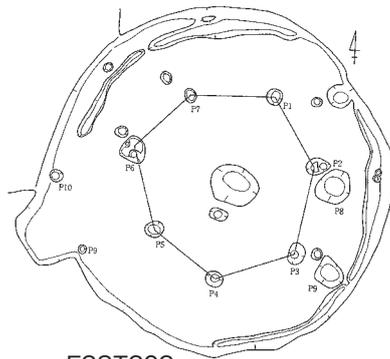
F4ST410

3群F区2組	時期	形状	規模(m)	主柱穴数	炬跡形状	炬跡規模(cm)	炬跡深さ(cm)	壁溝数
F4ST204	Ⅳ2	円形	8.1×8.6	6	楕円	152×118	33	3
F4ST410	Ⅳ1~2	円形	6.97×7.0	5~7	隅丸長方形	81×70	41	3

Ⅴ1~2期



F4ST201



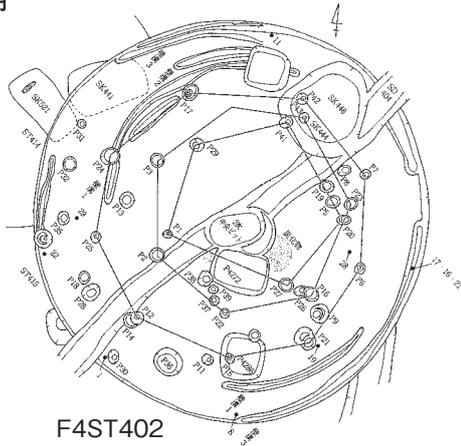
F2ST202

3群F区3組	時期	形状	規模(m)	主柱穴数	炬跡形状	炬跡規模(cm)	炬跡深さ(cm)	壁溝数
F4ST201	Ⅴ1~2	円形	7.2/8.7×9.3	7	円形	98×100	32	2
F2ST202	Ⅴ1	円形	7.3×7	7	楕円	100×80	56	1

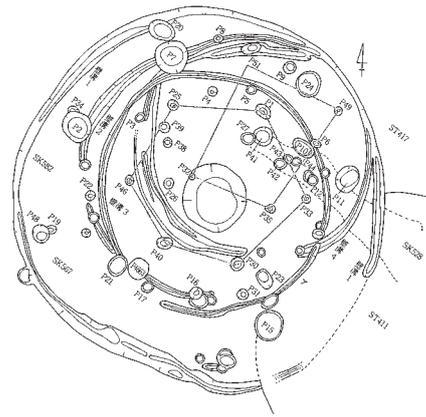
Ⅳ-3図 F区下位単位のみみ合せ(1)

S=1/80

V1~2期



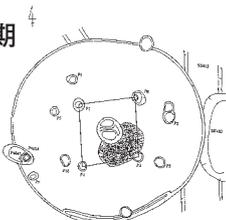
F4ST402



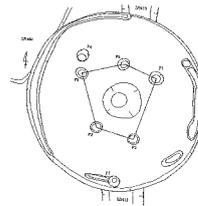
F4ST408

3群F区4組	時期	形状	規模(m)	主柱穴数	炉跡形状	炉跡規模(cm)	炉跡深さ(cm)	壁溝数
F4ST402	V1~2	円形	8.4×8.5	9	楕円	124×86	78	3
F4ST408	V1~2	円形	7.88×7.8	6	円形	148×132	52	3

V1~2期



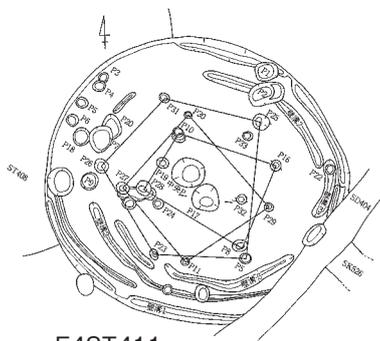
F4ST404



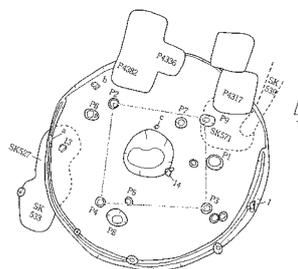
F4ST403

3群F区5組	時期	形状	規模(m)	主柱穴数	炉跡形状	炉跡規模(cm)	炉跡深さ(cm)	壁溝数
F4ST404	V1~2	円形	4.8×3.88	4	円形	56×20	17	1
F4ST403	V1~2	円形	3.82×3.65	4~5	円形	114×94	16	1

V3期



F4ST411



F4ST409

3群F区6組	時期	形状	規模(m)	主柱穴数	炉跡形状	炉跡規模(cm)	炉跡深さ(cm)	壁溝数
F4ST411	V3	円形	6.6×6	4~5	円形	64×56	45	4
F4ST409	V3	円形	4.7×4.7	4	円形	104×100	18	1

IV-4図 F区下位単位のみ合せ(2)

て取り扱う。3組はF4ST201、F2ST202、4組F4ST402、F4ST408、5組F4ST404、F4ST403がそれぞれ対になるものと考えられる。5組の2棟はやや小型のもので、他は径7～8mの大型のものである。

3組のF4ST201とF2ST202は約8m離れ、F4ST201は建て替えが行なわれており、最終的な規模は径約9mの大型住居跡である。1次の規模は推定で7.2mと考えられ、F2ST202とはほぼ同一規模である。支柱穴も7本であり、また炉跡も共に径約1mの円形である。F4ST201では住居穴内に貯蔵穴と考えられる直径90cmの円形土坑を3基検出している。F2ST202でも貯蔵穴2基が伴っているところから、F4ST201とF2ST202は紐帯があるものと考えられる。

4組はF4ST402とF4ST408である。約5m離れ、径約8mの大型のもので、共に2回の建て替えが行なわれている。住居跡の細部の属性では相違するところもあるものの、共にガラス小玉を持つなど共通項も多いところから紐帯が存在したと判断した。

5組はF4ST404、F4ST403で、2m弱程離れた径4.8mと3.8mの小型のものである。共に拡張等も認められない。

3～5組は円形住居跡2棟1対を基本とする。3組と4組は12m、4組と5組も同様に約12mの等間隔で配置している。掘立柱建物跡は周囲にあるものの、小期の時期決定できていないものばかりではあるが、おそらく3～5組に伴う掘立柱建物跡も存在し、他に土坑が幾つか伴い下位単位を形成していたものと考えられる。溝状土坑を伴う掘立柱建物跡は周辺域では検出されていないことから、3～5組は竪穴住居跡2棟1対に小型掘立柱建物跡が伴う例と考えられる。但し、この三組については、個々の組が単独で存在したのではなく6棟で紐帯を持ち、中位単位を構成していた可能性がある。

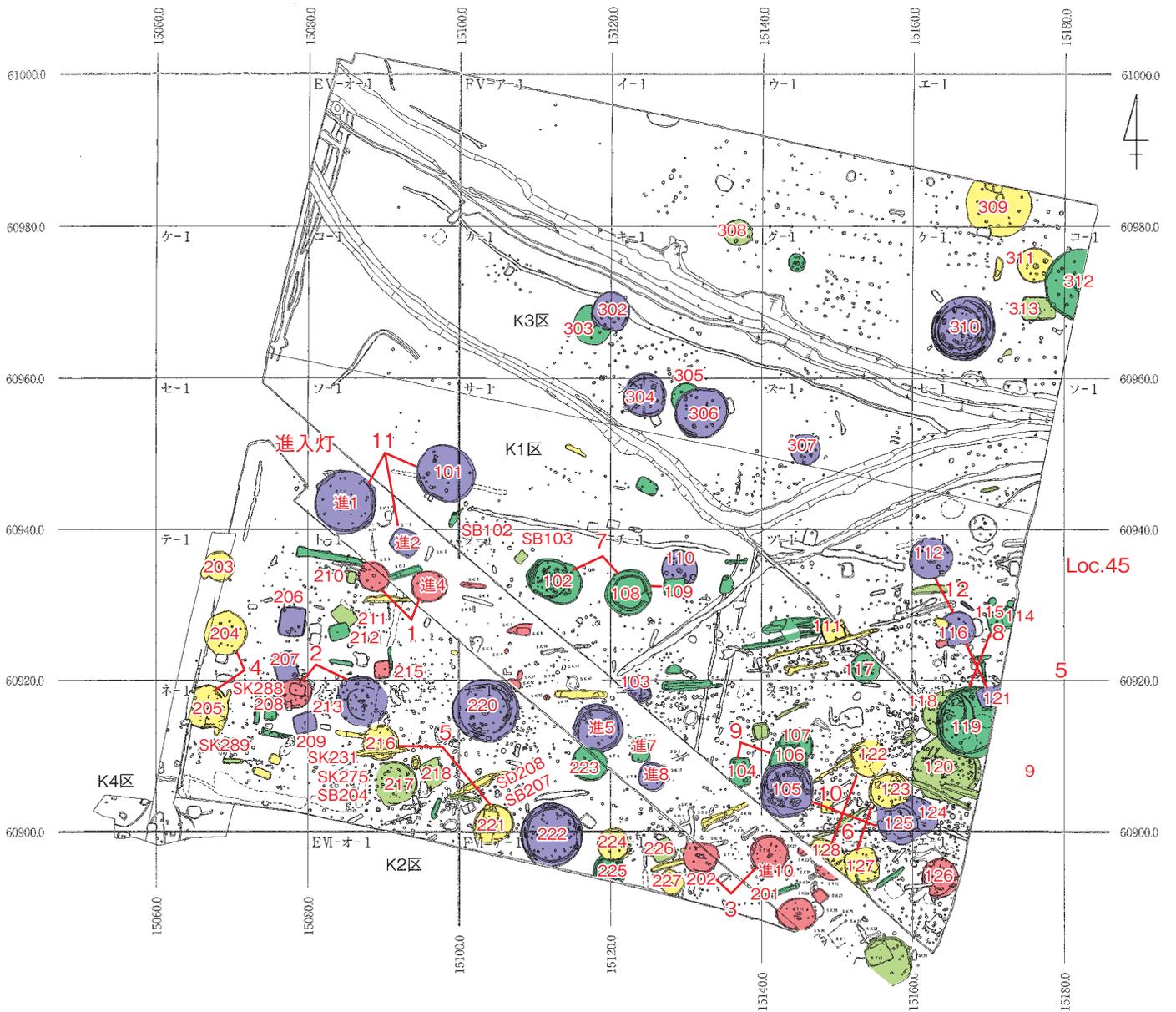
④3群F区6組

F4ST409、F4ST411はV3期に相当する。約4m離れて検出している。F4ST411は建て替えを2回行っており、1次住居跡の規模は4.5m程になり、F4ST409の4.7mとはほぼ同一規模になる。1組から5組では円形住居跡については規模、出土遺物等にも共通項が認められたものの、6組については時期、規模程度しか認められない。しかしながら周辺域で同時期のものは認められず、遺構属性、出土遺物等に共通する要素は少ないものの、紐帯の認められる例の可能性はある。掘立柱建物跡は溝状土坑を伴うものは周辺域に認められない。小型の掘立柱建物跡については先に述べたように小期は比定できておらず、判然としないが、伴う可能性がある。

(2)3群K区の下位単位抽出

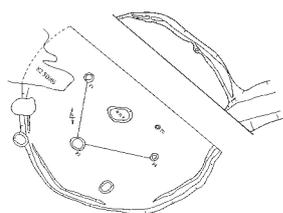
K区ではF区からの続きの遺構群、L区へ更に続く遺構群となっている。F区との境である前回調査のLoc.45の南側部分とK区東南部に遺構の密集地帯が認められる。K区内で屈曲する大溝4から北側部分の遺構群は3群から外れる。K区西側部分、前回調査の進入灯部分と更に西側部分のP区にかけて遺構は密集するものの、L区程の煩雑な遺構切り合い関係は認められず、下位単位抽出には適していると考えられる。

①3群K区1～3組

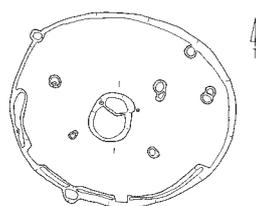


IV-5図 K区下位単位

Ⅲ期

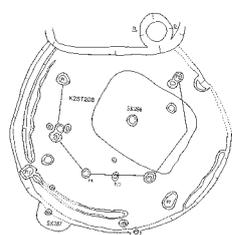


K2ST210 (進入灯ST3)

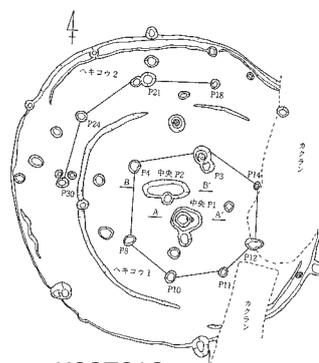


進入灯ST4

3群K区1組	時期	形状	規模(m)	主柱穴数	灯跡形状	灯跡規模(cm)	灯跡深さ(cm)	壁溝数
K2ST210	Ⅲ	円形	5.6×5.6	(3)	楕円形	52×31	25	1
進入灯ST4	Ⅲ	円形	4.8×4	4	楕円形	140×90	10	1

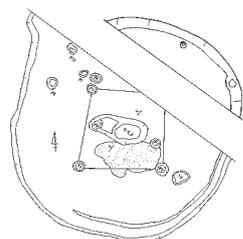


K2ST208

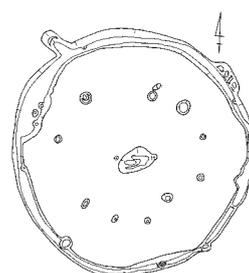


K2ST213

3群K区2組	時期	形状	規模(m)	主柱穴数	灯跡形状	灯跡規模(cm)	灯跡深さ(cm)	壁溝数
K2ST208	Ⅲ	円形	4.6×4.6	(5)	不明	不明	不明	1
K2ST213	Ⅲ	円形	7.1×6.6/4.4×4.6	4/7	楕円形/長楕円形	100×40/55×65	19/20	1



K2ST202



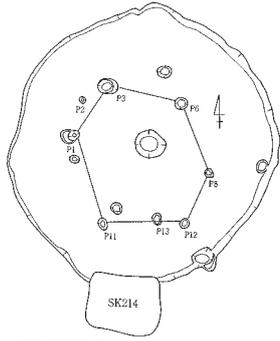
進入灯ST10

3群K区3組	時期	形状	規模(m)	主柱穴数	灯跡形状	灯跡規模(cm)	灯跡深さ(cm)	壁溝数
K2ST202	Ⅲ	円形	4.7×[3.3]	(4)	楕円形	120×50	30	1
進入灯ST10	Ⅲ	円形	5.2	(6)	楕円形	140×74	20	1

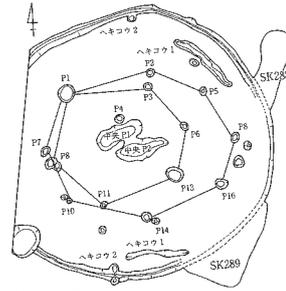
Ⅳ-6図 K区下位単位の組み合わせ(1)

S=1/80

IV2期

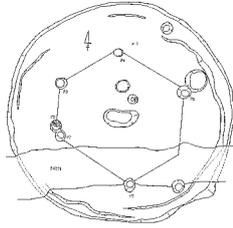


K2ST204

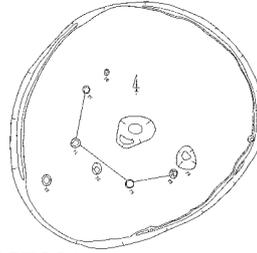


K2ST205

3群K区4組	時期	形状	規模(m)	主柱穴数	炉跡形状	炉跡規模(cm)	炉跡深さ(cm)	壁溝数
K2ST204	IV2	円形	5.7	6	円形	68×60	16	
K2ST205	IV2	円形	6.0	6/8	楕円形/楕円形	100×34/114×48	15/20	2

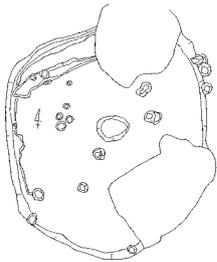


K2ST216



K2ST221

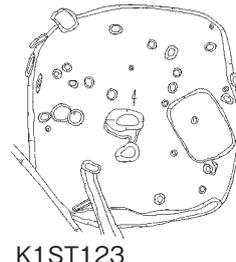
3群K区5組	時期	形状	規模(m)	主柱穴数	炉跡形状	炉跡規模(cm)	炉跡深さ(cm)	壁溝数
K2ST216	IV	円形	4.8×4.6	5	楕円形	72×34	8	1
K2ST221	IV	円形	5.6×4.9	[4]	楕円形	78×55	24	1



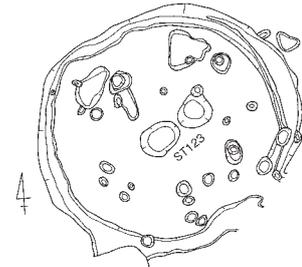
K1ST122



K1ST128



K1ST123



K1ST127

3群K区6組	時期	形状	規模(m)	主柱穴数	炉跡形状	炉跡規模(cm)	炉跡深さ(cm)	壁溝数
K1ST122	IV2	円形	5.1×4.3	4	円形	70	50	
K1ST128	IV2	円形	5.5	[3]	楕円形	60	27	1
K1ST123	IV2	円形	5.8	5	楕円形	90×60	37	1
K1ST127	IV2	隅丸方形	4.7×4.7		楕円形	80×65	27	1

IV-7図 K区下位単位の組み合わせ(2)

Ⅲ期の竪穴住居跡は3群内西側部K、L区を中心として16棟検出されている。Ⅲ期の住居跡が最も多く集中する個所である。L区では大型掘立柱建物跡も8棟検出しており、Ⅲ期の中心部である。その中でK2ST210・進入灯部ST4、K2ST208・K2ST213、K2ST202・進入灯部ST10の三組について取り上げる。

1組のK2ST210・進入灯部ST4はK区の西寄りに位置している。約3m離れて2棟が構築されている。規模は径5.6、4.8mのもので支柱穴はおそらく共に4本と考えられる。炉跡は進入灯部ST4が大きく1.4m×0.9mの楕円形のものである。2組のK2ST208・K2ST213はK区の南西部で約3m離れて構築されている。K2ST213の方が大きく径7.1mを測るものの、建て替えが行なわれており、1次住居はK2ST208とほぼ同規模で径4.6mである。3組のK2ST202・進入灯部ST10はK区の南東部に位置し、約4m離れて構築されている。規模は径4.7mと5.2mの中型のものである。炉跡も共に大きく1mを超す楕円形のものである。底面は共に段を有し、炉跡の長軸両脇に小ピットを持つ。3組の近辺に同時期の竪穴住居跡2棟が存在しており、単純に2棟1対ではなく、2棟1対を一単位として、二単位で構成される可能性がある。それは1組、2組も比較的近接しており、同様の構成を取ることからして、二単位で一つの紐帯を持つ可能性を指摘できる。

Ⅲ期の遺構は小土坑が散在するものの、特に他の性格の違う遺構と組み合わせは認め難い。F2ST215の小竪穴状遺構とでも呼べそうな一辺2.2mの小型方形竪穴住居跡が2組に近接し、また1.5m程の方形の土坑が数基認められるものの、住居跡と明確にセットになる複数例がないところからして、1～3組は竪穴住居跡2棟のみの組み合わせになる可能性がある。竪穴住居跡、土坑以外ではL区で大型掘立柱建物跡がまとまり検出されており、共同管理的な側面が強い。

②3群K区4～6組

Ⅳ期の竪穴住居跡は3群内K区では12棟で、Loc.45でも4棟認められている。ここでは以下の8棟を取り上げる。4組F2ST204・F2ST205、5組F2ST216・F2ST221、6組K1ST122・K1ST123・K1ST127・K1ST128である。また溝状土坑を伴うと考えられる掘立柱建物跡も9棟を検出しており、該期での位置付けも取り上げる。

4組F2ST204・F2ST205は西端に位置し、約4m離れて構築されており、規模は径5.7mと6mの中型の竪穴住居跡である。F2ST205の方は建て替えが行なわれており、炉跡は2ヶ所検出している。支柱穴は6本で、F2ST205が建て替え後8本となっている。この2棟の住居跡の北側4m離れて径3.9mの小型の竪穴住居跡F2ST203が位置している。3棟の住居跡の構成の可能性もあるものの判然としない。

5組のF2ST216・F2ST221は径4.8m、5.6mのやや小さい中型のものである。13m程離れて構築されている。規模等は部分的に似るものの紐帯があるのかは确实視できない。Ⅳ期の住居跡群は組になる場合は2棟の住居は5m前後の間隔を保ち、組と組との間隔が12～18mとほぼ等間隔で並ぶようであるから、5組としたF2ST216とF2ST221との距離は離れ過ぎのようである。

6組はK1ST122・K1ST123・K1ST127・K1ST128の4棟である。K区の南東部に同時期の4棟が構築されている。K1ST122とK1ST123、K1ST127とK1ST128の2対が極めて近接している。K1ST127とK1ST128は切り合い関係にあり、K1ST127がK1ST128を切っており、新たに構築さ

れた竪穴住居跡である。K1ST127の平面形は隅丸方形でK1ST128も全貌は不明だが隅丸方形になる可能性がある。規模はK1ST127が一辺4.7m、K1ST128は円形の場合だと径約5.5m、隅丸方形だと一辺が推定で4.8mとなり、やや小型の分類に含まれる。K1ST128からK1ST127へと建て替えが行なわれた可能性がある。K1ST122とK1ST123は切り合い関係にないものの、K1ST122が楕円形に近い竪穴住居跡である。規模はK1ST122が5.1m、K1ST123は5.8mと中型のものである。K1ST122・K1ST128が2棟1対となり、同時に建て替えを行ない平行移動しK1ST123・K1ST127の2棟1対となったと考えられる。

図を掲載した以外にもK区南中央部に6組と似た組み合わせとしてK2ST224・K2ST227をあげることができる。円形と隅丸方形の竪穴住居跡が4m程の距離を置いて対になっていると考えられる。またLoc.45の調査区でもLoc.45ST5、Loc.45ST9の大型竪穴住居跡が5m程の間隔を置いて構築されるなど、3群K区ではIV期の竪穴住居跡は2棟1対が複数例認められる。

IV期のものとして特徴的に出現する溝状土坑と掘立柱建物跡がセットになった例が複数例認められる。それらの多くはIV2期の竪穴住居跡を切って構築されている例が多い。4組のF2ST205を切って溝状土坑のSK288・289、5組FST216を切ってF2SK231、F2SK275・F2SB204が構築され、またF2ST221を切ってF2SD208・F2SB207が構築される例が認められる。IV期内での掘立柱建物跡・溝状土坑と竪穴住居跡との切り合い、竪穴住居跡同士での切り合い関係が複数例認められるところから、IV期は3細分の可能性が強い。掘立柱建物跡・溝状土坑と竪穴住居跡の関係は、切り合い関係が多いため、紐帯があるものではなくIV期内での時期差で構築されていたと考えられる。掘立柱建物跡・溝状土坑の性格自体が判然としていないものの、竪穴住居跡の跡に構築される例が多いところから住居として機能していた可能性がある。特に南西部の竪穴住居跡の跡に構築されたものはその可能性が強い。

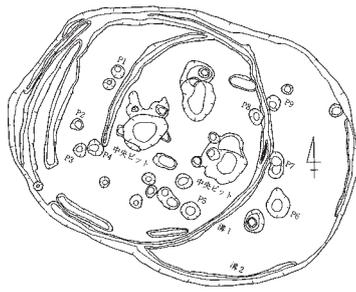
3群K区のIV期の類型は竪穴住居跡2棟1対を基本構成とし、掘立柱建物跡・溝状土坑群で成り立っていたと考えられる。

③3群K区7～9組

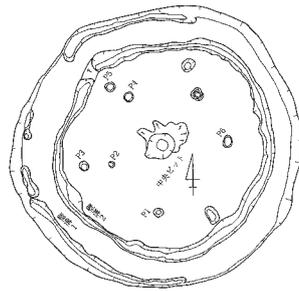
IV1期に該当する竪穴住居跡は13棟確認している。溝状土坑と掘立柱建物跡がセットになるものも確認している。ここでは竪穴住居跡三組を取り上げる。7組K1ST102・K1ST108・K1ST109、8組K1ST119・K1ST114・K1ST115、9組K1ST106・K1ST107・K1ST104である。

7組K1ST102・K1ST108・K1ST109は円形竪穴住居跡と小型長方形竪穴住居跡が近接して構築されている。K1ST102は焼失後建て替えが行なわれている。焼失以前にも一度拡張が行われており、短期間の内に3回の建て替えがあったと見なせる。1・2次住居は同一の炉跡を使用している。焼失後は西側に建て直しており、それに従い炉跡も移動している。1・2次と3次の規模はほとんど同じで径5.5mである。K1ST108はK1ST102から約3m離れて構築されている。規模は径6mで壁際にベッド状遺構を持ち、投弾が9個纏まって出土しているのが特徴的である。K1ST109は2.9×2.3mの長方形の竪穴状遺構とでも言える住居跡である。炉跡、周溝等の付属施設は検出していない。また支柱穴も判然としないものである。K1ST108から約2m離れて構築している。遺物も少ないものの、IV1期に相当する。周りに小型の掘立柱建物跡が幾つか存在するものの、紐帯があるか

V1期



K1ST102



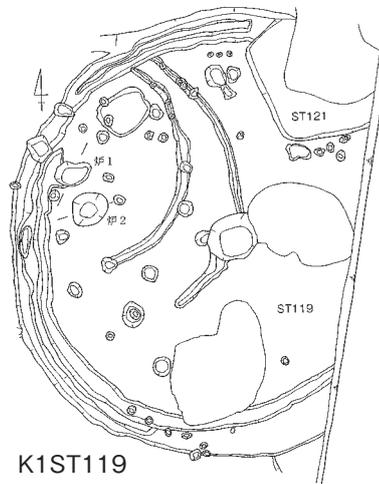
K1ST108



K1ST109

3群K区7組	時期	形状	規模[m]	主柱穴数	炉跡形状	炉跡規模[cm]	炉跡深さ[cm]	壁溝数
K1ST102	V1	円形	5.2×5.5	9	楕円	96×75/110×80	33/30	3
K1ST108	V1~2	円形	6.0	6	円形	55	35	2
K1ST109	V1	長方形	2.9×2.3	{3}				

V1期



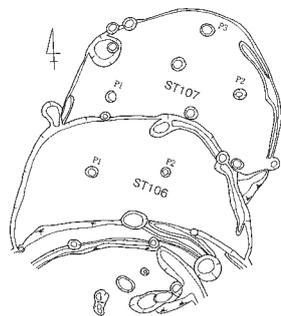
K1ST119



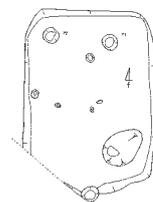
K1ST114・115

3群K区8組	時期	形状	規模[m]	主柱穴数	炉跡形状	炉跡規模[cm]	炉跡深さ[cm]	壁溝数
K1ST119	V1	円形	9.5	{2}	円形	95	54	2
K1ST114	V1	長方形	2.8×2.0		円形	30	15	
K1ST115	V1	長方形	2.5×1.9					

V2~3期



K1ST106・107



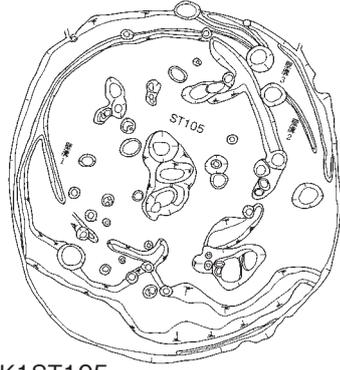
K1ST104

3群K区9組	時期	形状	規模[m]	主柱穴数	炉跡形状	炉跡規模[cm]	炉跡深さ[cm]	壁溝数
K1ST107	V1	円形	4.6	3				1
K1ST106	V1	円形	5.1	{2}				1
K1ST104	V1	長方形	3.8×2.8	2				

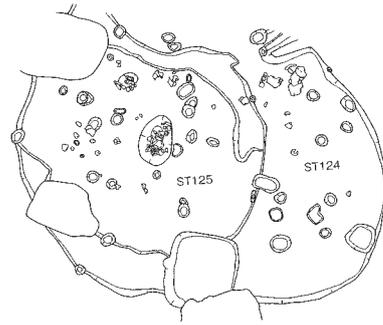
IV-8図 K区下位単位の組み合わせ(3)

S=1/80

V2~3期



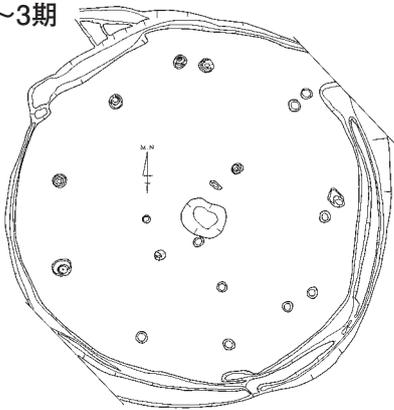
K1ST105



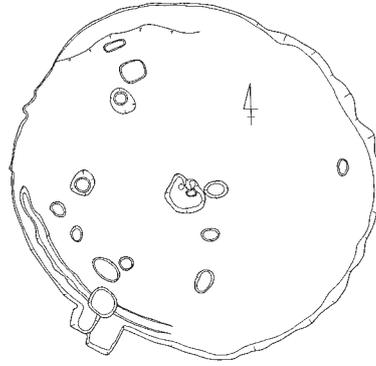
K1ST124・125

3群K区10組	時期	形状	規模[m]	主柱穴数	炉跡形状	炉跡規模[cm]	炉跡深さ[cm]	壁溝数
K1ST105	V3	円形	7.3×6.8		楕円形	180×100	30	4
K1ST124	V2	円形	5.3	(3)				
K1ST125	V3	円形	5.2		楕円形	130×90	36	1

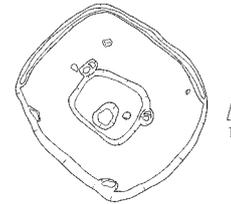
V2~3期



進入灯ST1



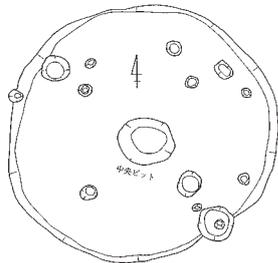
K1ST101



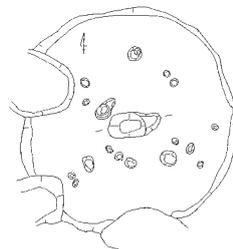
進入灯ST2

3群K区11組	時期	形状	規模[m]	主柱穴数	炉跡形状	炉跡規模[cm]	炉跡深さ[cm]	壁溝数
進入灯ST1	V2	円形	8.4	(8)	隅丸方形	180×72	30	2
K1ST101	V2~3	円形	7.7×7.3	(3)	円形	85×80	60	1
進入灯ST2	V2	隅丸方形	3.9×3.4	2	楕円形	54×43	13	1

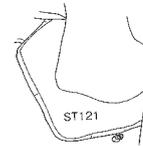
V3期



K1ST112



K1ST116



K1ST121

3群K区12組	時期	形状	規模[m]	主柱穴数	炉跡形状	炉跡規模[cm]	炉跡深さ[cm]	壁溝数
K1ST112	V3	円形	5.6	4	楕円形	125×100	35	
K1ST116	V3	円形	4.9	(4)	楕円形	105×55	40	
K1ST121	V2	長方形	(3×)					

IV-9図 K区下位単位の組み合わせ(4)

どうかは不明である。北側に10m程離れて2.9×1.9mを測る長方形のK1SK107とK1SB104がある。K1SK107はK1ST109と同様の炉跡の伴わない住居跡の可能性のあるものの、7組と紐帯のあるものかどうかは不明である。

8組K1ST119・K1ST114・K1ST115は大型円形竪穴住居跡と小型長方形竪穴住居跡の構成のものである。K1ST119は径9.5mの超大型の住居跡で田村遺跡の全時期を通じてもB3ST309の10.6mに次ぐ最大規模のものである。しかしながら遺物から見るとK1ST119は特段注目すべきものは出土しておらず、他の通常の住居跡と同じである。約7m北側に同時期の小型長方形竪穴住居跡が2棟位置している。K1ST114とK1ST115は建て直しの結果、2棟になったものと考えられ、土層観察からは新旧関係は掴めていない。規模は2.8×2mと2.5×1.9mでほぼ同じであり、明確な炉跡は検出していない。

9組K1ST106・K1ST107・K1ST104はやや小さな中型円形竪穴住居跡と長方形小型竪穴住居跡の構成になるものである。8組と円形竪穴住居跡の大きさには違いがあるものの、同じ組み合わせのものである。K1ST106とK1ST107は切り合い関係にありK1ST106が新しい。規模は径5.1mと4.6mで周溝の位置等の属性も似た住居跡であることから、建て替えの可能性が高い。2.5m程西側に離れて小型長方形竪穴住居跡K1ST104が位置している。規模は3.8×2.8mで炉跡、周溝は検出していない。また明確な支柱穴も存在しない。

K区のV1期の構成は円形竪穴住居跡に小型長方形竪穴住居跡の組み合わせになるものが基本構成と考えられる。中央部南のK2ST223とK2ST225は2棟1対に進入灯ST7で構成していると考えられる。掘立柱建物跡・溝状土坑は7組、8組、9組の竪穴住居跡群に囲まれるように溝状土坑が東西方向に5条検出している。溝状土坑の傍らには明確に掘立柱建物跡と確認できていないものの柱穴の並びのあるものが多く、おそらく溝状土坑と掘立柱建物跡がセットになり同一遺構の集中箇所となる。しかしながら、IV1期では住居跡の可能性が高いものの、V1期の掘立柱建物跡・溝状土坑は竪穴住居跡群から一定の距離を保ち竪穴住居跡と切り合うこともないところから、倉庫群の可能性もある。

④3群K区10～12組

V2・3期の住居跡は18棟検出している。円形竪穴住居跡11棟、隅丸方形竪穴住居跡2棟、小型(長)方形竪穴住居跡5棟である。掘立柱建物跡・溝状土坑は1棟も検出していない。小型の掘立柱建物跡については本期に伴うと考えられるものが数棟存在するようである。10組K1ST105・K1ST124・K1ST125、11組K1ST101・進入灯ST1・進入灯ST2、12組K1ST112・K1ST116の三組8棟をここでは取り上げる。

10組K1ST105・K1ST124・K1ST125は東南部に位置し、K1ST124とK1ST125は切り合い関係にあり、建て直しが行なわれたものと考えられ、K1ST125が新しい。規模はK1ST124が径5.3m、K1ST125が径5.2mでほぼ同一である。K1ST125にはベッド状遺構が伴う。K1ST124・K1ST125から9m程西側にK1ST105が位置している。建て替えまたは別の住居跡の重複が考えられ、煩雑な付属施設を検出している。周溝は3条検出しており、南に段々ずれてきているようである。炉跡も底面を3ヶ所所有しており、周溝の移動と共に炉跡も少しずつ移動をしていると考えられ、貼床も

施されている。おそらく小期限内で3回の建て替え・拡張があった可能性がある。最終的には焼失で廃棄されている。推定で径約5m、6mと順次拡幅されているようであり、最終的な規模は径7.3mを測る。出土遺物は3棟の住居跡共に特徴的なものは余りないが、凹石がやや目立つ。

11組K1ST101・進入灯ST1・進入灯ST2は西端に位置し、大型円形堅穴住居跡2棟と小型隅丸方形1棟の構成になる。K1ST101と進入灯ST1は6m弱程離れて位置する。小型の進入灯ST2は大型の住居跡とトライアングルに3棟が構成されている。K1ST101と進入灯ST1の規模は7.3m、8.4mをそれぞれ測る円形大型住居跡である。炉跡も1m近いものである。K1ST101からは袋状鉄斧が出土している。進入灯ST1は廃絶後、多量の礫が投棄されていた。進入灯ST2は一辺3.9×3.4mの隅丸方形の小型の堅穴住居跡である。中央部には炉跡を有する。出土遺物は土器が少量出土しているのみである。3棟の周辺部では東側部分にK1SB102、103の2棟が並び、北側部分にK1SB101、更に北側にも掘立柱建物跡を検出している。K1SB101は11組に伴う可能性が強い。

12組K1ST112・K1ST116はK区東側のやや北寄りに位置する。V3期に該当する。規模はK1ST112が径5.6m、K1ST116が径4.9mを測る中型円形堅穴住居跡である。2棟は約5m離れて構築されている。主柱穴は4本で周溝は持たない。炉跡は1mを越すもので、K1ST116の炉跡内からは台石が出土している。住居跡内からの出土遺物は少ない。K1ST116から南に約6m離れてV2期の小型長方形堅穴住居跡K1ST121が構築されているものの、時期的には少し古くなるものの、12組に伴う可能性がある。K1ST121は後世の攪乱を大きく受けており炉跡、柱穴は判然としない。台石、砥石が出土しているところから、工房的な要素が強い。

V2・3期の住居跡は中央部南側に大型の住居跡K2ST220、K2ST222、中型進入灯ST5、小型隅丸方形の進入灯ST8、K1ST103の小型長方形、またL3ST301の6棟が一塊で検出されている。この一群は二単位の可能性がある。

また西側部分では小型方形堅穴住居跡が3棟纏まった例が認められる。K2ST207がV2期、K2ST206、K2ST209がV3期である。炉跡のないものでK2ST206からは粘土塊が出土しており、工房的な様相が強い。

(3) 小結

3群F、K区で個別に下位単位の抽出を試みた。同一規模の円形堅穴住居跡2～4棟を基本構成とし、掘立柱建物跡、掘立柱建物跡・溝状土坑、小型(長)方形堅穴住居跡の組み合わせが異なる例が認められる。それは時期的な変移と、空間的な差異の二通りが考えられる。

時期的な変移としては、大型掘立柱建物跡はⅢ期に認められ、Ⅳ期以降は小型掘立柱建物跡となる。Ⅲ期の大型掘立柱建物跡群は下位単位ではなく中位単位での共同管理の可能性が強い。Ⅳ2期になると掘立柱建物跡・溝状土坑が出現し、V2期には消滅するという特徴が判明した。掘立柱建物跡・溝状土坑は住居と倉庫の可能性のあるものに分かれるようである。小型方形堅穴住居跡はV1期に出現し炉跡のあるものとなないものに分かれ、かつ工房的な様相の遺物出土状況を示すものとそうでないものの二通り認められた。

空間的な差異としてF区とK区を比較してみると、F区では同一規模の円形堅穴住居跡2棟を1対

として、若干他の遺構が伴う例が認められる程度であり、Ⅲ期からⅤ3期までこのパターンを継承されるようである。下位単位の時期的な連続性を把握でき、時系列の上での紐帯を掴むことができる。同一場所を占地した下位単位の時系列での変遷と捉えることができそうである。K区では複雑な様相を見せており、同一時期でも幾つかのバリエーションが認められるようである。先に述べた時期差の諸特徴をもつものの、下位単位の組では少しずつではあるが様相が違っているようである。同一「群」内の他のL区、P区でも様相を違えており、中位単位で時間的変移、空間的差異を持つことが判明した。

3. 各群の特徴

3群のF、K区で下位小単位と中位単位の抽出を試みた。その成果を敷衍して詳細なデータは省略するものの各群の特徴を把握する。各群によって出土遺物の相違、遺構の拡張等、また炉跡の有無等から各群の特徴を抽出してみた。

(1) 1群(Ⅳ-10図)

50棟程の竪穴住居跡、溝状土坑を伴う掘立柱建物跡を約20棟検出している。土坑は少ない。大溝6からやや離れて細長く遺構群が展開する。西北部分にも単発的に遺構を検出しているが、総じて遺構の密集度は低く、切り合い関係も少ない。Ⅳ2期からⅤ1期の時期に集中するようである。

①Ⅲ期

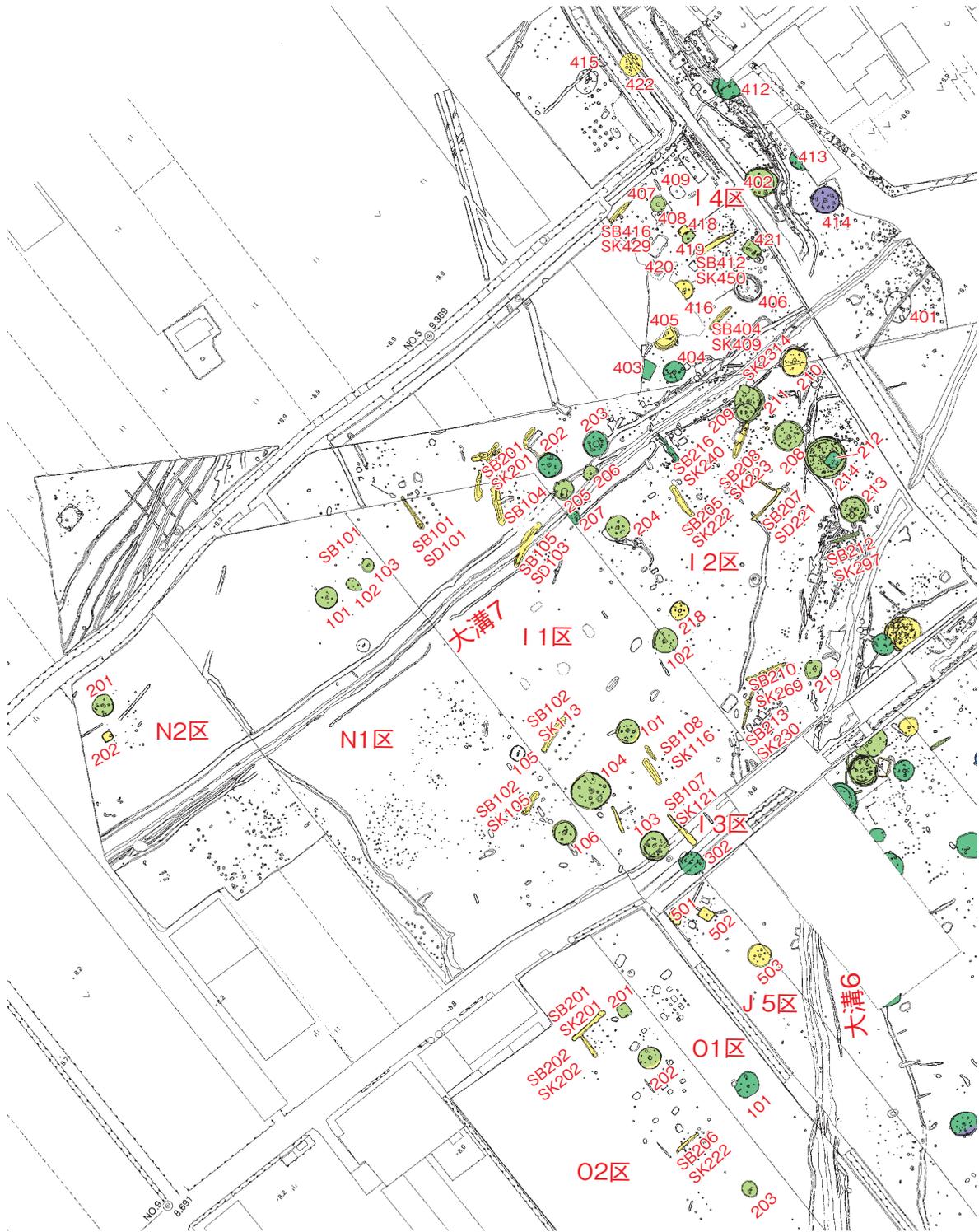
Ⅲ期の住居跡が確認されていないのが特徴的である。

②Ⅳ期

Ⅳ期に含まれる竪穴住居跡は11棟である。円形竪穴住居跡は7棟でその中で隅丸方形に近いものを2棟検出している。小型(長)方形竪穴住居跡は4棟で比較的多い。大型の住居跡はなく、中型、小型のもので占められる。掘立柱建物跡・溝状土坑が対になったものがこの時期に1群では特に顕著に現われる。12棟検出しており、次のⅣ2～Ⅴ1期にも引き続き構築されている。土坑類は少ない。

分布状況は北側部分I4区に円形中型竪穴住居跡と小型(長)方形竪穴住居跡が集まる傾向にある。小型方形竪穴住居跡I4ST418、I4ST421の2棟は共に炉跡を持つもので、I4ST421からは環状石筈が出土している。竪穴住居跡は南側のJ5区でも3棟確認している。内2棟は小型方形で内1棟は炉跡を有するものである。該期の竪穴住居跡の組み合わせの特徴は同一規模2棟1対の例は認められない。北端部分のI4ST422と小期が不明なI4ST415が6m程離れ、規模等が似通っていることからして、2棟1対の可能性はあるものの、他に該期ではそうした例は見出し難い。若干ではあるが、南側部分の円形住居跡J5ST503と小型方形住居J5ST501、J5ST502の様な組み合わせの例は認められるものの、相対的に1群の竪穴住居跡には強い紐帯は認め難いように見受けられる。

掘立柱建物跡・溝状土坑が最も多く検出されており、それも大型のものが多い。竪穴住居跡とセットになるものではなく、掘立柱建物跡・溝状土坑で遺構群を形成している。竪穴住居跡の数に比して、掘立柱建物跡・溝状土坑の方が多く、共同管理的な倉庫用掘立柱建物跡ではなく、住居としての掘



- III期
- IV期
- IV2~IV1期
- V1期
- V2~3期
- V3期以降

IV-10図 1群全体図

立柱建物跡の可能性が強い。掘立柱建物跡・溝状土坑の中には集水を行なった可能性のある掘り込みを持つ溝状土坑を幾つか検出しており、他の群ではそうした例は少なく、居住施設としての可能性が強い。他の群では3群K区でも住居用掘立柱建物跡の傾向が強く、1群の掘立柱建物跡・溝状土坑は住居と考えられる。しかしながら、方位には統一感がなく、極めてばらつきがあることから、計画的な配置とは言い難い。竪穴住居跡についてもそうした傾向が強い。

出土遺物の面から見ると鉄製品、ガラス小玉が出土する住居跡、土坑は全く認められない。

③IV2～V1期

IV2～V1期の竪穴住居跡23棟検出している。1群では最も多い時期である。最大のものはI2ST215の円形竪穴住居跡で径7.6mを測る。小型のものも多く、目立つ。竪穴住居跡の数は増えるものの、掘立柱建物跡・溝状土坑はやや減少気味である。土坑類はやはり少ない。但し、土坑I2SK2314からは中広形銅矛1本が埋納した状態で出土していることは特筆される。

分布は全体的に広がる傾向がある。同一規模2棟1対の可能性のあるものは、I2ST204とI2ST205である。規模はやや相違するものの紐帯がある可能性がある。他のものについては、大小の円形竪穴住居跡、または円形竪穴住居跡と小型(長)方形竪穴住居跡の組み合わせになるものが多い。小型方形竪穴住居跡はN2ST201とセットになるN2ST202、O2ST202とセットになるO2ST201の2棟を検出しており、共に炉跡のないものである。N2ST202は若干時期が古くなる可能性があるものの、N2ST201と組み合わせになるものと考えられ、工房の可能性があり、鉄製釣針が出土している。

掘立柱建物跡・溝状土坑は住居跡に付随するものが多く、特に掘立柱建物跡・溝状土坑だけで遺構群を形成しない。IV期では住居の可能性が強かったのもの、該期では掘立柱建物跡・溝状土坑は小型化し、竪穴住居跡に付随するもの小型のものは倉庫用掘立柱建物跡と考えられる。南東部に位置する大型のI2SB212・SK297、溝状土坑に集水機能と考えられる掘り込みを有するI1SB101・SD101、NISB102・SK105、O2SB201・SK201の4棟については住居の可能性がある。

焼失住居はこの時期に増える傾向にあり、I1ST101、I2ST203、I2ST214、N1ST106の4棟が焼失住居である。その中で拡張が行なわれている住居跡はI2ST214で径6.9mのやや大型のものである。

出土遺物は前の時期と同様にガラス小玉は認められていない。鉄製品は釣針1点と極めて少ない。但し青銅品として埋納された銅矛が1振していることは特異である。

④V1期

V1期は竪穴住居跡13棟検出している。小型方形竪穴住居跡2棟、他は中小型円形竪穴住居跡である。掘立柱建物跡・溝状土坑は1棟のみである。

該期の竪穴住居跡は中央北側部に5棟の集中が若干認められる程度であり、他は単独の住居跡が多い。

I2ST202とI2ST203は同一規模の竪穴住居跡2棟1対になるものと考えられる。I2ST202・I2ST203は径約5.5mの中型円形のものである。I2ST203は焼失住居で原状を留めるような形で壺の完形品が6点出土している。他の焼失住居では良好な遺物出土例はなく、焼失のあり方に違いが見て取れる。I2ST202・I2ST203の周辺にはIV2期からV1期迄の住居跡が6棟纏まっており、時系

列での紐帯が考えられる。

小型方形竪穴住居跡は2棟と少なくなる。I2ST214を切ってI2ST212が構築されている。3.4×3mの規模のもので、ガラス小玉が3点出土しており、1群では唯一の出土例である。また、住居の埋没後に礫が多量に投棄されているのも特徴的である。北側部分に位置するI4ST403は円形住居跡I4ST404の近くで検出しており紐帯のあるものかもしれない。一辺4m弱のもので、完掘しておらず全貌は、明確ではないが、炉跡は持たない可能性がある。

掘立柱建物跡・溝状土坑はI2SB216・SK220の1棟のみである。周りに同時期の住居跡がやや集中しているものの、I2SB216・SK220が倉庫か住居かは判断できない。溝状土坑からは九州系統の壺に類似するもの、また磨製石包丁が出土しているのが特徴的である。

⑤V2・3期

V2・3期の住居跡は北側部分のI4ST414のみである。径6m弱の中型のものである。該期のものでは2群の北側部分に2棟検出されているものの、周辺域では極めて少なくなる。

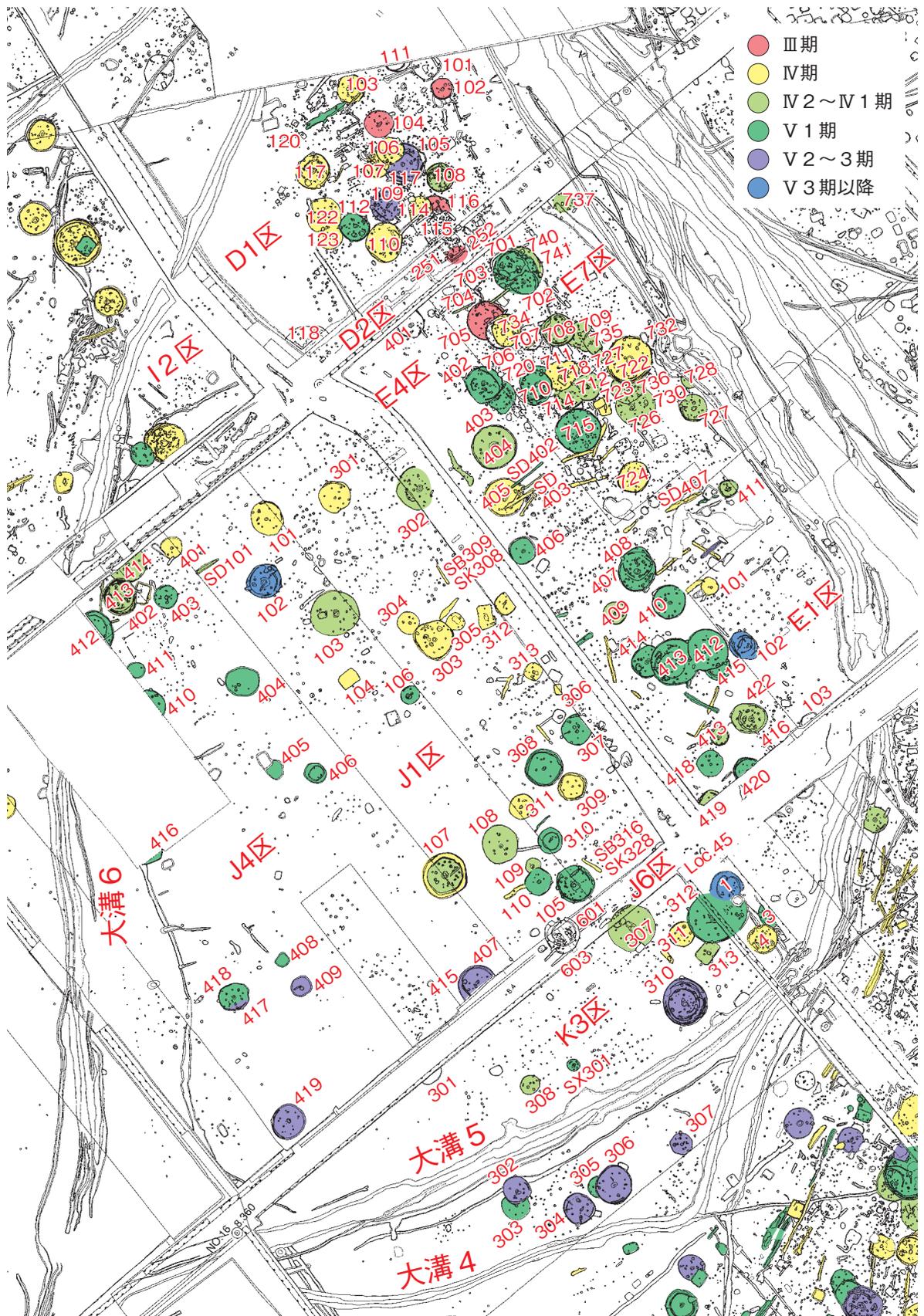
⑥小結

- a. 遺構の切り合い関係が少なく、分散気味である。
- b. IV期からV1期に集中する。時系列の継承性が希薄。
- c. 竪穴住居跡は同一規模2棟1対の例は少ない。
- d. 大型住居は少なく、中型と小型(長)方形竪穴住居跡の組み合わせ例が認められる。
- e. 小型(長)方形竪穴住居跡は工房的なものは少なく、住居として機能していた可能性が強い。小型のものでも炉跡を持つものがほとんどである。
- f. 竪穴住居跡は全般を通じて建て替え、拡張が少ない。
- g. 焼失住居I2ST203の原状を残したままのものと、遺物がほとんど出土しない焼失住居例からすると、焼失住居にも原因の違いが見て取れる。遺物出土が良好でないものについては、住居廃絶後の処理、または住居部材の再利用のための解体後の人為的な処理の可能性が考えられる。
- h. 掘立柱建物跡・溝状土坑のセットのものが極めて多く、住居と倉庫用の二通りの可能性があり、大型のものは住居、竪穴住居跡との組み合わせのものは倉庫と考えられる。IV期のものについては住居、他の時期のものは倉庫の可能性が強い。また溝状土坑には集水機能と考えられる掘り込みを持つものがある。これについては住居の可能性が強い。
- i. 小型掘立柱建物跡は少ない。また共同管理的な掘立柱建物跡群はなく、個別下位単位に伴う。
- j. 鉄製品、ガラス小玉が極めて少ない。
- k. 銅矛の埋納を一ヶ所を検出している。

(2)2群(IV-11図)

2群は大溝5に沿うように弧状を描き、D、E区に遺構が密集する。切り合い関係が煩雑な上に上部は削平されており、消滅している住居跡もあるものと考えられ、集落構成把握は困難である。J区の西側部分では遺構は少ない。

竪穴住居跡115棟、溝状土坑を伴う掘立柱建物跡は少なく、小型の掘立柱建物跡が竪穴住居跡間、



IV-11図 2群全体図

また竪穴住居跡群の空白地に展開している。

①Ⅲ期

Ⅲ期の住居跡が北側部分のD区で5棟、E7区でも1棟検出していることから、計6棟が纏まっている。Ⅲ期でもやや時期差があり、前後に分かれる。前半に含まれる住居跡はD1ST102・D1ST104、D1ST116・D2ST251、後半はD2ST252・E7ST705の組み合わせになる可能性が強い。規模としてはE7ST705の径7.4mは大型のものに含まれ、D2ST252もやや大型の範疇に入る。前半の4棟は中型のものである。他に住居以外の遺構は目だったものはない。但し大溝1を挟んで東側に大型ピットの掘立柱建物跡が2棟あり、本グループの共同管理施設の1つの可能性がある。出土遺物は特に変わったものはなく、相対的に遺物量も少ない。また、鉄製品、ガラス製品の出土は皆無である。

②Ⅳ期

30棟程確認しており、幾つかの纏まりに分かれそうである。D、E区に密集が認められる。

D区では9棟検出しており、更に調査区外の北側にも該期の住居跡がある可能性がある。切り合い関係があるところからすると、小期でも2段階以上に分かれ、一時期には4、5棟で中位単位を形成していたと考えられる。Ⅲ期の時期にも2棟1対のケースが認められることから、引き続き同様の下位単位の構成を取っていたものと考えられる。2棟の住居跡からは鉄製品が出土している。

E区ではE7区を中心として、7棟を検出している。内、切り合い関係のあるものが2組認められ、中型のものであり、2棟1対となっていたものを同時に建て直した可能性がある。残る2棟の内、1棟E7ST722は径9mの超大型のもので拡張が2回行なわれており、投弾、サメ類遊離歯が出土している。E7ST721は小型方形竪穴住居跡で炉跡は検出されていない。溝状土坑を伴う掘立柱建物跡は確認されておらず、時期が判然としていないものの、小型掘立柱建物跡が多く検出しているところからして、竪穴住居跡と倉庫用掘立柱建物跡がセットになるものと考えられる。

J区でも該期の住居跡は散在的に確認している。J1ST101・J3ST301、J3ST302・E4ST405、南側の小型円形住居跡J3ST311・J3ST309がそれぞれ同一規模2棟1対の組み合わせになると考えられる。南側のJ3ST311・J3ST309はその後の時期も引き続き2棟1対が認められ、時系列での紐帯が認められるものである。J3ST303の周辺には小型円形、小型隅丸方形、小型長方形竪穴住居跡が6棟纏まっている。J3ST303はJ3ST304を切り、J3ST305に切られるところからして、小期で3段階あったものと考えられる。小型のものでも炉跡を持つものが多い。またJ3ST311、J3ST313からは鉄斧が出土している。2群南側の一団は他の時期でも鉄製品を持つものが多い。J区に展開する該期の住居跡には小型掘立柱建物跡が個別に数棟伴う可能性が強い。

③Ⅳ2～Ⅴ1期

25棟程確認している。時期設定自体が難しく確定的な設定でないために、変遷は難しい時期である。

D区では1棟のみである。D区は時系列で中位単位を形成しているところからすると、該期の住居跡1棟では少なすぎると考えられる。しかしながら、Ⅴ1期も1棟で成り立っているところからして、D区はⅣ2期をピークにして中位単位が解体の方向にあるようである。

E区では該期の住居跡を多く検出している。南側にも5棟程散在するが、中央から北側にかけて

10棟が密集しており、切り合い関係も多い。中型のものが多く、2棟1対になる可能性があるものの、判然としない。

J区ではJ1ST107・J1ST108が1対になり、共にガラス小玉が出土し、J1ST107では管玉、鉄斧も出土しており、ベッド状遺構を有する数少ない住居跡である。

溝状土坑は多いものの、掘立柱建物跡の伴うものもあるものの、住居用か倉庫用かは判断できない。1群I区のものより若干小型のものが多く、E区の中央部に多く集まる傾向にあるところからして、共同管理的な倉庫用掘立柱建物跡の趣がありそうだが断定はできない。J区のJ1ST107・J1ST108の周辺域にも認められ、これらについては下位単位に伴う可能性がある。尚、J区の北側部分にあるJ1SD101からはミニチュア土器に線刻絵画を施したものが出土している。

④V1期

40棟程を確認している。集中部は大きく分けて3ヶ所認められる。E区の北側部分、E区南西部とJ区南東部は一つの中位単位を形成し、やや散在的ではあるがJ区西北部に若干の纏まりが認められる。

E区北側部は切り合い関係が多く、南側についても同様である。特に南側部分のE4ST412からE4ST415の4棟は団子の串刺し状に切り合い関係が認められる。時期設定に問題があるとしても、短期間の内に建て替えが行なわれたものと考えられ、小期でも2段階に分かれる可能性がある。同一規模2棟1対のパターンが考えられるものの、住居跡の規模にはばらつきも多く、組み合わせは判然としない。J区南東部のものは2棟1対になるものが3例認められる。J区西北部分にもやや纏まりが見える。またJ区中央部から西側部分は空白地があるものの、それでも散在的に中型と小型の住居跡が点在して、組み合わせを形成している。E区に見られるものと様相を違えており、「群」内の縁辺部に比較的多い類例となっている。後述する3群のP区でも該期に同様の類例が認められるところからして、縁辺部では同一規模2棟1対とは違った下位単位を形成する類例である。

竪穴住居跡以外には溝状土坑遺構が激減し、規模も小さなものとなる。小型掘立柱建物跡の小期は把握できないものの、ある程度の纏まりを持つものがあり、共同管理的な面が考えられる。特に大溝5の北側(K3区)には小型掘立柱建物跡が密集しており、共同管理の典型的な例である。

出土遺物は鉄製品を保有する住居跡が多い。また量は多くないもののガラス小玉を持つものが8棟程認められる。鉄製品は板状鉄斧が多く、鈍、鉄鏃等も出土している。J1ST105からは釣針が出土している。

⑤V2・3期

住居跡は激減する。ほとんどの中位単位は該期まで継続しない。北側部分のD区に2棟1対が認められる以外は、中位単位の時系列は継承されることはなくなる。この類型は2群では解体の方向にある。田村遺跡の中・後期の集落全体で大きな転換期を迎え、中位単位で時系列紐帯を残す例は少なくなる。2群も例外ではない。

⑥V3期以降

V3期以降の住居跡が3棟単発的に確認されているものの、前段からの時系列での紐帯は全く把握できない。住居跡も中型以下の規模のものである。しかしながら2棟から青銅鏡が出土している

のが特徴的である。

⑦小結

- a. 4ヶ所の中位グループに分かれる。それ以外にも縁辺部には単発的に散在する。
- b. 同一規模2棟1対例のものは密集部に認められる。密集部では小期内でも切り合い関係が多い。縁辺部は小型の住居同士の組み合わせとなる。
- c. Ⅲ期は少なく、北側部分に若干認められる。
- d. Ⅳ期からⅤ1期までは比較的時系列の紐帯が認められるものの、それ以降は突然消滅する。
- e. 密集部分でも竪穴住居跡の建て替え・拡張の頻度は余り高くない。散在的なグループはほとんど拡張が認められない。
- f. 焼失住居は8棟確認しているものの、時期別な偏りはない。J区の南側を中心とするグループでほとんど占められている。焼失住居内からの遺物は少ないが、特に他の住居との相違は見出し難い。
- g. 掘立柱建物跡・溝状土坑はⅣ2期からⅤ1期にほぼ限定される。溝状土坑には集水機能と考えられる落ち込みを持たない。やや小型のものである。E区竪穴住居跡のない空閑地に纏まる傾向がある。判然としないが、共同管理的な倉庫用掘立柱建物跡か。
- h. 掘立柱建物跡は小型のもので占められる。時期は判然としないが、掘立柱建物跡群を形成するものは共同管理施設、また個別下位単位に付随するものの二通り認められる。
- i. 土坑群は形成しないものの、下位単位に付随して遺物の多量に入る方形、または長方形のものが認められる。
- j. 鉄製品、ガラス小玉を持つ。ガラス小玉は出土するものの、一住居2、3個程度で纏まって出土する傾向にはない。
- k. Ⅴ3期以降の住居跡2棟から破碎青銅鏡が出土している。
- l. E区北側部分では明治23年に広形銅矛5振が出土している。今回の調査でも広形銅矛の鋒(きさき)が1振出土している。

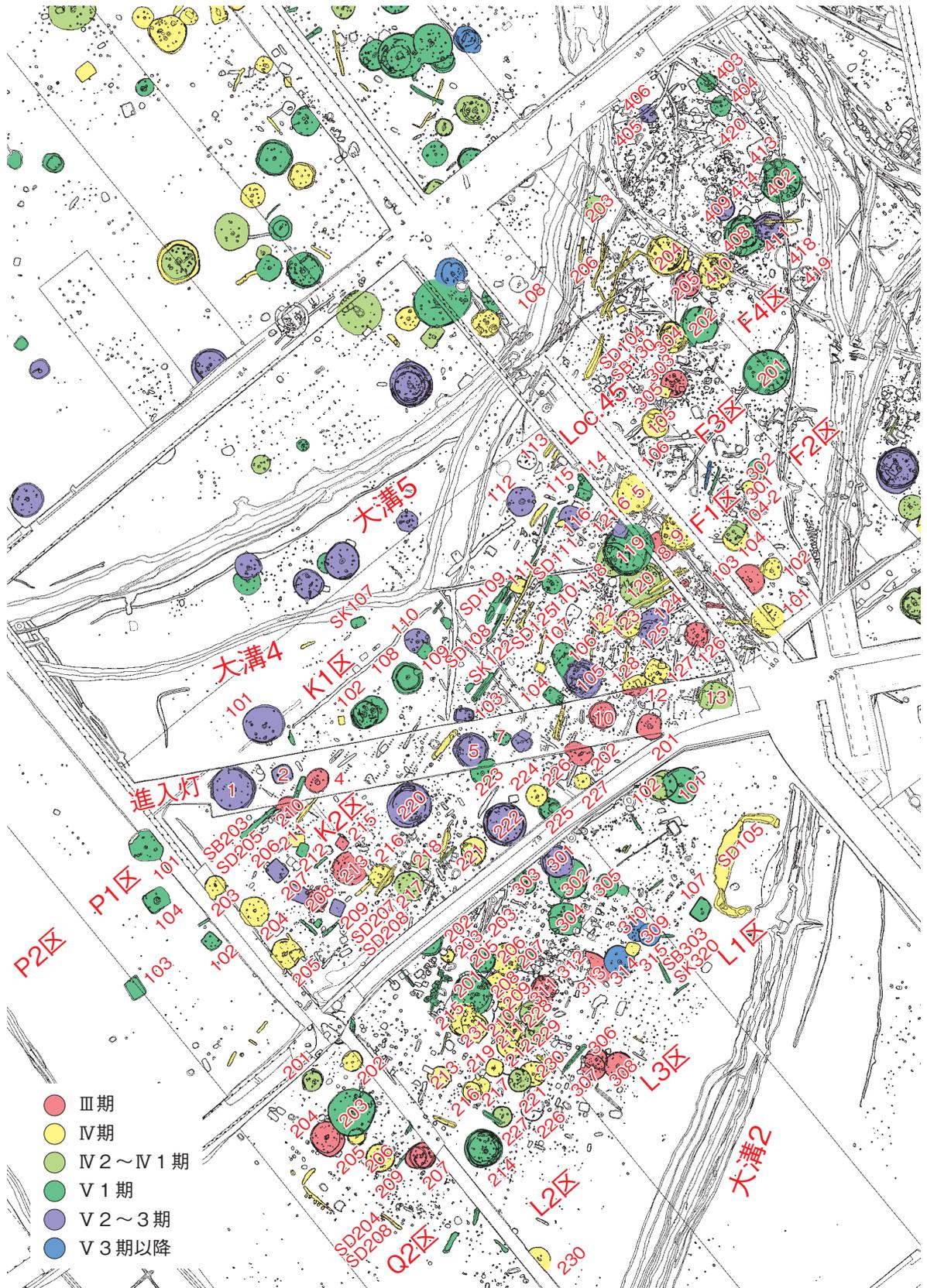
(3) 3群(Ⅳ-12図)

3群は大溝4・5と大溝2に挟まれた中洲状に立地し、K、L区で特に密集が認められる。西側部分の縁辺部では遺構は希薄である。竪穴住居跡は約150棟を検出している。掘立柱建物跡は溝状土坑を伴うものと伴わないものの2種類あり、共に多くを検出している。溝状土坑は大溝2に沿うような方位を取るものが大部分である。土坑についても多く検出しており、多量の遺物が伴うものがある。

前節でF、K区の下位、中位単位の類型には既に触れており、ここでは主としてL、P、Q区を取り上げ、3群の時期別傾向を取り上げる。L区についてはF、K区と同等かそれ以上に遺構が密集し、切り合っているところから、逆に単位把握が困難である。

①Ⅲ期

Ⅲ期の竪穴住居跡は本群で最も多く、検出している。特にK、L、Qに亘り14棟の竪穴住居跡が



N-12図 3群全体図

直径100m程の環状を呈している。更に東側のF区にも広がりを見せている。Ⅲ期以前の竪穴住居跡は認められず、新たに南下したグループがこの地を占地し、大型掘立柱建物跡群を環状の中心部に構築している。このグループは同一規模2棟1対を基本枠組みとして持っている。

②Ⅳ期

35棟程確認している。中位単位と把握できる箇所は少なくとも4ヶ所は存在する。F、K区では同一規模2棟1対のパターンがⅢ期から引き続き継承される。

L区では特に密集度が高く、多くの切り合い関係が認められる。切り合い関係からすると小期内でも3段階が想定される。竪穴住居跡の平面形は円形で大型、隅丸方形に近い小型のものがある。切り合い関係、規模からするとほぼ同一場所で建て替えが行なわれた結果と考えられ、基本枠組みは同一規模2棟1対である。L、Q区では炉跡の両端に小柱穴を穿ったものを5棟検出しており、このグループは3群と言えどもF、K区とは違った中位単位を形成している。出土遺物ではサヌカイト製凸基式石鏃、勾玉がやや目立つ。

掘立柱建物跡・溝状土坑はK区で多く検出しているものの、L区では1棟、Q区で2棟検出したにとどまる。K区のものより小型のものである。K区では住居跡の可能性のあるものが存在しているものの、L、Q区のものとは下位単位に付随する倉庫用の可能性が強い。その他に多くの小期が不明であるが、小型掘立柱建物跡も検出しているところから、その内の数棟は本期の下位単位を構成するものと考えられる。

③Ⅳ2～Ⅴ1期

他の群でも同様であるが、過渡的な時期設定のため、明確な特徴は導き出し難い。掘立柱建物跡・溝状土坑はF区では規模の大きなものが比較的纏まって検出しているものの、L区等では小型なものである。

④Ⅴ1期

竪穴住居跡は同一規模2棟1対のパターンを基本としている。F、K区と同様にL区でも同じパターンと考えられる。典型例として、L2ST201、L2ST214をあげることができる。2棟は8.6mの間隔を置いて、規模は径8.2m、7.4mでややL2ST201が大きいものの、建て替え2回、貯蔵穴、焼失住居、鉄製品、サヌカイト製石鏃等共通する部分が多い。特にガラス小玉は203、68点と多量に出土している。

P区ではやや不整形な円形の竪穴住居跡と小型方形竪穴住居跡3棟にそれに付随する小型掘立柱建物跡からなる組み合わせを確認している。小型方形竪穴住居跡2棟は炉穴は穿たれていないものである。1、2群の縁辺部でも同様の組み合わせの類型が存在しており、群の中でも核から離れた下位単位は違った構成を取る。

掘立柱建物跡・溝状土坑はK区に多く、L区でも確認されているものの、1棟を除き、小型のものが大半である。他の小型掘立柱建物跡と同様に倉庫用の可能性が強い。

遺物は大型の竪穴住居跡に多く、小型・中型からの出土例は極めて少ない。ガラス小玉は該期に多く、特にL区の大型の住居跡からの出土例が特徴的である。K区では投弾が多く、土坑からの出土例も認められる。

⑤V2・3期

V2・3期はK区にまとまるようである。1群では1棟のみ、2群ではD区に2棟と南側部分に5棟、5群では2棟のみである。K区を中心として大型の竪穴住居跡が集まる傾向にあるものの、基本構成は同一規模2棟1対である。それに付随するように小型方形竪穴住居跡が伴う。焼失住居はK1ST105の1棟確認しているが、前段階から2回の建て替えが行なわれており、ほとんど移動せず、拡張しながら建て替えが行なわれ、最終的には焼失で放棄されている。

掘立柱建物跡・溝状土坑はこの時期は確認できない。小型掘立柱建物跡が下位単位で伴う可能性が強い。

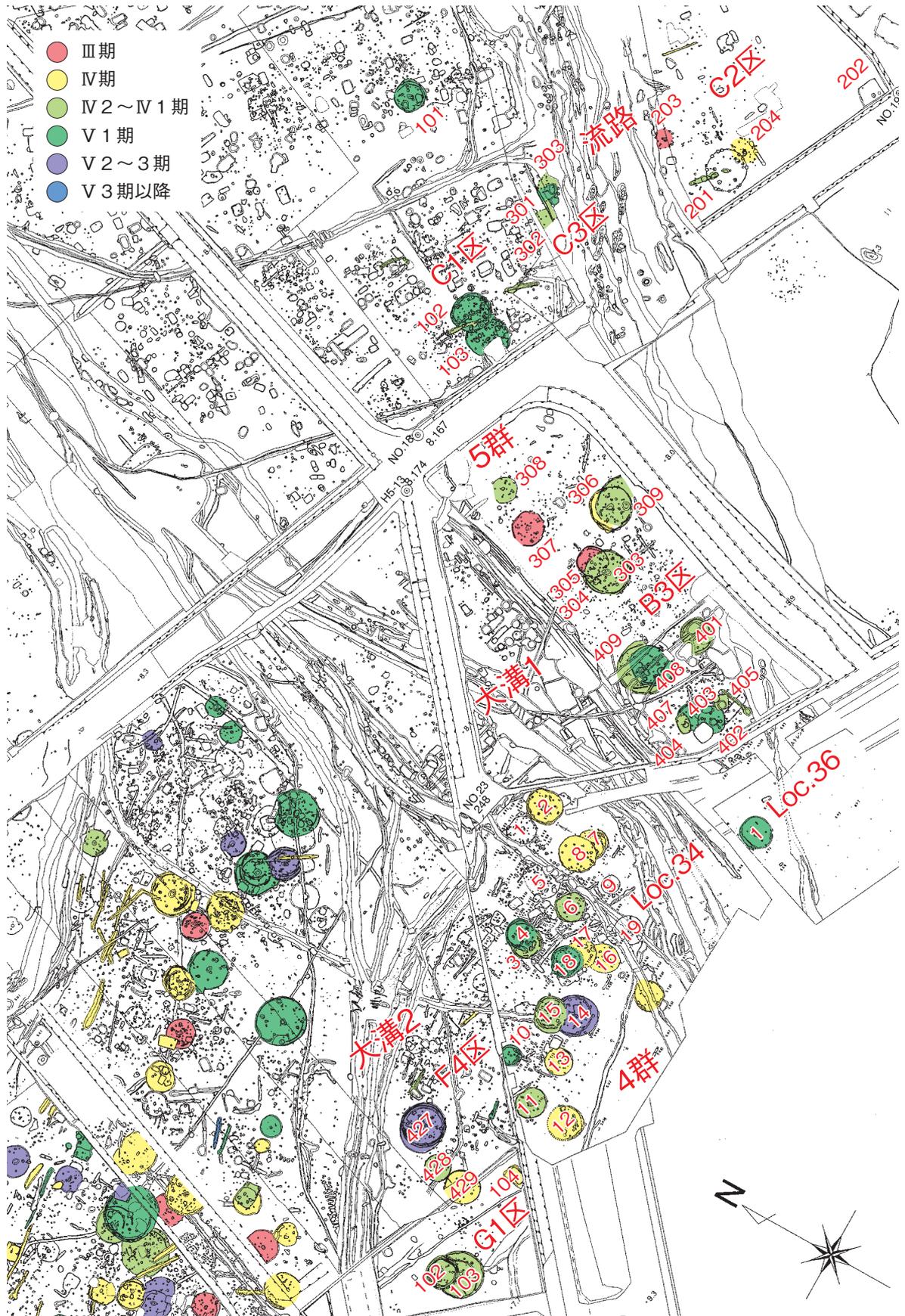
ガラス小玉は引き続き持っているものの、量は少ない。鉄製品は板状鉄斧から袋状鉄斧が多くなる。

⑥V3期以降

L区でL3ST309、L3ST310、L3ST314の3棟が隣接して構築されている。時期的にはL3ST310、L3ST309、L3ST314と考えられる。L3ST310とL3ST309は切り合い関係にある。他の群ではV3期以降の竪穴住居跡は単独の住居跡ばかりで占められている。一見、L3ST310・L3ST309とL3ST314の2棟1対と考えられる可能性もあるものの、出土遺物からして同時期に存在したのではなく、時系列でそれぞれが単独住居の可能性が強い。V2期からは継承性は途絶しているものの、この3棟については時系列での紐帯が考えられる。

⑦小結

- a. III期からV2期までは時系列の継承性が認められるが、V3期以降は途絶している。
- b. III期からV1期まで中位単位の継承性があり、同一場所を占地する。
- c. 中位単位を明確に形成し、同一規模2棟1対を基本とする。
- d. III期の中心地。大型掘立柱建物跡群を竪穴住居跡が環状に周りを囲む。
- e. 拡張、建て替え住居跡が多い。同心円的に2、3回拡張するもの、同一規模で若干場所を移動して建て替えるパターンが存在する。
- f. 小型(長)方形竪穴住居跡は炉跡を有するものと、ないものがあり、住居跡、工房跡の二通りが考えられる。
- g. 焼失住居は12棟検出しており、時期的にはV1期がやや多く、焼失後ややずらして同一規模で建て替えが行なわれている類例が多い。
- h. 掘立柱建物跡・溝状土坑はIV期から出現し、V1期まで構築される。住居用と倉庫用の2種類が考えられる。また小型の掘立柱建物跡も存在し、下位単位に伴う。
- i. 方形・長方形の土坑で遺物が多量に入るものが存在する。
- j. V1期では極めて多くのガラス小玉を持つ住居跡が存在し、且つ大型で焼失住居である。
- k. V2期以降に袋状鉄斧をK区の大型住居跡は保有する。
- l. 有溝石錘が全般を通じて1、2点出土している。またK区では投弾、L区では凸基式石鏃が他よりも多い。



IV-13図 4・5群全体図

(4) 4群(IV-13図)

大溝1と大溝2に挟まれたF区南東部、G区、及び前回調査のLoc.34で竪穴住居跡30棟を検出している。Loc.34では若干竪穴住居跡同士の切り合い関係が認められる程度である。溝状土坑を伴う掘立柱建物跡、伴わない掘立柱建物跡共に検出しているものの、やや散在的である。IV期が多く6棟検出している。IV2～V1期11棟、V1期3棟、V2～3期2棟の竪穴住居跡を検出している。時期不明のものが8棟である。

① III期

該期の明確な遺構は検出していない。Loc.34ST1が該期の可能性が残されているものの、土製紡錘車が出ており、II期にまで遡る可能性がある。

② IV期

本群の外周域に弧状を描き展開している。規模は中型の円形竪穴住居跡で占められ、同一規模2棟1対になる可能性のあるものが多い。Loc.34ST12・F4ST421、Loc.34ST16・Loc.34ST20の組み合わせが考えられる。Loc.34ST7とLoc.34ST8についてはLoc.34ST7が焼失後Loc.34ST8に建て替えられている。同一規模2棟1対になるとすれば、Loc.34ST5あたりが可能性がある。

③ IV2～V1期

IV期より内側に弧状を描く。Loc.34ST3とLoc.34ST17は2棟1対となり、次のV1期へ同様に建て替えを行なっていると考えられる。他のLoc.34ST11とLoc.34ST13も2棟1対の可能性が高い。G区の飛び地にG1ST102、103が短期間の内に建て替えを行なっており、これについては小型長方形のG1ST104とセットになる可能性がある。

出土遺物は管玉、投弾がやや多く、4棟の住居跡から出土している。

④ V1期

3棟のみである。2棟1対としてLoc.34ST4とLoc.34ST18が前時期から同じセット関係にある。Loc.34ST10は小型のものである。3群F区の北端では小型のもの同士で対になるものが認められており、本住居跡も時期不明のF4ST425、426の小型のものと同士の対になるか、それともF4SB424・425、F4SK586・F4SX403の掘立柱建物跡・溝状土坑とセットになる可能性がある。F4ST425、426の小型の住居跡とは距離が離れており、掘立柱建物跡・溝状土坑とセットになる例が他の群でも認められるところから、F4SB424・425、F4SK586・F4SX403とセットになる可能性が高い。

出土遺物の特徴はLoc.34ST18からガラス小玉、Loc.34ST4からは鉄鎌、叩石6点と多い。

⑤ V2・3期

F4ST427、Loc.34ST14の2棟のみである。規模、平面形等からすると同一規模2棟1対の組み合わせはほぼ確実である。25mの間隔を置いて構築されており、径約8mの大型のものである。建て替えも3回行なわれており、部分的に三日月状のベッド状遺構の様に張り出し部が付くなど共通する部分は極めて多い。出土遺物については共通点が少ないものの、Loc.34ST14の方が焼失住居であるところから趣を違えている可能性がある。Loc.34ST14からは勾玉2点、鉄鏃1点、叩石7点、投弾14点が出土している。F4ST427からはガラス小玉1点、飾り付き鉄製刀子が出土しているが本住居跡に伴うかどうか不明である。古代の紛れ込みか。

他に掘立柱建物跡・溝状土坑も検出していない。

⑥V3期以降

該期の遺構は検出していない。

⑦小結

- a. 大きな群を形成しない。
- b. Ⅲ期の明確な住居跡は検出しておらず、Ⅳ期から群を形成する。
- c. Ⅳ期からⅤ1期は弧状に展開する。
- d. 時系列の中位単位を明確に構成するものは1ヶ所のみである。
- e. 同一規模2棟1対の構成を基本とする。
- f. 溝状土坑はⅣ期からⅤ1期に構築されるものの、数が少なく、Ⅳ～Ⅴ1期に3条が竪穴住居跡から離れて北西部に纏まる傾向がある。Ⅴ1期では掘立柱建物跡・溝状土坑となり、小型円形竪穴住居跡と対となる。
- g. 小型掘立柱建物跡の数は少ないものの、溝状土坑と同様に北西部に纏まる傾向がある。小規模ながら共同管理施設としての倉庫の可能性はある。
- h. 遺物の多量に入る方形土坑はあるものの数は多くない。
- i. 鉄製品はⅤ1期に僅かに出土する。
- j. 方格規矩四神鏡が流路から出土している。
- k. ガラス小玉は少なくⅤ1期以降に僅か3点のみである。しかし勾玉2点が出土している。
- l. 叩石、投弾が多い。

(5)5群(Ⅳ-13区)

大溝1より東側部分で26棟の竪穴住居跡を検出している。A、C区ではほとんど単発的でB区にやや纏まりが認められる程度である。B区の南側のLoc.36の飛び地でⅤ1期の住居跡を1棟検出している。南側のB区でⅢ期の竪穴住居跡3棟、Ⅳ期2棟を検出している。Ⅴ1期まででそれ以降の住居跡は検出していない。

①Ⅲ期

B区で2棟確認している。B3ST305と307が対になるものと考えられる。規模は径5.4mと5.8mの中型のものである。B3ST305はほぼ同じ場所にⅣ期からⅤ1期迄時系列でB3ST304、B3ST303と変遷し、B3ST307も場所をやや違えているが、B3ST306、B3ST309と同じように変遷すると考えられ、同一規模2棟1対の中位単位を形成している。北部C区で1棟のみを単独で検出している。

該期の他の遺構として、溝状土坑のB3SK316、317が並行して構築されている。掘立柱建物跡が伴うかどうかは不明である。

②Ⅳ期

B3ST304、B3ST306の2棟を検出しているが、共に次の時期に揃って建て替えが行なわれている。同一規模2棟1対である。また溝状土坑B3SK317の南側には並びは整然としていないものの柱穴が多く存在することから、掘立柱建物跡と対になる可能性がある。しかし、B3ST304から1m程しか

離れておらず、時期がずれる可能性がある。出土遺物からしてIV1期に相当し、若干古くなりそうである。

B3区以外ではC区でも該期の竪穴住居跡と溝状土坑を検出しているものの、竪穴住居跡は遺存状態が悪く判然としない。

③IV2～V1期

B3区では引き続きB3ST303、B3ST309の2棟に建て替えられる。B3ST309では銅釧1点と管玉が出土しており、特異な住居跡である。規模も本遺跡で最大規模のもので径10.6mを測る超大型住居跡である。Ⅲ期から該期まで同規模2棟1対で時系列での継続性が認められる例である。

この中位単位より南側でも住居跡群が認められるが、その中位単位は該期から開始し、V1期までの短期間の内に建て替えが行なわれている。B4ST401、B4ST409が対になり、また中型円形と小型長方形の5棟が団子の串刺し状に切り合っている。B4ST404→B4ST407→B4ST406→B4ST402の順に新しくなり、IV2期からV1期内で4段階に小期が考えられる。また更に該期の溝状土坑が切り合うという複雑な様相を呈している。小型方形のB4ST405はB4ST404と同時期の可能性があり、中位単位として、B4ST401、B4ST409、B4ST405、B4ST404の4棟と溝状土坑2基で構成されている可能性が強い。このグループはガラス小玉を持っている。

C区でも該期の住居跡を2棟、溝状土坑3基を検出している。住居跡については遺存状態が悪く、詳細は不明なもの、2棟1対となっていた可能性が強い。

④V1期

B4区の南側に前段階から引き続き住居跡が構築される。同一規模のものではなく、大小の住居跡の組み合わせになる可能性がある。北部C区でも該期の住居跡が切り合っており、短期間に建て替えが行なわれている。後は単発的に1棟のみで孤立したような住居跡が検出されている。溝状土坑は検出されていない。北部C1ST101からはガラス小玉2個が出土しているのみである。

⑤V2・3期

本群ではV1期まででそれ以降の住居跡は、大溝1から東側部分では検出されていない。

⑥小結

- a. Ⅲ期からV1期まででそれ以降の遺構は検出していない。
- b. 中位単位を形成するものの、小規模のものである。Ⅲ期から始まる中位単位は1ヶ所のみで、他はIV期以降である。
- c. 中位単位を構成するグループは余り占地を移動せずに、わずかに移動して建て替える例が多い。
- d. 同一規模2棟1対、大小の住居跡の組み合わせ、単独の住居跡の3つの類型が認められる。
- e. 拡張する住居跡例は少なく、建て替え例が多い。また焼失後の建て替えが3例認められる。
- f. 溝状土坑はⅢ期にも認められるものの、IV2期からV1期が大部分である。溝状土坑と掘立柱建物跡が対になるものは少ない。
- g. 掘立柱建物跡は小型のもので数は少ない。下位単位に伴う可能性が強い。
- h. 鉄器の出土例はない。本遺跡内で唯一の銅釧が出土している。ガラス小玉は持つものの、数は少ない。

4. まとめ

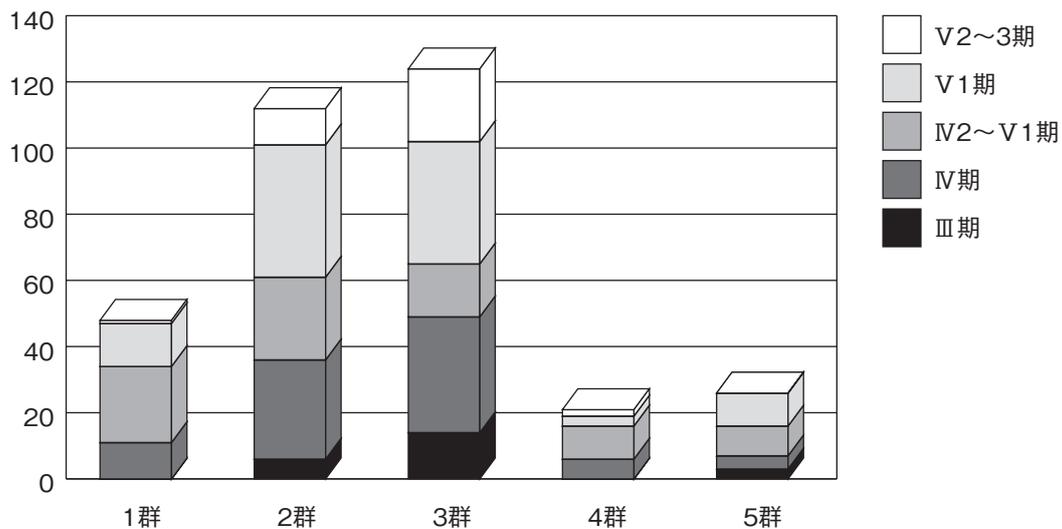
視覚上、田村遺跡の集落内を大きく5つの群に区分した。

下位単位の類型抽出作業を行なった際、大型の竪穴住居跡を中心として中小の竪穴住居跡数棟と掘立柱建物跡が伴うというような標準的な初期階層社会を想起させるような単純なモデルは全くと言っていいほど見出し難かった。類型抽出作業の中、竪穴住居跡2棟1対を基本パターンとするものが多く認められた。しかしながら、全てがそれに該当するわけではなく、それ以外のものも多く認められた。幾つかの類型をあらかじめ設けて、それぞれの下位単位の当てはめてみたものの、認定自体が容易ではなかった。下位単位はケースバイケースで複雑な様相を呈し、大きな枠組みの中での企画性は認められるものの、下位、中位単位では規制されない動態が存在していたと考えられる。

ここでは今まで個別に見てきた「群」、及び集落全体での時期別特徴を抽出し、まとめる。尚、周辺域との遺跡との対比も行ない比較検討しようと試みたものの、他の遺跡で集落構造を掴めるものは皆無であるため、南四国の該期の集落構造の検討は田村遺跡のみで完結せざるを得ない。

(1) 群別特徴

同一規模円形竪穴住居跡2棟1対が各群で全体に占める割合は、1群7%、2群31%、3群44%、4群9%、5群9%となっており、2、3群に占める割合が高くなっている。2、3群は本来の住居跡の数が多いために2棟1対も当然多くなっている。各群の内での2棟1対構成を取る比率を見てみると、1群10%、2群19%、3群24%、4群29%、5群23%となり、相対として4群が最も多くなっている。大溝5、6を境にして東側部分に集住するグループに2棟1対が多く認められ、西側の1群は極めて少なくなる傾向を読み取ることができる。時期別には3群のⅢ期14棟がほとんど2棟1対を構成しており、こ



グラフⅣ-1 群・時期別住居数

		住居跡								SB・SK	出土遺物			
		棟数	形状		規模	焼失	建て替え	拡張	2棟1対		鉄製品	銅製品	ガラス小玉	
			円形	(長)方形	大型									
1群	Ⅲ期													
	Ⅳ期	11	7	4	1			1		12	1			
	Ⅳ2～Ⅴ1期	23	22	1	1	1	1	4	3	8		1		
	Ⅴ1期	13	11	2		2	1	1	2	1			1	
	Ⅴ2～3期	1	1											
	Ⅴ3期以降													
	計	48	41	7	2	3	2	6	5	21	1	1	1	
2群	Ⅲ期	6	6		2				2					
	Ⅳ期	30	26	4	3		4	1	6		4			
	Ⅳ2～Ⅴ1期	25	23	2	8	3	2	4	4	4	2		2	
	Ⅴ1期	40	40		15	5	5	5	8	2	4		10	
	Ⅴ2～3期	11	11		3	2		4	2		3		4	
	Ⅴ3期以降	3	3									3	1	
	計	115	109	6	31	10	11	14	22	6	13	3	17	
3群	Ⅲ期	14	13	1	1		3		6					
	Ⅳ期	35	33	2	3	3	6	2	10	10				
	Ⅳ2～Ⅴ1期	16	13	3	2	3		2	2	7			2	
	Ⅴ1期	37	26	11	5	6	3	6	7	11	3		7	
	Ⅴ2～3期	22	16	6	7		1	5	6	1	4		3	
	Ⅴ3期以降	3	3					1						
	計	127	104	23	18	12	14	15	31	29	7		12	
4群	Ⅲ期													
	Ⅳ期	6	6		3	3	1		2	1				
	Ⅳ2～Ⅴ1期	10	9	1	2	1	1	1	2	2				
	Ⅴ1期	3	3		1			1	1	1			2	
	Ⅴ2～3期	2	2		2	1		2	1		1		1	
	Ⅴ3期以降											1		
	計	21	20	1	8	5	2	4	6	4	1	1	3	
5群	Ⅲ期	3	3						1					
	Ⅳ期	4	4		2				1	1				
	Ⅳ2～Ⅴ1期	9	7	2	3			1	2	4		1	2	
	Ⅴ1期	10	10		1	3	2		2				2	
	Ⅴ2～3期													
	Ⅴ3期以降													
	計	26	24	2	6	3	2	1	6	5		1	4	
合計	337	298	39	65	33	31	40	70	65	22	6	37		

※ 形状は円形と小型方形に単純化している。住居跡の規模は大型7m以上のものである。SB・SKは掘立柱建物跡と溝状土坑がセットになったもの。出土遺物については個別の点数ではなく出土した遺構数である。

表Ⅳ-1 群別一覧表

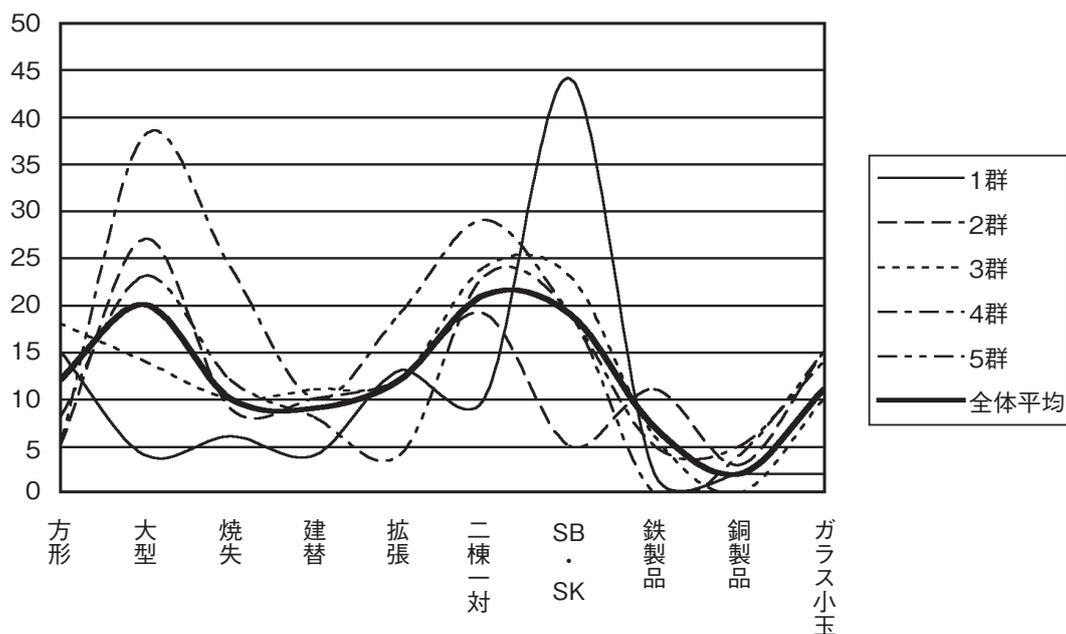
IV 田村遺跡群弥生時代中後期の集落

		住居跡								SB・SK	出土遺物		
		棟数	形状		規模	焼失	建て替え	拡張	2棟1対		鉄製品	銅製品	ガラス小玉
			円形	(長)方形	大型								
Ⅲ期	1群												
	2群	6	6		2				2				
	3群	14	13	1	1		3		6				
	4群												
	5群	3	3						1				
	計	23	22	1	3		3		9				
Ⅳ期	1群	11	7	4	1			1	12	1			
	2群	30	26	4	3		4	1	6		4		
	3群	35	33	2	3	3	6	2	10	10			
	4群	6	6		3	3	1		2	1			
	5群	4	4		2				1	1			
	計	86	76	10	12	6	11	4	19	24	5		
Ⅳ2 Ⅴ1期	1群	23	22	1	1	1	1	4	3	8		1	
	2群	25	23	2	8	3	2	4	4	4	2		2
	3群	16	13	3	2	3		2	2	7			2
	4群	10	9	1	2	1	1	1	2	2			
	5群	9	7	2	3			1	2	4		1	2
	計	83	152	9	16	8	4	12	13	25	2	2	6
Ⅴ1期	1群	13	11	2		2	1	1	2	1			1
	2群	40	40		15	5	5	5	8	2	4		10
	3群	37	26	11	5	6	3	6	7	11	3		7
	4群	3	3		1			1	1	1			2
	5群	10	10		1	3	2		2				2
	計	103	90	13	22	16	11	13	20	15	7		22
Ⅴ2 Ⅴ3期	1群	1	1										
	2群	11	11		3	2		4	2		3		4
	3群	22	16	6	7		1	5	6	1	4		3
	4群	2	2		2	1		2	1		1		1
	5群												
	計	36	30	6	12	3	1	11	9	1	8		8
Ⅴ3期以降	1群												
	2群	3	3									3	1
	3群	3	3				1						
	4群											1	
	5群												
	計	6	6				1					4	1
合計		337	376	39	65	33	31	40	70	65	22	6	37

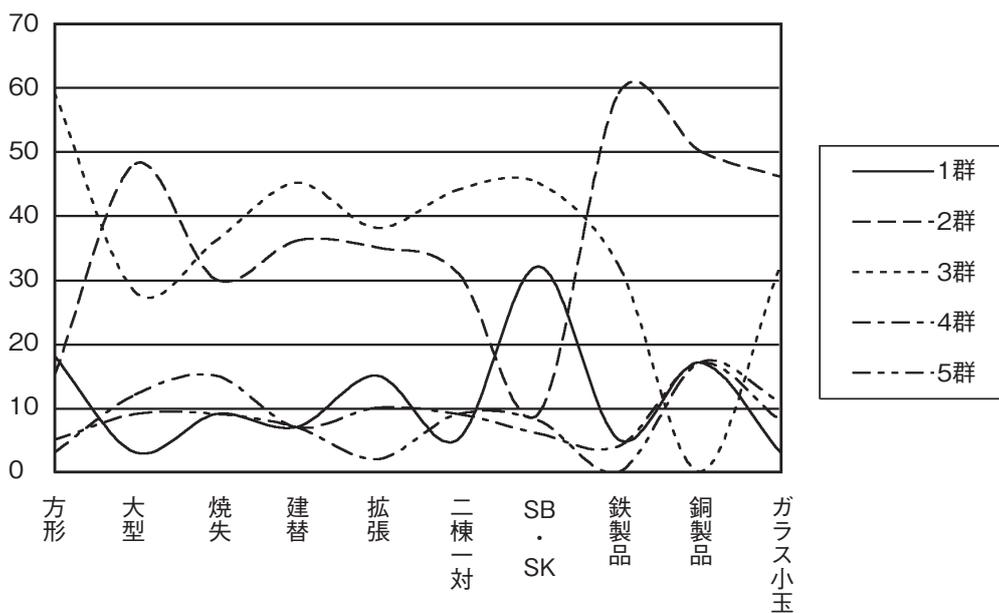
※ 形状は円形と小型方形に単純化している。住居跡の規模は大型7m以上のものである。SB・SKは掘立柱建物跡と溝状土坑がセットになったもの。出土遺物については個別の点数ではなく出土した遺構数である。

表Ⅳ-2 時期別一覧表

のグループを核として、田村遺跡の弥生時代中後期の集落は展開するようである。2棟1対は時期的にはV1期まで継承され、V2期以降にも残るものの、個別の中位単位での時系列の紐帯は解体の方向にあり、3群にV2期の集落は収束する傾向にある。つまり、2棟1対の分布からすると、3群を核として、IV期に2、4群へと展開し、5群の外周域にまで広がりを見せる。1群は田村遺跡の中後期に認められた企画性から外れた傾向を示しており、IV期以降に新規に紐帯を持たずに出現するよう



グラフIV-2 各群の各事項の全体に占める割合



グラフIV-3 各群内での各事項の占める割合

である。

2棟1対が果たした役割、機能は具体的な事象としては把握できないものの、同一規模で炉跡を共に持ち、更に出土遺物にも余り際立った相違が認められないことからして、おのおのの住居跡は同様の居住機能を持っていた可能性が強い。大小の竪穴住居跡、または小型方形と円形竪穴住居跡の組み合わせの場合には母屋、離れの概念が単純に想定できるものの、等質な竪穴住居跡2棟の組み合わせは違った構成要因が考えられる。

2棟1対となるものは時系列でも紐帯が認められるものが多く、それ以外のものは余り継承性が薄いと考えられる。核となる3群内に於ても縁辺部では2棟1対とは違った住居跡の組み合わせ例が認められることからして、必ずしも下位最小単位が強い規範性を保たれているわけではなく、緩やかな企画性を保持していると考えられる。2棟1対からの視点からすると、1群は他の群の規格から外れると指摘できる。

大型住居跡と小型方形住居から各群を検討してみると、4群に大型住居跡の占める割合が高く、小型方形住居跡が少ないという傾向が顕著である。その逆が1群である。掘立柱建物跡・溝状土坑(SB・SK)も1群が極めて多く、2群は逆に極めて少ない傾向を示している。

住居跡の焼失、建て替え、拡張から各群の特徴は明確には導き出すことができなかった。1群の建て替え、5群の拡張が少ないものの、逆に特に突出して多い群も認められなかった。

出土遺物で鉄製品の極めて少ない群は1、5群である。銅製品は1群から銅矛が、5群からは銅釧が出土しており、実用的な鉄製品と量的には少ないものの奢侈品・祭具とは相関関係にありそうである。他に銅鏡が出土しているもののV3期以降のものである。ガラス小玉については、グラフIV-2からするとガラス小玉保有住居の比率は3群が一見少ないように見えるものの、絶対数は3群が飛び抜けている。3群内でも特に南側L区ではガラス小玉を多量に保有する中位単位が存在している。1群は絶対数、比率も極めて少なく、1群と3群は対極にある。出土遺物から見ても、1群は他の群から線引きされる。

(2) 時期別特徴

中後期の集落はⅢ期からV3期迄を対象とした。小期6期に区分して時系列での変遷を見てみた。また時期別に各群の特徴をまとめる。

①Ⅲ期

2群の北側部分と3群の南側にややまとまって住居跡を検出している。2群北側部分の住居跡群は大溝1～5が収束した東側部分に掘立柱建物跡を2棟検出している。土坑は住居近くとやや離れて南側部分にも展開している。

3群の住居跡は2棟1対の組み合わせでほとんどが構成され、円環状に配置し、その中央部に大型掘立柱建物跡8棟が位置している。1、4群ではⅢ期の住居跡は検出しておらず、3群が核となり、田村遺跡の中後期の集落は開始される。鉄器、銅製品、ガラス小玉は認められない。

②Ⅳ期

2、3群の中に多い。1群にも若干認められるものの、北側部分にのみ認められるだけである。2群のD区に切り合い関係が多く認められ、また3群のL区でも密集が認められる。4群でも7棟認められている。掘立柱建物跡が多くなる。小型のもの、溝状土坑を伴うものが出現する。特に1群では溝状土坑を伴う掘立柱建物跡が顕著である。板状鉄斧が出現する。銅製品、ガラス小玉はまだ認められない。

③IV2～V1期

1群に溝状土坑を伴う掘立柱建物跡と共に住居跡が密集せずに展開する。2群ではIV期から南下してE区に密集する。4、5群でもややまとまる傾向がある。溝状土坑を伴う掘立柱建物跡は引き続き構築される。やりがんな、ガラス小玉が出現し、1群では銅矛、5群では銅釧が出土する。

④V1期

相対として南下する傾向にある。1群では北側部分に10棟余りが散在的に展開する。2群では南側に纏まる傾向を読み取れる。J区でも認められるが僅かな集中部を構成するだけである。3群では全体的に広がるものの、縁辺部のP、Q区にも広がり、4、5群でも点的に広がる。特徴として、IV期の特徴を引き継ぐものの、更に立地面積が広がるようである。溝状土坑は3群K、L区に残り、掘立柱建物跡と対になるものは残存する。他の群では極めて少なくなる。ガラス小玉を多量に持つ住居跡がある。

⑤V2～3期

3群のK区を中心として纏まる方向にある。2群の北側部分に2棟残るものの、3群K区へ集落の収束の傾向が強い。溝状土坑を伴う掘立柱建物跡は見られなくなる。溝状土坑自体も極めて僅かになる。大型住居跡の比率は増大する。全般を通じて大型住居の占める割合は時期が新しくなるにつれて、多くなる傾向にある。大型住居跡同士の組み合わせが認められる。出土遺物では袋状鉄斧が多くなる。ガラス小玉は減少傾向にある。

⑥V3期以降

6棟を検出したのみである。単独住居となる傾向が強い。急激な集落の消滅へと向かう。竪穴住居跡以外の遺構は認められない。破碎鏡が3面出土している。

(3) 結

各遺構の多寡、時期からみた各群の特徴をまとめる。

1群—IV期からV1期の時期に集中する。2棟1対住居跡、大型住居は少なく、掘立柱建物跡・溝状土坑が多い。鉄製品、ガラス小玉をほとんど持たない。銅矛のみ出土。

2群—Ⅲ期、V2期以降はわずかである。掘立柱建物跡・溝状土坑、小型方形住居跡が少ない。小型掘立柱建物跡群が存在する。

3群—Ⅲ期から2棟1対住居跡が認められ、円環状内に大型掘立柱建物跡群を配置している。Ⅲ期以降も2棟1対住居跡が多く、中位単位を形成し時系列の紐帯が強く、継続する。掘立柱建物跡・溝状土坑、小型方形住居跡も多く認められる。V2・3期は3群に収束してくる。ガラス小玉を多く持つ。

4群—IV期から群は形成される。大型住居、2棟1対住居跡は多い。掘立柱建物跡・溝状土坑は少ない。鉄製品、ガラス小玉は少ない。

5群一部分的に住居跡は集中するのみで、散在傾向が強い。2棟1対住居跡の組み合わせがあり、わずかに継続性がある。10mの最大規模の住居跡から銅釧が出土している。鉄製品は持たない。

おわりに

田村遺跡群の竪穴住居跡は411棟を数え、更に掘立柱建物跡、土坑等膨大な遺構を検出した。集落内が大溝で5つの「群」に大きく分かれているのではないかと安直に考え、分析を始めた。分析作業の中で、一つの解釈論では田村遺跡群の中後期の集落を分析することは困難であり、結果として、虚しい「群別作業」を意味もなく行なってしまったのではないかと危惧している。

個別の住居跡の属性分析の積み重ねから、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑等の遺構の組み合わせによる下位単位、中位単位の抽出を行なった。一見すると同一規模2棟1対の組み合わせの住居跡が多いように見受けられたものの、それ以外にも多くの変異が認められた。

下位単位の多様性は、最小単位の時間的空間的变化を反映した結果としての動態であると考えられる。規模、形状は違うものの、弥生前期から2棟1対は認められ、Ⅲ期までそれは引き継がれ、IV2～V1期までは核となる中位単位には残存し、それ以降は解体の方向に向かっている。そうした現象は、共同体、集落を形成する下位単位の居住形態の変化を表すものと考えられる。しかしながら、従来いわれている男女住み分け、複婚による居住形態の違いにより、下位単位に反映されているかどうかまでは不明である。また1群で見られた群の特徴、鉄製品、ガラス小玉を持たず、2棟1対ではない集落はどのような起因による相違か、出土土器に見られる南四国型甕と凹線文系統(「Ⅶ 南四国型甕について」久家隆芳、参照のこと)の違いから出自の違いが想定されるものの、では何故、出自の違うものが同一集落内に共棲できたのか、果ては共同体の構成とはどのようなものかと言った多くの疑問点に遡及してしまう。

今回の分析は現時点での土器編年を時間尺度として使用した。しかし、今後綿密な土器編年を再構築した際には、また違った集落構造が見えてくるかもしれない。とりあえずは、今回は生のままの膨大な資料を提示しても田村遺跡群の中後期の集落の姿が見えないということもあり、不十分ながら現時点での模索を提示した。下位単位の構成と言う視点から分析を行なったが、違った切り口で分析を行なうとまた違った集落構造が見えてくるかもしれない。

〔謝辞〕

久家隆芳、小野由香、坂本憲昭、坂本裕一、出原恵三の諸氏から教示、助言、資料提供を賜った。

久家隆芳氏からは「Ⅶ 南四国型甕について」の中で論述されているように、調査区西北部のI、N区に展開する集落(1群)には南四国型甕を多く持つグループであるとの有益な教示を頂いた。1群の集落構造、鉄器、ガラス小玉を持たないなどの他の群と違った様相を呈していることと符合する点が認められた。またこの拙論の査読もお願いした。小野由香女史からは石器に関する情報を頂い

た。坂本憲昭氏からは中後期土器全般について教示を頂いた。氏の「VI 弥生時代中後期の土器群」では中期後半をIV1期からIV3期まで小期を新たに3段階に設定している。氏のIV3期は拙論の小期IV～V1期に相当するものと考えられる。中後期の住居跡は400棟にも達し、氏の細分案を再度当てはめ検討しなおす時間的余裕がなく、報告書の時期決定をそのまま採用していることをお断りしておく。坂本裕一氏からは掘立柱建物跡、土坑の基礎資料の分析データを頂戴し、拙論に活用させていただいた。出原恵三氏からは南四国の弥生時代の集落全般について教示を頂いた。感謝したい。

参考文献

- 池澤俊幸、2000、高知平野における弥生時代の掘立柱建物跡と溝状土坑、北高田遺跡、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 梅木謙一、2002、松山平野における西南四国系土器の流入形態、四国とその周辺の考古学、犬飼徹夫先生古希記念論集刊行会
- 小松大洋、1998、南四国における弥生時代の鉄器について、下ノ坪遺跡Ⅱ、高知県野市町教育委員会
- 久家隆芳、2002、南四国西部の弥生土器－中期から後期前葉を中心に－、四国とその周辺の考古学、犬飼徹夫先生古希記念論集刊行会
- 坂本憲昭、2004、高知県中央部(田村遺跡群)の弥生中期中葉～中期末の土器、弥生中期土器の併行関係、第53回埋蔵文化財研究集会発表要旨集
- 佐々木藤雄、1996、水野集落論と弥生時代集落論(下)－侵食される縄文時代集落論－、異貌、15号、共同体研究会
- 出原恵三、1999、南四国における弥生時代中・後期集落の消長、弥生時代の集落－中・後期を中心として－、第45回埋蔵文化財研究集会発表要旨集、埋蔵文化財研究会・九州国立博物館誘致推進本部
- 〃、2002、中部瀬戸内と高知平野－拠点集落成立の背景－、環瀬戸内海の考古学、平井勝氏追悼論文集、上巻、古代吉備研究会
- 〃、2004、弥生時代前期末・中期初の集落－南四国と瀬戸内沿岸地域の事例から－、古代文化、第56巻第4号
- 松村信博、1994、弥生時代中期の土器と集落 高知県、弥生時代中期の土器と集落、古代学協会四国支部第8回大会資料、古代学協会四国支部
- 村上恭通、2002、土佐における弥生時代鉄製品の諸問題、四国とその周辺の考古学、犬飼徹夫先生古希記念論集刊行会
- 森下英治、1999、讃岐地方における弥生時代中期集落の機能と構造について、瀬戸内の弥生中期集落－その機能と構造研究－、古代学協会四国支部第13回大会資料、古代学協会四国支部
- 森田尚宏、1999、高知県田村遺跡群、瀬戸内の弥生中期集落－その機能と構造研究－、古代学協会四国支部第13回大会資料、古代学協会四国支部
- 田村遺跡群、1986、第3～5分冊、高知県教育委員会
- 田村遺跡群・田中地区 高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査(山側進入灯設置区域)報告書、1986、高知県教育委員会
- 田村遺跡群発掘調査概報、2002、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 田村遺跡群Ⅱ、2004、第1～8分冊、高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 野市町本村遺跡調査報告書、1993、野市町教育委員会
- 下ノ坪遺跡Ⅰ、1997、高知県野市町教育委員会
- 下ノ坪遺跡Ⅱ、1998、高知県野市町教育委員会
- 深淵遺跡発掘調査報告書、1989、野市町教育委員会
- 福井遺跡、1993、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 北高田遺跡、2000、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- バーガ森北斜面遺跡Ⅱ、2001、高知県伊野町教育委員会

V 弥生時代前期土器の編年

はじめに

南四国の中央部に位置する高知平野は、北面を峻険な四国山地に遮られ、南は太平洋に臨む一種隔絶された孤立的地勢にあると考えられがちである。しかしながらこのような地理的先入観に反して、高知平野における弥生文化の成立は意外に早く、西日本各地域の中でも、充実した内容を擁している。このことについて筆者は田村遺跡を中心とした土器、石器、集落遺構の視点から幾つかの小論を発表してきた。その結果、弥生文化成立期前後の高知平野は、文化的には環瀬戸内圏に属し、特に中部瀬戸内との関係が強かったこと。土器においては、縄文晩期土器と弥生前期土器との二重構造と弥生前期土器単純構造との比較から、当地域が遠賀川式土器の生成地の一つであり、これまで通説であった玄海灘沿岸地域からの伝播によって形成されたものではないことを述べた⁽¹⁾。大陸系磨製石器では、初期の段階からセット関係が認められ北部九州からと考えられる搬入品の段階から在地生産への経緯を明らかにした⁽²⁾。集落においては、初頭の段階において松菊里型住居や掘立柱建物によって構成された集住性の強い居住域が形成せられ、各遺構についても玄海灘沿岸地域とは異なった特徴を持っていることを指摘した⁽³⁾。

これらの成果は、主に1980年代前半に実施された田村遺跡の調査成果に基づいたものであった。その後、90年代後半に至って高知平野では、再び田村遺跡の大規模調査が実施され、さらに西部の居徳遺跡においても当該期の大量の遺物を検出している。田村遺跡においては、80年代の調査ではあまり恵まれなかった環濠成立期・存続期の良好な一括資料が得られ、これまで不明であった当該期の竪穴住居など居住域の様相も新たに判明した。これらの成果は、前期初頭の集落との比較検討を可能にするものであり、弥生文化成立期の集落変遷を知る上でも極めて重要な資料である。一方、高知平野西部に位置する居徳遺跡は、遠賀川式土器と縄文晩期土器の二重構造であることが明らかとなった。ここからは田村遺跡では認められなかった東日本系の土器やその模倣品が多く出土し、いわゆる孔列文土器も多く出土するなど複雑な様相を見せている⁽⁴⁾。このことは、弥生文化成立期前後において固有の地域間交流のあったことを示すものである。田村遺跡と居徳遺跡は、同じ高知平野の中であって弥生文化成立期における対照的な二者として把握することができるものであり、極めて注目すべき文化現象と言えよう。

近年、近畿南部の堅田遺跡⁽⁵⁾など太平洋沿岸地域における前期の様相が明らかとなりはじめた。そして松菊里型住居や石器組成などにおいて高知平野との共通性が認められるなど、これまでほとんど関心を示されることのなかった黒潮沿岸地域における弥生時代開始期の動向も注目されはじめてきている。黒潮ルートとでも呼称すべき交流の実態が見えはじめてきたのである。このことの解明は、西日本における弥生文化の成立と展開の研究に新たな地平を開くものであり興味深いものがある。同時に当該期に高知平野の果たした歴史的な役割も問われよう。このように高知平野は、弥生文化研究の進展に新たな可能性を蔵している重要な地域として位置付けることができる。

ここでは、今後の諸研究を進展させる上で、その基礎となる前期土器の編年について新たな試案

を示すものである。

1. 前期土器編年研究の略史と形態分類

(1) 研究略史

高知平野における弥生前期土器の編年的研究は、戦後一貫して当地域の弥生文化の研究を促進されて来た岡本健児氏によって進められてきた。岡本氏は、1950年代から開始された西見当遺跡(現在では田村遺跡の中に含まれる)の一連の調査や大篠遺跡出土の資料から前期を西見当1式土器→西見当2式土器→大篠式土器の3期編年を組まれ当地域の前期土器編年の基礎を築いた⁽⁶⁾。その後1980年からはじまった田村遺跡の大規模調査の成果により、西見当1式土器に先行する型式として東松木式土器を設定し4期区分を発表されている⁽⁷⁾。

筆者は、岡本氏の研究成果を踏襲しつつ、田村遺跡や周辺部の遺跡調査が進む中で、大篠式土器を前後2型式に分け、前期土器をI-1様式からI-5様式の5期区分を提唱した⁽⁸⁾。さらに、岡本氏の東松木式土器→西見当1式土器→西見当2式土器を遠賀川式土器の生成期から発展期として前期I期と捉え、I a期→I b期→I c期の編年研究を行い遠賀川式土器の生成と発展について述べ西日本各地域との併行関係にも言及し、高橋護氏の成果⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾にも依拠し二重構造論の視点から遠賀川式土器の環瀬戸内説を提唱した⁽¹⁾。

その後、1996年から再び田村遺跡において大規模調査が行われることとなったが、この調査によって、前回の調査では必ずしも良好な資料に恵まれていなかったI b・c期の良好な資料を多く得ることができたのである。特に前期環濠の内外で検出された土坑からは一括性の高い資料を得ることができた。その結果、従来の内容を変更する必要が生じ、特に筆者のI c期、岡本編年の西見当2式土器については前後2時期に細分することが可能となったのである。I c期をI c期とI d期に細分し、I期はI a～I d期の4時期に、『弥生土器の様式と編年』に示したI-4・5期を遠賀川式土器の衰退と地域性の顕在化の時期として前期II期として捉え、II a・b期として提示したい。高知平野の前期土器は6小期に編年を組むことが可能となったのである。

I a期については、既存の内容に変更を要しない。I b～I d期の土器は、環濠周辺の調査区A10、B1・4、C1～4、C4北、E2～5区の土坑や溝などから大量に出土しているが、今回編年の対象とする土器は出土状況から一括性の高いと考えられる遺構出土のものに限定した。土坑122基、竪穴住居9棟、溝2条からの出土土器である。まず、器種を構成する壺、甕、鉢、高坏、蓋について主として口縁部形態や施文の特徴などから形態分類を行ない、その分析に加えて胴部文様などさまざまな諸属性について観察し各小期の特徴について述べたい。形態分類については、既存の分類基準にできるだけ依拠したが必要に応じて追加や変更をおこなった。なお壺と鉢については、法量毎に小型(口径・器高10cm未満)、中型(口径10～30cm)、大型(口径30cm以上)として分類を行なった。土器点数のカウントについては、図示可能な大きさの口縁部の点数によったが、高坏と蓋については接合部、頂部にも考慮した。

(2) 形態分類

壺

小型壺(V-3図)

A類：口縁部、頸部、胴部の区分の明瞭なもの。

B類：胴部最大径から口縁部に向かって立ち上がるもの。

中型壺(V-1・9・13・16図)

A類：口頸部に段や文様を施さないもの。口頸部の形態から3タイプに分けることができる。

A1類：頸部が直線的に立ち上がり、口縁部が「く」字状に屈曲する。

A2類：口縁部の外反度が弱い。

A3類：口縁部が滑らかなカーブを描いて外反する。

B類：口頸部界に段部を形成するもの。段の形態から以下の3タイプに分けることができる。

B1類：しっかりとした厚い段部を有する。

B2類：弱い段部を有する。

B3類：突帯状の段部を有する。

また以下の諸属性によって更に細分することができる。 a：段部や頸部に文様を持たない。

b：段部や頸部に少条(1～3条)のヘラ描沈線を有する。 c：段部や頸部に列点文を有する。

d：段部に刻目を有する。 e：頸部に多条沈線を有する。

C類：口頸部界に突帯を有する。

D類：A1～A3類と同様の形態を有し、口頸部界および頸部に以下のような属性が付加される。

a：無文 b：少条のヘラ描沈線 c：列点文 d：多条沈線 e：貼付突帯 f：削出突帯

E類：D類よりも口縁部が発達するタイプで、2つに細分される。

E1類：口縁部がラッパ状に大きく外反する。

E2類：頸部が直立気味に立ち上がり、口縁部が外反する。

1・2類ともにD類と同様の諸属性が付加されるが、貼付突帯文eには①断面三角形、②断面台形、③断面蒲鉾形、④扁平の4種類がある。

F類：口縁部が直線的に外反する。E類と同様の諸属性がある。

G類：無頸壺

H類：長頸の壺

I類：球形または長胴の胴部から口縁部がラッパ状に外反する。

大型壺(V-2・10図)

中型壺の分類に準拠して以下のように分けることができる。

A類：口頸部界に段や沈線をもたない。

B類：口頸部界に段部を有する。

B1類：しっかりとした厚い段部を有する。

B2類：弱い段部を有する。

C類：口頸部界に突帯を有する。

C1類：刻目突帯を貼付する。

C2類：削出突帯を有する。

D類：口頸部界にヘラ描沈線を有する。

甕(V-4・5・11・14・16・17図)

A～D類は註1)の分類をそのまま踏襲する。

E類：如意状口縁を有するもの。文様、段部の有無やその形態、口唇部の形態や刻目の部位、更に胴部形態によって以下のように細分することができる。

E1類：段や沈線を持たない。

E2類：段を有する。段部の形態や段部に施される文様から更に細分することができる。

①：段部が短い。②：段部が長い。③：段部に刻目無し。④：段部に刻目を有する。⑤：段部に沈線を施す。⑥：段部に沈線+列点文を有する。⑦：削り出し状の段部。

E3類：少条の沈線を有する。

E4類：少条の沈線+列点文を有する。

E5類：列点文を有する。

E6類：多条沈線を有する。

E7類：多条沈線+列点文を有する。

E8類：貼付突帯文を有する。

E9類：削出し突帯を有する。

F類：上胴部から大きく外反して口縁部に至るもの。

G類：上胴部で強く「く」字状に内傾し口縁部は如意状に外反する。

H類：僅かに外反気味か直口する口縁部。

I類：口縁部を外方に強く屈曲させた「逆L字形」の口縁部。

J類：口縁部が直線的に立ち上がりバケツ状の形態を有し、晩期粗製深鉢に系譜がある。

K類：南四国型甕。

L類：細かな波状口縁を有する。

M類：把手を有する深鉢形。

以上の分類の他に口唇部形態や口縁部刻目の位置、胴部形態によって以下のように分類した。

口唇部形態

a：強いナデ調整により凹状を呈する。b：ナデ調整により面をなす。c：丸く納める。d：沈線を施す。

刻目の部位

①：下半～下端 ②：全面 ③：上・下端 ④：刻目なし

胴部形態

I：最大径を口縁部に有し底部から口縁部に向かって直線的に立ち上がる。

II：最大径は口縁部に有るが胴部中・上に膨らみを有する。

Ⅲ：胴部の膨らみが大きく最大径が胴部にある。

鉢(V-6・12・15・16・17図)

小型、中型、大型鉢があるが、形態分類は統一的行なった。

A類：口縁部が如意状に外反する。以下のように細分できる。

A1類：段や沈線のないもの。

A2類：段を有する。㊶：段部に刻目や沈線のないもの。㊷：段部に刻目。㊸：段部に少条の沈線を有する。

A3類：少条の沈線を有する。

A4類：多条沈線を有する。

A5類：貼付突帯を有する。

A6類：削出し突帯を有する。

B類：口縁部が僅かに外反する。

C類：口縁部が僅かに内湾する。

D類：口縁部が強く内湾する。

E類：口縁部が直線的に外方に立ち上がる。

F類：波状口縁部を有する。

G類：口縁部が内側に屈曲する。

高坏(V-7・15図)

A類：口縁部が直線的に立ち上がるもの。

B類：口縁部が外反するもの。

蓋(V-8・15～17図)

頂部形態

A類：頂部が水平な面をなし、薄くて摘み状をなさないもの。

B類：頂部が水平な面をなすが、作りが厚く摘み状をなすもの。

C類：頂部上面が僅かに凹むもの。

D類：頂部上面が大きく凹み、高台状を呈する。

笠部形態

a類：直線的に下降し口縁部に至るもの。

b類：緩やかに外反しながら口縁部に至るもの。

c類：内湾気味に下降して口縁部に至るもの。

d類：途中で屈曲して外反するもの。

2. 分析と編年

(1) I a期

今次調査においては、調査区南端のM区において土坑1基(M4区SK401)を検出したのみである。甕A類が1個体分出土している。当該期については註1)に示した成果を用いる。

(2) I b期

I b期に属する遺構は、A10区SK1025、B1区SK119・163・172、B4区SD411、C1区SK1007・1040・1041・1061・1176、C2区SK201・209、C4区SK4018・4024～4026・4029・4040・4048・4061・4084・4097、C4北区SK4147・4149・4179、E2区SK232・248・249・257・258・262・287・292、E5区SK562・570、E6区SK625、F3区ST107である。

壺116点(26.6%)、甕250点(57.3%)、鉢49点(11.2%)、高坏8点(1.8%)、蓋13点(3.0%)で構成される。I a期に較べて大きな変化は認められないが、甕が10%程減少し他の器種が少量増加している。

①壺(V-1～3図)

I b期の壺は、小型3点(2.5%)、中型80点(67.8%)、大型35点(29.7%)である。

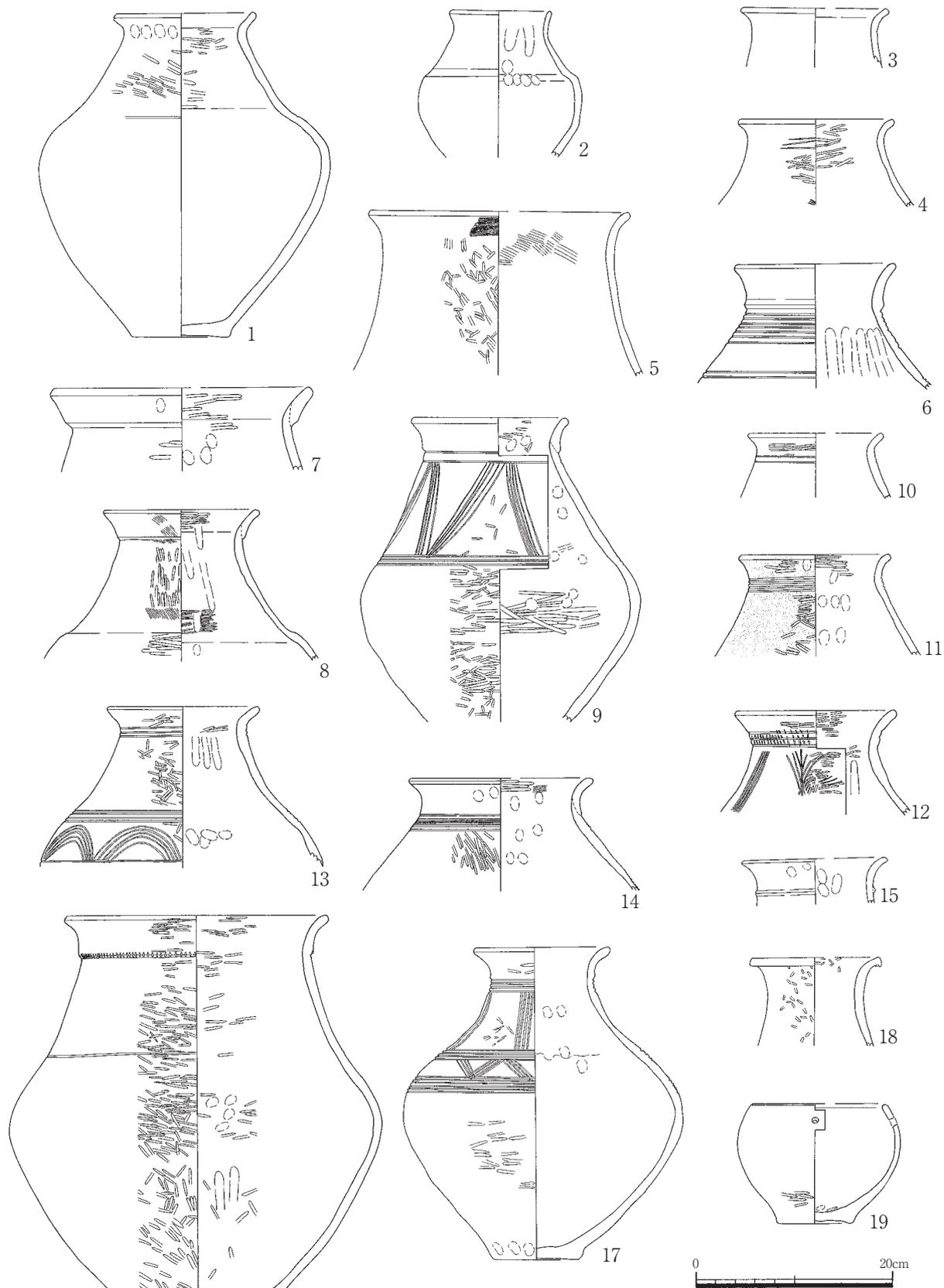
小型壺(28～30)は僅少であること、A・B類が認められることなど先行するI a期を踏襲しており形態的な変化もあまり認められない。ただI a期は区画文様以外に文様を持たない例が多く認められたのに対して本例では文様帯を持つものが多い傾向にある。

中型壺はA・B・D・E・G・H類の6類からなるが、主流はA・B・D類である。I a期に僅少ながら存在した突帯文を有するC類や短頸壺、直口壺は認められない。逆にI a期に見られなかったD類や無頸壺のG類、長頸の壺であるJ類が見られる。構成的にもI a期に較べて大きな変化が見られる。I a期は段を有するB類が8割近くを占めほとんど独占していたのに対して、該期ではB類が29点(36.2%)と最も多くを占めているもののA・B・D類が凡そ2～3割と平均的な比率を保ち独占が崩れている。

A類はA3類が多くを占めA1・2類がほぼ同数であること、B類もB1類が多くB2類、B3類がこれに続く傾向もI a期と同様であるが、B類は特に文様を持たないBa類が多数を占めるものの段部に沈線や列点文などの文様を有するものが22.6%とI a期に較べてかなり増加している。これらの中には多条沈線を施す例(6・14)も見られるが、これらの沈線は極細線で描かれており、II期以降に

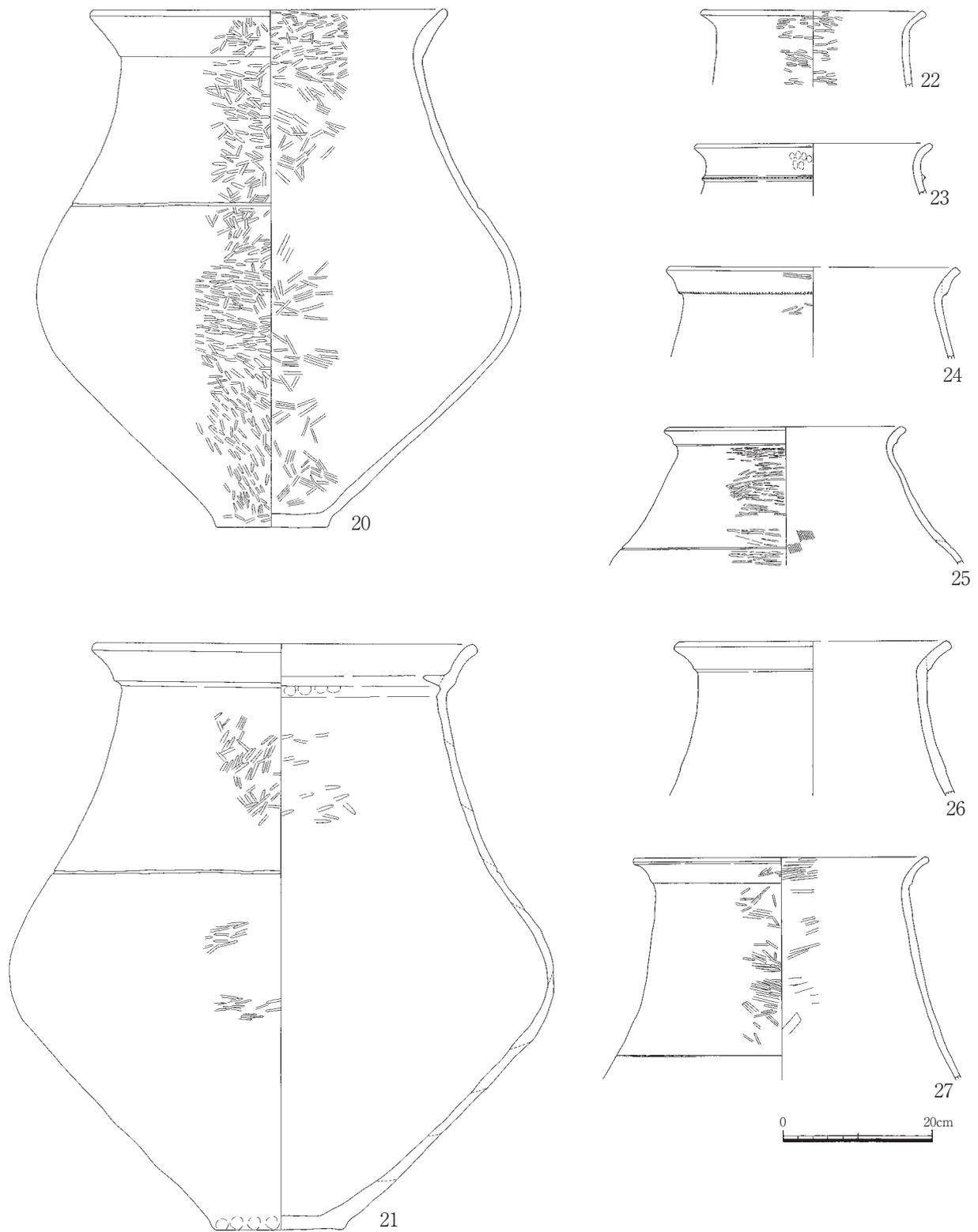
	壺	甕	鉢	高坏	蓋	計
I a期	279点(23.5%)	814点(68.5%)	80点(6.7%)	3点(0.25%)	12点(1.0%)	1188点
I b期	116点(26.6%)	250点(57.3%)	49点(11.2%)	8点(1.8%)	13点(3.0%)	436点
I c期	115点(23.7%)	289点(59.6%)	55点(11.3%)	3点(0.6%)	23点(4.7%)	485点
I d期	91点(32.9%)	146点(52.7%)	34点(12.3%)	1点(0.4%)	5点(1.8%)	277点
II a期	55点(44.4%)	49点(40.0%)	6点(4.8%)	0(%)	14点(11.3%)	124点
II b期	21点(32.8%)	38点(59.4%)	1点(1.6%)	0(%)	4点(6.3%)	64点

表V-1 田村遺跡前期土器組成



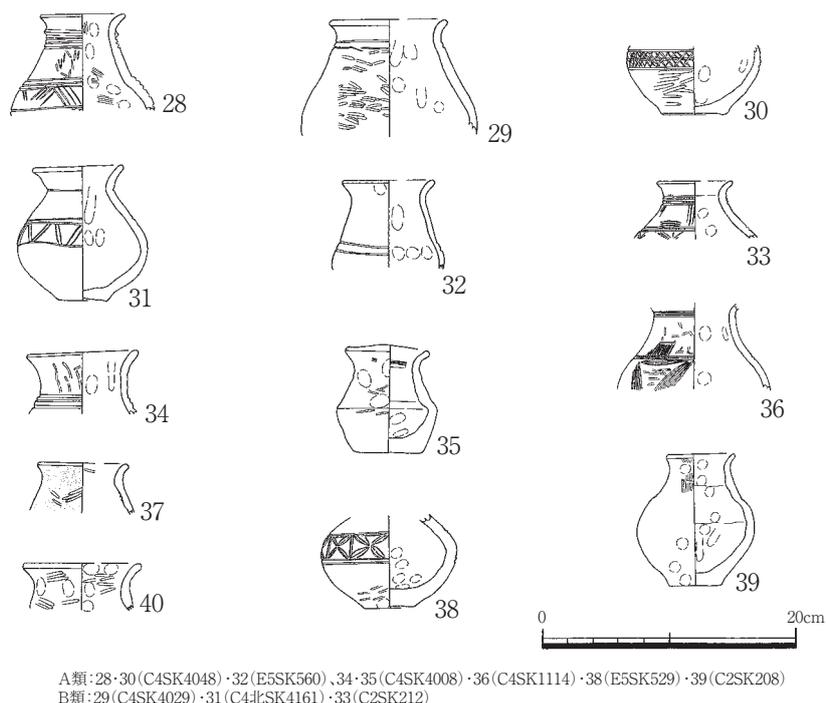
A1類:1(C4SK4025)、A2類:2(C4SK4061)・5(B4SD411)、A3類:3(C4SK4025)・4(C4SK4048)
 B1a類:7(C4SK4061)・8(C4SK4026)、B1b類:9(C4SK4040)、B1d類:16(E6SK625)、B2b類:17(E6SK625)
 B3e類:6(E2SK287)・14(C4北SK4149)、D1b類:10(C4北SK4179)、D3b類:13(C4SK4025)、D3d類:11(C4SK4048)
 D3f類:12(C4北SK4149)、E2e①類:15(C4北SK4179)、G類:19(C4SK4048)、H類:18(C4SK4024)

V-1図 Ib期中型壺



A類: 22 (C4SK4029)
 B1類: 21 (C4SK4048) · 24 (C4北SK4149) · 25 (E2SK232) · 26 (E2SK248) · 27 (C4北SK4149)
 B2類: 20 (C4北SK4149)
 C1類: 23 (C4SK4025)

V-2図 Ib期大型壺

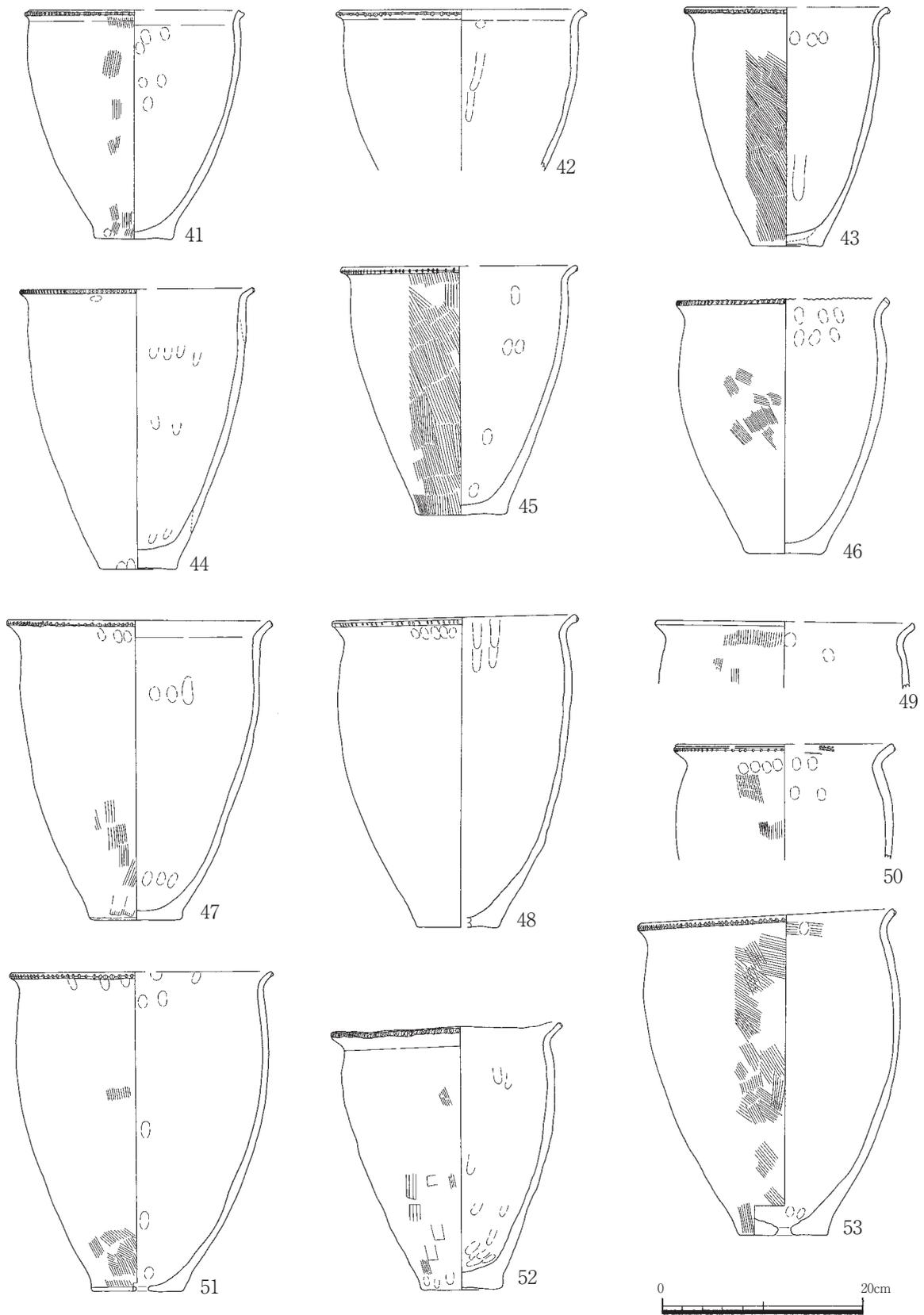


V-3図 Ib～Id期小型壺 (Ib期: 28～30、Ic期: 31～33・36、Id期: 34・35・37～39)

一般化する多条沈線とは手法が異なっている。D類の施文は、少条沈線が圧倒的多数である。E類は頸部が直立気味のE2類が3点(3.7%)認められるが胴部以下の形状は不明である。無形壺のG類は、前回の調査では壺として識別し得なかったものである。5点(6.2%)出土しており比較的なめらかに内湾し一対の孔を有するもの(19)と強く内傾する口縁部をもつタイプ(E2区SK262)が見られるが共に無文である。H類は1点(18)のみの出土である。明らかに長原式の壺⁽¹¹⁾などに見られるような縄文晩期に系譜が求められるものである。中型壺の胴部などに施される文様は、重弧文、複線山形文、綾杉状文様が見られる。Ia期に較べると文様の使用頻度は高い。

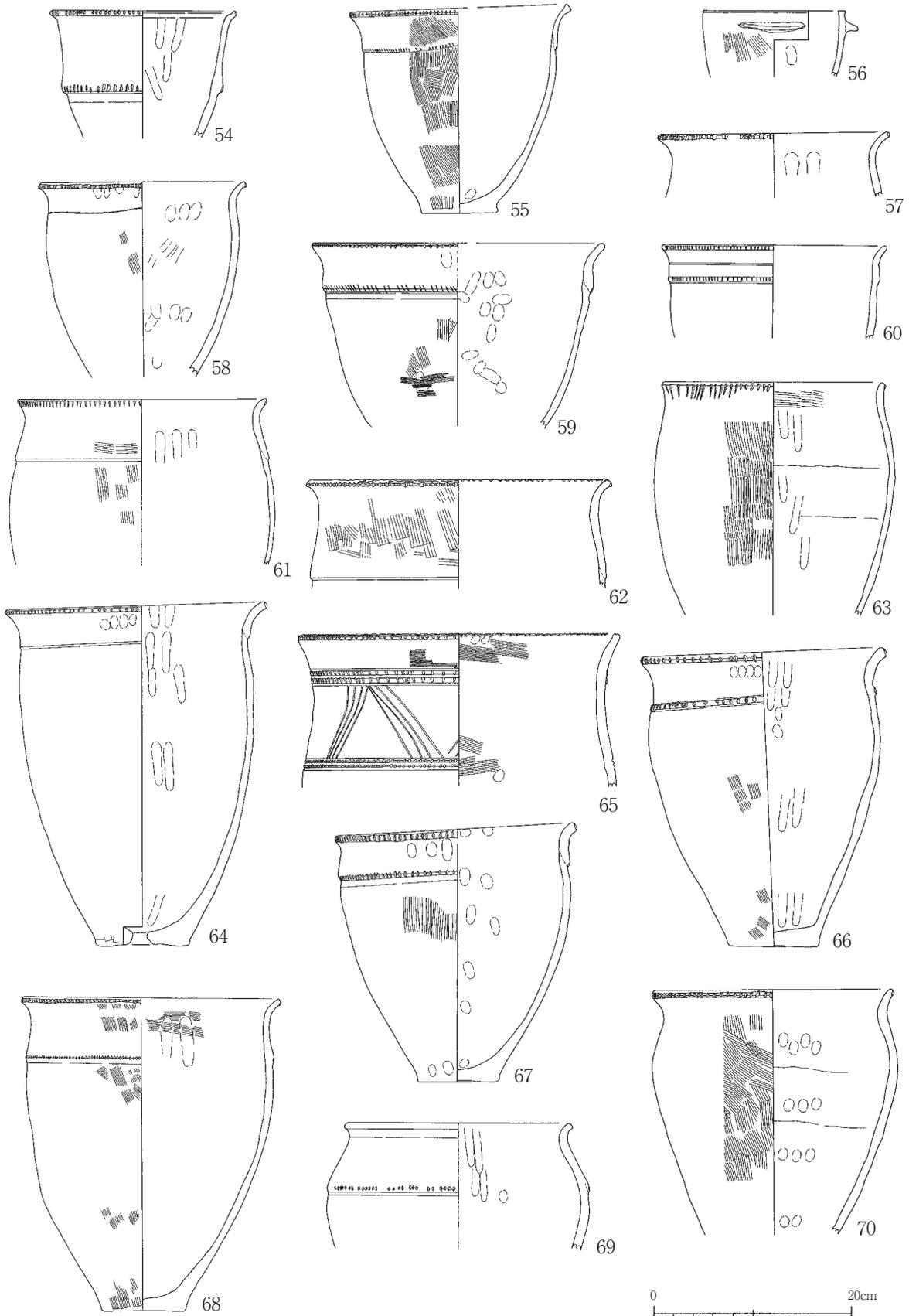
大型壺は33点出土している。A類2点(6.1%)、B類29点(87.9%)、C類2点(6.1%)で、主体となるB類はしっかりした段部を持つB1類が圧倒的多数を占めている。これらの構成比はIa期と同様の傾向を示している。形態的にも大きな変化は認められないが、C1類のV-2図23の刻目突帯文はIa期のそれに較べてやや小型化している点や底径が小さくなっているところに変化が見られる。V-2図21の口縁部内面に断面三角の突帯が箍状に巡るのは初めての例である。文様は頸胴部界の1条の区画沈線、段部の刻目(24)以外には認められない全体にシンプルな作りである。赤彩を施したものが2例見られる。

以上述べた小～大型壺の成形は、粘土帯による外傾接合であり段部の成形も観察可能なものは全て粘土帯接合時に生じたものである。器面調整も大きさに関係なく外面はハケ調整の下地の上へハラ磨きで仕上げている。ハラ磨きの方向は横方向を基調とするが頸部外面については縦方向に施されるものも見られる。



D1a①類:41(C2SK201)、E1a①類:42(C4SK4029)、E1b①類:47(C4SK4024)・48(C4SK4061)・53(C4SK4048)
 E1b②類:52(C4SK4040)、E1b④類:49(E2SK232)、E1c①類:43(C4SK4061)・45(B4SD411)・51(C4SK4048)
 E1c②類:44(B4SD411)・46(B1SK119)、E1d①類:50(C1SK1007)

V-4図 Ib期甕(1)



E2③@c①類：59(C4北SK4147)・67(C4北SK4179)、E2a②@c②類：64(C4SK4029)、E2②@b①類：55(C4北SK4179)・68(C4SK4024)
 E2②@d②c①類：60(C4SK4025)、E2b②@c①類：61(E2SK292)
 E2b②@b③類：62(E2SK232)、E2b②@c②類：54(C4北SK4147)、E3b①類：58(C1SK1061)、E9c①類：66(C4SK4025)
 F1c②類：57(E2SK232)、F5d③類：65(C4北SK4149)、G1b①類：70(E6SK625)、G2b②@c4類：69(C4SK4024)
 H1c①類：63(C4SK4048)、M類：56(E2SK232)

V-5図 Ib期甕(2)

②甕(V-4・5図)

D・E・F・G・H・J類の6類からなるが、中心は如意状口縁を有するE類が9割以上を占め、他のタイプは1%前後で推移している。A類が1点出土しているが細片であり混入と考えられる。I a期に較べてバリエーションが少なく、何よりA類やB類などの弥生土器化した突帯文土器やその系統に属するものが4割を占めていたのとは大きな違いである。したがってここでは、遠賀川式土器に見られるバリエーションや特徴の抽出が主要な作業となる。

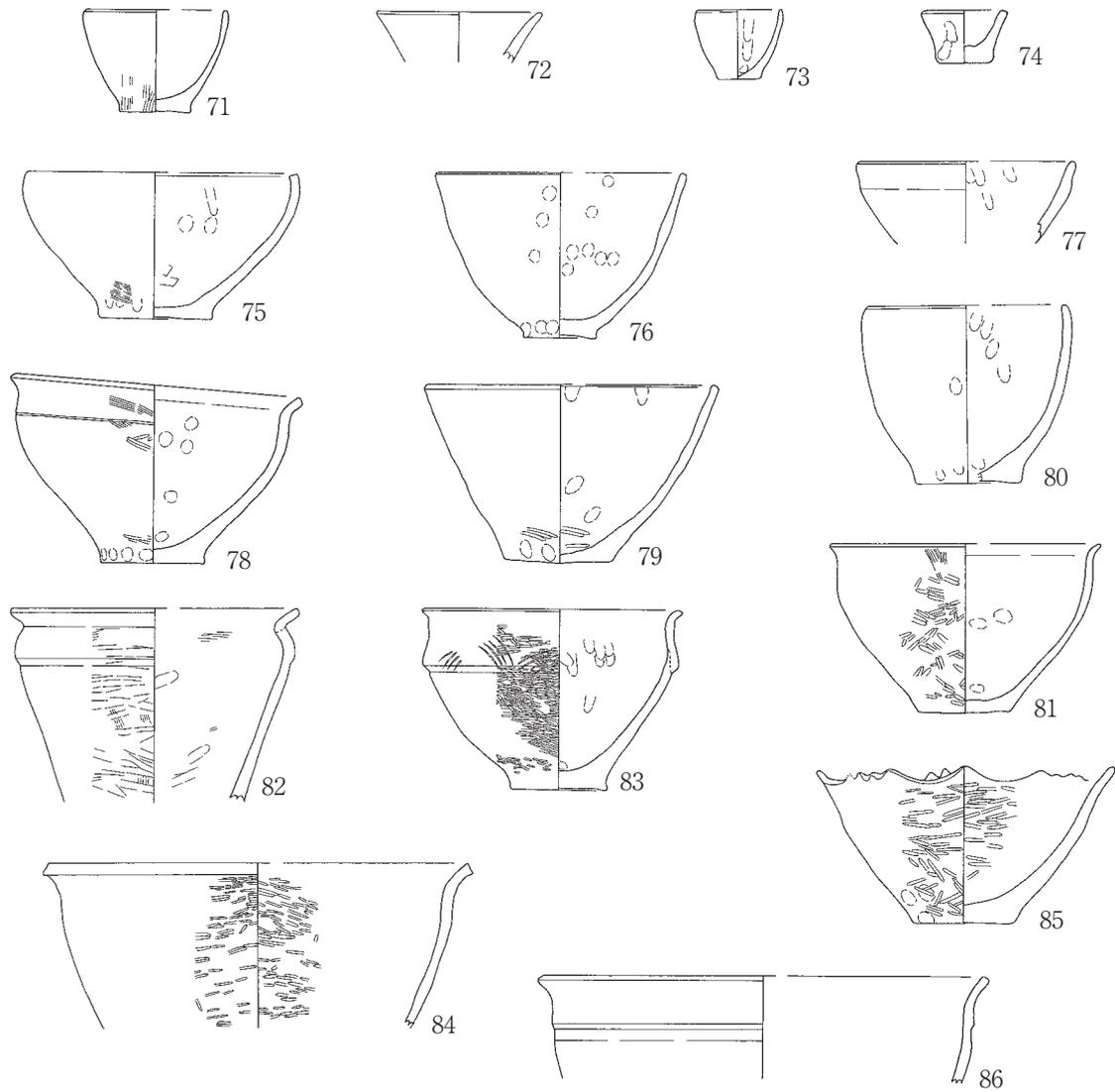
E類で主体をなすのは段や文様を持たないE1類が156点(67.5%)、段部を持つE2類64点(27.7%)、少条の沈線を施すE3類9点(3.9%)、列点文と削り出し突帯を持つE5類とE9類が各1点である。E1類が中心となるのはI a期と同じであるがE2類がI a期では1割未満であったのに較べると3倍近くに増加している。E2類の段部には短いもの①と長いもの②が見られるが、前者が53点(82.8%)、後者が11点(17.2%)である。I a期が2:1の比率に較べて後者が多くなっている。このE2類には③類とした段部に刻目を施したものが48.4%を占めている。

G類は、I a期の突帯文系土器に見られた「く」字に屈曲するタイプとE類との折衷タイプとして捉えることができよう。E3類は9点のうち、8点が1条のヘラ描沈線、1点が双条原体による施文である。E9類のV-5図66に施された削り出し突帯と刻目はI a期には認められなかったものである。居徳遺跡4C区SR1出土の縄文晩期深鉢⁽¹²⁾の胴部突帯に系譜を求めることが可能なものである。F5類としたV-5図65も同様の系譜に連なるものである。当該期の甕は総じて文様を施すことが少ないが、それでもI a期に較べるとやや増加傾向にある。

つぎに、しばしば問題となる口唇部形態や刻目の部位、胴部の膨らみについてE類を中心に見てみよう。口唇部形態は、凹状のa類7点(3%)、面をなすb類107点(46.3%)、丸くおさめるc類115点(49.8%)、沈線を施すd類2点(0.9%)である。この比率は基本的にI a期と変わらないが、I a期では10%前後を占めていたa類の減少が顕著である。このa類はD類など突帯文系の突帯を意識した調整の名残りを示すものであり、突帯文土器の伝統の払拭として捉えることができよう。刻目の部位は、下端刻の①類140点(61.7%)、全面刻の②類79点(34.8%)、③・④類が各4点(1.8%)である。この比率もI a期と同様の傾向を示している。胴部の膨らみは、底部から直線的に口縁部に向かって立ち上がるI類が38点(18.3%)、胴部最大径と口縁部径が同程度のII類が159点(76.4%)、最大径が胴部にあるIII類が11点(5.3%)でこの比率も基本的にはI a期と同様である。

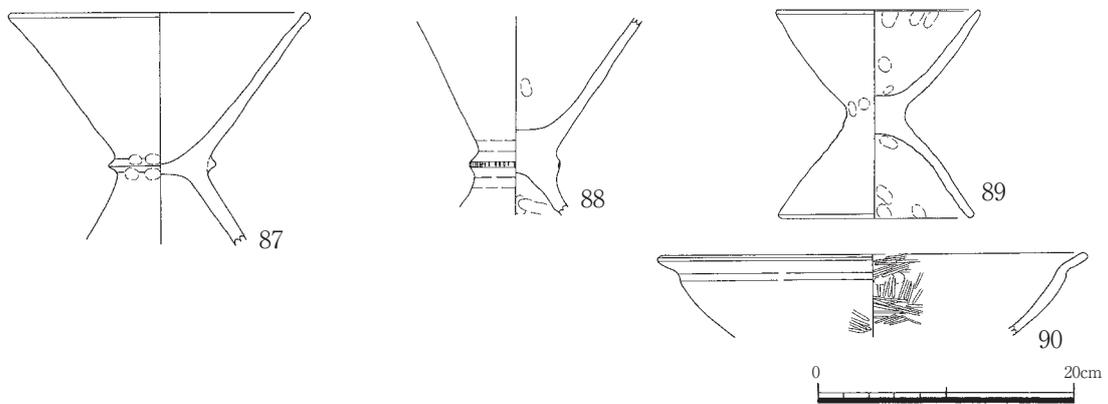
この他の特徴として底部穿孔を挙げることができる。直径1~1.5cmの孔を焼成後に穿ったものであり多くの場合、内外両側から開けている。51・53・64など確認できた底部85点中、14点(16.5%)に認められる。底部穿孔は、縄文晩期の深鉢には認められないものであり、朝鮮半島南部の無文土器にしばしば見られる特徴である。高知平野ではI a期の土器から比較的多く見られる。

成形手法は壺と同様にほとんど例外なく粘土帯による外傾接合で段部も観察可能なものはすべて粘土帯接合部で生じたものであり外面貼付によるものは認められない。外面の調整は縦方向のハケ調整を基調とするが丁寧にナデ消されているものも多い。使用痕跡の残るものについては胴部下半或いは3分の1が被熱赤変し、その部分から上に煤の付着が見られる。



小型鉢：74 (E2SK232)
 中型鉢 A1類：81 (E5SK562)、A2◎類：82 (C1SK1007)・83 (C1SK1061)、A3類：78 (E6SK625)、B類：77 (C4SK4026)
 C1類：71 (E2SK292)・73 (C4SK4025)・80 (C4SK4040)、D1類：75 (C1SK1040)
 E類：72 (C4SK4029)・76 (C2SK209)・79 (C4SK4061)、F類：85 (C4SK4024)
 大型鉢 A1類：84 (C4SK4026)、A2◎類：86 (E2SK249)

V-6図 Ib期鉢



A類：87 (C4SK4048)・88 (B4SD411)・89 (C4北SK4149)
 B類：90 (C4北SK4149)

V-7図 Ib期高坏

③鉢(V-6図)

小型3点(6.1%)、中型35点(71.4%)、大型11点(22.4%)である。小型鉢(74)は、何れも単純な器形であるが、器高に比して底径が大きい。壺或いは甕の底部付近で擬口縁部を成形したものと考えられる。分割成形⁽¹³⁾痕跡の認められる典型例と言えよう。形態・比率ともにI a期と同様である。

中型鉢はA・B・C・D・E・F類の6タイプからなっている。I a期に較べるとバリエーションが半減している。口縁部下で「く」字に屈曲するタイプや無文土器に系譜が有るのではないかと考えられていたタイプが欠落する。主体はA類で15点(42.9%)、次にC類9点(25.7%)が占めている。この構成比はI a期と同じである。A類は段や沈線を持たないA1類(V-6図81)が多いが、段を持つA2類(同82・83)、少条の沈線を持つA3類(78)も見られる。83は段部に重弧文が施されている。82は特異な器形をしているが外面へラ磨きが施されていることから鉢とした。A類にはこれらの他に、刻目突帯文をもつA5類が存在する。今次調査では認められなかったが前回の調査で出土している⁽¹⁴⁾。C類(71・73)・D類(75)・E類(72)は文様や段を持たない。僅少なながら注目されるのは波状口縁を持つF類(85)である。本例は明らかに縄文晩期の鉢に系譜を求められるが成形手法は外傾接合、分割成形の所産であり弥生土器として作られている。大型鉢はA類のみである。A1類(84)が7点と最も多く次いで段を持つA2類(86)や削り出し突帯を持つA6類(C4北区SK4170)が見られる。

鉢の成形はすでに触れたように、系統樹的な一連の工程の中で作られていることが良く理解できる。大型鉢では大型壺、中・小型では壺や甕の胴部下半と共通した形を有している。器面調整はハケ調整の後、横方向を基調とするへラ磨きで仕上げられている。

④高坏(V-7図)

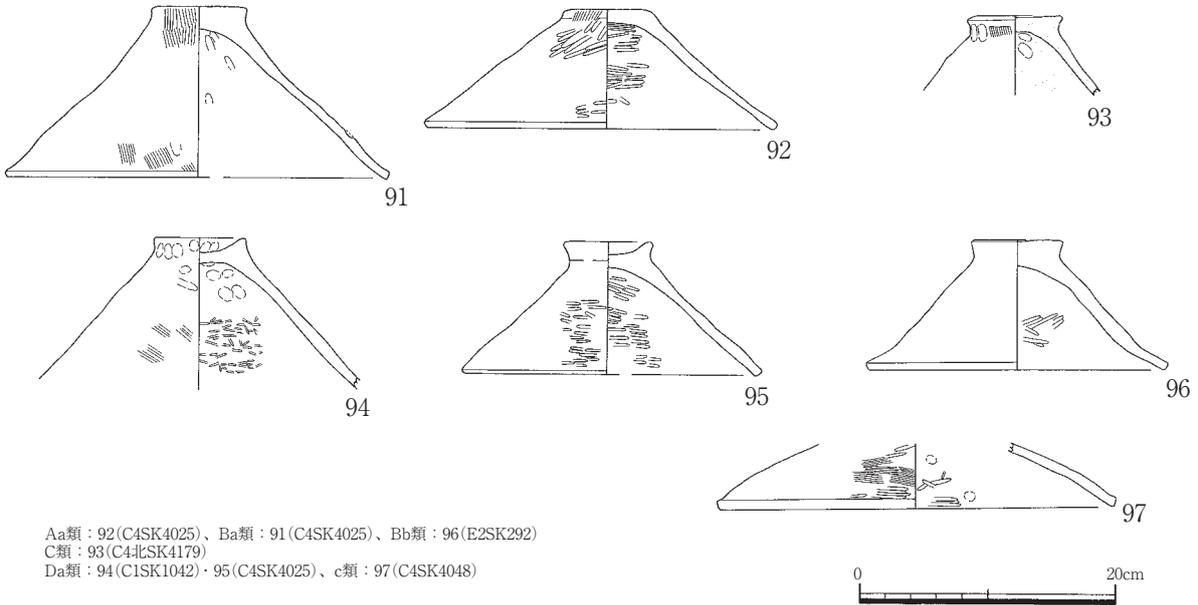
高坏は10点前後である。器種全体に占める比率は2%足らずであるが、I a期に較べて倍増している。杯部の形態はA類(87~89)とB類(90)の二者が見られ、両者ともI a期から見られるが前者が多い。この他、杯部が逆ハ字状に立ち上がり、口縁部内面に段を有するタイプ(C類)が知られるが⁽¹⁴⁾、今次調査では確認できなかった。A類は、杯部と脚部が対称的な形態をなしており接合部には刻目突帯や無刻突帯を1~2条貼付するものも見られる。また接合部の厚いもの(88・89)と薄いもの(87)があるが前者が多い。B類はI b期での確認は今回が初めてである。I a期のものに較べて口縁部屈曲部内面のカーブが緩やかである。器面調整はB類が丁寧なへラ磨を施すのに対してA類はナデ調整を基調とする。

当該期の高坏は僅少であるが、福岡平野など玄海灘沿岸地域に比較的多く知られている。それらはB類やC類であり、A類とは系譜を異にするものと考えられる。小山田遺跡⁽¹⁵⁾からは、条痕の施されたA類脚部が出土していることから、A類はその系譜を在地の縄文晩期高坏に求めることができる。

⑤蓋(V-8図)

頂部も含めて20点確認した。組成比は3.0%であるがI a期の3倍である。頂部はA・B・C・D類、笠部はa・b・c類が見られる。頂部はA類(92)が1点、B類(91・96)は7点、C類(93)は2点、D類

(94・95)が3点で、B類が最も多い。これらの中でA類は、I a期と当該期にのみ存在するもので古式のタイプとして位置付けられる。笠部形態は、直線的に開くa類(91・95)が6点、緩やかに外反



V-8図 I b期蓋

表V-2

	A類	B類	C類	D類	E類	F類	G類	H類	I類	その他	合計
I a期	47点(16.9)	219点(78.5)	10点(3.6)							3点(1.2)	279点
I b期	21点(26.3)	31点(38.7)		19点(23.8)	3点(3.8)		5点(6.3)	1点(1.3)			80点
I c期	29点(31.7)	24点(26.4)		26点(28.6)	7点(7.7)	1点(1.1)	3点(3.3)	1点(1.1)			91点
I d期	18点(25.7)	7点(10)		12点(17.1)	30点(42.9)	1点(1.4)	1点(1.4)	1点(1.4)			70点
II a期					55点						55点
II b期					6点(28.6)	2点(9.5)			13点(61.9)		21点

田村遺跡前期土器中型壺分類 ()は% ただしI a期は小型・大型壺が含まれている。

表V-3

	A~B類	C類	D類	E類	F類	G類	H類	I類	K類	その他	合計
I a期	222点(27.3)	2点(0.2)	99点(12.2)	417点(51.2)	39点(4.8)		20点(2.5)			15点(1.8)	814点
I b期	1点(0.4)		3点(1.2)	231点(92.4)	4点(1.6)	4点(1.6)	4点(1.6)			3点(1.2)	250点
I c期	2点(0.7)			281点(97.2)	2点(0.7)	1点(0.3)	1点(0.3)	1点(0.3)		1点(0.3)	289点
I d期				140点(95.9)	1点(0.7)		1点(0.7)	3点(2.1)		1点(0.7)	146点
II a期				33点(67.3)	9点(18.4)			7点(14.3)			49点
II b期				7点(18.4)	17点(44.7)			4点(10.5)	10点(26.3)		38点

田村遺跡前期甕分類 ()は%

表V-4

	E1類	E2類	E3類	E4類	E5類	E6類	E7類	E8類	E9類	その他	合計
I a期	376点(90.2)	38点(9.1)								3点(0.7)	417点
I b期	156点(67.5)	64点(27.7)	9点(3.9)		1点(0.4)				1点(0.4)		231点
I c期	110点(39.1)	44点(15.7)	87点(31)	30点(10.7)	4点(1.4)	3点(1.1)	1点(0.4)	1点(0.4)	1点(0.4)		281点
I d期	45点(32.1)	3点(2.1)	56点(40)	33点(23.6)		2点(1.4)	1点(0.7)				140点

田村遺跡前期甕E類の変化(I a~I d期) ()は%

表V-5

	口唇部形態a	b	c	d	計	刻目部位①	②	③	④	計
I a期	50点(12.1)	205点(49.5)	159点(38.4)		414点	276点(66.7)	136点(32.9)		2点(0.5)	414点
I b期	7点(3.0)	107点(46.3)	115点(49.8)	2点(0.9)	231点	140点(61.7)	79点(34.8)	4点(1.8)	4点(1.8)	227点
I c期	4点(1.4)	90点(32.4)	182点(65.5)	2点(0.7)	278点	55点(19.9)	216点(78.0)	1点(0.4)	5点(1.8)	277点
I d期		33点(23.6)	105点(75)	2点(1.4)	140点	23点(16.4)	114点(81.4)		3点(2.1)	140点

田村遺跡前期甕E類の口唇部形態と刻目の部位 ()は%

するb類(96)が11点、内湾するc類(97)が1点見られる。口径は25～30cmを測り、多くの場合口縁部内面に1～2cm幅でドーナツ状に巡る煤の付着が観察される。

(3) Ic期

Ic期に該当する遺構は以下の通りである。

A10区ST1001・1002、SK1021、C1区SK1002・1005・1006・1008・1022・1036・1037・1064・1105・1114・1115・1117・1142・1144、C2区SK204・206・212・213・216・220、C3区SK339・344・356・328、C4区SK4004・4005・4035・4036・4050・4051・4054・4087・4088・4100・4102・4106・4022、C4北区SK4139・4143・4161・4188・4195・4200・4201・4207・4141、D1区SK1010・1015・1027、E2区SK274・290・SD202、E5区SK517・518・559・560、F4区ST405・415・418・419・421、SK444・454・547・453・478・584

壺115点(23.7%)、甕290点(59.6%)、鉢55点(11.3%)、高坏3点(0.6%)、蓋23点(4.7%)で構成される。Ib期と比較して器種組成の比率に大きな変化は認められない。

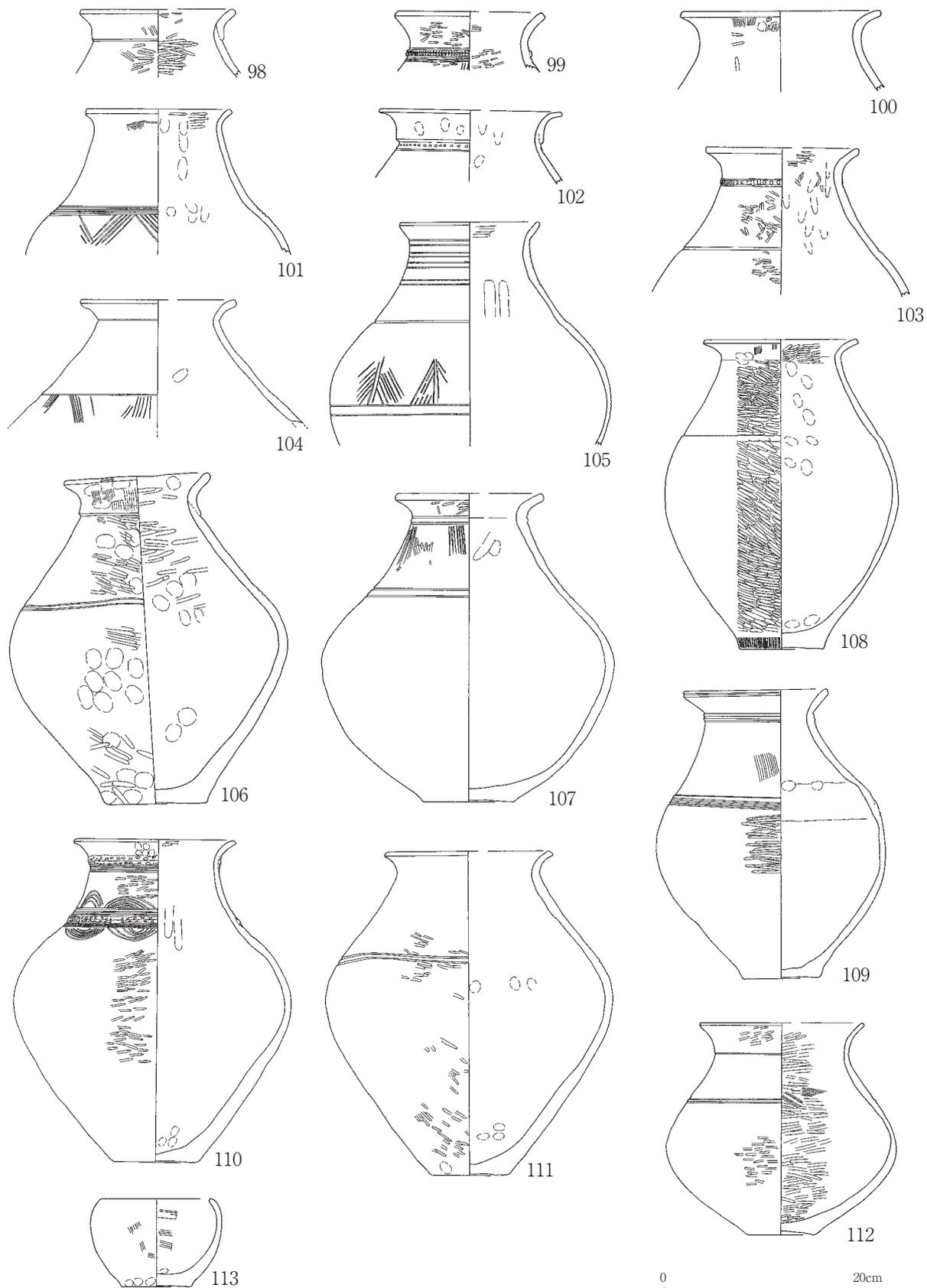
①壺(V-3・9・10図)

小型壺4点(3.5%)、中型壺91点(79.1%)、大型壺20点(17.4%)で構成される。Ib期に較べて大型壺の減少と中型壺の増加が認められる。

小型壺は僅少であること、A類(32・36)とB類(31・33)が見られることなどIb期と同様である。器形、文様においても顕著な変化は認められない。

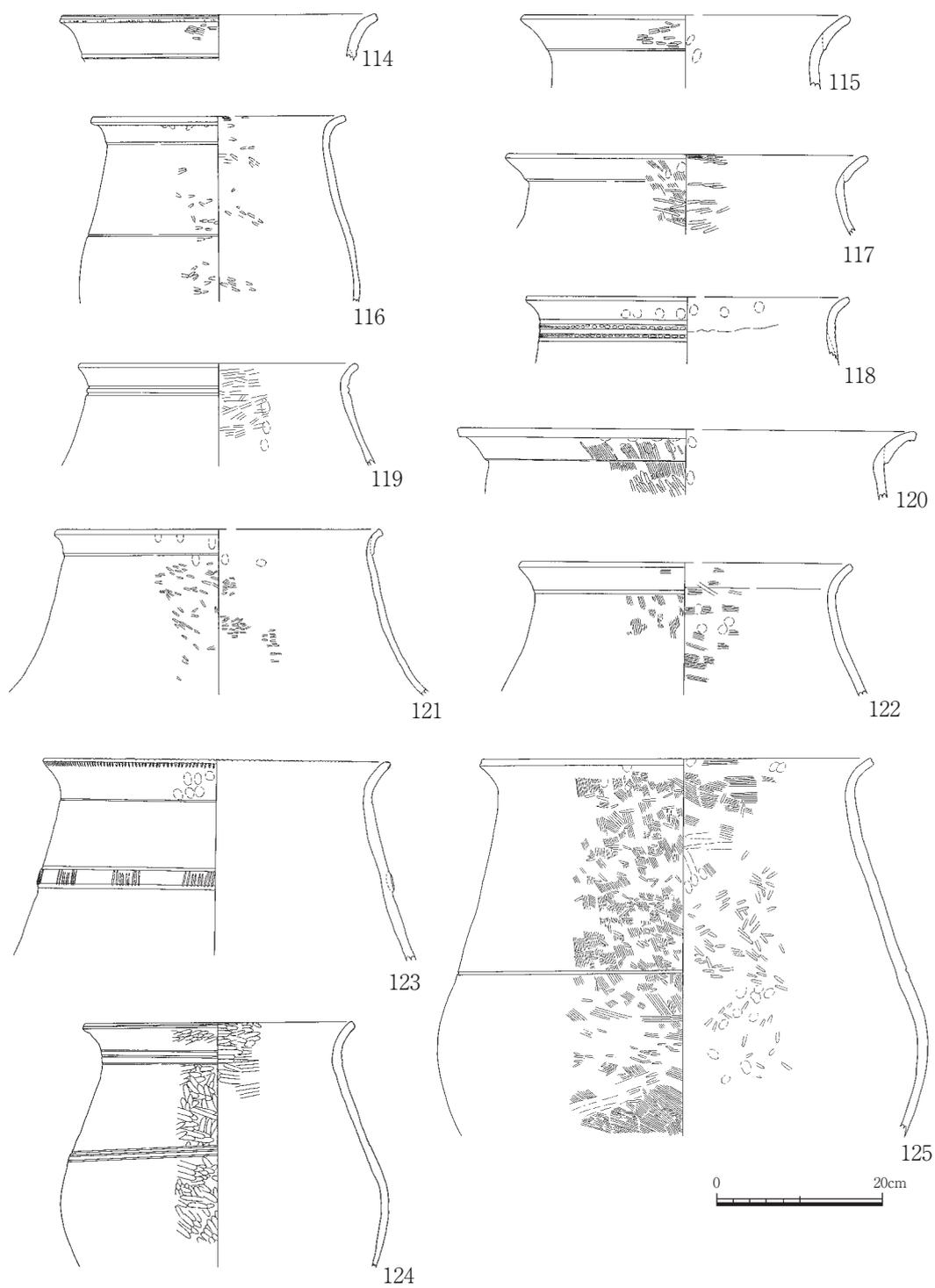
中型壺はA類29点(31.7%)、B類24点(26.4%)、D類26点(28.6%)、E類7点(7.7%)、F類1点(1.1%)、G類3点(3.3%)、H類1点(1.1%)の7タイプからなり、A・B・D類が主体となる点においてはIb期と同じであるが、組成比率には変化が見られる。すなわちIb期まで最も多くを占めていた段を持つB類に代わってA類が優勢になり、これまで三者の中では最も組成比率の低かったD類が増加し三者がほぼ3割で平均的な展開を見せている。この他、E類が倍増しており、逆にG類が半減している。B類の変化を細かく見ると、しっかりした段を持つB1類(98・106)がIb期に較べて1割程減少しており、その分弱い段部のB2類(104)が増加している。またこれまで古相の段部形態の指標としてきたB3類が消滅している。D類の文様では少条沈線のみb類が半数以上を占めているが、これまでに例のなかった少条沈線間に列点文を施したbc類(103)が3割近く見られる。壺の削り出し突帯(109)は、この時期から認められる特徴である。無形壺のG類は、無文のG1類(113)に加えて、弱い段部を持ったG2類や少条沈線を有するG3類が見られる。胴部文様については、従来からの複線山形文・重弧文・綾杉文などに加えて、古相とされる「+木葉文」⁽¹⁶⁾(C1区SK1114等)が登場する。

大型壺は、Ib期において9割近くを占めていた段を持つB類(115～117・121・122)が5割台にまで減少し、A類(125)が増加する。削り出し突帯や少条沈線を持つC2類(114)やD類(119・123)が新たに加えられる。



A1類：108(C3SK328)、A3類：101(C4SK4051)・111(C3SK339)
 B1a類：98(C4SK4054)・106(C1SK1002)、B1bc類：102(F4SK584)・110(C4SK4088)、B2a類：104(E2SK290)
 D3b類：107(C1SK1008)、D3b②類：99(E5SK560)、D3bc類：103(F4SK453)、D3d類：105(E2SK290)
 D3類：109(C4北SK4161)、E1a類：100(D1SK1027)、E1b類：112(E2SD202)、G類：113(D1SK1027)

V-9図 Ic期壺



I c期 A類：125(A10SK1021)、B1類：116(F4SK584)・117(C4北SK4200)・121(C3SK344)
 B2類：115(C4SK4022)・122(C2SK206)、C2類：114(C4SK4054)、D類：119(C1SK1002)・123(C4北SK4161)
 I d期 B1類：120(C4北SK4199)、D類：118(E5SK529)・124(F4SK525)

V-10図 I c期・I d期大型壺

②甕(V-11図)

A・E・F・G・H・I・L類の7類から構成されるが、E類が281点(97.2%)を占める。A類が2点出土しているが細片であり混入と考えられる。E類の内容はI b期に較べて大きく変化している。少条の沈線など文様を持たないE1類や段部を持つE2類が半減するのに対して、少条の沈線を持つE3類(131・135・137)が3.9%から31%に激増し、壺と同様に沈線間に列点文を施したE4類(127・130)が登場し1割程度占めるようになる。この他、列点文を施すE5類も増加し、僅少なながら多条沈線を有するE6類(128)が初めて登場する。B2類では段部の短いもの㉑と長いもの㉒との比率はほとんど変わらないが、I b期に半数を占めていた段部に刻目を施す例は22.7%にまで減少している。

E類の口唇部形態はa類4点(1.4%)、b類90点(32.4%)、c類186点(65.5%)、d類2点(0.7%)である。I b期と較べてb類が14%程減少し、c類が増加している。面を有する口唇部から丸く納める口唇部形態への変化を見ることができる。刻目の部位は、①類55点(19.9%)、②類216点(78.0%)、③類1点(0.4%)、④類5点(1.8%)で、I b期に較べるとかなり大きな変化が看取できる。①類は3分の1以下に激減し、逆に②類は2倍以上に増加している。口唇部全面施文の増加傾向が顕著である。胴部形態は、I類17点(6.6%)、II類214点(83.6%)、III類25点(9.8%)、顕著な変化ではないが膨らみを持ったタイプの増加傾向として捉えることはできよう。

波状の口縁部を持つL類(E2区SD202)は、当遺跡では初めての出土である。縄文晩期系のものであり高知平野では介良遺跡⁽¹⁷⁾、居徳遺跡⁽⁴⁾から数例出土している。底部の二次穿孔は60点中8点(13.3%)に認められた。I b期に較べて僅かに減少しているが1割以上を占めている。

③鉢(V-12図)

小型2点(3.6%)、中型41点(74.5%)、大型12点(21.8%)で、I b期とほとんど変わらない。小型鉢(141)に変化は見られない。中型は、A類19点(46.3%)、C類18点(43.9%)、E類3点(7.3%)、F類1点(2.4%)である。I b期と同様にA・C類が中心であるが、その内容には変化が見られる。A類では143のようにしっかりした段を持つものも見られるが、全体的にはA2類は激減し、無文のA1類(146・149)や少条沈線のA3類(148・151)で占められるようになる。C類には少条沈線を持つC3類(145)が初めて登場する。E類には変化は見られない。波状口縁のF類(144)は、外面に紡錘形状の文様が描かれている。

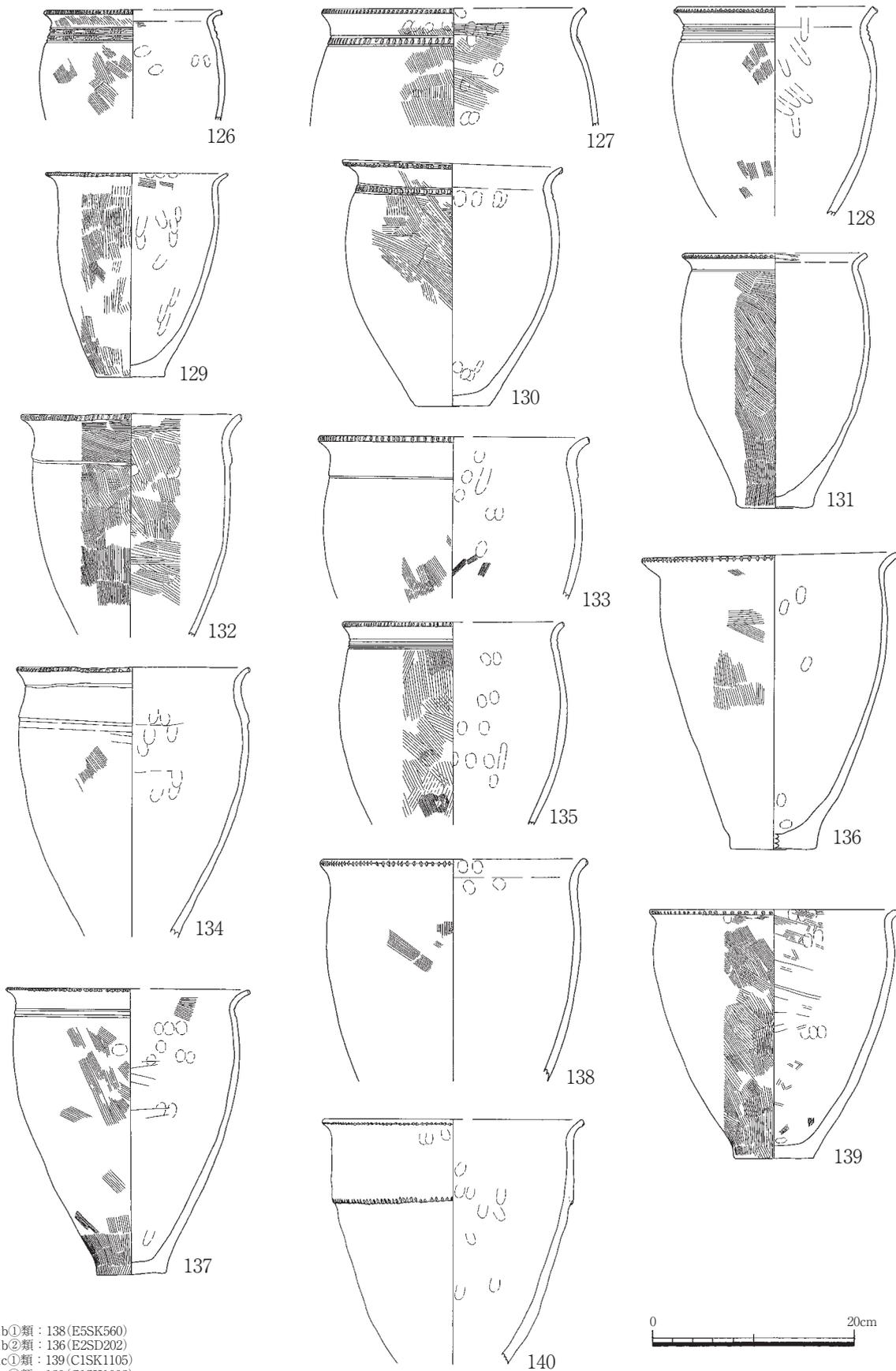
大型鉢は、A類が中心でありI b期とほとんど変化は見られないが新たにA3類(151)が見られる。

④高坏

高坏は良好な資料を欠いている。C4区SK4051・SK4161などからA類と見られる接合部が3点出土している。この内の1点は接合部外面に無刻の突帯文が貼付されている。

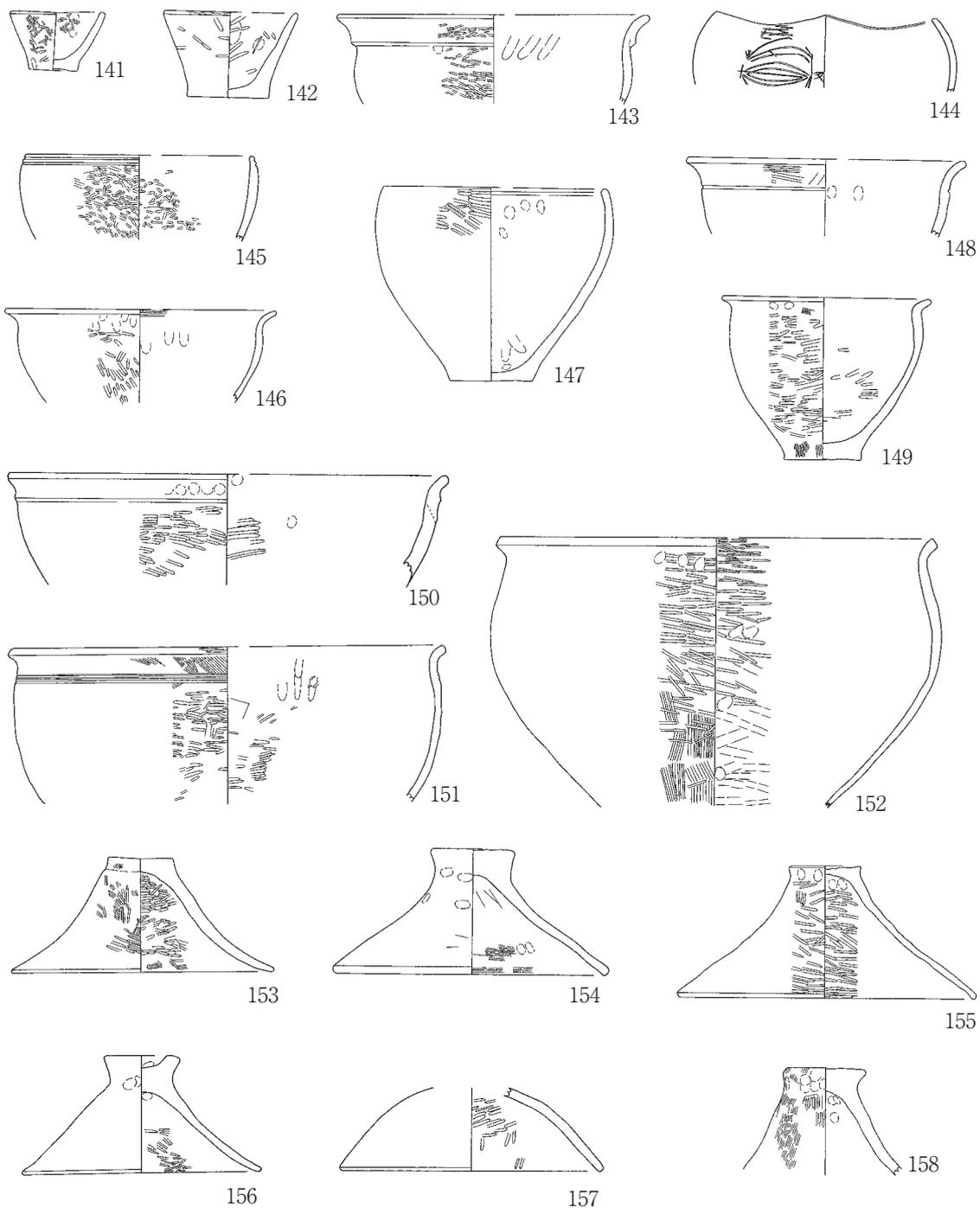
⑤蓋(V-12図)

頂部形態は、A類を欠き、B類8点(34.8%)、C類3点(13%)、D類12点(52.2%)である。I b期のB類



E1b①類：138(E5SK560)
 E1b②類：136(E2SD202)
 E1c①類：139(C1SK1105)
 E1c②類：129(C1SK1002)
 E2a②c②類：133(C1SK1064)、E2a②c②類：132(C1SK1008)・134(C1SK1064)
 E2a①c①類：126(E2SD202)、E2b②b①類：140(A10ST1002)
 E3b①類：131(C4北SK4201)、E3b②類：135(C1SK1002)、E3c②類：137(C1SK1036)
 E4b②類：127(E2SD202)、E4c②類：130(E2SD202)、E6b①類：128(C4SK4043)

V-11圖 Ic期甕



小型鉢：141(C1SK117)
 中型鉢 A1類：146(C4SK4036)・149(C1SK1036)、A2㊟類：143(C3SK344)
 A3類：148(C4SK4106)、C1類：147(C3SK339)、C3類：145(C1SK1036)
 E類：142(E2SD202)、F類：144(E2SD202)
 大型鉢 A1類：152(C4北SK4207)、A2㊟類：150(E5SK517)、A3類：151(C1SK117)
 蓋 Ba類：154(C1SK1006)、Bb類：153(C1SK1036)・158(C1SK1008)
 Ca類：155(C3SK344)、Da類：156(E5SK560)、C類：157(E5SK560)

V-12図 Ic期鉢(141~152)、蓋(153~158)

主体からD類中心へと顕著な変化を示している。笠部形態は緩やかに下降するb類が多いのはIb期と同じである。口径は25cm前後で推移しておりIb期に見られた30cmを超えるものは認められない。口縁部内面はドーナツ状に煤けている例が多い。

(4) Id期

Id期に該当する遺構は以下の通りである。

A10区SK1033、B4区ST410・SX408・409、C1区SK1004・1058、C2区SK208、C4区SK4008・4034・4043、C4北区SK4163・4170・4180・4192・4193・4195・4199、D1区SK1025・1059、E2区SK275、E5区SK515・529・563・582・583、E6区SK636、F4区SK525

Id期は、壺91点(32.9%)、甕146点(52.5%)、鉢34点(12.3%)、高坏1点(0.4%)、蓋5点(1.8%)で構成される。Ic期に較べると、壺が30%を超えており、その分甕の比率が減少している。

①壺(V-3・13図)

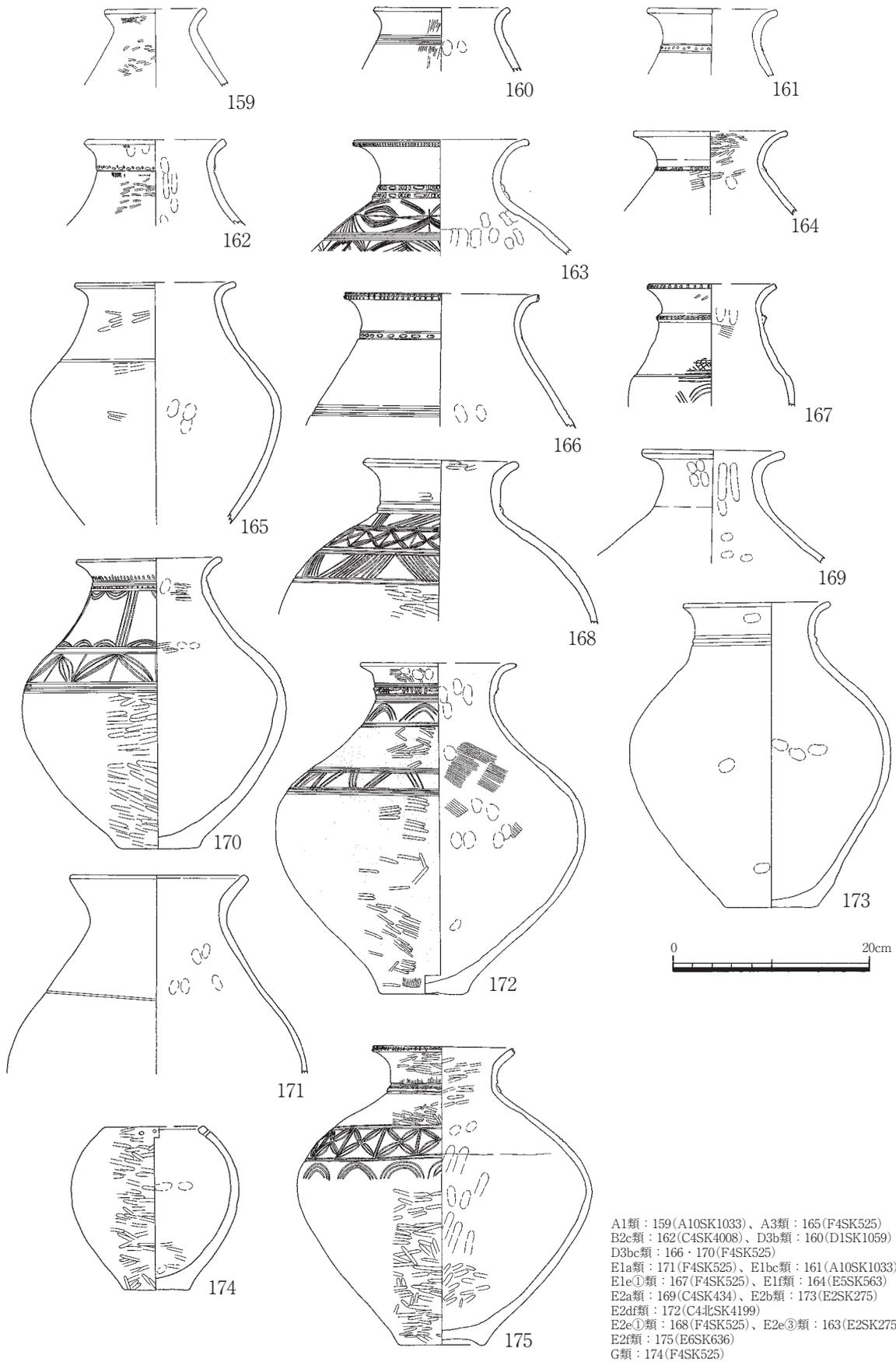
小型7点(7.7%)、中型70点(76.9%)、大型14点(15.4%)である。Ic期と比較して大型壺が半減し、小・中型壺が増加している。特に小型壺の増加が著しい。

小型壺は、胴部形態の確認できる例はすべてA類である。形態的な変化としては、V-3図34に見られるような口頸部の発達したものが認められる。

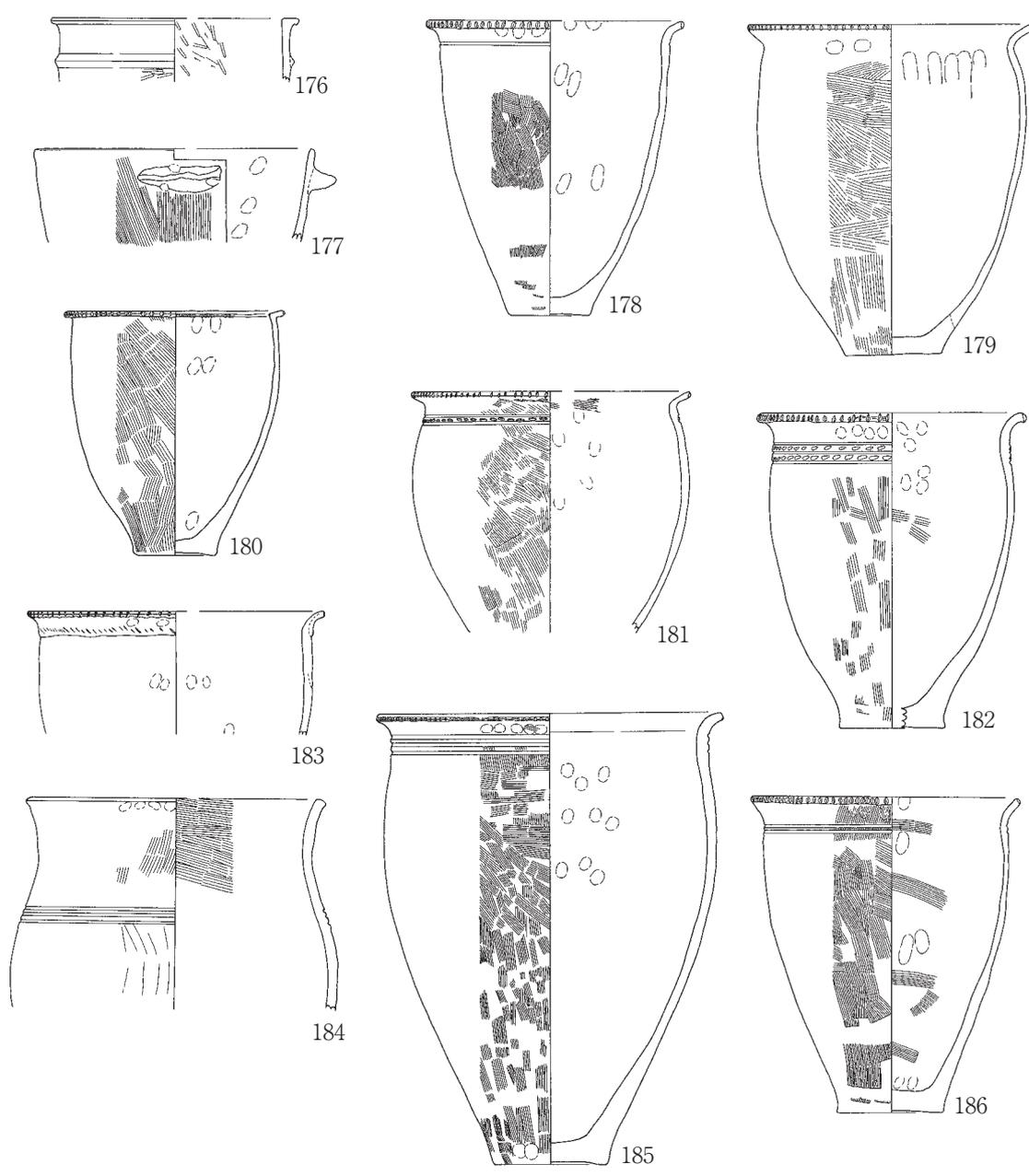
中型壺は、A類18点(25.7%)、B類7点(10%)、D類12点(17.1%)、E類30点(42.9%)、F類1点(1.4%)、G類1点(1.4%)、H類1点(1.4%)である。Ic期に較べると顕著な変化が生じている。これまで1割未満であったE類が4割を占め壺の主体を構成している。逆に段を持つB類は1割までに激減し、A・D・G類ともに減少している。新たにF類が見られるのも特徴である。A類ではA3類が、B類ではB1類が多い。この比率は従来と変わらない。E類の内容は、口縁部の発達したE1類17点、頸部が直立ないしは直立気味に立ち上がるE2類13点である。前者(161・164・167・171)は、口頸部界に刻目突帯やヘラ描沈線、列点文など比較的シンプルな区画文様が施されるのに対して、後者(163・168・172・173・175)は各種の文様で器面を繁縟なまでに飾りたてるものが多く見られる。163・172は赤彩も施されている。文様には従来からの複線山形文や重弧文に加えて木葉文が目立つ。木葉文は、Ic期の「+木葉文」に変わって「+2半截木葉文」(170)や「×1木葉文」(168・175)が見られる。163の胴部の木葉文は「+4半截木葉文」とでもすべき4条の弧文が描かれている。F類(C1区SK1114、C4区SK4034)は、長めの口縁部が直線的に外方に立ち上がるタイプであるが、胴部が欠落している。頸部には区画文様として列点文や突帯文が施されている。無形壺のG類は1例(174)を認めるのみである。

②甕(V-14図)

E・H・I・K・M類の5類から構成されるが、E類が140点(95.9%)を占める。E類の占有率はIc期とほとんど変わらないが、その内容には大きな違いが見られる。表V-4に示したようにE2類がほとんど消滅し、少条沈線のE3類や列点文を持つE4類が大幅に増加して甕の中心となる。



V-13図 I d期中型壺



E1c②類：179(E2SK275)、E2③c②類：183(B4SX409)
 E3c①類：185(E6SK636)、E3c②類：178・186(C4SK4034)
 E4c②類：181(A10SK1003)・182(E5SK582)、F類：184(B4SX409)、I類：176(C4北SK4180)・180(F4SK525)
 M類：177(C4北SK4180)



V-14図 I d期甕

口唇部形態はb類33点(23.6%)、c類105点(75%)、刻目の部位は①類23点(16.4%)、②類114点(81.4%)となり、Ic期に較べて丸く納める口唇形態と全面刻目がさらに促進される。また口唇無刻の④類が3点(2.1%)見られる。胴部形態は、I類7点(5.3%)、II類98点(74.8%)、III類26点(19.8%)、顕著な変化ではないが膨らみを持ったタイプの増加傾向として捉えることはできよう。

当該期には逆L字形口縁を持ったI類が3点(176・180)出土している。両者ともに口縁部は貼り付けによるものであるが、176は内面が直角に屈曲し上胴部に無刻の突帯を貼付している。内外面にはヘラ磨きが見られるなど当地の甕とは様相を異にしている。胎土も異なり搬入品と考えられる。180は後の瀬戸内型甕と呼称されているものに類似する。出土点数は少ないがE2類(183)とF類(184)には注目しなければならない。183の段部は、粘土帯を貼付し指頭で押圧している。これまでの粘土帯接合部に生じる段部成形手法とは異なるもので、中期以降の壺や甕に盛行する南四国の独特の手法に通じるものである。F類(184)はIIb期以降顕在化するK類(南四国型甕)として捉え得ることも可能なタイプである。これまでは前期末に初現が求められていたものであるが、僅少なから当該期にも存在することが明らかとなった。底部穿孔例については、3例を確認し得たのみである。5%以下でありIc期までに較べて確実に減少している。

③鉢(V-15図)

小型3点(8.8%)、中型25点(73.5%)、大型6点(17.6%)で、Ic期と大きな変化はないが、壺と同様に大型鉢の減少傾向を見ることができる。小型鉢(187)には「×木葉文」が施文されている。

中型鉢は、A類12点(57.1%)、C類4点(19%)、D類2点(10%)、E類3点(14.3%)である。波状口縁のF類が欠如している以外にはIc期と大きな違いはない。大型鉢はA類のみで構成されるが、Ic期まで多く見られたA2類は1点(197)のみである。

④高坏(V-15図)

A類の接合部を1点(203)を確認したのみである。接合部に刻目突帯が1条貼付されている。

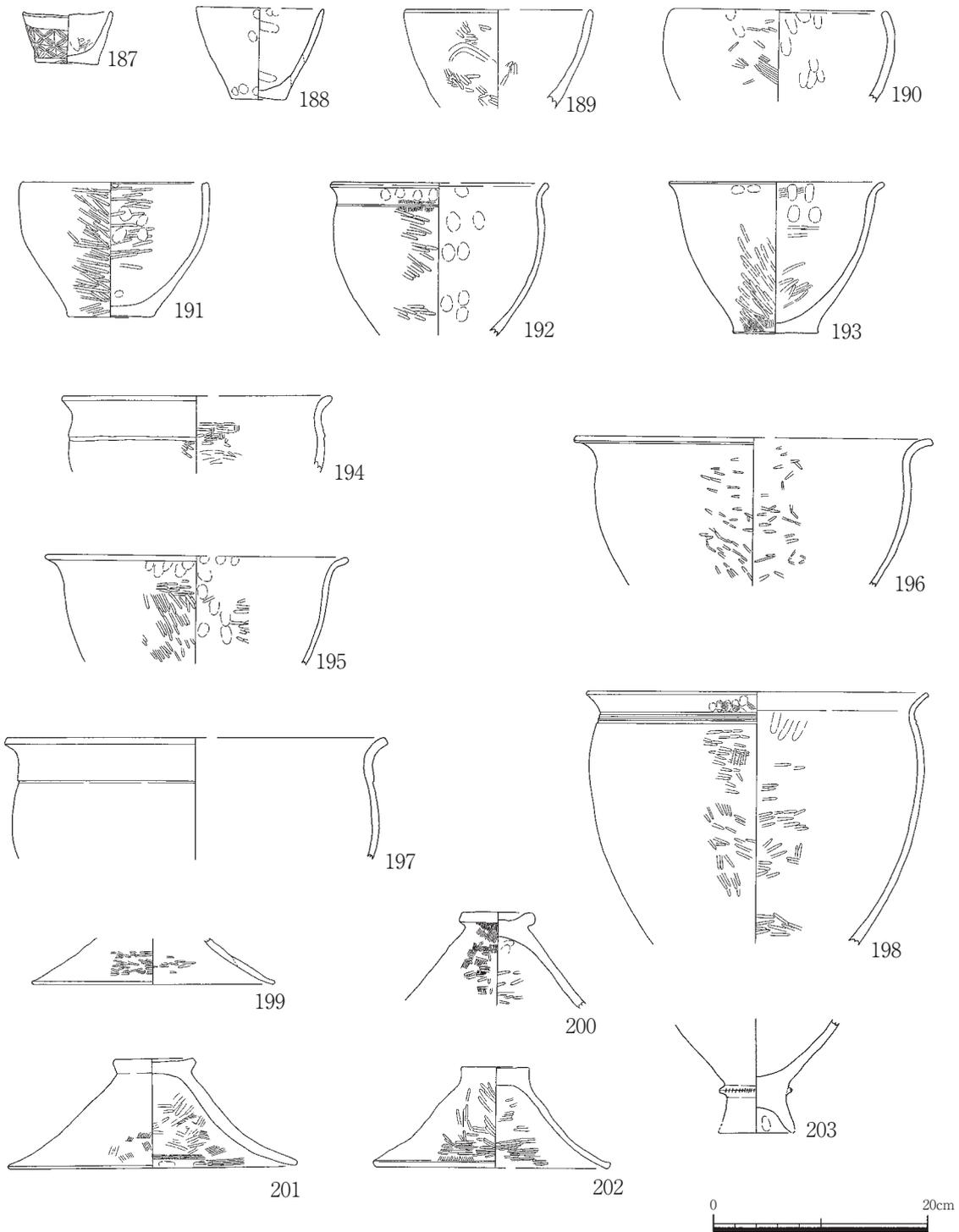
⑤蓋(V-15図)

頂部はC類2点、D類3点、笠部はa類1点、b類3点である。B類の中には屈曲がやや強くなりd類に近いタイプ(201)が認められる。

(5) II a期(V-16図)

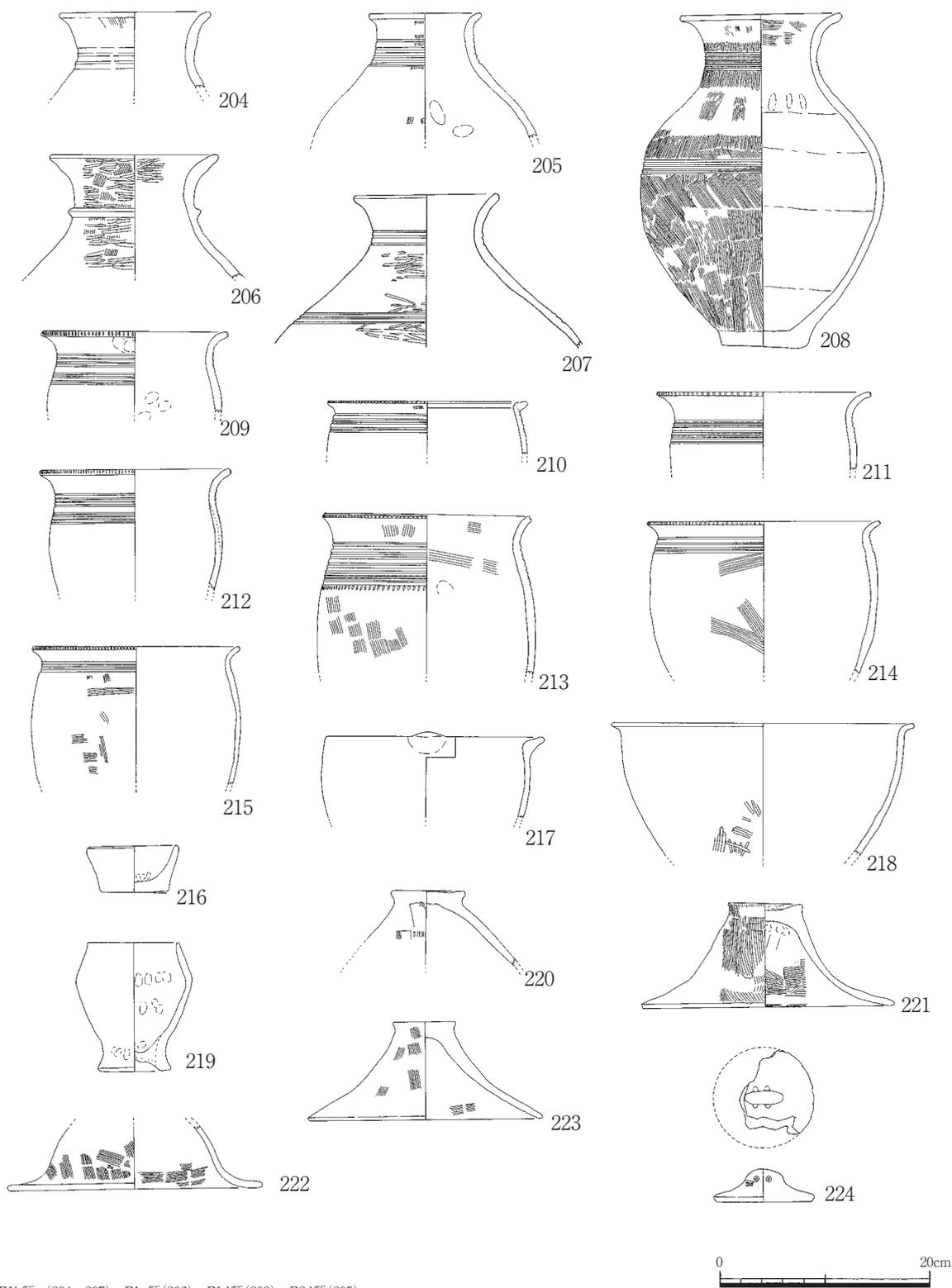
II a期に入ると遺構数が激減しI期までに見られたような良好な一括資料に恵まれていないが、該当資料としては、前回調査のLoc.44C区SX1、Loc.10区SK13・38・39、同SD5・7、今次調査のD1区SK1025などの出土土器を挙げるができる。

壺55点(44.4%)、甕49点(40%)、鉢6点(4.8%)、蓋14点(11.3%)で構成される。Id期に較べて壺と蓋の割合が大幅に増加しており、壺が甕を陵駕している。高坏は認められない。



小型鉢：187(C1SK1058)、中型鉢A1類：193(E2SK275)・195(C4SK4034)
 A2◎類：194(C1SK1114)、A3類：192(C4北SK4192)
 C1類：189(C1SK114)・191(C4北SK4180)
 D1類：190(C4SK4034)、E類：188(E2SK275)
 大型鉢A1類：196(F4SK525)、A2a類：197(C1SK1004)、A3類：198(C4SK4034)
 蓋Cb類：201・202(E2SK275)、D類：200(C4SK4008)、b類：199(C4北SK4200)
 高坏A類：203(F4SK525)

V-15図 I d期鉢(187~198)、蓋(199~202)、高坏(203)



壺E1b類：(204・207)、E1e類(206)、E1d類(208)、E2d類(205)
 甕E6類：(214・215)、F6類：(209・211～213)、I類(210)
 小型鉢(216)、中型鉢A1類(218)、C類(217)、G類(219)
 蓋Bb類(223)、C類(220)、Cd類(221)、d類(222)、壺蓋(224)
 Loc.44C区SX1(204・205・208～212・214・216・217・219～221)
 Loc.10SK38(215・224)、同SD5(213)、同SD7(206・218・222・213)、DISK1025(207)

V-16図 II a期 壺(204～208)、甕(209～215)、鉢(216～219)、蓋(220～224)

①壺

壺は小型壺と中型壺が見られ大型壺は見られない。小型壺は良好な資料を欠いているが、1割未満である。中型壺はE1類(204・206～208)とE2類(205)が見られ遠賀川式土器からはかなり乖離したものになっている。胴部形態は球形化と長胴化の二極分化が進行する、器面調整もヘラ磨きを施さずにハケ調整で仕上げるものも見られる。多くの場合頸部や胴部に多条沈線や断面三角突帯、列点文が施されている。

②甕

甕はE類(214・215)、F類(209・211～213)、I類(210)で構成される。E類が8割前後で主流を占めるが、I d期の占有率よりは後退している。F・I類が増加し、それぞれ1割前後見られる。口唇部形態は丸く納めたc類が圧倒的に多いが、沈線を施すd類(213)も認められる。刻目の部位は③類にほとんど例外なく統一され、無刻目の例が増加する傾向にある。上胴部には多条沈線を施すものが多く、中には沈線帯を複数形成する例(209・212)もある。また沈線帯の下に列点文を施すもの(213)がこの時期から登場する。焼成後の底部穿孔例は、60数点の底部の中で1点のみ認められた。例外的な存在となっている。

③鉢

小型鉢と中型鉢で構成される。小型鉢は図示した1例のみである(216)。中型は従来からのA類(218)とC類(217)に加えて、上胴部で内側に屈曲するG類(219)が見られる。217には把手が付いている。

④蓋

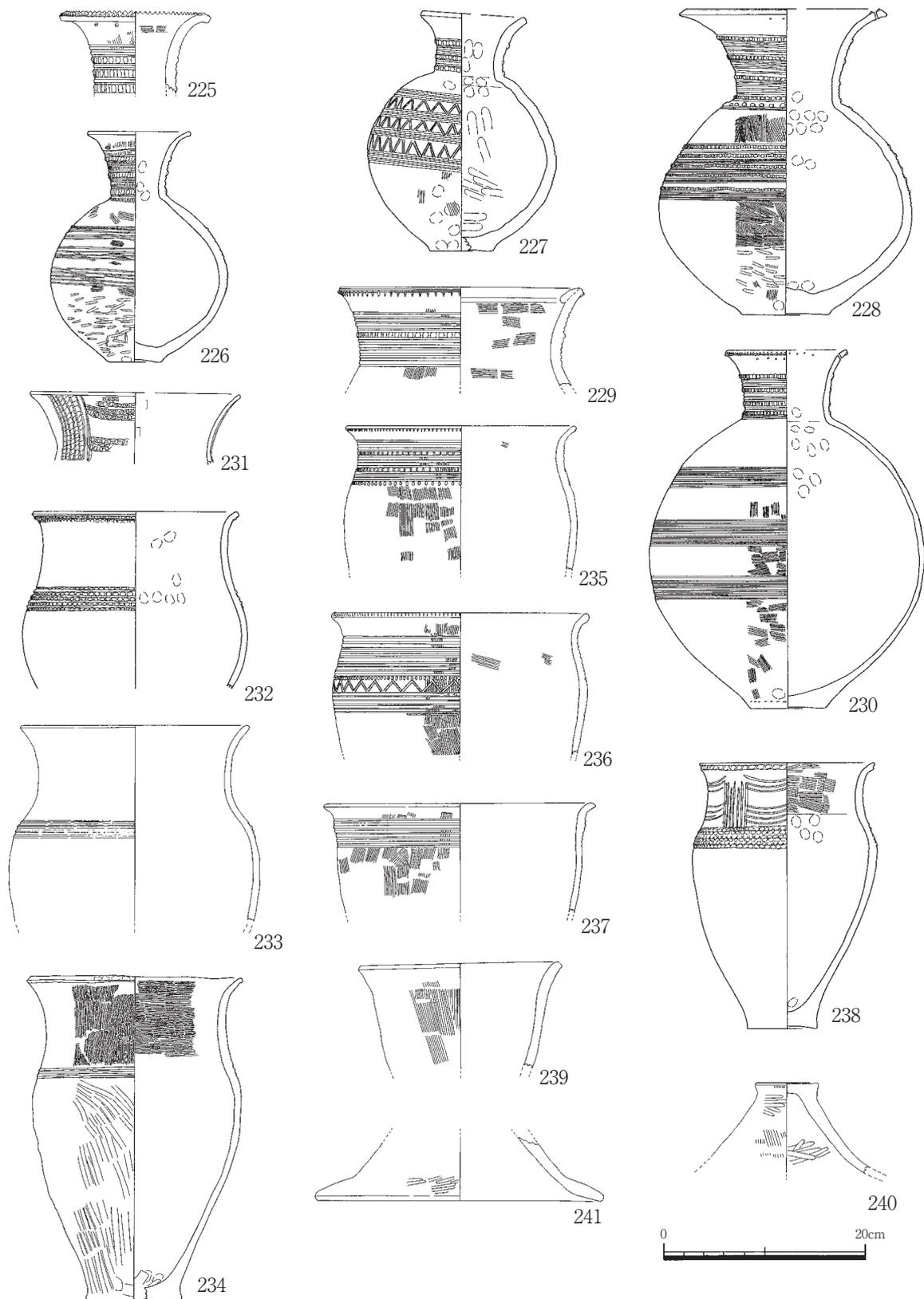
蓋は1割以上を占めておりこれまでで最も多い組成比率を有している。頂部形態ではB・C類が多く、摘みが逆ハ字状に立ち上がった典型的なD類は見られない。また壺の蓋が初めて見られる(224)。

(6) II b期(V-17図)

II a期よりも良好な資料は少ない。前回調査のLoc.10ST4、同SK26、今次調査のF4区ST420、I4区ST420、D1区SK1021を該当させることができる。壺21点(32.8%)、甕38点(59.4%)、鉢1点(1.6%)、蓋4点(6.3%)で構成される。

①壺

壺は形態的に劇的な変化が見られる。頸部からラッパ状に口縁部が外反するI類が中心となる。頸部形態は、細長く伸びるもの(225・226)や大きなもの(228)などバリエーションが見られる。前者はI期を通して少量存在したH類の系譜に繋がるものと考えられる。胴部も球形や長胴、最大径が下胴部にあるものなどがある。外面は多条沈線や沈線帯とともに扁平な刻目突帯が多く用いられ、



壺F類(229)、I類(225~228・230)
 甕E6類(237)、F6類(235・236)、K類(231~234・238)
 鉢A1類(239)、蓋Cd類(240)、d類(241)
 Loc.10ST4(235~237・239~241)、同SK26(225・229・233)
 E6SX601(226~228・230・232・238)、I4ST420(231・234)

V-17図 II b期壺(225~230)、甕(231~238)、鉢(239)、蓋(240・241)

口縁部内面にも突帯文を施すものが見られる。また、中期に盛行する凹状の口唇部形態(228)や口縁部外面に粘土帯を貼付する例(D1区SK1021)も散見される。

②甕

E類(237)、F類(235・236)、I類、それに当該期から顕在化しはじめる南四国型甕⁽¹⁸⁾と呼称されるK類(231～234・238)によって構成される。構成比率はおおよそE:F:I:K=2:4:1:3である。伝統的に主体を占めてきたE類が少数に転じ、F・K類が主流となる。E・F類は、引き続き多条沈線や列点文、山形文によって加飾されるものが多い。しかしながらK類は、E・F・I類のような極端に多い多条沈線は見られず、口縁部や上胴部に1～5条程度の細い隆帯が貼付される例が多い(232・233・238)。この隆帯は、縄文晩期の深鉢に貼付された刻目突帯が退化したものと考えられる。それが複数条貼付されるのは、当該期のヘラ描沈線の多条化という一般的な動向の中で促進された現象として捉えることができよう。K類の系譜を端的に現していると共に土器作りに現れた強固な伝統的規制を看取できる。またすでに指摘してきたように隆帯の施されたタイプはハケ調整がほとんど認められず多くの場合ナデ仕上げである⁽¹⁹⁾。

成形手法では、壺等も含めて明確な外傾接合痕跡を確認することができない。I期に見られた分割成形による系統樹的な土器製作法は崩壊している可能性が強い。

③鉢・蓋

鉢はA類(239)を1例認めるのみである。蓋の頂部形態はB類とC類(240)があり、笠部は屈曲の強いd類が多い。

3. 高知平野の弥生前期土器

田村遺跡出土の弥生前期土器についてI a期からII b期の6期に編年したが、これをもとに周辺の遺跡の動向も視野に入れながら全体的な変遷を述べてまとめたい。

I a期の特徴は、特に甕において遠賀川式土器(E類)と弥生土器化した縄文晩期系譜の刻目突帯文土器(A～D類)とが共存することである。遠賀川式土器に含めたものの中にも型式として確立を見ない段階のものや松菊里型土器など朝鮮半島の無文土器に系譜が求められるタイプのものが含まれるなど各器種ともにバリエーションが豊富であること、文様の施されるものが少なく前期を通して最もシンプルであることも特徴として挙げることができる。焼成後底部穿孔の甕が目立つことは日常的なレベルでの朝鮮半島との交流頻度の高さを物語っている。

このような様相は、すでに何度か述べてきたようにI a期が南四国における遠賀川式土器の生成過程を示すものであって、その伝播の結果を示すものではない。このことは、周辺部の遺跡の動向と比較することによってより明確となる。たとえば冒頭に触れた居徳遺跡のIC区では、縄文晩期の突帯文土器と遠賀川式土器の共存が認められるが、遠賀川式土器はI b期が極少量見られる他はI c期のもので占められている。I a期のステージを全く欠いている。居徳遺跡と同様な例は西南部

の入田遺跡でも認められる。このような遠賀川式土器と晩期土器の二重構造こそ伝播の結果生じた現象と見るべきであろう。I a期は田村遺跡にのみ認められるステージであり、当該期、周辺部では晩期土器が単純に展開していたものと見なければならぬ。註(1)において筆者は、高知平野ではこのような二重構造は見られないとの見解を示したが、居徳遺跡の所在する高知平野西部は二重構造地帯を形成していることになる。

I b期について筆者は、縄文的な要素を払拭し「弥生土器として一つの淘汰がなされた時期」⁽²⁰⁾であるとしたが、今次資料はそれほど単純なものではないことを示している。確かに甕においてはこの時期にI a期で4割程見られた突帯文系土器が消滅し遠賀川式土器として完成された展開を示す。しかしながら甕D類は残存し、すでに触れたように甕(V-5図66)に見られる削り出し突帯も晩期に認められる手法である。壺や鉢においても晩期系の土器が見られ、従来から指摘のあるように重弧文や山形文は晩期に系譜を求められるものである。以後の展開からも判るように「縄文的な要素を払拭」するのではなく逆にそれらを取り込みながら様式的な発展を遂げるものと見なければならぬ。そしてI a期に存在した松菊里型土器が見られなくなり、甕の底部穿孔が減少に向かうなど無文土器からの影響は稀薄化を辿る。I b期の遺跡は田村遺跡以外では春野町の仁ノ遺跡があるが、この時期から居徳遺跡など周辺部に遠賀川式土器の伝播が開始され、両者の接触によって遠賀川式土器の新たな展開が見られる段階として捉えることができよう。

I c期は壺・甕ともに段部の減少、甕では少条沈線が3割近くに増加すること、そして沈線間に列点文を有するE4類が顕在化、壺ではD類や胴部文様を持つ例が増加するなどの画期が見られ、古相とされる「+木葉文」が初めて登場する。甕の口唇部形態では面→丸に、刻目は全面刻目が8割以上を占めるなど顕著な変化がこの時期に見られる。また周辺遺跡からの影響と考えられる甕L類が認められる。当該期の遺跡は、居徳遺跡や春野町の西分増井遺跡⁽²¹⁾を挙げることができる。後者からは松菊里型住居が検出されており甕E5類が出土している。

I d期は、壺ではE2類が中心になり特にE2類の展開が特徴的である。胴部文様がさらに多く見られるようになり、鉢に施文されるものも含めて木葉文では「+木葉文」に変わって「×木葉文」・「+半截木葉文」が登場する。深澤芳樹氏⁽²²⁾は、木葉文の詳細な分析から弥生土器の木葉文は中部瀬戸内で成立したとされる見解を示している。しかし居徳遺跡において20点近い各種木葉文が出土していることを考えると、中部瀬戸内からの伝播というよりも、高知平野においても中部瀬戸内と共通の土壌があったとすることができるのではないだろうか。

甕では段がほとんど消滅、少条沈線や列点文を持ったE3・4類が7割近くを占めるようになる。また甕の口唇部形態と刻目の部位の変化については、I a期→I d期へ「面」から「丸」、「下半或いは下端刻」から「全面刻」へと変化している。このことについては前回は触れたが、すでに見て来たように今次資料からも同様な結果を得ることができた⁽¹⁾⁽²⁰⁾。この変化の背景についてもすでに述べて来た。福岡平野などに見られる「丸」から「面」、「全面刻」から「下端刻」へと変遷⁽²³⁾とは全く逆の現象である。南四国特有の貼付口縁と甕K類は、これまで前期末に登場することが知られていたが、僅少な例とはいえその萌芽形態がI d期にも認められることが明らかとなった。後者については、晩期深鉢に系譜のあることが指摘されていた⁽¹⁹⁾が、前者のそれについては不明であった。今次調査

において、その系譜を遠賀川式土器の有段部に求めることが可能となった。

高橋護氏は、弥生文化の成立について「発達した青銅器文化が石器時代の文化に与えたカルチャーショックであったと考えなければならない。」⁽²⁴⁾としている。遠賀川式土器は、朝鮮半島青銅器文化の所産である無文土器の強い影響を受けて成立したものであり、生成期はI a期に見たようにもっともシンプルな土器が展開している。時期が下るに従って各種の文様が施されるようになるが、これは遠賀川式土器そのものの変化発展とともに周辺部に展開している縄文土器との接触・交流・共生の結果を示すものと考えられる。言わば遠賀川式土器は縄文晩期土器との相互関係の促進の中で発展したものである。このことは、弥生時代開始期以降にも石棒など縄文時代起源のものが使用され続けることとも通じるものである⁽²⁵⁾。各地域固有の縄文土器文化が遠賀川式土器の展開を規定するといっても過言ではなからう。

II期は、集落規模が縮小・分散し、I期のような遺構の集中分布は見られない。そして周辺地域に多くの遺跡が分布するようになり、言わば「平均化」が促進される時期である⁽²⁶⁾。I期との違いは、多条沈線の盛行や大型壺の消滅、壺・甕に見られる顕著な形態的な変化などに求めることができるが、特にII b期の甕における南四国型甕の登場は当該期の様相を象徴的に示している。南四国型甕は中期甕の主流となるタイプであり、その成立はすでに述べたことがあるように縄文文化から弥生文化への移行期に地域の土器文化が擁していた二重構造の解消を意味するものである⁽¹⁹⁾。同時に前期初頭以来促進されて来た縄文文化と遠賀川式土器によって代表される弥生文化の接触交流の到達点として捉えることができよう。ただ当該期の南四国型甕は同じ高知平野の中においても構成比率に顕著な違いが認められる。田村遺跡では26.3%とその構成比率は低いが、高知市柳田遺跡⁽²⁷⁾は100%南四国型甕で占められている。このことは遺跡の母体となった文化の違いや両者の接触のあり方によって明確な差異のあることを示している。

註

- 1) 出原恵三「四国における遠賀川式土器の成立」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集2000年
- 2) 出原恵三「南四国の石器」『古代吉備』第21集 古代吉備研究会1999年
- 3) 出原恵三「弥生文化成立期の集落とその遺構」『47回埋蔵文化財研究集会弥生文化の成立』発表要旨集埋蔵文化財研究会2000年
- 4) 佐竹寛・下村裕・曾我貴行・藤方正治『居徳遺跡I』(財)高知県埋蔵文化財センター2001年
- 5) 久貝健・川崎雅史 他『堅田遺跡』御坊市教育委員会・御坊市文化調査会2002年
- 6) 岡本健児「四国」『弥生土器1』ニューサイエンス社1983年
- 7) 岡本健児「四国の弥生土器の編年と年代」『高地性集落と倭国大乱』雄山閣1984年
- 8) 出原恵三「土佐地域」『弥生土器の様式と編年』四国編 木耳社2000年
- 9) 高橋護「遠賀川式土器の伝播」『弥生文化の研究9』雄山閣1986年
- 10) 高橋護「遠賀川式土器」『弥生文化の研究4』雄山閣1991年
- 11) 家根祥多「縄文土器」『長原遺跡発掘調査報告書II』(財)大阪市文化財協会1982年
- 12) 佐竹寛・下村裕・曾我貴行・藤方正治『居徳遺跡IV』(財)高知県埋蔵文化財センター2003年
- 13) 田崎博之「夜臼式土器から板付式土器へ」『牟田裕二君追悼論集』1994年
- 14) Loc.44D区SK20 から出土している。高知県教育委員会『高知空港拡張整備に伴う埋蔵文化財報告書 田村遺跡群』第3分冊 高知県教育委員会1986年
- 15) 久家隆芳「南四国における弥生文化の成立」『弥生文化成立期の集落とその遺構』『47回埋蔵文化財研究集会

- 弥生文化の成立』発表要旨集埋蔵文化財研究会2000年
- 16) 木葉文の分類呼称は工楽善通氏によった。「遠賀川式土器における木葉文の展開」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所1983年
 - 17) 松田重治『介良遺跡ⅡⅠ』高知市教育委員会1999年
 - 18) 出原恵三「土器と青銅器から見た土佐と宇和」『宇和の古代を解剖する－九州・瀬戸内・南海文化の十字路口に立って』愛媛大学第1回公開シンポジウム資料 愛媛大学考古学研究室2001年
 - 19) 出原恵三「＜南四国型＞甕の成立と背景」『続文化財学論集』文化財学論集刊行会2003年
 - 20) 出原恵三「弥生時代前期小結」高知県教育委員会『高知空港拡張整備に伴う埋蔵文化財報告書 田村遺跡群』第3分冊 高知県教育委員会1986年
 - 21) 出原恵三『西分増井遺跡群発掘調査報告書』高知県春野町教育委員会1990年
 - 22) 深澤芳樹「木葉文と流水文」『考古学研究』第36巻3号1989年
 - 23) 藤尾慎一郎『弥生変革期の考古学』同成社2003年
 - 24) 高橋護「弥生土器の成立」『岡山県史 原始・古代編』岡山県1992年
 - 25) 秋山浩三「弥生開始期以降における石棒類の意味」『環瀬戸内の考古学』古代吉備研究会2001年
 - 26) 出原恵三「弥生時代前期末・中期初集落」『古代文化』第4巻4号2004年
 - 27) 藤方正治・森田尚宏・松村信博・吉成承三『柳田遺跡』(財)高知県埋蔵文化財センター1994年

VI 弥生時代中後期の土器群

1. 概要

高知県の中期の様相は岡本健児氏の研究をはじめとして田村遺跡群第一次調査や出原恵三氏の一連の研究によって一定の到達点に達し、中期中葉は櫛描文様に代表され中期末は凹線文にほぼ席卷される時期として考えられてきた。

その後、調査事例の進展によって中期を通じて在地色の強い甕(土佐型甕もしくは南四国型甕と呼称)が存在することが明らかとなり、中期は外来の文化的影響を受けながら在地の伝統が色濃く残る時期としてとらえることが判明した。また、近年の調査の進展により高知県の中央部と西部地域では土器の様相も地域によって異なっていることが明らかとなってきた。

この様な状況の中、高知県中央部の大規模集落である田村遺跡群の第二次調査が平成8年度から平成13年度にかけ行われ、410軒に及ぶ住居跡を検出することができた。この内275軒が中期末～後期初頭の可能性が考えられるもので遺物も多量に出土しており、詳細な時期検討を行うことが可能になった。このため、田村遺跡群出土の中期中葉～後期初頭の遺物の再検討を行い、様相を明らかにしたい。

執筆分担は1～3は坂本憲昭、4が久家隆芳である。

2. 各時期の状況

(1) III期後半

瀬戸内の影響が少なく、櫛描文が盛行。甕は在地系の甕(土佐型甕)がほとんどである。凹線文の壺が出現する時期。

①壺

凹線文壺が出現、凹線文は端部のみに施文。

凹線文のものを除き殆どのものには櫛描文様がみられ、口縁部に粘土帯を貼り付ける。器形としては長い頸部から大きく開く口縁部を持つもの、卵形の胴部を持ち口縁端部は粘土帯貼り付けによって厚く大きな面をなすもの、直立した筒状の頸部からなめらかに開く口縁部を持つものがみられる。

②甕

在地系の甕、いわゆる土佐型甕のみ出土。器形は緩やかにのびる頸部状部分から大きく開く口縁部を持つ。口縁部は比較的薄い粘土帯が貼り付けられたものと、強い横ナデによって微隆起伏になったものがみられる。

文様としては頸部に区画文として縦方向の弱い沈線文が頸部に窓状に巡るものがみられる。また頸部間には微隆起帯が巡り、豆粒状浮文が施されているものが多い。IV期の甕と比べて胎土は砂粒が多く器壁の薄いものが多い。

③高坏

出土例きわめて少ない。緩やかなボール状の坏部を持つものがある。

④鉢

Ⅳ期にも続く口縁端部に粘土帯貼り付け緩やかに開く体部を持つものがみられる。

(2)Ⅳ期

凹線文盛行期。甕の比率が高まり、高坏が一般化する。在地系の甕は地域差が拡大し、東部地域と西部地域のものに差異が認められる。器種、器形のバリエーション増加。様相的に3時期に分けることが可能。

(3)Ⅳ-1期

凹線文甕出現。凹線文器種増加。Ⅲ期の特徴を持つものがわずかに残る。

①壺

外面に末端扇形文など櫛描文が残ったものがみられる。凹線文系の壺や器種の増加、B種凹線文が出現する。押捺突帯が巡るものが残った例がある。

②甕

凹線文甕出現。在地系甕は縦方向の沈線文がなくなる。頸胴間微隆起突帯を持つものが少なくなり、沈線に変化。器壁は厚くなる。

③高坏

出土例は少なく、高坏は一般化していない。Ⅲ期でみられたボール状の坏部を持つものも残るが、直立する口縁部を持つものが出現する。出土例はないが凹線文高坏も存在する可能性が高い。

(4)Ⅳ-2期

もっとも凹線文が盛行する時期。定形的な凹線文土器のセットがみられる。一見すると端正な形をしたものが多い。在地系土器は口縁部に粘土帯貼り付けがほぼすべての器種にみられる。

①壺

器形が大型化し長胴の壺が多くみられる。長胴のものは胴部最大径が上胴部に位置し下胴部が長くなるものが多い。頸部は直立し筒状になりなめらかに開く口縁部を持つものが多い。瀬戸内地域の凹線文土器に共通する器種が出土する。

調整では長胴のものには下胴部に縦方のヘラミガキが施されているものが多い。

②甕

凹線文甕は口縁部の屈曲が強く上下拡張がしっかりしたものが多い。下胴部内面にヘラケズリ痕残るものが多い。また外面下胴部にも縦方向ヘラナデまたはミガキが残るものが多い。

在地系の甕はバリエーションが多いが、基本的な器形は頸胴間にくびれがみられる形態で肩部が存在する形態を持つ。口縁端部の粘土帯は貼り付けるものとそうでないものがある。

③高坏

出土量増加する。凹線文系のものに集約される。脚部外面には多条沈線や鋸歯文が施されたものがみられる。脚部端部は拡張され、内面には横方向のヘラケズリが残る。透かしはなく径5mmほどの円孔が裾部に施される。

④鉢

凹線文のものは脚付きの直口のものが出土するが僅少である。また野市町本村遺跡からは金魚鉢形で口縁端部に凹線文を施した鉢が出土しているが、田村遺跡群での出土例はない。

在地系のものはⅢ期のものとあまり大きな変化は無く、口縁部に粘土帯を貼り付け斜め方向に開く口縁部を持つ。

(5)Ⅳ-3期

出原恵三氏の編年ではⅣ期は2段階に分類している。今回の調査においてⅤ期とⅣ-2期で判然としないものが多く帰属時期決定が困難で、報告書本文中では中期末～後期初頭としⅣ-2～Ⅴ-1にしている時期である。しかし、従来の編年観ではⅣ期に近い状況のものが一定量みられたためⅣ-3期を設定した。

Ⅴ期では口縁部に粘土帯を貼り付けた在地系の甕がほとんど姿を消すが、在地系の甕が多く出土しており、壺の出土比率もⅤ期に比べて多い状況である。

土器の器形はⅣ-2期に比べて大きく変化しないが、定型化が崩れ始め胴部最大径は中胴部に位置し丸みを帯びた卵形に近い形態のものがみられ、器壁も厚手のものが多くなる。

①壺

凹線文、在地系のものが出土する。Ⅳ-2期と大きな変化はみられないが、不定形の器形の物が増加する。長胴は変化しないが最大径が中胴部に位置する物が増加する。

②甕

凹線文、在地系の甕が出土する。凹線文甕は多く出土する。Ⅳ-2期に比べると口縁部の屈曲が弱く内面に明瞭な稜があるものが少なくなる。口縁端部の拡張も上端つまみだしや断面T字状の拡張が少なくなり、端部全体を肥厚させたものがみられるようになる。

在地系の甕は口縁部に粘土帯を貼り付けたものもまだ多く出土する。器形では頸部状部分が短くなるものが増加し、口縁部で短く屈曲するものが出現する。また、やや体部は小型化し丸みを帯びた胴部を持つものが増加する。

くの字状の素口縁の甕の出土も確認できる。

③高坏

口縁上端部を拡張し、口縁部と体部の境に稜をもつ直線的な体部のものは、この時期に属すると考えられる。

(6)Ⅴ期

大きく前半と後半に分けることができる。前半は凹線文の影響がわずかに残るが、くの字状甕が

主体をしめる時期で、後半はタタキ甕が顕在化し尖底化、丸底化する時期と考えられる。

今回は中期Ⅳ期との時期区分のためⅤ-1期のみを提示したい。

(7) Ⅴ-1期

従来、凹線文の影響が強く残る時期とされ、凹線文系の土器では凹線文甕の内面ヘラ削りの位置や器形の定型化が崩れることなどが指標になっていた。また、在地系甕はその出土比率を急激に減少させる時期とされてきた。

今回の田村遺跡群二次調査では当該時期の資料が多量に出土しており、従来のⅣ-2期と判然としないものが多く出土した。しかし、不定形化しつつも凹線文系の土器がセット関係を持ち出土し、在地系甕が一定量出土することを確認しⅣ-3期を設定した。このため、Ⅴ-1期については上記の指標は変えないもののより厳密に指標を適用しJ1SK101をⅤ-1期として類例として挙げたい。

①壺

凹線文系壺と在地系の張り付け口縁の壺が存在する。また、長頸壺に続く壺が出現する。壺の器形は大形のもの減少し、体部は長胴から球形化し始める。

②甕

凹線文甕については口縁部拡張が断面三角形に肥厚したものが多くなり、くの字の素口縁甕が一定量出土する。口縁部が狭くなる傾向がみられ、肩部の張りが弱くなる傾向がみられる。在地系甕は出土量が急激に減少する。特に口縁端部粘土帯貼り付けのものは少なくなり、貼り付け部をナデ段部が目立たないものが多くなる。頸部は短くなり、くの字甕と折衷のような短く屈曲の甘いものが出土する。

③高坏

J1ST101では出土していない。前段階であるⅣ期後半では一定量出土している。また、後続する時期では大きく外反する素口縁の坏部を持つ高坏が出土しており、この段階においても高坏は存在したものと考えられるが、凹線文系高坏の減少に伴って減少したものと考えられる。また、後続するⅤ-2期で一般化する口縁部の外反化はこの時期から顕在化したものと考えられる。

④鉢

斜め上方に直線的に短く開く素口縁の鉢が出土する。

⑤器台

大形の器台がJ1ST101では1点出土しているが一般的な器種ではない。大形器台は凹線文系土器に伴うものと考えられる。前段階では外面に施される凹線はB種凹線でしっかりしたものであるが、J1SK101は凹線文が沈線化し、退化したものである。また、器高も低くなり小型化している。

3. 最後に

まとめ作成にあたって田村遺跡群の資料を見直す機会を得たが、未だ十分な型式学的な編年案を提示することができず様相差の提示にとどまった。

地域での編年の基本となるべき在地の土器の位置付けが十分行えなかったことが要因である。

今回検討したIV期には在地系の土器が多く存在し、器形をはじめ粘土帯の貼り付方や文様などに様々なバリエーションがあることを確認したが、時間変化の中にバリエーションの位置付けを行うことができなかった。

今回の作業では、時間的制約の中、努力不足、力量不足のため土器のみの検討であったため、資料は増加したがそのことによって、より自分の中の混迷の度が増したような状況で、今後大きな課題を残すこととなった。課題解決のためには、今後、土器様相だけでなく共伴遺物との関係や遺構との関係も含めた検討が必要と考える。中期末から後期初頭の時期を明らかにする努力を続けたい。

なお、本稿は、2004年9月に行われた第53回埋蔵文化財研究集会「弥生中期土器の併行関係」発表要旨集所収の「高知県中央部に「田村遺跡群」の弥生中期～中期末の土器」を一部改変したものである。

参考文献

- (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター・高知県教育委員会 2004 『田村遺跡群Ⅱ』
 高知県教育委員会 1986 『高知空港拡張に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
 梅木謙一 菅原康夫編 2000 『弥生土器の様式と編年』四国編 木耳社
 岡本健児 1989 「弥生時代前期」『南国市史』上 南国市教育委員会
 岡本健児 広田典夫 1977 『高知県ひびのき遺跡』土佐山田町教育委員会
 岡本健児 1983 「四国」『弥生土器Ⅰ』ニューサイエンス社
 小松大洋 池沢俊幸他 1997 『下ノ坪遺跡Ⅰ』野市町教育委員会
 小松大洋 池沢俊幸他 1998 『下ノ坪遺跡Ⅱ』野市町教育委員会
 出原恵三 1990 『西分増井遺跡群発掘調査報告書』春野町教育委員会
 出原恵三 1989 『下分遠崎発掘調査報告書(1)』香我美町教育委員会
 坂本憲昭 1993 『野市町本村遺跡調査報告書』野市町教育委員会
 高橋啓明 出原恵三 吉原達生 1989 『深淵遺跡調査報告書』野市町教育委員会
 高橋啓明 1990 『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書』土佐山田町教育委員会
 出原恵三 1988 「南四国における弥生中期土器の展開-編年と地域間交流」『遺跡』31号
 出原恵三他 1995 『永田遺跡』本山町教育委員会
 出原恵三他 1996 『小籠遺跡Ⅱ』高知県埋蔵文化財センター
 出原恵三 1990 「土佐型甕の提唱とその意義」『遺跡』32号 遺跡発行会
 出原恵三 1989 「薄手式土器について」『南国史談』第7号
 出原恵三 1990 「土佐の後期土器編年」『瀬戸内の弥生後期土器の編年と地域性』古代学協会四国支部
 出原恵三 1996 「各地における弥生時代後期土器の様相 土佐」『弥生後期の瀬戸内』古代学協会四国支部
 松村信博 1994 「弥生時代中期の土器と集落 高知県」『弥生時代中期の土器と集落』古代学協会四国支部

時 期	番 号	出土遺構
Ⅲ期後半	8,9,21	F1区SK102
	1,2,3,5,6,7,16,17,18,19,20	F1区SD111
	4,11,12,13,14,15	F3区ST303
	10	K1区SD103
Ⅳ-1期	1～15a,15b,16	L1区SD105
Ⅳ-2期	5,22,23	I1区SK121
	2,3,4	I2区SD217
	9,10,11,26	I4区TR8SK2
	1,6,7,8,12,13,14,15,16,17,18,19,20,21	J4区ST401
	24,25,27	J4SK409
Ⅳ-3期	18,23	E4区SK429
	1,3,6,7,11,12,13,14,15,16,19a,19b,24,25a,25b,26,27,28,29,30	I2区ST210
	4	I2区SK208
	5,10,21	I2区SK269
	2,8,9,17,20,22	I4区SK450
Ⅴ-1期	1～20	J1区SK101

表Ⅵ-1 実測図掲載遺物一覧表

注 ・岡本健児氏の編年については岡本健児 1989 「四国の弥生土器の編年と年代」『倭国大乱と高地性集落』 雄山閣を一部改変した。

・この併行関係及び時期についての作表についての責は全て坂本にある。

一括資料掲載報告書

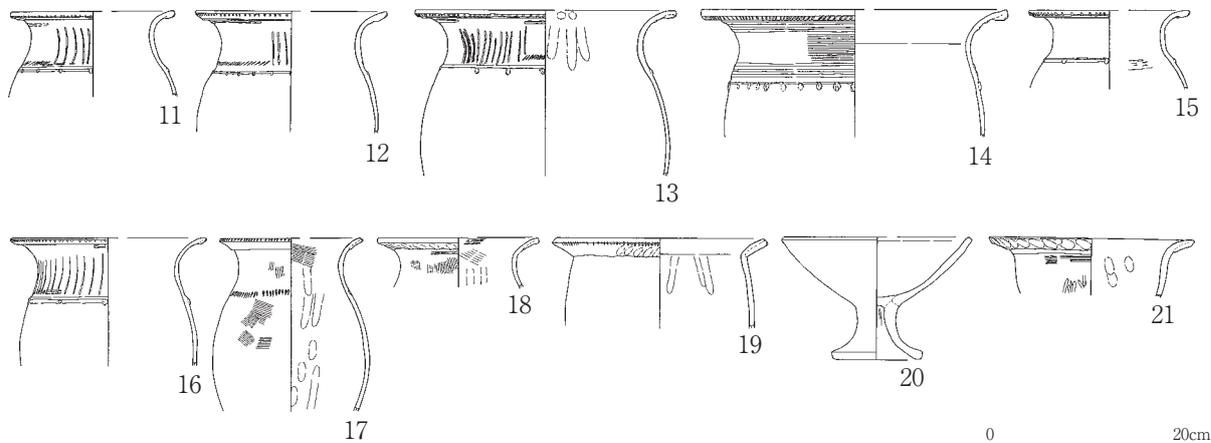
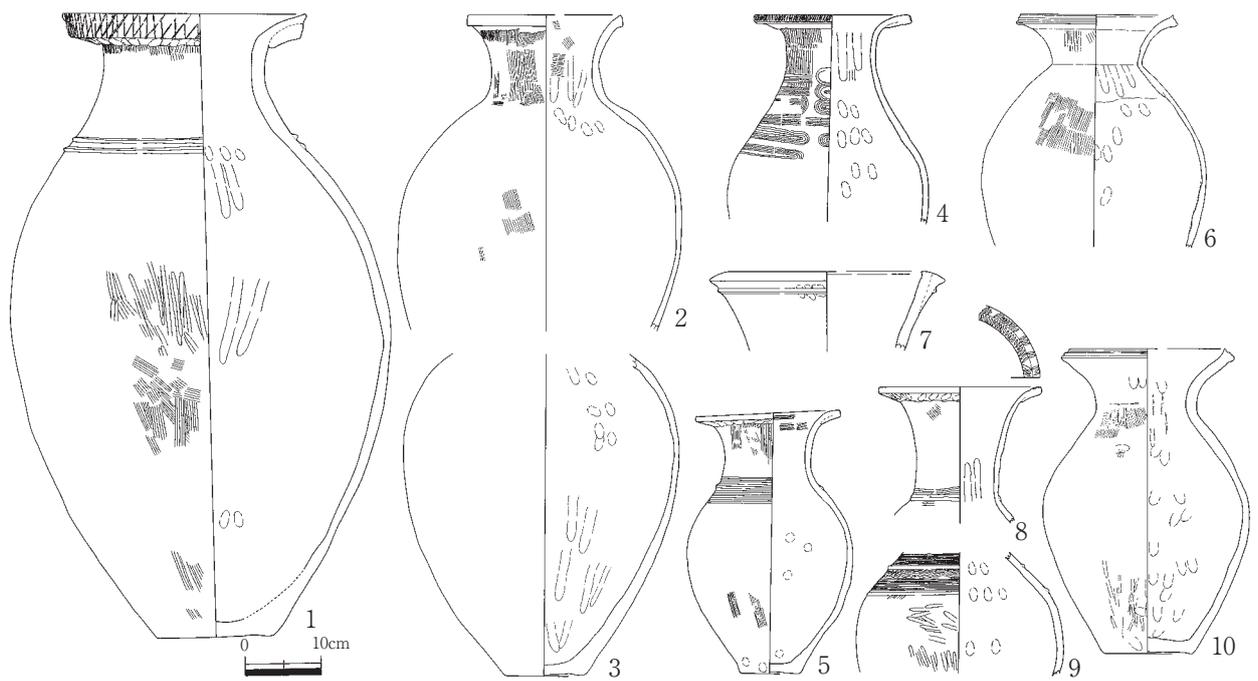
- 高知県教育委員会 1986 『高知空港拡張に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
 岡本健児 広田典夫 1977 『高知県ひびのき遺跡』 土佐山田町教育委員会
 岡本健児 1989 「弥生時代前期」『南国市史』上 南国市教育委員会
 小松大洋 池沢俊幸他 1997 『下ノ坪遺跡Ⅰ』 野市町教育委員会
 小松大洋 池沢俊幸他 1998 『下ノ坪遺跡Ⅱ』 野市町教育委員会
 坂本憲昭 1993 『野市町本村遺跡調査報告書』 野市町教育委員会
 出原恵三 1990 『西分増井遺跡群発掘調査報告書』 春野町教育委員会
 出原恵三 1989 『下分遠崎発掘調査報告書(1)』 香我美町教育委員会
 高橋啓明 出原恵三 吉原達生 1989 『深淵遺跡調査報告書』 野市町教育委員会
 高橋啓明 1990 『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書』 土佐山田町教育委員会
 出原恵三他 1995 『永田遺跡』 本山町教育委員会
 出原恵三他 1996 『小籠遺跡Ⅱ』 高知県埋蔵文化財センター

参考文献

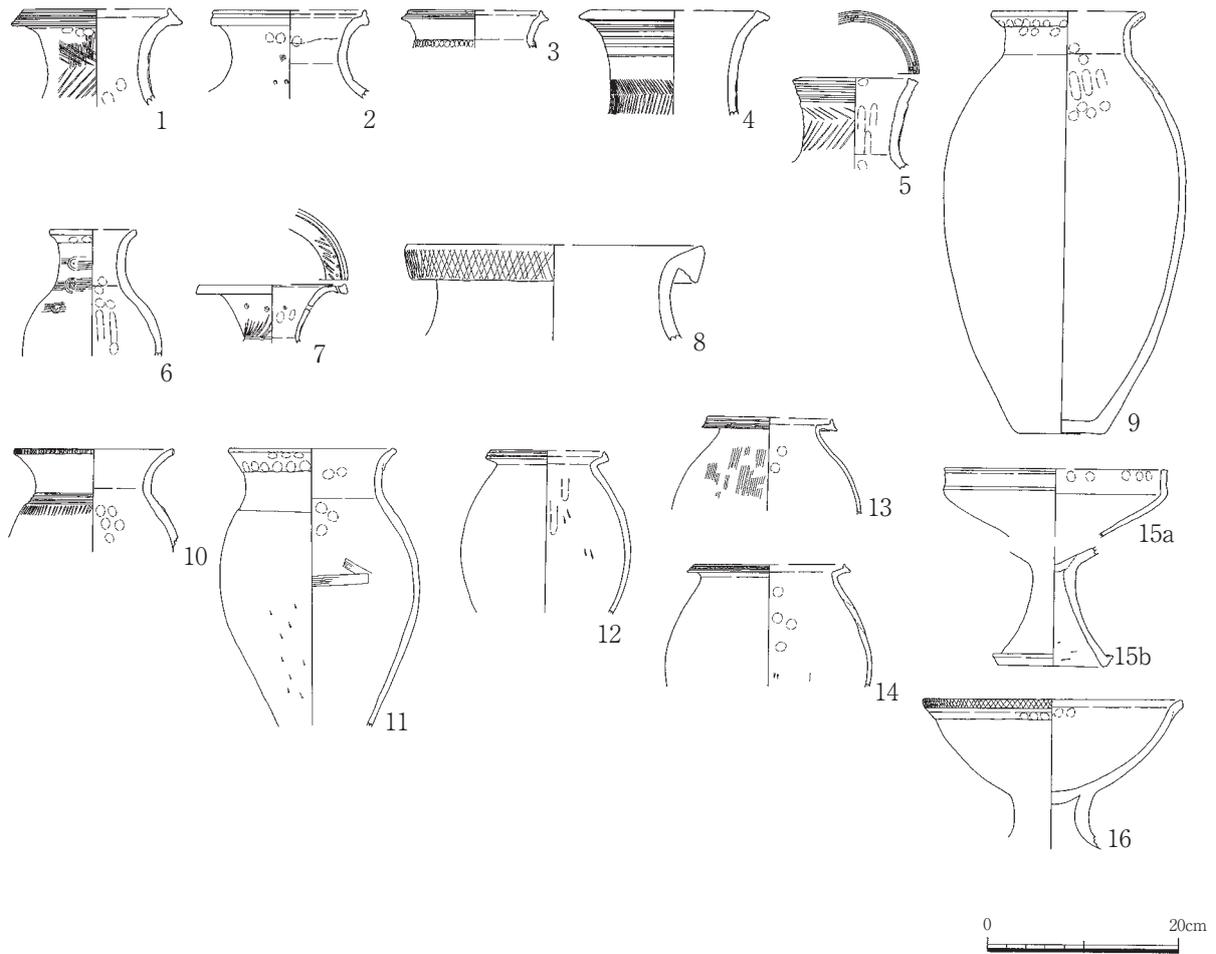
- 梅木謙一 菅原康夫編 2000 『弥生土器の様式と編年』四国編 木耳社
 岡本健児 1983 「四国」『弥生土器Ⅰ』 ニューサイエンス社
 岡本健児 1989 「四国の弥生土器の編年と年代」『倭国大乱と高地性集落』 雄山閣
 岡本健児 1989 「弥生時代前期」『南国市史』上 南国市教育委員会
 出原恵三 1988 「南四国における弥生中期土器の展開-編年と地域間交流」『遺跡』31号
 出原恵三 1989 「薄手式土器について」『南国史談』第7号
 出原恵三 1990 「土佐型甕の提唱とその意義」『遺跡』32号 遺跡発行会
 出原恵三 1990 「土佐の後期土器編年」『瀬戸内の弥生後期土器の編年と地域性』
 古代学協会四国支部
 出原恵三 1996 「各地における弥生時代後期土器の様相 土佐」『弥生後期の瀬戸内』
 古代学協会四国支部
 松村信博 1994 「弥生時代中期の土器と集落 高知県」『弥生時代中期の土器と集落』
 古代学協会四国支部

時期	岡本編年	出原編年 一次調査	後期編年 古代学協会(出原1990)	木耳社編年 (出原1991稿)	古代学協会 (出原1996)	【田村遺跡群Ⅱ】弥生 時代中後期の土器群	【田村遺跡群Ⅱ】以外掲載の一括資料
Ⅱ期	田村式	中期Ⅰ		Ⅱ-1			下分遠崎1 SK2,SK5 下分遠崎2 SD3下層
				Ⅱ-2			L34A SK1 L35A SK1 L36A SD2
Ⅲ期	城式 北カリヤ式	中期Ⅱ		Ⅲ-1			L44A SD1 L34B SR1 L49 ST4,ST10
				Ⅲ-2			
				Ⅲ-3			L45 SD2 L50 SK56
Ⅳ期	ハマーガ森北式 龍河洞・神西	中期Ⅲ		Ⅳ-1			L49 SK3,SK27 L50 ST1(床面),SK20
				Ⅳ-2			L34B SK69 L45 ST6 L49 SK14 本村 SX1
				Ⅳ-3			
Ⅴ期	横手Ⅱ式	後期Ⅰ	後期Ⅰ	V-1	後期Ⅰ	V-1	L34A ST4,ST6,ST10 下ノ坪 ST9,ST12,ST13 北高田遺跡
			後期2	V-2	後期Ⅱ-1	L35B ST1 L50 SK12 下ノ坪 ST5,ST15~ST17,ST19	
		後期Ⅱ	後期3	V-3	後期Ⅱ-2	L49 ST1,ST5	
			後期4	V-4	後期Ⅱ-3	下ノ坪 ST3 深淵 ST3 永田 SK32	

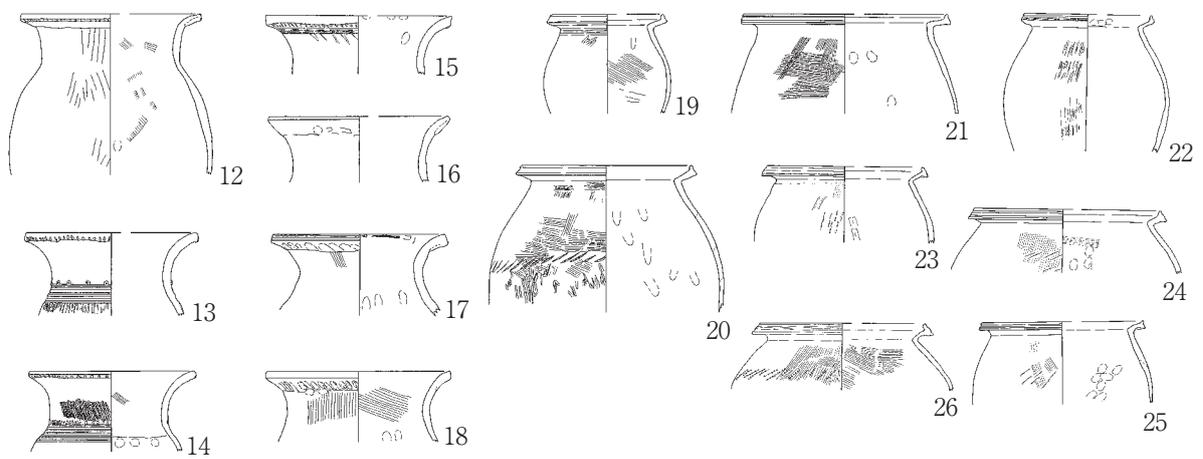
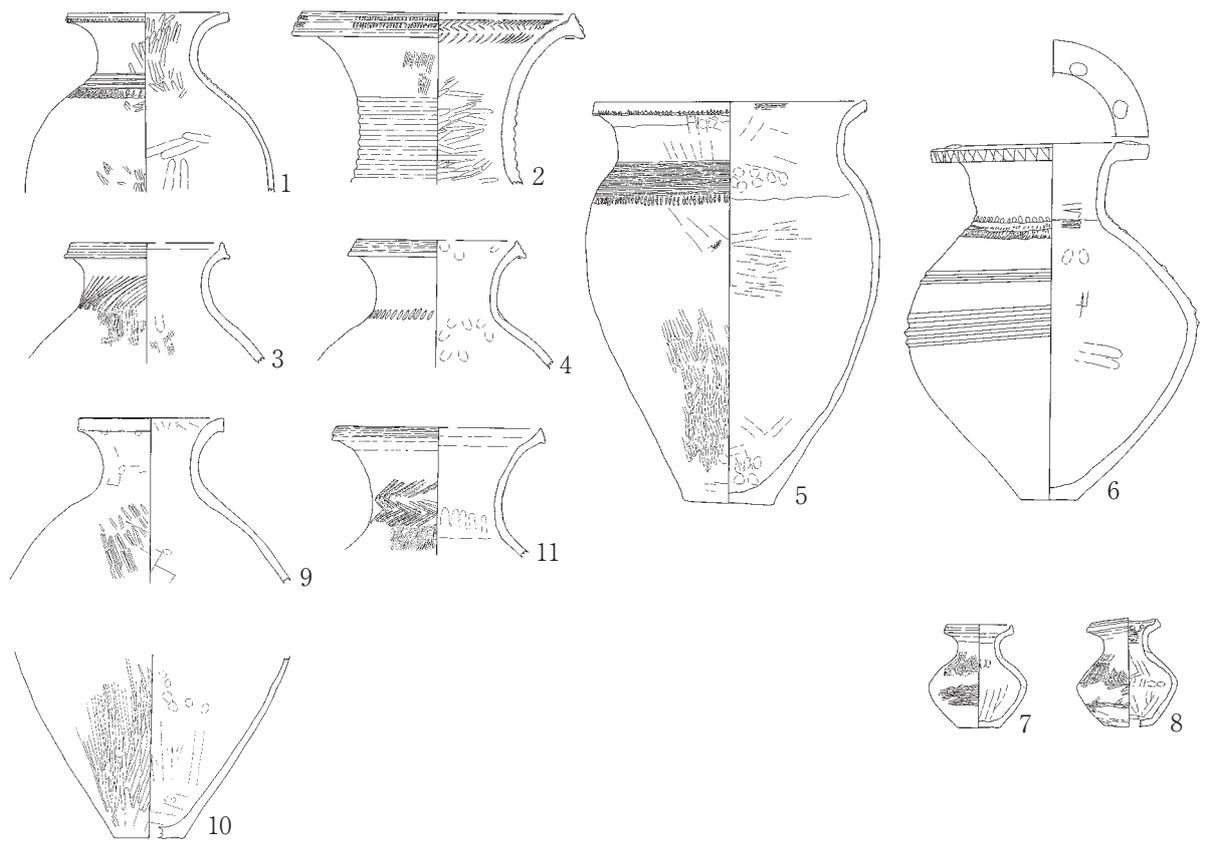
表Ⅵ-2 高知県中央部の弥生土器編年表



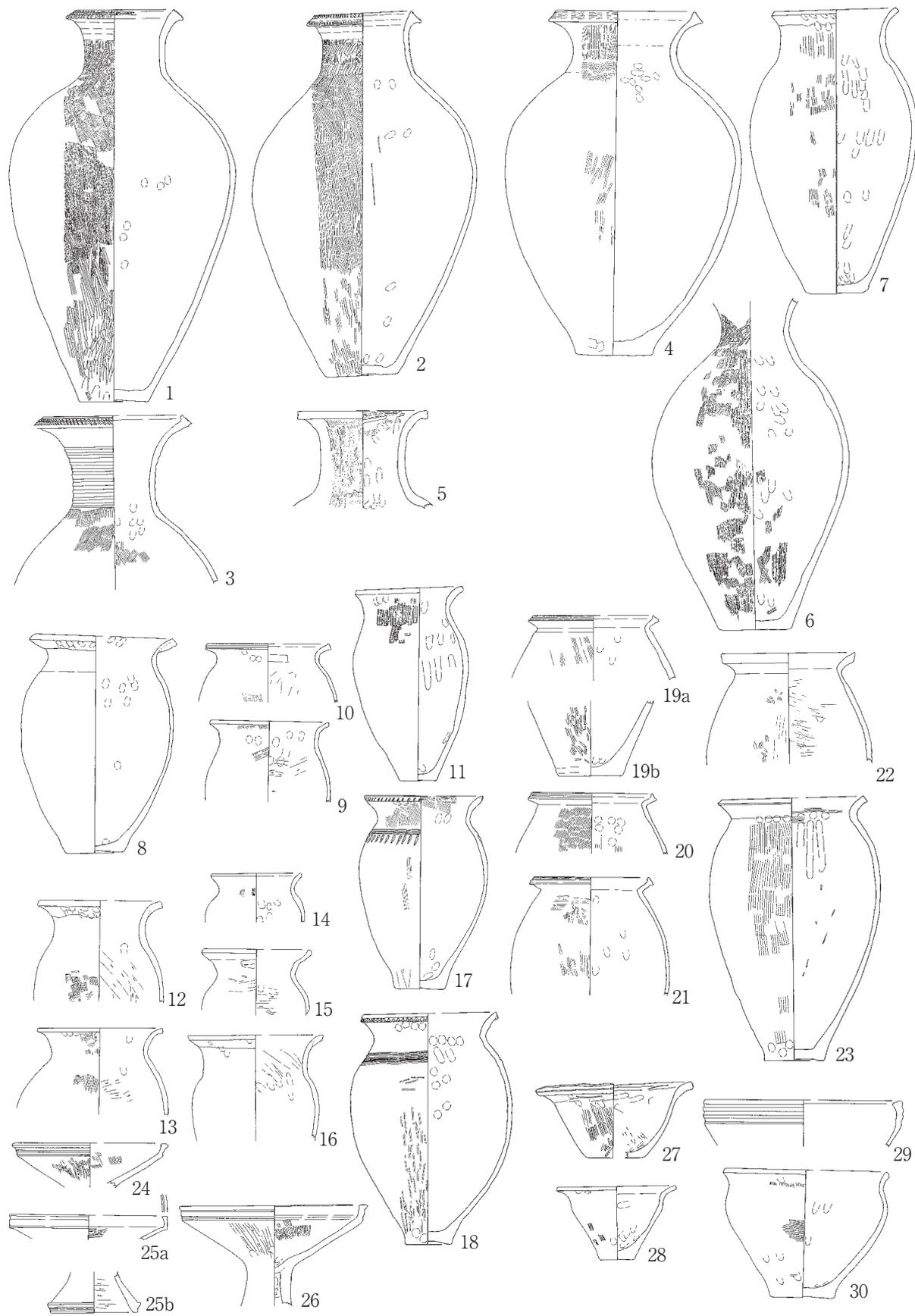
VI-1図 Ⅲ期後半の土器様相



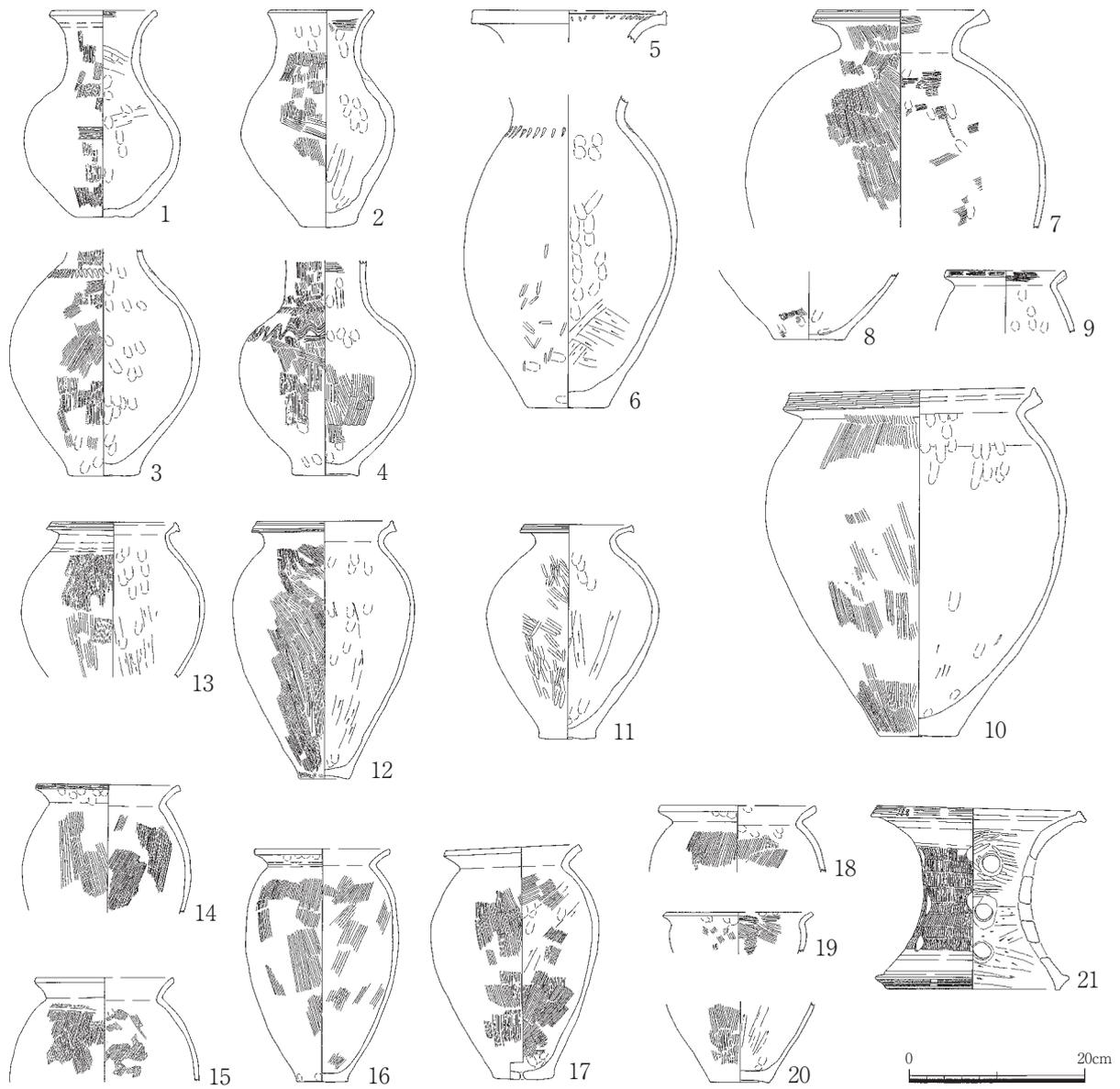
VI-2図 IV-1期の土器様相



VI-3図 IV-2期の土器様相



VI-4図 IV-3期の土器様相



VI-5図 V-1期の土器様相

4. V期の土器について

(1)はじめに

今回扱うV期は、田村遺跡群のピーク期から衰退・消滅期に該当する。特に、集落として最大規模を呈するIVからV-1期は遺構検出数・遺構の重複・出土遺物量はすさまじく、それらを反映して土器の連続性も強く、IV期からV期への変化は漸移的である。遺構出土の遺物には前後する時期のものが含まれていることが多く、遺構一括出土資料をもとにした各時期のセット関係は一見複雑なものとなっている。

主な素材としては出土量が各時期を通して安定している甕形土器を今回の検討では選択した。全体形状が判明している個体も多く得られており、形態・調整を含めた属性分析をすることができる。中期末の凹線文系甕から「く」の字形口縁甕(以下では、「く」の字甕に省略する。)への変遷を追うことが可能であり、この変遷をベースに述べてみたい。中期末～後期前葉の甕形土器は南四国型甕と凹線文系甕に大別でき、両者が影響しあいながら併存するが、やがて凹線文系甕から変化した「く」の字甕に統一される。

なお本小稿では既往の編年を使用している⁽¹⁾。

(2)「く」の字甕の変遷

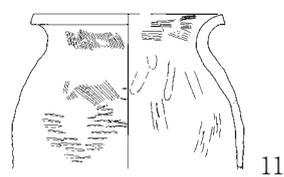
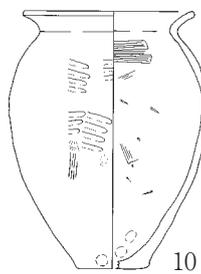
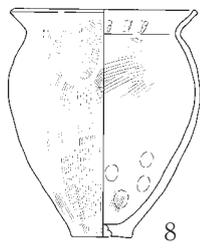
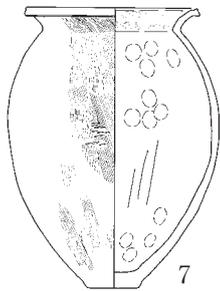
今次調査では図上復原可能な「く」の字甕を50点ほど得ることができた。口頸部の形態、口唇部の形態・文様、胴部最大径の位置、底部の形態、内外面の調整について属性分析を行い変化の方向性を探ってみたい(VI-6図・表VI-4)。

「く」の字甕の分類

- 口頸部 A：水平に外反させるもの。
 B：水平近く外反させるもの。
 C：「く」の字形に外反させるもの。
 D：丸みを持って外反させるもの。
- 口唇部 a：拡張させるもの。
 a-1：上下に拡張させるもの。
 a-2：上方に拡張させるもの。
 a-3：下方に拡張させるもの。
 b：僅かに拡張させるもの。
 b-1：上下に僅かに拡張させるもの。
 b-2：上方に僅かに拡張させるもの。
 b-3：下方に僅かに拡張させるもの。
 c：肥厚させるもの。
 d：面取りを施すもの。

<p style="text-align: center;">V i</p>													
<p style="text-align: center;">V 2 · 3</p>													
<p style="text-align: center;">V 4</p>	<table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="width: 50%;">1 I2-29-11</td> <td style="width: 50%;">7 K2-11-17</td> </tr> <tr> <td>2 I2-28-10</td> <td>8 K2-11-15</td> </tr> <tr> <td>3 I2-35-10</td> <td>9 K2-9-14</td> </tr> <tr> <td>4 I2-21-1</td> <td>10 D1-8-11</td> </tr> <tr> <td>5 J5-8-10</td> <td>11 L2-18-9</td> </tr> <tr> <td>6 K2-11-18</td> <td></td> </tr> </table>	1 I2-29-11	7 K2-11-17	2 I2-28-10	8 K2-11-15	3 I2-35-10	9 K2-9-14	4 I2-21-1	10 D1-8-11	5 J5-8-10	11 L2-18-9	6 K2-11-18	
1 I2-29-11	7 K2-11-17												
2 I2-28-10	8 K2-11-15												
3 I2-35-10	9 K2-9-14												
4 I2-21-1	10 D1-8-11												
5 J5-8-10	11 L2-18-9												
6 K2-11-18													

VI-6図 甕形土器変遷図(S=1/5)



e：丸くおさめるもの。

f：尖らせるもの。

口唇部の文様 凹：凹線文を施すもの。条数を数字で表し「凹」の前に付した。

沈：沈線文を施すもの。条数を数字で表し「沈」の前に付した。

最大部径の位置 上：最大径が上胴部にあるもの。

中：最大径が中位にあるもの。

底部 ①：端部を突出させるもの。

②：体部との境に傾斜変換点を持つもの。

③：体部との境に傾斜変換点を持たずに体部の延長でおさまるもの。

調整 外面 A：ケズリ

B：ミガキ

C：ハケ

D：ナデ

E：タタキ

内面 a：下半部にケズリ

b：底部から上胴部付近までケズリ

c：底部から頸部直下までケズリ

d：ハケ

e：ナデ

法量 大：口径20cm前後、器高約30cm以上

中：口径15cm前後、器高25cm前後

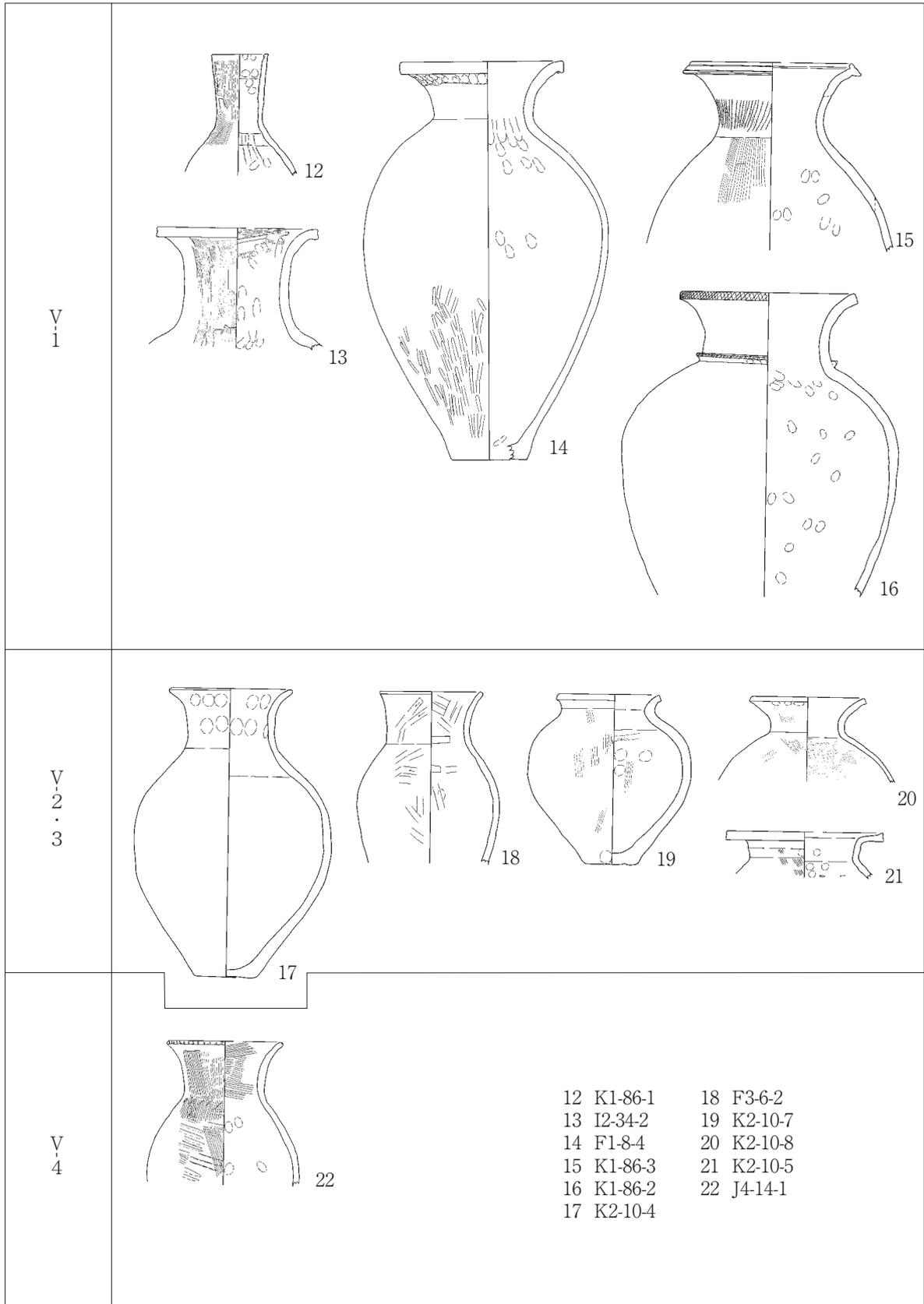
小：口径約14cm以下、器高約20cm以下

口頸部A類の口唇部は凹線文を施したa類である⁽²⁾。口頸部B類の口唇部は、凹線文あるいは沈線文を施したa・c類、無文のd～f類である。口頸部C類が最も多く、口唇部の形態は様々である。

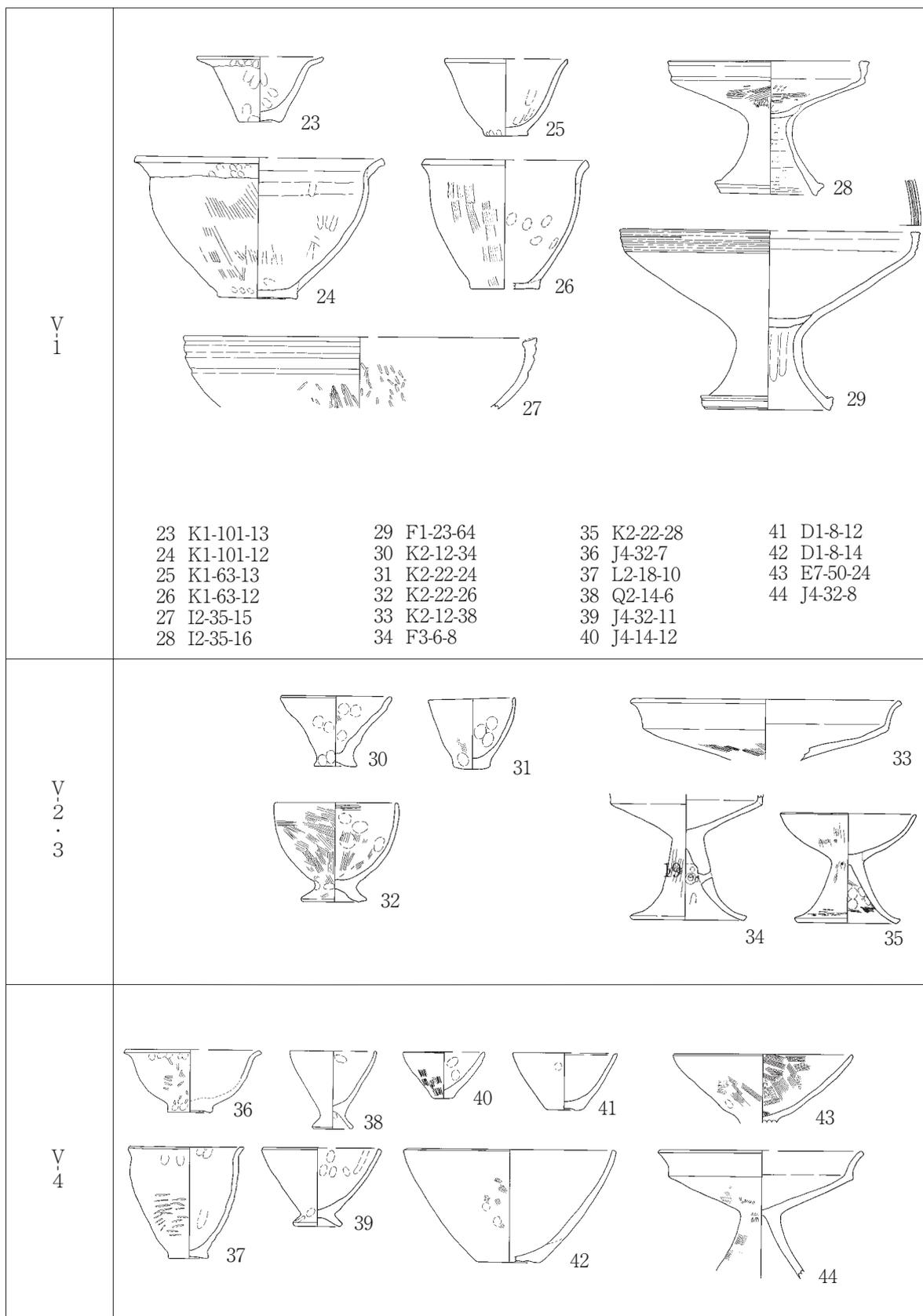
外面の調整はタテハケ調整が一般的である。下地に叩き目が認められるものは、凹線文あるいは沈線文を施した口唇部a・c類も僅かに認められるが、多くは口頸部C類・口唇部b類である。ハケ調整の範囲が狭くなり叩き目が多く残存するものは、口唇部d類が大半である。

内面の調整では、ヘラケズリが施される範囲も時期を決めるメルクマールの一つである。IV期には下半部にとどまっていたが、V-1期には頸部直下まで施されるようになりIV期と区別できる。しかし、それ以降は下半部にのみヘラケズリを施すもの、上胴部まで施すもの、頸部直下まで施すものがあり細かな時期を決めることは難しい。

最大径部の位置は、上胴部・中位・これらの中間に位置するものがあるが、多くは上胴部に位置する。しかしながら、全体に歪んだ個体も多く上胴部にあるのか中位にあるのか判断できない。破片資料ならなおさらのことである。大きな流れは上胴部でやや角ばって直線的に屈曲するもの(IV



VI-7図 壺形土器変遷図(S=1/5)



VI-8图 鉢・高环形土器変遷図

期)が、丸味をもって屈曲し、さらに最大径部がさがり中位に位置するようになる。

底部は、体部との傾斜変換点の有無、さらに底端部の突出の有無を指標にしたが細かな時期決定に利用することは難しい。傾斜変換点があり、底端部が突出するものから、傾斜変換点が無くなる方向で変化する。

以上、「く」の字形口縁甕の各属性について変化の方向性について述べてきたが、単独の指標のみでは詳細な時期決定は難しい。各属性のなかでも口頸部、特に口唇部の形態・文様については比較的時期を絞り込め、これらをもとにV期の「く」の字甕を1～4段階の変遷でとらえておきたい。

1段階 口唇部は上下・上方・下方に拡張させ、あるいは肥厚させ、凹線文・沈線文を施す。上胴部に最大径を持つことはIV期と同様であるが、最大径部が丸味を持つ。内面は頸部直下までヘラケズリが施され、外面はハケ調整である。既往の編年ではV-1期に対応する。

2段階 口唇部は上下・上方・下方に僅かに拡張され、凹線文・沈線文が施される。胴部外面は叩き調整後、ハケ調整が丁寧に施される。既往の編年ではV-2・3期に対応する。

3段階 口唇部は上下・上方・下方に僅かに拡張され、凹線文・沈線文が欠落し凹面状を成すものが認められる。胴部外面は叩き調整後、ハケ調整が丁寧に施され、部分的に叩き目が認められる。既往の編年ではV-2・3期に対応する。

4段階 口唇部は面取りされるのみで、拡張は認められない。胴部外面は叩き調整後、ハケ調整が施されるが、叩き目が広い範囲で残存する。既往の編年ではV-4期に対応する。

(3) 各時期の特徴

以下では既往の編年に即して各時期の特徴について述べてみたい(VI-6～8図)。

V-1期

中期から後期への過渡期にあたるため、各器種のバリエーションが多い。

F1ST105、I2SB210/SK269、I2SK2309、K1ST119、K1SK117、K1SK151、K1SD112等が該当する。

壺は、細頸長頸壺(12)、広口壺(13～16)である。13は直立する頸部を持つが、14～16の頸部は直立部を持たず外反する。これら広口壺には粘土帯貼付、凹線文、頸部突帯文・刻目文等の装飾が認められる。

甕は南四国型甕(1・3)と「く」の字甕(5)と両者の折衷型(2・4)である。内面頸部直下までヘラケズリが施されるものを指標とする。内面頸部直下までのヘラケズリは「く」の字甕だけではなく南四国型甕にも折衷型にも認められる。粘土帯貼付手法・南四国型甕も残存すること等、IV期との差はあまり顕著ではない。南四国型甕は上胴部に文様を持つもの(1)と無文のもの(3)にわけられ、時期差が考えられる。

「く」の字甕(5)は頸部の屈曲はあまくなり、上下あるいはどちらか一方に拡張、肥厚させる。口唇部に2～3条の凹線文を施す。体部は上胴部に最大径を持つことは変わらないが、最大径付近はやや丸味を帯びる。

両者の折衷型(2・4)は口頸部がやや緩やかなカーブを描いて外反させ、上胴部に文様帯を持つ等

の南四国型甕の要素と口唇部を拡張させ凹線文を施文する「く」の字甕の要素を合わせ持つ。南四国型甕同様、文様の有無で分けられるが、時期差を反映しているのか、あるいは南四国型甕と「く」の字甕のどちらかの要素がより強く影響しているための差か判断が難しい。

鉢は大きく3タイプに分類できる。口縁部が大きく外反するタイプ(23・24)は前段階から継続するものである。口径に対して器高が大きく、相対的に深いタイプ(25・26)は口縁部の外反度合いが弱い。また、台付き鉢(27)は、口唇部が面を成し口縁部に凹線文を巡らせる。

高杯は、口縁部が直立するもの(28・29)である。脚部には沈線文等の装飾が施される(28)。脚端部は拡張され、凹線文が施される。

V-2・3期

南四国型甕に代表される在地系のものが完全に消滅し、凹線文がすべての器種から消滅する。IV期的な要素が払拭され、V期的な土器様式が完成する。F3ST302、K2ST209、K2ST220等が該当する。

壺は長頸壺・短頸壺・広口壺である。文様はほとんど認められない。長頸壺は口縁部がひらくもの(17)とあまりひらかず直線的にのびるもの(18)がある。前者の体部は張り、後者はスリムなものとなる傾向がある。短頸壺(19)は、器壁が厚く法量に比べ重量は重い。この時期のみにみられる特徴的な壺である。広口壺は口縁部が大きく外反するもの(20)と口縁部が水平に屈曲するもの(21)がある。これらの広口壺両者がV期後半段階に主流を占めるようになる。

甕は「く」の字甕に統一される。体部は最大径を上胴部に持つもの、中位に持つものがある。底部形態は端部が突出するもの、底部が僅かに直立するもの、突出及び直立部を持たないものがある。口唇部には凹線文は施されないが、拡張の名ごりが見られる。口唇部の形態により細分でき、面取りを施すもの、上下に拡張するもの、上方のみに拡張するもの、下方に拡張するものがある。外面は、叩き成形後ハケ調整を施す。全面ハケ調整を施し、一部に叩き目が認められるのみである。内面調整はヘラケズリ・ハケ・ナデであり、ヘラケズリ調整を施すものは頸部直下まで施すものと最大部径付近まで施すものの二者がある。底部外面は特に平滑には調整していない。

鉢は、口径に対して器高が高いものが多く、深い印象を受けるものである。資料を抽出できなかったが、前段階の23・26のような形態のものが存在しているものと推定される。また、法量的にも大形に属するものも存在していると推定される。この時期には脚部を作り出すもの(30・31)が認められるようになる。形態的には体部が直線的にのびるもの(30)、外上方にのび口縁部が直立するもの(31)、深椀状を呈するもの(32)がある。

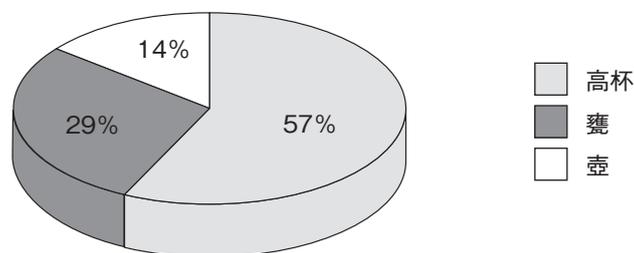
高杯は、杯部の形態が椀状を呈するもの(35)と口縁部が外反するもの(33・34)が認められる。脚部の文様は円孔以外認められない。脚端部の拡張・肥厚もほとんど認められない。

V-4期

D1ST105、E7SX701、F4ST427、J4ST407・SK422、L2ST214、Q2SK220が該当する。

壺は長頸壺と広口壺である。資料的に恵まれなかったが、前段階の広口壺(20・21)の形態の壺は

調査区	遺構名	器種	図版番号	備考
D1	ST101	甕	D1-3-11	
E4	ST412	高杯	E4-17-8	
E4	ST418	高杯	E4-23-4	
E7	ST710	高杯	E7-12-35	
E7	ST715	甕	E7-17-9	
E7	SX701	高杯	E7-50-23	
F1	ST104	甕	F1-7-9	
F1	SK107	甕	F1-15-2	
F4	ST409	壺	F4-18-4	
G1	ST103	甕	G-6-13	
I4	ST414	壺	I4-12-2	
J1	ST108	高杯	J1-12-8	
J3	ST313	壺	J3-14-1	
K2	ST220	壺	K2-21-8	
K2	ST220	壺	K2-21-9	
L2	ST228	甕	L2-31-10	?
L2	ST229	甕	L2-32-6	
D2	大溝 1 /SD207	高杯	大溝1-2-20	
F4	大溝 2 /SR401	高杯	大溝2-14-176	
F4	大溝 2 /SR401	高杯	大溝2-14-178	
F4	大溝 2 /SR401	高杯	大溝2-14-181	
F4	大溝 2 /SR401	高杯	大溝2-14-182	
F4	大溝 2 /SR401	高杯	大溝2-14-184	
F3	大溝4・5/SD309	甕	大溝4・5-15-7	?
K1	大溝4・5/SD102	甕	大溝4・5-15-8	?
F3	大溝4・5/SD309	高杯	大溝4・5-16-16	
F3	大溝4・5/SD309	高杯	大溝4・5-16-18	
F3	大溝4・5/SD309	高杯	大溝4・5-17-1	
F3	大溝4・5/SD309	高杯	大溝4・5-17-4	
F3	大溝4・5/SD309	高杯	大溝4・5-17-8	
F3	大溝4・5/SD309	高杯	大溝4・5-21-8	
F3	大溝4・5/SD309	高杯	大溝4・5-21-13	
I2	大溝6/SD220	高杯	大溝6-4-19	
J5	大溝6/SR501	甕	大溝6-7-7	
J5	大溝6/SR501	高杯	大溝6-7-8	



表VI-3 高松平野からの搬入土器一覧

この段階にも存在すると考えられる。

甕(10・11)は「く」の字甕である。口唇部はヨコナデにより、上下あるいは一方のみに若干拡張される。タタキ目が多く残存するようになる。

鉢は口縁部を外反させるもの(36・37)、脚部を作り出すもの(38・39)、は前段階からの踏襲である。器高に対して口縁部が大きくひらくもの(40～42)は底部の突出が認められない。

高杯は口縁部が外上方に大きくひらくもの(43)、外反するもの(44)と資料を掲示できなかったが杯部が椀状を呈するものの三者が存在していたものと考えられる。

(4) 高松平野からの搬入土器

胎土・形態から製作地を推定できる高松平野から搬入されたと考えられる土器群を対象に集成し、検討を加えてみたい⁽³⁾。(表Ⅵ-3参照)

今回の田村遺跡群ではD・E・F・G・I・J・K・L区の各遺構から出土しており広範囲に分布している。前回の拡張に伴う調査で出土しているものもあわせるとさらに分布範囲はひろがり、ほぼ全域から出土していることになるが、2群⁽⁴⁾にやや集中する傾向が認められる。器種別では高杯が多くを占めるが、壺・甕と複数器種にわたる。出土遺構別でみると大溝出土資料の大半が高杯である。正確にはカウントしてないが、在地土器に占める割合は限りなく低く、その一方で在地高杯に占める搬入土器の高杯の割合は高いものと推定される。時期的にはV-2期にほぼ限定できそうである。

高松平野からの搬入土器が出土する遺跡は田村遺跡群に限らず、後期前葉の遺跡で認められる。下ノ坪遺跡(香美郡野市町)⁽⁵⁾、勇前遺跡(安芸市)⁽⁶⁾でも確認されており、拠点集落のみならず、小・中集落からも複数器種セットで出土していることが特徴である。分布は高知平野の東部に現状では偏在している。高知平野西部の北高田遺跡(土佐市)⁽⁷⁾・東江曲遺跡(吾川郡春野町)⁽⁸⁾において、讃岐産と考えられる土器が出土しているのみである。高知平野の東部と西部では土器様相の違いが少なくなる時期にもかかわらず、高松平野からの搬入土器の有無には明確な違いが認められる。讃岐との伝統的な交流の差によるものと考えられ、さらにサヌカイトの搬入形態とは異なる動きが想定される。

(5) まとめにかえて

以上、「く」の字甕の変遷を中心にV期の土器編年について述べてきた。拠点集落の衰退が土器様式に反映されているのではないかと考えながら小稿をまとめてきたが、このことについては何ら回答を引き出すことはできなかった。また、出原編年をベースに据えており、一部資料的な充実をみる以外は大きく訂正するような内容ではなかった。

高知平野西部の北高田遺跡においてV期になっても南四国型甕が依然メインを占めていることが明らかとなり、高知平野東部との間に格差があった。今回の調査で高知平野東部においても、南四国型甕が残存していることが明瞭になったものの、田村遺跡群全域ではなく一部のエリア(I区)における現象であった。このエリアは田村遺跡群内では特異なエリアであり拠点集落へと展開して

いくなかで他集団を取り込んでいったことをうかがわせ、さらに土器様相差が明瞭ではない集団も取り込んでいることを推測させる。集落が大規模化していく一つのパターンを表しているものと考えられる。また、エリアによる土器の違いは、集団毎で土器生産が行なわれていたことを推察させる。2群に高知平野西部土器の特徴を持った土器群を生産・継承する集団が存在することは、田村遺跡群内に高知平野西部域の集団と緊密な関係を持つ集団が存在していたことを示唆している。

註

- 1) 出原恵三「5.土佐地域」『弥生土器の様式と編年』四国編 木耳社 2000
出原恵三「第V章 考察 1.下ノ坪遺跡出土の弥生後期土器について」『下ノ坪遺跡Ⅰ』 1997
出原恵三「第V章 考察 1.下ノ坪遺跡の弥生後期土器と集落」『下ノ坪遺跡Ⅱ』 高知県野市町教育委員会 1998
- 2) A類はⅣ期に属するので、今回は除外する。
- 3) 各分冊に添付したCDに収録されている観察表をもとに抽出し、実物を確認する方法をとった。実測図が掲載されていないものは基本的に数には含んでいないが、偶然的に確認できたものは含めた。したがって、今回の調査で出土した実点数ではないことに注意が必要である。
- 4) 前田光雄「Ⅳ 田村遺跡弥生時代中後期の集落」本書所収。
- 5) 『下ノ坪遺跡Ⅰ』 高知県野市町教育委員会 1997 『下ノ坪遺跡Ⅱ』 高知県野市町教育委員会 1998
- 6) 『勇前遺跡』高知県埋蔵文化財センター 2002
- 7) 『北高田遺跡』高知県埋蔵文化財センター 2000
- 8) 『東江曲遺跡』高知県埋蔵文化財センター 2003

遺構名	遺物番号	口頸部	口唇部		最大径部	底部	調整		法量
							外面	内面	
D1ST105	D1-8-11	C	d		中	②	E	be	中形。
E4SK429	E4-37-15	C	d		上	②	C	be	大形。
E4SD402	E4-45-11	C	a-2	2凹	上	②	BC	be	中形。
E7SX701	E7-50-11	C	e		中	③	ADE	de	小形。
E7SX701	E7-50-12	C	d		中	②	CE	ae	中形。
E7SX701	E7-50-13	C	f		上	③	CE	bd	中形。
F1SK130	F1-22-42	B	a-2		上	②	CD	ae	大形。
F1SD102	F1-26-3	C	d		上	②	C	d	大形。
F2ST202	F2-5-9	C	d		上	③	C	be	中形。
F4ST402	F4-9-17	C	a-1	3沈	中	②	C	ade	大形。
F4ST416	F4-30-2	C	d		上	③	C	de	大形。
I1SD101	I1-8-7	C	d		上	②	D	e	中形。
I1SK102	I1-21-6	C	a-3		上	①	CD	de	大形。
I2ST212	I2-21-1	C	a-3?		上	②	C	ae	大形。
I2SK217	I2-46-8	C	a-2	2凹	上	②	B	ad	大形。
I2SK286	I2-53-7	C	d		中	③	C	be	中形。
I4ST422	I4-17-1	C	a-2	2沈	上	②	C	be	中形。
I4SK428	I4-29-4	B	a-2	2凹	上	②	ABC	ade	中形。
J1SK101	J1-19-10	C	d		上	②	C		中形。
J1SK101	J1-19-11	C	a-2	3凹	上	②	C	be	大形。
J1SK101	J1-20-16	C	d		上	①	C	d	中形。
J3SK303	J3-20-1	C	d		上	②	CE	be	中形。
J5SK503	J5-8-10	C	a-1	2沈	上	②	C	c	大形。
K1ST114・115	K1-25-6	B	a-2	3凹	中	①	C	c	中形。
K1SK117	K1-63-10	C	a-2	2凹	上	②	D	ae	小形。
K2ST209	K2-11-13	C	b-1		上	①	CE	c	中形。
K2ST209	K2-11-14	C	b-1		中	②	CE	ae	中形。
K2ST209	K2-11-15	C	d		上	②	C	de	中形。
K2ST209	K2-11-16	C	b-1		上	②	?	d	中形。
K2ST209	K2-11-17	C	b-1		上	②	CE	ae	中形。
K2ST209	K2-11-18	C	b-1		上	③	CE?	ae	大形。
K2ST221	K2-24-7								小形。
K2SK201	K2-35-5	C	a-2	3凹	上	①	C	d	大形。
K2SK212	K2-37-9	C	b-2		上	②	C	a	中形。
K2SK217	K2-38-2	C	a-2		上	①	e	c	中形。
K2SK295	K2-49-8	B	a-1	3凹	上	①	C	be	大形。
K3ST311	K3-16-3	C	a-3	3凹	上	②	CE?	be	大形。
L2ST214	L2-17-2	C	c	2凹	上	②	CE	d	大形。
L2SK222	L2-49-11								大形。
大溝1	大溝1-6-80	C	b-3		上	②	CE	de	中形。
大溝2	大溝2-6-65	C	d		上	②	C	bde	中形。
大溝2	大溝2-6-66	C	b-2		上	①	C	e	中形。
大溝2	大溝2-6-67	C	b-1		上	②	C	e	中形。
大溝2	大溝2-6-68	C	b-1		上	①	C	d	大形。
大溝2	大溝2-13-167	C	a-1		上	②	B	be	大形。
大溝2	大溝2-15-200	C	b-3		上	②	C	e	大形。
大溝4・5	大溝4・5-3-1	B	a-1		上	①	BC	bd	大形。
大溝4・5	大溝4・5-5-17	C	b-3		上	②	CD	ae	小形。
大溝4・5	大溝4・5-15-13	C	b-1		中	②	CD	c	中形。

表Ⅵ-4 「く」の字甕属性一覧表

時期	遺構名	壺	甕	高杯	鉢	器台	その他	不明	合計	備考	
V-1	F1ST105	報告書掲載点数	4	4	2	1	0	0	0	11	12
		実測報告書未掲載	0	1	0	0	0	0	0	1	
		未実測未掲載点数	0	0	0	0	0	0	0	0	
		小計	4	5	2	1	0	0	0	12	
		比率	33.3	41.7	16.7	8.3	0	0	0	100	
	F1ST106	報告書掲載点数	6	2	2	0	0	0	0	10	42
		実測報告書未掲載	0	0	0	0	0	0	0	0	
		未実測未掲載点数	16	15	1	0	0	0	0	32	
		小計	22	17	3	0	0	0	0	42	
		比率	52.4	40.5	7.1	0.0	0	0	0	100	
	F3ST304	報告書掲載点数	2	2	1	0	0	0	0	5	53
		実測報告書未掲載	0	0	0	0	0	0	0	0	
		未実測未掲載点数	17	29	2	0	0	0	0	48	
		小計	19	31	3	0	0	0	0	53	
		比率	35.8	58.5	5.7	0.0	0	0	0	100	
	I2SK269	報告書掲載点数	1	10	1	2	0	1	0	15	71
		実測報告書未掲載	0	0	0	0	0	0	0	0	
		未実測未掲載点数	18	6	1	4	0	0	27	56	
		小計	19	16	2	6	0	1	27	71	
		比率	26.8	22.5	2.8	8.5	0.0	1.4	38.0	100	
I2SK285	報告書掲載点数	6	10	0	0	0	0	0	16	53	
	実測報告書未掲載	0	0	0	0	0	0	0	0		
	未実測未掲載点数	5	22	1	4	0	0	5	37		
	小計	11	32	1	4	0	0	5	53		
	比率	20.8	60.4	1.9	7.5	0.0	0.0	9.4	100		
I2SK285	報告書掲載点数	3	5	1	0	0	1	0	10	31	
	実測報告書未掲載	0	0	0	0	0	0	0	0		
	未実測未掲載点数	3	9	1	4	0	0	4	21		
	小計	6	14	2	4	0	1	4	31		
	比率	19.4	45.2	6.5	12.9	0.0	3.2	12.9	100		
I4SK428	報告書掲載点数	2	5	2	1	0		0	10	24	
	実測報告書未掲載	0	1	0	0	0	0	0	1		
	未実測未掲載点数	5	4	3	1	0	0		13		
	小計	7	10	5	2	0	0	0	24		
	比率	29.2	41.7	20.8	8.3	0.0	0.0	0.0	100		
V-2・3	K2ST209	報告書掲載点数	9	21	1	3	0	0	0	34	206
		実測報告書未掲載	1	0	0	0	0	0	0	1	
		未実測未掲載点数	27	128	1	1	0	0	14	171	
		小計	37	149	2	4	0	0	14	206	
		比率	18.0	72.3	1.0	1.9	0.0	0.0	6.8	100	
	K2ST220	報告書掲載点数	7	12	1	3	0	1	0	24	601
		実測報告書未掲載	1	1	0	0	0	0	0	2	
		未実測未掲載点数	81	291	31	40	1	0	131	575	
		小計	89	304	32	43	1	1	131	601	
		比率	15	51	5	7	0	0	22	100	
V-4	E7SX701	報告書掲載点数	2	14	2	2	0	0	0	20	124
		実測報告書未掲載	0	0	1	0	0	0	0	1	
		未実測未掲載点数	2	63	2	8	0	0	28	103	
		小計	4	77	5	10	0	0	28	124	
		比率	3.2	62.1	4.0	8.1	0.0	0.0	22.6	100	
	J4ST407	報告書掲載点数	3	7	1	3	0	0	0	14	355
		実測報告書未掲載	0	3	0	0	0	0	0	3	
		未実測未掲載点数	36	190	5	22	0	0	85	338	
		小計	39	200	6	25	0	0	85	355	
		比率	11.0	56.3	1.7	7.0	0.0	0.0	23.9	100	
	J4SK422	報告書掲載点数	1	3	1	3	0	0	0	8	74
		実測報告書未掲載	0	0	1	0	0	0	0	1	
		未実測未掲載点数	6	30	8	2	0	0	19	65	
		小計	7	33	10	5	0	0	19	74	
		比率	9.5	44.6	13.5	6.8	0.0	0.0	25.7	100	

表VI-5 V期器種別組成比率

VII 田村遺跡群出土の南四国型甕

1. はじめに

今回の調査では、完形に復原できる資料・図上で反転復原できる資料を多く得ることができた。それらのなかには南四国型甕の範疇に含まれる土器も多い。南四国型甕は、土佐型甕、西南四国型甕とも呼ばれることもあるが、概して同じような特徴を備えた土器である。縄文晩期の深鉢に祖形が求められ、弥生時代後期まで存続する。形態的には上胴部から口縁部にかけて緩やかに外反し、上胴部に櫛描文を主として施文される。小稿では、最も出土量の多い中期後半から後期初頭のものについて述べていきたい。

南四国型甕は口縁部に粘土帯を貼付し、櫛描文等により加飾され、独特の雰囲気を持っているため、他地域で出土すると容易に判別できる。このような特徴を持つ土器は南四国の土器の可能性が高いことが浸透してきたため、各地で南四国産という認識を得るようになってきた。注目され出したものの、当の南四国では細かな属性分析を通して具体的に述べられていないため、不明瞭な点も多く研究を深化させることができていない。そこで以下では、田村遺跡群出土の南四国型甕について属性分析を通して、その実態について少し検討してみたい。

2. 田村遺跡群出土の南四国型甕

I区出土資料を対象にする⁽¹⁾。I区は南四国型甕の出土点数も多い。遺構の重複も少なく、各遺構の残りもよいことから、他の時期の遺物が混入する可能性も低いと考えられる。今回の主たる目的の一つが田村遺跡群の南四国型甕の特徴を明らかにすることであるため、肉眼観察により仁淀川流域の胎土のものと判断されるものは除外した⁽²⁾。

属性分類にもとづき法量(口径・器高・底径)、口縁部・上胴部の文様・煤付着状況について今回は扱うことにし、表にまとめてみた(表Ⅶ-1・2)。調査区毎に特徴をみてみたい。II区は全体的に加飾傾向が強い。口縁部外面に粘土帯を貼付するものが大半を占め、口唇部の刻目文も多くの個体に施される。口縁部に施された文様の組み合わせは、粘土帯貼付のみ・粘土帯を貼付し刻目文を施すもの・粘土帯を貼付せずに口唇部に刻目文のみを施すもの・貼付も刻目文も施さないものの4パターンである。上胴部文様は、櫛描文が主体であるが無文のものも半数近く存在する。文様構成では櫛描直線文と刻目文の組み合わせが目立つ。

II区はII区よりも、文様が施される割合が少ない。口縁部に施された文様の組み合わせは、II区同様4パターンあるがそれぞれの割合が異なる。粘土帯を貼付し刻目文を施さないものが目立つようになるが、これらはI2SD226からの一括出土資料である。また、I2ST203からは刻目文のみものがまとまって出土している。上胴部文様は残存状況から確認できないものが多いが、無文のものがII区のものより増加している。櫛描直線文と刻目文をそれぞれ単独で施すか、組み合わせて施すかのパターンをとるものが多い。さて、今回の属性分類項目によるとI2SD226から出土したすべて

の南四国型甕は同一の特徴を具備していることになる。

Ⅳ区は、文様が施されるものの割合が少ない。口縁部をみると、粘土帯も刻目文も施されないものが目立つ。粘土帯と刻目文の両方を施すものはなく、施文される場合にはどちらか一方のみである。上胴部も無文のものが多い傾向が認められる。

以上、Ⅰ区の調査区毎に特徴を述べてきたが、粘土帯貼付の有無、口唇部の刻目文の有無、上胴部の文様の有無に相関関係を見いだすことができた⁽³⁾。

口縁部に粘土帯を貼付するものには、口縁端部に刻目文を施すものが多く、この相関関係は特に強い。口縁部に粘土帯を貼付するが、刻目文を施さないものは上胴部が無文になる傾向が認められる。上胴部の文様では、櫛描直線文+刻目文が目立つ。この他に、櫛描直線文のみ、刻目文のみ、簾状文風のもの、刺突文+沈線文がある。法量については、大形(口径約20cm以上)・中形(口径約15~20cm)・小形(口径約15cm以下)の3法量が存在する。中形に属するものが多くを占めるが、大形・小形も少なくない。大形のものには加飾傾向が強いことが認められ、逆に小形のものには文様が施されない傾向が認められる。

機能的には貯蔵用なのか、煮沸用なのかを推定するため使用痕跡(煤の付着状況)に注目してみた⁽⁴⁾ところ大形のものにも、煮沸に使用された痕跡が認められた。

属性分析の結果をもとに述べてきたが、以前から指摘されてきた豊富なバリエーションについては、系統的に整理できる可能性がある。

次に上述の諸特徴から、Ⅳ期の南四国型甕の生成について検討してみたい(Ⅶ-1図)。Ⅲ期の甕は前後の時期と比較すると、個体差が少なく安定している。また、南四国のみならず愛媛県南予地域にも分布することが大きな特徴である。ここで形態等の諸特徴を簡単に述べておきたい。形態は口縁部が大きく外反し全体の最大径となる。体部は上胴部に最大径を有し、底部にむかってすぼまる。器壁は概してうすい。文様は口縁部を肥厚させ、刻目文を施す。また、微隆起突帯を巡らせる。頸部には縦方向のヘラ描沈線文と刻目文を施す。さらに上胴部には微隆起突帯と浮文を施す。

ここで、Ⅲ期とⅣ期の南四国型甕について比較してみたい。法量については、大形・中形・小形が存在することは両者とも同じである。Ⅲ期の甕形土器の法量分化を継承したものである。体部の形態はほぼ同じであるが、口頸部は若干異なる。Ⅳ期のものは口縁部と上胴部がほぼ同径で最大径となるか、上胴部が全体の最大径となる。口縁部の著しい発達とは認められない。粘土帯貼付手法についても両者では異なる。Ⅲ期のものは、断面形は台形を呈し、粘土帯外面にはD字状の刻目文が施される。この粘土帯は貼付なのか、折り曲げなのか、あるいは肥厚させたものなのか判断が難しい。一方、Ⅳ期のものは粘土帯を指頭により押しつけるため、外面には指頭が残存しているものが多い。口唇部に刻目文を施すが、器面に対して垂直方向に施す。次に上胴部の文様構成について見てみたい。Ⅲ期のものは上述のように、微隆起突帯と浮文であるが、Ⅳ期のものは櫛描文と刻目文が主流である。

以上のように両者には類似する点、異なる点が存在する。類似する点と言うまでもないが継承した特徴である。一方、異なる点はどう考えたらよいのであろうか。Ⅳ期の口縁部の特徴は、中期(Ⅱ期)以降の壺形土器にみられるものである。次に文様についてはⅣ期では上胴部にのみ施文し、頸部に

は施文しない。さらに文様構成は口縁部の手法と同じく壺形土器に求めた方がよさそうである。このことから、IV期の南四国型甕は壺形土器から分化したものと考えられる。さらにこのことを補強することがある。今まで、緩やかに外反するものは甕として単純に認識していたが、残存状況の良い資料を目の当たりにすると、口頸部の破片では両者の区別が非常に困難であることが明らかとなった。今後、この点は改めねばならないとともに、当該土器の特徴を現しているものと考えられる。

以上のように、壺形土器からの分化と考えれば、形態・粘土帯貼付・文様構成をうまく説明することができる。南四国型甕の特徴の一つである口縁部に粘土帯を貼付することは中期以降に盛行する。しかも、貼付方法はⅢ期の甕よりもむしろ壺形土器のものと類似する。本来が壺形土器なので、壺なのか甕なのかを判別することに混乱が生じて当然である。この壺変容甕の存在はIV期の大きな特徴である。

3. 遺構との関係

報告書に掲載されている図版を見る限りでは、凹線文系甕と南四国型甕が共伴する遺構は以下のとおりであるが、やや少ない印象を受ける⁽⁵⁾。

D1SX1001、E4ST404、E4ST417、F1ST104、F3SK364、F4SK497、I2ST210、I2SB201/SK206、I2SK2309、I4SB412/SK450、I4SK428、J4ST401、J5SK501、K1ST119、K1SD114、K2SK212、K2SK275、L2ST228、O2ST202

ところで、今回対象としたI区は中期末から後期初頭の集落跡と考えられる(Ⅶ-2図)。竪穴住居跡等の遺構群は分布から大きく二つのグループに分類できる。それぞれ弧状を呈するように分布しており、仮に西側のグループをAグループとし、東側をBグループとしておきたい。AグループにはI1ST101・102・103・104、I2ST202・203・204・205・206・218、N1ST105・106、BグループにはI2ST208・209・210・211・213・214・219、I4ST404・405・406・411がそれぞれ属する。このグループ別の遺構群と属性分類表を比較すると、属性分類の差が遺構の分布にも反映されていることがわかり、両者は有機的に関連している。Aグループに属するものは、口唇部に刻目を施し、上胴部に何らかの文様を持つものが多い。一方、Bグループに属するものは粘土帯を貼付しないものも多く、口唇部の刻目や上胴部の文様の無いものが多い。これらの現象が時期差を反映しているのか、集団差なのかは今後の課題である。

4. まとめ

以上、田村遺跡群出土の南四国型甕の特徴を抽出してきた。形態差・文様構成差等によりバリエーションの豊富さが特徴の一つとして認識されてきた。しかし、今回実施した属性分析を通して系統として把握できる可能性を提示できた。さらに系統差が遺構分布にも対応していることが明らかとなった。このことは、遺構単位を抽出できるとともに、集落構造の理解にも応用できる。

さて、今回取り扱ったIV期は凹線文系土器の盛行期である。田村遺跡群を含む高知平野東部の

土器様式は凹線文系土器の影響を強く受けると考えられている。したがって、当該期の土器構造を把握するには凹線文系土器の検討は不可欠である。これらの土器群について検討することができなかったため、凹線文系の甕と南四国型甕との共伴例が少ないことを指摘したのみで、両者は時期差なのか集団差なのかについて述べるができなかった。南四国型甕以外の在在系土器、凹線文系土器を含めた検討を今後の課題としたい。

最後に高知平野西部との比較を簡単におきたい。Ⅳ期の南四国型甕は、Ⅲ期の甕の特徴を高知平野東部のものよりも強く引き継ぐ。特に口頸部の形態・口縁部文様等に見ることができる。一方、上胴部文様は、櫛描直線文・(微隆起突帯)・楕円形浮文・刻目文で構成されるものが主体であり、高知平野東部とは楕円形浮文の有無で識別できるが、大きな文様構成は同じであり、両者は密接に関連している。

報告書不掲載資料については実見すらしておらず、今回の小稿にもまったく反映されていない。さらに、この小稿をまとめるにあたっては、執筆者間での議論をほとんど行っていないため、関連する内容についても解釈が異なったものとなっている可能性もあるが、ご了承願いたい。最後になりましたが、報告書作成段階から(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターの諸先輩方々から多くの有益な御教示・御指導を賜った。末筆ながら御礼申し上げたい。

註

- 1)『田村遺跡群Ⅱ第5分冊』参照。
- 2)この他、通常田村遺跡群で出土する土器の胎土と著しく異なるものも同様に除外した。
- 3)掲載されなかった土器は多量にあり、それらについては実見すらできていないため、あえて属性分析の成果の比率は出さなかった。
- 4)煮沸に使用されたものかどうかの判断は経験則によった。単に煤が付着したものをすべて煮沸に使用されたものとは判断していない。基本的には、外面にリング状に煤が付着したものは煮沸に使用されたものと判断した。
- 5)D1・E4区は第3分冊、F1・F4区は第4分冊、I2・I4・J4・J5区は第5分冊、K1・K2・L2区は第6分冊、O2区は第7分冊参照。

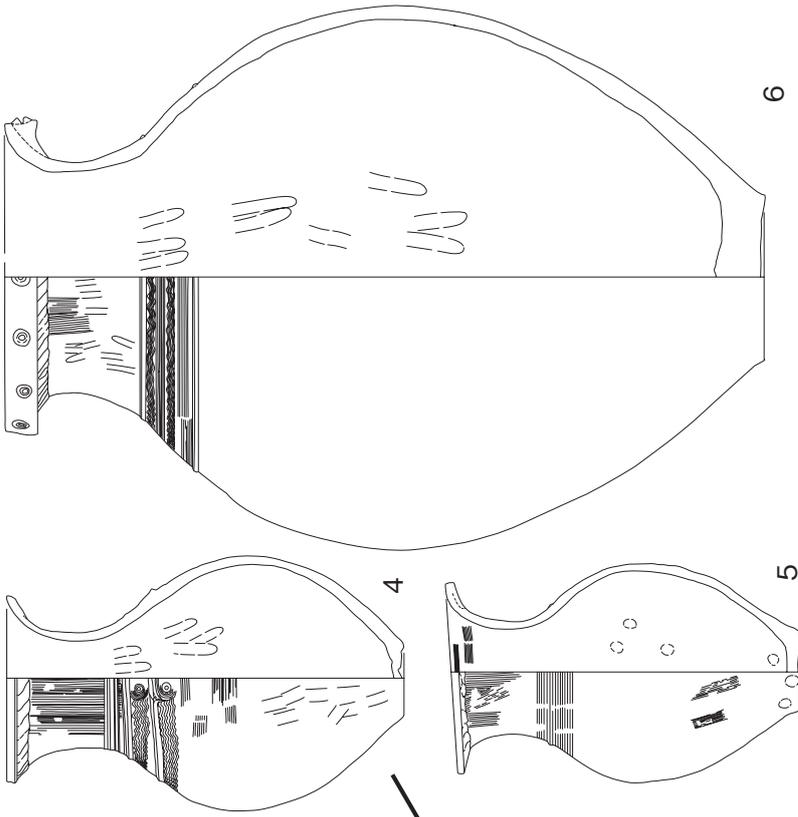
参考文献

- 出原恵三「5. 土佐地域」『弥生土器の様式と編年』四国編 木耳社2000
岡本健児「神西式土器文化の再検討」『高知女子大学紀要 人文・社会科学編』第20巻1972
岡本健児「土佐神西遺跡調査概報」『上代文化』第20輯1951
出原恵三「土器と青銅器から見た土佐と宇和」『宇和の古代文化を解剖する』愛媛大学考古学研究室第1回公開シンポジウム愛媛大学考古学研究室・宇和町2001
出原恵三「第Ⅶ章 考察」『下分遠崎遺跡(Ⅰ)』香我美町教育委員会 1989
出原恵三「土佐型甕の提唱とその意義」『遺跡』第32号遺跡刊行会1990
岡崎壯一「南予地域における西南四国型甕の一考察」『岩木赤坂遺跡』愛媛大学法文学部考古学研究室1999
柴田昌児「南四国における弥生文化の成立過程」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文刊行会 2000
柴田昌児「南四国における弥生土器の地域色」『保内町の遺跡 遺跡詳細分布調査報告書』保内町教育委員会 1998

- 長津宗重「鬼付女西遺跡B地区の調査」『宮崎県文化財調査報告書』第32集宮崎県教育委員会1989
- 伊藤強『バーガ森北斜面遺跡』伊野町教育委員会1999
- 伊藤強『バーガ森北斜面遺跡Ⅱ』伊野町教育委員会 2001
- 出原恵三・池澤俊幸・久家隆芳『北高田遺跡』(財)高知県埋蔵文化財センター 2000
- 坂本憲昭『本村遺跡』野市町教育委員会1993
- 山崎正明「2. 出土遺物 (c)小結」『具同中山遺跡Ⅱ-1中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査概報 Ⅲ』(財)高知県埋蔵文化財センター 1996
- 松田直則「第5章 まとめ 2. 具同中山遺跡出土の弥生中期の土器について」『具同中山遺跡群Ⅱ-1』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2000
- 松田直則・浜田恵子・池澤俊幸・筒井三菜『具同中山遺跡群Ⅳ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2001
- 筒井三菜『具同中山遺跡群Ⅲ-1』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2000
- 松村信博「弥生時代中期の土器と集落 高知県」『弥生時代中期の土器と集落』古代学協会四国支部第八回大会資料1994
- 『田村遺跡群』高知県教育委員会1986
- 出原恵三『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査(山側進入灯設置区域)報告書』-田村遺跡群・田中地区- 高知県教育委員会1986
- 出原恵三「南四国における弥生中期土器の展開-編年と地域間交流-」『遺跡』第31号遺跡発行会1988
- 浜田恵子「第Ⅳ章 考察 第2節 具同中山遺跡群Ⅳ出土の弥生時代から古墳時代初頭の土器」『具同中山遺跡群Ⅳ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2001
- 久家隆芳「南四国西半部の弥生土器-中期から後期前葉を中心に-」『四国とその周辺の考古学』犬飼徹夫先生古稀記念論集刊行会2002
- 坂本憲昭「高知県中央部<田村遺跡群>の弥生中期中葉~中期末の土器」『弥生中期土器の併行関係』第53回埋蔵文化財研究集会発表要旨集2004
- 秋山浩三・河村恵理「第7章 調査成果の検討と位置づけ 第7節“土佐産”弥生後期土器の近畿初見例をめぐる検討」『瓜生堂遺跡Ⅰ』財団法人 大阪府文化財センター2004

壺形土器

南四国型甕

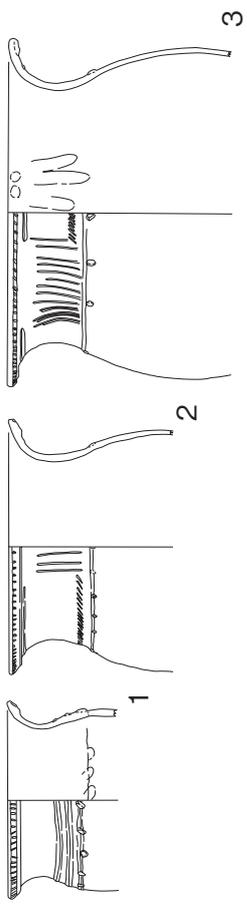


図版出典一覧

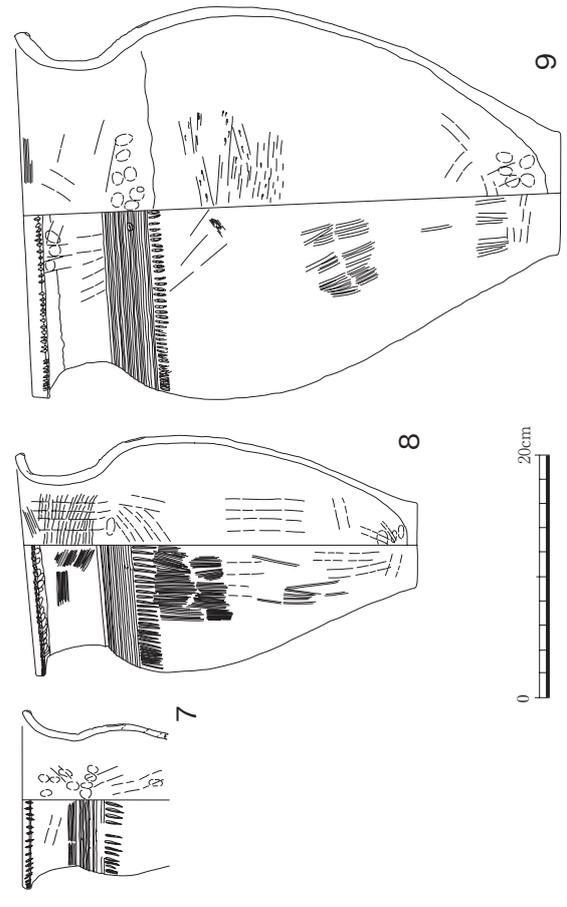
1.F3-21-11 2.F3-10-18 3.F3-10-19

4.F1-31-2 5.F1-28-5 6.F3-9-6

7.II-247 8.II-51-5 9.II-17-5



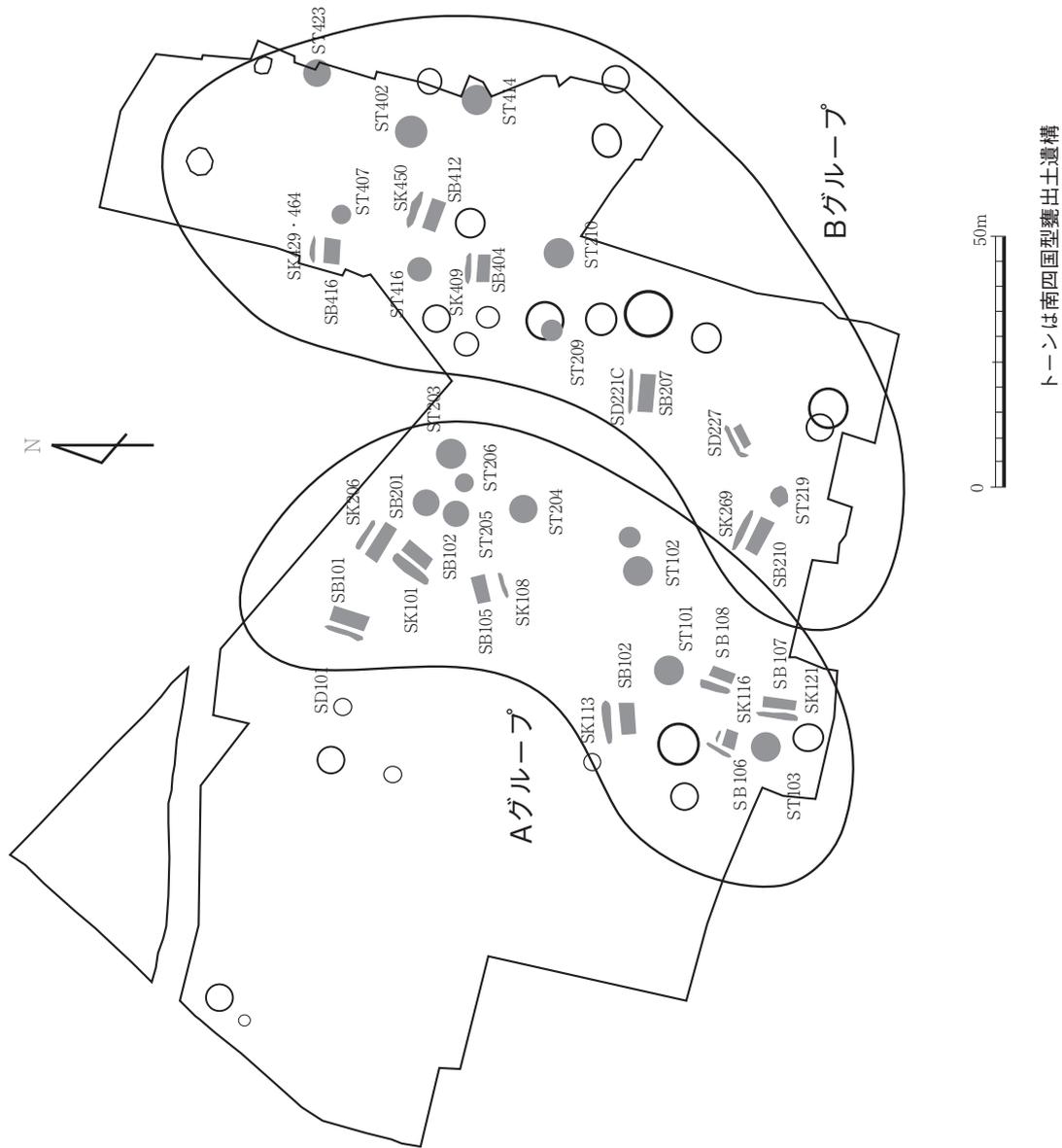
III期



IV期



VII-1図 南四国型甕変遷図



Ⅶ-2図 I・N区集落跡模式図

遺構 番号	図版 番号	遺物 番号	法量(cm)			口縁部		特徴	上胴部 文様	備考
			口径	器高	底径	粘土帯貼付	刻目の有無			
I1ST101	I1-3	5	16.2			有	無	指頭圧痕、明瞭。口唇部、ヨコナデ。 凹線文。 — 指頭圧痕、明瞭。	e b 無 無	被熱変色。
		7	17.8			有	無			
		8	17.0			有	無			
		9	16.3			有	無			
I1ST102	I1-4	4	17.6			有	有	ヨコナデ。 指頭圧痕。	不明 c	
		7	15.6			有	有			
I1ST103	I1-5	3	19.6			有	有	指頭圧痕。 指頭圧痕。口唇部、ヨコナデ。 口唇部、ヨコナデ。	a+ 無 b+e	煤付着。 煤付着。
		4	17.0			有	無			
		5	25.0			有	有			
I1SB102	I1-9	2				不明	不明	不明。	b+e	
I1SB106	I1-15	1	18.0			有	無	指頭圧痕。口唇部、ヨコナデ。	無	煤付着。
I1SK101	I1-12	3	16.4			有	有	指頭圧痕後、ナデ	不明	
I1SK103	I1-13	1	16.8			無	無	— ナデにより貼付。口唇部、尖らせる。	無 無	
		2-①	12.7			有	有			
I1SK108	I1-23	1	15.3			有	有	ヨコナデ。	不明	煤付着。
I1SK112	I1-24	3	12.1			有	無	指頭圧痕。口唇部、面取り。	不明 b+e	
		7	13.9			無	有			
I1SK114	I1-25	2	15.8			無	有	—	f+a	煤付着。
I1SK116	I1-18	1	15.2			有	無	指頭圧痕。凹線文？ 圧痕、不明瞭。 —	無 f+ f	
		3	16.3			有	有			
		4	14.7			有？	有			
I1SK117	I1-26	2	28.9			無	有	口唇部、ヨコナデ。	不明	
I1SK121	I1-17	5	28.6	42.5	9.8	有	有	ヨコナデ。 口唇部、面取り 指頭圧痕。	b+e b+ 無？	煤付着。 煮沸に使用。
		6	17.4			有	有			
I1SD101	I1-8	5	16.8			無	無	— 口縁部、尖らせる。	無 b	
		6	23.6			無	有			
I1SD105	I1-27	5	18.5			有	有	指頭圧痕。 指頭圧痕。口唇部、2条の凹線文 — 口唇部、ヨコナデ。 口唇部、ヨコナデ。 口唇部、ヨコナデ。	無 不明 b+e b b+e 不明	被熱変色。 被熱変色。 煤付着。
		6	22.7			有	無			
		8	15.4			有	有			
		9	19.7			無	有			
		10	21.4			無	有			
I2ST203	I2-4	1	21.4			有	無	突帯状に貼付。 — — — —	不明 不明 b+ 不明 不明	煤付着。 煮沸に使用。
		2	19.0			無	有			
		3	16.9			無	有			
		6	21.0			無	有			
		7	26.0			無	有			
		2	24.8			有	無			
I2ST204	I2-6	1	24.8			有	無	指頭圧痕。口唇部、凹線状。 指頭圧痕。 全面、格子目文。	不明 不明 不明	
		3	23.8			無	無			
I2ST205	I2-8	4	20.7			有	有	指頭圧痕、明瞭。ヨコナデ。 — 指頭圧痕。ヨコナデ。	b+e 無 e	煤付着。
		6	13.4			無	無			
I2ST206	I2-10	2	15.3			無	無	口唇部を尖らせる 指頭圧痕、ほとんどなし。	無 b+e	煤付着。
		3	13.0			有	有			
I2ST209	I2-14	2	26.0			無	有	ヨコナデ。 ヨコナデ。 — —	不明 f 無 不明	煮沸に使用。
		3	25.4			無	無			
		4	20.3			無	無			
		5	20.2			無	有			
I2ST210	I2-16	7	16.8			有	無	指頭圧痕。粘土帯、ヨコナデ。 口唇部、ヨコナデ。 指頭圧痕。 指頭圧痕。粘土帯、ヨコナデ。 口唇部、ヨコナデ。 口唇部、ヨコナデ。 指頭圧痕。口唇部、ヨコナデ。 — 粘土帯、ナデ。口唇部、ヨコナデ。 — 指頭圧痕、僅かに残る。	b+f 無 無 無 無 無 e 無	煮沸に使用。 煮沸に使用。 煮沸に使用。 煮沸に使用。 煮沸に使用。
		8	19.0			有	有			
	13	17.0	40.0	8.0	有	無				
	14	14.8	27.2	5.0	無	無				
	18	17.0			無	無				
	20	17.4			無	無				
	21	18.7			有	無				
	24	11.6			無	無				
2ST219	I2-27	10	16.0			無	有	— 口唇部、ヨコナデ。尖らせる。	不明 b+	煮沸に使用。
		11	26.6			無	有			
I2SB201	I2-28	2	17.4			有	無	指頭圧痕、僅かに残る。粘土帯、ナデ。 口唇部、ヨコナデ。 口唇部、凹面状。 口唇部、ヨコナデ。	不明 g+b+e b+f b+e	煤付着。 煮沸に使用。
		5	14.4			有	無			
		10	20.2			無？	有			
I2SK206	I2-29	11	18.2			無	有	指頭圧痕、明瞭。口唇部、ヨコナデ。 粘土帯、ヨコナデ。口唇部、ヨコナデ。	無 不明	
		17	16.6	28.0	6.8	有	有			
		18	16.5			有	有			

上胴部文様凡例

a ヘラ描沈線文 c 櫛描波状文 e 刻目文 g ドーナツ状浮文 i 楕円形浮文
b 櫛描直線文 d 櫛状文 f 刺突文 h 円形浮文 j 突帯

表Ⅶ-1 I区出土南四国型甕(1)

Ⅶ 田村遺跡群出土の南四国型甕

遺構 番号	図版 番号	遺物 番号	法量(cm)			口縁部		特徴	上胴部 文様	備考
			口径	器高	底径	粘土帯貼付	刻目の有無			
I2SK269	I2-34	4	19.8	22.3	5.5	有	無	指頭圧痕、明瞭。ヨコナデ。 口唇部、ヨコナデ。尖らせる。 口唇部、ヨコナデ。 粘土帯、ヨコナデ。	b	煮沸に使用。 煤付着。 煮沸に使用。
		5	18.6			無	無		無	
		6	13.5			無	無		無	
	I2-35	7	20.6	有	無	指頭圧痕、明瞭。 — 指頭圧痕、明瞭。 口唇部、凹面状。	f			
		8	19.9	有	無		無			
		9	20.5	無	有		b+			
I2SK269	I2-35	10	20.6	29.3	6.2	有	無	— 指頭圧痕、明瞭。 口唇部、凹面状。	無	
		12	17.0			無	無		無	
						無	無		無	
						無	無		無	
I2SD227	I2-42	1	30.0			無	無	貼付はないが、指頭圧痕はある。	e+b	
I2SK203	I2-43	4	21.2			無	無	口唇部、ヨコナデ。 粘土帯、ナデ。	不明	
		5	19.5	有	有	不明				
I2SK209	I2-45	1	26.0			無	無	—	無	
I2SK239	I2-47	3	14.8			有	無	粘土帯、ナデ。	無	
I2SK245	I2-47	4	17.2			有	有	指頭圧痕。 指頭圧痕、僅かに残る。 —	無	煤付着。 煮沸に使用。
		5	18.6	有	無	無				
		9	13.2	無	無	無				
I2SK285	I2-51	2	17.0	31.2	6.7	有	無	指頭圧痕。ヨコナデ。 指頭圧痕、明瞭。ヨコナデ。 指頭圧痕。ヨコナデ。 指頭圧痕、明瞭。ヨコナデ。 指頭圧痕。ヨコナデ。	無	
		3	19.6			有	有		b+e	
		5	17.4			有	無		無	
		8	20.0			有	無		不明	
		9	24.8			有	無		無	
I2SK285	I2-52	13	18.8			有	無	指頭圧痕、明瞭。 圧痕は2段に施す。ヨコナデ。 — 口唇部、ヨコナデ。 口唇部、ヨコナデ。	無	煮沸に使用。 煤付着。
		14	27.7	有	有	b+e+e				
		15	14.4	無	無	無				
		16	16.0	無	無	不明				
I2SK286	I2-53	2	16.4			有	有	指頭圧痕。	不明	
I2SK293	I2-53	4	20.4			有	有	指頭圧痕、不明瞭。	不明	
I2SK2309	I2-55	5	17.6			無	無	口唇部、ヨコナデ。 指頭圧痕。ヨコナデ。 指頭圧痕。ヨコナデ。 指頭圧痕。	無	
		6	14.1	有	無	無				
		7	14.2	有	無	b				
		8	15.0	有	無	b				
I2SD226	I2-58	2	16.4			有	無	指頭圧痕、僅かに残る。 粘土帯、ヨコナデ。	無	煮沸に使用。
		3	20.0	有	無	無				
	I2-59	5	18.6	有	無	指頭圧痕、明瞭。口唇部、ヨコナデ。 指頭圧痕、明瞭。口唇部、ヨコナデ。 指頭圧痕。 指頭圧痕、明瞭。ヨコナデ。 指頭圧痕、なし。粘土帯、ヨコナデ。 ヨコナデ。	無	無		
		10	17.2	有	無		無			
		11	25.0	有	無		無			
		13	14.8	有	無		無			
		14	17.4	有	無		無			
I4ST402	I4-4	1	20.6			無	無	口唇部、ヨコナデ。 口唇部、ヨコナデ。	不明	煮沸に使用。 煮沸に使用。
		2	13.8	無	無	不明				
I4ST407	I4-9	2	13.2			不明	無	—	無	被熱変色。
I4ST423	I4-11	2	17.4			無	有	—	不明	
I4ST414	I4-12	3	10.5			無	無	口唇部、丸くおさめる。	無	煮沸に使用。
I4SK409	I4-20	11	16.3	16.2	5.2	有	無	指頭圧痕。口唇部、ヨコナデ。 口唇部をつまみあげる。 — ナデ。丸くおさめる。	無	煮沸に使用。
		12	13.8			有	無		無	
		13	13.1			有?	不明		b	
		14	14.4			有	無		無	
I4SK450	I4-23	6	16.5	27.0	7.0	無	有	口唇部、尖らせる。 口唇部、ヨコナデ。 指頭圧痕。口唇部、ヨコナデ。 —	b+e	煮沸に使用? 煮沸に使用? 煮沸に使用?
		7	15.9			無	有		不明	
		8	19.1			無	有		無	
		10	16.4			無	無		無	
I4SK429	I4-24	1	27.4			有?	無	口唇部、丸くおさめる。	無	
I4SK417	I4-26	3	20.0			無	無	—	無	煮沸に使用?
I4SK428	I4-29	5	17.7	24.5	6.0	無	無	口唇部、ヨコナデ。 指頭圧痕、明瞭。口唇部、ヨコナデ。 口唇部、丸くおさめる。	f	煮沸に使用。 煮沸に使用。 煮沸に使用。
		6	19.2			有	無		無	
		8	18.0			無	無		a+f	
I4SK443	I4-30	1	16.1	28.8	5.4	有	無	指頭圧痕。口唇部、ヨコナデ。 — 指頭圧痕。ナデ。口唇部、ヨコナデ。 口唇部、丸くおさめる。	無	煮沸に使用。 煮沸に使用。 不明 煮沸に使用?
		2	12.4			無	無		無	
		3	25.2			有	無		不明	
	I4-31	9	21.0			無	有	無		
		10	12.8			無	無	無		
I4SK447	I4-32	2	13.0			無	無	口唇部、丸くおさめる。つまみあげる。	無	煮沸に使用。
I4SK452	I4-33	3	17.0	31.3	6.5	有	無	指頭圧痕、少し有り。口唇部、ヨコナデ	無	煮沸に使用。
I4SD405	I4-35	6	23.8			無	無	—	無	煮沸に使用?
I4TR8SK1	I4-53	3	19.7			無	有	口唇部、ヨコナデ。	不明	
I4TR8SK3	I4-56	1	17.0			無	無	口唇部、ヨコナデ。	不明	

上胴部文様凡例

a ヘラ描沈線文 c 櫛描波状文 e 刻目文 g ドーナツ状浮文 i 楕円形浮文
b 櫛描直線文 d 簾状文 f 刺突文 h 円形浮文 j 突帯

表Ⅶ-2 I区出土南四国型甕(2)

VIII 弥生時代の石器・石製品

今回の発掘調査では弥生時代前期から後期までの遺構の調査が行われ、それに伴う遺物が多量に出土したことが成果としてあげられる。そのうち石器も各時期の遺構から出土し、大まかではあるが田村遺跡群内での弥生時代を通した石器の編年が可能となった。また各時期の石器組成についても、ある程度復元することができた。この章では石器・石製品の器種ごとの分類・編年を行い、最後に田村遺跡群における各期の石器組成についてみていくこととする。

石器については器種ごとに分担して執筆を行った。1・2、4～12、27・28を小野、3・15～25を前田、13・14を小島、26を畠中が担当した。また使用した時期区分は『田村遺跡群Ⅱ』の報告書に準じ、前期をⅠ、中期をⅡ～Ⅳ、後期をⅤ・Ⅵ期とした。更にⅠ期を1～5、Ⅱ～Ⅳ期を各々1・2、Ⅴ期を1～5、Ⅵ期を1・2の小期に細分している。

石器の分類に際しては、時期の明確な遺構(住居跡、土坑など)出土のものを選別した。Ⅰの石庖丁については、前回調査の資料も補足として一部使用している⁽¹⁾。また石庖丁・石鎌については平面形模式図を掲載した(VIII-1図)。各器種の文末には、一覧表を添付している。

註

1) 田村遺跡群の前回調査出土石庖丁(VIII-2図1・19)については、出原恵三氏の「南四国の石器－弥生時代の磨製石器を中心として」『古代吉備』第21集、1999での時期を参考にした。

1. 石庖丁(VIII-2図1～36)

製作方法からⅠ～Ⅲ群に大別する。

Ⅰ群：打製。

Ⅱ群：局部磨製。主に刃部を中心に研磨を施す。

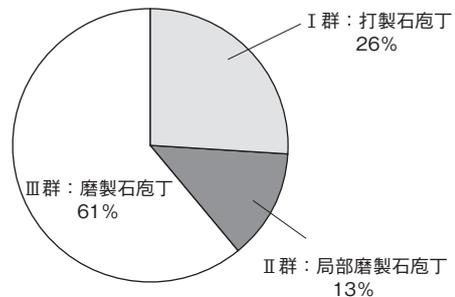
Ⅲ群：磨製。

そのうちⅡ群とⅢ群は、磨製石庖丁の調整の粗雑化が進行する中(Ⅳ)期～後期になると、境界の曖昧なものが認められる。そのため部分的に剥離面が残るものの、全体に研磨の意図がみられるものについては、Ⅲ群に分類した。Ⅰ～Ⅲ群の石庖丁全体に占める割合は、Ⅰ群が約3割、Ⅱ群が約1割、Ⅲ群が約6割となる⁽²⁾。出土点数はⅢ群の磨製石庖丁が全体の半数を超える(グラフVIII-1参照)。

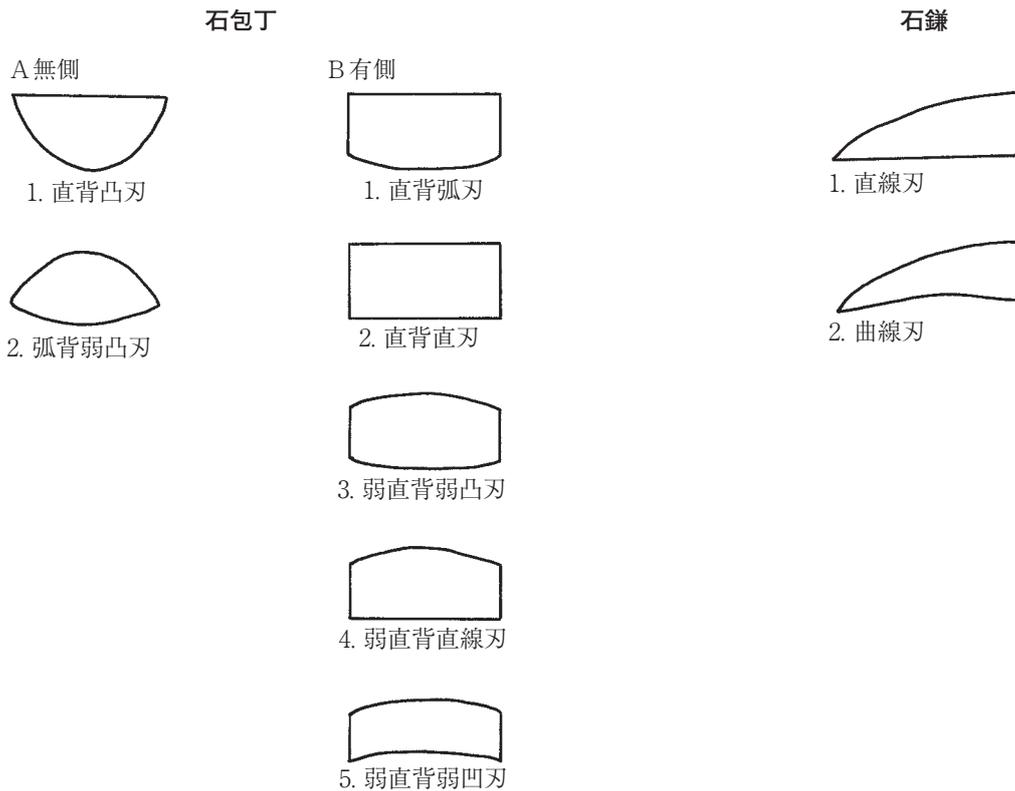
次に形態による分類を行う。平面形からA類：無側、B類：有側に分け、B類は抉り部の有無によってB1：無抉、B2：有抉とした。またさらにA類は2種、B類は5種に細別した⁽³⁾。詳しくはVIII-1図の模式図を参照されたい。

A類：無側

1：直背凸刃



グラフVIII-1 石庖丁分類割合グラフ



Ⅷ-1図 石庖丁・石鎌平面形模式図

- 2：弧背弱凸刃
 B1類：有側で無抉
 B2類：有側で有抉
 1：直背弧刃
 2：直背直刃
 3：弱直背弱凸刃
 4：弱直背直線刃
 5：弱直背凹刃、または弱直背弱凹刃。

以下、これらの分類を使用する。

I期の石庖丁はⅢA-1類の、いわゆる外湾刃半月形のもの、ⅢB1-5類が認められる(Ⅷ-2図19は前回調査資料)。刃部が残るものはいずれも両刃で、刃角は46~48°、63~70°、82~98°の範疇に収まる。器厚は比較的薄めである。紐孔は2孔が基本のようで、錐揉みによる穿孔を施す。前期遺構出土の石庖丁はⅢA-1類が7点、ⅢB1-5類は1点と非常に少なく、出土したものはいずれも折損品で、完形のものはいずれもみられない。ただし8点という出土点数が、前期の石庖丁の実態とは言い難い。同時期の小型石斧に石庖丁からの転用品とみられるものが存在することから(Ⅷ-6図36)、他の石器に使用可能な大きさの石庖丁は再利用がなされた可能性も考えるべきだろう。前期の石庖丁に利用された石材は、田村遺跡群周辺で獲得可能な頁岩または粘板岩に加えて、他地域からの搬入品とみ

られる堇青石ホルンフェルスも認められる(Ⅷ-2図16)。堇青石ホルンフェルスは北部九州や、四国島内では四万十帯の分布域である愛媛県南部の宇和島～高知県西部の足摺岬地域でみられる石材で⁽⁴⁾、これらの地域から搬入された可能性が考えられる。

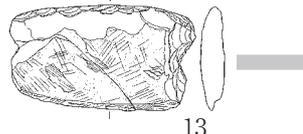
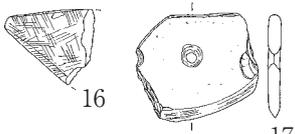
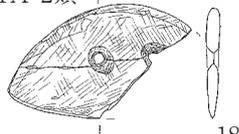
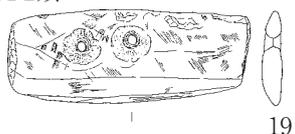
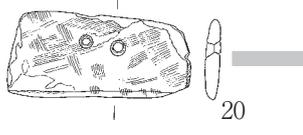
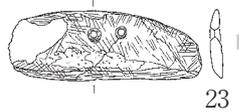
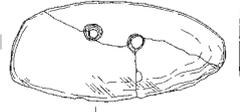
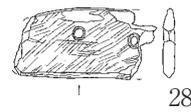
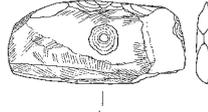
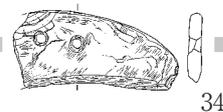
ⅢA-1類は前期に限定され、後続の時期には認められない。

Ⅱ・Ⅲ期については当該期の遺構が僅少で、特にⅡ期は明確な遺構出土石庖丁が皆無のため様相は不明瞭である。Ⅲ期にはⅢA-2類、ⅢB1-3～5類が認められる。ⅢA-2類の出土は1点にとどまる。刃部は両刃に近い片刃で、刃角は75～82°を測る。ⅢB1-3・5類は刃部が片刃、ⅢB1-4類は両刃に近い片刃である。Ⅲ期には片刃が一般的となるが、両刃風の断面形を持つものもわずかながら認められる。これらは前期に特徴的な両刃の名残か、研ぎ直し等の後天的な要因によって生じたものかは不明である。刃角は全体的に78～89°の範疇に収まり、種ごとの偏りはみられなかった。紐孔は2孔が基本で、敲打と錐揉みによる穿孔が施される。使用石材はいずれも頁岩、粘板岩など遺跡周辺で獲得できるものである。

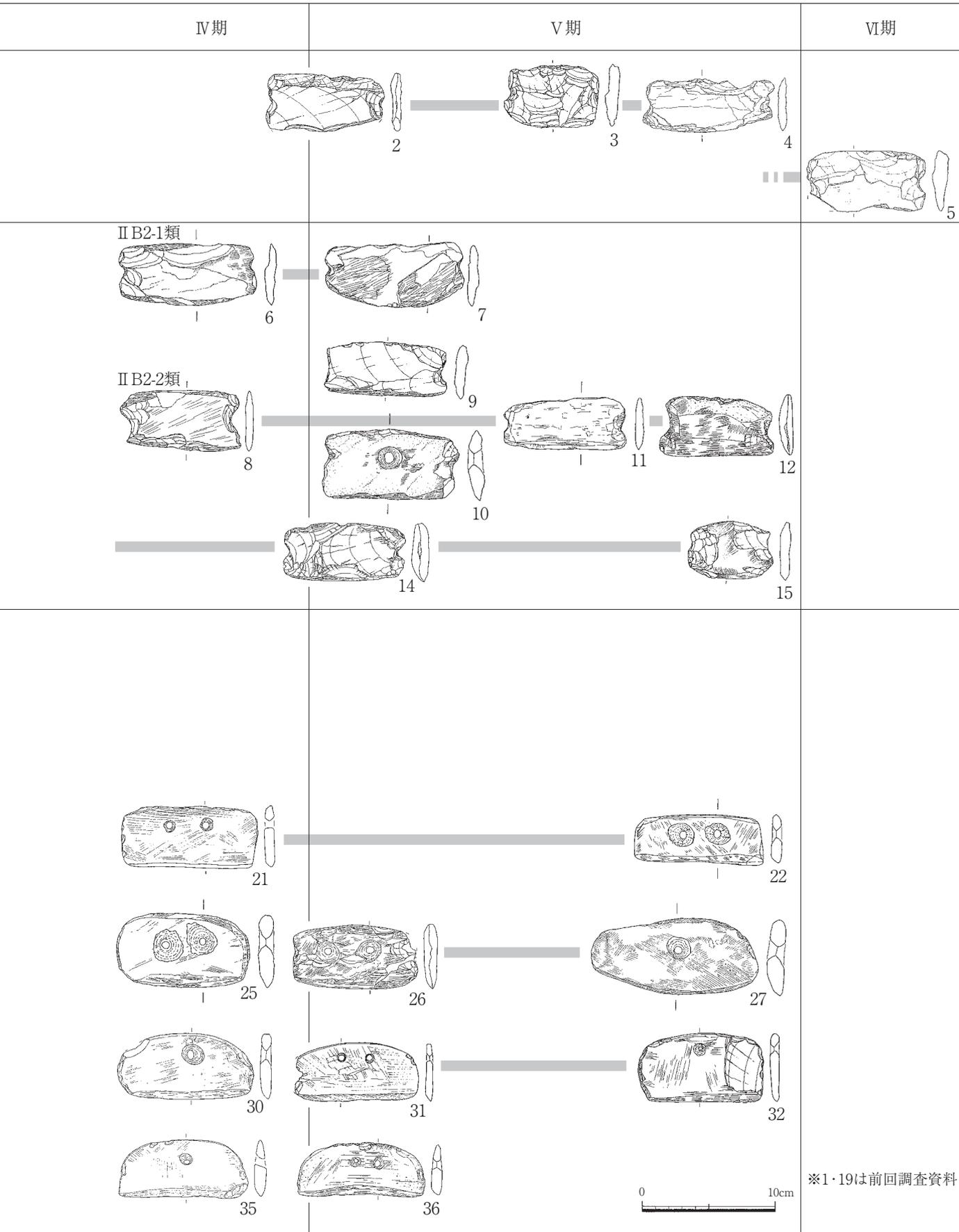
ⅢA-2類はⅢ期で1点確認できるのみのため、出現・消滅時期は不明瞭である。

Ⅳ期の段階になると遺構数の増加とともに、石庖丁の出土数も増加する。それにより当該期によろやくⅢB類の全ての種類が出揃う。前回調査ではⅠ期から少量ながら認められたⅠ群の打製石庖丁は、今回調査では当該期の遺構から初めて出土する。器厚はさまざまで、刃部の稜付近に最大径のあるものが一定量みられる。刃部は両刃風を呈し、刃角は82～94°前後に収まるものが多い。サヌカイト製のものがわずかだがみられる。Ⅱ群も遺構出土のものはⅣ期からみられる。刃部を研磨し、背部も同様に研磨するか、使用によるとみられる摩滅が認められる。断面形は、片刃とわずかに両刃風のもののみみられる(Ⅷ-2図11・15)。刃角は100°を超える鈍いものがある。Ⅲ群は刃部の稜線付近に最大厚のあるものが多い。片刃で、刃角は100°を超えるものが出現する。紐孔は2孔に加え1孔のものが認められ、敲打と錐揉みによる穿孔が施される。またⅣ期以降、石庖丁は「粗雑化・簡素化」が進行するのが特徴である。それは成形・調整・廃棄全般に認められる。磨製石庖丁は、不定形な平面形を呈するものがみられ、刃部・背部などの必要な部分以外は研磨されずに部分的に剥離面が残るものがある。そういった流れの中で、局部磨製石庖丁が出現するものと考えられる。また石庖丁から他石器への転用もほとんどみられず、完形品を廃棄する例が多くなる。穿孔に失敗して廃棄されたものも前時期よりも多くみられるが、これは時期的な特徴なのか、生産地で通常みられる程度の失敗例なのかは不明である。こういった傾向はⅤ期でより顕著となる。

Ⅴ期はⅣ期にみられた石庖丁の形態が全て残る。Ⅲ群の磨製石庖丁が減少するのは逆に、Ⅱ群の局部磨製が増加する。またⅠ群の増加、小型化もⅤ期の特徴である。これは前時期からみられる石庖丁の粗雑化の進行と関係があると考えられる。刃部の断面形、刃角などはⅣ期からほとんど変化しない。ただしⅢ群も減少するものの、Ⅴ-3期までは認められる。類例として同時期の遺跡で、田村遺跡群より西に所在する、春野町東江曲遺跡の後期中葉の竪穴住居跡出土磨製石庖丁2点があげられる。これらは今回の分類ではⅢB1-3・ⅢB1-5類に当たるとみられ、磨製石庖丁は有側のもの遅くまで残ることが窺える資料である。東江曲遺跡出土の2点の磨製石庖丁は、いずれも紐孔は1孔である。その後、東江曲遺跡より約1.5km離れた春野町西分増井遺跡では、弥生後期中葉か

I 期	III 期	IV 期
I B2類 		
		II B2-3類 
III A-1類 	III A-2類 	
III B1-2類 		
	III B1-3類 	
	III B1-4類 	
III B1-5類 		

Ⅷ-2図 石庖丁



ら古墳時代初頭にかけてⅠ群とした打製石庖丁が使用される。田村遺跡群周辺の遺跡でも同様の傾向がみられることから、高知県中央部ではⅤ-3期前後に磨製石庖丁が消滅するものとみられる。

使用石材はⅣ～Ⅴ期で変化はほとんどみられない。遺跡周辺で獲得できる頁岩、粘板岩、砂岩、チャート(Ⅰ群のみ)、緑色片岩などの他、Ⅰ群はサヌカイト、紅簾片岩、結晶片岩などの他地域の石材も少量であるが認められる。搬入石材を使用した石庖丁は出現時期に若干の時期差があり、サヌカイト製はⅣ期から、紅簾片岩製はⅤ期から認められる。結晶片岩製の石庖丁については、良好な遺構出土のものが乏しく、Ⅳ～Ⅴ期の大まかな時期でとらえることしかできない。これらのうち紅簾片岩は未製品や剥片などが一切出土しておらず、出土点数も僅少なことから、製品として持ち込まれたものと考えられる。

Ⅵ期の遺構は住居跡1軒を確認しており、ⅠB2類の頁岩製石庖丁1点(Ⅷ-2図5)が出土している。1面には礫皮面が残り、形状、特徴ともⅤ期から続くものである。Ⅰ群は集落の開始期から終末期のⅥ期まで一貫してみられる。

また石庖丁の中には使用痕光沢面の観察できるものもみられる。これらの使用痕光沢面はイネ科植物を対象にした際に形成されるA・Bタイプが確認できている。観察できる使用痕光沢面については、別項を設けそこで述べている。

以下、石庖丁にみる各時期の特徴である。

前期

Ⅰ-1期：大陸系磨製石器群の一つとしての石庖丁の登場、搬入製品のみ。

Ⅰ-2期：磨製石庖丁(ⅢA-1類)の製作開始か。

Ⅰ-3期：磨製石庖丁(ⅢA-1類)の盛行。ⅢB類の出現。石庖丁の製作と搬入品の存在。石庖丁から他の石器への転用。

Ⅰ-4～5期：遺構数の減少に伴い、石庖丁の出土量減少。

中期

Ⅱ期：不明。Ⅰ-4～5期からⅢ期への過渡期か？

Ⅲ期：ⅢB類の器形の増加。

Ⅳ期：石庖丁の増加傾向。Ⅱ群の出現期か。Ⅱ・Ⅲ群は後期へ続く器形が出揃う。紐孔は1孔のものが増加。

後期

Ⅴ-1～2期：Ⅳ期から石庖丁激増⇒粗雑化、小型化。Ⅰ群の盛行とⅢ群の減少。Ⅴ-2期にはⅡ群が増加。紐孔は1孔のものが増加。

Ⅴ-3期：小型化の傾向。磨製石庖丁の消滅期。

Ⅴ-4～5期：遺構出土のものがいないため、不明。

Ⅵ-1～2期：遺構出土のものは1点のため、詳細不明。打製石庖丁が主体か？

註

2)割合の算定に際しては、今回の報告書に図示された、時期不明を含む全ての石庖丁を全体数としている。

3) 石庖丁の分類に関しては、斎野裕彦氏の分類を参考にした。「農具－石庖丁・大型直縁刃石器・石鎌」『考古資料大観第9号－弥生・古墳時代 石器・石製品・骨角器』小学館 2002

4) (株)パリオ・サーヴェイの辻泰男氏のご教示による。

No.	器種	分類	時期	調査区	遺構名	分冊	図版番号	遺物番号	備考
1	打製石庖丁	IB2	前期	Loc.10	ST4	3	229	738	前回調査
2	打製石庖丁	IB2	IV-2～V-1・2	B4	ST408	1	B4-10	10	
3	打製石庖丁	IB2	V-2～3	K1	ST103	6	K1-7	5	
4	打製石庖丁	IB2	V-3	J4	SK422	5	J4-32	15	
5	打製石庖丁	IB2	VI	D1	ST101	4	D1-3	16	
6	局部磨製石庖丁	II B2-1	IV-2	K1	SD114	6	K1-105	9	
7	局部磨製石庖丁	II B2-1	V-1	L2	ST201	6	L2-4	36	
8	局部磨製石庖丁	II B2-2	IV-2	L2	ST211	6	L2-15	21	
9	局部磨製石庖丁	II B2-2	V-1	K1	SK122	6	K1-66	12	
10	局部磨製石庖丁	II B2-2	V-1	L2	ST202	6	L2-5	9	
11	局部磨製石庖丁	II B2-2	V-2	K2	ST207	6	K2-9	19	
12	局部磨製石庖丁	II B2-2	V-3	F4	ST411	4	F4-23	22	
13	局部磨製石庖丁	II B2-3	IV	J5	SK501	5	J5-6	15	
14	局部磨製石庖丁	II B2-3	IV-2～V-1	F3	ST304	4	F3-11	6	
15	局部磨製石庖丁	II B2-3	V-3	K1	ST105	6	K1-12	8	
16	磨製石庖丁	III A-1	I-3	E5	SK529	3	E5-10	19	
17	磨製石庖丁	III A-1	I-3	C4	SK4034	2	C4-30	32	
18	磨製石庖丁	III A-2	III	Q2	ST207	1	Q2-10	13	
19	磨製石庖丁	III B1-2	前期	Loc.10	包含層	3	190	172	前回調査
20	磨製石庖丁	III B1-2	IV	E4	ST405	3	E4-8	17	
21	磨製石庖丁	III B1-2	IV-2	I4	SK409	5	I4-20	23	
22	磨製石庖丁	III B1-2	V-3	K2	ST209	6	K2-12	39	
23	磨製石庖丁	III B1-3	III	Q2	ST204	1	Q2-6	6	
24	磨製石庖丁	III B1-3	III～IV	F1	SD111	5	F1-30	31	
25	磨製石庖丁	III B1-3	IV-2	K1	SD114	6	K1-105	7	
26	磨製石庖丁	III B1-3	IV-2～V-1	I2	ST208	5	I2-12	12	
27	磨製石庖丁	III B1-3	V-3	F1	SK107	4	F1-15	15	
28	磨製石庖丁	III B1-4	III-1～2	D1	ST104	3	D1-6	6	
29	磨製石庖丁	III B1-4	III～IV	F1	ST103	4	F1-5	4	
30	磨製石庖丁	III B1-4	IV-2	I2	SK223	5	I2-33	11	
31	磨製石庖丁	III B1-4	IV-2～V-1	L2	ST227	6	L2-29	12	
32	磨製石庖丁	III B1-4	V-3	F4	ST411	4	F4-23	20	
33	磨製石庖丁	III B1-5	I-3～4	前期溝(C1)	SD105	7	前期溝2-24	331	
34	磨製石庖丁	III B1-5	III	B4	SK546	1	B4-18	10	
35	磨製石庖丁	III B1-5	IV-2	J3	ST311	5	J3-12	5	
36	磨製石庖丁	III B1-5	IV-2～V-1	I2	ST208	5	I2-12	11	

表Ⅷ-1 石庖丁観察表

2. 石鎌(Ⅷ-3図1～3)

石鎌は弥生時代前期にその他の大陸系磨製石器群とともに受容され、前期のI-2～3期に盛行する。中期まで残らず、非常に短い期間で消滅する器種である。今回調査では約26点出土した。

製作方法からI・II群に、さらに平面形からA・B類に細分した。(模式図はⅧ-1図を参照。)

I群：打製

II群：磨製

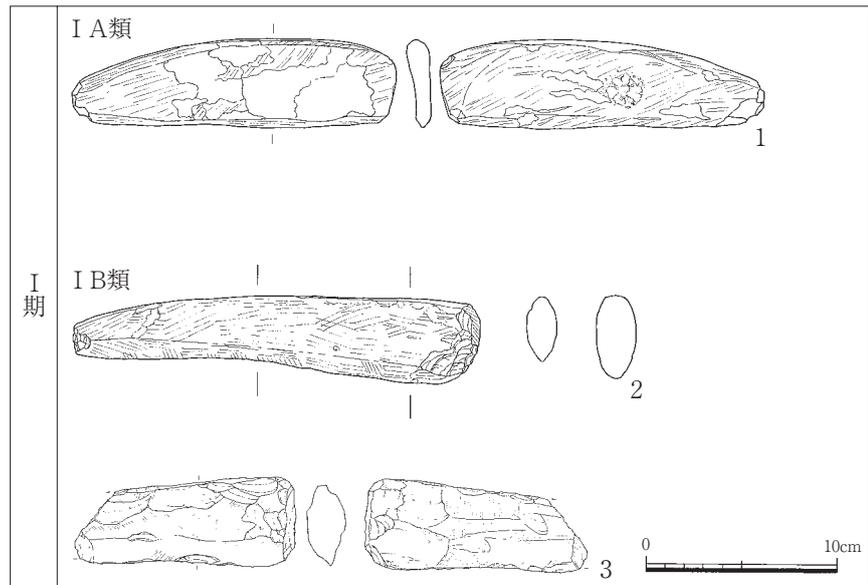
A類：直線刃

B類：曲線刃

今回調査では約26点の石鎌を確認したが、1点を除き、全てII群に該当する。また平面形はB類

が多いようである。

石鎌は完形で出土するものが極めて少なく、ほとんどは折損した刃部の一部が出土する。これらは接合関係を持たないのが特徴と言える。また器表面および断面に火熱によるとみられる赤変が認められるものが多い。石鎌から他製品への転用例もみられず、石鎌は廃棄に際して何らかの熱処理、あるいは



Ⅷ-3図 石鎌

は儀礼的に火に焼べるなどの行為と、意図的な破碎が行われた可能性が考えられる。

石材は頁岩、粘板岩の他、緑色片岩を用いたものがみられる。

石鎌の中には、使用痕光沢面の確認できるものもある。

No.	器種	分類	時期	調査区	遺構名	分冊	図版番号	遺物番号	備考
1	磨製石鎌	I	I-2	C4	SK4149	2	C4北-11	37	
2	磨製石鎌	II	I	C1	SK1002	2	C1-7	11	
3	磨製石鎌	II	I-3~4	前期溝2(C3)	SD105	7	前期溝2-24	330	

表Ⅷ-2 石鎌観察表

3. 大型直縁刃石器(Ⅷ-4図1~5)

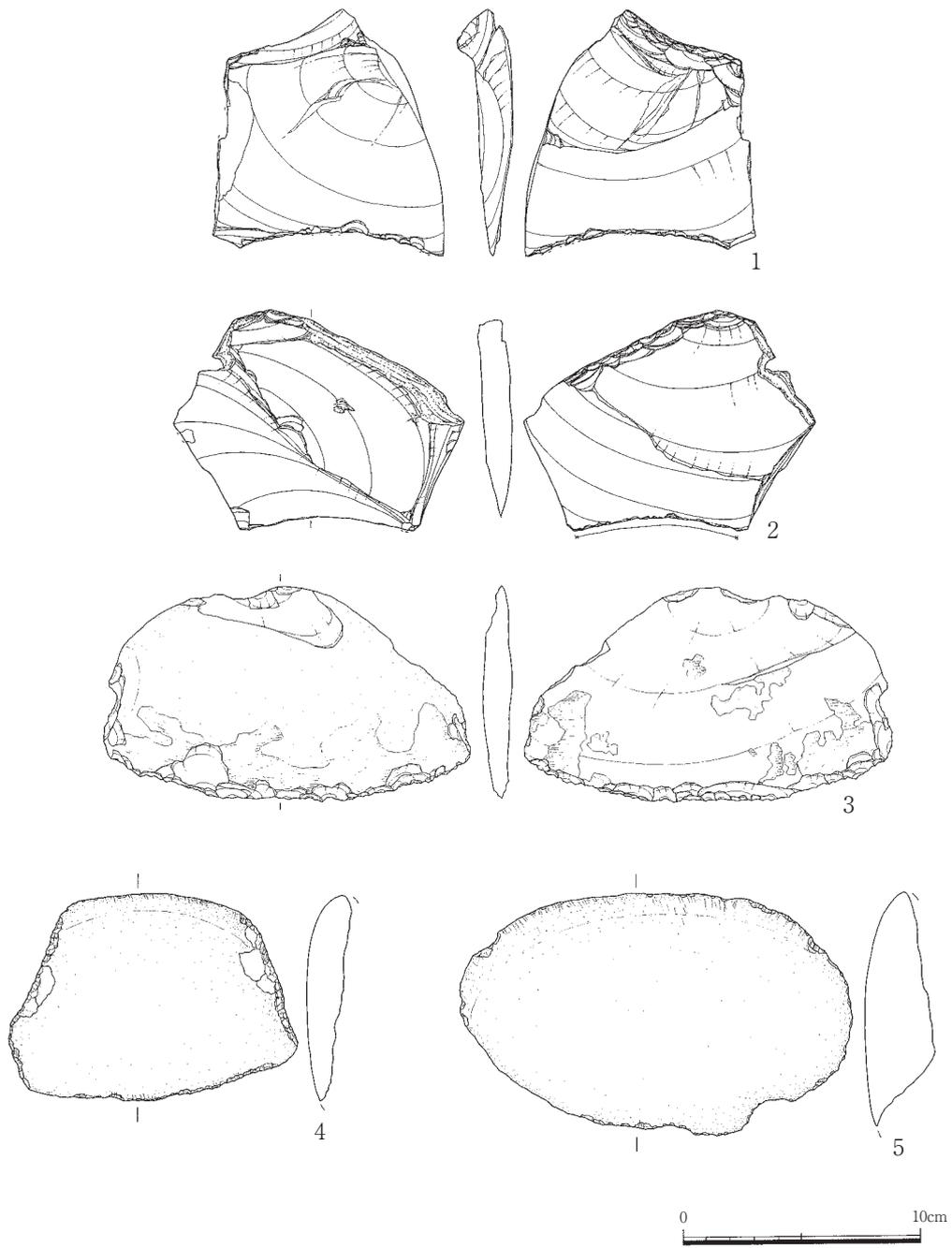
1、2はサヌカイト製の扁平な剥片を素材とし、一側縁を刃部とする。刃部はやや内湾気味である。3は礫皮を残す扁平な剥片を素材にする。刃部に二次調整加工を部分的に施す。僅かに刃部は外湾きみである。刃部周辺を研磨する。粘板岩製である。4、5は砂岩製で礫皮を残した剥片で調整加工をほとんど施さない。一側縁に摩滅痕らしきものが観察されるところから、刃部の可能性がある。時期は1、4は弥生前期I 2~3期の遺構からの出土である。

4. 太型蛤刃石斧(Ⅷ-5図1~17)

以下A~C類に大別し、B類は更に1~3種に細分を行った。

A類：縄文系。平面形は撥形、断面形は扁平楕円形を呈する。

B類：いわゆる太型蛤刃石斧。弥生時代を通じて、伐採斧の主体となるものである。平面形はわずかに基端部がすぼまる分銅形と、短冊形がみられる。基端部は円基と平基がある。B類は断面形



Ⅷ-4図 大型直縁刃石器

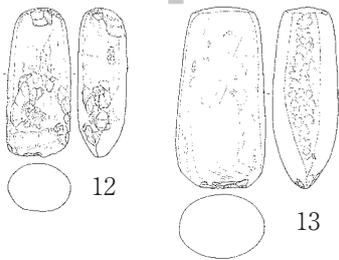
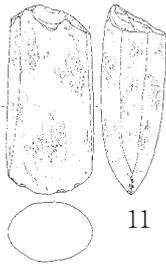
No.	器種	分類	時期	調査区	遺構名	全長(cm)	全幅	全厚	重量(g)	石質	分冊	図版番号	遺物番号	備考
1	大型直縁刃石器		I 2~3	E5	E5SD105	9.72	10.4	2.37	137.7	サヌカイト	8	前期溝2-9	104	
2	大型直縁刃石器		IV~V	E4	E4ST417	12.18	9.27	1.64	143.8	サヌカイト	3	E4-22	4	
3	大型直縁刃石器		I 2	C4	C4SK4024	9.1	15.4	1.3	233.1	粘板岩	2	C4-14	44	
4	大型直縁刃石器			C4	C4P4155	11.8	8.6	1.8	210.0	砂岩	2	C4-73	23	
5	大型直縁刃石器			C4	C4P4136	16.5	9.9	2.9	450.0	砂岩	2	C4-73	24	

表Ⅷ-3 大型直縁刃石器観察表

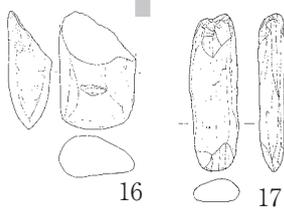
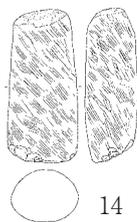
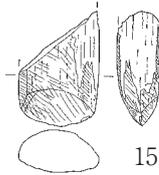


Ⅷ-5圖 大型蛤刃石斧

B3類



C類



の厚みにより1～3に細分する。

B1：断面形が扁平楕円形

B2：B1より厚みを増す楕円形

B3：断面形が円筒形に近いもの

C類：転石をそのまま利用したもののみられ、平面形・断面形は不定形である。小型品が多い。また大きさについては便宜的に、20cm以上を大型、10cm～20cm未満を中型、10cm未満を小型とする。

今回調査では、大型蛤刃石斧は前期中葉から～後期後半までの使用が確認できた。

大型蛤刃石斧の出現はI-3期で、A～B2類がみられる。そのうちA類は量的に少なく、I期の段階にわずかに散見されるのみである。主流はB類と考えられる。基端部は円基・平基があるが、圧倒的に円基が多い。またB1類も前期で消失するとみられる。ただしIV～V期にB1類の小～中型のものがわずかに出土することから(Ⅷ-5図4)、少量ながら後期まで残る可能性もある。石材は緑色片岩の他、御荷銚緑色岩、硅質安山岩(Ⅷ-4図3)などで、在地以外の石材の使用もみられる。

II期の明確な遺構・遺物は不明瞭だが、前回調査の出土例から見てIII期とほぼ同じ様相とみられる。III期はB2類に加え、新たにB3類が出現する。主体となるのはB2類で、B3類はわずかである。基端部は円基・平基ともみられる。石材は緑色片岩のほか、三波川帯で産出する御荷銚緑色岩が認められる。

IV期の段階に新たにC類が出現する。C類は転石をそのまま利用し、成形をあまり行わないもので、平面形・断面形とも不定形である。出土点数は少ない。B2・3類は集落の発展するIV～V期に大型蛤刃石斧の主体となって盛行する。当該期には断面形が円筒形状を呈するB3類が増加し、基部が厚くなる傾向が認められる。基端部は、円基・平基がみられる。石材は緑色片岩、御荷銚緑色岩などを使用する。

V期は前時期と変わらず、B2・3、C類がみられる。またB1類が1点出土している。B類は基端部が平基式のもの为主体を占めるようになる。全般的な傾向として、石斧の小型化と、C類の微増が

No	器種	分類	時期	調査区	遺構名	分冊	図版番号	遺物番号	備考
1	大型蛤刃石斧	A	I	C1	SK1034	2	C1-18	3	
2	大型蛤刃石斧	B1	I-3	E3	SK304	3	E3-3	7	
3	大型蛤刃石斧	B1	I-3～4	前期溝2(E5)	SD105	7	前期溝2-9	103	
4	大型蛤刃石斧	B1	IV～V	E4	SK420	3	E4-33	3	
5	大型蛤刃石斧	B2	I-3	E2	SK275	3	E2-19	41	
6	大型蛤刃石斧	B2	I-3～4	前期溝2(C5)	SD501	7	前期溝2-17	243	
7	大型蛤刃石斧	B2	I-5	D1	SD106	3	D1-56	17	
8	大型蛤刃石斧	B2	III	K2	ST210	6	K2-13	7	
9	大型蛤刃石斧	B2	IV-1～V-1	L2	ST221	6	L2-25	31	
10	大型蛤刃石斧	B2	V-3～5	L3	ST309	6	L3-11	1	
11	大型蛤刃石斧	B3	III-2	F3	ST303	4	F3-10	25	
12	大型蛤刃石斧	B3	IV	E7	SK754	3	E7-44	17	
13	大型蛤刃石斧	B3	IV-1～2	D1	ST119	3	D1-20	9	
14	大型蛤刃石斧	B3	V-3	D1	ST105	3	D1-8	32	
15	大型蛤刃石斧	C	IV-2	F2	SD204	4	F2-10	3	
16	大型蛤刃石斧	C	V-1	I2	ST202	5	I2-3	8	
17	大型蛤刃石斧	C	V-1	K1	SD109	6	K1-97	10	

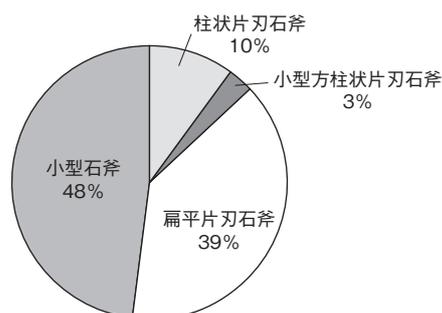
表Ⅷ-4 大型蛤刃石斧観察表

みられる。こういった傾向は、石庖丁に認められた粗雑化・小型化と同様に、この時期に特徴的にみられるものかも知れない。石材は緑色片岩が用いられる。緑色片岩は遺跡の東を流れる物部川で獲得することができる。特にC類は、転石をそのまま利用したものと考えられる。

今回調査で1000gを超える大型蛤刃石斧は3点出土しており、I-3期から認められる。ただし大型蛤刃石斧は欠損により廃棄されたものが多く、完形で遺存していれば1000gを超えるものは更に増えると考えられる。

5. 柱状片刃石斧(Ⅷ-6図1~3)

柱状片刃石斧は大陸系磨製石器群に含まれ、田村遺跡群ではI-2期には受容されているようである。ただし弥生時代を通して出土数は少なく、遺構出土でないものを含めても16点に留まる。I・IV~V期に認められるが、全体的に資料数の少ないII・III期には資料を欠く。遺物の



グラフⅧ-2 加工斧器種別割合グラフ

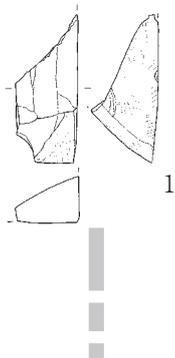
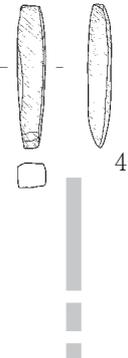
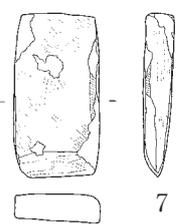
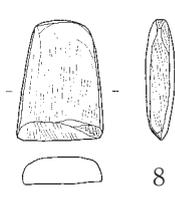
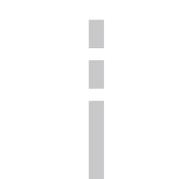
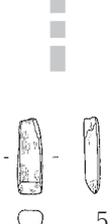
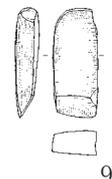
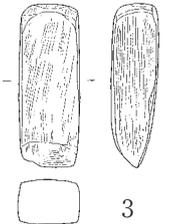
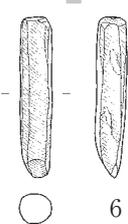
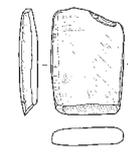
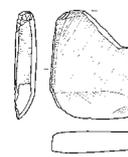
の多くは基端部または刃部が欠損しており、完形品は少ない。有袂式・無袂式のどちらもみられる。形態的にはI期のものには(Ⅷ-6図1)、刃部に鑄があり、造りがシャープである。ところがIV期になると刃部の鑄は消え、側面が曲線的になる。またシャープさに欠ける傾向が認められる。刃角もI期は72~74°と鋭利なのに対し、IV~V期のもの90°を超えた鈍いものになる。石材はI-2期には層灰岩、IV期には遺跡周辺で獲得可能な緑色片岩、粘板岩または蛇紋岩が利用される。層灰岩の産地は関門層群に限定されており、九州地方から製品で搬入されたものと考えられる。田村遺跡群で柱状片刃石斧が製作されるようになったのは、I-2期以降である。

6. 小型方柱状片刃石斧(Ⅷ-6図4~6)

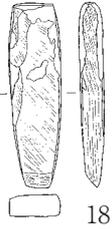
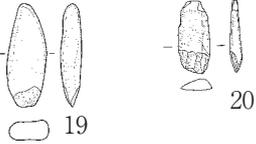
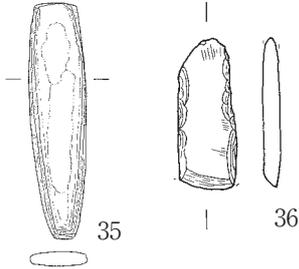
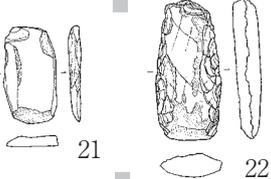
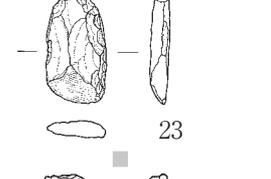
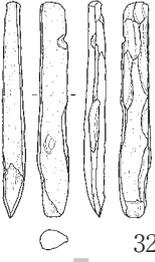
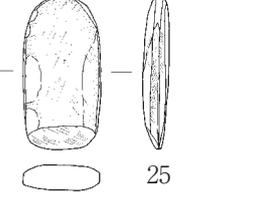
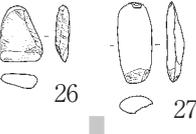
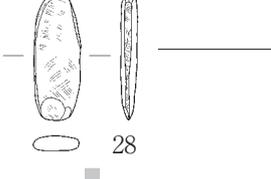
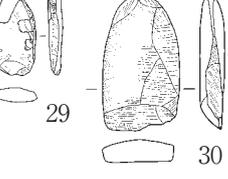
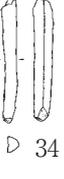
小型方柱状片刃石斧は非常に出土点数が少なく、数点を数えるのみである。ただし少量ながらもI-2~3期には登場しており、柱状片刃石斧、扁平片刃石斧と同時期にセットで受容されたものと考えられる。消長は柱状片刃石斧とほぼ同じで、II・III期には欠落し、IV~V期で認められる。また石材も同様で、I-2~3期の段階には層灰岩、IV期では緑色片岩のものがみられる。I期のものは石斧の基部中央が膨らむ器形で、断面はシャープな方形を呈する。刃部には弱い鑄を持つ。こういった特徴は後続の時期には退化し、V期の段階で断面は円形に近くなり、鑄もみられなくなる。

7. 扁平片刃石斧(Ⅷ-6図7~18)

I-3期から認められる。II期には欠落し、III期からV-3期まで残る。前二者の大陸系磨製石斧と比べ、出土点数は60点を超え非常に多くみられる器種である。出土した加工斧のうち扁平片刃石

	柱状片刃石斧	小型方柱状片刃石斧	扁平片刃石斧	
I 期	 <p>1</p>	 <p>4</p>	<p>A類</p>  <p>7</p>	<p>B類</p>  <p>8</p>
III 期	 <p>2</p>	 <p>5</p>	 <p>9</p>	 <p>10</p>
IV 期	 <p>3</p>	 <p>6</p>	 <p>11</p>  <p>14</p>	 <p>12</p>  <p>13</p>  <p>15</p>  <p>16</p>
V 期	 <p>17</p>			

Ⅷ-6图 加工斧

扁平片刃石斧 時期不明品	小型石斧	石斧転用品
<p>C類</p>  <p>18</p>	<p>I・2期</p> <p>A類</p>  <p>19 20</p>	 <p>35 36</p>
	<p>I・3期</p>  <p>21 22</p>	
	 <p>23 24</p>	
	<p>I・4 5期</p>  <p>31</p>  <p>32</p>	
	 <p>25</p>	
	 <p>26 27</p>	
	 <p>28</p>  <p>33</p>	
	 <p>29 30</p>  <p>34</p>	
		<p>S=1/3 (2・3・9・18・35はS=1/4)</p>

斧の占める割合は、約4割である。

平面形からA～C類に分けることができる。

A類：短冊形。基端部は円基・平基がある。

B類：分銅形、もしくは台形。基端部は円基・平基がある。

C類：逆台形に近く、基端部から基部中程にかけて膨らみ、刃部に向かってすぼまる。転用品の可能性が高い。

I期の段階で全てのタイプがみられる。当該期の扁平片刃は非常に丁寧な成形・調整が施される。刃部はいずれも直線状を呈するのが特徴である。C類は1点確認されるにとどまる(Ⅷ-6図18)。時期は不明であるが、前期環濠集落内の遺構出土であることから、I期の可能性が高い。磨製石剣からの転用品とみられる。また、刃部は作出されていないが、同様の平面形態のものがもう1点認められる(Ⅷ-5図35)。

石材は頁岩、蛇紋岩といった在地の石材の他、器面が白色に風化しているものもあり、層灰岩製の可能性が考えられる。扁平片刃石斧は柱状片刃、小型方柱状片刃と異なり、I期の段階から在地で製作が行われており、受け入れに際してのニーズが高かったものと考えられる。

Ⅲ～Ⅴ期にかけてはA・B類が使用される。ただしⅣ～Ⅴ期になると、断面形にシャープさがなくなり、器面の高所部のみしか研磨を行わないなど、成形・調整とも雑になる。またⅢ期以降、刃部は弱い弧状を呈する。

石材は頁岩、粘板岩、砂岩、蛇紋岩、緑色片岩など在地産のものが使用される。

Ⅷ-6図35・36はI期に比較的多くみられる、他石器から加工斧に転用されたもので、35は石剣からの扁平片刃石斧への転用の途中で廃棄された可能性が高い。刃部がないため石斧とは言い難いが、18と形状が非常に類似しているため取り上げた。

8. 小型石斧(Ⅷ-6図19～34・36)

ここで小型石斧としたのは、自然礫または剥片を使用し、主に刃部を研ぎ出しによって作出したものである。基端部、側面または基部は部分的に研磨するか全く研磨を行わないものもある。刃縁は直線的なもの、弱い弧状を呈するものがみられる。

今回調査ではI-2期からみられ、Ⅳ-2期に消滅する。明確なⅡ期の小型石斧は出土していないが、弥生時代を通じて存在していたと考えられる。また前回調査ではI-1期から認められる。小型石斧は石斧全体数の約3割、加工斧では約5割を占め、量的に多く出土する器種である(グラフⅧ-2参照)。時期的には集落の拡大するI期、Ⅳ～Ⅴ期に多く、Ⅲ期の遺構出土のものは少量に留まる。これは検出した遺構数と関連しており、全時期にわたり一定量存在したとみられる。

平面および断面形からA・B類に分けられる。

A類：平面形は楕円形、台形状を呈し、断面は扁平である。

B類：平面形は棒状で、断面はやや丸みを持つ。

A類は自然礫の形状に依る部分もあるが、形態的に扁平片刃石斧と類似するものが多い。自然礫

No	器種	分類	時期	調査区	遺構名	分冊	図版番号	遺物番号	備考
1	加工斧	柱状片刃石斧	I-2	C4北	SK4179	2	C4北-23	41	
2	加工斧	柱状片刃石斧	中期(IV?)	E4	SK405	3	E4-32	5	挟りあり
3	加工斧	柱状片刃石斧	IV-2~V-1	K1	ST120	6	K1-38	2	
4	加工斧	小型方柱状片刃石斧	I-2~3	E6	SK626	3	E6-7	9	
5	加工斧	小型方柱状片刃石斧	IV-2	K2	ST205	6	K2-5	7	
6	加工斧	小型方柱状片刃石斧	V-1~2	E4	ST410	3	E4-14	13	
7	加工斧	扁平片刃石斧	I-3~4	前期溝2(C1)	SD105	7	前期溝2-24	335	
8	加工斧	扁平片刃石斧	I-3~4	前期溝2(C1)	SD105	7	前期溝2-24	334	
9	加工斧	扁平片刃石斧	III-2	F3	ST303	4	F3-10	24	
10	加工斧	扁平片刃石斧	III-3	K1	ST126	6	K1-50	8	
11	加工斧	扁平片刃石斧	IV	Q2	ST206	7	Q2-8	7	
12	加工斧	扁平片刃石斧	IV	Q2	ST202	7	Q2-3	2	
13	加工斧	扁平片刃石斧	IV	Q2	ST202	7	Q2-3	1	
14	加工斧	扁平片刃石斧	中期(IV?)	E4	SK405	3	E4-32	4	
15	加工斧	扁平片刃石斧	IV-2~V-1	K1	ST120	6	K1-37	17	
16	加工斧	扁平片刃石斧	IV~V	L1	SX101	6	L1-15	1	
17	加工斧	扁平片刃石斧	V-3	K2	ST220	6	K2-22	33	
18	加工斧	扁平片刃石斧	時期不明	C4	SK4060	2	C4-72	17	
19	加工斧	小型石斧	I-2	C4北	SK4179	2	C4北-23	44	
20	加工斧	小型石斧	I-2	C4北	SK4179	2	C4北-23	43	
21	加工斧	小型石斧	I-3	C4北	SK4163	2	C4北-16	11	
22	加工斧	小型石斧	I-3	C4北	SK4200	2	C4北-39	25	
23	加工斧	小型石斧	I-4~5	D1	SK1005	3	D1-26	3	
24	加工斧	小型石斧	I-5~II-1	C3	SK303	2	C3-12	5	
25	加工斧	小型石斧	III	K2	ST210	6	K2-13	6	
26	加工斧	小型石斧	IV	Q2	ST202	7	Q2-3	3	
27	加工斧	小型石斧	IV	E4	ST405	3	E4-8	15	
28	加工斧	小型石斧	IV-2~V-1	K1	ST120	6	K1-37	15	
29	加工斧	小型石斧	V-2	K2	ST207	6	K2-9	20	
30	加工斧	小型石斧	V-1~2	L2	ST214	6	L2-18	29	
31	加工斧	小型石斧	I-3	前期溝1(E5)	SD101	7	前期溝1-5	19	
32	加工斧	小型石斧	I-5	D1	SD1005	3	D1-55	4	
33	加工斧	小型石斧	IV-2~V-1	K1	ST120	6	K1-37	14	
34	加工斧	小型石斧	V-1~2	E4	ST413	3	E4-18	10	
35	加工斧?	扁平片刃石斧?	I	C1	SK1061	2	C1-27	11	石剣からの転用品
36	加工斧	小型石斧?	I-3	E2	SK283	3	E2-22	7	石庖丁からの転用品

表VIII-5 加工斧観察表

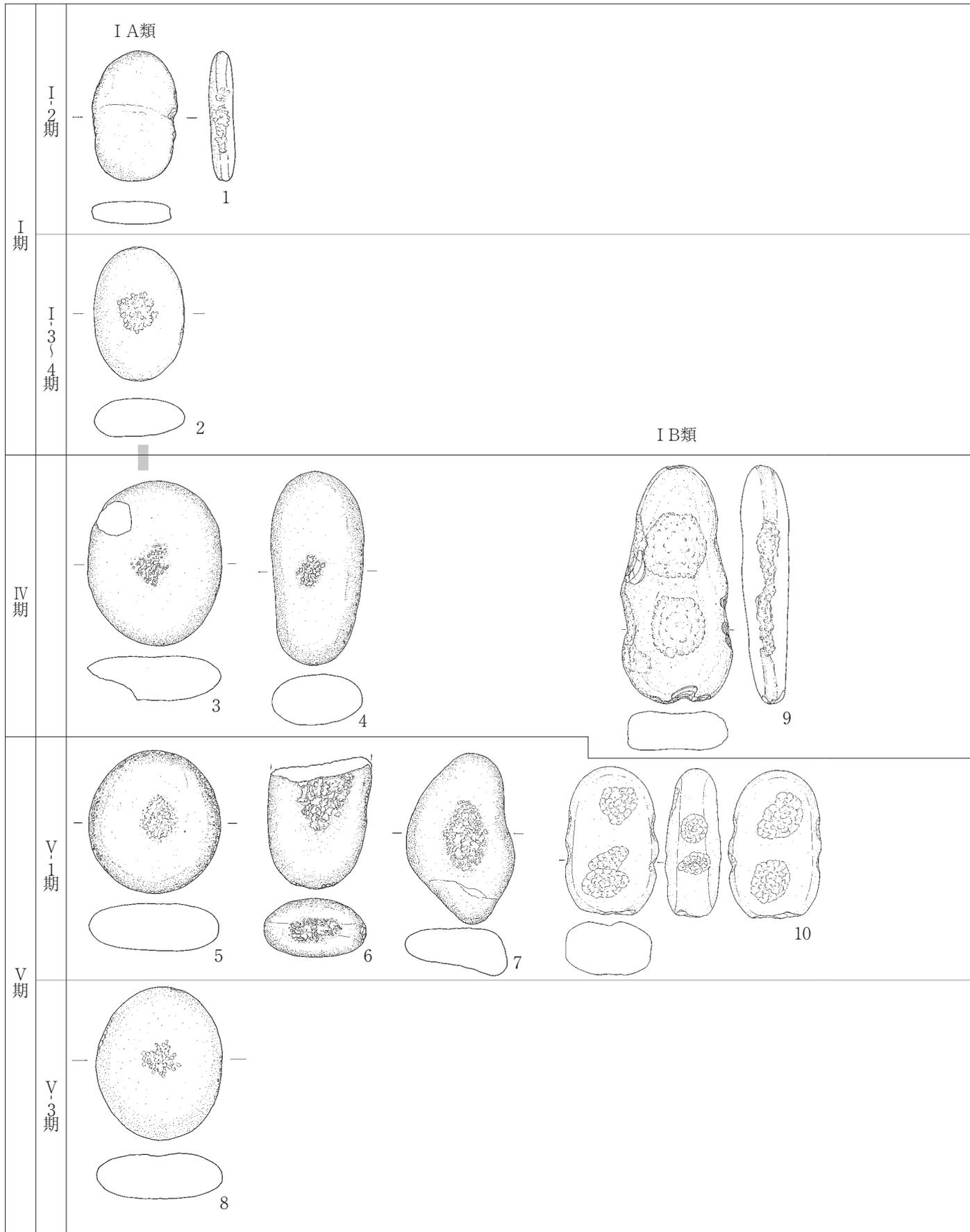
をそのまま利用したものも、断面が扁平で平面形が楕円形のことを意図的に選択しているとみられる。また21・23~26・28~30のように側面を研磨したものもあり、扁平片刃を意識した調整を行っているといえる。刃部は基本的に片刃で、弱い稜がみられる。石材は頁岩、粘板岩、蛇紋岩、緑色片岩などを使用しており、これらの点も扁平片刃石斧と共通する特徴である。用途的にも同様であったと考えられる。

B類はA類に比べ量的に非常に少ない。剥片を利用しており、刃部を研ぎ出しによって作出する。部分的に側面を研磨する。刃部の形状は不明瞭で、刃縁まで残るものは両刃に近い。石材は頁岩または粘板岩、蛇紋岩?を利用する。32・33は小型方柱状片刃石斧を意識したものの可能性がある。

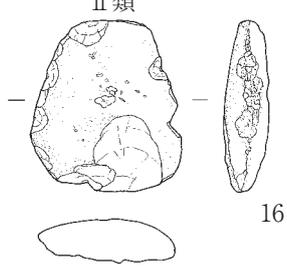
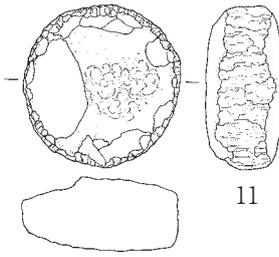
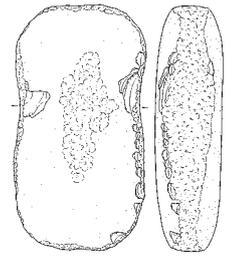
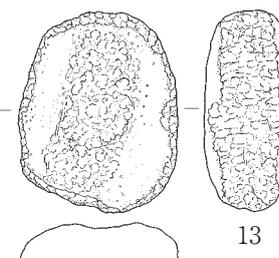
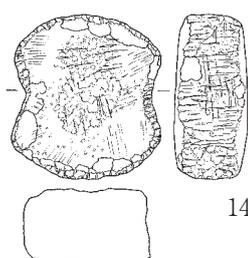
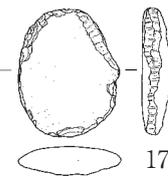
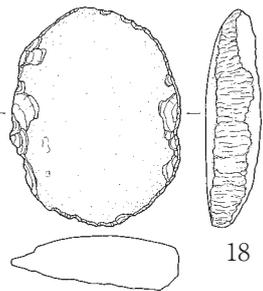
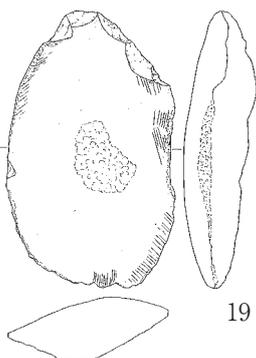
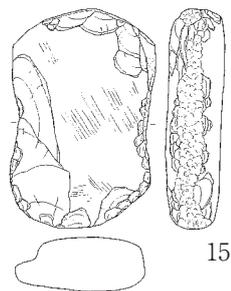
またVIII-6図36は石庖丁から小型石斧への転用と考えられる。

9. 叩石(VIII-7図1~19)

I~V期までの弥生時代を通して存続する器種である。II・III期のものは今回調査では確認できていないが、形態的にIV期以降のものと類似しているとみられる。非常に出土量が多く、報告書に



Ⅷ-7图 叩石

<p>IC類</p>	<p>Ⅱ類</p>  <p>16</p>	<p>I : 2期</p>
 <p>11</p>  <p>12</p>  <p>13</p>  <p>14</p>	 <p>17</p>  <p>18</p>  <p>19</p>	<p>I : 3 4期</p>
 <p>15</p>		<p>IV期</p>
		<p>V : 1期</p>
		<p>V : 3期</p>

図示したものはそのうちの何割かに過ぎない。

成形の有無からⅠ・Ⅱ群に大別し、更にⅠ群は調整の特徴からA～C類に細分した。

Ⅰ群：河原石をそのまま利用したもので、成形等を行わない。石材は砂岩の他、稀に緑色片岩、御荷鉾緑色岩も認められる。

A類：主に両面を中心に打撃痕が残る。平面形は円形・楕円形・不定形、断面形は扁平な楕円形、楕円形、円形、不定形がみられる。

B類：両面及び両側縁に上下2箇所、打撃痕が集中する。側縁は打撃痕の他、直線状のキズあるいはそれらが集合して溝状の窪みを形成するのが認められる⁽⁵⁾。更に使用することにより両側面上下2箇所がU字状に窪むのが特徴である。平面形は楕円形、断面形は側縁の使用が著しいため隅丸方形に近い。

C類：両面中央部と縁辺部の使用が著しい。そのため縁辺部には礫皮は残らない。両面及び縁辺は打撃痕の他、直線状のキズあるいはそれらが集合して溝状の窪みが多く認められる。特に縁辺は後者が著しい。平面形は円形、楕円形、隅丸方形の他、両側縁が浅いU字状を呈するものがみられる。これは意図的に整形したものか、使用によるものかは不明である。

Ⅱ群：河原石を打ち割って得られた剥片を利用するもの。両面には打撃痕はほとんどみられず、使用は主に縁辺に限られる。打撃痕の他、縁辺と直交する直線状のキズ、あるいはそれらが集合した溝状の窪みが顕著である。中には更に打撃を繰り返すことによって、V字またはU字状に窪むものもみられる。また縁辺には部分的に摩滅が認められるが、これは剥片剥離などの作業を重複して行ったためと考えられる。平面形は楕円形、不定形で、断面形は凸レンズ状または不定形を呈する。石材は砂岩の他、稀に緑色片岩もみられる。

Ⅰ・Ⅱ群とも今回調査では、Ⅰ-2期からの出現となる。ⅠA類は縄文時代から続くもので、Ⅱ・Ⅲ期は不明瞭だがⅤ-3期まで存続する。ⅠB類はⅣ～Ⅴ期、ⅠC類はⅠ期で盛行し、Ⅳ期に消滅するとみられる。ⅠC類も他と同様にⅡ・Ⅲ期の間が不明瞭であるが、わずかながら存在したと考えられる。Ⅱ群は非常に短い期間に盛行するのが特徴で、Ⅰ-2期には出現し、遅くともⅠ-4期に消滅する。

Ⅰ・Ⅱ群とも打撃痕から対象物は石など硬いものであったとみられ、石器製作に使用されたと考えられる。では具体的にどの石器の製作に使用されたものであろうか。Ⅱ群の縁辺に直交して顕著にみられる直線状のキズは、石器製作の使用法の一つである両極剥離によって形成されたものとみられる⁽⁶⁾。叩石Ⅱ群の盛行期は非常に特徴的であるが、同様に前期に盛行し消滅するのがチャート製の打製石錐である。打製石錐は楔形石器、剥片、母岩とともに、住居跡、土坑などから多量に出土している。打製石錐の製作に際して楔形石器の両極打撃が行われたと考えられ、Ⅱ群はその製作に使用された可能性が高い。また本遺跡で前期に限定して多量に出土する打製石錐は、福岡県高坊遺跡、良積遺跡、岡山県南溝手遺跡、和歌山県堅田遺跡、北海道船泊遺跡、瀬棚南川遺跡などの他、カリフォルニア州南部のChannel島及び周辺地域でも同様のものがみられ⁽⁷⁾、類例は時期・地域ともに広範囲に認められる。瀬棚南川遺跡で出土した石錐について、担当者は貝製品または皮革製品の加工具の可能性を示唆しており、Channel島ではBC600年～AD1782年まで貝製品製の製作を

行っていたようである。また時期は縄文時代後期中葉に遡るが、北海道船泊遺跡出土の貝製平玉製作に使用したとみられる石器群と、本遺跡出土の打製石錐、叩石Ⅱ群が極めて類似している点は非常に興味深い⁽⁸⁾。

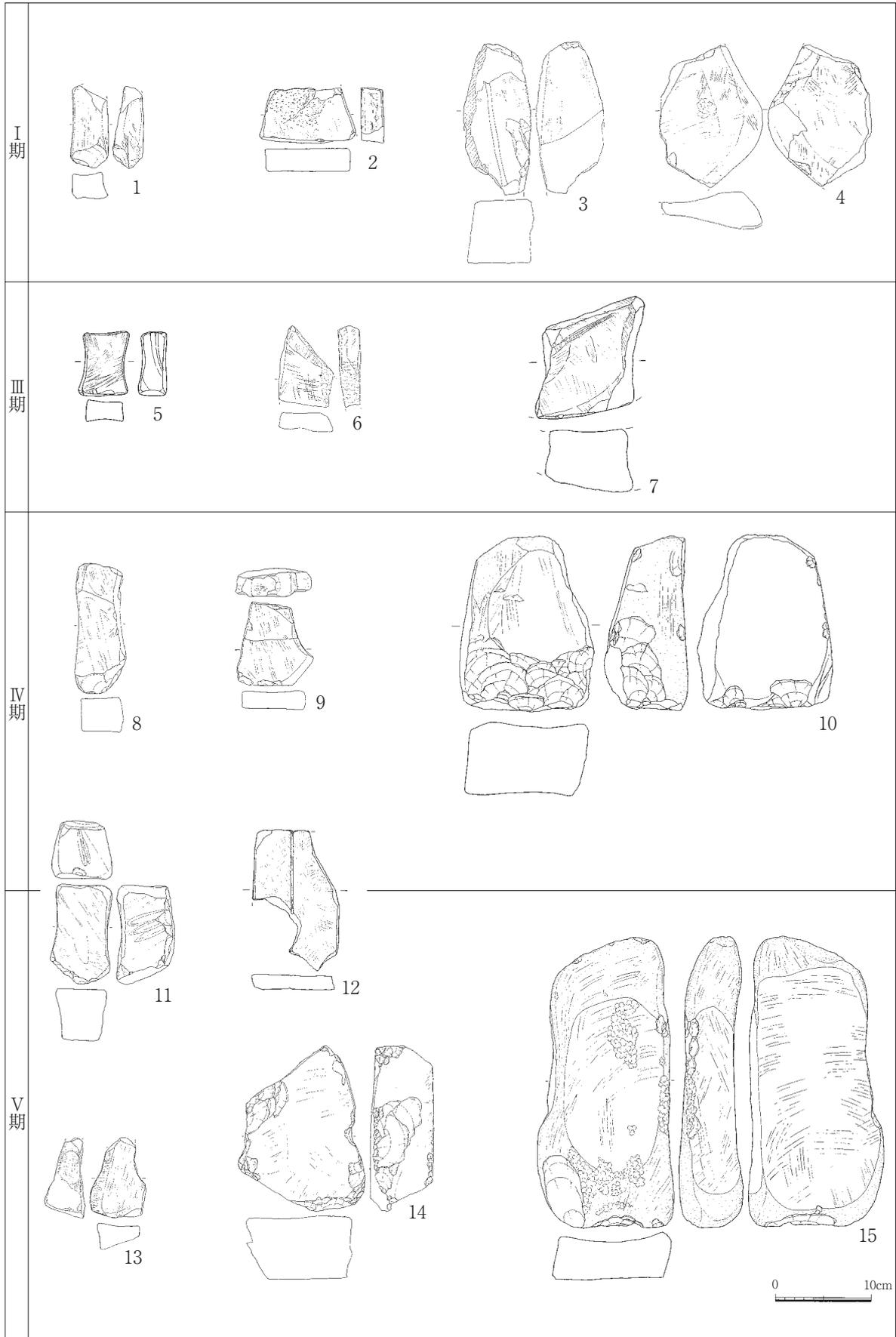
田村遺跡群の立地は有機物の遺存に適しておらず、打製石錐の用途は現段階では不明瞭である。だが以上の類例から察するに、貝製品あるいは皮革製品の加工に使用された可能性は高いといえる⁽⁹⁾。

註

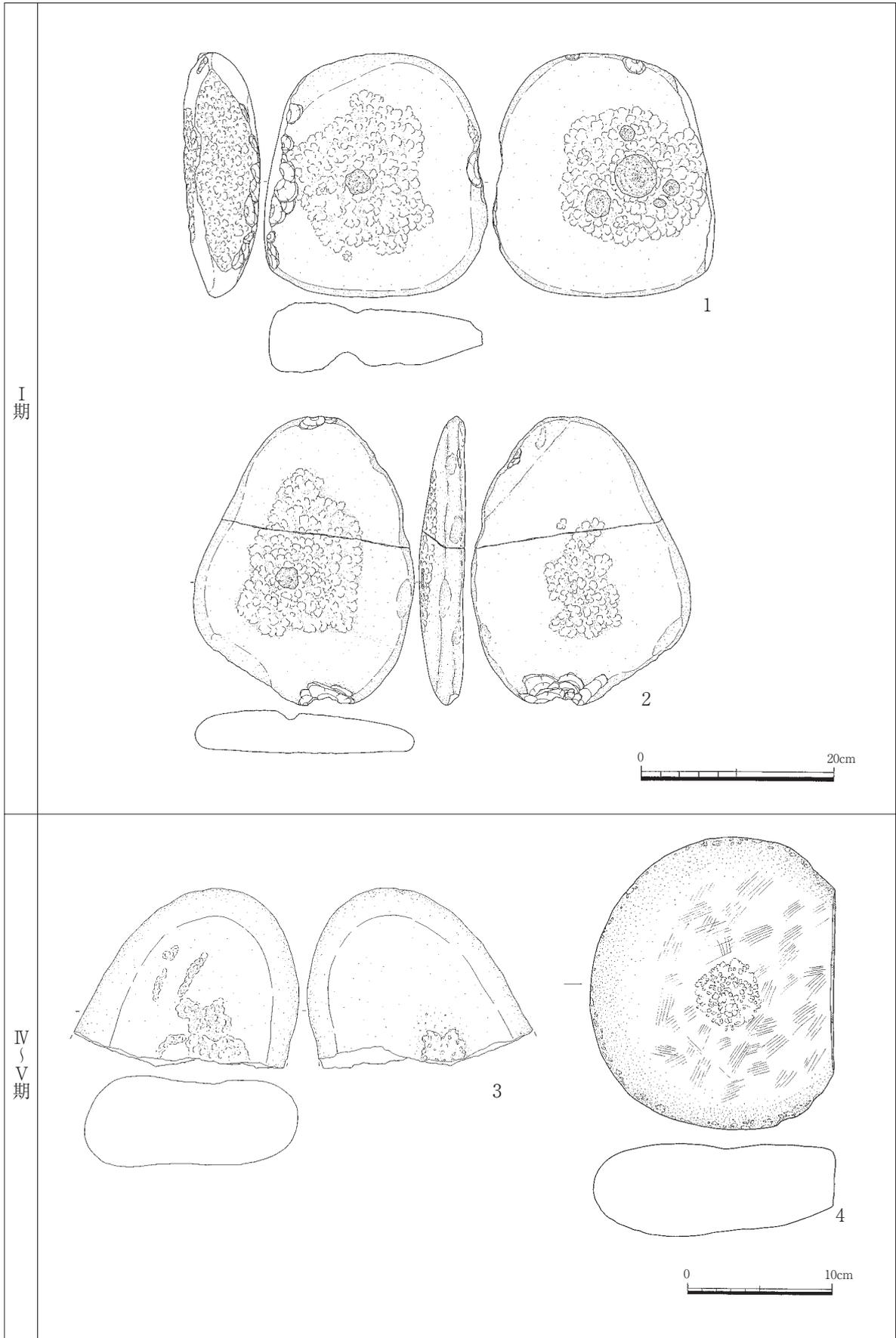
- 5) 御堂島正氏の「石器製作の使用痕－トラセオロジーの視点から－」『月刊考古学ジャーナル3 No.499,2003』ニュー・サイエンス社を参考にした。
- 6) 御堂島氏のご教示による。
- 7) 北九州市埋蔵文化財調査報告書第243集『高坊遺跡(第1次調査)－県営城野団地建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』財団法人北九州市教育文化事業団・埋蔵文化財調査室 2000
『良積遺跡Ⅰ 福岡県三井郡北野町所在遺跡の調査』北野町教育委員会 1996
『南溝手遺跡Ⅰ 岡山県立大学病院に伴う発掘調査Ⅰ』岡山県教育委員会 1995
『堅田遺跡-弥生時代前期集落の調査-』御坊市教育委員会・御坊市文化財調査会 2002
『瀬棚南川遺跡』瀬棚町教育委員会 1976
上野秀一・田村美智子他『瀬棚南川』瀬棚町教育委員会 1983
George H.Odell "Lithic Analysis" KLUWER ACADEMIC/PLENUM PUBLISHERS 2004
- 8) 長沼 孝「礼文島船泊遺跡における貝製平玉の製作技術」『月刊考古学ジャーナル10 No.521,2004』ニュー・サイエンス社
『礼文町船泊遺跡発掘調査報告書－平成10年度発掘調査の報告』北海道礼文町教育委員会 2000
- 9) 「28 まとめ」も参照されたい。

No	器種	分類	時期	調査区	遺構名	分冊	図版番号	遺物番号	備考
1	叩石	I A	I -2	E2	SK262	3	E2-14	16	
2	叩石	I A	I -3	E2	SK275	3	E2-19	42	
3	叩石	I A	IV -2	K1	ST122	6	K1-42	2	
4	叩石	I A	IV -2	K1	ST123	6	K1-46	3	
5	叩石	I A	V -1	K1	ST102	6	K1-6	12	
6	叩石	I A	V -1	K1	ST114	6	K1-26	1	
7	叩石	I A	V -1	K1	ST104	6	K1-8	4	
8	叩石	I A	V -3	K1	ST125	6	K1-48	12	
9	叩石	I B	IV	E7	ST722	3	E7-20	28	
10	叩石	I B	V -1	L2	ST205	6	L2-8	7	
11	叩石	I C	I -3	前期溝1(E5)	SD101	7	前期溝1-5	23	
12	叩石	I C	I -3	F4	ST414	4	F4-26	5	
13	叩石	I C	I -3~4	前期溝2(E5)	SD105	7	前期溝2-9	101	
14	叩石	I C	I -3~4	前期溝2(C5)	SD105	7	前期溝2-17	246	
15	叩石	I C	IV	L1	SD105	6	L1-19	42	
16	叩石	II	I -2	E2	SK262	3	E2-14	15	
17	叩石	II	I -3	前期溝1(E5)	SD101	7	前期溝1-5	22	
18	叩石	II	I -3	E5	SK562	3	E5-20	23	
19	叩石	II	I -3~4	前期溝3(C5)	SD504	7	前期溝3-5	63	

表Ⅷ-6 叩石観察表



Ⅷ-8图 砥石



Ⅷ-9図 台石

10. 砥石(VIII-8図1~15)

砥石はⅡ期を除く、Ⅰ期からⅤ期まで認められる。小型で、手持ちで使用するものと、据え置いて使用するものがある。砥石についての形態分類は行っていない。据置型の砥石は、Ⅳ期住居跡の中央ピットから出土する例が多い。器面が火を受けたように赤変したものもみられ、住居内の炉跡付近で使用されたことが窺える。

手持ち、据置型のどちらにも、使用により有溝状に窪むものがみられる。これらは玉砥石の可能性もあるが、管玉などの出土点数が少なく、製品に伴う剥片類も見られないことから田村遺跡群内で玉の製作が行われたかは不明である。また据置型の砥石には意図的な折損のみられるものが多く、据置型の最終段階では手持ちへと転用していた可能性も考えられる。石材は砂岩を用いる。

11. 台石(VIII-9図1~4)

据え置いて使用するタイプのため、叩石とは区分した。今回調査資料ではⅡ・Ⅲ期の遺物を欠くが、Ⅰ期からⅤ期までは存続するとみられる。

1~2の台石は非常に深い打撃痕が残り、中央部に円錐状の窪みがみられる。円錐状の窪みには穿孔等による明瞭な回転痕は認められず、打撃を繰り返したことによるものと考えられる。こういった特徴を持つ台石はⅠ期のみにはしか認められず、消長時期の一致する打製石錐の製作に使用された可能性が考えられる。

No.	器種	分類	時期	調査区	遺構名	分冊	図版番号	遺物番号	備考
1	砥石		I-3	F4	ST415	4	F4-28	7	
2	砥石		I-3~4	前期溝2(E5)	SD105	7	前期溝2-9	100	
3	砥石		I-2~3	C2	ST201	2	C2-3	12	
4	砥石		I-3~4	前期溝3(C5)	SD504	7	前期溝3-5	65	
5	砥石		Ⅲ-2	F3	ST303	4	F3-10	27	
6	砥石		Ⅲ	C5	SK524	2	C5-7	4	
7	砥石		Ⅲ-2	F3	ST303	4	F3-10	26	
8	砥石		Ⅳ-1~2	D1	ST106	3	D1-9	8	
9	砥石		Ⅳ	L2	ST208	6	L2-12	11	
10	砥石		Ⅳ	E7	ST724	3	E7-22	12	
11	砥石		中~後期	E7	ST725	3	E7-12	46	
12	砥石		Ⅳ~Ⅴ-1	B3	ST309	1	B3-6	11	
13	砥石		Ⅴ-3	D1	ST109	3	D1-12	11	
14	砥石		Ⅴ-1~2	E4	ST407	3	E4-11	11	
15	砥石		Ⅴ	E7	ST715	3	E7-17	29	

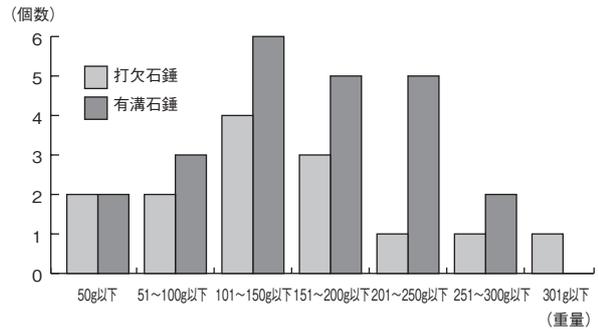
表Ⅷ-7 砥石観察表

No.	器種	分類	時期	調査区	遺構名	分冊	図版番号	遺物番号	備考
1	台石		I	C4	SK4132	2	C4-70	8	
2	台石		I	C4	SK4132	2	C4-70	7	
3	台石		Ⅳ-1~2	D1	ST103	3	D1-5	16	
4	台石		Ⅴ-3	K1	ST116	6	K1-28	8	

表Ⅷ-8 台石観察表

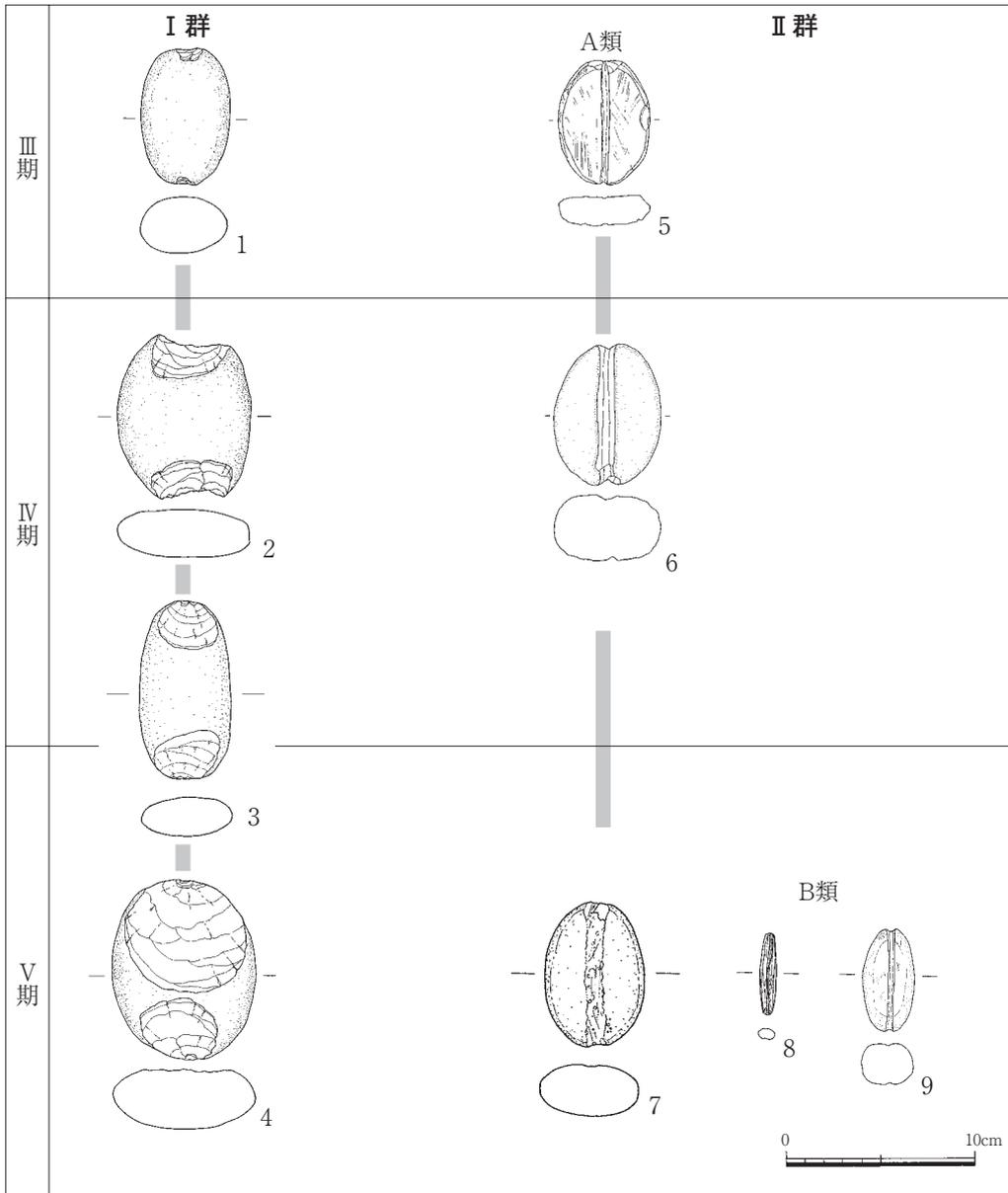
12. 石錘(第Ⅷ-10図1~9)

農具に比べ、漁撈具の出土は非常に少ないのが特徴である。出土量の差は、石器を使用する場所の違いによるものの可能性もあるが、遺構出土の石錘はⅢ期から認められる。Ⅰ期には前期溝などから管状土錘が出土しており、土錘の出現と石錘の消長には何らかの関係があるものとみられる。



グラフⅧ-3 打欠石錘・有溝石錘重量別分布グラフ

製作方法からⅠ・Ⅱ群に分け、Ⅱ群は更に溝の調整及び平面・断面形からA・B類に細分する。



Ⅷ-10図 石錘

I 群：自然円礫の両端を打ち割り、紐をかける窪みを作成したもので、いわゆる打欠石錘である。平面形は楕円形、断面形は扁平な楕円形～円形を呈する。石材は砂岩の他、稀に礫岩もみられる。

II 群：自然円礫を利用し、礫の長軸の中央部に溝を巡らしたもので、いわゆる有溝石錘である。

A 類：敲打により浅い溝がめぐるのが多い。いわゆる瀬戸内地域に多くみられるタイプである。ただし中には、擦り切り状の調整を行い、比較的深い溝が巡るものもある。平面形は楕円形、断面形は扁平な楕円形を呈する。

B 類：擦り切り状の調整を行い、V 字状の鋭利な断面形を呈するものが多い。平面形は長卵形を呈し、断面形は円形に近い。いわゆる九州型石錘で、出土遺物は小～中型がみられる。石材は、小型品は頁岩または粘板岩、中型品は砂岩を使用している。

I 群・II 群 A 類は III 期から、II 群 B 類は IV 期から認められる。いずれも出土量が少ないため、出現および消滅時期は不明瞭であるが、鉄製釣針が出現する IV 期から II 群 B 類の九州型石錘が認められるのは非常に興味深い。

I 群の打欠石錘は重量 38～471 g、II 群 A 類の有溝石錘は 47～284 g を量るものが出土している。I 群の重量のピークはいずれも 101～150 g にある。151 g を超えるものは激減するものの、301 g 以上のものも少量ながら認められる。対して II 群 A 類は 101～250 g までほぼ同量存在しており、I 群よりやや重量のあるのが特徴である(グラフ VIII-3 参照)。これは漁法または使用する漁場の状況で使い分けられていた可能性もあるが、まとまった出土例もみられないため不明瞭である。

II 群 B 類は出土点数が極めて少なく、現在確認できているものは 4 点で、小型品は丁寧な研磨がなされている。

弥生時代の石錘は、同じ田村遺跡群内で出土した縄文時代後期前半～中葉の石錘と比較して、いくつかの特徴を看取できる。重量の面からみると両時代の石錘ともバラエティに富み、縄文時代の石錘で 100～200g、弥生時代のものでは 300g 以上のものがみられる。ただし縄文時代の石錘は 50～100g、弥生時代のものは 100～150g 内に収まるものが多く、弥生時代になり約 1.5～2 倍の重さを持つようになる。また形態的にも、縄文時代のものは細長い形態のものが比較的多くみられるのに対し、弥生時代の石錘は楕円形を呈するものが多い。こういった重量及び形態差が、漁法、捕獲対象魚、漁場とどのように結びつき、変化するのかについては今後検討を要する課題である。また今回の出土資料だけでは不明瞭な点が多いが、前期に多くみられる土錘との関係についても考えていく必要があるだろう。

No.	器種	分類	時期	調査区	遺構名	分冊	図版番号	遺物番号	備考
1	石錘	I	III	Q2	ST204	7	Q2-6	4	
2	石錘	I	IV-2	I2	SK203	5	I2-43	21	
3	石錘	I	IV-2～V-1	J4	ST402	5	J4-7	18	
4	石錘	I	V-1	K1	ST119	6	K1-36	2	
5	石錘	II A	III	Q2	ST204	7	Q2-6	5	
6	石錘	II A	IV	K2	ST221	6	K2-24	12	
7	石錘	II A	V-2～3	L3	ST301	6	L3-2	3	
8	石錘	II B	V-2～3	L3	ST301	6	L3-2	2	
9	石錘	II B	V-3	K2	ST220	6	K2-22	34	

表 VIII-9 石錘観察表

13. 石錐(VIII-11図)

弥生時代前期中葉の調査区(C4・E5区)の環濠集落内の土坑から、多量の剥片と共にチャート製の石錐や楔形石器が出土している。石錐の総数は560点で、そのうち442点がチャート製の紡錘型である。大半を占めているのは最長2cmを超えず幅4mmを測るものであるが、一部サヌカイト製のものも存在している。弥生時代前期中葉の調査区から出土したもので、細部に器面調整が施され、二次加工されたものや未使用の製品である。C4区全体の石錐の出土は425点、楔形石器は300点である。主に3基の土坑からの出土で、SK434(2m×1m)からは多量の剥片類やチップと共に石錐127点、楔形石器28点が出土している。遺構には壁溝やピットが伴っていることから工房の可能性が窺がえる。他にSK418からは石錐58点、SK443では44点の石錐が出土している。

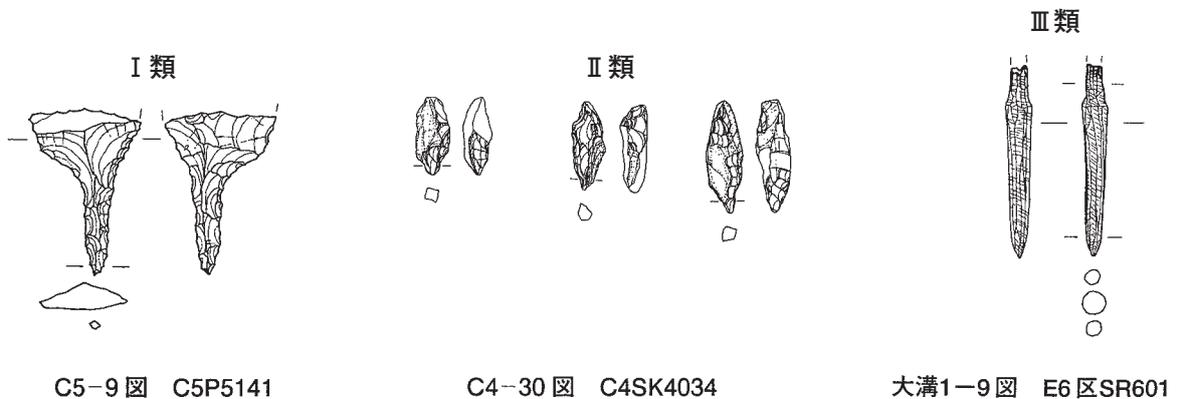
弥生時代前期の環濠内の土坑から出土した石錐560点を3類に分け、タイプ別に分類を試みた。

- I類 基部と錐部の境が明瞭で、錐部が細長い。
- II類 全形が分厚い多角形や紡錘形を呈し、尖った部分に錐部が作り出されている。
- III類 基部と錐部に境がなく棒状で、ほぼ一定の幅を持つ。

I類は従前より言われている石錐である。7点の出土があり、サヌカイト製が6点、チャート製が1点である。頭部と錐部の境が明瞭なサヌカイトの製品は4点で、基部の最長は3.2cmを測る。残りは未調整や欠損品である。

II類は442点を数え、紡錘型をしたチャート製である。長さは2cm未満、径は4mmを超えず、サイズが整っているのが特徴で規格性が窺える。調整から石錐としたが、石錐としての機能が備わっているかどうかは現段階では不明である。全体の96%がこのII類に分類される。

III類は23点で、石材はチャート製が15点で、50%以上を占める。サヌカイト製1点、頁岩製6点、滑石製1点である。チャート製の打製が15点、頁岩製、滑石製の磨製が7点である。III類のチャー



VIII-11図 石錐分類

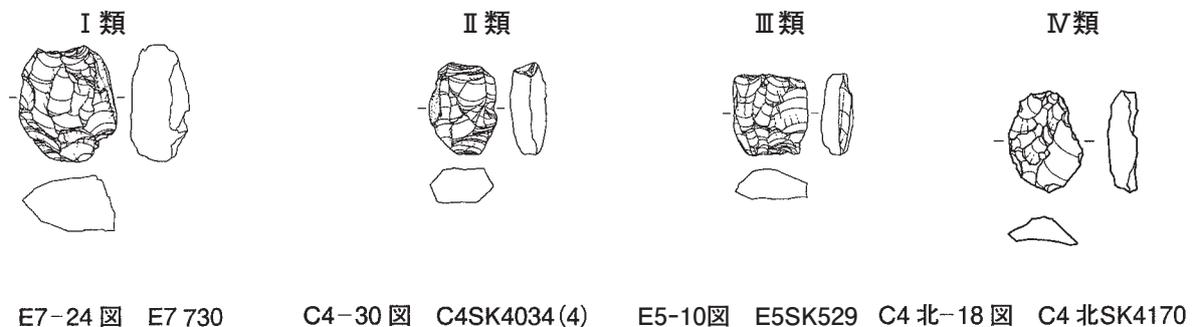
ト製はⅡ類よりやや大きめで、頁岩製は最長7.4cmを測る製品で、Ⅰ・Ⅱ類の製品と長さを比較するとⅢ類は二倍近い。Ⅲ類の平均値は5.48cmを計測する。Ⅰ類は形態や調整から錐としたが、Ⅱ・Ⅲ類については錐としてのすべての機能が備わっているかは不明である。

チャート製の石錐は弥生時代前期の調査区から出土し、剥離痕跡を有する石核や多量のチャート製の剥片やチップについても、弥生時代前期中葉の土坑からの出土で、弥生時代中期から後期にかけての遺構ではほとんど見られない。田村遺跡群の石錐はサヌカイト製が中心であるが弥生時代前期ではチャート製の石錐も見られ、縄文時代後期の遺構(H区)からも出土している。チャート製以外の石錐の石材では、Ⅲ類に見られる様に頁岩製など、数点が溝や流路から出土しているが、遺構の切り合いによる混入が考えられる。

使用目的についてはC4・E5区では石包丁など、孔を持つ遺物がほとんど出土していないことから、これら多量の石錐の用途は不明である。明確な使用目的は不明であるが、その数の多さから少量を大切に使用するよりは、一時に大量に用いるか、何度か使用した後、使用不可能になるため、大量生産され、使い捨てかスベア的に用意されたことが考えられる。いずれにせよ、一般的な生産用具とは異なり、使用目的は極めて限られたものだろう。製品や剥片・チップの多さから、C4区のSK434のように床面に壁溝や柱穴を有する土坑は工房の可能性も考えられる。しかし、遺構埋土が乾燥性の粘土質シルトのため、使用の対象となるもの(例えば、皮・骨・木製品など)が残っていないため検証は不可能である。

他に田村遺跡群では弥生時代前期前葉の住居跡から石錐が出土している。F4区の調査区で環濠外の住居跡群の大型住居ST415では196点、ST421からは58点が出土している。いずれも、環濠内土坑の出土状況と同様に楔形石器を伴い、石器製作工房の可能性のある遺構である。

今のところ県下の他の遺跡からの出土例はなく、全く手掛りがない状況にある。Ⅱ類は田村遺跡群だけの特徴ではなく、県外では福岡県北九州市高坊遺跡の出土例の他、和歌山県の堅田遺跡でチャート製の紡錘形をした石錐が、田村遺跡群と同様な状況で弥生時代前期に出土している。今回多数出土している石錐については、弥生時代前期に特徴的なものとみられるが、機能等不明な点が多い。ただ、チャート製の石錐は、機能は不明ながら弥生時代前期の石器組成を構成する特徴ある石器として今後の検討が必要である。



Ⅷ-12 図 楔形石器分類



14. 楔形石器 (VIII-12図)

楔形石器も石錐と同様に弥生時代前期の遺構より多数出土している。出土状況はそのほとんどが石錐と同じで、石錐と共に出土している。土坑より出土した楔形石器は両極打法による剥離痕が残り、上下二辺または四辺縁辺部に調整が施されているものである。石材はすべてチャート製である。石錐に比べれば量的には少ないが、出土の状態は石錐と同様に土坑内で混在して出土している。環濠内の調査区全体では300点ほど出土している。出土した楔形石器はレンズ状を呈するものから円形や方形があり、4類に分類できる

I類 レンズ状タイプ

II類 縦長タイプ

III類 方形タイプ

IV類 円形タイプ

I類はレンズ状の膨らみを持つ形態であり、上下、両端からの剥離により刃部が作りだされている。

II類は縦長の剥片を素材として原礫面を残し、上部から縦方向のはく離が行われている。

III類は両極打法による調整が明確になされている。さらに、両側辺部を直接打撃による調整で方形に作り出しているもので、断面は上下からの剥離がレンズ状となる。

IV類は薄めの剥片を素材として縁辺部から調整を施し、円形を形成している。数的には少量である。

楔形石器は石錐よりは少量であるが、弥生時代前期の土坑からの出土状況からすれば、石錐の出土状態と類似し、石錐の作成に関わる石器と考えられる。多量の未製品や剥片からも窺える。また、石器の石材がチャート製であることも弥生時代前期の特徴と合致し、弥生時代中期以降の遺構からは出土していないことも同様である。

石錐の他に穿孔具が21点出土している。先端に回転による使用痕が明確に残るもので、中には両端に回転痕を有するものもある。砂岩製で自然石を利用したものが15点、粗粒砂岩製と思われるものが2点、頁岩製が4点である。砂岩製は長さ5~6cm、径2cmを測るものが多く、規格性が窺える。頁岩製は長さ7.7cmを測り、やや大きめのものや、4.4cmと小さめで針状の製品がある。粗粒砂岩製は長さ15.5cmを測るものが1点あり、環状石斧の穿孔具の可能性が考えられる。

出土状況は砂岩製が1点、弥生時代前期中葉の土坑から出土しており、弥生時代中期から後期にかけての住居跡からも1点出土している。他は溝・流路からの出土で、時期的には全般に渡っている。

これら穿孔具の使用目的は石包丁の穿孔が考えられる。石包丁は調査区全体ではほぼ完形品で約600点出土しているが、孔を有する石包丁は322点で全体の半数近くを占める。穿孔過程で、敲打と共に凹みを作るために使用したと考えられるが、そのうち、穿孔内に錐揉みによる回転痕を有す

る石包丁は、穿孔を有する石包丁の約58%である。しかし、石包丁の孔径と穿孔具の径を比較すれば石包丁の口径が小さく、穿孔具を石包丁の穿孔に使用したとは考えられない。ところが、石包丁の石材は頁岩や粘板岩製で、田村遺跡群では最も身近で手に入れやすいものであり、多量の未製品からも石包丁は当遺跡で製作されたものと判断できる。他に、穴を有する石器では環状石斧が25点ほど出土しているが、径3.3cmを測る環状石斧の孔にはそぐわない。穴の大きさについては合致しないが、今回出土している田村遺跡群の穿孔具は、機能としては穴をあける道具に違いはない。チャート製の石錐についても摩擦痕跡を有するものはあるが、回転痕を有する石錐は1点も見当たらない。回転痕を有する15点の砂岩製の穿孔具も当遺跡で手に入れやすい石材であるが、石包丁の紐穴には太すぎる。やはり両者を繋ぐには何かが不足している。

石包丁の未製品が大量に出土していることや、環状石斧についても製作過程がわかる緑色岩の素材や剥片、未製品が出土していることから、当遺跡で穿孔されたことに間違いはなく、今後、田村遺跡群の石包丁の穿孔過程を検討する中で、砂岩製の自然石を利用した穿孔具についても明らかになるであろう。

15. 礫錐 (Ⅷ-13図1～14)

礫錐は短い棒状の礫を素材として、調整加工は加えずに端部を錐部として使用したものである。形態的な変異は少なく、2点だけ他のものと形態変化があり、別分類をした。特にⅢ群としたものは、大型で錐部も特大のものである。

I 群

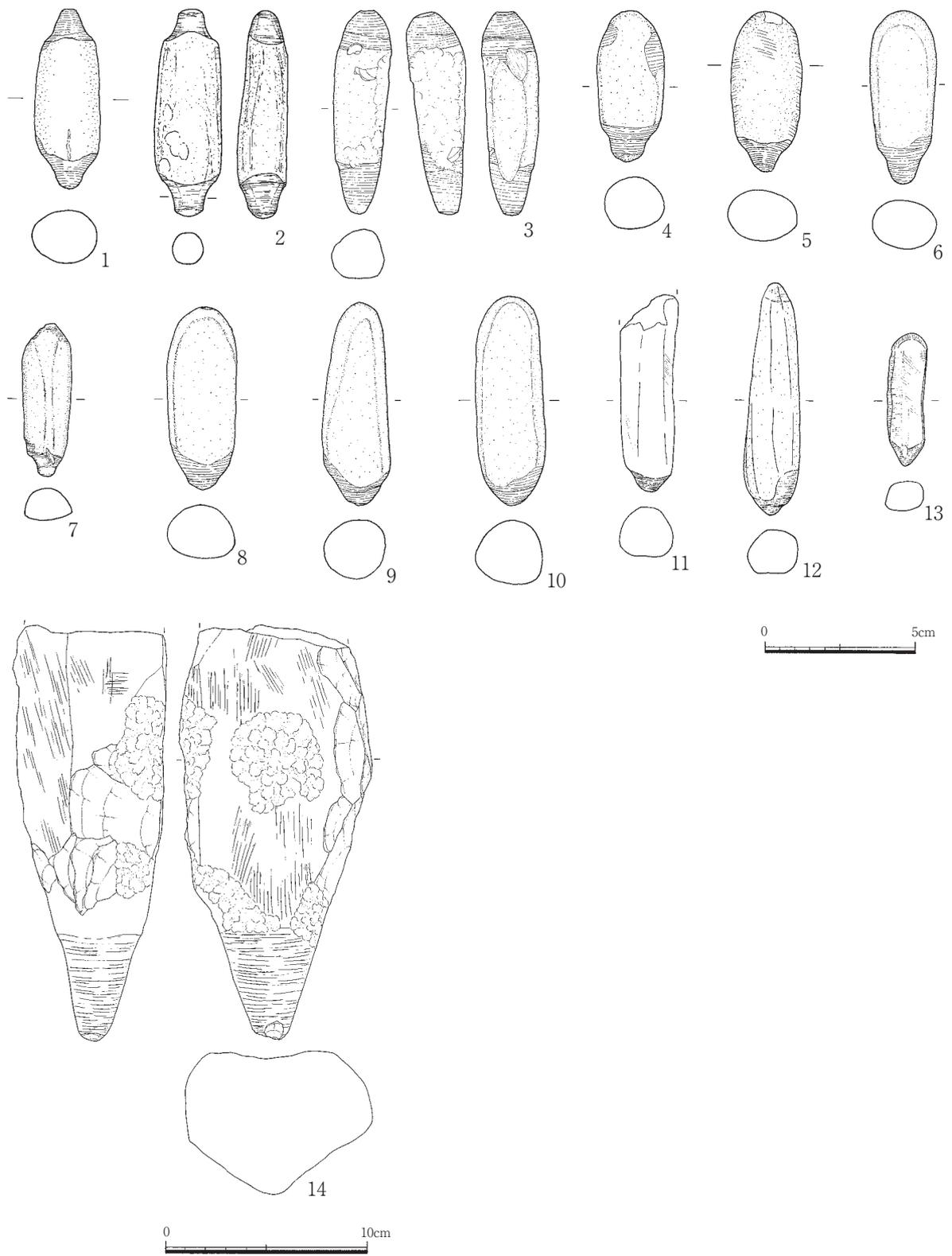
1～12は小型の棒状の礫を素材とするもので、長さは5cmから10cm前後のものである。礫の径は2cm前後のものが多い。端部に回転による摩耗、擦痕が認められる。両端部にも摩耗痕が認められるものがある。使用頻度の高いものは端部が乳頭状を呈する。使用により錐部が明確化したものは、錐部分の長さ1cm未満のものが多く、径も1cm程度である。端部は丸みを持つ。石材は砂岩を主体とする。時期は明確ではなく、9が前期の土坑からの出土である。他は溝、流路からの出土であり時期は特定できない。

Ⅱ群

13はI群より小型で方角柱状の礫を素材としており、また石材が頁岩であるところから細別したものの、機能はI群と同様と考えられる。

Ⅲ群

14は他のものに比べて、極めて大きな礫錐である。長さ約20cm、重量1.5kgを測る。端部に錐部が顕著に摩滅する。柄部には凹石と同様の敲打痕が認められるところから、併用されたものと考えられる。石材は流紋岩または石英粗面岩か。時期は流路資料のため特定できない。



Ⅷ-13図 礫錐

No	器種	分類	時期	調査区	遺構名	全長(cm)	全幅	全厚	重量(g)	材質	分冊	図版番号	遺物番号	備考
1	礫錐	I		E6	E6SR601	6.03	2.17	1.79	34.8	砂岩	3	大溝1-9	143	
2	礫錐	I		B1	B1SD102	11.9	5.4	2.9	315.7	砂岩	1	B1-14	23	
3	礫錐	I		B4	B4SD421	6.8	1.9	2.0	30.6	砂岩	8	大溝1-15	248	
4	礫錐	I		F5	F5SR501	5.1	2.2	1.7	31.1	砂岩	8	大溝2-11	159	
5	礫錐	I		E6	E6SR602	5.31	2.36	1.75	31.0	砂岩	8	大溝2-9	132	
6	礫錐	I			流路1	5.8	2.3	1.7	33.3	砂岩	8	流路1-32	5	
7	礫錐	I		B4	B4SD421	5.1	1.6	1.0	14.3	砂岩	8	大溝1-15	247	
8	礫錐	I		F5	F5SR501	6.1	2.3	1.8	40.2	砂岩	8	大溝2-11	158	
9	礫錐	I	I 4~5	C4	C4SK4112	6.7	2.3	1.9	42.8	砂岩	2	C4-69	9	
10	礫錐	I		L2	L2ST214	7.0	2.3	2.1	52.6	砂岩	6	L2-18	30	
11	礫錐	I			流路1	[6.55]	1.8	1.7	[34.6]	緑色岩	8	流路1-32	4	
12	礫錐	I			流路1	7.75	1.7	1.45	31.4	頁岩	8	流路1-32	3	
13	礫錐	II			流路1	4.4	1.3	1.0	10.1	黒色頁岩	8	流路1-32	6	
14	礫錐	III			流路1	[20.7]	9.5	7.2	[1500]	石英粗面岩	8	流路1-32	7	

表Ⅷ-10 礫錐観察表

16. 磨製石鏃(Ⅷ-14~16図1~56)

磨製石鏃は約100点余り出土している。C区からは47点と大半が弥生前期の土坑からの出土である。それ以外の調査区ではE区が比較的多く、17点である。やはり土坑出土が大半を占めている。時期的には弥生前期 I 2~3期に含まれるものである。

磨製石鏃の形態は多種多様で基部形態が有茎、凸基の2種類に大きく分類できるものの、鏃身、側辺、先端部、基部の形態は多様でそれらが合わさった形態をしており、漸移的な形態変化を示している。有茎式 I 群、凸基式 II 群、凹基式 III 群、未製品 IV 群と大きく分類を行なった。

有茎式 I 群(1~31)

I 群1A類-鏃身の幅が広いもので1、2は特に大型品である。時期は弥生前期 I 2期と考えられる。

I 群1B類-3~11。1A類に比べて小型のもの。時期は弥生前期 I 2~3期に属するものと考えられる。8については中期から後期の住居跡L3ST306からの出土であるものの、該期に含まれるものと考えられる。

I 群2A類-12は鏃身が長三角形のもの。時期は前期に含まれるものと考えられるものの、細かな時期は特定できない。

I 群2B類-13から16は鏃身の幅に比べ身が長いもの。所属時期は弥生前期 I 2~3期と考えられる。

I 群3A類-17、18。身は長いものの厚さのないやや扁平なもので、中でも17は側縁が面取り状を呈するもの。時期は弥生前期 I 3期か。

I 群3B類-19、20。身は長く、やや扁平なものの、稜があるもの。時期は弥生前期 I 2~3期か。

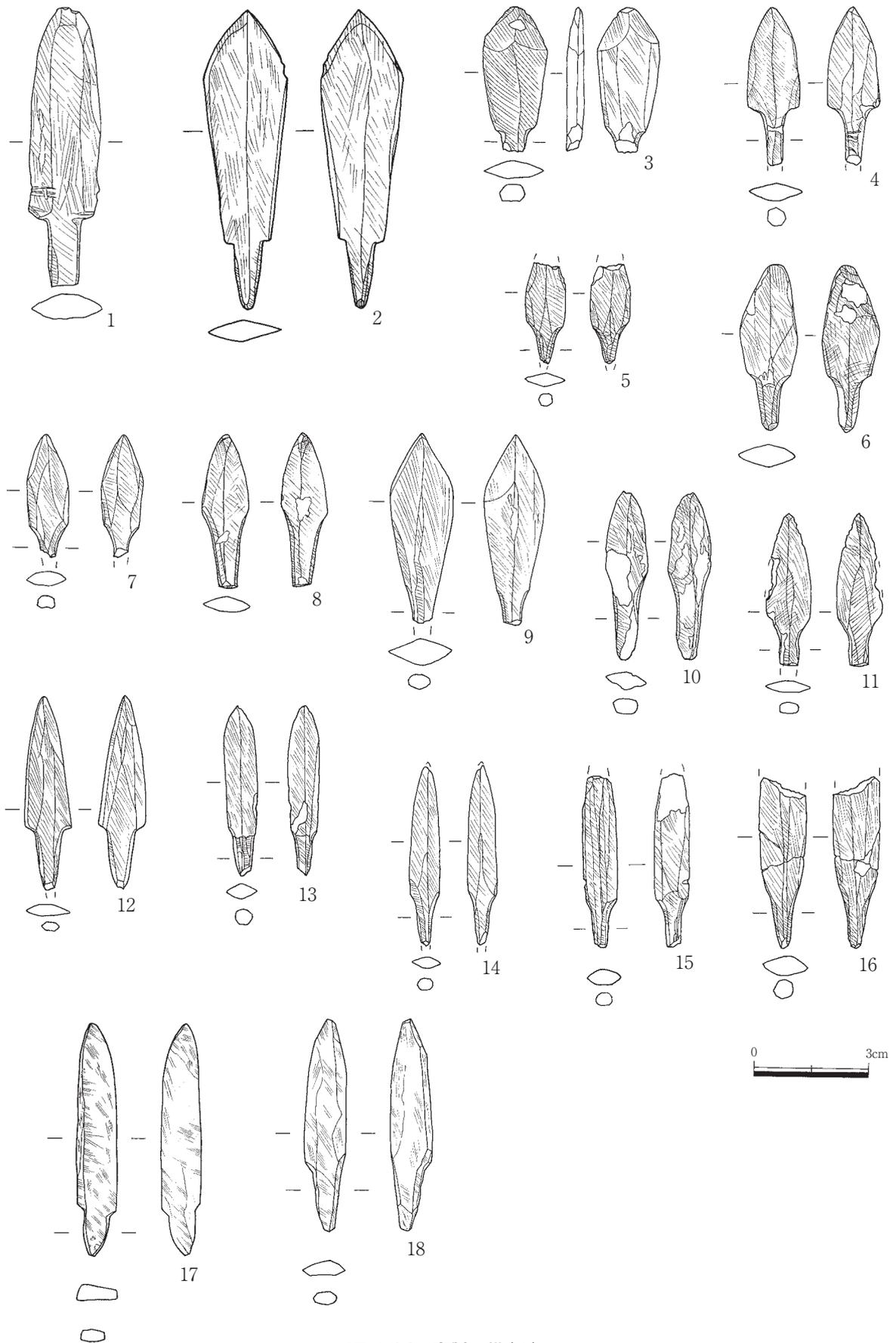
I 群3C類-21~23。小型で稜がわずかに残るもの。時期は弥生前期 I 3期が主体を占めるものと思われる。

I 群3D類-24、25。扁平で片面のみに稜があるもの。25については後期の溝D1SD112からの出土であるものの、弥生前期 I 3期相当の土器も混じっているところから、弥生前期 I 3期であろう。

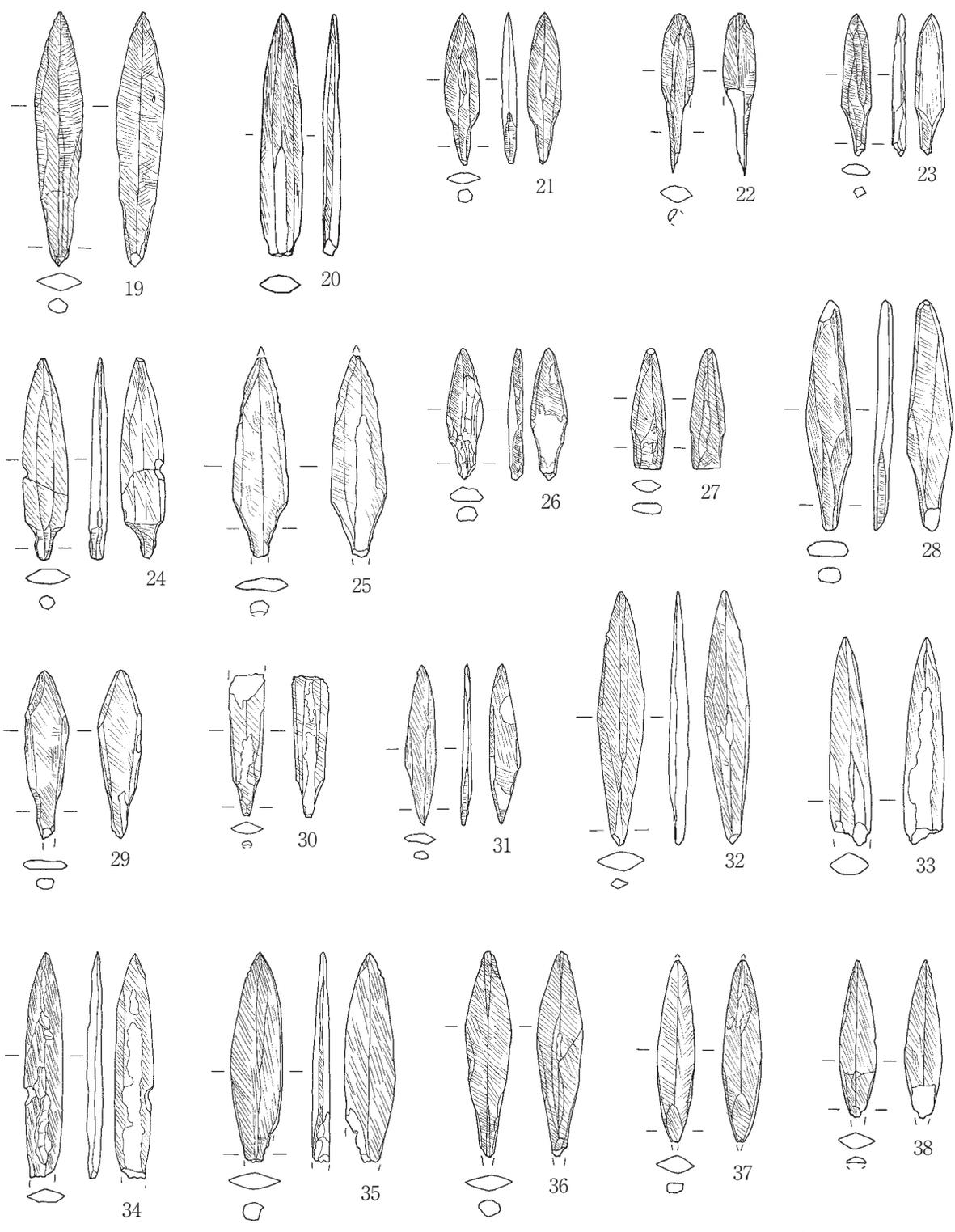
I 群3E類-26、27。小型で稜も不明確なもの。時期は弥生前期 I 2~3期と考えられる。

I 群4類-28~31。茎がわずかに作出され、鏃身が扁平なもの。時期は弥生前期 I 2期と考えられる。

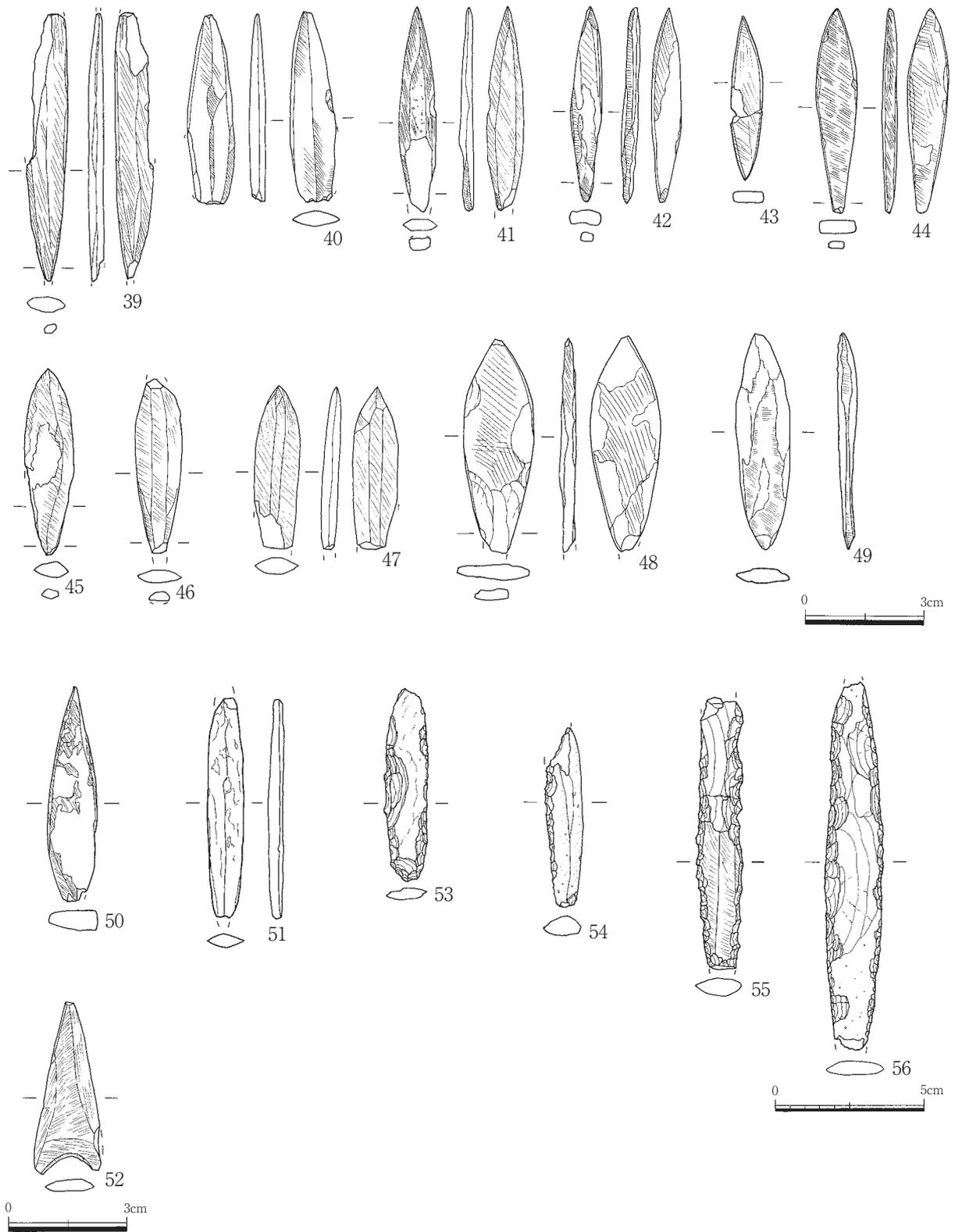
凸基式 II 群(32~51)



Ⅷ-14図 磨製石鏃(1)



Ⅷ-15図 磨製石鏃(2)



Ⅷ-16図 磨製石鏃(3)

No	器種	分類	時期	調査区	遺構名	全長(cm)	全幅	全厚	重量(g)	石質	分冊	図版番号	遺物番号	備考
1	磨製石鏃	I 1A			流路1	7.38	1.89	0.62	11.3	頁岩	8	流路1-21	9	
2	磨製石鏃	I 1A	I 2	C4	C4SK4085	7.86	2.19	0.55	9	粘板岩	2	C4-57	1	
3	磨製石鏃	I 1B	I 2	C4北	C4北SK4149	3.8	1.7	0.45	3.8	粘板岩	2	C4北-11	35	
4	磨製石鏃	I 1B	I	E5	E5SD502	4.17	1.41	0.49	2.6	粘板岩又は頁岩	3	E5-27	4	
5	磨製石鏃	I 1B		E3	E3SR302	3.5	1.4	0.45	2.8	粘板岩	8	大溝2-6	73	
6	磨製石鏃	I 1B			流路1	4.4	1.5	0.6	4.04	頁岩	8	流路1-21	8	
7	磨製石鏃	I 1B	I 3	C4北	C4北SK4200	[3.25]	1.1	0.4	[1.7]	頁岩	2	C4北-39	24	
8	磨製石鏃	I 1B	Ⅲ～Ⅳ	L3	L3ST306	[4.0]	1.22	0.38	[2.6]	頁岩	6	L3-9	2	
9	磨製石鏃	I 1B	I 2	C4北	C4北SK4149	[5.00]	1.6	0.65	[4.9]	粘板岩	2	C4北-11	36	
10	磨製石鏃	I 1B			流路1	4.4	1.1	0.47	2.48	頁岩	8	流路1-21	10	
11	磨製石鏃	I 1B			流路1	[4.0]	1.2	0.3	[1.66]	頁岩	8	流路1-21	4	
12	磨製石鏃	I 2A		C3		5.2	1.2	0.3	2.4	頁岩	2	C3-18	11	
13	磨製石鏃	I 2A	I 2	C4	C4SK4026	4.4	0.8	0.4	1.8	粘板岩	2	C4-22	27	
14	磨製石鏃	I 2B		C4北	包含層	4.75	0.75	0.3	1.3	粘板岩	2	C4北-45	6	
15	磨製石鏃	I 2B	I	E5	E5SK521	4.56	0.91	0.43	2.3	頁岩又は粘板岩	3	E5-7	1	
16	磨製石鏃	I 2B			大溝2	4.5	1.24	0.5	3.3	頁岩	8	大溝2-11	160	
17	磨製石鏃	I 3A	I 3	E2	E2SK232	6.1	1.1	0.5	3.6	頁岩	3	E2-6	35	
18	磨製石鏃	I 3A	I 3	E2	E2SK275	5.6	1.1	0.4	2.6	頁岩	3	E2-19	39	
19	磨製石鏃	I 3B	I	C1	C1SK1061	6.2	1.2	0.4	3	頁岩	2	C1-27	10	
20	磨製石鏃	I 3B		B1	包含層	[6.00]	1.1	0.45	[3.5]	粘板岩	1	B1-13	17	
21	磨製石鏃	I 3C	I 3	C4	C4SK4088	3.34	0.53	0.26	0.3	粘板岩	2	C4-60	35	
22	磨製石鏃	I 3C			流路1	3.9	0.8	0.4	1.17	頁岩	8	流路1-21	7	
23	磨製石鏃	I 3C			大溝1	3.5	0.8	0.4	1.1	粘板岩	8	大溝1-15	234	
24	磨製石鏃	I 3D	I 3	E5	E5SK529	5	1.1	0.4	2.5	頁岩又は粘板岩	3	E5-10	18	
25	磨製石鏃	I 3D	V 3	D1	D1SD112	4.92	1.37	0.32	2.8	頁岩	3	D1-57	9	
26	磨製石鏃	I 3E	I 2	C4	C4SK4029	3.2	0.9	0.3	1.3	頁岩	2	C4-25	30	
27	磨製石鏃	I 3E			流路1	2.98	0.85	0.3	1.16	頁岩	8	流路1-21	6	
28	磨製石鏃	I 4	I 2	C4	C4SK4040	5.64	1.13	0.44	3.6	粘板岩	2	C4-72	12	
29	磨製石鏃	I 4	I 2	C4北	C4北SK4179	[4.15]	1.1	0.2	[1.5]	粘板岩	2	C4北-23	42	
30	磨製石鏃	I 4	I	C1	C1SK1038	[3.5]	[0.9]	[0.3]	[1.2]	頁岩	2	C1-22	4	
31	磨製石鏃	I 4	I 2～3	E6	E6SK625	4	0.8	0.3	0.8	頁岩又は粘板岩	3	E6-6	27	
32	磨製石鏃	Ⅱ1A	I 2～3	C2	C2SK206	6.3	1.2	0.4	3.6	頁岩	2	C2-9	9	
33	磨製石鏃	Ⅱ1A		C4	C4SK4043	[5.1]	0.95	0.5	[2.8]	粘板岩	2	C4-34	8	
34	磨製石鏃	Ⅱ1A	I 3	C4	C4SK4050	5.53	0.97	0.4	2.4	粘板岩	2	C4-43	6	
35	磨製石鏃	Ⅱ1A	I 2～3	C2	C2ST201	5.2	1.3	0.4	3.5	頁岩	2	C2-3	7	
36	磨製石鏃	Ⅱ1B			流路1	[5.5]	1.15	0.4	[2.31]	頁岩	8	流路1-21	1	
37	磨製石鏃	Ⅱ1B			流路1	[4.5]	0.93	0.43	[2.3]	綠色岩	8	流路1-21	3	
38	磨製石鏃	Ⅱ1B			流路1	[3.91]	0.89	0.4	[1.5]	頁岩	8	流路1-21	2	
39	磨製石鏃	Ⅱ2		B4	B4SD415	6.8	1	0.5	3.1	粘板岩	1	B4-29	12	
40	磨製石鏃	Ⅱ2	I 2	C4	C4SK4084	[4.8]	1.1	0.4	[2.2]	粘板岩	2	C4-56	12	
41	磨製石鏃	Ⅱ2	I 3	C4	C4SK4043	5.22	0.94	0.37	1.1	粘板岩	2	C4-34	9	
42	磨製石鏃	Ⅱ2		E6	E6SX601	5	1.8	0.4	2.1	頁岩又は粘板岩	3	E6-36	319	
43	磨製石鏃	Ⅱ2	I 3～4		前期溝2	4.19	0.79	0.31	1.4	粘板岩	8	前期溝2-23	325	
44	磨製石鏃	Ⅱ2	I 2～3	C4	C4SK4018	5.2	1.1	0.3	2.7	頁岩	2	C4-8	11	
45	磨製石鏃	Ⅱ3A	I 3～4		前期溝2	4.77	1.29	0.38	2.5	頁岩	8	前期溝2-23	322	
46	磨製石鏃	Ⅱ3A	I 3～4		前期溝2	4.49	1.25	0.32	2.5	頁岩	8	前期溝2-23	323	
47	磨製石鏃	Ⅱ3A	I 3	E5	E5SK562	4.2	1.1	0.5	215	頁岩	3	E5-20	21	
48	磨製石鏃	Ⅱ3B	I 2～3	C2	C2ST201	5.45	1.8	0.4	5.7	粘板岩	2	C2-3	9	
49	磨製石鏃	Ⅱ3B	Ⅲ	K2	K2ST210	7.3	1.9	0.6	10.2	頁岩	6	K2-13	5	
50	磨製石鏃	Ⅱ3B			大溝1	7.3	1.7	0.7	11.5	頁岩	8	大溝1-11	190	
51	磨製石鏃	Ⅱ4	I 2	C4北	C4北SK4149	7.39	1.25	0.52	3.9	粘板岩	2	C4北-11	32	
52	磨製石鏃	Ⅲ	Ⅳ～Ⅴ	F4	F4SD412	4.35	1.67	0.36	2.4	緑泥片岩	4	F4-90	10	
53	磨製石鏃	Ⅳ	I 3	C4	C4SK4051	6.55	1.5	0.4	5		2	C4-45	25	未製品
54	磨製石鏃	Ⅳ	I 2	C4	C4SK4025	[6.1]	1.2	0.6	5.5	頁岩	2	C4-20	94	未製品
55	磨製石鏃	Ⅳ		C4	C4P4055	[9.25]	1.6	0.62	[13.7]	頁岩	2	C4-72	19	未製品
56	磨製石鏃	Ⅳ		C4	C4SK4060	[12.5]	1.95	0.46	[15.7]	粘板岩	2	C4-72	18	未製品

表Ⅷ-11 磨製石鏃観察表

II群1A類-32~35。身が長く、稜があり、大型のもの。時期は弥生前期I2~3期と考えられる。

II群1B類-36~38。小型で稜のあるもの。時期は弥生前期I2~3期と考えられる。

II群2類-39~44。身が長く扁平なもの。時期は弥生前期I2~4期と考えられる。

II群3A類-45~47。幅広で扁平なもの。時期は弥生前期I3~4期と考えられる。

II群3B類-48~50。幅広で扁平、大型のもの。49のみ石材が緑色片岩と考えられる。時期は弥生前期I3期以降と考えられる。

II群4類-51。石槍のように長身のもの。時期は弥生前期I2~3期と考えられる。被熱している可能性があり、赤褐色を呈する。

凹基式III群(52)

III群-52。扁平で大型のもの。所属時期は弥生中期から後期初頭と考えられる。

未製品IV群(53~56)

縁辺部に刃部加工を施し、部分的に研磨を施したものが認められる。55、56については転用品の可能性はある。

磨製石鏃には多様性があるものの、総じて時期的にはIII群の凹基式を除いて、弥生前期I2~4期が主体を占めている。弥生前期I2期及び弥生前期I2~3期の段階とII群3類が弥生前期I3~4期と新しい様相を示しているようである。石材は石包丁と同様に頁岩または粘板岩が主体を占めている。6、8、10のように側縁部が非対称のものは再生品の可能性が強い。

17. 打製石鏃(VIII-17~20図1~132)

打製石鏃は400点以上が出土している。B~F、L区からはそれぞれ40点あまりが出土している。また流路、溝からの出土も多い。本報告で遺構に伴い時期の判明しているものをここでは取り上げた。そのため、完形品に近いもの、分類に基準にそって満遍なく取り上げたために、遺跡全体としての数量的なものは把握できていない。

打製石鏃の形態は多種多様で基部形態が凹基を基本として、平基、凸基、有茎のものが認められる。最も多いものは凹基式、次いで平基式で、有茎のものは極めて少ない。また凸基式の中には凸基式と平基式との中間的なものを円基式とした。他の形態的な属性は多くあるものの、基部形態を基本として分類を行なった。また各時期に亘るものも、同一分類基準で区分した。

凹基式I群

小型のものと大型のものに細分した。

I群A類

1~4(弥生前期I2期)、7~14(弥生前期I3期)、71~73(弥生中後期IV2~V1期)、103~110(弥生後期V1~2期)、127~129(弥生後期V3期)。小型のもので側縁の加工が比較的縁辺部に限られてくる。若干ではあるが平基式に近いものもあるものの、本類に含めた。時期的には中期前半を除き満遍なく出土する傾向にある。中期末から後期初頭に向け、遺構の多さと相俟って多くなる傾向にあ

る。

I 群B類

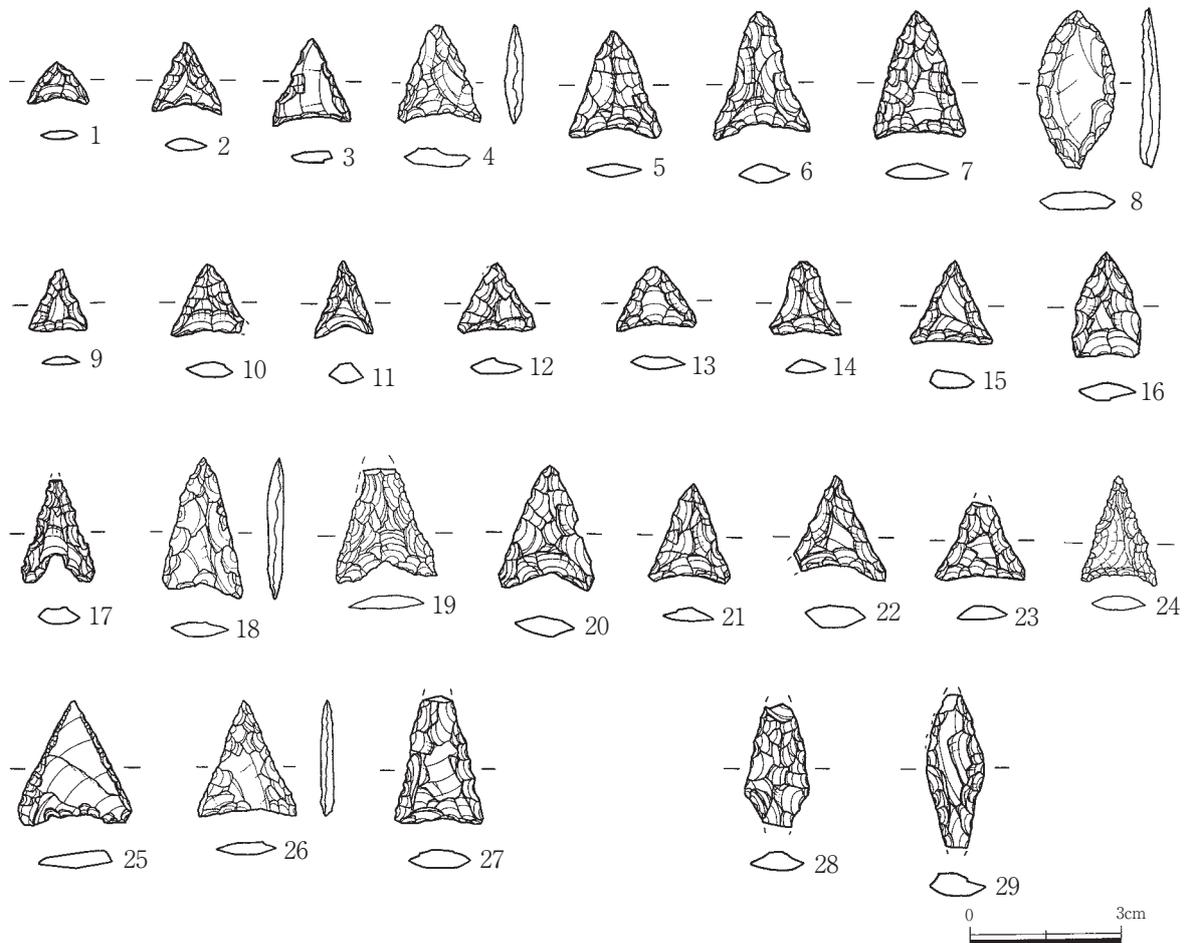
5~7(弥生前期 I 2期)、15~24(弥生前期 I 3期)、30~33(弥生中期 III期)、46~50(弥生中期 IV1~2期)、74~84(弥生中後期 IV2~V1期)、111~115(弥生後期 V1~2期)。中型から大型のもので明確に基部抉りが認められるもの。本類が最も出土点数が多い。時期的にも各時期に亘り出土する傾向にあり、III期からIV期にも認められる。中期の33、後期前半の112~115は大型の分類に含まれる。しかしながら大型の製品が際立って多いという現象ではない。

II 群

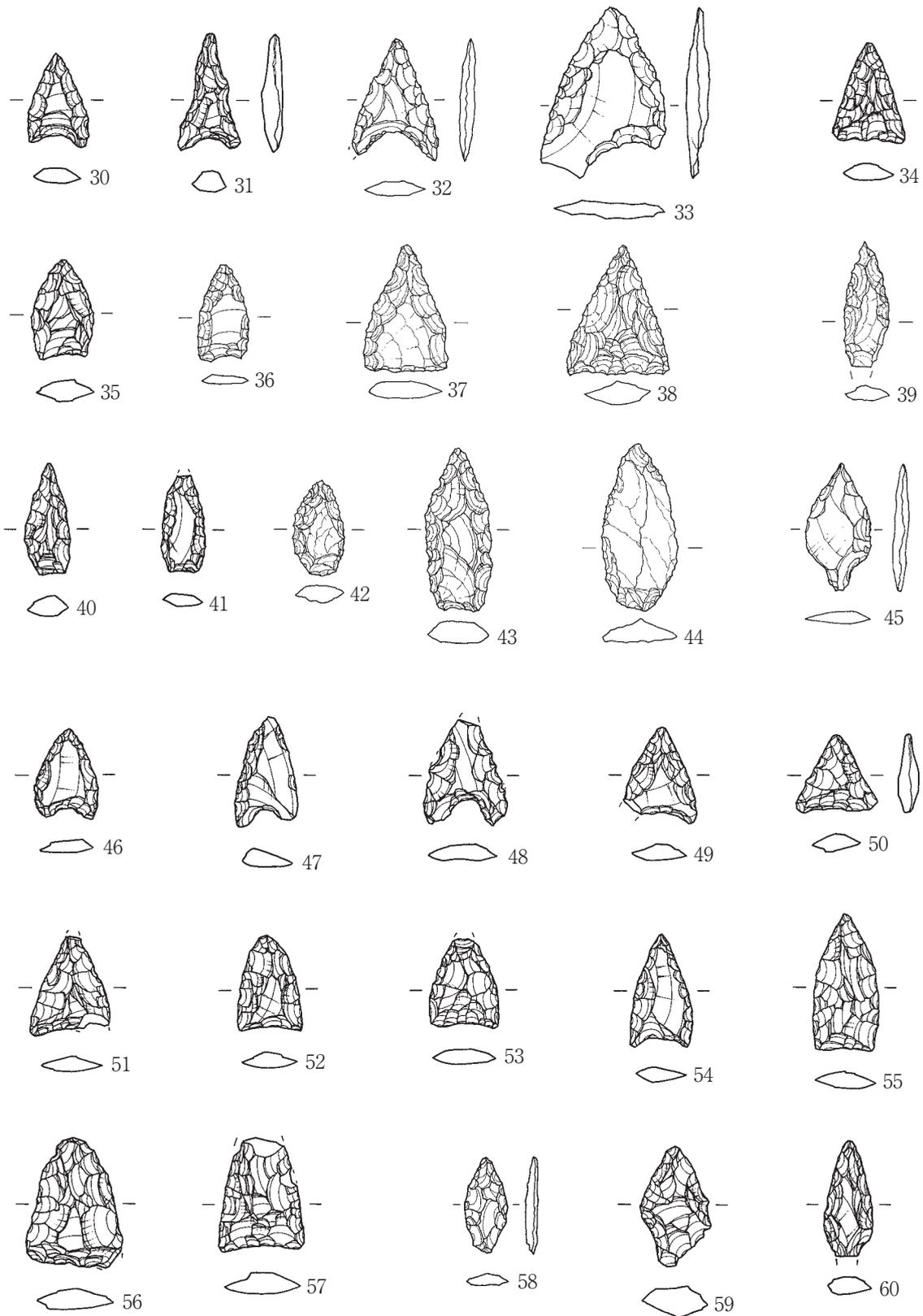
平基式の一群。25~27(弥生前期 I 3期)、34~38(弥生中期 III期)、51~57(弥生中期 IV1~2期)、61・62(弥生中期 IV2期)、85~90(弥生中後期 IV2~V1期)、116~124(弥生後期 V1~2期)、130~132(弥生後期 V3期)。量的には中期後半から後期初頭にかけてが多く、他の時期でも若干出土する。側縁がやや外湾するものが多く、内湾するものは極めて少ない。後期前半V3期の131、132は他のものより大きく、132は形態的にも鎌身が長いものである。

III 群

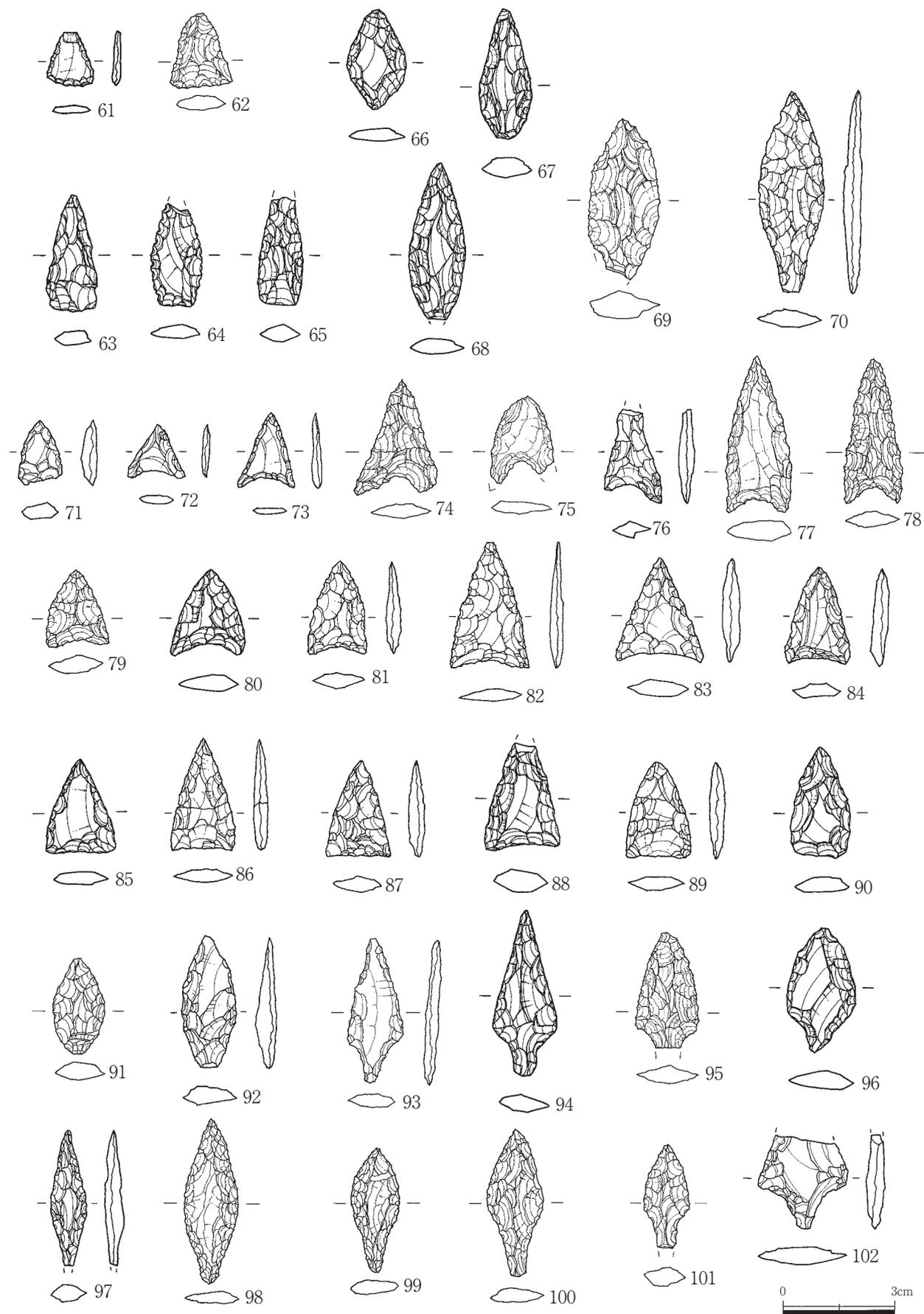
凸基式の一群。凸基式でも円基式に近いものをIII群A類、基部が有茎式にまではならないものすほまり尖頭器状を呈するものをIII群B類とした。



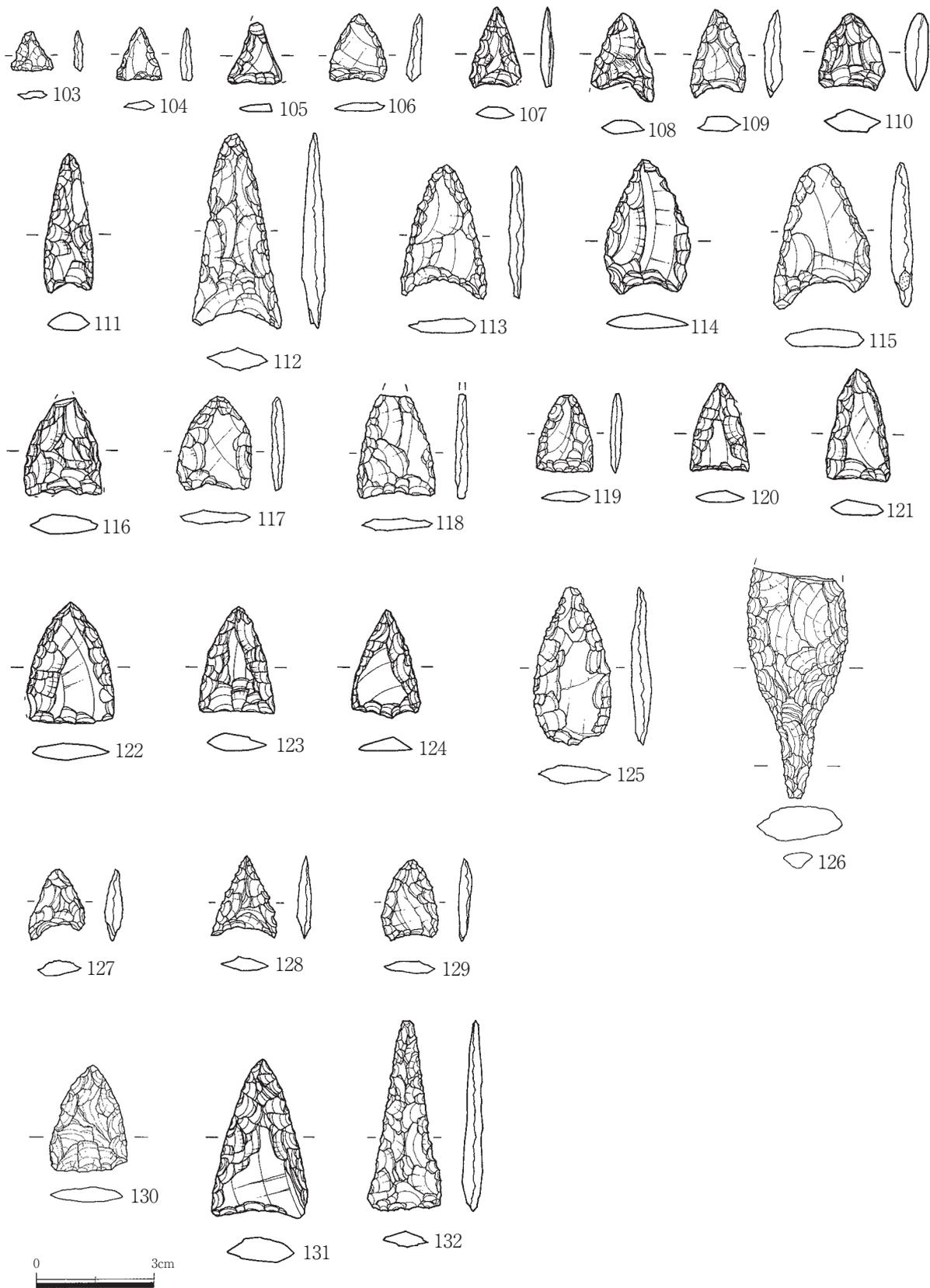
Ⅷ-17図 打製石鎌(1)



Ⅷ-18図 打製石鏃(2)



Ⅷ-19図 打製石鏃(3)



Ⅷ-20図 打製石鏃(4)

No.	器種	分類	時期	調査区	遺構名	全長(cm)	全幅	全厚	重量(g)	材質	分冊	図版番号	遺物番号	備考
1	打製石鏃	I A	I 2	C4北	C4北SK4149	0.85	1.19	0.23	0.2	サヌカイト	2	C4北-11		30
2	打製石鏃	I A	I 2	C4	C4SK4018	1.39	1.36	0.28	0.3	サヌカイト	2	C4-8		9
3	打製石鏃	I A	I 2~3	C4	C4SK4018	1.71	1.54	0.28	0.5	サヌカイト	2	C4-8		10
4	打製石鏃	I A	I 2~3	E6	E6SK625	1.9	1.6	0.3	0.8	サヌカイト	3	E6-6		24
5	打製石鏃	I B	I 2	C4	C4SK4048	2.12	1.79	0.34	0.8	サヌカイト	2	C4-42		49
6	打製石鏃	I B	I 2	C4	C4SK4061	2.53	1.91	0.41	1.1	サヌカイト	2	C4-51		30
7	打製石鏃	I B	I 2	C4	C4SK4061	2.51	1.8	0.35	1.2	サヌカイト	2	C4-51		29
8	打製石鏃	III B	I 2~3	A10	A10ST1001	3.15	1.5	0.25	1.9	サヌカイト	1	A10-3		11
9	打製石鏃	I A	I 3	E5	E5前期溝1	1.22	1.14	0.2	0.2	サヌカイト	8	前期溝1-5		16
10	打製石鏃	I A	I 3	C4	C4SK4034	1.42	1.41	0.37	0.4	サヌカイト	2	C4-30		36
11	打製石鏃	I A	I 3	C4	C4SK4008	1.45	1.1	0.4	0.35	サヌカイト	2	C4-6		14
12	打製石鏃	I A	I 3	E5	E5SK529	1.35	1.51	0.33	0.4	サヌカイト	3	E5-10		16
13	打製石鏃	I A	I 3	C4	C4SK4034	1.26	1.55	0.33	0.4	サヌカイト	2	C4-30		40
14	打製石鏃	I A	I 3	E5	E5SK571	1.48	1.39	0.32	0.4	サヌカイト	3	E5-23		8
15	打製石鏃	I B	I 3	C4北	C4北SK4199	1.66	1.59	0.43	0.7	サヌカイト	2	C4北-36		32
16	打製石鏃	I B	I 3	C4	C4SK4088	2.09	1.35	0.42	1.0	サヌカイト	2	C4-60		34
17	打製石鏃	I B	I 3	F4	F4SK490	2.03	1.44	0.36	0.6	サヌカイト	4	F4-54		6
18	打製石鏃	I B	I 3	F4	F4ST421	2.8	1.6	0.3	1.2	サヌカイト	4	F4-36		23
19	打製石鏃	I B	I 3	C1	C1前期溝1	(2.2)	1.9	0.3	(1.0)	サヌカイト	8	前期溝1-1		25
20	打製石鏃	I B	I 3	C4	C4SK4034	2.48	1.86	0.49	1.2	サヌカイト	2	C4-30		41
21	打製石鏃	I B	I 3	C4	C4SK4054	2.00	1.60	0.20	0.54	サヌカイト	2	C4-47		23
22	打製石鏃	I B	I 3	E5	E5SK507	2.06	1.78	0.46	1	サヌカイト	3	E5-4		6
23	打製石鏃	I B	I 3	E5	E5前期溝1	1.54	1.77	0.34	0.6	サヌカイト	8	前期溝1-5		17
24	打製石鏃	I B	I 3~4	C1	C1SD105	2.19	1.5	0.3	0.5	サヌカイト	8	前期溝2-23		320
25	打製石鏃	II	I 3	F4	F4ST405	2.46	2.24	0.4	1.4	チャート	4	F4-13		7
26	打製石鏃	II	I 3	B4	B4ST410	2.3	1.9	0.3	0.8	サヌカイト	1	B4-13		21
27	打製石鏃	II	I 3	F4	F4SK489	2.53	1.73	0.42	1.6	サヌカイト	4	F4-53		4
28	打製石鏃	IV	I 3~4	C5	C5SD501	2.43	1.26	0.44	1.2	サヌカイト	8	前期溝2-17		236
29	打製石鏃	IV	I 3~4		前期溝2						8	前期溝3-5		60
30	打製石鏃	I B	III	Q2	Q2ST207	22.8	15.0	4.6	1.1	サヌカイト	7	Q2-10		5
31	打製石鏃	I B	III 1~2	D1	D1SK1107	2.86	1.5	0.54	1.6	サヌカイト	3	D1-41		2
32	打製石鏃	I B	III 2	F3	F3ST303	3	2.1	0.4	1.5	サヌカイト	4	F3-10		23
33	打製石鏃	I B	III 3	K1	K1ST126	4.2	3.0	0.6	4.9	サヌカイト	6	K1-50		5
34	打製石鏃	II	III	Q2	Q2ST207	24.5	17.7	4.8	1.3	サヌカイト	7	Q2-10		7
35	打製石鏃	II	III 1~2	D1	D1ST104	2.40	1.47	0.58	1.60	サヌカイト	3	D1-6		5
36	打製石鏃	II	III	L2	L2SK241	2.37	1.24	0.27	0.8	サヌカイト	6	L2-52		7
37	打製石鏃	II	III~IV	L3	L3ST307	3.13	2.07	0.42	2.4	サヌカイト	6	L3-9		3
38	打製石鏃	II	III	K2	K2SK281	3.2	2.6	0.6	3.8	サヌカイト	6	K2-43		6
39	打製石鏃	III A	III~IV	L3	L3ST307	(3.02)	1.15	0.38	(1.4)	サヌカイト	6	L3-9		2
40	打製石鏃	III A	III	Q2	Q2ST207	27.5	11.1	5.5	1.2	サヌカイト	7	Q2-10		10
41	打製石鏃	III A	III	Q2	Q2ST207	23.9	10.8	4.0	0.9	サヌカイト	7	Q2-10		11
42	打製石鏃	III A	III~IV	L3	L3ST307	2.36	1.3	0.45	1.4	サヌカイト	6	L3-9		1
43	打製石鏃	III A	III	K2	K2SK281	4	1.6	0.5	3.5	サヌカイト	6	K2-43		7
44	打製石鏃	III A	III~IV	L3	L3ST306	4.14	1.9	0.6	3.8	片岩	6	L3-9		1
45	打製石鏃	IV	III~IV	B3	B3ST305	(3.2)	1.6	0.3	(1.9)	サヌカイト	1	B3-4		8
46	打製石鏃	I B	IV 1~2	D1	D1ST115	2.19	1.57	0.39	1.2	サヌカイト	3	D1-19		6
47	打製石鏃	I B	IV 1~2	D1	D1ST103	2.69	1.52	0.50	1.50	サヌカイト	3	D1-5		12
48	打製石鏃	I B	IV 1~2	D1	D1ST119	2.54	2.02	0.43	1.7	サヌカイト	3	D1-20		4
49	打製石鏃	I B	IV 1~2	D1	D1ST106	2.35	1.74	0.44	1.30	サヌカイト	3	D1-9		9
50	打製石鏃	I B	IV 1~2	D1	D1ST103	1.92	1.98	0.53	1.20	サヌカイト	3	D1-5		14
51	打製石鏃	II	IV 1~2	D1	D1ST123	2.42	1.95	0.41	1.4	サヌカイト	3	D1-22		5
52	打製石鏃	II	IV 1~2	F4	F4ST410	2.32	1.57	0.46	1.3	サヌカイト	4	F4-21		31
53	打製石鏃	II	IV 1~2	F4	F4ST410	2.19	1.67	0.42	1.4	サヌカイト	4	F4-21		27
54	打製石鏃	II	IV 1~2	D1	D1ST107	2.73	1.52	0.39	1.30	サヌカイト	3	D1-10		9
55	打製石鏃	II	IV 1~2	D1	D1ST105	3.33	1.60	0.49	2.30	サヌカイト	3	D1-8		24
56	打製石鏃	II	IV 1~2	F4	F4ST410	3.18	2.5	0.58	3.8	サヌカイト	4	F4-21		30
57	打製石鏃	II	IV 1~2	F4	F4ST410	2.79	2.06	0.6	2.9	サヌカイト	4	F4-21		28
58	打製石鏃	III B	IV 1~2	F3	F3SK325	2.3	1	0.3	0.7	サヌカイト	4	F3-21		8
59	打製石鏃	III B	IV 1~2	D1	D1ST103	2.93	1.72	0.83	2.70	サヌカイト	3	D1-5		13
60	打製石鏃	III B	IV 1~2	F4	F4ST410	2.83	1.18	0.49	1.6	サヌカイト	4	F4-21		29
61	打製石鏃	II	IV 2	L2	L2ST224	1.5	1.2	0.3	0.4	サヌカイト	6	L2-27		5
62	打製石鏃	II	IV 2	J4	J4SK401	2.0	1.67	0.4	1.2	サヌカイト	5	J4-27		3
63	打製石鏃	III A	IV 2	D1	D1SK1202	3.16	1.35	0.54	1.8	サヌカイト	3	D1-48		3
64	打製石鏃	III A	IV 2	L2	L2ST211	[2.78]	1.39	0.43	1.6	サヌカイト	6	L2-15		23
65	打製石鏃	III A	IV 2	L2	L2ST216	2.92	1.51	0.47	2.7	サヌカイト	6	L2-21		14
66	打製石鏃	III B	IV 2	L2	L2ST211	2.69	1.59	0.42	1.5	サヌカイト	6	L2-15		24

表Ⅷ-12 打製石鏃観察表(1)

No.	器種	分類	時期	調査区	遺構名	全長(cm)	全幅	全厚	重量(g)	材質	分冊	図版番号	遺物番号	備考
67	打製石鏃	ⅢB	IV2	L2	L2ST211	3.47	1.40	0.6	2.5	サヌカイト	6	L2-15		22
68	打製石鏃	ⅢB	IV2	L2	L2ST215	4.22	1.51	0.47	2.7	サヌカイト	6	L2-20		16
69	打製石鏃	ⅢB	IV2	K2	K2ST205	4.25	1.85	0.75	5.3	サヌカイト	6	K2-5		6
70	打製石鏃	IV	IV2	I4	I4ST405	5.4	1.8	0.5	3.6	サヌカイト	5	I4-7		6
71	打製石鏃	I A	IV2~V1	I2	I2ST214	1.7	1.2	0.4	0.8	サヌカイト	5	I2-24		13
72	打製石鏃	I A	IV1~V1	I2	I2SK286	1.4	1.5	0.2	0.3	サヌカイト	5	I2-53		15
73	打製石鏃	I A	IV~V	P8	P8008	2.05	1.5	0.3	0.4	サヌカイト	3	E8-4		1
74	打製石鏃	I B	IV2~V1	K1	K1ST120	3.1	2.2	0.4	1.3	サヌカイト	6	K1-37		10
75	打製石鏃	I B	IV2~V	L3	L3ST319	(2.34)	1.67	0.39	(1.2)	サヌカイト	6	L3-30		4
76	打製石鏃	I B	IV2~V1	I2	I2ST204	[2.5]	1.5	0.4	[1.0]	サヌカイト	5	I2-7		21
77	打製石鏃	I B	IV2~V	L3	L3SK369	4.21	1.79	0.59	4	サヌカイト	6	L3-31		6
78	打製石鏃	I B	IV~V	E7	E7ST714	3.92	1.58	0.45	2.5	サヌカイト	3	E7-15		2
79	打製石鏃	I B	IV2~V1	J4	J4ST413	2.06	1.69	0.49	1.1	サヌカイト	5	J4-20		27
80	打製石鏃	I B	IV2~V1	L2	L2ST227	2.34	2.00	0.49	1.5	サヌカイト	6	L2-29		11
81	打製石鏃	I B	IV2~V1	K1	K1ST120	2.5	1.6	0.4	1.4	サヌカイト	6	K1-37		9
82	打製石鏃	I B	IV2~V1	B4	B4ST401	3.4	2.15	0.35	2.3		1	B4-4		4
83	打製石鏃	I B	IV2~V1	I2	I2ST204	2.8	2.3	0.5	2.1	サヌカイト	5	I2-7		22
84	打製石鏃	I B	IV2~V1	I2	I2ST215	2.6	1.8	0.5	1.8	サヌカイト	5	I2-26		20
85	打製石鏃	II	IV~V	I4	I4ST402	2.53	1.86	0.41	1.6	サヌカイト	5	I4-4		5
86	打製石鏃	II	IV2~V1	I2	I2ST215	3.0	1.7	0.4	1.7	サヌカイト	5	I2-26		15
87	打製石鏃	II	IV2~V1	I2	I2ST215	2.6	1.7	0.4	1.6	サヌカイト	5	I2-26		18
88	打製石鏃	II	IV1~V1	L2	L2ST221	2.86	2.03	0.71	3.0	サヌカイト	6	L2-25		27
89	打製石鏃	II	IV2~V1	I2	I2ST215	2.6	1.7	0.4	1.7	サヌカイト	5	I2-26		17
90	打製石鏃	II	IV1~V1	L2	L2ST221	2.97	0.59	0.52	2.3	サヌカイト	6	L2-25		26
91	打製石鏃	ⅢB	IV2~V1	L2	L2SK260	2.61	1.40	0.53	1.4	サヌカイト	6	L2-54		8
92	打製石鏃	ⅢB	IV2~V1	K1	K1ST120	3.6	1.5	0.6	2.4	サヌカイト	6	K1-37		11
93	打製石鏃	IV	IV~V	F4	F4SX403	3.9	1.5	0.4	2	サヌカイト	4	F4-89		12
94	打製石鏃	IV	IV2~V	I2	I2ST210	4.44	1.72	0.55	2.6	サヌカイト	5	I2-18		40
95	打製石鏃	IV	IV2~V	L3	L3ST319	(3.1)	1.71	0.48	(2.1)	サヌカイト	6	L3-30		3
96	打製石鏃	IV	IV1~V1	L2	L2ST221	3.33	1.85	0.57	5.7	サヌカイト	6	L2-25		24
97	打製石鏃	IV	IV2~V1	I2	I2ST214	[3.7]	1.0	0.5	[1.3]	サヌカイト	6	I2-24		14
98	打製石鏃	IV	IV	E7	E7ST706	4.46	1.45	0.37	2.2	サヌカイト	3	E7-7		17
99	打製石鏃	IV	IV2~V1	C3	C3ST301P9	3.4	1.3	0.4	1.5	サヌカイト	2	C3-23		3
100	打製石鏃	IV	IV2~V1	J4	J4ST413	3.95	1.52	0.38	2.1	サヌカイト	5	J4-20		28
101	打製石鏃	IV	IV2~V1	L2	L2ST228	2.80	1.25	0.60	1.6	サヌカイト	6	L2-31		22
102	打製石鏃	IV	IV2~V1	I2	I2ST208	[2.6]	2.4	0.5	[2.4]	サヌカイト	5	I2-13		16
103	打製石鏃	I A	V1	K1	K1ST119	1.05	1.1	0.25	0.2	チャート	6	K1-35		2
104	打製石鏃	I A	IV2~V1	I2	I2ST214	1.4	1.2	0.3	0.4	サヌカイト	5	I2-24		12
105	打製石鏃	I A	V1	L2	L2ST214	1.57	1.37	0.25	0.4	サヌカイト	6	L2-19		37
106	打製石鏃	I A	V1~2	F4	F4ST408	1.7	1.4	0.4	0.7	サヌカイト	4	F4-17		23
107	打製石鏃	I A	V1~2	L2	L2ST214	2.02	1.29	0.35	0.7	サヌカイト	6	L2-19		35
108	打製石鏃	I A	V1~2	L2	L2ST214	2.24	1.57	3.8	1.0	サヌカイト	6	L2-19		36
109	打製石鏃	I A	V1	I2	I2SK220	2.3	1.4	0.4	1.2	サヌカイト	6	I2-38		7
110	打製石鏃	I A	V1	L2	L2ST210	1.96	1.67	0.62	1.7	サヌカイト	6	L2-13		6
111	打製石鏃	I B	V1~2	F4	F4ST408	3.55	1.25	0.5	1.8	サヌカイト	4	F4-17		25
112	打製石鏃	I B	V1~2	K1	K1SK115	5.0	2.3	0.6	4.5	サヌカイト	6	K1-62		3
113	打製石鏃	I B	V1~2	L2	L2ST214	3.4	2.2	0.4	2.7	サヌカイト	6	L2-19		33
114	打製石鏃	I B	V1~2	E4	E4ST407	3.42	2.2	0.44	2.7	サヌカイト	3	E4-11		9
115	打製石鏃	I B	V	J1	J1ST105	3.7	2.45	0.6	5.5	頁岩	5	J1-9		22
116	打製石鏃	II	V2	L2	L2ST215	2.46	1.97	0.53	2.5	サヌカイト	6	L2-20		15
117	打製石鏃	II	V1	F2	F2ST202	2.4	1.9	0.35	1.4	サヌカイト	4	F2-6		23
118	打製石鏃	II	V1	L2	L2ST201	[2.7]	2.0	0.35	[2.1]	サヌカイト	6	L2-4		28
119	打製石鏃	II	V1	I2	I2ST202	[2.0]	1.9	0.3	[0.8]	サヌカイト	5	I2-3		6
120	打製石鏃	II	V1	L2	L2ST201	2.25	1.51	0.37	1.1	サヌカイト	6	L2-4		31
121	打製石鏃	II	V1~2	L2	L2ST214	2.86	1.63	0.41	2.0	サヌカイト	6	L2-19		34
122	打製石鏃	II	V1	L2	L2ST201	3.08	2.21	0.47	3.3	サヌカイト	6	L2-4		27
123	打製石鏃	II	V1~2	F4	F4ST402	3.15	1.9	0.5	2	サヌカイト	4	F4-10		24
124	打製石鏃	II	V1~2	F4	F4ST402	2.7	1.75	0.25	1.3	サヌカイト	4	F4-10		25
125	打製石鏃	ⅢA	V1	F2	F2ST202	4.1	1.9	0.5	3.2	サヌカイト	4	F2-6		22
126	打製石鏃	IV	V	C2	C2SK229	(5.91)	2.52	0.86	(11.0)	サヌカイト	2	C2-16		3
127	打製石鏃	I A	V3	K1	K1ST105	1.8	1.4	0.5	0.8	サヌカイト	6	K1-12		2
128	打製石鏃	I A	V3	B4	B4SK611	2.1	1.7	0.4	0.7		1	B4-22		1
129	打製石鏃	I A	V3	K1	K1ST105	2.1	1.4	0.3	0.9	サヌカイト	6	K1-12		1
130	打製石鏃	II	V3~4	L3	L3ST314	2.73	1.98	0.4	1.8	サヌカイト	6	L3-15		9
131	打製石鏃	II	V2~4	F4	F4ST427	4.03	2.45	0.72	5.2	サヌカイト		F4-39		19
132	打製石鏃	II	V3	K1	K1ST105	4.9	1.9	0.5	3.7	赤色頁岩	6	K1-12		3

表Ⅷ-13 打製石鏃観察表(2)

Ⅲ群A類

39～44(弥生中期Ⅲ～Ⅳ期)、63～65(弥生中期Ⅳ2期)、125(弥生後期Ⅴ1期)。中期前半に占める割合が高く、前期、後期前半には認められないことから、中期前半から後半期にかけて盛行したと時期的な特徴を捉えることができる。

Ⅲ群B類

8(弥生前期Ⅰ2～3期)、58～60(弥生中期Ⅳ1～2期)、66～69(弥生中期Ⅳ2期)、91・92(弥生中後期Ⅳ2～Ⅴ1期)。8は弥生前期Ⅰ2～3期のA10ST1001住居跡からの出土であるものの、中期前半の遺物の混入が認められるところから中期の可能性もある。中期後半に特徴的な形態と考えられる。

Ⅳ群

茎を作出した一群。28・29(弥生前期Ⅰ3～4期)、45(弥生中期Ⅲ～Ⅳ期)、70(弥生中期Ⅳ2期)、93～102(弥生中後期Ⅳ2～Ⅴ1期)、126(弥生後期Ⅴ期)。銚状のもので時期的には中期末から後期初頭に特徴的に多い。磨製石鏃に有茎式のものが多いものの、弥生前期Ⅰ2～3期にまとまっているところから、時期的に同一性がない。126は大型品で後期前半の土坑C2SK229からの出土である。

時期的な特徴は、弥生前期Ⅰ期は打製石鏃は少なく、凹基式のものをもっとも多く、それもⅠ群A類の小型のものである。若干ではあるが、Ⅱ群の平基式が伴うようである。平基式は前期でも後出である。

中期は前半期には小型の凹基式は認められない。平基式、凸基式が増える傾向にある。中期後半からは凸基式でもⅢ群B類の尖頭器状のものが目立つようになる。

中期末から後期初頭は凹基式が多くなり、凹基式でも中型品が多い。また平基式、有茎式のⅣ群が特徴的に増加する。

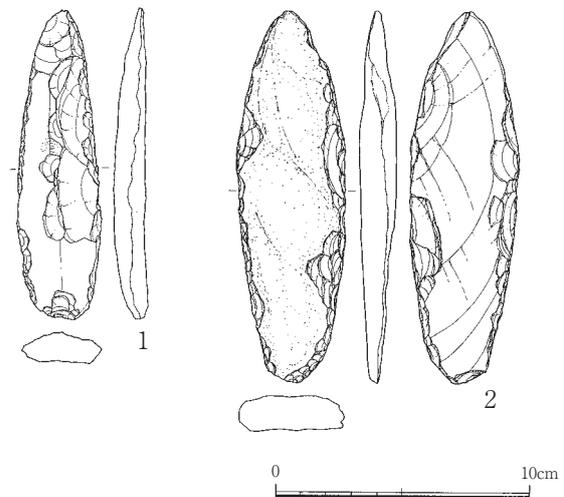
後期初頭は凹基式の小型品が復活気味である。中型品の凹基式、また平基式が目立つ。

後期前半は打製石鏃の相対的な数自体が少なくなる。分類上の特徴を把握することはできない。

石材はほとんどが搬入品のサヌカイトで占められており、僅かにチャート、頁岩、赤色頁岩が認められるだけである。

18. 石槍(VⅢ-21図1、2)

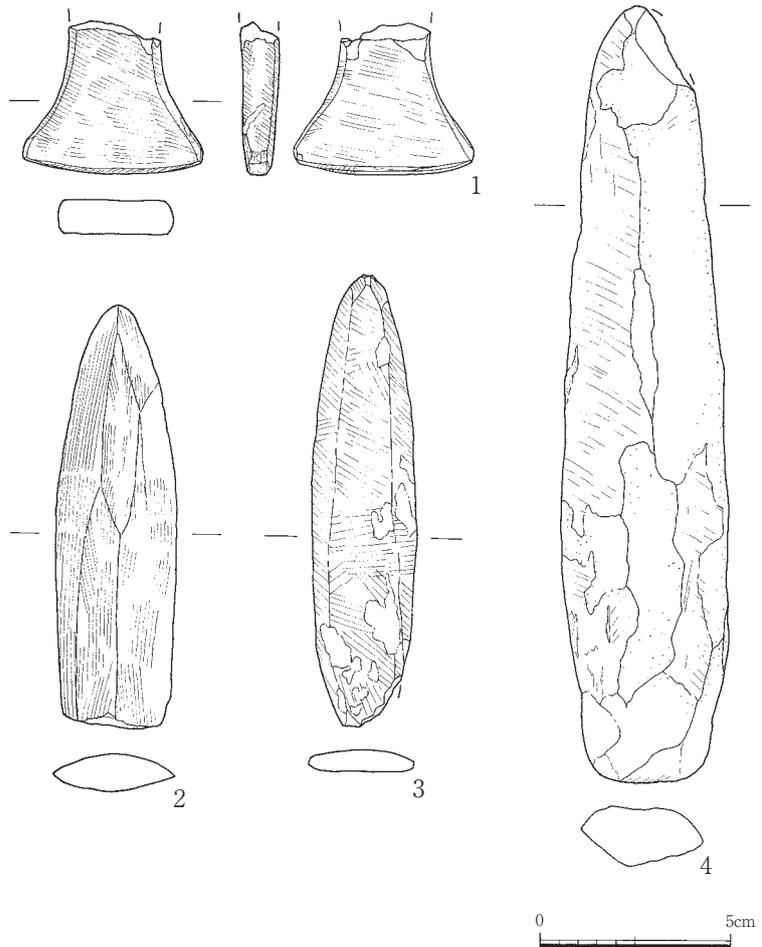
1は礫皮を残した剥片の両側縁に剥離調整を施す。裏面は一次剥離痕を大きく残し、縁辺部にのみ剥離調整を施している。頁岩製である。2も礫皮を残した剥片素材の両側縁に剥離調整を施し、裏面は一次剥離痕を大きく残し、縁辺部に剥離調整を加える。結晶片岩製である。時期は共に大溝からの出土のため特定できない。



VⅢ-21図 石槍

19. 石剣(VIII-22図1~4)

1は有柄式のもので、柄の部分が撥状に開く。先端部は欠損する。扁平で全体を研磨する。2は断面が菱形を呈し、全体を研磨する。3は扁平なもので全体を研磨し、側縁も面取り状に研磨する。4は長さ20.7cmで側縁に調整加工痕を残し、断面は三角形を呈し、表面には稜線が走る。表裏面共に部分的に研磨を施す。基部はややすぼまり柄状になる。時期は1が形式からして弥生前期I期、他のものについては明確ではない。2が弥生後期前半のV3期の住居跡J3ST410からの出土、4が中期の住居跡K2ST210からの出土である。



VIII-22図 石剣

No.	器種	分類	時期	調査区	遺構名	全長(cm)	全幅	全厚	重量(g)	材質	分冊	図版番号	遺物番号	備考
1	石槍		B4		B4SD421	12.25	3.30	1.2	64.4	頁岩	8	大溝1-15	240	
2	石槍		L1		L1SR107	1.47	4.33	1.5	45.2	結晶片岩	8	大溝2-18	252	

表VIII-14 石槍観察表

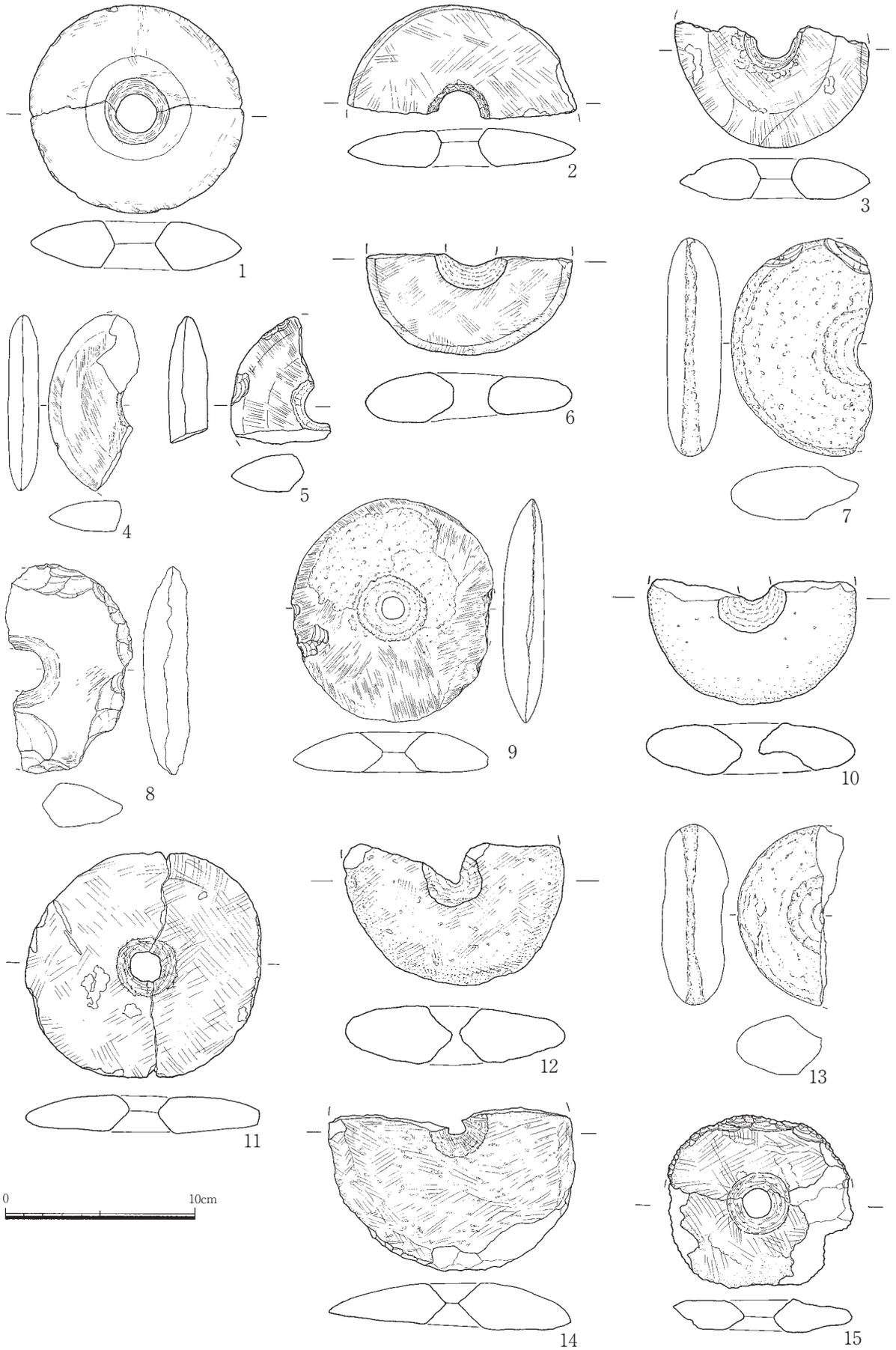
No.	器種	分類	時期	調査区	遺構名	全長(cm)	全幅	全厚	重量(g)	材質	分冊	図版番号	遺物番号	備考
1	石剣		E6		E6SR601	[4.08]	4.73	0.91	[23.7]	粘板岩	8	大溝1-8	128	
2	石剣		V3	J4	J4ST419	[11.17]	3.18	1.01	48.2	緑色岩	5	J4-25	28	
3	石剣		L3		L3SR301	11.98	2.8	0.6	34.3	頁岩	8	大溝2-19	263	
4	石剣		IV?	K2	K2ST216	20.7	4.5	1.6	244.4	頁岩	6	K2-17	1	

表VIII-15 石剣観察表

20. 環状石斧(VIII-23・24図1~21)

環状石斧は今回の調査では未製品も含めて21点出土している。前回の調査でも6点出土しており、多くの環状石斧が出土している。ここでは今回出土分のみを取り上げる。

分類は孔径を基本として、2cm前後のものをI群、1.5cm程度の小さなものをII群とした。また刃部の形態も従来言われているような研ぎ出し太型蛤刃石斧の刃部のようになるものだけでなく、刃部を先端が面取り状になるもの、更に全く研ぎ出しを行わず丸みを持つものが認められる



Ⅷ-23圖 環状石斧(1)

ところからそれらを勘案して、細分を設けた。また丁寧な研磨を施さないものも認められる。

未製品についても同様の形態を有するものもあるものの、製作途中であり最終形態は不明なために特に細分は設けなくてⅢ群で一括した。

I 群

孔径の大きなもので、刃部形態が研ぎ出し鋭いものをA類、刃部を面取りしたものをB類、刃部を研ぎ出さずに丸みを持つものをC類、敲打痕をそのまま残し、研磨を施さないものをD類とした。

I 群A類

1～5の5点で最も多い。1のみが乳白色のシルト岩で搬入品と考えられる。他は三波川御荷鉾緑色岩、または緑色岩である。全面に丁寧な研磨を施す。孔は両面から穿孔しており、断面が尖りその部分に摩耗痕が認められる。

I 群C類

6、7の刃部は丸みを持つ。研磨も余り丁寧ではない。

I 群D類

8は刃部に敲打痕を残したままのものである。表面はわずかに研磨するものの、裏面は落剥か、敲打で研磨を施さない。

II 群

孔径が小さいもの。細分についてはI群と同様である。

II 群A類

9は裏面が扁平なもので、全体の形状もやや楕円形に近い。全面を研磨し、刃部も研ぎ出す。部分的に刃部が面取り状に研磨するところもある。

II 群B類

10、11は刃部を面取り状に研磨するものである。11は裏面が扁平で余り厚みがない。C3区、F4区から二つに破損して出土したものが接合している。

II 群C類

12、13は刃部の研ぎ出しを行わず、丸みを持ったものである。12の孔は極めて小さい。13は全体に小型のもので厚みのあるものである。

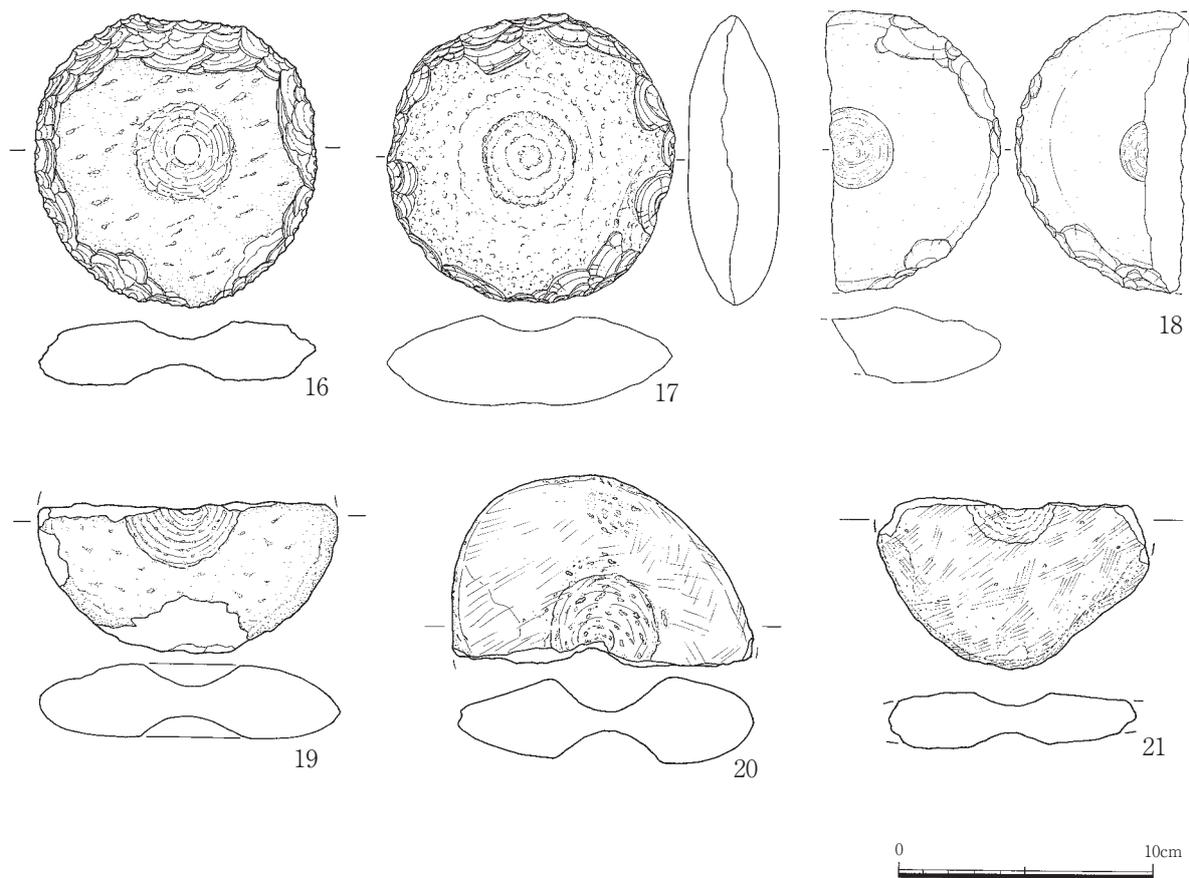
II 群D類

14、15は刃部に敲打痕を残したままのものである。14の孔径は小さい。表面は研磨を施すものの、裏面は敲打か、落剥したままで研磨を施さない。

III 群

未製品を一括した。16、17の2点以外は半折する。16～18は刃部に敲打痕を有する。20、21は研磨を施したもののだが、刃部には研磨を施さず丸みを持つものである。21は形状がややいびつである。未製品全てに表裏面中央部に凹みを持つものの、貫通せず孔にはなっていないもので占められる。16～18はI群A類またはB類の未製品、19～21はI群C類の未製品の可能性がある。

環状石斧の特徴は全体の形状が円盤形で中央部に円孔を有するものである。典型例としてI群A



Ⅷ-24図 環状石斧(2)

No	器種	分類	時期	調査区	遺構名	全長(cm)	全幅	全厚	重量(g)	石質	分冊	図版番号	遺物番号	備考
1	環状石斧	I A			流路1	11.0	11.2	2.5	437.5	シルト岩	8	流路1-31	11	
2	環状石斧	I A			流路1	12.0	[6.0]	1.9	[187.0]	頁岩または片岩	8	流路1-31	18	
3	環状石斧	I A			流路1	[6.65]	10.2	2.2	[190.0]	緑色岩	8	流路1-31	19	
4	環状石斧	I A			大溝1	9.28	4.85	1.64	93.0	緑色岩	8	大溝1-1	11	
5	環状石斧	I A			大溝2			[2.1]		緑色片岩	8	大溝2-14	190	
6	環状石斧	I C			大溝2	[11.6]	5.31	3.0	227.9	緑色片岩	8	大溝2-10	142	
7	環状石斧	I C	B4		B4SD406	[11.4]	7.43	2.88	[392.9]	御荷鉾緑色岩	1	B4-29	13	
8	環状石斧	I D	D1		包含層	11.10	6.70	2.30	215.40	御荷鉾緑色岩	3	D1-63	7	
9	環状石斧	II A	IV2	I4	I4ST412	11.6	10.63	2.16	400.6	緑色岩	5	I4-16	3	
10	環状石斧	II B			大溝1	11.0	6.58	2.71	295.8	御荷鉾緑色岩	8	大溝1-10	162	
11	環状石斧	II B	C3,F4		流路1	11.88	12.39	2.0	436.5	緑色岩	8	流路1-31	12	
12	環状石斧	II C			大溝2	11.61	7.51	3	352.2	御荷鉾緑色岩	8	大溝2-10	143	
13	環状石斧	II C			大溝2	9.53	5.53	3.51	221.1	緑色岩	8	大溝2-11	157	
14	環状石斧	II C	B1		包含層	12.82	[8.62]	2.37	[415.1]	御荷鉾緑色岩	1	B1-14	20	
15	環状石斧	II D			流路1	9.1	[9.6]	1.7	[209.3]	緑色岩	8	流路1-31	17	
16	環状石斧未製品	III			流路1	11.64	11.10	2.53	526.4	緑色岩	8	流路1-31	15	
17	環状石斧未製品	III	B1		包含層	11.1	11.34	3.58	667.1	御荷鉾緑色岩	1	B1-14	18	
18	環状石斧未製品	III			流路1	11.2	6.9	3.0	337.4	緑色岩	8	流路1-31	16	
19	環状石斧未製品	III	B1		包含層	12.76	[5.92]	3	[334.7]	御荷鉾緑色岩	1	B1-14	19	
20	環状石斧未製品	III	I	C3	C3SD310	[12.4]	[7.6]	3.7	[507.2]	緑色岩	2	C3-21	6	
21	環状石斧未製品	III	E6		包含層	10.78	6.82	2.28	272.2	御荷鉾緑色岩	3	E6-42	15	

表Ⅷ-16 環状石斧観察表

類をあげることができる。I群A類の孔には摩滅痕が認められるものがほとんどであるが、摩滅痕は著しいものが多く、何らかに装着後、回転摩擦のような痕跡の可能性が残されている。それはII群のように孔径が小さく、棒状の柄に装着されたのかどうか疑問符が付くようなものも存在していることから、従来言われているような装着方法以外の可能性も残されている。

破損形態は中央部で半折するものが占められており、また未製品についても中央部で半折するもので占められている。環状石斧の石材は1点の搬入品を除いて、地元産の御荷鉾緑色岩類で占められており、極めて硬質の岩質であるにも関わらず、中央部で半折するという、特異な力が加わっている。刃部には使用による刃こぼれ、欠損が認められず、半折するには中央部に大きな力が加わっていたことが考えられる。従来未製品の半折品については孔の穿孔の際の失敗として考えられているものの、しかし果たして未製品の6点の内4点も製作途中での失敗として廃棄されたと理解するには、疑問符が付く。多くの失敗を生み出すような稚拙な技術力とは考えられず、かつ硬質の石材であるところから意図的な破損の可能性も残されている。

出土状況は流路、大溝、包含層出土で大半である。その中で唯一完形品9が弥生中期後半の住居跡I4ST421から出土している。半折品は遺構に伴うことがなく、放棄された状態で出土する傾向にある。半折品の特徴的な出土例はない。

未製品16、17は研磨は施さず、刃部の敲打、孔の穿孔途中での未製品である。こうした状態での保管が考えられ、最終仕上げは別途行なわれた可能性が考えられる。

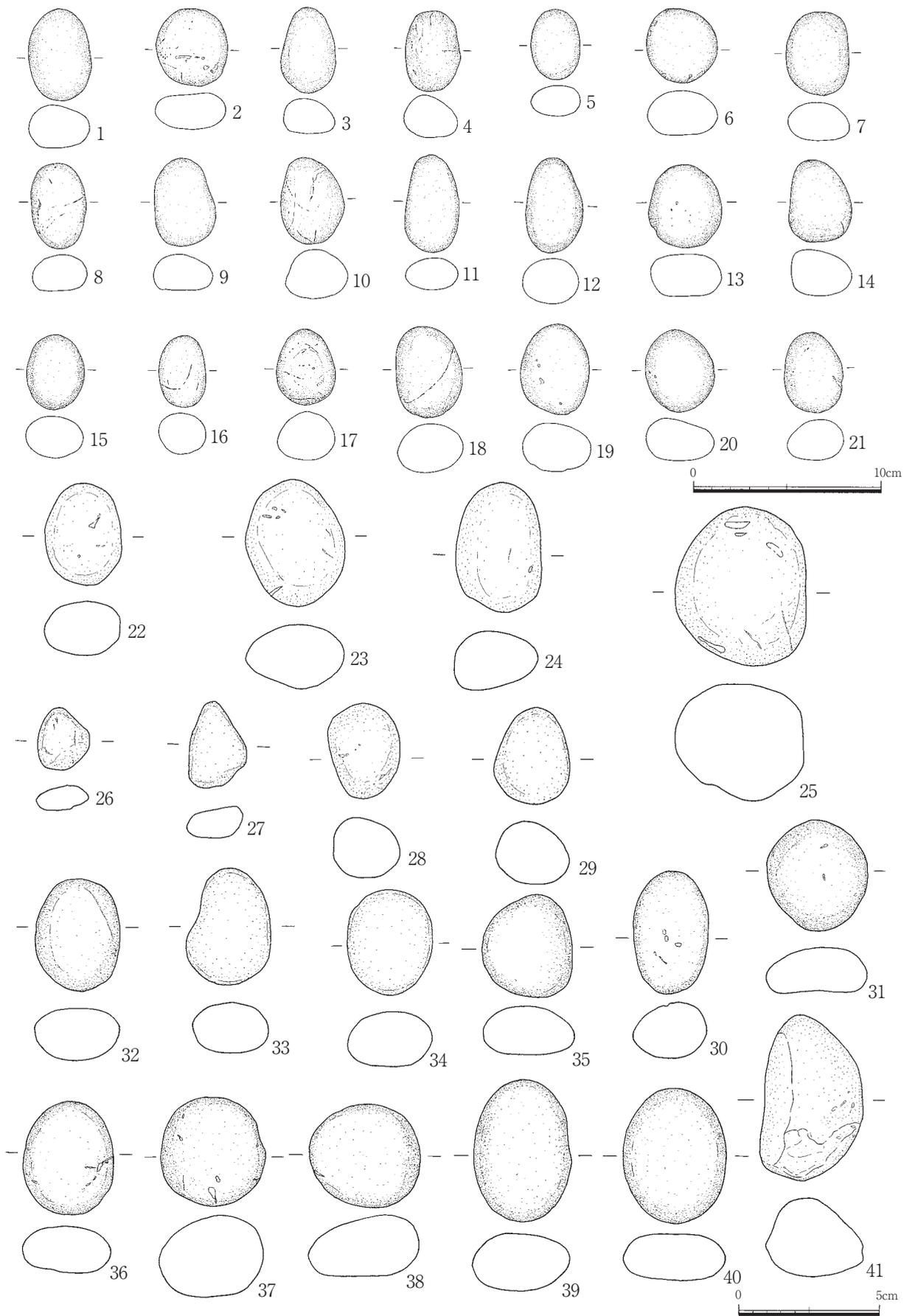
所属時期については、9が弥生中期IV2期で他のものについては明確にはできない。

21. 投弾(VIII-25図1~41)

自然の小型の円礫、垂円礫に調整加工を施すことのないもので、数点まとめて出土したものを投弾とした。中には1点と単発で出土するものもあり、他の自然石とは明確な区別はできないものの、形状、大きさから投弾としたものもある。重さは30gから50gのものが多い。石材は砂岩が大半を占め、チャートがわずかに混じる程度であり、特に搬入石材と言ったものは認められない。

27ヶ所の遺構から150点あまりが出土している。最もまとめて出土した遺構はJ4区の後期前半の住居跡J4ST414から35点がまとめて出土している。K1区の溝状土坑のK1SD116からも16点まとまっている。それ以外は10点前後のものが多いようである。住居跡からの出土例が多く、20軒から出土しており、調査区ではI2区、E4区、K1区が多い。

時期は中期末から後期前半に集中するようである。



Ⅷ-25図 投弾

No.	器種	分類	時期	調査区	遺構名	全長(cm)	全幅	全厚	重量(g)	石質	分冊	図版番号	遺物番号	備考
1	投弾		IV2~V1	I2	I2ST208	4.92	3.35	2.3	52.5	砂岩	5	I2-13	20	
2	投弾		IV2~V1	I2	I2ST208	4.18	3.8	1.92	42.6	砂岩	5	I2-13	21	
3	投弾		IV2~V1	I2	I2ST208	4.62	2.95	1.89	34.5	砂岩	5	I2-13	22	
4	投弾		IV2~V1	I2	I2ST208	4.37	2.94	2.23	40.1	砂岩	5	I2-13	23	
5	投弾		IV2~V1	I2	I2ST208	3.75	2.6	1.6	23.1	砂岩	5	I2-13	24	
6	投弾		IV2~V1	I2	I2ST211	3.98	3.75	2.42	50.6	砂岩	5	I2-19	7	
7	投弾		IV2~V1	I2	I2ST211	4.44	3.33	2.05	45.8	砂岩	5	I2-19	8	
8	投弾		IV2~V1	I2	I2ST211	4.57	2.95	1.97	37.2	砂岩	5	I2-19	9	
9	投弾		IV2~V1	I2	I2ST211	4.68	3.28	1.9	42.5	砂岩	5	I2-19	10	
10	投弾		IV2~V1	I2	I2ST211	4.6	3.4	2.6	54.3	砂岩	5	I2-19	11	
11	投弾		IV2~V1	I2	I2ST211	5.23	2.9	1.7	34.8	砂岩	5	I2-19	12	
12	投弾		IV2	I2	I2SK203	5.08	3.04	2.39	52.3	砂岩	5	I2-43	11	
13	投弾		IV2	I2	I2SK203	4.47	3.91	2.24	56.1	砂岩	5	I2-43	12	
14	投弾		IV2	I2	I2SK203	4.37	3.34	2.43	54.4	砂岩	5	I2-43	13	
15	投弾		IV2	I2	I2SK203	4.04	3.08	2.23	38	砂岩	5	I2-43	14	
16	投弾		IV2	I2	I2SK203	3.82	2.52	2.2	30.3	砂岩	5	I2-43	15	
17	投弾		IV2	I2	I2SK203	4.06	3.12	2.6	42.8	砂岩	5	I2-43	16	
18	投弾		IV2	I2	I2SK203	4.87	3.5	2.55	63.3	砂岩	5	I2-43	17	
19	投弾		IV2	I2	I2SK203	4.82	3.64	2.57	63.3	砂岩	5	I2-43	18	
20	投弾		IV2	I2	I2SK203	4.41	3.65	2.25	50	砂岩	5	I2-43	19	
21	投弾		IV2	I2	I2SK203	4.34	3.1	2.2	42.2	砂岩	5	I2-43	20	
22	投弾		V1	K1	K1ST119	3.6	2.7	1.9	29.3	チャート	6	K1-35	8	
23	投弾		V1	K1	K1ST119	4.5	3.5	2.3	51.9	砂岩	6	K1-35	9	
24	投弾		V1	K1	K1ST119	4.6	3.1	2.1	47	砂岩	6	K1-35	10	
25	投弾		V1	K1	K1ST119	5.7	4.7	4.2	145.3	砂岩	6	K1-35	11	
26	投弾		IV2~V1	K1	K1SD116	2.2	1.9	0.9	4.4	チャート	6	K1-108	8	
27	投弾		IV2~V1	K1	K1SD116	3.1	2.1	1	10	砂岩	6	K1-108	9	
28	投弾		IV2~V1	K1	K1SD116	3.4	2.6	2.1	26.1	砂岩	6	K1-108	10	
29	投弾		IV2~V1	K1	K1SD116	3.4	2.7	2.2	27.9	砂岩	6	K1-108	11	
30	投弾		IV2~V1	K1	K1SD116	4.4	2.6	1.9	32.7	砂岩	6	K1-108	12	
31	投弾		IV2~V1	K1	K1SD116	4	3.6	1.6	38.6	砂岩	6	K1-108	13	
32	投弾		IV2~V1	K1	K1SD116	4.1	3	1.9	35.7	砂岩	6	K1-108	14	
33	投弾		IV2~V1	K1	K1SD116	4.2	3	1.8	31.4	砂岩	6	K1-108	15	
34	投弾		IV2~V1	K1	K1SD116	3.8	3	2	32.9	砂岩	6	K1-108	16	
35	投弾		IV2~V1	K1	K1SD116	3.7	3.2	1.7	30.5	砂岩	6	K1-108	17	
36	投弾		IV2~V1	K1	K1SD116	4.1	3.2	1.7	33.7	砂岩	6	K1-108	18	
37	投弾		IV2~V1	K1	K1SD116	3.9	3.7	2.9	60	砂岩	6	K1-108	19	
38	投弾		IV2~V1	K1	K1SD116	3.7	3.9	2.1	45.6	砂岩	6	K1-108	20	
39	投弾		IV2~V1	K1	K1SD116	5.1	3.5	2	50.1	砂岩	6	K1-108	21	
40	投弾		IV2~V1	K1	K1SD116	4.8	3.7	1.7	45.1	砂岩	6	K1-108	22	
41	投弾		IV2~V1	K1	K1SD116	6	3.7	2.8	71	砂岩	6	K1-108	23	

表VIII-17 投弾観察表

22. 石製紡錘車 (Ⅶ-26図1~16)

石製紡錘車は比較的規格性が高く、若干大きさ、重量に相違が認められるものの、特に細部の属性の変化は少なく、分類は設けなかった。未製品をⅡ群と分類したのみである。

Ⅰ群

1~10は完成品で径5cm、重さ30g前後で中央部に5mm程の孔を穿つ。厚さは研磨によりほぼ均一に仕上げられており、縁辺部も研磨して、面取りをする。5~10は破損品である。時期は弥生前期Ⅰ2~4期に含まれる。石材は粘板岩を主体として、剥離の容易な堆積岩類を使用する。出土状況は前期の土坑、溝跡からのものが多い。

Ⅱ群

11~16は石製紡錘車の未製品で縁辺部を打ち欠きにより円形に仕上げ、部分的に研磨を施す。11は極めて完成品に近いもので中央部の円孔だけが作出されていない。他のものも表裏面を部分的に研磨するものが多い。出土状況は完成品と同様であり、時期も同じである。

No.	器種	分類	時期	調査区	遺構名	全長(cm)	全幅	全厚	重量(g)	材質	分冊	図版番号	遺物番号	備考
1	石製紡錘車	Ⅰ		C3	流路1	5.45	5.7	0.7	28.6	黒色頁岩	8	流路1-33		16
2	石製紡錘車	Ⅰ		F4	F4包含層Ⅳ層	5.7	5.7	0.80	34.3	粘板岩	4	F4-94		15
3	石製紡錘車	Ⅰ	Ⅰ2	E2	E2SK249	6.5	5.8	0.6	41.3	黒色頁岩	3	E2-10		17
4	石製紡錘車	Ⅰ	Ⅰ2	E5	E5SK517	5.4	5.74	6.2	29.7	頁岩	3	E5-6		3
5	石製紡錘車	Ⅰ		F4	F4包含層Ⅳ層	5.2	4.0	0.5	16.5	粘板岩	4	F4-94		16
6	石製紡錘車	Ⅰ	Ⅰ	C1	C1SK1004	5.5	[3.3]	0.8	[22.4]	緑色片岩	2	C1-8		14
7	石製紡錘車	Ⅰ		E6	E6SR601	4.55	[3.06]	0.39	[6.7]	粘板岩	8	大溝1-8		129
8	石製紡錘車	Ⅰ	Ⅰ3~4	E3	E3SD310	5.7	3.5	0.7	21.8	粘板岩	8	前期溝2-5		29
9	石製紡錘車	Ⅰ	Ⅰ3~4	C1	C1SD105	5.7	2.89	0.72	16.3	粘板岩	8	前期溝2-23		328
10	石製紡錘車	Ⅰ	Ⅰ	C4	C4SK4032	[4.42]	[1.61]	[0.83]	[7.6]	頁岩	2	C4-26		1
11	石製紡錘車未製品	Ⅱ		C3	流路1	6.4	6.6	1.1	74.5	黒色頁岩	8	流路1-33		17
12	石製紡錘車未製品	Ⅱ	Ⅰ1~2	F4	F4ST408	7.4	7.4	0.8	75.3	粘板岩	4	F4-17		22
13	石製紡錘車未製品	Ⅱ	Ⅰ3	E5	E5SK560	6.2	6.2	1.2	60.2	粘板岩	3	E5-17		28
14	石製紡錘車未製品	Ⅱ	Ⅰ3~4	C1	C1SD105	6.33	5.81	0.71	32.0	頁岩	8	前期溝2-23		329
15	石製紡錘車未製品	Ⅱ	Ⅰ3~4	E5	E5SD105	6.3	6.3	1.2	54.1	頁岩	8	前期溝2-9		99
16	石製紡錘車未製品	Ⅱ	Ⅰ2~3	E5	E5SK518	7.5	7.1	0.7	66.9	粘板岩	3	E5-6		8

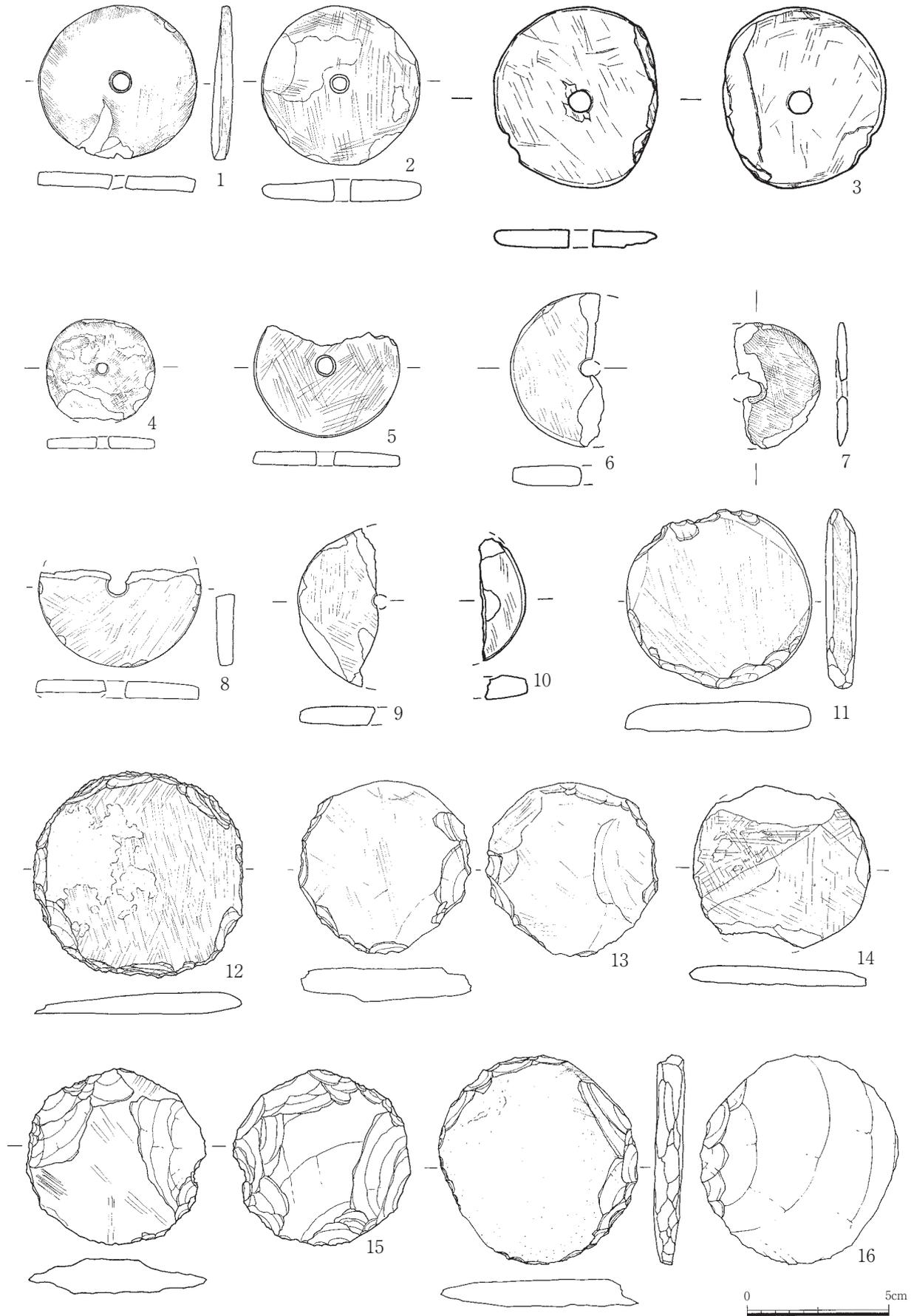
表Ⅶ-18 石製紡錘車観察表

23. 杵状石器 (Ⅶ-27図1~3)

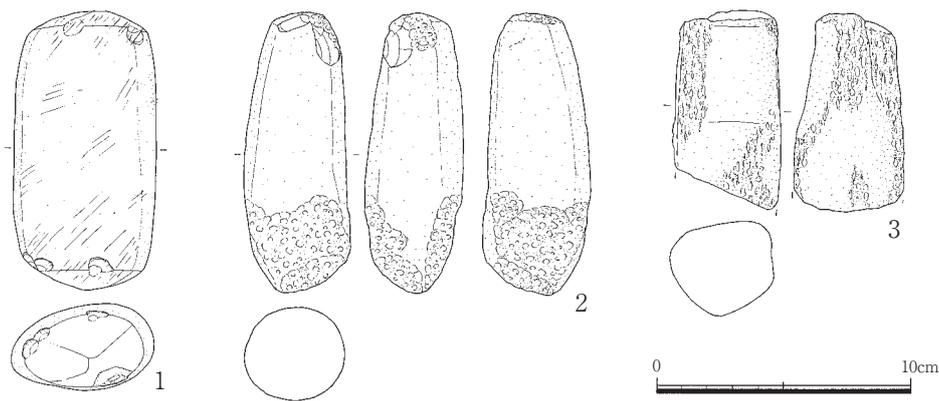
1、2は両端部に敲打痕が認められる。3は一端部が欠損する。部分的に敲打痕が認められるところから叩石の可能性があり、柄付叩石の柄部分の可能性もある。3点共に石質は砂岩である。時期は流路資料のために特定できない。

24. 石棒 (Ⅶ-28図1~3)

1は把手が付いたもので、他は欠損する。敲打により成形し、部分的に研磨を施す。2は長さ34.2cmの大型のもので、自然礫を素材としている。両端部は擦痕が認められ、部分的に赤色顔料が付着しているところから、杵の可能性もある。3は石棒の可能性のあるものである。敲打調整後に部分的に研磨を施す。石材は2の結晶片岩を除いて、他は砂岩である。時期は2が弥生前期Ⅰ3期の土坑C4SK4080からの出土である。



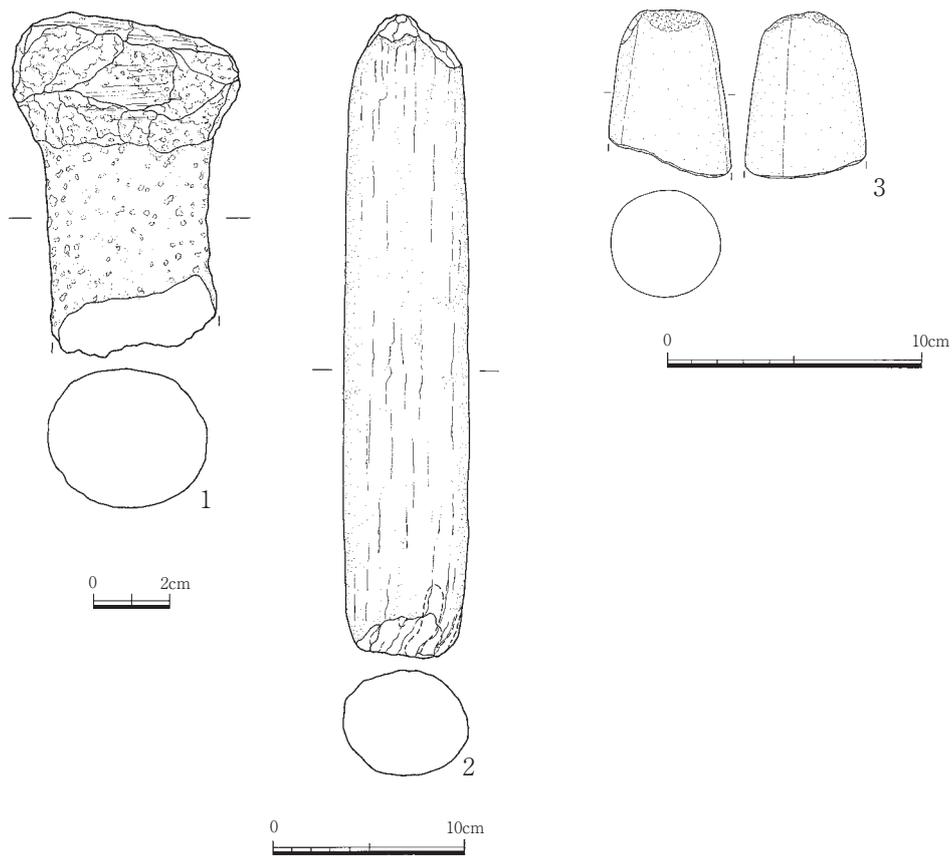
Ⅷ-26図 石製紡錘車



Ⅷ-27図 杵状石器

No	器種	分類	時期	調査区	遺構名	全長(cm)	全幅	全厚	重量(g)	石質	分冊	図版番号	遺物番号	備考
1	杵状石器		C3		流路1	11.0	5.6	4.0	423.3	砂岩	8	流路1-32	12	
2	杵状石器?		E6		E6SR602	11.1	4.2	3.8	250.9	砂岩	8	大溝2-10	144	
3	杵状石器?		E6		E6SX601・3層	7.8	4.2	4.3	196.8	砂岩	3	E6-32	256	

表Ⅷ-19 石杵観察表



Ⅷ-28図 石棒

No	器種	分類	時期	調査区	遺構名	全長(cm)	全幅	全厚	重量(g)	石質	分冊	図版番号	遺物番号	備考
1	石棒		D1		D1SD1009	[9.1]	6.0	3.7	[253.0]	砂岩	8	大溝1-1	13	
2	石棒		C4		C4SK4089	34.2	6.5	5.5	2350	結晶片岩	2	C4-63	23	
3	石棒?		E6		E6SR602	6.6	4.9	4.8	185.9	砂岩	8	大溝2-10	145	

表Ⅷ-20 石棒観察表

25. 石製装飾品 (VIII-29図1~26)

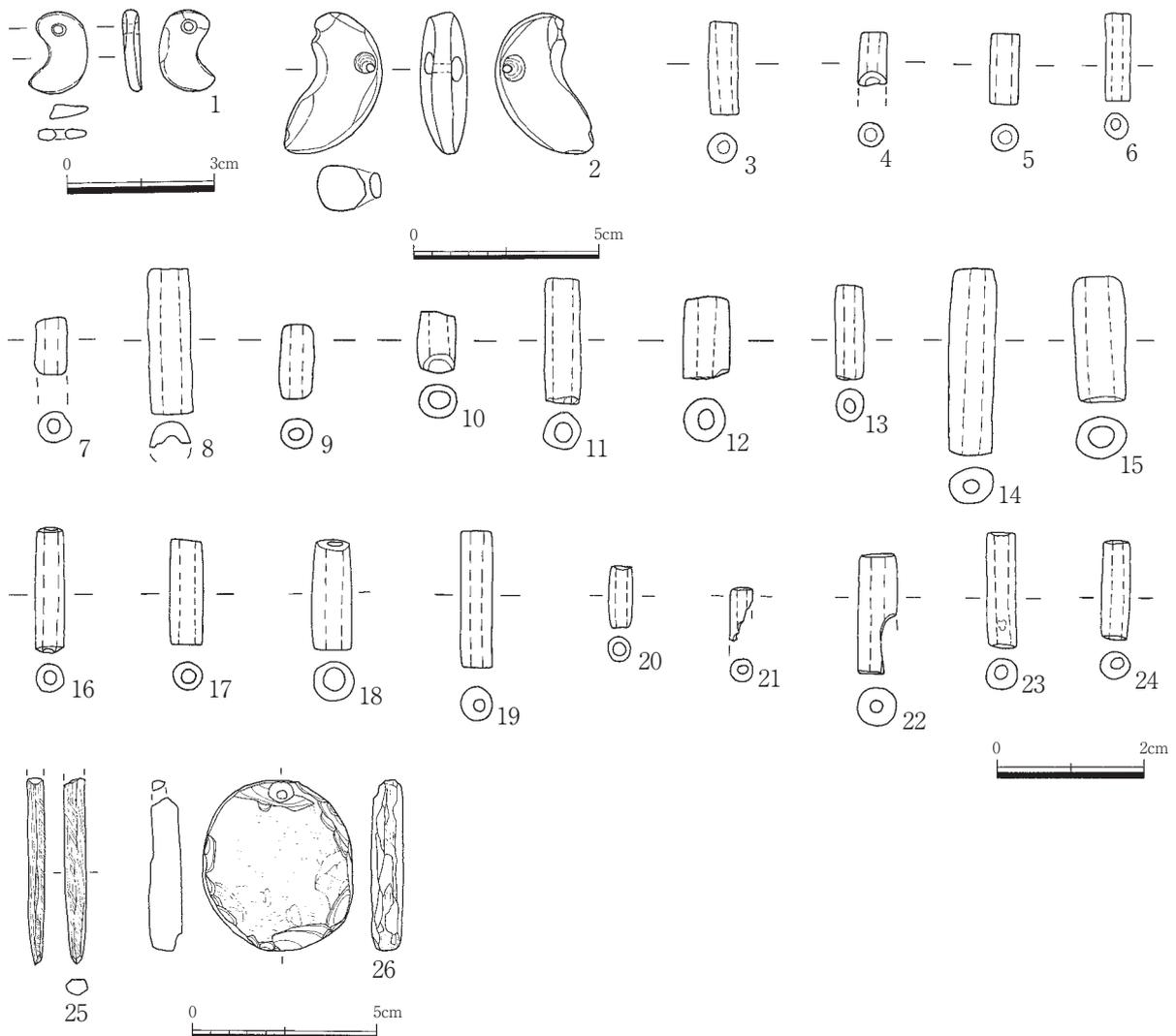
石製装飾品は勾玉2点、管玉21点、簪1点、円盤状の垂飾1点である。ガラス玉は比較的多いものの、石製装飾品は少ない。

(1) 石製勾玉

1、2は翡翠製と考えられる。1は小型のものでL2区の住居跡L2ST212からの出土である。扁平なもので、時期は特定できないものの弥生中期から後期前半の可能性はある。2は全長3.7cmを測る大型のものである。L2区の住居跡L2ST221からの出土である。時期は中期末から後期初頭と考えられる。1、2共単独出土で他の装飾品は伴っていない。

(2) 管玉

3~24は硬玉、または碧玉製の管玉である。形態的には若干のばらつきがあるものの、特に指摘するほどの特徴は見出せない。遺跡全体で21点の出土である。単独出土のものが多い。4、5の2



VIII-29図 石製装飾品

点は弥生前期 I 2~3期の土坑C4SK4097からの出土である。時期的には前期と中期末から後期初頭の遺構に伴っているものの、時期的な形態差は掴めない。

(3) 簪

25は径4~6mmの先端部が尖った簪である。途中で折損している。縦方向に幾筋かの面取り状の研磨痕が認められる。石材はやや薄い黄褐色の瑪瑙か。出土地はE1SD101の大溝である。時期は大溝のため判然としないが、Ⅲ~Ⅳ期と考えられる。

(4) 円盤状垂飾

26は石製紡錘車の形状をした垂飾と考えられる。端部に円孔を表裏面から穿つ。全面を研磨するものの、剥離調整痕を部分的に残す。石材は粘板岩で石製紡錘車と同様の石材である。石製未製品の転用の可能性がある。時期も弥生前期 I 3期のB4SX409からの出土である。

No.	器種	分類	時期	調査区	遺構名	全長(cm)	全幅	全厚	重量(g)	材質	分冊	図版番号	遺物番号	備考
1	勾玉			L2	L2ST212	1.7	0.8	0.2	0.69	翡翠?	6	L2-15	25	
2	勾玉		Ⅳ1~Ⅴ1	L2	L2ST221	3.69	1.77	1.21	16.2	翡翠	6	L2-25	30	
3	管玉		Ⅳ~Ⅴ1	B3	B3ST309						1	B3-6	14	
4	管玉		I 2~3	C4	C4SK4097	[0.7]	0.4	0.3	[0.12]	碧玉	2	C4-64	17	
5	管玉		I 2~3	C4	C4SK4097	0.9	0.4	0.3	0.2	碧玉	2	C4-64	18	
6	管玉			C4	C4SK4094	1.2	0.3	0.3	0.27	碧玉	2	C4-72	22	
7	管玉		I 3	C4北	C4北SK4139	0.70	0.50	0.40	0.2	碧玉	2	C4北-3	9	
8	管玉		Ⅴ1~2	E4	E4ST413	2.05	0.6	0.2	0.8	硬玉	3	E4-18	11	
9	管玉		I 3	E5	E5SK562	1	0.4	0.4	0.2	硬玉	3	E5-20	20	
10	管玉			E6	E6SX601・7層	0.82	0.52	0.31	0.17	硬玉	3	E6-36	309	
11	管玉			F5	F5遺構検出面	1.75	0.50	0.50	0.5	硬玉	4	F5-7	2	
12	管玉		Ⅴ2	I2	I2SK208	1.1	0.62	0.6	0.4		5	I2-44	8	
13	管玉		Ⅳ~Ⅴ	J1	J1ST107	1.30	0.40	孔径 0.17	0.21	碧玉?	5	J1-16	37	
14	管玉		Ⅴ1	L2	L2ST201	1.6	0.3	孔径 0.15	-		6	L2-4	39	
15	管玉			L2	L2ST205	0.83	0.37		0.14		6	L2-8	6	
16	管玉										8	大溝1-11	191	
17	管玉			E1	E1SD101	1.4	0.5	0.4	0.3	碧玉	8	大溝3-4	3	
18	管玉			O2	O2SR202	1.5	0.5	0.3	0.5	碧玉	8	大溝6-10	7	
19	管玉											大溝7-2	31	
20	管玉				流路1	0.84	0.34	0.34	0.13	碧玉		流路1-33	19	
21	管玉				流路1	[0.73]	0.28	0.29	[0.12]		8	流路1-33	20	
22	管玉				流路1	1.62	0.51	0.51	0.15	碧玉	8	流路1-33	21	
23	管玉				流路1	1.60	0.41	0.44				流路1-33	22	
24	管玉				流路1	1.33	0.37	0.36	0.16	碧玉	8	流路1-33	23	
25	簪		Ⅲ~Ⅳ	E1	E1SD101	5.1	0.6	0.4	2.4	碧玉	8	大溝3-4	4	
26	垂飾品		I 3	B4	B4SX409	4.7	4.1	0.9	27.8	粘板岩	1	B4-15	12	

表Ⅷ-21 石製装飾品観察表

26. 剥片が出土する竪穴住居跡について

田村遺跡群で調査した竪穴住居跡の中には石器製作跡であると考えられるものがある。石器製作跡である可能性をうかがわせる要素としては、石材・石核・剥片の出土や、石器未成品・石器製作具の出土等が挙げられるが、ここでは剥片が出土する住居跡を挙げて出土状況等を検討したい。

(1) 弥生時代前期の竪穴住居跡

I 期に相当する竪穴住居跡から剥片石器が出土した例はA10・C2・C4・E7・F4区に見られる。調査区ごとに出土状況や遺構の特徴について概観する。

A10ST1001 からはチャート剥片・サヌカイト剥片・石鎌が出土した。Ⅲ期の弥生土器も出土している。中央ピットの埋土は炭化物を含む。A10ST1002 からはサヌカイト剥片や石鎌が出土した。Ⅱ期の弥生土器と思われる甕も出土している。中央ピットの埋土にはセクションから見て炭化物は含まれていないと思われる。

C2ST201 からは頁岩や粘板岩の石鎌が出土した。石鎌には未成品のものがあり、チャート・頁岩の剥片が床面や炭化物層を含む中央ピットから検出されていることから、住居内で石器製作が行われた可能性が示唆されている。松菊里型住居跡である。

C4ST401 からは粘板岩製の磨製石鎌とチャート剥片が出土したが、遺構としては竪穴住居跡ではない可能性が示唆されている。出土した土器も I 期のものの他に前期末～中期前葉のものを含む。

E7ST730 の中央ピットからはチャート製の石錐・楔形石器・剥片が出土した。中央ピットの埋土には炭化物が混じる。

F4ST405 からは住居内ピットからのものを含めるとチャート製の石鎌・石錐・楔形石器・グレイバー・スクレイパー・石核・剥片が出土した。サヌカイトの石鎌未成品の出土も報告されている。南壁際のP5からはグレイバー・スクレイパー・石核が出土しており、中央ピットからはチャート剥片が出土した。中央ピットの両端には小ピットが付属し、埋土には炭化物が含まれていない。F4ST413からはチャート剥片が約200g出土した。遺物は住居内北西側に集中して、床面から埋土中にかけて一括廃棄の状況を呈して出土した。中央ピットは検出することができなかった。F4ST414からはチャート製の石錐・楔形石器・石核の他剥片が約2000g出土した。また、南壁際のP8からは拳大のチャートの石核が多量に出土した。中央ピットは2つの土坑によって切られているため全様は不明であるが、埋土にはチャート剥片を少量含み、炭化物・焼土は見られない。F4ST414は石材貯蔵穴を有する石器製作に関わる住居跡であった可能性が高いと考えられている。F4ST415からはチャート製石錐・楔形石器・剥片が2箇所集中して出土した。剥片は約9500g出土した。また、壁際の土坑3基からもチャート製石錐・石核・剥片が出土した。中央ピットには炭化物は含まれず、チャート剥片が多量に出土した。F4ST415も石材貯蔵穴を有する石器製作に関わる住居跡であった可能性が高いと考えられている。F4ST417からもチャート製石錐・楔形石器・剥片が出土した。剥片は約50g出土した。他の遺構による削平のため、中央ピットの有無などについては不明である。F4ST418からもチャート剥片約500gが住居東隅から集中して出土した。中

中央ピットには焼土・炭化物の堆積は認められない。中央ピットの長軸方向の両側のピット2個が支柱穴と考えられる。F4ST419からもチャート製石錐・剥片が出土した。剥片は約2000g出土した。中央ピットは土坑によって切られるが、残部より隅丸長方形で両端に付属する小ピットを有すると考えられる。中央ピットの埋土にはセクションから見て炭化物が含まれていないと思われる。F4ST420からもチャート製石錐・剥片が出土した。剥片は約100g出土した。中央ピットの可能性があるピットからは焼土・炭化物の堆積が認められない。F4ST421からはチャート製石錐・石核・剥片が中央部に集中して出土した。サヌカイト製石鏃も出土している。中央ピットの可能性があるピットからは焼土・炭化物の堆積が認められない。石器製作に関わる住居跡であった可能性が高いと考えられている。F4ST422からはチャート製の石錐・楔形石器・石核・剥片が北西隅に集中して出土した。剥片は約200g出土した。床面の大部分を他の住居跡によって削平されているため、住居内遺構等については不明である。

以上が、調査において剥片が出土した弥生時代前期の竪穴住居跡の出土状況である。剥片の石材はチャートがほとんどである。サヌカイト剥片の出土例もあるが、A10ST1001やA10ST1002はⅡ～Ⅲ期の弥生土器の混入が報告されており、これらの住居跡で出土したサヌカイト剥片は混入の可能性はある。C2ST201の住居内北側床面では頁岩剥片が多く出土した。

製品としては石錐、ついで楔形石器が多い。楔形石器については、石器製作過程で生じたものである可能性もある。剥片の出土状況については下記のように住居内遺構や遺物集中箇所から出土した例が見られる。

① 遺物集中箇所

F4ST413・F4ST415・F4ST418・F4ST421・F4ST422に見られる。F4ST413については土器片とともに遺物集中を形成しており、一括廃棄された可能性が強いと思われる。その他の4例についてはチャートの石錐・楔形石器・石核・剥片の集中であり、石器製作行為の跡である可能性が考えられる。F4ST415・F4ST421は住居跡の中央部付近、F4ST418・F4ST422は住居の隅に見られる。

② 中央ピット

C2ST201・E7ST730・F4ST405・F4ST414・F4ST415に見られる。主にチャートの石錐・楔形石器・剥片が出土している。

C2ST201・E7ST730の中央ピットには炭化物が含まれるが、F4区のF4ST405・F4ST414・F4ST415の中央ピットには炭化物は含まれず、炉としての機能を有していなかったものと思われる。C2ST201・F4ST405の中央ピットの両端には小ピットが付属する。

③ その他の住居内遺構

F4ST405・F4ST414・F4ST415の壁際のピット・土坑からはチャートの石錐・石核・剥片等が出土した。石器や石材の貯蔵穴である可能性が強い。

(2) 弥生時代中後期の竪穴住居跡

Ⅱ～Ⅴ期に相当する竪穴住居跡から剥片石器が出土した例はB3・D1・E7・F4・I2・J1・K1・L1・L2・Q2区に見られる。調査区ごとに出土状況や遺構の特徴について概観する。

B3ST306からはチャート剥片・サヌカイト剥片が床面直上や壁溝から出土した。中央ピットは炭化物・焼土を含む。

D1ST101からはチャート剥片・サヌカイト剥片が出土した。中央ピットは他の遺構と切り合っており、形状などが明瞭ではないが、南側で炭化物が確認できる。D1ST102からはサヌカイト剥片が出土した。中央ピットは炭化物を含む。D1ST103からはサヌカイト製石鏃・剥片が出土した。剥片は約44.7g出土した。中央ピットは炭化物を含む。D1ST112からはサヌカイト剥片が出土した。中央ピットは炭化物を含む。D1ST113からはサヌカイト製石鏃・剥片が出土した。中央ピットは他の遺構と切り合っており、形状などが明瞭ではない。D1ST119からはサヌカイト製石鏃・剥片、そして赤色珪岩製石鏃が出土した。中央ピットは炭化物を含む。

E7ST706からはサヌカイト製石鏃・剥片が出土した。剥片は約33g出土した。中央ピットの炭化物は確認できない。E7ST708からはサヌカイト剥片が少量出土した。中央ピットは炭化物を含む。E7ST712からはサヌカイト剥片が少量出土した。中央ピットの両端には小ピットが付属し、埋土には炭化物を含む。E7ST714からはサヌカイト製石鏃・剥片が出土した。剥片は1片出土した。中央ピットの両端には小ピットが付属し、埋土には炭化物を含む。E7ST715からはサヌカイト製石鏃・剥片が出土した。剥片は約40g出土した。中央ピットは炭化物を含む。E7ST722からはチャート剥片・サヌカイト製石鏃・剥片が出土した。中央ピットの両端には小ピットが付属し、埋土には炭化物を含む。E7ST723からはサヌカイト剥片が出土した。中央ピットは炭化物を含む。E7ST726からはサヌカイト剥片が1片出土した。中央ピットは炭化物を含む。

F4ST402からはチャート剥片・石核や石鏃、そしてサヌカイト製石鏃や石鏃未成品が出土した。剥片・石核は約2500g出土した。しかし、剥片・石核・石鏃についてはF4ST415からの混入の可能性が考えられる。中央ピットは炭化物を含む。F4ST403からはチャート剥片・石鏃が出土した。剥片・石核は約300g出土した。しかし、剥片・石鏃については上層から出土しており、前期の弥生土器が混入していることから、前期遺構からの混入の可能性が考えられる。中央ピットは炭化物を含む。F4ST406からはチャート剥片が出土した。剥片は約300g出土した。中央ピットは炭化物を含む。セクションや平面プランからはF4ST405に切られていると思われ、遺構からは前期の弥生土器が出土していることから前期の竪穴住居跡である可能性も考えられる。F4ST408からはチャート剥片・石鏃、そしてサヌカイト製石鏃が出土した。剥片等は約1400g出土した。石鏃は貼床埋土中から出土したものもあるが、石器は床面各所から出土しており、前期遺構から混入したものであるかどうかは確認できなかった。焼失住居であるため、炭化物は中央ピットだけでなく床面の広い範囲に堆積する。F4ST411からは多くのチャート剥片、そしてサヌカイト製石鏃未成品が出土した。しかし、剥片についてはF4ST415からの混入の可能性が考えられるが峻別がつけがたい。サヌカイト製石鏃未成品は住居内北西部のP7から出土した。中央ピットは焼土・炭化物を含む。

I2ST203からはチャート剥片、そしてサヌカイト製石鏃が出土した。剥片は2片出土した。中央ピットの炭化物は確認できない。I2ST208からはサヌカイト製石鏃・剥片や珪岩剥片が出土した。中央ピットは炭化物を含む。I2ST211からはサヌカイト剥片6片が出土した。中央ピットは炭化物を含む。I2ST213からはチャート石核2個が出土した。1個は赤色チャートである。中央ピットは炭

化物を含む。I2ST218からはサヌカイト剥片1片が出土した。中央ピットの炭化物は確認できない。

J4ST418からはサヌカイト製石鏃・スクレイパー・剥片が出土した。中央ピットには焼土痕が残る。

K1ST119からはサヌカイト剥片、そしてチャート製石鏃・緑色片岩製石鏃・粘板岩製石鏃が出土した。剥片は4片出土した。チャート製石鏃は形状から縄文時代の可能性もある。石器は比較的纏まって出土した。中央ピットには焼土層が認められる。K1ST120からはサヌカイト製石鏃・剥片が出土した。剥片は1片出土した。中央ピットは攪乱によって壊されており、形状等は不明である。K1ST123からはサヌカイト剥片が2片出土した。中央ピットは炭化物を含む。K1ST126からはサヌカイト製石鏃・削器・剥片が出土した。剥片は22片出土した。中央ピットは炭化物を含む。K1ST127からはサヌカイト剥片が1片出土した。中央ピットの炭化物は確認できない。

L1ST101からはサヌカイト剥片が1片、中央ピットから出土した。中央ピットは炭化物を少量含む。

L2ST201からはサヌカイト製石鏃・スクレイパー・剥片が出土した。中央ピットは焼土・炭化物を含む。L2ST210からはサヌカイト製石鏃・剥片が出土した。中央ピットは検出できなかった。L2ST214からはサヌカイト製石鏃・剥片が出土した。中央ピットは焼土・炭化物を含む。L2ST215からはサヌカイト製石鏃・スクレイパー・剥片が出土した。剥片は中央ピットから55.8g出土した。中央ピットは炭化物を含む。L2ST217からはサヌカイト剥片が出土した。剥片は二次加工されている。中央ピットは炭化物を含む。L2ST220からはサヌカイト剥片が出土した。中央ピットは炭化物を含む。L2ST221からはサヌカイト製石鏃・剥片が出土した。剥片は103g出土した。中央ピットの長軸方向の両側にピット2個を有する。中央ピットは焼土・炭化物を含む。L2ST223からはサヌカイト剥片が出土した。中央ピットは炭化物を含む。

Q2ST201からはサヌカイト剥片が出土した。剥片は壁溝に作られたP5から約3.9g出土した。中央ピットは炭化物を含む。Q2ST203からはサヌカイト剥片が出土した。剥片は約2.9g出土した。中央ピットは炭化物を含む。Q2ST204からはサヌカイト剥片が出土した。剥片は約28.5g出土した。中央ピットは焼土ブロックを含む。Q2ST205からはサヌカイト製石鏃・剥片が出土した。剥片は約4.8g出土した。中央ピットの長軸の両側にピットを有する。中央ピットの炭化物は確認できなかった。Q2ST206からはサヌカイト製石鏃・剥片が出土した。剥片は約29.7g出土した。二次加工がみられるものもある。中央ピットの長軸の両側に小型ピットを有する。中央ピットの炭化物は確認できなかった。Q2ST207からはサヌカイト製石鏃・剥片が出土した。剥片は約85.9g出土した。住居跡は拡張されているが、拡張前の中央ピットには炭化物は認められないが、拡張後の中央ピットは炭化物を含む。

なお、D1ST111とL2ST212は遺構の大部分が調査区外、または他の遺構に切られているため、弥生時代のものであるが、詳細な時期は不明である。サヌカイト剥片が出土した。

以上が、調査において剥片が出土した弥生時代中後期の竪穴住居の出土状況である。剥片の石材はサヌカイトがほとんどである。チャート剥片の出土例もみられるが、竪穴住居跡の切り合いが多いF4区のF4ST402・F4ST403は前期の遺構からの混入である可能性が強く、F4ST406は時期その

ものが前期のものである可能性がある。

製品については石鏃が圧倒的に多い。F4区から出土する石鏃については混入の可能性はある。竪穴住居内からの剥片の出土状況については、前期のような特徴は特にみられない。剥片が出土した竪穴住居跡では、E7ST712・E7ST714・E7ST722・L2ST221・Q2ST205・Q2ST206が中央ピットの長軸の両側に付属すると思われるピットを有する点で共通しているが、石器製作場に共通する特徴かどうかはわからない。

(3)まとめ

以上のように、田村遺跡群の竪穴住居跡における石器製作跡については、石材では前期はチャート、中後期はサヌカイトが出土しており、製品では前期は石鏃、中後期は石鏃が出土している。出土状況については、前期では遺物集中や住居内遺構からの出土がみられたが、中後期ではそのような例が特に見られなくなっている。

県内の他の遺跡では、弥生時代の竪穴住居跡から石器剥片の出土状況が詳細に報告された例は少ない。前期の竪穴住居跡では、具同中山遺跡群Ⅳで竪穴状遺構として報告されているST1が挙げられる。遺構中央で石器集中がみられ、灰白色の頁岩剥片が3片、赤色頁岩剥片が211片、赤色頁岩製石鏃とともに出土している。出土状況からこれらの剥片は中央ピットが埋まってから廃棄されたものと思われる。中期後半のものと思われる清水寺岡遺跡ST3からはサヌカイト剥片が約8000片、石鏃・石鏃未成品・石鏃とともに住居内北東部で集中して出土した。後期前葉のものと思われる下ノ坪遺跡ST6からはサヌカイト剥片が3片出土した。中期後半のムクリ山遺跡のSTからは砂岩・粘板岩の石核の他に姫島産黒曜石の出土が報告されているが、縄文時代の遺物包含層からの混入の可能性が強いと考えられている。剥片の出土報告例は少ないため、剥片石器で最も出土例が多い石鏃をみると、勇前遺跡ST3・清水寺岡遺跡ST3・ST5・拝原遺跡ST3・本村遺跡ST2・下ノ坪遺跡ST7・ST8・ST11・奥谷南遺跡ST1・松ノ木遺跡ST1・福井遺跡ST3・鴨部遺跡ST1・西分増井遺跡ST1・ST4・西分増井遺跡ⅡST1・ST9・カマガ淵遺跡STがサヌカイト製である。それ以外の石材では、先に挙げたものを除けば東崎遺跡ST6・下ノ坪遺跡ST11からは頁岩製、カマガ淵遺跡STからは赤色頁岩や珪質頁岩製のものが出土したぐらいで、圧倒的にサヌカイト製の剥片石器が多く出土している。県内では縄文時代にサヌカイトは石材として流通しており、田村遺跡群の縄文時代の遺物包含層からも出土している。このような状況のなかで、弥生時代前期には田村遺跡群ではチャート、具同中山遺跡群では赤色頁岩等、在地の石材によって石器製作を行っていた点については興味深い。

			剥片			石核	石錐			打製石鏃				石鏃未成品			楔形石器	磨製石鏃		削器	スクレイパー		グレイバー	未製品		
			チャート	サヌカイト	珪岩	頁岩	チャート	チャート	赤色珪岩	?	チャート	サヌカイト	緑色片岩	粘板岩	?	チャート	サヌカイト	粘板岩	?	チャート	粘板岩	頁岩	サヌカイト	チャート	サヌカイト	?
E7ST730	I	E7-24	○			1	1									2										
A10ST1001	I 2・3	A10-3	5	1										2												
A10ST1002	I 2・3	A10-5/6		1									1													
C2ST201	I 2・3	C2-3	○		○												1	3								
F4ST405	I 3	F4-13	○			1	6		1	1				1	1	1	4				1			1	1	
F4ST413	I 3	F4-25	○																							
F4ST414	I 3	F4-26	○			○	3										○									
F4ST415	I 3	F4-28	○	1		○	196										○									
F4ST417	I 3	F4-31	○				2																			
F4ST418	I 3	F4-32	○																							
F4ST419	I 3	F4-33	○				1																			
F4ST421	I 3	F4-36	○				8			1							○									
F4ST422	I 3	F4-35/36	○				6																			
C4ST401	I 4～II	C4-2	○															1								
F4ST420	I 5	F4-34	○				5																			
B3ST306	IV	B3-5/6	○	○																						
D1ST101	IV	D1-3	○	○																						
D1ST102	III 1・2	D1-4		○																						
D1ST103	IV 1・2	D1-5		○						4																
D1ST105	V 3	D1-8		○						3																
D1ST112	V 1・2・3	D1-16		○																						
D1ST113	II～V 2	D1-17		○						1																
D1ST119	IV 1・2	D1-20		○			1			2																
E7ST706	IV?	E7-7		○						3																
E7ST708	II～V	E7-9		○																						
E7ST712	II～V	E7-14		○																						
E7ST714	II～V	E7-15		1						1																
E7ST715	V	E7-17		○						1																
E7ST722	IV	E7-20	○	○						2																
E7ST723	IV?	E7-21		○																						
E7ST726	II～V	E7-23		1																						
F4ST402	V 1・2	F4-10	○			○		7		2						○										
F4ST403	V 1・2	F4-11	○				3																			
F4ST406	V 3?	F4-14	○																							
F4ST408	V 1・2	F4-17	○				6			3																
F4ST411	V 3	F4-23	○										1													
I2ST203	V 1	I2-4/5	2							1														1		
I2ST208	IV 2～V 1	I2-12		○	1					5																
I2ST211	IV 2～V 1	I2-19		6																						
I2ST213	IV 2～V 1	I2-22				2																				
I2ST218	IV 2	I2-27		1																						
J4ST418	V 1	J4-23	○							1													1			
K1ST119	V 1	K1-35	4							1		1	1													
K1ST120	IV 2～V 1	K1-37・38	1							3																
K1ST123	IV 2	K1-46	2																							
K1ST126	III 3	K1-50	22							1											1					
K1ST127	IV 2	K1-51	1																							
L1ST101	V 1・2	L1-4	1																							
L2ST201	V 1	L2-4	○							6																
L2ST210	V 1	L2-13	○							1																
L2ST214	V 1・2	L2-18・19	○							6																
L2ST215	IV 2	L2-20	○							3													1			
L2ST217	IV 2	L2-21	○																							
L2ST220	IV 2	L2-24	○																							
L2ST221	IV 1～V 1	L2-25	○							5																
L2ST223	IV	L2-26	○																							
Q2ST201	IV～V	Q2-2	○																							
Q2ST203	V	Q2-5	○																							
Q2ST204	III	Q2-6	○																							
Q2ST205	IV	Q2-7	○							1																
Q2ST206	IV	Q2-8	○							2																
Q2ST207	III	Q2-10	○							8																
D1ST111	I～V	D1-23	○																							
L2ST212	I～V	L2-21	○																							

表Ⅷ-22 剥片石器出土遺構一覧

27. 田村遺跡群出土の農具の使用痕 — 弥生時代前期を中心に —

(1) はじめに

高倍率法による石器の使用痕研究は、1980年にL. H.キリーによって確立された。日本における弥生時代の使用痕研究は、1984年の仙台市富沢遺跡出土の石庖丁から始まる⁽¹⁰⁾。それ以降、高倍率法による使用痕研究は東日本を中心に行われる一方、西日本での石器研究は専ら組成論や型式論を主としたものであった。特に高知県においては、これまで高倍率法を用いての石器研究は全く行われておらず、これが初めての試みといえる。

筆者は高知県田村遺跡群から出土した石器のうち、弥生時代の石製農具にみられる使用痕について注目した。特に弥生時代前期には、石庖丁、石鎌、大型直縁刃石器が全て揃っており、農具のあり方を考える上で有効と考えられた。この項では、今回調査で出土した弥生時代前期の石器を中心にその結果を報告したい。

(2) 資料について

石庖丁、石鎌、大型直縁刃石器は製作方法、平面形など形態から分類を行った。また石庖丁については、遺構出土で時期の比較的明確な資料を抽出し、併せて編年を行っている。編年に際しては出原恵三氏の様式編年⁽¹¹⁾を、形態分類については斎野裕彦氏の分類⁽¹²⁾をそれぞれ参考にさせていただいた。また使用した時期区分は田村遺跡群Ⅱの報告書に準じ、前期をⅠ、中期をⅡ～Ⅳ、後期をⅤ・Ⅵ期とした。更にⅠ期を1～5、Ⅱ～Ⅳ期を1・2、Ⅴ期を1～5、Ⅵ期を1・2時期に細分している。詳しい分類・編年については各器種の項を参照願いたい。

(3) 分析方法

今回の分析資料は石庖丁3点、石鎌4点、大型直縁刃石器3点である。そのうちNo.3の石庖丁を除く9点は、前期の遺構出土あるいはその可能性の高い遺物を抽出した。各分析資料の詳しい時期および法量については、文章末にリスト表示をしているので、参照願いたい(表Ⅷ-23)。

これらの資料は高倍率法を用いて、使用痕光沢面と線状痕の観察を行った。使用痕光沢面のタイプは、阿子島1989年に拠る⁽¹³⁾。資料は金属顕微鏡(オリンパスBXFM)を使用し、100倍、200倍を主に、適宜500倍で観察した。いずれも観察前にアルコール棉で油脂などの除去を行った。

(4) 観察結果

① 石庖丁(Ⅷ-31～32図)

Ⅰ期2点(No.1・2)と、Ⅳ期1点(No.3)を図示している。いずれも磨製石庖丁である。No.1・2はいずれもⅢA類に属し、いわゆる外湾刃半月形を呈する。この地域ではⅠ期のみ認められる形態である。No.3のみⅣ期の有側タイプの石庖丁である。

No.1(Ⅰ-3期・Ⅷ-31図)

1は両面にBタイプ(微弱～弱)の使用痕光沢面を確認した。5～30 μ のパッチが認められる。刃面

には光沢面は全く認められず、研ぎ直しが行われた可能性が高い。紐孔周辺に比べ、刃部・背部付近ではBタイプが発達しているようである。

明確な線状痕はみられない。

石材は粘板岩である。

No2(I-3期・Ⅷ-31図)

石器表面は火を受けたためか、表面は風化が著しく変色している。

使用痕光沢面は片面のみ、Bタイプが確認できる。刃部付近に10~20 μ 径のパッチがみられる。

明瞭な線状痕はみられない。

石材は粘板岩である。

No3(Ⅳ-2期・Ⅷ-32図)

両面に発達した使用痕光沢面を確認できる。両面、背面および背部付近、一側縁にはBタイプがみられる。また刃面の中央部を中心に、Aタイプがみられる。この石材の場合、使用痕光沢面はBタイプからその接続、そしてAタイプへと発達することが推測される。

線状痕は刃面付近で刃縁と直交または斜方向のものがみられる。

石材は頁岩である。

②石鎌(Ⅷ-33~36図)

I-2~3期に盛行する。No4・6・7はI-3~4期の遺構出土、No5もI期のものとみられる。全て遺構出土資料である。

No4(I-3~4期・Ⅷ-33図)

石器表面は火を受けたためか、赤色化している。

使用痕光沢面は両面Bタイプが認められるが、右面がより発達している。パッチ径は20~100 μ を測る。

線状痕はほとんどみられないが、わずかに刃縁と直交および斜方向のものがある。

石材は頁岩である。

No5(I期?・Ⅷ-34図)

先端部、基端部とも欠損している。比較的基端部に近い部分である。

使用痕光沢面は左右両面に、Bタイプが5~20 μ 径でパッチ状に認められる。特に刃縁付近に発達する。刃縁の表面には線状痕が溝状に認められ、その上にBタイプが点在する。

線状痕は刃縁と直交するものが支配的である。

石材は緑色片岩である。

No6(I-3期・Ⅷ-35図)

両端を欠損。石器表面は火を受けたためか、変色している。

使用痕光沢面は両面にBタイプが認められる。特に刃部の稜線付近にBタイプの接続がみられる。

石材は粘板岩である。

No7(I-3~4期・Ⅷ-36図)

先端部が欠損。

使用痕光沢面はBタイプが左右両面にみられる。特に右面の稜線付近に発達している。刃部付近は20～30 μ 径のパッチが点在する。

明瞭な線状痕は認められなかった。

石材は緑色片岩である。

③大型直縁刃石器(VIII-37～39図)

No.8は前期、No.9・10の時期は不明である。ただしこれらは前期環濠集落内のピットから出土していること、前回調査資料で出土した同様の大型直縁刃石器が前期に偏在していることから、前期の可能性が極めて高い。

No.8(I-2期・VIII-37図)

使用痕光沢面はBタイプが両面にみられる。いずれも光沢面は中央から一端に偏って形成されており、両面の分布範囲が対応している。刃縁の剥離面には使用痕光沢面は認められなかった。

線状痕は不明瞭である。

石材は粘板岩である。

No.9(VIII-38図)

使用痕光沢面は、両面の刃縁付近にBタイプがみられる。特に刃縁中央部に発達し、刃縁両端及び奥に向かって発達を弱くしながら広がる。刃縁の剥離面には使用痕光沢面はみられなかった。

線状痕は刃縁と平行するものが支配的である。

石材は砂岩である。

No.10(VIII-39図)

No.9と同じく、使用痕光沢面はBタイプが両面の刃縁付近にみられる。特に刃縁中央部に発達し、刃縁両端及び奥に向かって発達を弱くしながら広がる。刃縁付近はBタイプの接続がみられ、100～200 μ を測る。

線状痕は刃縁に対して平行のものと斜方向のものが認められる。

石材は砂岩である。

(5)おわりに

以上、田村遺跡群出土の弥生前期の石製農具についてみてきた。

これらの観察結果をもとに、田村遺跡群前期の農具にみられる傾向をあげていきたい。

①石庖丁

前期の石庖丁については、使用痕光沢面Bタイプ、中期のものについてはAタイプ・Bタイプが認められる。前期の石庖丁は完形のもので出土しておらず使用痕光沢面の分布は不明瞭な点が多い。中期の石庖丁については刃縁の使用痕光沢面が左に強くみられる。これは使用時の利き手との関係が強く働いていると考えられ、こういった傾向は以前から指摘されていることである。当地域の石

庖丁全般にも、共通の特徴が認められるかについては今後の分析資料の蓄積を待ちたい。

②石鎌

田村遺跡群出土の石鎌は他の農具と比べ、非常に特徴的な石器といえる。まとめると以下のようになる。

1) 時期は前期に限定される。

2) 形態は完形のもものが極めて少なく、多くは折損した状態で出土する。出土資料で接合可能なものは皆無であり、意図的に破砕した可能性が考えられる。

3) 器表面および断面には、火を受けたために生じたとみられる、赤変が認められるものが多い。

4) 使用痕光沢面はBタイプが磨製石鎌に認められる。打製の石鎌(VIII-40図No11)も1点出土しているが、使用痕光沢面は認められなかった。また使用痕光沢面とは異なる可能性が高いが、写真11のようなひび割れ状の痕跡が認められるものもある。これは平塚幸人氏が『仙台市富沢遺跡保存館研究報告6』の中で触れられている、「炭化物状の黒色付着物の光沢」としたものと同様のものである可能性が高い⁽¹⁴⁾。ただし、これについては観察例、実験例とも限られており、今後の類例の増加、実験の成果を待って検討していきたい。

また、磨製の石鎌は右面の使用痕光沢面がより発達するものが多く、線状痕は直交するものが支配的であった。右面の顕著な発達から、右手で石鎌をもち、左手でイネ科植物を押さえて刃縁と直交方向に使用した結果だとすれば、田村遺跡群で出土した石鎌のほとんどが右利き用であった可能性が考えられる。またNo5は刃縁に丸味があり、対象物はイネ科植物など柔らかいものであったとみられる。

③大型直縁刃石器

大型直縁刃石器も石鎌と同様に、弥生時代前期に盛行する器種である。そのうち明確な使用痕を確認できたのは、No8～10の資料である。いずれもBタイプの使用痕光沢面を確認できた。大型直縁刃石器のうち、No10・11は中央部から両端及び奥に向かって光沢面が広がる。また刃縁と平行に線状痕がみられるのが特徴である。

以上弥生時代前期の石庖丁、石鎌、大型直縁刃石器の農具3器種についてみてきた。

使用痕光沢面の観察の結果、田村遺跡群出土の前期農具にはAタイプ・Bタイプの使用痕光沢面が認められ、光沢面からいずれもイネ科植物に対して機能したと考えられる。用途としては石庖丁は穂摘み、石鎌は穂刈りに、大型直縁刃石器は根刈りなど厚みのあるイネ科植物に対して使われたと考えられる。

これら農具3器種は、受容に若干の時期差が存在する可能性があるものの、弥生時代前期I-2期には全て出揃う。そしてI-3期に盛行し、石鎌・大型直縁刃石器はI-4～5期には、ほぼ消滅する。そのうち石鎌は、同様の用途を持つ石庖丁へ淘汰されたと考えられる。大型直縁刃石器は、IV～V期の竪穴住居跡(E4ST417)からも、サヌカイト製のものが1点出土している(VIII-40図No12)。また同じくIV期の溝跡からは、大型直縁刃石器と形態的に類似する剥片石器がみられる(L1SD105出土)。剥片石器は28点出土しており、円礫を打ち割って獲得した貝殻状剥片の縁辺部を使用したもので

ある。L1SD105は報告書では便宜的に溝状遺構として掲載しているが、埋土の状態から水が常時流れた形跡はなく、本来の溝とは性格を異にするものと考えられる。これらⅣ～Ⅴ期にみられる大型直縁刃石器および剥片石器についても、高倍率法による使用痕光沢面の観察を行った。しかしながら明確な使用痕光沢面は認められず、どのような用途に用いられたものかは不明瞭である。形態的には前期の大型直縁刃石器と類似しているものの、用途や使用対象物が異なった可能性もある。

田村遺跡群ではⅣ期から鉄製品が認められ、これらの石器の出土時期とほぼ合致する。これより大型直縁刃石器は鉄製品へと移行するとも考えられるが、明確な論証はなく推測の域を出ないものである。今後は出土資料の再抽出を行っていく必要があるといえる。

また、今回は取り上げきれなかったが、田村遺跡群からは良好な石器資料が多量に出土している。今後は中～後期の石庖丁をはじめ、それ以外の石斧・石錐などについても高倍率法を用いた使用痕分析を行うことで、新たな視点からの石器観察が可能になるものと考えている。

謝辞

最後に、Ⅷ章の田村遺跡群出土石器の執筆には出原恵三氏、前田光雄氏、叩石・打製石錐をはじめとする石器観察、使用痕分析には、斎野裕彦氏、御堂島正氏をはじめとする石器使用痕研究会の会員の方々に多大なご指導・ご教示を頂いた。記して感謝したい。

なお本稿は、第10回使用痕研究会での発表資料を加筆・修正したものである。

註

- 10) 阿子島香・須藤隆1984「4.富沢水田遺跡泉崎地区出土石包丁の使用痕」『仙台市文化財調査報告書第67集 富沢水田遺跡』第1冊 病院建設に伴う泉崎前地区の調査報告書 仙台市教育委員会
- 11) 田村遺跡群の前回調査出土石庖丁については、出原恵三氏(1999)の「南四国の石器－弥生時代の磨製石器を中心として」『古代吉備』第21集での時期を参考にした。
- 12) 斎野裕彦氏(2002)の分類を参考にした。「農具－石庖丁・大型直縁刃石器・石鎌」『考古資料大観第9号－弥生・古墳時代 石器・石製品・骨角器』小学館
- 13) 阿子島香1989『考古学ライブラリー56 石器の使用痕』ニュー・サイエンス社
- 14) 平塚幸人2003「扁平片刃石斧の使用痕研究－仙台市高田B遺跡出土資料を対象にして－」『仙台市富沢遺跡保存研究報告6』地底の森ミュージアム
「炭化物状の黒色付着物の光沢」については、平塚幸人氏、斎野裕彦氏からご教示いただいた。

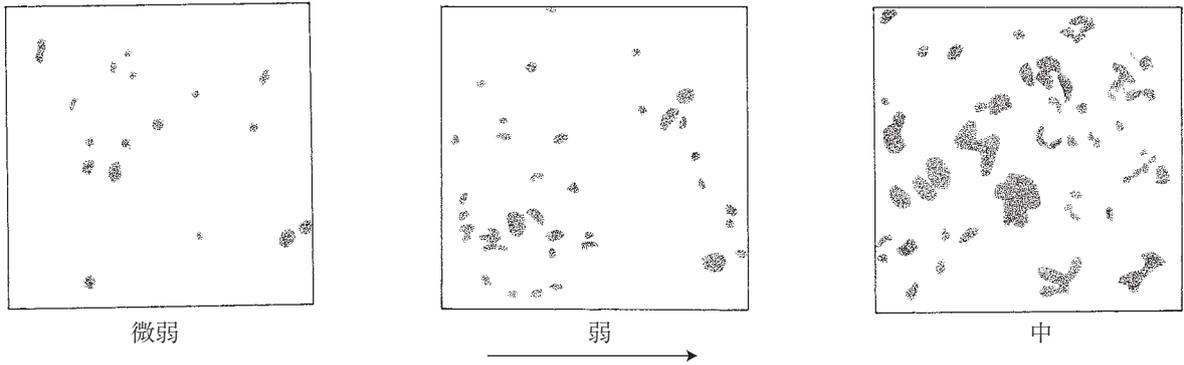
参考文献

- Lawrence H. Keeley, Experimental Determination of Stone Tool Uses, The University of Chicago Press 1980
 阿子島香・須藤隆1984「4.富沢水田遺跡泉崎地区出土石包丁の使用痕」『仙台市文化財調査報告書第67集 富沢水田遺跡』第1冊 病院建設に伴う泉崎前地区の調査報告書 仙台市教育委員会
 斎野裕彦1987「第5節 弥生時代の石器について」『富沢』仙台市教育委員会
 山田しょう 1987「弥生時代の石器の使用痕分析」『富沢』仙台市教育委員会

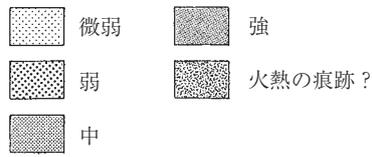
- 阿子島香1989『考古学ライブラリー-56 石器の使用痕』ニュー・サイエンス社
- 山田しょう・山田成洋1992「静岡県内出土の「石包丁」の使用痕分析」『川合遺跡』遺物編2
- 斎野裕彦1993「弥生時代の大型直縁刃石器(上)」『弥生文化博物館研究報告』第2集
- 斎野裕彦1994「弥生時代の大型直縁刃石器(下)」『弥生文化博物館研究報告』第3集
- 斎野裕彦1996「板状石器の形態と使用痕」『中在家南遺跡他』第2分冊 分析・考察編 仙台市教育委員会
- 斎野裕彦1998「片刃磨製石斧の実験使用痕分析」『仙台市富沢遺跡保存館研究報告1』地底の森ミュージアム仙台市富沢遺跡保存館
- 斎野裕彦・松山聡・山村信榮1999「大型石庖丁の使用痕分析」『古文化談叢』第42集
- 斎野裕彦2001「石鎌の機能と用途(上)」『古代文化』第53巻第10号
- 斎野裕彦2001「石鎌の機能と用途(下)」『古代文化』第53巻第11号
- 石器使用痕研究会2002『第7回石器使用研究会 弥生文化と石器使用痕研究～農耕に関わる石器の使用痕～』石器使用痕研究会・大阪府立弥生文化博物館
- 斎野裕彦2002「農具－石庖丁・大型直縁刃石器・石鎌」『考古資料大観第9号－弥生・古墳時代 石器・石製品・骨角器』小学館
- 原田幹2003「石製農具の使用痕研究＝収穫に関わる石器についての現状と課題＝」『古代』第113号早稲田大学考古学会
- 平塚幸人2003「扁平片刃石斧の使用痕研究－仙台市高田B遺跡出土資料を対象にして－」『仙台市富沢遺跡保存館研究報告6』地底の森ミュージアム仙台市富沢遺跡保存館

No.	器種	時期	分類	調査区	遺構名	全長	全幅	全厚	重量	石材	分冊	図版番号	遺物番号	刃角
1	石庖丁	I-3	ⅢA-1	C4北	SK4161	[4.80]	[4.35]	0.50	[10.4]	粘板岩	2	C4北-15	19	46~48°
2	石庖丁	I-3	ⅢA-1?	C4北	P4241	[7.85]	[5.08]	0.75	[34.7]	粘板岩	2	C4北-45	13	63~67°
3	石庖丁	IV-2	ⅢB1-3	K1	SD114	[6.7]	4.8	0.9	[32.9]	頁岩	6	K1-105	8	103~124°
4	石鎌	I-3~4	ⅡB	C3	SD105	[11.7]	4.9	2.0	[179.3]	頁岩	7	前期溝2-24	330	不明
5	石鎌	I?	ⅡB	C1	SK1021	[11.33]	4.47	1.48	[112.5]	緑色片岩	2	C1-15	1	105~117°
6	石鎌	I-3		E5	SD101	[4.5]	[3.76]	[1.15]	[26.0]	粘板岩	7	前期溝1-5	20	107°
7	石鎌	I-3~4	ⅡB	C5	SD504	[7.82]	[4.88]	[1.73]	[106.4]	緑色片岩	7	前期溝3-5	61	111~122°
8	大型直縁刃石器	I-2		C4	SK4024	15.4	9.1	1.3	233.1	粘板岩	2	C4-14	44	67~82°
9	大型直縁刃石器	不明		C4	P4167	16.45	10.16	2.95	510.6	砂岩	2	C4-73	24	63~84°
10	大型直縁刃石器	不明		C4	P4155	12.1	8.77	1.89	210.9	砂岩	2	C4-73	23	87~103°
11	石鎌	不明	I B	E5	P5068	18.83	4.43	1.62	188.2	頁岩	3	E5-28	1	95°
12	大型直縁刃石器	I-3~4		E5	SD105	9.72	10.4	2.37	137.7	サヌカイト	7	前期溝2-9	104	47~63°

表Ⅷ-23 使用痕観察石器一覧表

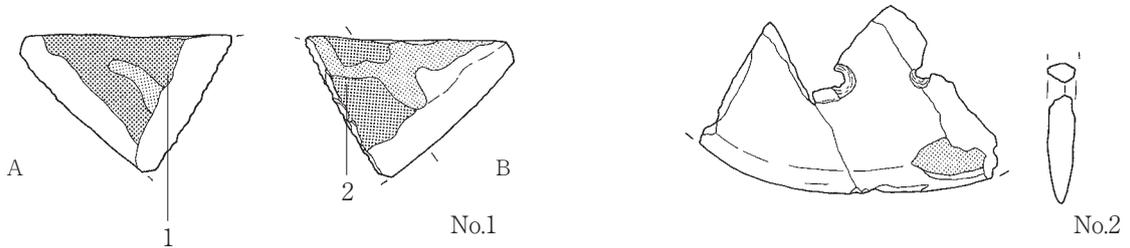


光沢分布図の基準



分布図の凡例

VIII-30図 使用痕光沢面分布図の基準と凡例



写真スケール $\times 100 : 200 \mu$
 $\times 200 : 100 \mu$

VIII-31図 No.1・2の使用痕光沢面分布範囲

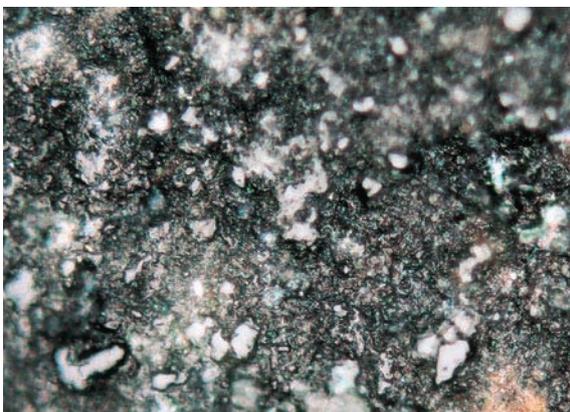


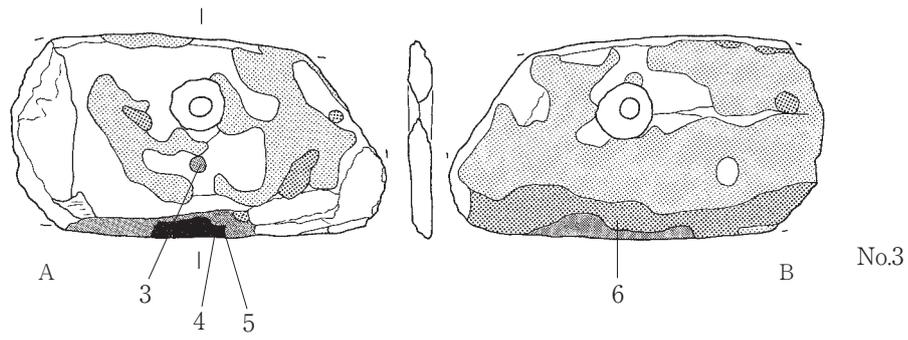
写真1 A主面

($\times 200$)



写真2 B主面

($\times 200$)



Ⅷ-32図 No.3 の使用痕光沢面分布範囲

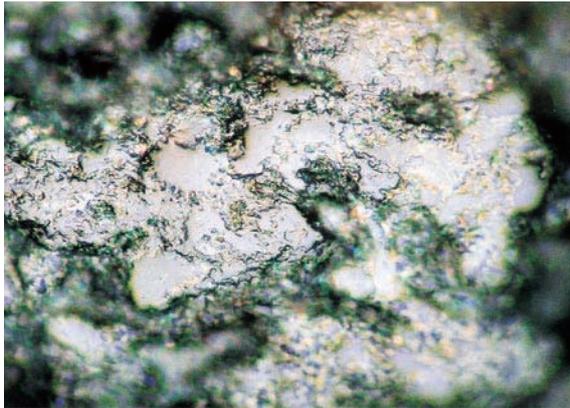


写真3 A主面

(×200)

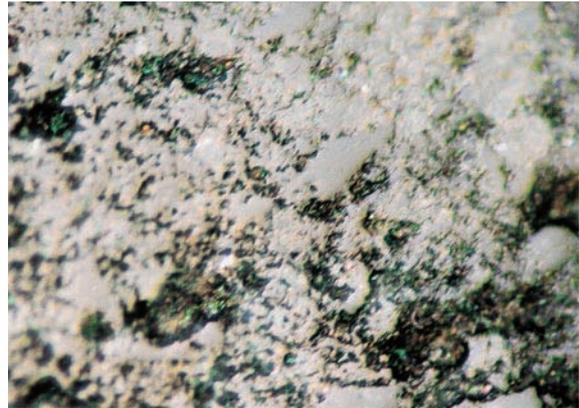


写真4 刃面

(×200)



写真5 刃面

(×200)

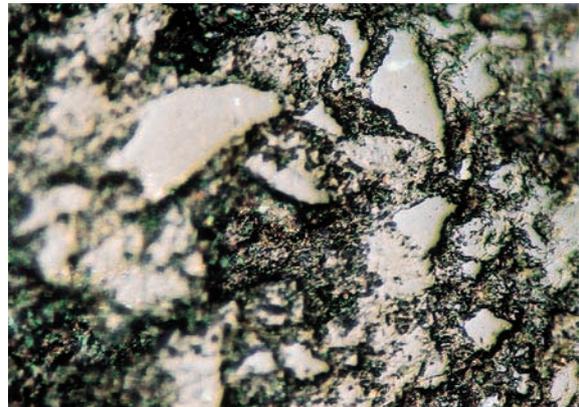
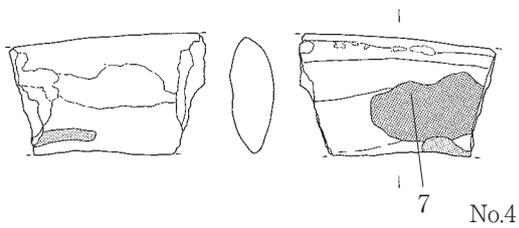


写真6 刃面

(×200)



No.4

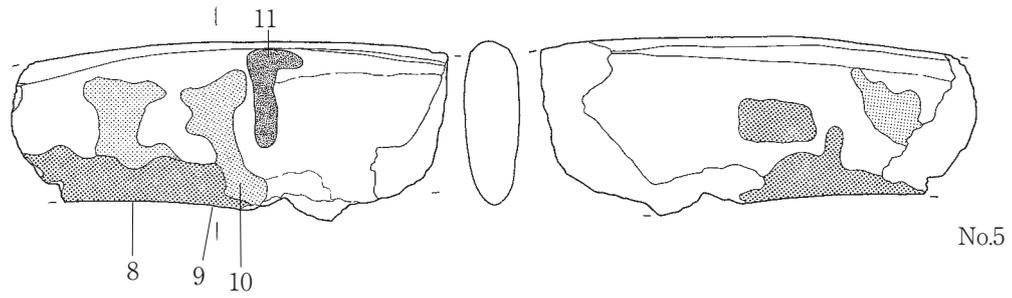
写真スケール
 $\times 100 : 200 \mu$
 $\times 200 : 100 \mu$



写真7 右面

(×200)

Ⅷ-33図 No.4 の使用痕光沢面分布範囲



Ⅷ-34図 No.5 の使用痕光沢面分布範囲



写真8 刃縁 (×100)

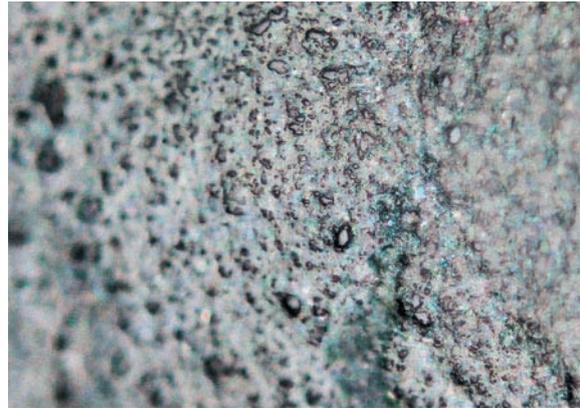


写真9 刃縁 (×200)



写真10 左面 (×100)

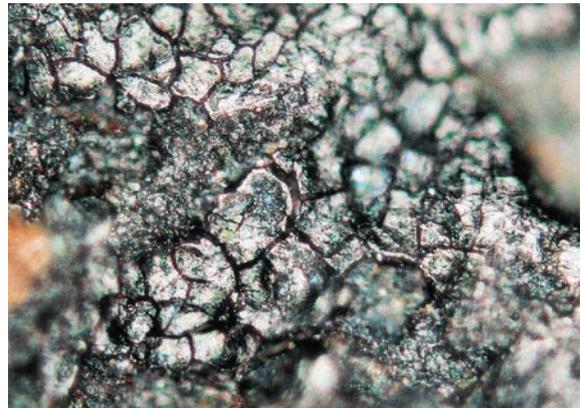
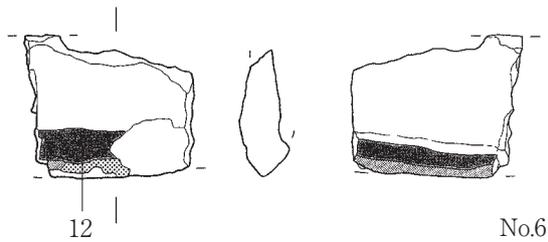


写真11 左面 (×200)



写真スケール
 $\times 100 : 200 \mu$
 $\times 200 : 100 \mu$



写真12 左面 (×100)

Ⅷ-35図 No.6 の使用痕光沢面分布範囲



Ⅷ-36図 No.7の使用痕光沢面分布範囲



写真13 刃縁付近 (×200)

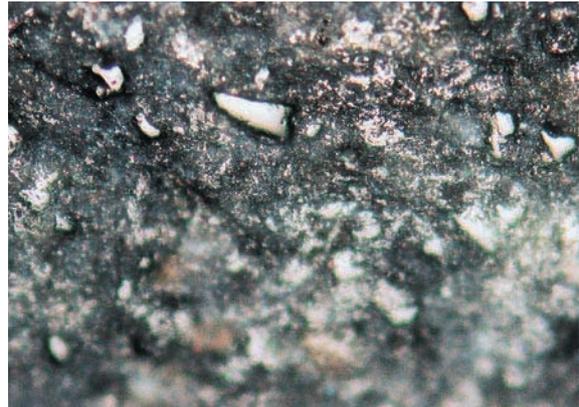


写真14 左主面 (×100)

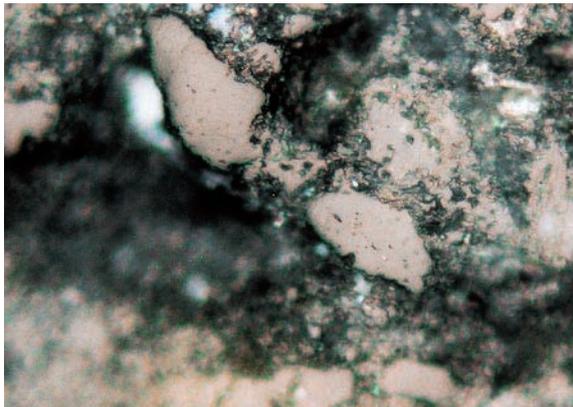
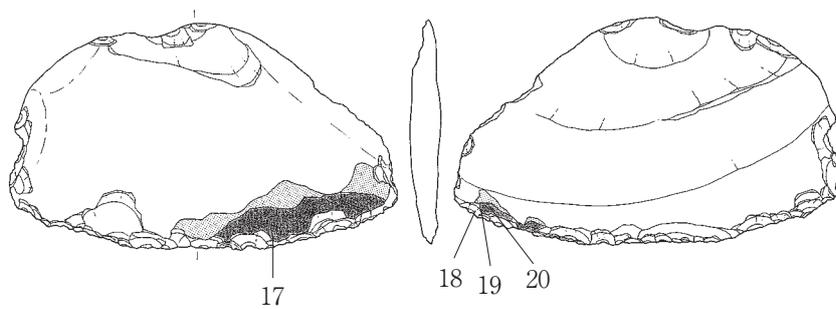


写真15 右主面 (×200)



写真16 右主面 (×100)

写真スケール ×100: 200 μ
×200: 100 μ



Ⅷ-37図 No.8の使用痕光沢面分布範囲

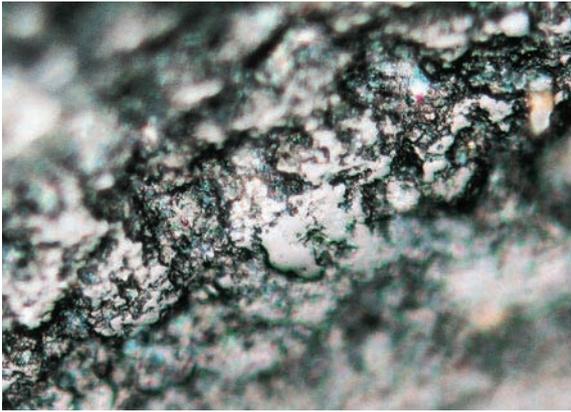


写真17 刃面 (×200)

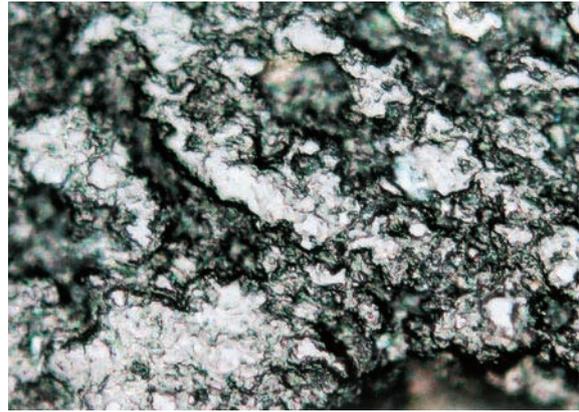


写真18 刃面 (×200)

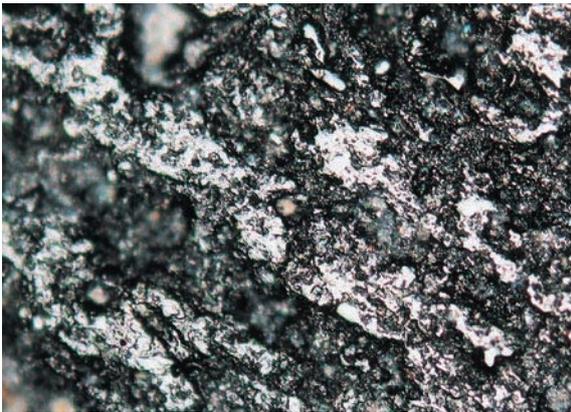


写真19 刃面 (×100)

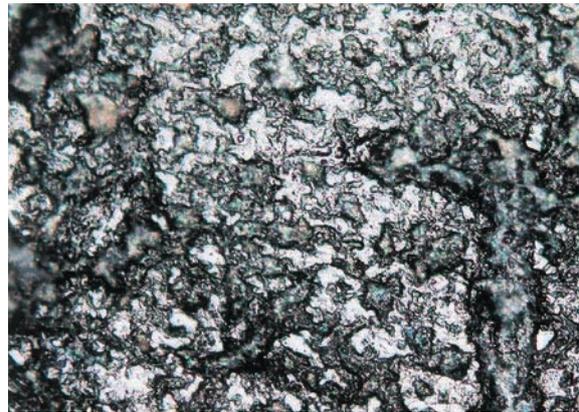
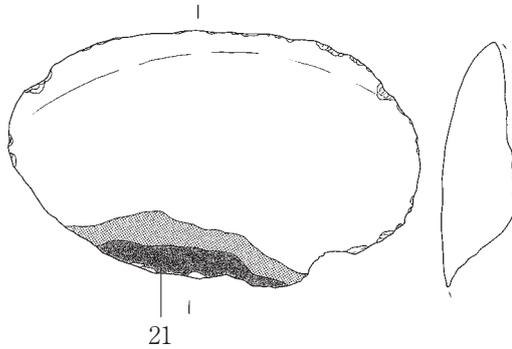
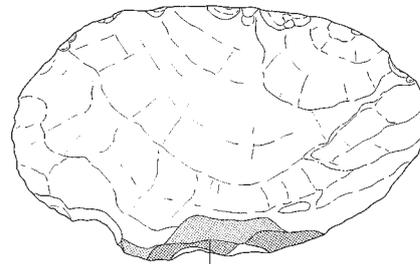


写真20 刃面 (×100)



21



22

No.9

写真スケール
×100 : 200 μ
×200 : 100 μ

Ⅷ-38図 No.9 の使用痕光沢面分布範囲

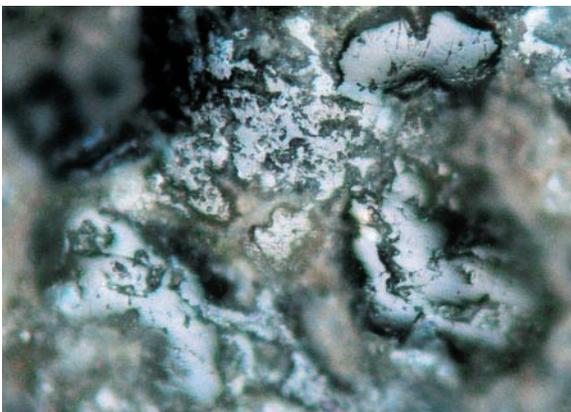


写真21 刃面 (×100)

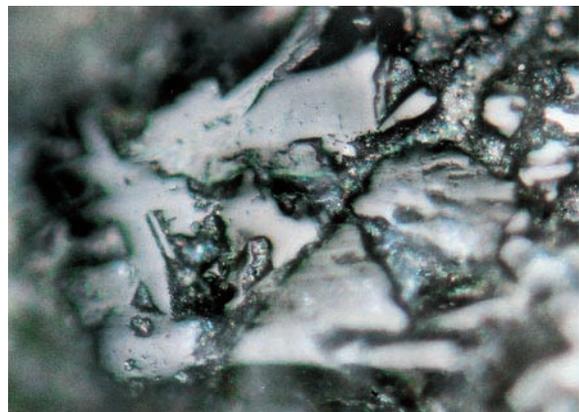
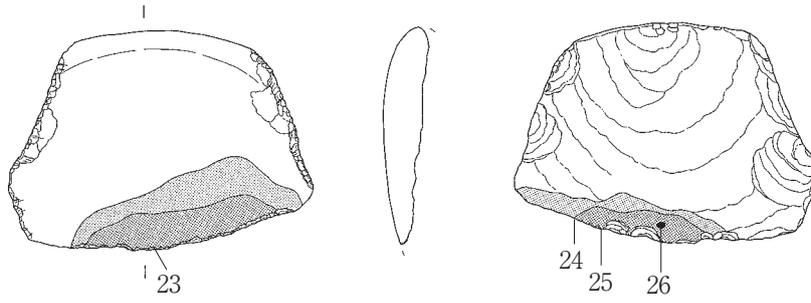


写真22 刃面 (×200)



No.10

Ⅷ-39図 No.10 の使用痕光沢面分布範囲

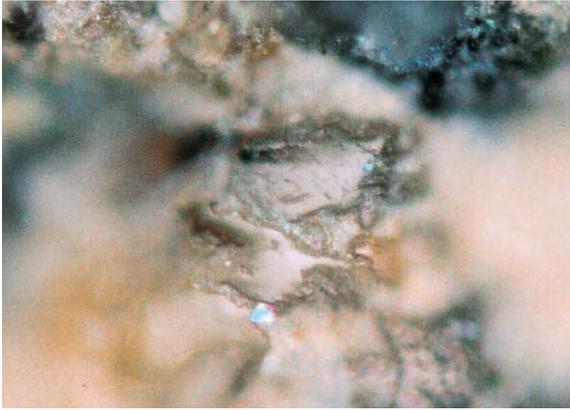


写真23 刃縁付近 (×200)



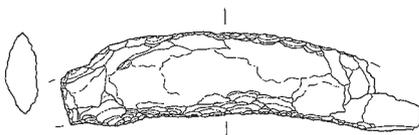
写真24 刃縁付近 (×100)



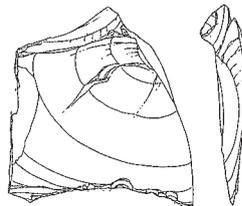
写真25 刃縁付近 (×100)



写真26 刃面 (×100)



No.11



No.12

写真スケール
 ×100 : 200 μ
 ×200 : 100 μ

石器スケール
 S=1/2 : No.1~3、5~7
 S=1/3 : No.4、8~10
 S=1/4 : No.11、12

Ⅷ-40図 打製石鎌・大型直縁刃石器

28. まとめ

以上器種ごとの分類・編年を行ってきたが、この項では時期ごとの石器組成とその特徴についてみていきたい。石器組成を行うに際しては、分類・編年と同様に、時期の明確な遺構出土遺物を選別・抽出した。そのため時期による遺構の疎密、良好な遺構出土資料の有無などの要素が、石器組成に影響を与えている点を考慮する必要がある。

また最終的には各時期の石器組成の特徴からみえる、田村遺跡群の石器の動向についても考えていきたい。

(1) 前期

石器の出土量は、当然ながら遺構数の増減と比例する。今回調査ではI-1期の遺構もわずかながらみられるが、主体となるのはI-2～3期である。特にI-3期には竪穴住居跡は13棟を数えるなど遺構数も増加し、それに伴って石器組成も充実する。その後I-4～5期には集落は調査区外に移動するようで、遺構数・石器の出土量とも減少する。

前期の石器群の特徴として、縄文系石器群に新たに、いわゆる大陸系磨製石器群が加わったことである。田村遺跡群では、I-1期には既に石庖丁は出現しており⁽¹⁵⁾、器種ごとに受容時期に差はあるもののI-2～3期には大陸系磨製石器群は全て出揃う。また縄文時代から引き継ぎみられる打製石鏃は、従来の形態のものほかに、新たにⅢ群(凸基式)、Ⅳ群(有茎式)が加わる。使用石材は前時期との変化は見られず、サヌカイトが主体で、頁岩、赤色頁岩がわずかにみられる程度である。重量的には多くが0.2～1.2gの間に集中し、最も重いもので1.9gを量る。

また前期に出現・盛行し、消滅する器種に、打製石錐Ⅱ類、楔形石器、叩石Ⅱ群がある。楔形石器と叩石Ⅱ群は石錐製作に伴うもので、セットとして使用された可能性が高い。また楔形石器製作時に生じた剥片も多くみられる。報告書に図示しているものは、出土した多量の剥片の一部である。田村遺跡群は有機物の残らない立地のため、石錐Ⅱ類の使用対象物は不明であるが、類例から貝製品の加工等を行った可能性も考えられる⁽¹⁶⁾。

武器形石器は、他の大陸系磨製石器群と同様に、I期から受容されていた可能性が高い。石剣は有柄式のもの流路から1点出土しており、これは形態からみてI期の石剣の可能性が高い(Ⅷ-22図1)。また同じく流路出土資料の環状石斧の中には、珪質安山岩製の搬入品がみられる(Ⅷ-23図1)。前期に層灰岩、珪質安山岩製とみられる石器が多くみられること、整形が非常にシャープで、中～後期にみられる環状石斧とは形態的に一線を画すことから、この資料は前期の石器の可能性が高い。

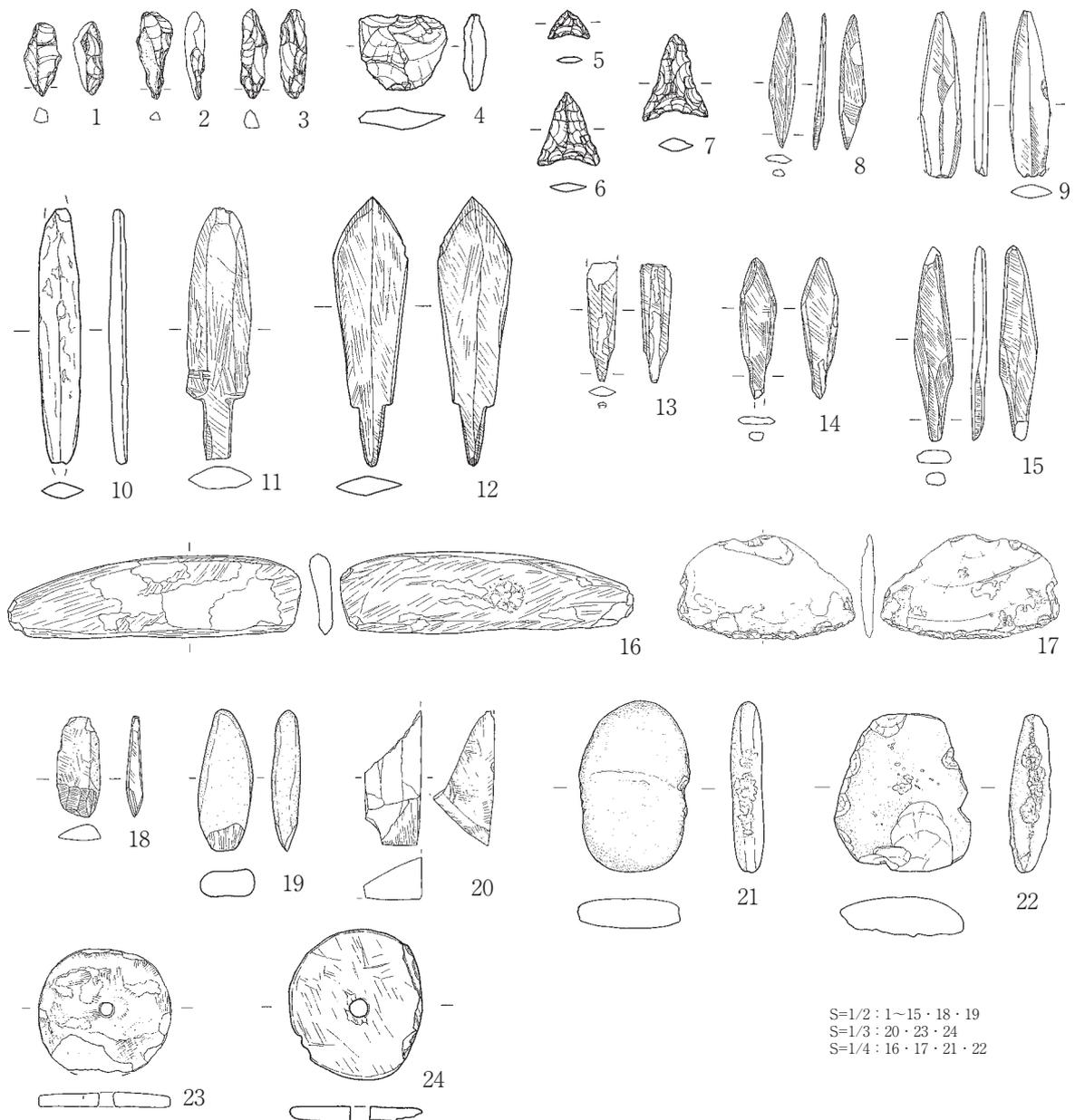
石製品には紡錘車がみられる。石製紡錘車も弥生時代前期に特徴的な器種であり、後続の時期には認められない。石材は粘板岩・頁岩など在地で獲得できる石材を使用しており、I-2期には遺跡内で製作が行われた可能性が高い。未成品はI-3期からみられる。

前期の石器組成については、I-2期、I-2～3期、I-3期、I-3～4期、I-4～5期、I-5期に細分し、図示している。

① I-2期(Ⅷ-41図1~24)

当該期の遺物として、石錐(1~3)、楔形石器(4)、打製石鏃(5~7)、磨製石鏃(8~15)、石鎌(16)、大型直縁刃石器(17)、小型石斧(18・19)、柱状片刃石斧(20)、叩石(21・22)、石製紡錘車(23・24)が認められる。

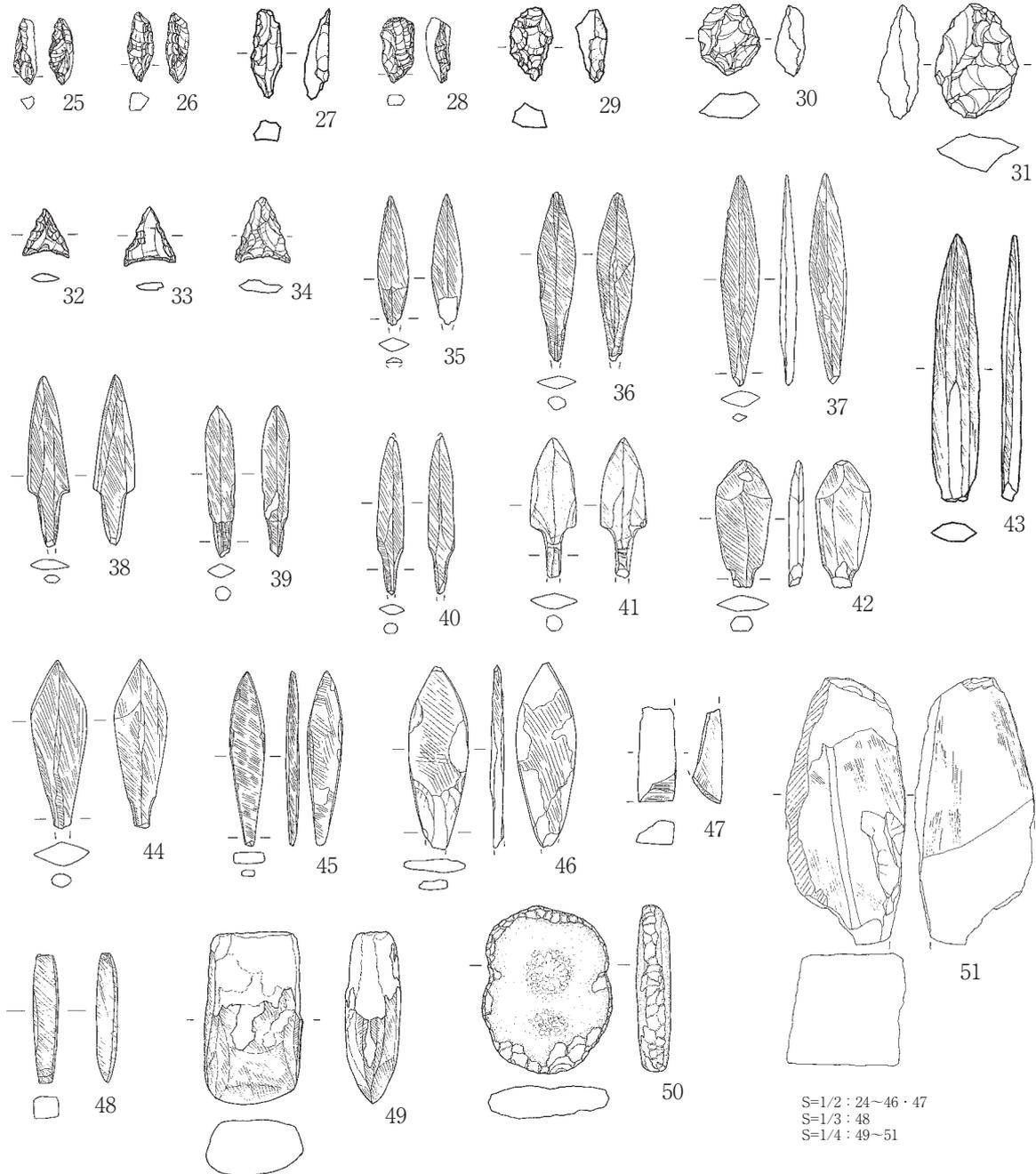
石錐Ⅱ類、楔形石器は全てチャート製で、I-2期から認められた。石鏃は縄文時代から続く打製石鏃と、新たに磨製石鏃が認められる。打製石鏃は凹基式が多く、わずかに平基式が伴う。また小型のものが主体を占め、いずれもサヌカイト製である。一方磨製石鏃は今回調査ではI-2期から認められるが、前回調査成果からI-1期には確実に認められる事が明らかである。磨製石鏃は短期間で盛行し、遅くともI-4期には消滅する。特にI-2期には鏃身が大型のものがみられるのが特徴で



S=1/2: 1~15・18・19
 S=1/3: 20・23・24
 S=1/4: 16・17・21・22

Ⅷ-41図 I-2期

ある(10~12)。有茎・凸基式が認められる。農具では石鎌、大型直縁刃石器が1点ずつある。今回調査では当該期の石庖丁は未検出である。加工斧は柱状片刃石斧、小型石斧が認められる。20は柱状片刃石斧で、基端部を折損しているため抉りの有無は不明である。層灰岩製とみられ、石材及び形態から製品として他地域から搬入されたものとみられる。小型石斧は今回調査ではI-2期から、前回調査ではI-1期には認められる。叩石はI群とした円礫をそのまま使用するものと、円礫を打ち割って縁辺部を使用するII群がある。叩石I群が前期から後期まで認められるのに対し、II群は前期に盛行し消滅するタイプである。



Ⅷ-42図 I-2~3期

② I -2～3期(Ⅷ-42図25～51)

I -2期から I -3期への移行期であり、石器組成、器種の形態、使用石材等に大きな変化は認められない。

石錐(25・26)、楔形石器(30)、及び楔形石器成形時に生じた剥片(27～29・31)、打製石鏃(32～34)、磨製石鏃(35～46)、小型方柱状片刃石斧(47・48)、太型蛤刃石斧(49)、叩石(50)、砥石(51)が当該期の遺構から出土している。今回調査では、当該期から太型蛤刃石斧がみられる。51の砥石は、1面に使用による浅い溝状の窪みが認められる。

③ I -3期(Ⅷ-43図52～90)

遺構数の増加する時期であり、それに比例して石器の出土量も増える。典型的な前期の石器組成がみられる時期といえる。

当該期の遺構からは、打製石錐(52～56・60)、楔形石器(57～59・61)、打製石鏃(62～68)、磨製石鏃(69～74)、磨製石庖丁(75・76)、扁平片刃石斧(77)、小型石斧(78～80)、太型蛤刃石斧(81・82)、叩石(83～86)、砥石(87)、台石(88)、石製紡錘車(89・90)などが出土した。新たに認められるのは、磨製石庖丁と台石である。

打製石錐Ⅱ類・楔形石器とも I -3期に最も盛行し、比例的に叩石Ⅱ群も増加する。また石錐製作過程で使用される台石として、88のような敲打によって円錐状の窪みを持つものが想定される。円錐状の窪みを有する台石は前期に特徴的であり、後続の時期にはみられない。打製石鏃は引き続き凹基式、平基式がみられる他、凸基式も出現する。磨製石鏃は前時期に比べ稜が弱く、断面形が扁平なものが多くなる。また石庖丁はⅢA-1類の外湾刃半月形を呈するものが主体を占める⁽¹⁷⁾。太型蛤刃石斧は縄文系のものはみられないが、依然として断面形は扁平である。当該期はⅡ群の叩石が盛行する時期であるが、85のような著しい縁辺部の使用によって礫皮が全く残らない I C類がみられるのも特徴の一つである。

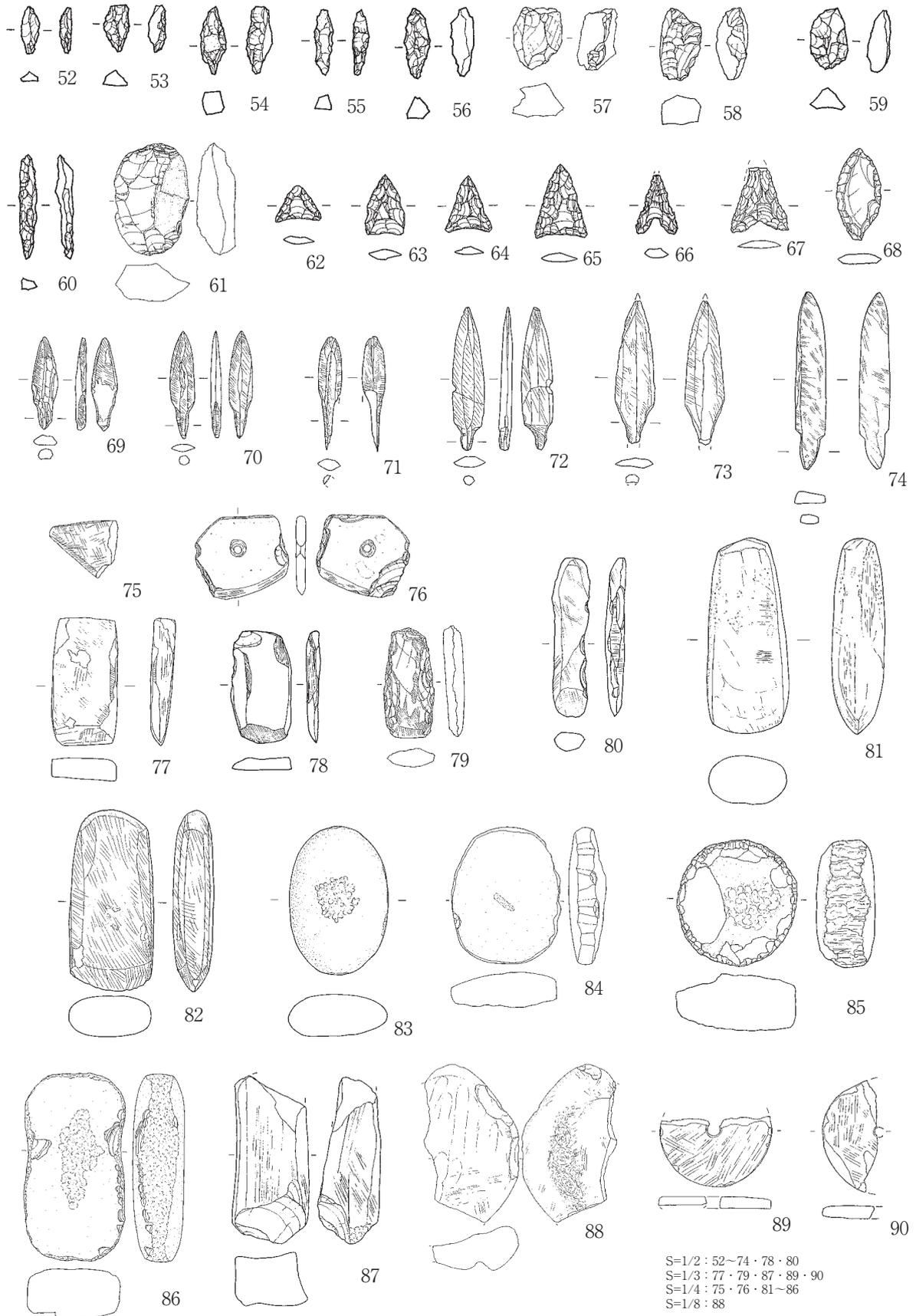
また大型直縁刃石器は、当該期の遺構からの出土はなかったものの、前後の時期にみられることから存在していたと考えられる。

④ I -3～4期(Ⅷ-44図91～107)

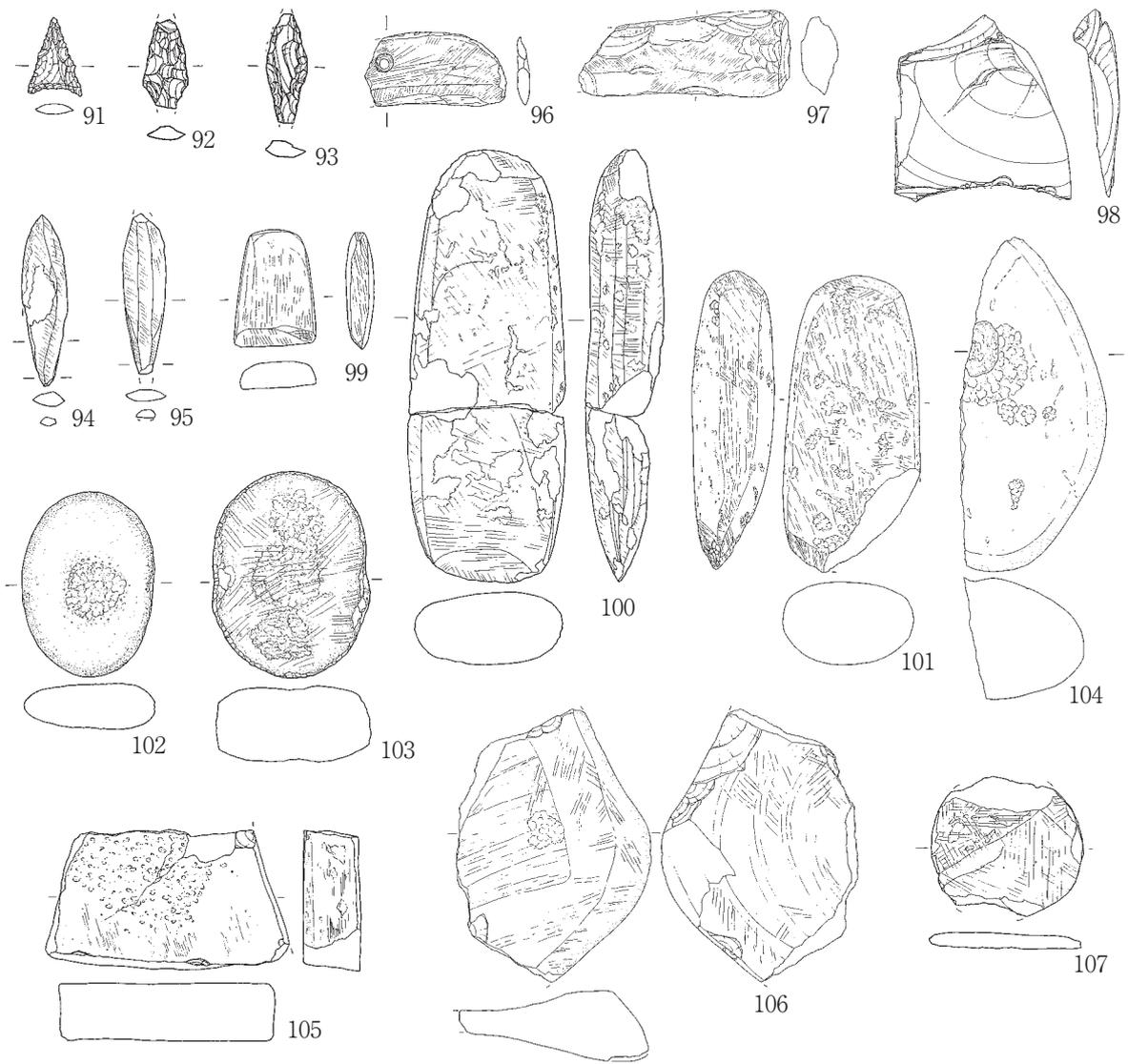
遺構数は減少傾向にある。当該期の遺構としては、前期環濠である前期溝2・3の資料があげられる。遺構の性質上、遺物は前期の中でも若干時間幅がみられる。ただし前期溝2については I -3期の遺物が主体となる。

石器・石製品は打製石鏃(91～93)、磨製石鏃(94・95)、磨製石庖丁(96)、石鎌(97)、大型直縁刃石器(98)、扁平片刃石斧(99)、太型蛤刃石斧(100・101)、叩石(102・103)、台石(104)、砥石(105・106)、石製紡錘車(107)がみられる。105は砥石として使用後に、叩石に転用されている。

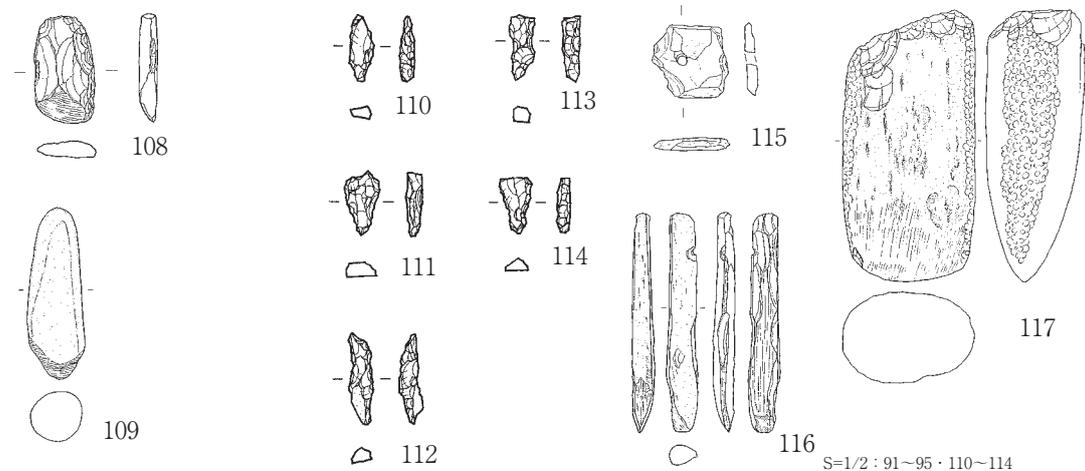
前時期まで多量に出土していた打製石錐、楔形石器は認められず、叩石Ⅱ群の出土量も少量にとどまる。ただし後続の I -5期の堅穴住居跡で打製石錐が出土していることから、場所を移して製作が行われていた可能性が考えられる。新たに登場した器種はないが、器種ごとの細かな変化は看取



Ⅷ-43図 I-3期



I-3~4期



I-4~5期

I-5期

S=1/2 : 91~95 · 110~114
 S=1/3 : 99 · 104 · 105 · 107~109 · 116
 S=1/4 : 96~98 · 100~103 · 106 · 115 · 117

Ⅷ-44图 I-3~5期

できる。

磨製石鏃は成形・調整とも粗雑になり、稜の曖昧なものが多くなる。また後続の時期にはみられないことから、当該期が磨製石鏃の消滅期と考えられる。石庖丁(96)は1点出土しており、今回調査では有側石庖丁はこの時期から出土する。前回調査の成果とあわせて、田村遺跡群における有側の石庖丁の出現はI-3期と考えられる。96は形態的に、ⅢB1-5類の祖形と考えられる。

打製の大型直縁刃石器は当該期からみられる。98はサヌカイト製で、I-2期にみられた磨製の粘板岩製のものとは石材、製作方法とも異なる。

大型蛤刃石斧は依然として、断面の扁平なものが主体となる。100は環濠内から折損した状態でそれぞれ出土し、接合できた貴重な資料である。石材は珪質安山岩とみられ、遺跡周辺では獲得できない石材を使用している。母岩、剥片なども出土しておらず、搬入品の可能性が高い。全長約24cm、重量1250gを量る大型品である。

⑤ I-4～5期(Ⅷ-44図108・109)

非常に遺構数が少なく、竪穴住居跡として確認できるのは1棟である。集落は今回調査区外の北に移動するものとみられる。遺物で図示できたのは、小型石斧(108)と礫錐(109)の2点である。出土資料が非常に少ないため、当該期の石器組成は不明瞭である。

⑥ I-5期(Ⅷ-44図110～117)

当該期についても遺構数が少なく、石器組成は不明瞭である。そのうち図示できたのは、チャート製の打製石錐(110～114)、石庖丁(115)、小型石斧(116)、大型蛤刃石斧(117)である。打製石錐は竪穴住居跡1棟から出土している以外に例がなく、当該期が消滅期と考えてよいであろう。大型蛤刃石斧は、断面形に若干厚みを持つようになる。

またI-3期まで多量にみられた磨製石鏃は全く認められず、I-5期までに消滅するものとみられる。

(2) 中期

中期はⅡ～Ⅳ期に区分されるが、今回調査では明確なⅡ期の遺構は未検出である。

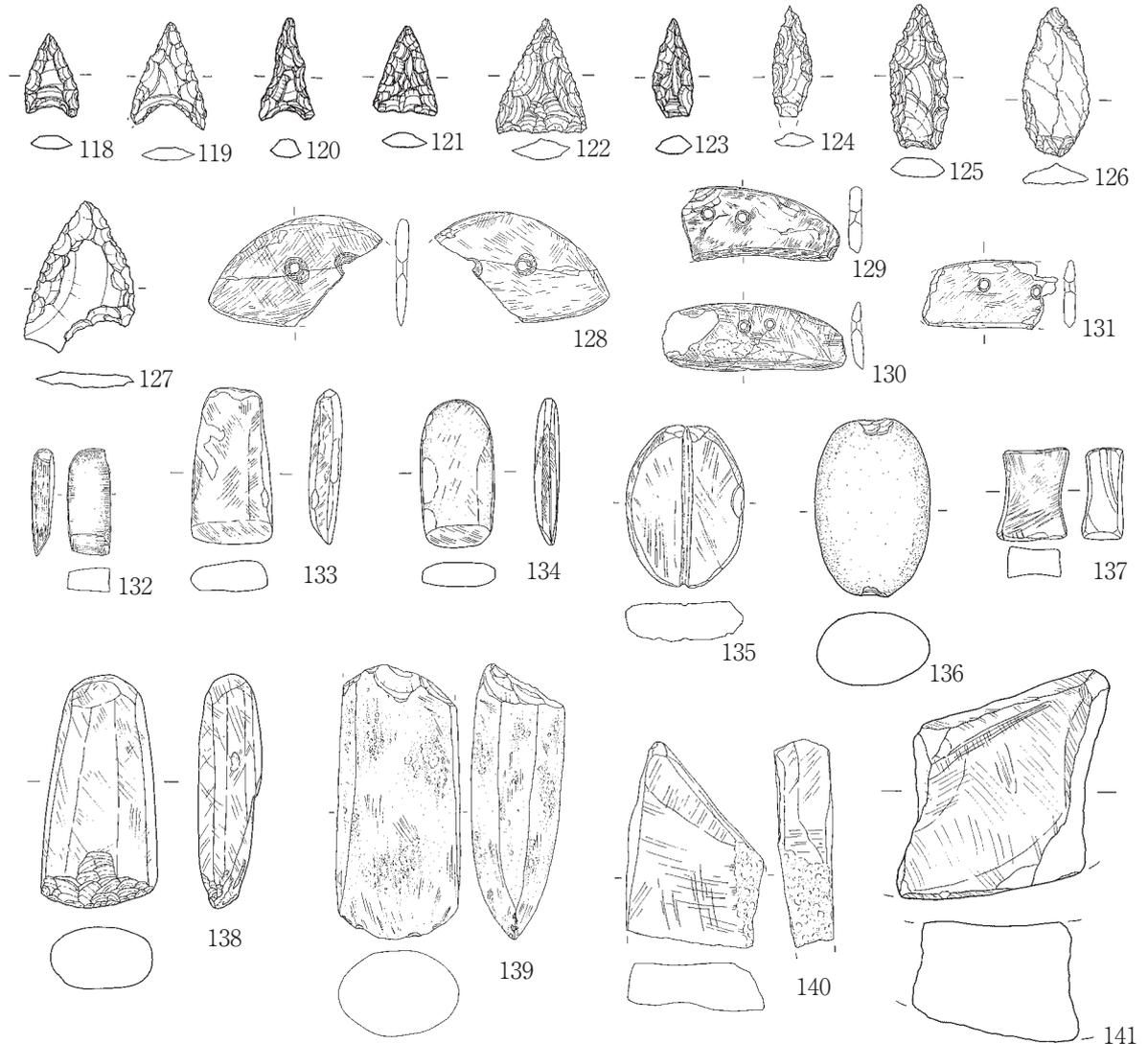
Ⅲ期に入ると、石器組成には変化が見られる。前期に盛行した打製石錐Ⅱ類、楔形石器、磨製石鏃、石鏃、叩石Ⅱ群は消滅する。また打製石鏃の大型化、石錐の出現もこの時期の特徴としてあげられる。打製石鏃は前期のような重量の偏在傾向はなくなり、比較的広い範囲に分布する。Ⅲ期のものは0.8～4.9gの範囲に収まる。またⅣ期には、1.2～5.3gのものが主体を占める。そのうち1.2～1.5gに最も集中する傾向がみられる。大型直縁刃石器はⅣ～Ⅴ期の遺構からも1点出土している。石錐は縄文時代からみられる器種の一つで、田村遺跡群でも縄文時代後期前半から中葉にかけて多量に出土する。ところが弥生時代前期の遺構からは石錐が全く出土しておらず、再び登場するのはⅢ期からである。その後、量的には少ないものの、後期Ⅴ-1期まで認められる。ただし縄文時代の石錐は全て打欠石錐で、重量的にはバラエティに富むものの約50～100gのものが多いのに対し、弥生時代に

は有溝石錘が出現し、重量が約100~150g内に収まるものが多くなる。重量はおよそ1.5~2倍に増加しており、漁法、捕獲対象魚、漁場などに変化があった可能性が考えられる。太型蛤刃石斧は前期に比べ断面に厚みを持つものが多くなる。台石は、前期に特徴的にみられた円錐状に深く窪むものはみられなくなる。

①Ⅲ期(Ⅷ-45図118~141)

Ⅲ期の遺構出土石器は非常に少なく、石器組成にも偏りがある可能性が高い。そのうち図示できたのは、打製石鏃(118~127)、石庖丁(128~131)、扁平片刃石斧(132・133)、小型石斧(134)、石錘(135・136)、太型蛤刃石斧(138・139)、砥石(137・140・141)である。

打製石鏃は凹基式、平基式、凸基式がみられ、大型のものが多くなる。127は全長4.2cmを測る。石材はサヌカイトが主体を占め、前期からの変化はみられない。石庖丁は磨製のもののみである。128を除き全て有側で、Ⅲ期には有側の石庖丁が増加すると考えられる。石錘は打欠石錘のⅠA類



S=1/2 : 118~127・137
 S=1/3 : 132~136・140
 S=1/4 : 128~131・138・139・141

Ⅷ-45図 Ⅲ期

(136)と、有溝石錘のⅡA類(135)がみられる。135は両面研磨調整を行って、扁平に仕上げている。

②Ⅳ期(Ⅷ-46図142～176)

Ⅳ期になると遺構数は増加し、それに伴い出土石器も増加する。ただしⅣ-1期とⅣ-2期の細分は不明瞭な点が多いため、大きくⅣ期とした。

図示した石器組成の中には新たに環状石斧が認められる。武器形石器はⅠ期から石鏃がみられるが、環状石斧については明確な遺構出土のものはⅣ期からである。また同じⅣ期の可能性の高い遺構から磨製石剣1点が出土している。武器形石器は、Ⅱ・Ⅲ期には明確な遺構出土例が皆無であり、当該期になって再び認められる。ただし出土量が非常に少ないことから、前期から継続して使用、製作された器種なのかは不明である。また石庖丁は、当該期からⅠ群の打製石庖丁、Ⅱ群の局部磨製石庖丁が登場する。使用石材はⅡ群はⅢ群と共通の頁岩・粘板岩、Ⅰ群はその他にサヌカイト製のものがみられる。

Ⅳ期の遺物として図示できたのは、打製石鏃(142～152)、石庖丁(153～160)、扁平片刃石斧(161・162)、小型石斧(163・164)、太型蛤刃石斧(165・166)、環状石斧(167)、石錘(168・169)、叩石(170～172)、砥石(173・174)、投弾(175)、台石(176)である。石庖丁は当該期からⅠ群の打製石庖丁と、Ⅱ群とした局部磨製石庖丁が出現する。打製石庖丁は前回調査ではⅠ期からみられるが、今回の調査成果ではⅣ期からの登場となる。出土量は僅少である。局部磨製石庖丁はⅣ～Ⅴ期にかけて盛行する。石庖丁はⅠ・Ⅱ群の出現・増加と連動して、整形・調整の粗雑化が進行する。また紐孔付近に敲打痕が顕著に残るもの、及び紐孔が1孔のものが増加する傾向が看取される。太型蛤刃石斧は166のように、基部の断面形が非常に厚みを持つものがみられるようになる。台石は大きさ・重量については前期のものと比較して大きな変化はみられないが、円錐状に深く窪む敲打痕をもつものはみられなくなる。

③Ⅳ-2～Ⅴ-1期(Ⅷ-47図177～208)

中期(Ⅳ期)から後期(Ⅴ期)への過渡期に当たるが、非常に遺物のさび分けが難しいためⅣ-2～Ⅴ-1期を設定した。田村遺跡群ではこの時期に属する遺構が多くみられる。

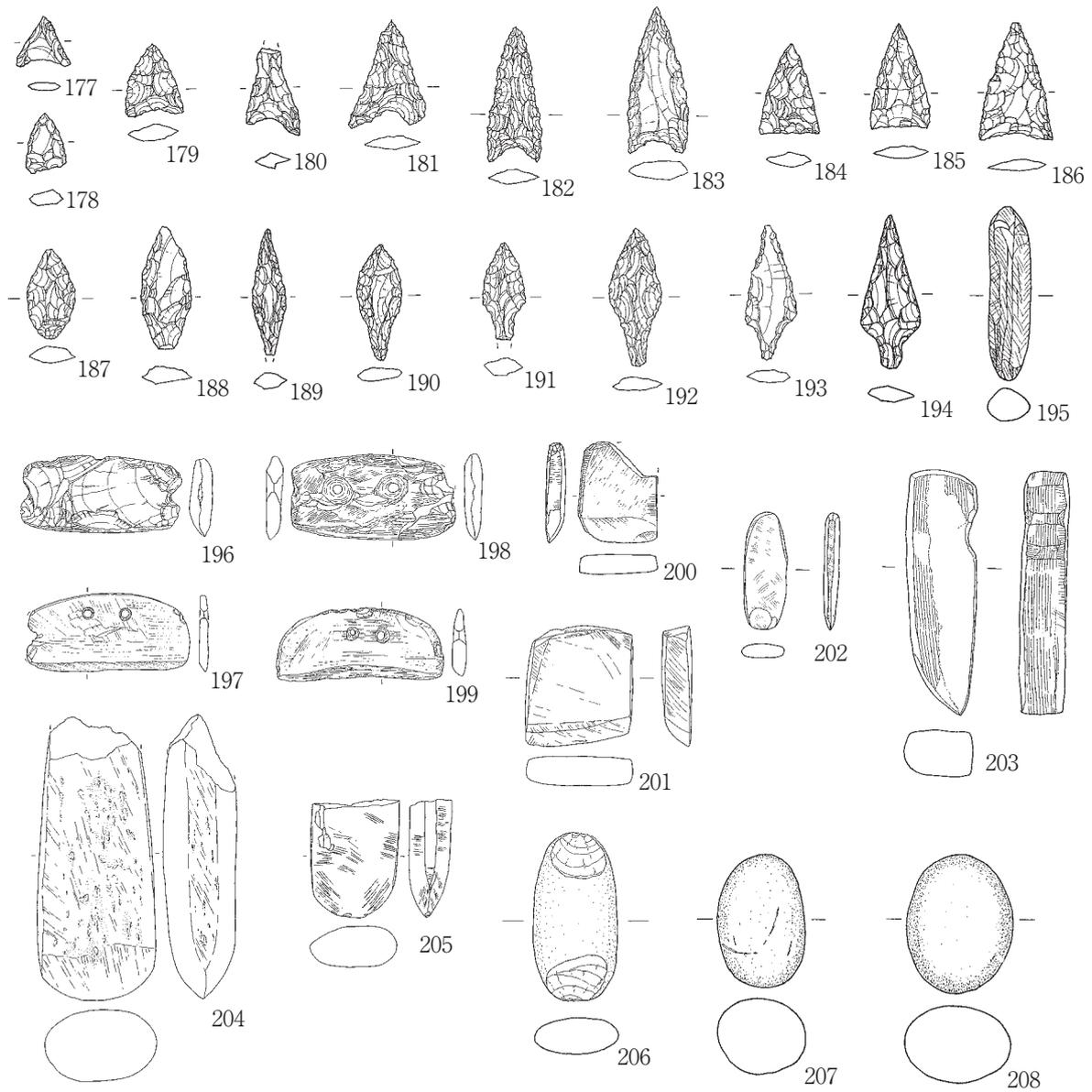
当該期に特徴的な石器はなく、特に目立った組成の変化はみられない。図示できた遺物は、打製石鏃(177～194)、石庖丁(196～199)、扁平片刃石斧(200・201)、抉入柱状片刃石斧(203)、小型石斧(195・202)、太型蛤刃石斧(204・205)、石錘(206)、投弾(207・208)である。

打製石鏃は凹基式の中型品、平基式、有茎式の増加が特徴的である。重量は広範囲に分布する。特に偏在傾向はみられないが、1.3g以上のものが多い。石庖丁はⅠ群の遺構出土のものはみられず、Ⅱ・Ⅲ群が主体を占める。またⅣ-2～Ⅴ-2期の遺構からは大陸系磨製石器群の柱状片刃石斧、小型方柱状片刃石斧が少量だが出土しており、わずかながら後期まで残ると考えられる。そのうち236(Ⅷ-48図)のように、断面が丸くシャープさに欠けるものもみられる。また使用石材にも変化が見られ、緑色片岩を使用するようになる。太型蛤刃石斧は205のような、小型で扁平な断面形を有するものがわずかだがみられる。



S=1/2 : 142-152 · 163 · 164
 S=1/3 : 161 · 162 · 173-175
 S=1/4 : 153-160 · 165-172
 S=1/8 : 176

Ⅷ-46图 IV期



S=1/2 : 177~195・207・208
 S=1/3 : 200・202
 S=1/4 : 196~199・201・203~206

Ⅷ-47図 IV-2~V-1期

(3) 後期

後期はV-1期、V-1~2期、V-3期に細分して、石器組成を行った。本来ならV-2期を設定すべきであるが、V-1~2期の出土遺物は、遺構によってはさび分け難く、独立して設定することが困難なため、幅を持たせV-1~2期とした。

田村遺跡群ではⅥ期までの遺構を確認しているが、集落の本体はV-3期には衰退に向かうと考えられる。それに伴い、石器の出土量も減少する。

また後期にみられる石器の減少の背景には、Ⅳ期以降出現する鉄器への移行が少なからずあるものと考えられる。田村遺跡群における鉄器の初現はⅣ期からである。Ⅳ-2期から板状鉄斧、ヤリガンナが出現し、袋状鉄斧はV-3期に増加する。こういった鉄器の傾向と石器の減少傾向は密接に結

びつくと考えられ、比較的早い段階で鉄器化が進んだとみられる加工斧はV-1期、大型蛤刃石斧もV-1～2期に減少する。また大型蛤刃石斧はV-1期には形態的に不定形なものがみられ、調整も粗雑なものが多くなる。これは鉄器の受容に伴ってみられる、石器の後退現象の一つと考えられる。

V-4期以降の石器はほとんど出土しておらず、石器組成もV-3期以降は不明である。

①V-1期(Ⅷ-48図209～226)

明確なV-1期の石器は比較的少なく、新しい器種は登場しない。全体的に各器種とも減少傾向がみられる。当該期の石器で図示できたものは打製石鏃(209～214)、石庖丁(215～220)、大型蛤刃石斧(221)、叩石(222・223)、石錘(224・225)、砥石(226)である。

特に打製石鏃、扁平片刃石斧、小型石斧の減少が顕著で、加工斧については当該期の遺構からは良好な遺物は出土していない。打製石鏃はこれ以降出土量が減少するため不明瞭な点もあるが、重量の偏在はみられない。傾向として0.7g以上のものが多い。また加工具の減少は、ほぼ同時期の鉄製品の登場と関連すると考えられる。大型蛤刃石斧は少量残るものの、IV期までみられた丁寧な整形・調整のものとは異なり、河原の転石をそのまま利用したようなものが多くなる。また石庖丁はII群の局部磨製石庖丁が安定して存在する反面、III群の磨製石庖丁は減少する。

②V-1～2期(Ⅷ-48図227～237)

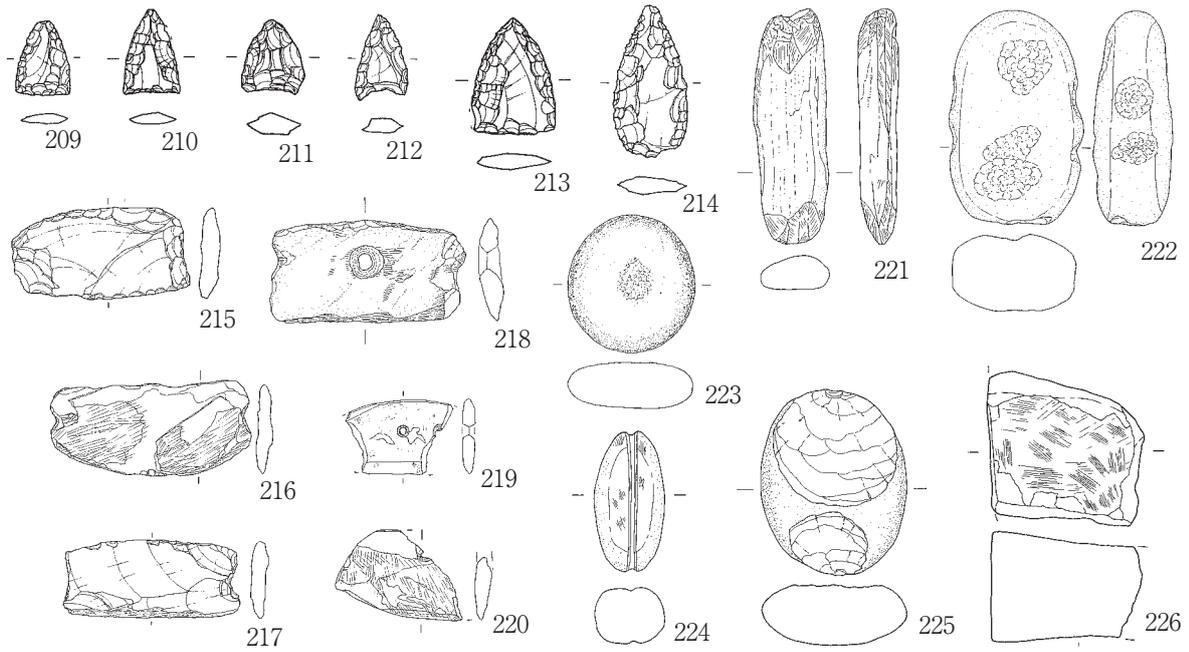
石器は引き続き減少傾向にある。特に前時期までは比較的多くみられた打製石鏃は激減する。石器組成はV-1期よりもさらに器種が減少する。石錘はこれ以降認められなくなり、大型蛤刃石斧も減少する。大型蛤刃石斧の減少は、竪穴住居跡などから出土した鉄斧への移行が考えられる。叩石は当該期の遺構からは出土していないが、I群とした全く加工していない円礫を利用したものは、V-3期までみられるようである。⁽¹⁸⁾ また、小型方柱状片刃石斧、小型石斧もわずかだが残ると考えられる。

当該期の石器で図示できたのは、石鏃(227)、石庖丁(229～233)、小型石斧(234～237)、砥石(228)である。石庖丁はII群の局部磨製石庖丁の他、I群の打製石庖丁が増加する。この時期、紅簾片岩の石庖丁もみられる。

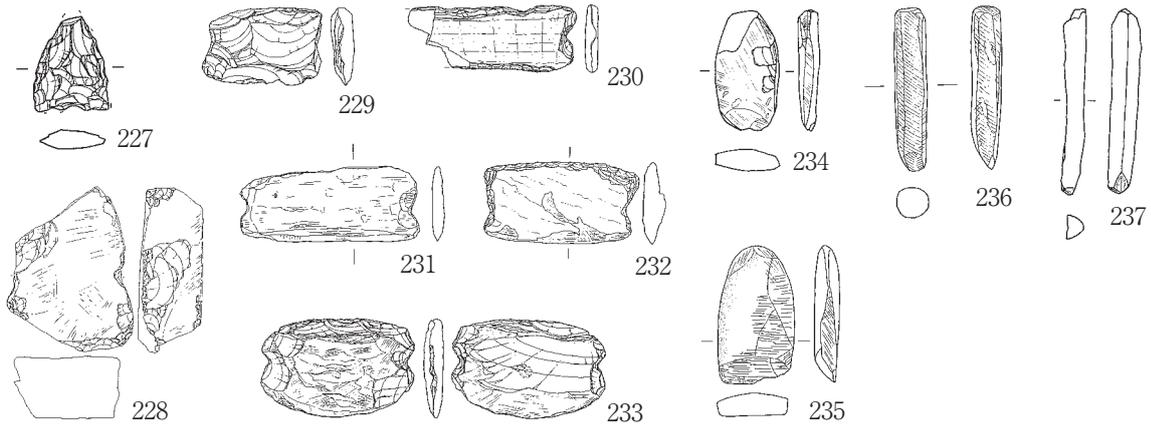
③V-3期(Ⅷ-48図238～250)

田村遺跡群はV-3期を境に衰退へと向かうと考えられる。当該期は安定した遺構数を保っており、前時期と比較して大きな増減はみられない。石器組成についても変化はあまりみられない。武器形石器である磨製石剣は1点みられ、当該期まで残る可能性がある。また石庖丁は比較的良好な資料が出土しており、I～III群がみられる。全体的に小型化・粗雑化の傾向が強い。

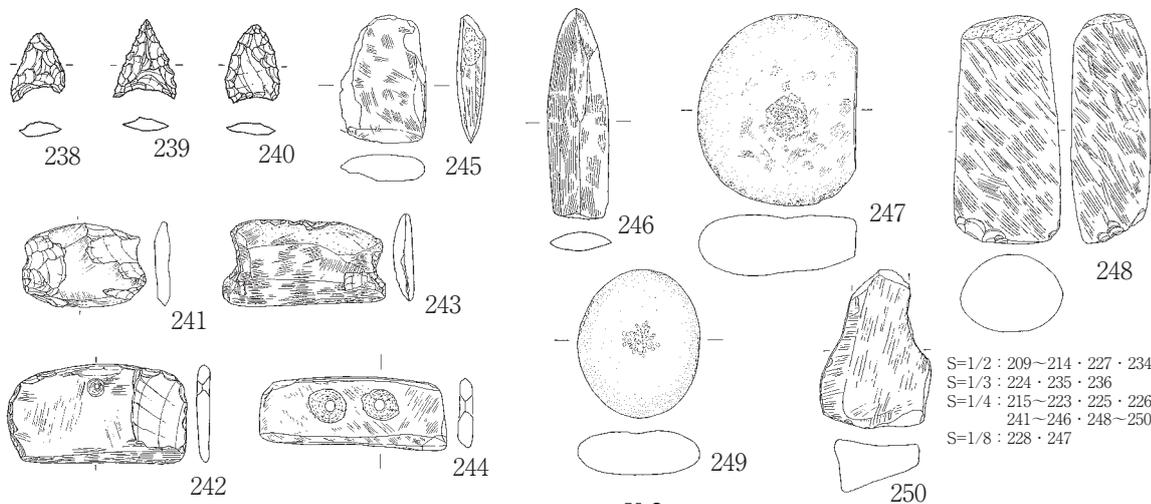
当該期の石器で図示できたのは、石鏃(238～240)、石庖丁(241～244)、扁平片刃石斧(245)、大型蛤刃石斧(248)、磨製石剣(246)、叩石(249)、台石(247)、砥石(250)である。



V-1



V-1~2



V-3

Ⅷ-48図 V-1-3期

S=1/2 : 209-214 · 227 · 234 · 237-240
 S=1/3 : 224 · 235 · 236
 S=1/4 : 215-223 · 225 · 226 · 229-233 ·
 241-246 · 248-250
 S=1/8 : 228 · 247

(4) 結び

以上、弥生時代前期から後期を通して、石器組成とその変遷についてみてきた。時期の明確な遺構出土石器を抽出したため、検出遺構の疎密がそのまま出土石器の多寡に反映されている。そのため、これが田村遺跡群の全ての石器組成を表しているとはいいがたいが、ある程度の傾向は窺うことができると考えられる。

前期の特徴である大陸系磨製石器群は、田村遺跡群においては比較的早い段階にほぼ出揃う。これは特筆すべき現象であり、前回調査の成果から既に指摘されていることである⁽¹⁹⁾。今回調査ではI-1期の遺物は出土していないが、これらを補完する資料に恵まれたことは大きな成果といえる。

大陸系磨製石器群の搬入経路については、これまで中部瀬戸内から南下した可能性が指摘されてきたが不明な点が多かった。今回調査で出土した大陸系磨製石器群は、受容期よりも若干新しく、I-2～3期ものが主体となる。この時期には既に石器製作は当遺跡内で開始されていたと考えられるが、出土石器の中には形態、使用石材ともに受容期と同様の古い様相を示すものも数点認められる。弥生時代前期にみられる他地域の石材は、層灰岩、珪質安山岩、堇青石ホルンフェルスがある。特に堇青石ホルンフェルスは、今回調査で初めて確認された石材である。同様の石材・形態の石庖丁は北部九州を中心に多く出土しており、他地域から搬入されたものと考えられる。こういった製品の増加は搬入経路を考える上で貴重な資料といえる。

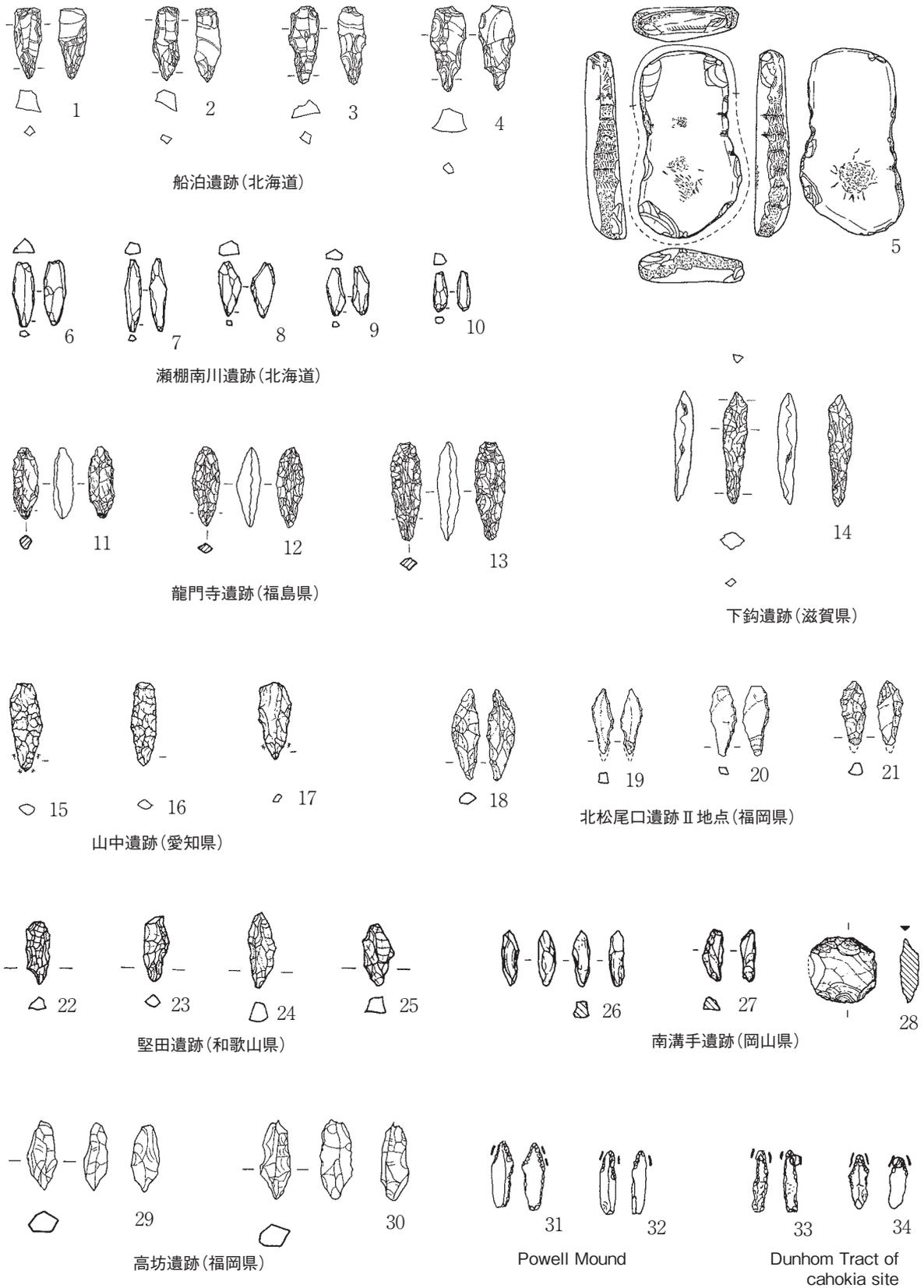
また、大陸系磨製石器群とは異なる石器の一群が存在することが明らかとなった。これは前期に限定される石器群であり、小型の打製石錐(Ⅱ類)、楔形石器、叩石(Ⅱ群)、台石がセットとなる。同様の打製石錐、叩石のセットは縄文時代後期の北海道船泊遺跡にもみられ、船泊遺跡ではこれらの石器を使用した貝製ビーズの製作が想定されている⁽²⁰⁾。同様の形態の石錐は、製作技法・法量などに差はあるものの、福岡県高坊遺跡、北松尾口遺跡Ⅱ地点、良積遺跡、岡山県南溝手遺跡、和歌山県堅田遺跡、同じく恵山文化期の北海道瀬棚南川遺跡などでも認められる。そのうち岡山県南溝手遺跡は石錐を用いた玉製作⁽²¹⁾、北海道瀬棚南川遺跡では貝・骨角製品の加工に使用された可能性を示唆している⁽²²⁾。これらの遺跡のうち、同じチャート製石材を使用するのは、堅田遺跡、高坊遺跡である。この2遺跡の出土石錐は、当遺跡群出土のものと同様に非常に小型で、法量の面で一致する。また同様の技法で製作された可能性が高い。

海外の類例に目を転じると、カリフォルニア州南部のChannel島およびその周辺地域では同様の石錐を使用して18世紀まで貝製ビーズの製作が行われていた⁽²³⁾。また同じくミシシッピ川流域のCahokiaでも同様のドリルが認められる。

以上の遺跡出土石錐については、Ⅷ-49図に抜粋しているので、そちらをご参照願いたい⁽²⁴⁾。

田村遺跡群の場合、石錐Ⅱ類と共伴する剥片・石核は全てチャート製で、石錐製作によって生じたものと考えられる。玉製作を示す剥片・石核などは出土しておらず、積極的にそれらと結びつける資料に乏しい。また田村遺跡群は有機物が残らない立地のため、残念ながら貝製ビーズの出土は認められていない。そのため、安易に一連の石器群とビーズ製作を結びつけることはできないが、可能性として提示しておきたい。

大陸系磨製石器群はI期の段階で既に変質が始まり、在地の文化に取り込まれていく。また弥生



S=原寸大：22・27・29・30
 S=1/2：1～4・6～10・11～21・28・31～34
 S=1/3：5

Ⅷ-49図 打製石錐出土主要遺跡(参考資料)

時代前期の遺構からは縄文時代を象徴する石棒も1点出土しており、大陸系磨製石器を受容しながらも、縄文的な精神を残すムラであったことが推測される。そのなかで、磨製石鏃・石鎌は消滅し、後続の時期に残ったものは変質し、地域色豊かな石器群として存続することとなる。特に石庖丁は弥生時代前期から出現し、後期まで存続する器種である。前期の石庖丁は受容期の大陸系磨製石器の特徴を有するものが主体であるが、Ⅲ期以降は有側タイプが増加・盛行する。有側タイプはⅡ群とⅢ群に分けられ、更に形態から細分可能である。Ⅱ群の局部磨製石庖丁の登場は、中期以降田村遺跡群出土石器に認められる粗雑化傾向と連動しているとみられる。またⅢ群の磨製石庖丁有側タイプも形態的にバラエティに富み、非常に地域色が反映された器種と言える。

Ⅳ期に入ると、田村遺跡群では鉄製品が登場する。後期の石器組成で減少または欠落していく伐採斧・加工斧などは、石器から鉄器へと移行していった可能性が考えられる。

註

- 15) 前回調査の成果による。今回調査ではⅠ-3期から認められる。
- 16) 時期・地域は異なるが、類似した形態の石錐が出土する遺跡が散見される。現在のところ筆者が確認できているのは、北海道瀬棚南川遺跡、船泊遺跡、福島県龍門寺遺跡、愛知県山中遺跡、滋賀県下鈎遺跡、和歌山県堅田遺跡、岡山県南溝手遺跡、福岡県高坊遺跡、北松尾口遺跡Ⅱ地点良積遺跡である。ただしこれらの遺跡出土の石錐の中には製作技法、法量の一致しないものも含まれる。また海外の類例としては、Channel島および周辺地域で、BC600年～AD1782年まで行われた貝製ビーズの製作に、同様の石錐が使用されている。
- 17) Ⅰ-3～4期に図示した石庖丁(96)も、Ⅰ-3期に入る可能性が高い。
- 18) 叩石に関しては非常に出土量が多く、報告書作成の際に図示されていない可能性もある。
- 19) 出原恵三「南四国の石器－弥生時代の磨製石器を中心として－」『古代吉備』第21集 1999
- 20) 長沼孝「礼文島船泊遺跡における貝製平玉の製作技術」『月刊考古学ジャーナル10 No.521,2004』ニュー・サイエンス社 2004
- 21) 久保恵里子「第6節 石器・石製品について」『南溝手遺跡1 岡山県立大学病院に伴う発掘調査1』岡山県教育委員会 1995
- 22) 上野秀一・田村美智子他『瀬棚南川』瀬棚町教育委員会 1983
- 23) 御堂島正氏のご教示による。George H.Odell, *Lithic Analysis*, Kluwer Academic/Plenum Publishers, pp204～208, 2004, 参考。
- 24) 福岡県良積遺跡出土石錐については、図版作成後に確認したため図示はできなかった。

参考文献

- 出原恵三「南四国の石器－弥生時代の磨製石器を中心として－」『古代吉備』第21集 1999
- 御堂島正「石器製作の使用痕－トラセオロジーの視点から－」『月刊考古学ジャーナル3 No.499,2003』ニュー・サイエンス社 2003
- 長沼孝「礼文島船泊遺跡における貝製平玉の製作技術」『月刊考古学ジャーナル10 No.521,2004』ニュー・サイエ

ンス社 2004

欄宜田佳男「畿内地域」『考古学ジャーナル7 No.433, 1998』ニュー・サイエンス社1998

宮原晋一「石斧、鉄斧のどちらで加工したか」『弥生時代の研究』10、雄山閣 1988

松井和幸「中国・四国」『弥生時代の研究』10、雄山閣 1988

松井和幸「大陸系磨製石器類の消滅とその鉄器化をめぐって」『考古学雑誌』第68巻 日本考古学会編学生社版
学生社 1995

下条信行「大陸系磨製石器の時代色と地域色」『月刊 考古学ジャーナル8 No.391,1995』ニュー・サイエンス社
1995

山口譲治「北部九州の大陸系磨製石器」『月刊 考古学ジャーナル8 No.391,1995』ニュー・サイエンス社 1995

梅崎恵司「東北部九州の弥生時代磨製石器編年」『月刊 考古学ジャーナル8 No.391,1995』ニュー・サイエンス
社 1995

森下英二「瀬戸内の大陸系磨製石器」『月刊 考古学ジャーナル8 No.391,1995』ニュー・サイエンス社 1995

欄宜田佳男「近畿の大陸系磨製石器」『月刊 考古学ジャーナル8 No.391,1995』ニュー・サイエンス社 1995

下条信行・村上恭通・田崎博之『日本における石器から鉄器への転換形態の研究』1998

下条信行「弥生古墳時代の九州型石錘について－玄界灘海人の動向－」『九州文化史研究所紀要』第二十九号
九州大学九州文化史研究施設 1984

岡村道雄「ピエス・エスキュー、楔形石器」『縄文文化の研究 7道具と技術』雄山閣 1987

平井勝『考古学ライブラリー64 弥生時代の石器』ニュー・サイエンス社 1991

George H.Odell, *Lithic Analysis*, Kluwer Academic/Plenum Publishers, 2004.

『礼文町船泊遺跡発掘調査報告書－平成10年度発掘調査の報告』北海道礼文町教育委員会 2000

『瀬棚南川遺跡』瀬棚町教育委員会 1976

上野秀一・田村美智子他『瀬棚南川』瀬棚町教育委員会 1983

『龍門寺遺跡－重要幹線街路事業に伴う調査』福島県いわき建設事業所・福島県いわき市教育委員会・財団法人
いわき市教育文化事業団 1985

『山中遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1992

『下鈎遺跡 栗東市下鈎・苅原』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2003

『堅田遺跡－弥生時代前期集落の調査－』御坊市教育委員会・御坊市文化財調査会 2002

『南溝手遺跡1 岡山県立大学病院に伴う発掘調査1』岡山県教育委員会 1995

北九州市埋蔵文化財調査報告書第243集『高坊遺跡(第1次調査)－県営城野団地建設に伴う埋蔵文化財調査報告
書』財団法人北九州市教育文化事業団・埋蔵文化財調査室 2000

『北松尾口遺跡Ⅱ 地点』小郡市教育委員会 1990

『良積遺跡Ⅰ 福岡県三井郡北野町所在遺跡の調査』北野町教育委員会 1996

『特別企画展石と鉄の考古学 石器の終わりと鉄器の始まり』仙台市富沢遺跡保存館 地底の森ミュージアム
2004

以下Web上のホームページ参考。

Stone Age Artifacts of the World, MICRO-DRILLS.

<http://www.lithiccastinglab.com/gallery-pages/2002junemicrodrillspage1.htm>

<http://www.lithiccastinglab.com/gallery-pages/2002junemicrodrillspage2.htm>

<http://www.lithiccastinglab.com/gallery-pages/2002junemicrodrillspage3.htm>

OKLAHOMA ARCHEOLOGICAL SURVEY, Shell Beads.

<http://www.ou.edu/cas/archsur/OKArtifacts/shellbead.htm>

IX 弥生時代の土製品

土製品は土錘、土製紡錘車、土製円板、土玉、人面動物形土製品などが出土している。土錘、土製紡錘車、土製円板は生産具、人面動物形土製品は祭祀的な用途に利用されたと考えられる。土製品の多くはまとめて出土することはない、前期溝3出土の土錘が例外といえる。

これら土製品のうち、比較的出土量の多い土錘について分類を行った。分類に際しては、下条信行氏の土錘の分類を参考にさせていただいた⁽¹⁾。

またこの項で、土錘を含めた弥生時代の漁撈具について述べることにする。

1. 土錘 (IX-1図1～4)

土錘は弥生時代の遺構及び包含層から出土している。これらは全て管状土錘である。形状からA・B類に、更に平面形から2種に細分する。

A類：全長と全厚の差が大きく、細長い形態のもの。外沈線はみられない。平面形は紡錘形を呈する。= A2類は細管状土錘 I a類

B類：全長と全厚の差が小さく、ずんぐりとした形態のもの。= 管状土錘 II b・c類

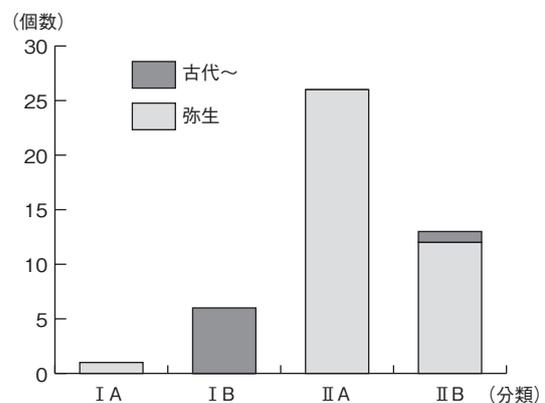
1：平面形が筒形

2：平面形が紡錘形

このうちA2類は弥生時代の田村遺跡群では認められず、古代から出現する。A1類及びB1・2類は弥生時代から認められる。主体となるのはB1類で、B2類はB1類と共伴するものの量的には少ない。またA1類は1点の出土に留まる(グラフIX-1参照)。

明確な時期の分かる土錘は弥生時代前期に集中し、土坑、前期溝から出土している。特に前期溝3からは管状土錘B類36点がまとめて出土した。この一群の土錘は、全長4.2～5.7cm、全厚3.0～3.6cm、孔径0.9～1.0cm、重量38～64gの狭い範囲内の数値に納まり、非常に規格性に富む。また土錘の胎土には田村遺跡群出土の前期土器と同様にチャート砂粒を多く含み、いずれも酷似している。これらの点から前期溝3出土土錘は、ほぼ同時期に製作されたものと考えられ、網についた状態で廃棄された可能性が高い。

また特筆すべき点として、1点であるが搬入品が出土していることがあげられる。前期の土坑からの出土で、形状からB2類に分類できる。重量53.2g、全長5.0cm、全幅3.5cm、孔径1.0cmを測り、在地産の同時期の土錘とほぼ同じ法量の値を示す。胎土の混和材には石英、長石が目立つ。胎土、混和材の特徴から、瀬戸内地域から搬入された可能性が考えられる。



グラフIX-1 土錘時代別数量グラフ

2. 田村遺跡群出土の漁撈具について

田村遺跡群では農具に比べ量は少ないが、石錘、土錘、鉄製釣針などの漁撈具が出土している。そのうち鉄製釣針は中期以降少量認められるもので、遺存する漁撈具の多くは石錘と土錘である。

(1) 土錘(Ⅸ-1図1~4)

弥生時代の土錘は全て管状土錘で、これらは漁網錘として用いられたとみられる。出土した土錘の類別に比較してみると、重量はA1類7.8~13.6g、A2類27.2g、B1類24.8~87.7g、B2類10.6~77g、孔径はA1類0.4cm、A2類0.6~1.0cm、B1類0.4~1.4cm、B2類0.4~1.0cmを測る(グラフⅨ-1参照)。同じ類の中でも重量、孔径にばらつきが見られる。孔径は沈子網の太さの最大値を表すものであり、重量及び孔径の差はそのまま網の規模、または漁法、漁場の違いを示すものと考えられる。とすれば、同じA・B類に属するものでも、孔径0.4cmと1cmの土錘では使用方法は異なった可能性がある。また前期溝3からは36点の土錘(B1・2類)がまとまって出土した。これらの土錘は網に装着したまま廃棄された可能性が高く、B1類の筒形、B2類の紡錘形が1枚の網に使用されたとみられる。これらの土錘は非常に法量的に近似しており、使用に際して平面形ではなく、重量による選択がなされたことが想定される。

(2) 石錘(Ⅷ-10図1~9)

石錘は今回調査では中期から認められ、IおよびII A類はⅢ期から、II B類はⅣ期から出現する。縄文時代から残る打欠石錘(I群)に加え、有溝石錘(II群)が認められる。さらに有溝石錘はI B類の瀬戸内型とII B類の九州型に分けられる。

石錘の項目でも述べたが、打欠石錘の重量のピークが101~150gの狭い範囲に集中するのに対し、有溝石錘は101~250gと重量に幅がみられる。こういった重量の差は、漁法または漁場によって石錘を使い分けた結果なのかは不明である。II B類の九州型石錘は法量から小型と中型に細分され、小型のものは重量10g以下を量る。小・中型いずれも、釣用の沈子に用いられたと推測される。また石錘II B類の出現に先行して、田村遺跡群では鉄製釣針の出現が確認されている。

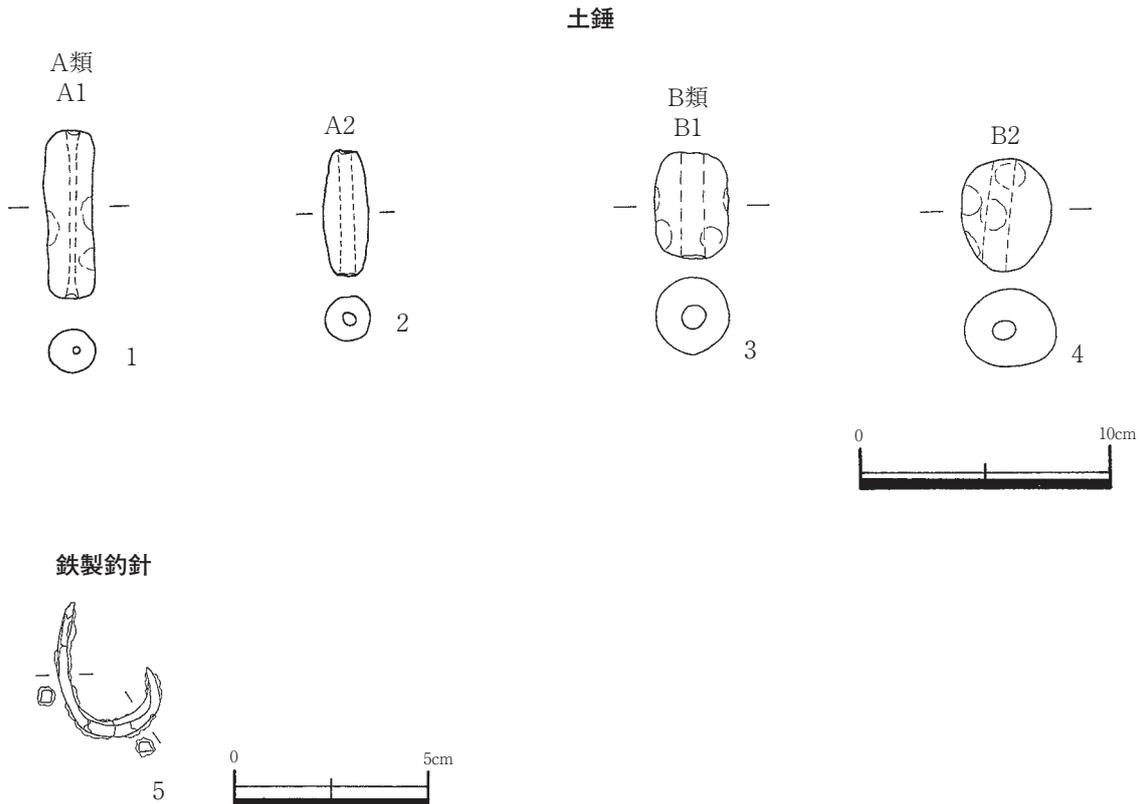
(3) 鉄製釣針(Ⅸ-1図5)

2点を確認している。1点はⅣ期、もう1点はⅤ期の住居跡から出土している。どちらもアグのないタイプである。九州型石錘と組み合わせて使用された可能性がある。大きさからみて、海釣に用いられた可能性が高く、対象物も中~大型魚であったと考えられる。

(4) まとめ

田村遺跡群出土の漁撈具の特徴として次の点が上げられる。

- ① 弥生時代の土錘は、前期に集中する傾向がある。
- ② 中~後期には土錘の出土量は僅少で、今回調査ではⅢ期から石錘が出現する。



No.	器種	分類	時期	調査区	遺構名	分冊	図版番号	遺物番号	備考
1	土錘	A1	I-3	F4	SD413	4	F4-90	7	
2	土錘	A2	8C後半~10C	E7	SR703	3	E7-58	23	
3	土錘	B1	I-3~4	前期溝(C5)	SD504	7	前期溝3-4	27	
4	土錘	B2	I-3~4	前期溝(C5)	SD504	7	前期溝3-4	58	
5	鉄製釣針		IV	N2	ST202	7	N2-4	4	アグなし

表IX-1 図 漁撈具一覧表

③IV期から、鉄製釣針が出現。

④V期から石錘ⅡB類が出現。

そのうち前期に特徴的にみられる土錘は、大きくA・B類に、更に平面形から1・2種に細分できる。重量はB類が大きく、孔径はA・B両者とほぼ同じ値である。逆に同じ類・種のもので孔径に差が見られる。重量・孔径の差は漁網錘の規模、漁法、漁場などと密接に関わるものと考えられ、少なくとも大小2種類の網、または異なる網漁法が存在した可能性が高い。漁場としては川・海その他、溜め池、用水路なども考えられる

弥生時代、田村遺跡群の南には浜堤が形成され、潟湖が広がっていたとみられる。また今回調査で出土した動物遺存体の分析結果により、カレイ科、ニシン亜目の一種の魚骨が認められることから、潟湖は格好の漁場となったと推測される。

それでは田村遺跡群で行われた弥生時代の漁撈活動とはどのようなものであったのだろうか。まず前期から出土する土錘は全て管状土錘であるのが特徴としてあげられる。水稻耕作文化の一つの

要素である管状土錘が加わったと言うことは、田村遺跡群において稲作と共に新しい漁撈文化も受け入れたと考えられる。しかし縄文時代には多量に出土した石錘が、弥生時代に入ると激減しており、土錘もそれを補うほどの出土量はみられない。漁撈具という性格上、集落外で使用され、廃棄されたと考えられる。ただし同時期の打製石鏃や縄文時代の石錘の出土量と比較して、弥生時代の漁撈具の出土量は激減しており、漁撈はあくまでも農業の傍らで行う副次的なものへと変質した可能性が推察できる。

弥生時代中期から古墳時代前期になると三浦半島や九州北部の玄海灘周辺では、沖合・外洋を漁場とし、釣漁法・刺突漁法に習熟した海民漁業と、地先海域を漁場とし網漁業を専門とする農民漁業に分離する傾向がみられるようになる。それに対し瀬戸内及びその周辺地域では、土錘を主とする漁撈具が出土するものの、生産基盤を農耕におく集落が広く分布するようである⁽²⁾。ただし瀬戸内地域では弥生～古墳時代にかけて新しいタイプの土錘が出現しており、バラエティーに富む土錘の出現は、網漁法の発展・多様化を意味していると言えるだろう。

一方同時期の田村遺跡群も多量の農具の出土例などから、瀬戸内地域と同様に稲作に生産基盤をおいていたとみられる。そして農業の合間に地先を漁場として、網漁法を専門とする農民漁法を行っていた可能性が考えられる。ただし基本的に有機物が遺存しない立地環境のため、漁撈具がどれほど存在していたのかは不明である。鹿角製、骨製などの「見えざる漁撈具」は当然存在していたであろうし、それに伴う刺突漁法や、釜など用いたせん漁、えり漁、漬漁などもあったと推定される。ただしこれらは推測の域を出ず、漁撈具の全体における出土量から見ると田村遺跡群は農民漁法の範疇に入るのである。

また生産基盤が瀬戸内に類似しているとしても、網漁法の内容については異なっていた可能性もある。一口に網漁法と言っても種類は様々である。後期になっても田村遺跡群では瀬戸内地域で見られるようなタイプの石錘・土錘は認められない。棒状土錘は刺網、あるいは小型の定置網に、管状土錘は曳き網(袋網)に適するとも言われる。田村遺跡群の単純な錘のあり方は逆に漁法の未分化を示唆するものとも考えられる。

註

- 1) 下條信行氏の「わが国初期稲作期における土錘の伝来と東伝」『考古論集－潮見浩先生退官記念論文集－』1993での土錘の分類を参考にさせていただいた。
- 2) 大野左千夫氏、P140～141「6漁撈」『古墳時代の研究 4生産と流通 I』雄山閣1991を参考にさせていただいた。

参考文献

- 真鍋篤行「弥生時代以降の瀬戸内地方の漁業の発展に関する考古学的考察」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第7号 瀬戸内海歴史民俗資料館 1994
- 真鍋篤行「瀬戸内地方の網漁業技術史の諸問題」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第9号 瀬戸内海歴史民俗資料館 1996

- 和田晴吾「6狩・漁」『弥生文化の研究 2生業』雄山閣 1988
- 大野左千夫「6漁撈」『古墳時代の研究 4生産と流通 I』雄山閣 1991
- 大野左千夫「弥生時代の漁具と漁撈生活」『月刊 考古学ジャーナル3 No.344,1992』ニュー・サイエンス社
- 立石業穂「漁具と考古学」『月刊 考古学ジャーナル3 No.344,1992』ニュー・サイエンス社
- 池田毅「東播磨における漁撈活動についての考察」『文化財学論集』文化財学論集刊行会1994
- 平井勝『考古学ライブラリー64 弥生時代の石器』ニュー・サイエンス社 1991
- 乗松真也「中国・四国地方における有溝石錘の地域差」『財団法人香川県埋蔵文化財センター 研究紀要Ⅷ』財団法人香川県埋蔵文化財センター 2000
- 更谷大介「2.南四国の土錘～古代の土錘を中心にして～」『下ノ坪遺跡Ⅲ』高知県野市町教育委員会 2000

X 高知県出土青銅器について

今回の2次調査では田村遺跡群から銅矛2点、銅鏡1点、銅釧1点が出土した。また前回調査では銅鏡2点が出土しているほか、過去に田村遺跡群内からは銅鐸舌が西見当地区から出土しているほか、カリヤ地区からは広形銅矛5本が一括出土している。また周辺地域まで範囲を広げると田村遺跡群西約1kmの関町田と、北側約1kmの田村正善からも銅鐸が出土している。このように、田村遺跡群は青銅器が多種にわたって出土している。

このような田村遺跡群の青銅器を理解するためには高知県出土の青銅器を集成し検討することが必要と考えられる。

現在まで高知県で出土した青銅器は銅鏡8点(小型仿製鏡含む)、銅鐸12点(舌含む)銅矛55点、銅劍10点、銅戈6点、銅釧1点が出土している。これらの青銅器の中で発掘調査によって出土し確認されたものは、田村遺跡群1次、2次調査出土の青銅器、西分増井遺跡出土の青銅器、天崎遺跡出土の銅矛、介良遺跡出土の銅鏡である。そのほか、出土後の確認調査が行われたものとして伊野町天神溝田遺跡、南国市遅倉遺跡、窪川町西川口遺跡などがある。

その出土状況の分布ではやや偏りがみられ、集中出土する地域が3ヶ所存在する。窪川町には銅矛が集中しており、また、高知県中央部では仁淀川を挟んだ土佐市と春野町地域と中央部東側の物部川流域の田村遺跡群にその集中がみられる。

同一遺跡群内から複数の種類の青銅器が出土している遺跡も存在し、田村遺跡群と西分増井遺跡を挙げることができる。また、伊野町天神溝田遺跡からも銅劍と銅戈がほぼ共伴で出土している。同一遺跡群内から複数の種類の青銅器が出土している点では、田村遺跡群と西分増井遺跡は同じであるが、その出土状況は全く異なっており、田村遺跡群からはほぼ完形の青銅器が出土し、西分増井遺跡からは原形をとどめない碎片で出土している。

高知県出土の青銅器について概観したが、次に器種ごとに概観してゆきたい。

銅鏡

8点(小型仿製鏡含む)出土しておりいずれも破砕鏡である。その分布は中央部のみであり、田村遺跡群3点と西分増井遺跡3点(小型仿製鏡含む)馬場末遺跡・介良遺跡各1点である。田村遺跡群出土のもののみ前漢鏡の可能性が考えられる。小型仿製鏡は西分増井遺跡から出土しており高知県での出土例はこの1点のみである。

銅鐸

銅鐸は舌を含め12点出土しており、その出土の分布は香美郡下を中心とする。西分増井遺跡2次調査で出土した銅鐸片はその分布域の西限を拡大した。出土する銅鐸の形式では扁平紐式3点、突線紐式が8点である。馬路村、土佐町、香北町と比較的山間部からも出土している。

銅矛

高知県出土の青銅器では最も多く出土しており現在まで55点が確認されている。窪川町に集中がみられる。高知県で出土する形式は中広形が38点で広形が15点、不明2点である。

出土した銅矛で埋納坑から出土が確認されているものは、西ノ川口遺跡、遅倉遺跡、天崎遺跡の埋納坑は中世の差異埋納と確認されている。田村遺跡群2次調査出土の銅矛である。なお、また、複数本の一括出土している事が確認されているのは西ノ川口遺跡、田村カリヤ、天崎遺跡出土である。

銅剣

高知県下で10点出土しており、新荘川流域、葉山村で2点、須崎市で2点出土していることが注目される。最も東で確認されているのは野市町兎田八幡宮所蔵の絵画銅剣である。

銅戈

県下では6点出土しており、内3点が窪川町、1点が中土佐町からの出土であり分布に偏りがみられる。伊野町天神溝田遺跡からは中広形銅戈が出土しているが約5m離れた地点から共伴するように中細形銅剣が出土している。西分増井遺跡からは広形銅戈が出土しているが、窪川町、中土佐町で出土しているものがいずれも中細形である事を考えれば出土地点が東になる事と形式が比例している事が注目される。

銅釧

高知県では田村遺跡群2次調査出土が唯一の出土例である。有鉤銅釧で、住居跡中央ピットから廃棄された状態で出土した。

田村遺跡群出土及び周辺地域出土青銅器

1 正善出土銅鐸

型式	突線紐2式(近畿式銅鐸 I A式)
出土地住所	田村正善1163.1169
出土年月日	明治15.6年頃
現所蔵	辰馬氏蔵

2 西見当C地点出土銅鐸舌

全長	3.7cm
特徴	使用痕跡有り
時期	不明
備考	大埴関町田(まてだ)出土の銅鐸(扁平紐式)の舌の可能性有り
現所蔵	高知県歴史民俗資料館蔵

3 田村遺跡1次調査Loc.34B出土銅鏡

型式 方格規矩四神鏡(破碎鏡)
 出土遺構 SP1
 時期 共伴遺物はV新
 現所蔵 高知県立歴史民俗資料館蔵

4 田村遺跡1次調査Loc.45出土銅鏡

型式 方格規矩四神鏡(破碎鏡)
 特徴 割れ口が磨耗し破碎鏡として使用期間が一定ある可能性高い。
 出土遺構 ST102
 出土状況 床面約10cmの埋土中に立った状態で出土。
 時期 共伴遺物はV新
 備考 銅鏡と住居跡が直接関係するとは考えにくい。(埋没時に混入か?)
 現所蔵 高知県立歴史民俗資料館蔵

5 田村遺跡群2次調査E1区出土銅鏡

型式 平縁の小型鏡(直径約8.0cm) 前漢鏡の可能性有り。
 出土遺構 ST102
 時期 STの時期は後期前半と考えられる。
 備考 ガラス小玉が共伴。
 現保管場所 高知県埋蔵文化財センター

6 B3区出土有鉤銅釧

出土遺構 削平された住居跡の中央ピット
 出土状況 中央ピットの埋土は焼土層と炭化物層に分層でき、焼土層上面の炭化物層との間から出土。
 遺構の時期 中期末～後期前半
 現保管場所 高知県埋蔵文化財センター

7 カリヤ出土銅矛

型式 広形銅矛Ⅰ型3本、広形銅矛Ⅱ型2本(近藤喬一分類か?)
 出土本数 合計5本
 出土地住所 田村カリヤ614.615
 出土年月日 明治32年
 出土状況 埋納坑と考えられる土坑に耳を上にし袋部を交互にして南北方向に並べた状態で出土。

現所蔵 石川家(発見者)3本、伊都多神社1本、高知県立歴史民俗資料館1本

8 田村遺跡群2次調査E7区出土銅矛

型式 広形銅矛B類(岩永分類)

特徴 峰部から約10cmのみ残存

出土遺構 SR703

遺構の時期 古代

備考 銅矛と遺構の時期は無関係、銅矛は流路への流れ込みと考えられる。

現保管場所 高知県埋蔵文化財センター

9 田村遺跡群2次調査 I 2区出土銅矛

型式 中広形銅矛b3類(岩永分類)

形態的特徴 耳は未貫通、耳の周囲には突線がある。全長(復元)83cm

出土遺構 埋納坑と考えられる土坑。

周辺遺構の時期 中期末～後期初頭

その他 ・掘り方の中から円筒形の灰色粘質土にくるまれた様な状態で出土。

・1本のみ埋納されていた。

・埋納は1回のみ

・耳を上を刃をたて、袋を東にして置かれる。

・近接するところに同時期と考えられる掘立柱建物跡が存在。

現保管場所 高知県埋蔵文化財センター

参考文献

出原恵三・森田尚宏ほか 『高知空港拡張に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県教育委員会 1986年

岡本健児 「高知県発見の銅矛について」『高知の研究』第1巻 1983年

『南国市史』上巻 南国市 1979年

岩永省三 「矛形祭器」『弥生文化の研究』第6巻 1986年

岩永省三 『歴史発掘 第7巻 金属器登場』 1997年

注 各青銅器の分類は下記、文献の記載によった。

岡本健児 1973 『高知県史』考古資料編 高知県

岡本健児 1979 『南国市史』上巻 南国市

岡本健児 1983 「高知県発見の銅矛について」『高知の研究』1 地質・考古篇 清文堂

岡本健児 1983 「高知県発見の銅剣・銅戈・石剣について」『高知の研究』1 地質・考古篇 清文堂

森田尚宏・出原恵三他 1986 『高知空港拡張整備事業に伴う田村遺跡群発掘調査報告書』高知県教育委員会

出原恵三 1990 『西分増井遺跡群』 春野町教育委員会

坂本憲昭他 1997 『介良遺跡』 高知県文化財団 埋蔵文化財センター

山本哲也他 1999 『天崎遺跡』 高知県文化財団 埋蔵文化財センター

出原恵三他 2004 『西分増井遺跡Ⅱ』 高知県文化財団 埋蔵文化財センター

吉成承三・坂本憲昭他 2004 『田村遺跡群Ⅱ』高知県文化財団 埋蔵文化財センター

種別	個数	形式	個数
銅鏡(小型仿製鏡含む)	8(小型仿製鏡1)	銅鏡	8
銅 矛	55	中広形銅矛	38
		広形銅矛	15
		不明	2
銅鐸(舌のみ1点含む)	12(舌1)	扁平紐式	3
		突線紐式	8
		銅鐸舌	1
		広形	1
銅 戈	6	中細	4
		中広	1
		細形	1
銅 剣	10(形式不明含む)	中細	4
		形式不明	5
			1
銅 釧	1		1
合 計	92	合計	92

表X-1 青銅器一覧表

地図番号	出土遺跡・地点	出土地住所	本数	現保管場所	形式	備考
1	伝中村市山路城出土	中村市山路	1	不明	中広形銅矛Ⅱ	
2	石丸遺跡	中村市具同石丸	1	幡多郷土資料館	中広形銅矛Ⅰ	昭和26年(1951)中筋川堤防工事中に発見。地表下約1.5m。県指定有形文化財
3	窪川町根々崎	窪川町子々崎(根々崎?)	5	窪川町高岡神社	中広形銅矛4・広形銅矛1	明暦3年(1657)子々崎村金ヶ淵山添溝掘削中に発見。現在根々崎山丘山礫神社西部山際。
4	推定 窪川町	窪川町	1	窪川町小野川長崎氏	広形銅矛Ⅰ	伝窪川町小野川熊野神社旧蔵
5	西ノ川口遺跡	窪川町作屋西ノ川口	5	高知県立歴史民俗資料館	中広形銅矛Ⅱ1・広形銅矛Ⅰ4	昭和10年同一遺構から出土。岡本健児氏が1970年に確認調査で埋納坑を確認。
6	推定 窪川町	推定 窪川町作屋川内(上作屋・河内神社?)	1	窪川町作屋川内神社	中広形銅矛Ⅰ	穂の一部のみ残存
7	窪川町作屋ホコノコシ	窪川町作屋ホコノコシ	1	高知県立歴史民俗資料館	中広形銅矛Ⅱ	昭和18年(1943)1月森喜一(地主)発見。
8	推定 窪川町	不明	6	窪川町市生原高賀茂神社	中広形銅矛Ⅱ	残存状況不良。県指定有形文化財。
9	須崎市多ノ郷飛田坂本	須崎市飛田坂本1729	2	不明		明治17年(1884)出土長さのみ判明77.3cm、84.8cm
10	土佐市波介万福寺	土佐市万福寺5097	2	高知県立歴史民俗資料館	中広形銅矛Ⅱ・広形銅矛Ⅰ	明治16年(1883)出土。県指定有形文化財
11	土佐市天崎遺跡	土佐市高岡乙	4	高知県埋蔵文化財センター	中広形銅矛	天崎遺跡発掘調査で出土。4本一括埋納。中世の再埋納と推定。
12	日高村	日高村	3	日高村小村神社	中広形銅矛Ⅱ	完形1は土佐市波介出土、古来伝来のものは不明、平成出土のものは庭の杉の根本から出土
13	春野町西畑フケ	春野町西畑フケ鼓鳴山	2	残存する一部片岡氏	中広形銅矛Ⅱ	明治10年出土のものは1本は明治10年消失。同年1本出土するが後盗難。一部残存。
14	西分増井遺跡	春野町西分	2	高知県埋蔵文化財センター	中広形銅矛	西分増井遺跡2次調査で出土。細片9点出土、同位体分析の結果2個体の判明。1本分は袋部残存。
15	不明	不明	1	高知市旧久万神社	広形銅矛	
16	高知市三里池長崎	高知市三里池長崎	2	高知県立歴史民俗資料館	中広形銅矛Ⅱ	大正8年出土
17	南国市遅倉	南国市遅倉	1	南国市教育委員会	中広形銅矛Ⅱ	1974年出土。岡本健児氏が1975年に確認調査で埋納坑を確認。県指定有形文化財
18	南国市田村カリヤ	南国市田村カリヤ	5	高知県立歴史民俗資料館1 南国市伊都多神社1・石川氏3	広形銅矛Ⅱ	
18	田村遺跡群I2区SK2314	南国市田村西カリヤ	1	高知県埋蔵文化財センター	中広形銅矛	ほぼ完形。田村遺跡群第2次調査で出土。埋納坑を確認。
18	田村遺跡群E7区SR703	南国市田村カリヤ	1	高知県埋蔵文化財センター	広形銅矛	先端のみ残存
19	土佐町 推定、柚の木星神社付近の吉野川右岸	推定、柚の木星神社付近の吉野川右岸	1	柚の木星神社	中広形銅矛Ⅱ	
20	土佐町 推定、土佐町駒野山近辺	推定、土佐町駒野山近辺	3	土佐町駒野山の神社	中広形銅矛Ⅱ	1本のみ完形。他2本は近世推定される切断によって欠損。
21	本山町瀬ノ上	本山町瀬ノ上	1	東京国立博物館	中広形銅矛Ⅱ	大正6年出土。残存不良。
22	物部村 推定、物部村大橋中谷川熊野神社近辺	推定、物部村大橋中谷川熊野神社近辺	2	部村大橋中谷川熊野神社	中広形銅矛Ⅱ	
23	安芸市川北江川	安芸市川北江川神谷	1	安芸市立歴史民俗資料館	広形銅矛Ⅰ	

表X-2 銅矛一覧表

X 高知県出土青銅器について

地図番号	出土遺跡・地点	出土地住所	本数	現保管場所	形式	備考
24	須崎市波介	須崎市波介1119	3	東京国立博物館	中細銅剣a類2本 中細銅剣c類1本	
25	須崎市 推定御手洗川 (大間川)流域	推定 須崎市多ノ郷	1	多ノ郷賀茂神社	不明	火災により変形、欠損。
26	葉山村 推定 葉山村 姫野々	推定 葉山村姫野々	2	盗難 不明	不明	葉山村三島神社旧蔵
27	葉山村 推定 葉山村 姫野々	推定 葉山村姫野々	1	盗難 不明	不明	葉山村白雲神社旧蔵上記銅剣と同一地点出土の可能性高い。
28	伊野町天神溝田	伊野町天神溝田	1	高知県立歴史民俗資料館	中細銅剣a類	河川改修により出土。銅戈も約5m離れ共伴出土。
29	伊野町八田出土	伊野町八田	1	明治大学考古学博物館	細形銅剣I式a類	水田改修の際出土。
30	野市町 推定 野市町 兎田	推定 野市町兎田	1	高知県立歴史民俗資料館	(絵画銅剣)	野市町兎田八幡宮蔵

表X-3 銅剣一覧表

地図番号	出土遺跡・地点	出土地住所	本数	現保管場所	形式	備考
14	西分増井遺跡	春野町西分	1	高知県埋蔵文化財センター	広形銅戈	西分増井遺跡2次調査で出土。破砕された状態
28	伊野町天神溝田	伊野町天神溝田	1	高知県立歴史民俗資料館	中広形銅戈	河川改修により出土。銅剣も約5m離れ共伴出土。
31	窪川町 推定 窪川町 米奥	推定 窪川町米奥	1	窪川町作屋川内神社	中細形銅戈	
32	窪川町 推定 窪川町 米奥	推定 窪川町米奥	1	岡内氏	中細形銅戈	
33	窪川町 推定 窪川町 米奥	推定 窪川町米奥	1	窪川町高賀茂神社	中細形銅戈	上記2本と同一地点出土の可能性
34	中土佐町 推定中土佐 町久礼周辺	推定 中土佐町久礼 周辺	1	中土佐町久礼八幡宮	中細形銅戈	

表X-4 銅戈一覧表

地図番号	出土遺跡・地点	出土地住所	個数	現保管場所	形式	備考
14	西分増井遺跡Ⅱ	春野町西分	1	高知県埋蔵文化財センター	扁平紐式	
35	南国市大埴岡町田	南国市大埴岡町田	1	辰馬	扁平紐式	
36	南国市田村正善	南国市田村正善乙 1163、1169	1	辰馬	突線紐式	明治17年出土
18	西見当遺跡 (田村遺跡群)	南国市田村西見当	1	高知県立歴史民俗資料館		舌のみ出土
37	土佐山田町楠目	土佐山田町楠目談議所	1	不明	突線紐式	
38	伝香美郡下	伝香美郡下	1	辰馬	扁平紐式	
39	香北町	推定 香北町五百蔵	2	美良布神社	突線紐式	南路志より岡本健児氏推定
40	土佐町	土佐町	1	琴平神社	突線紐式	
41	安芸市伊尾木	安芸市伊尾木切畑	2	不明	突線紐式	明治78年に出土
42	馬路村	馬路村	1	馬路村相名熊野神社	突線紐式	

表X-5 銅鐸一覧表

地図番号	出土遺跡・地点	出土地住所	枚数	現保管場所	形式	備考
14	西分増井遺跡	春野町西分	1	高知県教育委員会		破鏡
14	西分増井遺跡Ⅱ	春野町西分	1	高知県埋蔵文化財センター		破鏡
18	田村遺跡群	南国市田村	2	高知県立歴史民俗資料館	方格規矩四神鏡	破鏡
18	田村遺跡群Ⅱ	南国市田村	1	高知県埋蔵文化財センター	不明	破鏡 平縁、前漢鏡の可能性あり
43	馬場末遺跡	春野町馬場末	1	高知県教育委員会		破鏡
44	介良遺跡	高知市介良	1	高知市教育委員会	内向花文	破鏡

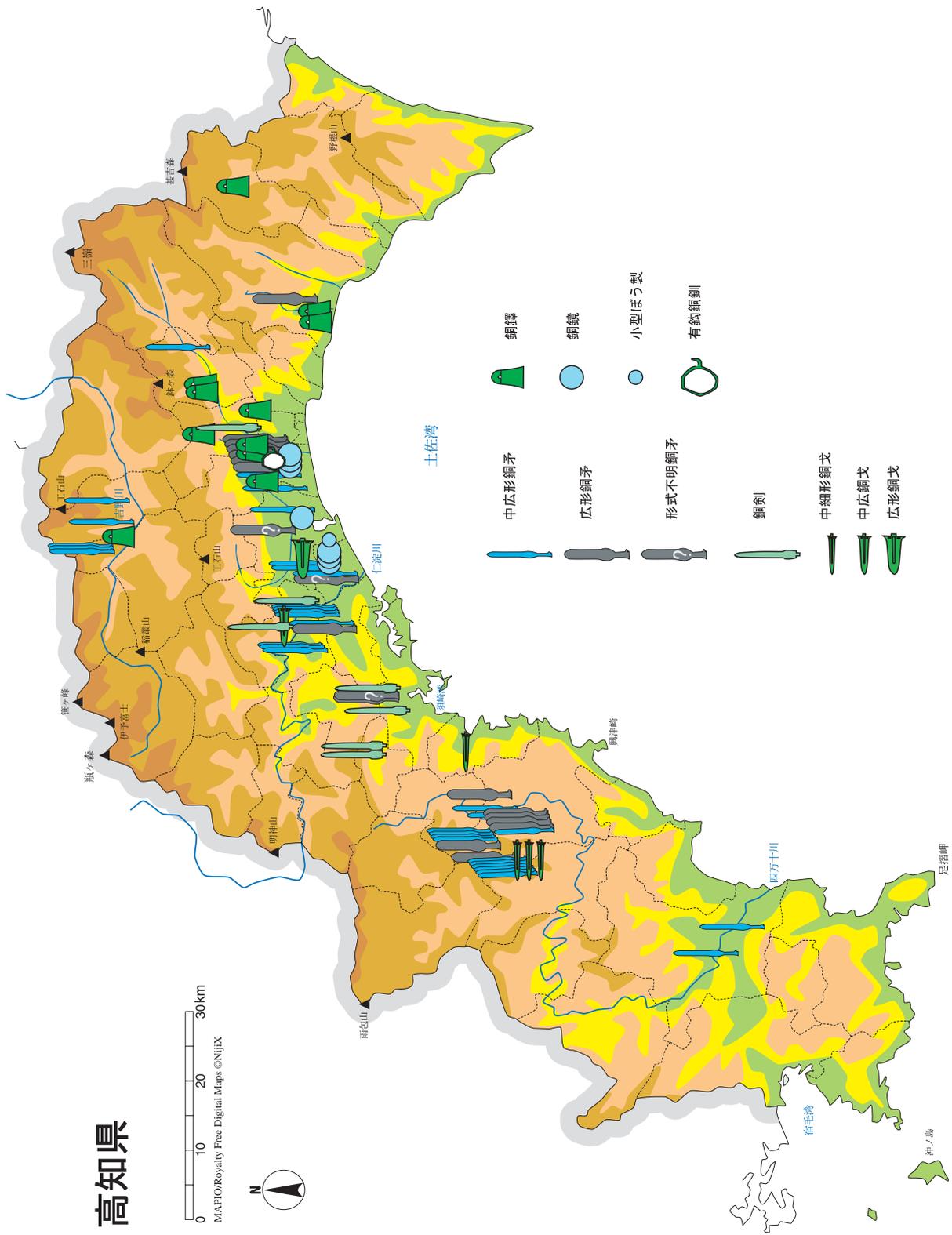
表X-6 銅鏡一覧表

地図番号	出土遺跡・地点	出土地住所	枚数	現保管場所	形式	備考
14	西分増井遺跡Ⅱ	春野町西分	1	高知県埋蔵文化財センター	内向花文日光系仿製鏡	

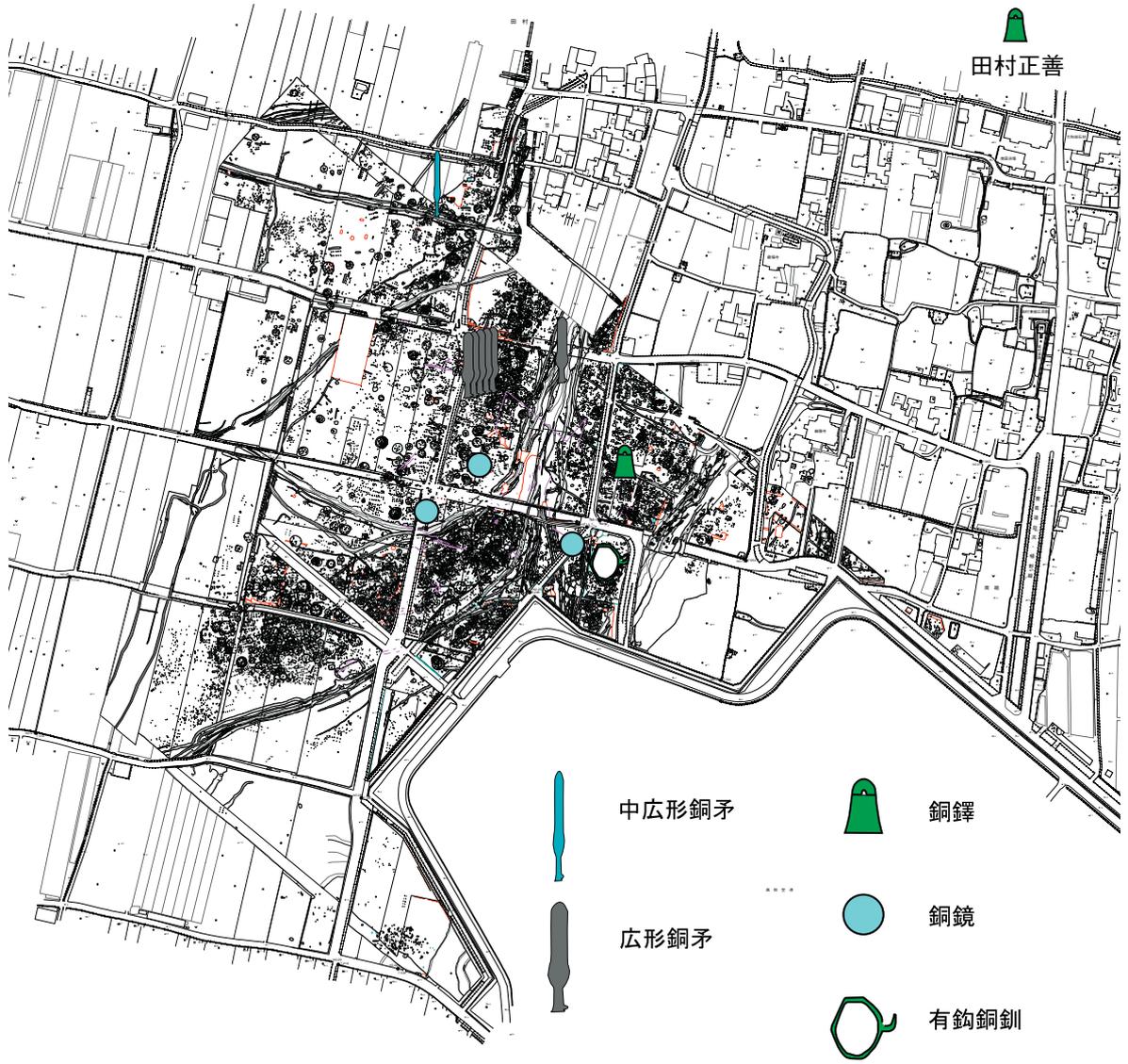
表X-7 小型仿製鏡一覧表

地図番号	出土遺跡・地点	出土地住所	個数	現保管場所	形式	備考
18	田村遺跡群ⅡB3区 ST309	南国市田村	1	高知県埋蔵文化財センター		有鉤銅釧片

表X-8 銅釧一覧表



X-2図 青銅器種別分布図



X-3図 田村遺跡群出土青銅器分布図

XI 古代の掘立柱建物跡と遺物

1. はじめに

高知県平野東部、国分川流域と物部川下流域は古代における土佐の中心地であり、県内における律令期の遺跡発掘調査が最も行われている。田村遺跡群の所在する物部川下流域は、方形区画の水田が広範囲にわたり、条里制による方形地割(香長条里)が色濃く残っている地域でもある。田村遺跡群 I の調査では、総数22棟を数える掘立柱建物等を確認し、1996年より進められた田村遺跡群 II 調査ではさらに、53棟の建物跡を検出している。田村遺跡群での総数は75棟を数え、これまで検出された土佐国衙跡の83棟に次ぐ棟数である。また、検出された建物の方位は香長条里の方位(N-12°-E)にそうものが多くみられた。これらの掘立柱建物跡を中心に、前回の調査もふまえ古代における田村遺跡群の様相について考えていきたい。

2. 田村遺跡群の調査概要

田村遺跡群 I の調査地点別では、Loc.26・Loc.30B・Loc.32・Loc.39 において、総数22棟の掘立柱建物跡を検出し、田村遺跡群 II の調査では、掘立柱建物跡53棟の他、土坑、溝跡、ピットを確認



- 1 田村遺跡群
- 2 下ノ坪遺跡
- 3 深淵遺跡
- 4 曾我遺跡
- 5 十万遺跡
- 6 土佐国衙跡
- 7 白猪田遺跡

XI-1図 田村遺跡群と周辺の古代遺跡位置図

した。建物跡はD1区、F4区、I4区においてみられ、その内F4区では調査区中央部においてコの字に配する大型の建物群を検出している。また、N3区では方形状を呈する住居跡が確認されており、建物との関係が注目される。まずそれぞれの調査区における概要を報告書の記述に従い述べていく。

(1) Loc.26

調査区の南部、小字では北ヤシキにあたり掘立柱建物跡(SB1)を1棟検出している。建物の南側は攪乱により不明であるが、梁間2間×桁行5間の規模を有する東西棟の建物である。棟方向はN-70°-Wを示す。出土遺物が細片のため、時期等については不明であるが、柱穴規模や方形の掘方を呈することから、古代の建物と位置づけられている。

(2) Loc.30B

田村遺跡群の南西部、H区の東側に位置する。小字では柿の本にあたり、中世の環濠集落に伴う遺構・遺物が大半であったが、古代に関しては掘立柱建物跡(SB18・22・33・34・36・38)を6棟と土坑を検出している。建物の規模は、梁間1間×桁行2間～梁間2間×桁行3間の東西棟と梁間1間×桁行3間～梁間2間×桁行3間の南北棟である。棟方向は東西でN-71～76°-W、南北ではN-15～17°-Eの範疇でおさまり、ほぼ同一方向を示している。出土遺物からは、8世紀後半から9世紀にかけて機能していたものと考えられている。その内SB18は、2×3間の規模を有する総柱建物で、平面積は約28㎡を測る。

(3) Loc.32

小字横手前の南半分にあたり、Loc30の北側に隣接する調査区である。中世の遺構・遺物が中心であったが、古代の掘立柱建物跡(SB2)を1棟検出している。4×4間の規模を有し、ほぼ正方形を呈する総柱建物跡で、長軸方向N-66°-Wを示す。出土遺物からは10～11世紀に機能していたものと考えられ、総柱建物という観点から、倉庫としての位置付けがなされている建物である。

(4) Loc.39

小字横手前の南半分にあたり、B区の東側に隣接する調査区である。掘立柱建物跡14棟(SB1～14)を検出し、他に土坑・溝・柱穴を確認している。建物は梁間2間×桁行2間～梁間3間×桁行5間の南北棟と、梁間2間×桁行5間～梁間3間×桁行2間以上の東西棟で構成されている。他の調査区より規模の大きい建物が目立つ。棟方向は南北ではN-14～22°-E、東西ではN-68～72°-Wで、ほぼ5°前後の違いを示す。検出された14棟の内、SB1～3を除いた11棟は調査区の中央から南部にかけて集中し、その東端にはSD1が南北に走っており、東部域の区画溝と考えられている。また14棟の内4棟が総柱を呈し、その内SB13は平面積が約67㎡を測り、田村遺跡群で検出された建物の中では最大規模を測る。建物の規模や棟方向、出土遺物等からは少なくとも2時期以上に分かれ、ほぼ8世紀後半から9世紀前半にかけて存続していた建物群であったと考えられている。

(5) D1区

小字刈谷西の南半分にあたり、同じく古代の遺構を検出したI4区の南に位置する調査区である。掘立柱建物跡16棟(SB101～116)と柵列、溝跡、柱穴等を検出している。建物の規模は梁間1間×桁行1間～梁間3間×桁行5間の南北棟と、梁間1間×桁行1間～梁間2間×桁行3間の東西棟で、棟方向は南北ではN-9～33°-E、東西ではN-68～82°-Wを測り、南北では12°前後と20°前後を示す建物群



XI-2図 田村遺跡群調査区位置図(古代)



XI-3図 Loc30B・Loc39遺構配置図

がみられる。注目される建物としては、SB107 と 101 が挙げられる。SB107(梁間3間×桁行3間?)を中心に西側にはSB101(梁間3間×桁行5間)が配されており、ともにN-10°-E前後を示し、香長条里(N-12°-E)とほぼ合致する。SB101 に対局する東側にはSB102が位置するが、建物も約10°の差があり、やや時期差があるものと考えられる。またSB107の北側には方位を同じくするSB103(梁間2間×桁行2間)が位置する。規模等からは屋の可能性が考えられる。その他の建物については、規模自体小さく建物の方位もまちまちで条里方位から外れている。平面積でもSB101と107が40㎡を超えるのに対して、10~20㎡内に納まっている。調査区内には何条かの流路と溝が東西方向から斜めに流れており、建物自体もこれらの溝の方角に沿って形成されているようである。注目される出土遺物としては、これらの溝から緑釉陶器が10点出土している。

(6) F4区

小字では横手にあたり、Loc.32とD1区のほぼ中間、D1区からは1町南に位置する調査区である。掘立柱建物跡19棟をはじめ、土坑、柵列、柱穴等を検出している。調査区北東端から南西部にかけては、中世の溝跡(12~13世紀)が走っており、古代の建物群をきっている。建物の規模は、梁間1間×桁行1間~梁間3間×桁行5間の南北棟と、梁間1間×桁行1間~梁間3間×桁行5間の東西棟である。棟方向は、南北ではN-8~13°-E、東西ではN-80~83°-Wとほぼ香長条里と同方向を示す。建

物の切り合い等からは、3時期の建物群が想定される。第1次建物群(SB402・406・409・412・414)は梁間3間×桁行4間のSB402(東西棟)を中心に西側にSB409、東側にはSB406が配されコの字状を呈する。またSB409の南側には、SB412と414が直列する。SB406・409・412は梁間3間×桁行5間、SB414は2間×3間で柱間距離が梁間側に比べ桁行側が短く平面形は正形状を呈する。SB412と対局になる東側では、上面の削平が著しく建物は確認できなかった。しかし柱穴列の一部を確認しており、SB412と同等の建物が存在していた可能性も考えられる。また、SB401のP1から硯片が出土しており、注目される。

第2次建物群ではSB401・405・407・410が挙げられる。梁間3間×桁行5間のSB401(東西棟)を中心に東隣に2間×3間のSB405、向かって東側には2間×4間の南北棟SB407が位置する。第1次建物群に属するSB412が検出された地点には、3間×4間に小規模化してSB410が位置している。SB407の西側に対局すると思われる建物は確認されていない。

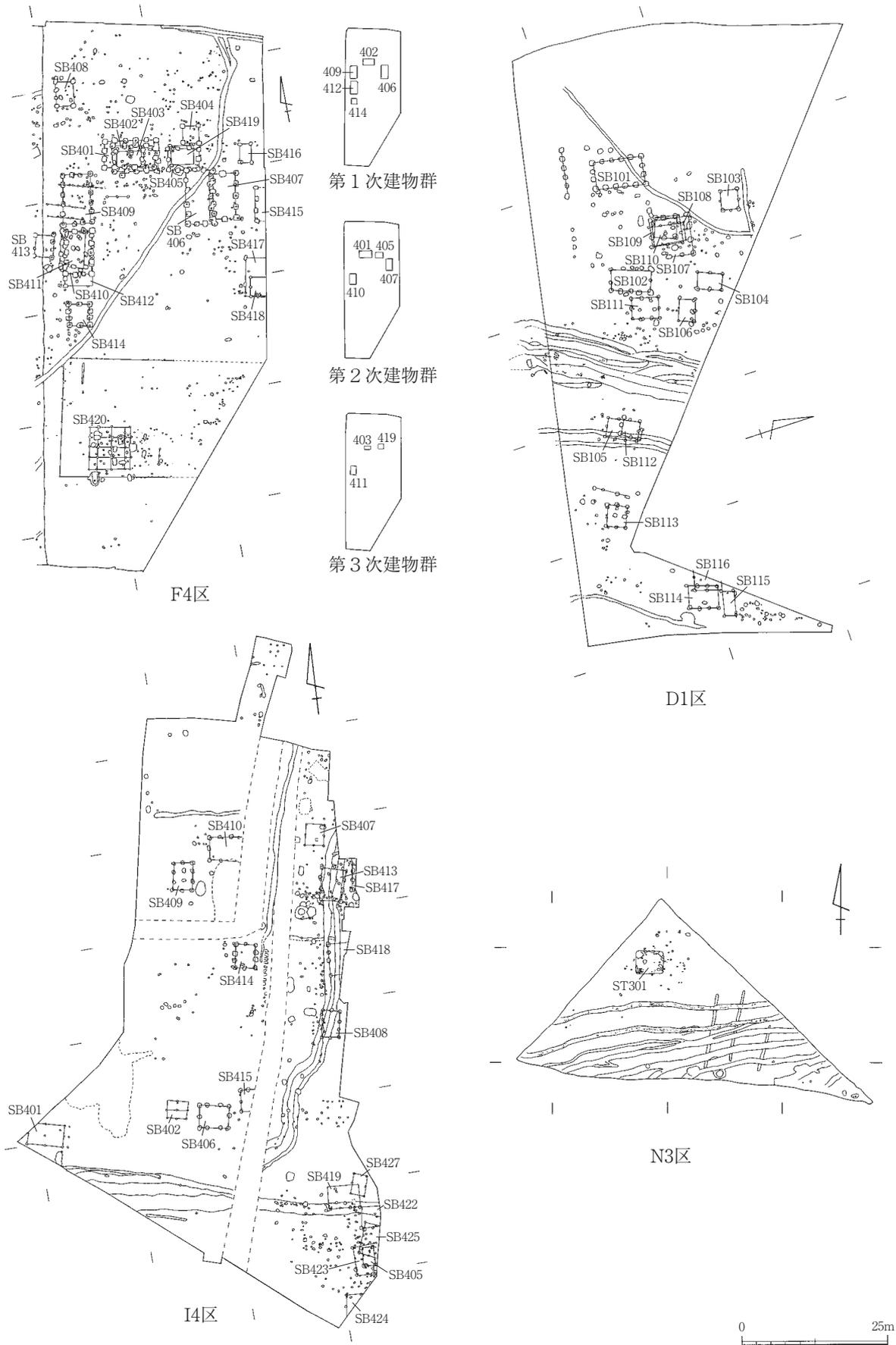
第3次建物群と考えられるのはSB403・411・413である。2次建物と同位置に2間×2間のSB403、その東隣に1間×1間のSB419を配する。西側には2次建物SB410の位置から3°東に2間×3間の南北棟建物SB411を検出した。この段階になると、第1次から2次の建物群でみられた整然としたコの字状の建物配置は崩れ、建物自体の小規模化が進んでいる。これらの建物群の機能した時期としては、遺物等から8世紀後半から9世紀初頭に位置づけられる。他にはSB404・408・413・415～419の8棟の建物を検出しているが、どの建物群に属するものかは不明である。しかし、出土遺物組成と位置関係からは建物群と同時期に機能していたものと考えられる。

(7) I 4区

D1区の北側に隣接し、小字では神母の木、ヤマシロ、刈谷西にまたがる。田村遺跡群の北限にあたる調査区である。調査区の中央を南北に既存の水路が走っているために遺構の削平が著しいが、掘立柱建物跡18棟の他土坑、溝跡、柱穴等を検出した。建物は調査区北部から中央部にかけて点在するが、それとは別に南東隅に建物の集中域がみられる。南東部はD1区の北西部と繋がっており、D1区との関係も考えられる。建物は、梁間1間×桁行2間～梁間3間×桁行3間以上の南北棟である。棟方向は南北でN-7～20°-E、東西ではN-83～87°-Wを示しているが、南北棟ではN-12°前後のものが大半を占め、香長条里ともあっている。F4区にみられるようなコの字状の整然とした配置はないが、北部中央に位置するSB410(2間×3間?)の建物を中心として西側面には総柱建物跡SB409が位置しており、L字状を配した建物が考えられる。SB410の北側にはSD417が東西方向に走っているが、この溝から北部には建物跡等はみられず、土坑や溝跡等のみであり区画溝の可能性が考えられる。建物の東端部において集中がみられるが、その他は調査区内に点在しているような状況である。出土遺物等からは明確な時期差はなく、SB406～410・414・415はほぼ同じ棟方向を示すことなどから、同時期に機能していたものと思われる。また、東部では調査区外に広がると思われる建物を数棟と、前段階で行われたトレンチ調査においても建物を検出していることからD1区の北部からI4区東部一帯にも古代の集落が開けていた可能性が考えられる。

(8) N3区

田村遺跡群の北西端部、小字では青木にあたり、I4区の西側に位置する。掘立柱建物は検出さ



XI-4図 D1区・F4区・I4区・N3区遺構配置図

れなかったが、今回方形の竪穴住居跡と考えられる遺構(ST301)と軸方向を同じくする溝跡10条を確認した。これらの溝跡は東側の調査区I4区に繋がると考えられている。ST301の出土遺物からは11世紀代が考えられるが、溝跡の一部(SD305)はそれより古い段階から機能していたようである。調査区は田村遺跡群の北西端に位置し、調査区北側では緑の広場建設に伴う調査が行われ、古代の遺構が検出されている。I4区の調査結果をふまえると、北側にも古代の遺構が広がっている可能性が高い。

3. 掘立柱建物跡の存続時期と遺跡の消長

それぞれの建物跡が機能した時期は、出土遺物等から8世紀中頃～9世紀前半代と10世紀～11世紀代に大きく分けられるようである。その中でも前者の建物がほとんどを占め、この時期が古代の田村遺跡群における最盛期と考えることができる。同時期の建物としては、Loc.39・Loc.30B・D1区・F4区・I4区が挙げられるが、建物の規模や企画性など相違点がみられる。

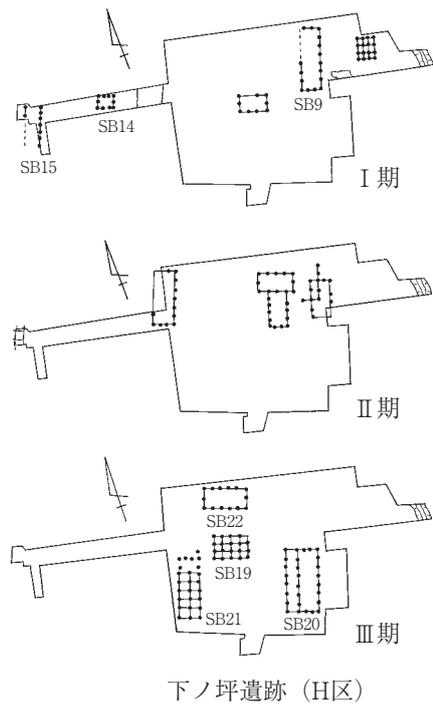
まずLoc.39では、規模の大きな南北棟SB9・13が空間を挟んで並列し、北側の東西棟とともにコの字状を呈する。西側には2間×3間を測るほぼ同規格の建物(屋)が直列している。建物の配置等からは「当初SB10が単独またはSB8と共存し、それと同時またはやや遅れて、直列する屋のうち北側3棟を設置、9世紀に入って他の建物が造営され、屋も南端の1棟を1間拡大して改築、さらに南へ1棟を新築した可能性がある」との指摘があり⁽¹⁾、9世紀代において建物の拡張と盛行がみられる。前述したように、田村遺跡群の立地する物部川右岸は古代から条里制の痕跡(香長条里)を色濃く残す地域で、古くから田村庄と呼ばれる荘園であったことが知られている。[826年には神護寺の荘園となっている]⁽²⁾このような歴史的背景や建物の構成等から、Loc.39の建物群は荘園関連の施設であった可能性が示唆されている。Loc.30Bの建物群は、Loc.39より時期的にやや新しいと思われるが、同じく荘園関連の建物であった可能性が考えられている。

F4区では3時期の建替えが確認でき、梁間3間×桁行5間のものから2間×2間のものまでみられる。Loc.39で庇付き大型総柱建物が存在したのに対し、F4区では総柱や庇付きの建物はなく側柱建物のみで構成されている。建物の平面積比較では、Loc.39の最大建物SB13が底部分を含め67㎡、後は50㎡を超えるものも数棟みられるが、F4区ではSB406の48㎡が最大で50㎡を超える建物はみられない。また9世紀初頭には建物自体もコの字状の配置を維持できず、小規模化の一途をたどるが、Loc.39では9世紀段階でも建物の小規模化はみられない等建物の規模や機能的面に違いがみられる。

D1区ではSB101が最大規模を有するが、平面積では41㎡、その他調査区内の掘立柱建物は平均20㎡前後を測る。I4区では2間×3間と思われるSB410が最大で約33㎡を測るが、その他は10～20㎡内に納まる。総柱建物SB409を検出しているが、Loc.39の総柱建物と比較すると小規模なものである。Loc.39の建物群に比べ、D1区・I4区の建物群では建物の規模や平面積も小規模化しており、建物自体にランク差がみられる。

遺跡の消長については、池澤氏によりIからⅢ型までに消長類型が設定されている。⁽³⁾まずI型

として、8世紀から9世紀初頭より盛期を迎え、9世紀後半から10世紀前半の間、或いはそれ以前に衰退していくものとし、さらに8世紀中頃から後半までに盛期を迎えるものをI a型、8世紀末以降に盛期を迎えるものをI b型に細分している。次に10世紀後半より盛期を迎えるものをII型また、消長類型のなかで8世紀から9世紀初頭に盛行し始める遺跡については、「ほぼ例外なく一旦はI型として捉えられる消長を辿る。後続する遺物が出土する遺跡はあるが、それでも上記の衰退期にはそれまで盛行をみた調査区で遺構や遺物激減し、遺構の性格が変化する等、それまでの遺構のありように対し、占地や内容面での画期が指摘できる」と述べている。この類型に添うと田村遺跡群でI a型がF4区、I b型がLoc.39の建物群にほぼあてはまる。



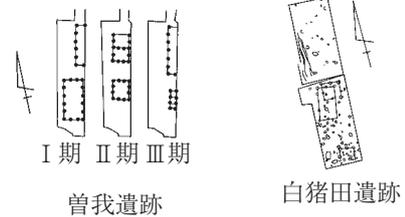
4. 田村遺跡群と周辺の古代遺跡

田村遺跡群の所在する高知県平野東部は、前述したように古代における中核をなした地域である。土佐国衙跡をはじめとする遺跡数もさることながら、同時に発掘件数も県内においては最も多く、それに伴い掘立柱建物跡も数多く検出されている。高知県における古代の建物についての研究は、廣田佳久氏・池澤俊幸氏によるところが大きく、各遺跡についての研究も進められている。ここでは田村遺跡群と同時期に機能したと思われる遺跡の概要について述べる。各遺跡の掘立柱建物に関する詳細はXI-6～13表に示した。



(1) 下ノ坪遺跡(香美郡野市町上岡)

物部川河口から約3km上流の段丘上に位置する。調査区のなかではH区よる15棟に及ぶ企画的な建物が検出されている。建物の時期としてはI期(8世紀中頃前後)・II期(8世紀後半～9世紀初頭)・III期(9世紀前半～中頃)が設定されている。III期には、県下最大規模の大型建物SB20(梁間3間×桁行7間)が出現し、建物の配置自体もコの字状を呈する。建物の方位は香長条里とほぼあっている。出土遺物ではSB20より長岡京と同形の四仙騎獣



XI-5図 下ノ坪遺跡・十萬遺跡・曾我遺跡・白猪田遺跡遺構配置図
 (「土佐における古代前期の建物群」より抜粋)

鏡片が出土している。その他には緑釉陶器の火舎や鉞尾、円面硯、黒色土器等の特種遺物とともに土鍾と製塩土器が多数出土している。他の遺跡に比べ他地域の製品が多数出土している。『長宗我部地検帳』では遺跡南部に「中津町」の地名があること、遺跡の立地等から「津」的な機能を有した遺跡と考えられている。

(2) 深淵遺跡(香美郡野市町深淵)

物部川左岸、下ノ坪遺跡の北方約900mに位置する。掘立柱建物跡2棟の他、柵列、土坑、溝跡を検出している。トレンチ状の調査のため遺構の詳細まではつかめていないが、出土遺物に関しては二彩・三彩陶器、緑釉陶器、刻書土器、墨書土器、硯、鉞尾等の特種遺物が多数出土しており、律令期における拠点あるいは郡司クラスの豪族の存在が示唆されている。

(3) 曾我遺跡(香美郡野市町中ノ村曾我)

下ノ坪遺跡より東方、香宗川と山北川に挟まれた自然堤防上に立地する。掘立柱建物跡9棟、柵列、溝跡等を検出しており、8世紀後半～10世紀代に機能していた遺跡である。建物はⅠ期(8世紀後半～9世紀前半)、Ⅱ期(9世紀中頃以降)に大きく分けられる。建物の規模としてはⅠ期に属するSB1(梁間3間×桁行5間、平面積56㎡)が最大を測り、その後小規模化していく。各期の建物については、柱筋を揃え、建物やその間隙の寸法を統一するような企画性がみられるとの指摘がされている。出土遺物では県下では最多数の緑釉陶器が出土している点も注目される。

(4) 十万遺跡(香美郡香我美町上分十万)

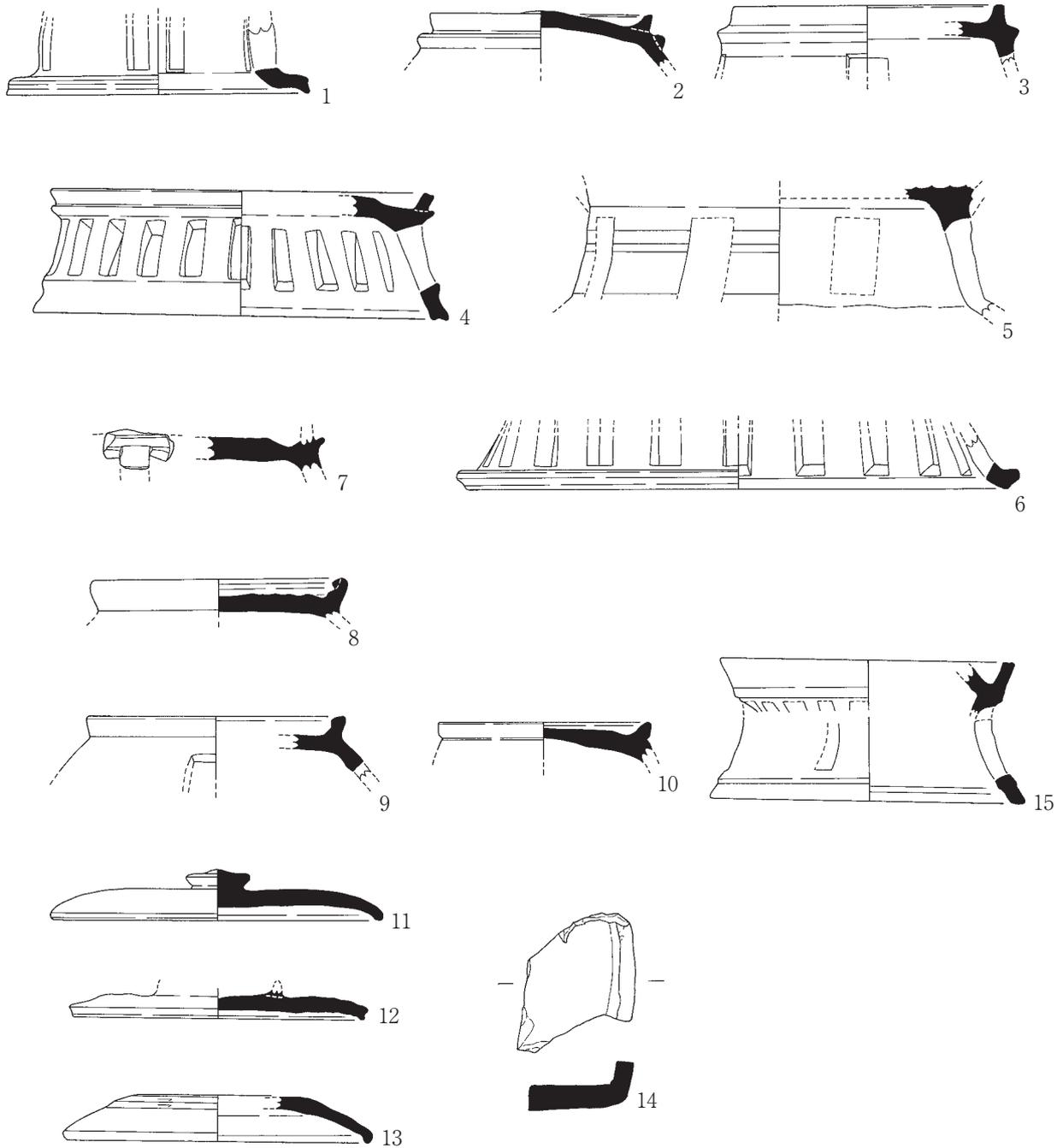
香宗川の左岸、前述した曾我遺跡の東側に立地する。掘立柱建物跡14棟をはじめ、竪穴状遺構、柵列、土坑、溝跡等を検出している。8世紀中頃から後半に出現し、その後建替えを行わず終焉を迎える遺跡である。建物の規模はSB2・5(梁間3間×5間、平面積約60㎡)が最大で、SB5には東庇が付く。建物群はコの字状を呈し、西側には総柱の倉庫と屋と思われる2間×2間の建物が直列し、さらに西には建物群を区画した溝が位置している。これらの建物群についてはあらゆる柱筋の延長戦が一致し、完数尺や一定の寸法を基準として計画され、強い企画性があり、建物群北部に位置するST3については『籠屋』の可能性があると指摘されている。当遺跡は曾我遺跡に替って盛行しており、2遺跡の関係が重要視されている。出土遺物では、石製巡方が出土している。

(5) 土佐国衙跡(南国市比江)

田村遺跡群の北西、国分川の右岸に位置する。現在までに27次に及ぶ調査がなされ、8世紀前半～12世紀前葉までの83棟の建物と多数の遺構を検出しているが、政庁棟の中心建物の確認には至っていない。建物の規模としては、SB81(梁間2間×桁行5間、平面積46㎡)が最大を測る。建物自体も下ノ坪遺跡や田村遺跡群のような企画的な配置を有する建物群は確認できていない。梁間2間を測る側柱建物のみのもが多く、総柱建物も現在のところ4棟のみの確認である。

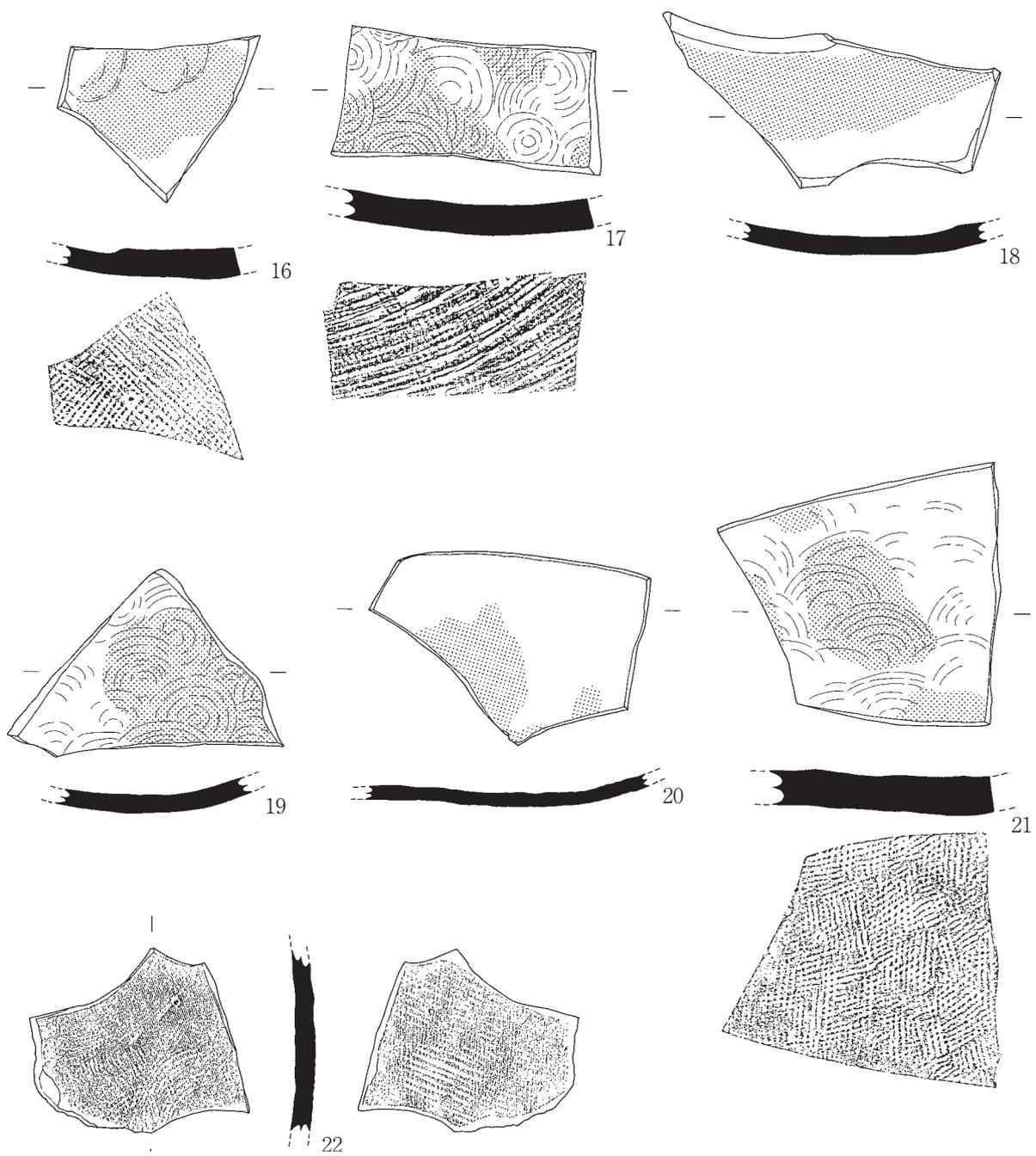
(6) 白猪田遺跡(南国市久礼田)

国分川の右岸、土佐国衙跡の北方に近接する。掘立柱建物6棟、土坑、溝跡等が検出されている。柱穴の並び、軸方向、柱間距離等整然とはしていないが、概ね8世紀代に機能していたと考えられている。やや時代は降るが、地鎮遺構や緑釉陶器の出土等からみて一般集落とは違う「国府集落」として位置付けられている。



1：田村、2・3・5・6：土佐国衙跡、4・7：下ノ坪、8・9・11～13：曾我、10：上美都岐、14・15：深淵

XI-6図 県内出土陶硯 1



16~21 : 宮崎、22 : 奥谷南

XI-7図 県内出土陶硯2

高知平野東部を中心とする古代の遺跡のなかでは、土佐国衙跡を除くと建物や出土遺物の規模、量ともに下ノ坪遺跡が突出している。下ノ坪遺跡は遺構の繁栄期間が約1世紀存続することなどから、公的な機能も背景にしていた可能性が考えられている。田村遺跡群と下ノ坪遺跡はともに物部川両岸に位置し、古代では物部郷に属している。建物の規模や時期に違いがみられるが、Loc.39 建物群との共通点として、両遺跡の立地と収納施設の規模は物資の集積・集散の機能を果たすもので、早くから開発の進んだ物部川流域の高い生産力にも関係があると示唆されている。

5. 出土遺物について

田村遺跡群Ⅱの調査では、須恵器・土師器の供膳具とともに硯、緑釉陶器、黒色土器の特殊遺物の他、各調査区からは製塩土器が出土している現時点で県内において硯が出土した遺跡は8遺跡、緑釉陶器が出土した遺跡は25遺跡を数えるが、発掘件数の増加に伴い増えつつある。ここでは田村遺跡群では初例である硯について、若干県内の様相も含め述べる。また県内の硯・緑釉陶器が出土した遺跡についての詳細は表XI-13に記載した。

陶硯はF4区のSB401から1点のみ出土している。(XI-6図1)田村遺跡群でははじめての出土例である。県内での硯の出土点数は現在の時点で8遺跡・34点を数える。(報告書掲載分、表XI-13)出土遺跡と点数の内訳は下ノ坪遺跡5点、土佐国衙跡8点、曾我遺跡10点、宮崎遺跡6点、奥谷南遺跡1点、深淵遺跡2点、上美都岐遺跡1点、田村遺跡群1点である。県内出土の34点の内、円面硯が18点、風字硯4点、転用硯が12点を数え、円面硯が最も多く次いで転用硯となっている。円面硯の出土点数は、田村遺跡群1点、下ノ坪遺跡4点、土佐国衙跡5点、曾我遺跡6点、上美都岐遺跡出土が1点で曾我遺跡が総出土点数で最も多い。転用硯では曾我遺跡4点、土佐国衙跡1点、奥谷南遺跡1点、宮崎遺跡で6点が出土している。使用器種としては、曾我遺跡では須恵器の蓋の部分を転用したものがみられるが、宮崎遺跡・奥谷南遺跡に関しては、すべて須恵器甕の肩部や胴部を転用し使用している。

緑釉陶器はD1区より10点の緑釉陶器片が出土している。SR103からの出土が殆どを占めるが、SB116からも1点出土している。どれも京都産で、9世紀後半から10世紀代に位置づけられるものである。また今回の調査では製塩土器が33点出土している。報告書掲載分の出土数で包含層出土のものは殆ど掲載されていないため、遺跡全体での出土数は33点よりは多くなると思われる。

6. まとめ

まず、今回田村遺跡群の北西部域に位置するD1区、I4区、N3区から古代の遺構・遺物等が確認されたことは、それより北西部域にも集落域が広がっていたと思われる。建物の規模や配置をみると、F4区はコの字状で企画的な建物配置を有するが、D1区、I4区では配置も明確ではなく、建物も散在しており規模もさらに小型化している。しかしLoc.39では建物の拡張が行われ、遺跡内における最大の建物群で構成される。田村遺跡群は、8世紀後半にはF4区でコの字状の配置、または企画的な建物群が出現し、8世紀後半～9世紀前半代にかけ大型建物群が出現し盛行する。その後は

衰退すると思われるが、緑釉陶器の出土や11世紀代の建物が数棟検出されていることから、9世紀後半から11世紀代においても小規模ながらも集落は存在していたものと考えられる。

また時期差はあるが、同じ物部郷に属する下ノ坪遺跡のH区とLoc.39建物群の比較検討では、建物の規模や時期の違いがみられるが、共通点としては両遺跡の立地と収納施設の規模は、物資の集積・集散の機能を果たすもので、早くから開発の進んだ物部川流域の高い生産力にも関係があると考えられている。⁴⁾Loc.39の大型建物群におよばないものの、F4区、D1区、I4区にみられる掘立柱建物跡等が当遺跡において広範囲に亘り検出されたことは、立地や歴史的背景から考えて、やはり物部川流域の高い生産力との関係が強く働いていたものと考えられる。

註

- 1) 池澤 俊幸 「土佐における古代前期の建物群」『古代文化』52-6 2000
- 2) 岡本 健児 『ものがたり考古学－土佐国遍路五十年－』(財)高知県文化財団 1994
- 3) 池澤 俊幸 「土佐における古代の遺跡－官衙的遺跡を中心に－」『律令国家における地方官衙遺構研究の現状と課題－南海道を中心に－』古代学協会四国支部第12回大会発表資料 1998
- 4) 註1)と同じ

引用・参考文献

- 高知県教育委員会『田村遺跡群』1986
- 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『田村遺跡群Ⅱ』2004
- 高知県南国市『南国市－上巻－』
- 池澤 俊幸「土佐中央部の長岡京期から平安初期の遺跡」『土佐山田史談25号』2000
- 『高知の研究2－古代・中世編－』1978
- 高知県野市町教育委員会『下ノ坪遺跡Ⅰ』1997
- 高知県野市町教育委員会『下ノ坪遺跡Ⅱ』1998
- 高知県野市町教育委員会『下ノ坪遺跡Ⅲ』2000
- 高知県教育委員会『土佐国衙跡発掘調査報告書』第1～11集1980～1991
- 高知県南国市教育委員会『土佐国衙跡発掘調査報告書第12集』2001
- 高知県南国市教育委員会『白猪田遺跡』1997
- 高知県南国市教育委員会『岩村遺跡群Ⅲ』1998
- 高知県大方町教育委員会『竹シマツ遺跡・宮崎遺跡』1992
- (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『西鴨地遺跡』2001
- (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『馬場末遺跡』2004
- (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『西分増井遺跡Ⅰ』2003
- (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『尾立遺跡』1995
- 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『光永・岡ノ下遺跡』2000
- 高知県野市町教育委員会『曾我遺跡発掘調査報告書』1989

高知県野市町教育委員会『深淵遺跡発掘調査報告書』1989

高知県香我美町教育委員会『堀ノ尻遺跡』1993

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『天崎遺跡』1999

高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター「具同中山遺跡群」『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』1992

高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『天神遺跡Ⅰ・林口遺跡Ⅰ』2001

高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『舟戸遺跡』1996

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『奥谷南遺跡Ⅱ』2000

高知県土佐山田町教育委員会『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書』1990

高知県中村市教育委員会『土佐中村一条氏遺跡』1996

高知県佐川町教育委員会『上美都岐遺跡』1997

高知県教育委員会『土佐国分寺(第2次発掘調査概報)』1989

五島美術館『日本の三彩と緑釉－天平に咲いた華－』1998

調査区	遺構名	規模		柱間距離		方向	出土遺物	時期	面積	備考
		梁間×桁行(間)	梁間×桁行(m)	梁間(m)	桁行(m)					
Loc.30B	SB18	2×3	4.6×6.15	2.25~2.35	1.95~2.15	N-71°-W	須恵器、土師器		28.3㎡	総柱建物。柱穴形は円形～方形。1辺50～60cm。
Loc.30B	SB22	2×3	4.4×6.8	2.2	2.1~	N-16°-E	土師器、須恵器、土師質土器		29.9㎡	
Loc.30B	SB33	1×2	2.25×4.1	2.25	2.0~2.1	N-76°-W	須恵質土器、須恵器		9.2㎡	
Loc.30B	SB34	2×2	2.3×4.2	2.15~2.3	2.0~2.2	N-75°-W	須恵器、土師器		9.7㎡	
Loc.30B	SB36	1×3	4.4×6.5	3.95×4.4	1.8~2.6	N-17°-E	須恵器、土師器、白磁		28.6㎡	柱穴形は楕円形～方形。方形は1辺0.7~1m。2×3間の可能性あり。
Loc.30B	SB38	2×3	3.2×5.0	1.5~1.7	1.55~1.75	N-15°-E	土師器		16㎡	柱穴形は円形と方形。円形1辺50~60、方形は40~60cm。

表XI-1 Loc.30B掘立柱建物跡計測表

調査区	遺構名	規模		柱間距離		方向	出土遺物	時期	面積	備考
		梁間×桁行(間)	梁間×桁行(m)	梁間(m)	桁行(m)					
Loc.39	SB1	1×2	3.6×4.8	3.6	2.4	N-14°-E		8世紀後半~9世紀前半	17.3㎡	柱穴の平面形は方形で1辺55~85cm。柱径直径20~25cm。
Loc.39	SB2	2×3	3.0×4.2	1.5	1.38	N-14°-E		8世紀後半~9世紀前半	12.6㎡	柱穴の平面形は方形で梁間は1辺55~85cm、桁行は45~56cm。柱径直径20~25cm。
Loc.39	SB3	2×5	4.2×10.5	4.2	2.1	N-68°-W	須恵器壺	8世紀後半~9世紀前半	44.1㎡	柱穴形は円形～方形。1辺56~100cm。柱径直径20~25cm。
Loc.39	SB4	2×3	3.6×5.1	1.8	1.5~1.95	N-19°-E	須恵器壺	8世紀後半~9世紀前半	18.4㎡	柱穴形は楕円・円形～方形。方形は1辺55~136cm。四隅の柱穴は数倍の規模を呈する。
Loc.39	SB5	2×3	3.9×4.5	1.8~2.1	1.35~1.65	N-22°-E	土師器、須恵器	8世紀後半~9世紀前半	17.6㎡	柱穴形は方形で、1辺60~153cm。柱径は20~25cm。
Loc.39	SB6	2×4	3.6×6.0	1.8	1.2~1.8	N-16°-E	土師器、須恵器	8世紀後半~9世紀前半	21.6㎡	柱穴形は46~100cm。柱径は直径20~30cm。
Loc.39	SB7	3×3	3.3×4.5	1.65	1.5	N-22°-E	須恵器皿	8世紀後半~9世紀前半	14.9㎡	柱穴形はすべて方形で1辺56~126cm。柱径は直径20~25cm。
Loc.39	SB8	3×3	4.8×6.6	1.6	2.1~2.3	N-19°-E		8世紀後半~9世紀前半	31.7㎡	柱穴形はほぼ方形で1辺49~128cm。柱径は20~25cm。
Loc.39	SB9	2×5	5.1×11.4	2.4~2.7	2.2~2.4	N-22°-E	土師器、須恵器、土師質土器	8世紀後半	58.1㎡	柱穴形はほぼ方形で、1辺71~137cm。柱径25cm前後。
Loc.39	SB10	2×3	4.2×5.7	2.1~2.2	1.8~1.95	N-21°-E	須恵器皿、土錘	8世紀後半~9世紀前半	23.9㎡	柱穴形はほぼ方形で、1辺47~115cm。柱径25cm前後。
Loc.39	SB11	2×4	4.2×8.4	2.1	1.8~2.4	N-20°-E	土師器、須恵器	8世紀後半~9世紀前半	35.5㎡	柱穴形は方形で1辺41~105cm。柱径は直径20~25cm。
Loc.39	SB12	3×2以上	6.3×8.1	2.1	2.25~	N-72°-W	土師器、須恵器	8世紀後半~9世紀前半	(51㎡)	柱穴形は方形で1辺53~113cm。柱径は直径20~30cm。
Loc.39	SB13	3×5	7.2×9.3	2.25~2.7	1.86	N-20°-E	土師器、須恵器、土錘	8世紀後半	67㎡	柱穴形は方形で、1辺72~114cm。柱径は直径20~25cm。
Loc.39	SB14	2×3	3.3×4.8	3.3	1.6	N-21°-E	土師器	8世紀後半~9世紀前半	15.8㎡	柱穴形は方形で、1辺57~107cm。柱径は直径20~25cm。

表XI-2 Loc.39掘立柱建物跡計測表

XI 古代の掘立柱建物跡と遺物

調査区	遺構名	規模		柱間距離		方向	出土遺物	時期	面積	備考
		梁間×桁行(間)	梁間×桁行(m)	梁間(m)	桁行(m)					
D1区	SB101	3×5	4.8×8.55	1.1~2.0	1.55~1.85	N-10°-E	土師器、須恵器、弥生土器		41㎡	柱穴形は方形~円形、柱痕径12~36cm。P2から直径20cm大の河原石出土。
D1区	SB102	2×4	3.65×6.9	1.5~2.15	1.4~2.1	N-19°-E	土師器、須恵器		25㎡	柱穴形は円形~楕円形、柱痕径18~36cm、P1に直径25cmの根石。
D1区	SB103	1×2?	3.25×2.75	3.05~3.25	2.7~2.75	N-10°-E	須恵器		8.9㎡	柱穴形は円形及び方形、全ての柱穴に18~45cmの柱痕残る。
D1区	SB104	1×2	2.75×4.25	2.7~2.75	2.0~2.25	N-22°-E	土師器、須恵器		12㎡	柱穴形は方形、P1・5には16~20cmの柱痕、P2・4には根石が残る。
D1区	SB105	2×3	3.7×6.1	1.6~2.1	1.85~2.2	N-27°-E	土師器		22.6㎡	柱穴形は方形、P3~10には14~20cmの柱痕。P4には河原石。
D1区	SB106	1×2	2.8×3.8	2.7~2.8	1.6~2.15	N-71°-E	土師器、須恵器、砥石		10.6㎡	柱穴形は方形、P5・6には28~38cmの柱痕が残る。
D1区	SB107	2×3	6.8×6.25	1.6~2.8	1.9~2.4	N-82°-W	土師器、須恵器	8C末~9C初頭	42.5㎡	柱穴形は方形及び円形、P1~5・8~11に柱痕。P2の柱痕には直径25cmの河原石残る。
D1区	SB108	1×3	3.3×6.95	3.05~3.3	1.75~2.4	N-9°-E	土師器		23㎡	柱穴形は円形、P4・5には16~34cmの柱痕。P4では根石。
D1区	SB109	2×3	4.75×4.65	2.2~2.4	1.3~1.7	N-77°-W	土師器、須恵器、弥生土器		22㎡	柱穴形は方形、P4~6には15~32cmの柱痕。
D1区	SB110	1×2	3.65×3.75	3.65~3.75	1.6~1.95	N-18°-E	土師器、須恵器		14㎡	柱穴形は楕円及び方形、P1・2・4~6には21~54cmの柱痕。
D1区	SB111	2×3	3.4×3.95	1.4~1.85	1.3~1.7	N-13°-E	土師器		15.5㎡	柱穴形は円形及び方形、全ての柱穴に18~45cmの柱痕残る。P1・2・4~9に10~28cmの柱痕。P3には20cmの根石。
D1区	SB112	2×2	3.4×4.55	1.6~1.8	1.9~2.05	N-33°-E	土師器、須恵器		13.4㎡	柱穴形は方形及び円形、14~36cmの柱痕あり。
D1区	SB113	2×2	3.6×3.3	1.7~1.9	1.55~1.75	N-23°-E	土師器、須恵器、砥石		11.9㎡	柱穴形は方形、P3から18cmの柱痕。
D1区	SB114	1×3	3.85×5.35	3.75~3.85	1.55~2.0	N-17°-E	土師器、須恵器		20.6㎡	柱穴形は方形及び円形、P5・7・8から16~38cmの柱痕。P7から根石。
D1区	SB115	1×1	2.05×4.45	2.05	4.15~4.45	N-78°-W	土師器		9.1㎡	柱穴形は円形、P2・3から15~2cmの柱痕。
D1区	SB116	(1×2)	(2.2×4.55)	2.2	(2.25~2.3)	N-20°-E	土師器、須恵器、竈、土錘、緑釉陶器、製塩土器、瓦	9C後半	10㎡	柱穴形は方形、P2・4で16~18cmの柱痕。
D1区	SA101		全長7.75	1.5~1.65		N-80°-W	土師器、須恵器			柱穴形は方形、P2・4・5には18~36cmの柱痕。
D1区	SA102		全長3.1	1.5~1.6		N-80°-W	土師器、須恵器			柱穴形は方形、P2には25cmの柱痕

表XI-3 D1区掘立柱建物跡計測表

調査区	遺構名	規模		柱間距離		方向	出土遺物	時期	面積	備考
		梁間×桁行(間)	梁間×桁行(m)	梁間(m)	桁行(m)					
F4区	SB401	3×5	4.8×9.4	1.6~1.68	1.76~1.92	N-80°-W	土師器、赤彩土師器、須恵器、製塩土器、甕、瓦、円面硯	8C後半	45.12㎡	柱穴形は方形、柱痕径20~30cm。柱痕には根石と思われる大型礫あり。
F4区	SB402	3×4	8.0×4.7	1.5~2.15	1.4~2.1	N-81°-W	土師器、赤彩土師器、須恵器、製塩土器	8C後半	37.6㎡	柱穴形は方形、柱痕径20cm前後。底面隅には根石あり。
F4区	SB403	2×2	4.7×3.14	1.44~1.68	2.16~2.8	N-81°-W	土師器、須恵器、製塩土器	8C末~9C初頭	14.75㎡	柱穴形は方形、柱痕径18~26cm。P7の柱痕下に根石。
F4区	SB404	1×1	3.1×2.8	3.12	2.8	N-9°-E	土師器、須恵器、製塩土器	8C後半	8.68㎡	柱穴形は方形、柱痕径20cm前後。
F4区	SB405	2×3	3.75×5.5	1.76~2.0	1.6~2.24	N-81°-W	土師器、須恵器、製塩土器	8C後半	20.62㎡	柱穴形は方形、柱痕径18cm前後。
F4区	SB406	3×5	4.9×9.8	1.52~1.84	1.76~2.4	N-10°-E	土師器、須恵器、製塩土器	8C後半	48.02㎡	柱穴形は方形及び不整形、柱痕径18~22cm。
F4区	SB407	2×4	4.6×8.2	2.32	1.84~2.24	N-8°-E	土師器、須恵器	8C後半	37.72㎡	柱穴形は方形及び楕円形、柱痕径18~22cm。
F4区	SB408	1×3	3.4×4.4	3.28~3.36	1.4~1.6	N-10°-E		8C末~9C初頭	14.96㎡	柱穴形は方形及び楕円形、柱痕径20~24cm。根石あり。
F4区	SB409	3×5	5.1×8.9	1.52~2.16	1.6~2.0	N-10°-E	土師器、須恵器、製塩土器	8C後半	45.39㎡	柱穴形は方形及び楕円形、柱痕径20cm前後。
F4区	SB410	3×4	7.8×4.7	1.44~1.92	1.84~2.12	N-11°-E	土師器、須恵器、製塩土器	8C後半	36.66㎡	柱穴形は方形、柱痕径20~22cm。P2柱痕下には根石あり。
F4区	SB411	2×3	4.4×6.46	2.04~2.4	2.0~2.4	N-13°-E	土師器、須恵器、製塩土器	8C末~9C初頭?	28.42㎡	柱穴形は方形、柱痕径20~22cm。
F4区	SB412	3×5	4.9×9.1	1.92	1.36~2.32	N-10°-E	土師器、須恵器	8C後半	44.59㎡	柱穴形は方形、柱痕径20cm前後。柱痕下には大型砂岩礫あり。
F4区	SB413	1×3	3.36×4.4	1.4~2.4	3.36~3.4	N-13°-E	土師器	8C末~9C初頭?	14.78㎡	柱穴形は方形及び円形、柱痕径20~30cm。柱痕下には大型砂岩礫あり。
F4区	SB414	2×2	3.7×4.0	1.76~1.92	1.36~1.4	N-10°-E	土師器、須恵器、製塩土器	8C後半	14.8㎡	柱穴形は方形及び隅丸方形、柱痕径18~25cm。柱痕下には大型砂岩礫あり。
F4区	SB415	?×3	?×6.12		2.0~2.1	N-9°-E	土師器、須恵器、製塩土器	8C後半~9C初頭?		柱穴形は方形、柱痕径28~30cm。柱痕下には砂岩礫あり。
F4区	SB416	1×?	3.4×3.5	3.36	2.0~2.1	N-80°-W	土師器	8C末~9C初頭?		柱穴形は円形及び方形、柱痕は未検出。
F4区	SB417	2×4?	?×6.8			N-10°-E	土師器、須恵器	8C後半~9C初頭?		柱穴形は円形及び方形、柱痕は未検出。
F4区	SB418	1×2?	?×3.6			N-80°-W	土師器	8C後半~9C初頭?		柱穴形は円形及び方形、柱痕は未検出。
F4区	SB419	1×1	3.54×4.2	3.52	4.2	N-83°-W	土師器、須恵器	8C後半~9C初頭?	14.86㎡	柱穴形は方形、柱痕と根石は未検出。
F4区	SB420	3×4	7.5×7.64	1.4~2.56	1.76~2.08	N-13°-E	土師器、須恵器	古代~中世前期	57.3㎡	3×4間に東庇。柱穴形は小規模の円形及び方形。

表XI-4 F4区掘立柱建物跡計測表

調査区	遺構名	規模		柱間距離		方向	出土遺物	時期	面積	備考
		梁間×桁行(間)	梁間×桁行(m)	梁間(m)	桁行(m)					
I4区	SB405	1×1以上	3.36×3.2以上	3.36	2	N-85°-W	須恵器		(10.75㎡)	柱穴は方形。
I4区	SB406	2×3	3.84×5.20	1.72~2.12	1.28~2.4	N-80°-W			19.97㎡	柱穴形は円形から方形、柱痕径20cm。
I4区	SB407	2×2	3.64×1.52	1.8~1.84	1.52	N-12°-E	土師器、須恵器		5.53㎡	柱穴形は円形、柱痕径10~15cm。床面に根石。
I4区	SB408	2×3	3.2×4.6	1.6	1.4~1.56	N-12°-E	土師器		14.72㎡	柱穴形は円形及び方形、柱痕径10~15cm。
I4区	SB409	2×3	3.36×4.8	1.6~1.72	1.52~1.68	N-11°-E			16.13㎡	総柱建物。柱穴形は円形及び方形、柱痕径10~15cm。
I4区	SB410	3×3以上	5.2×6.36	1.48~1.92	1.92~2.24	N-82°-W	土師器		33.07㎡	庇付建物。柱穴形は方形、柱痕径20cm前後。
I4区	SB413	1×3	4.16×5.56	3.92~4.16	1.64~2.04	N-15°-E	土師器、須恵器		23.13㎡	柱穴形は方形及び長方形、柱痕径20cm前後。
I4区	SB414	2×3	3.52×4.24	1.52~2.0	1.2~1.68	N-11°-E	土師器、須恵器		14.92㎡	柱穴形は正方形及び方形、床面には20cm前後の礫が数個あり。
I4区	SB415	2×2以上	3.8×2.32以上	1.68~2.12	1.4~	N-8°-E	土師器		(8.82㎡)	柱穴形は円形、柱痕径12cm。
I4区	SB417	1×3以上	1.6×4.44以上	1.6~	1.36~1.6	N-10°-E	土師器		(7.1㎡)	柱穴形は楕円形から方形。柱痕径約20cm。
I4区	SB418	1×4以上	? ×5.28		1.24~1.4	N-7°-E	土師器			柱穴形は方形及び円形、柱痕径15から8cm。
I4区	SB421	2×1以上	3.76×3.72以上	1.8~1.96	2.32	N-83°-W			(13.99㎡)	柱穴形は円形及び正方形。
I4区	SB422	1×2以上	3.76×3.2以上	3.76	1.44~1.76	N-83°-W	土師器		(12.03㎡)	柱穴形は円形及び方形、柱痕は未検出だが床面には20cm大の礫あり。
I4区	SB423	2×1以上	4.88×4.68以上	0.96~3.92	1.56~3.12	N-87°-W	土師器、須恵器		(22.84㎡)	南側庇付建物。柱穴形は円形及び方形、柱痕径20cm前後。床面には15cm大の礫あり。
I4区	SB424	2×1以上	4.0×3.08	1.6~2.4	1.80~2.0	N-74°-W	須恵器		(12.3㎡)	柱穴形は円形。床面からは10cm大の礫数個あり。
I4区	SB425	2×1以上	5.44×3.32以上	1.88~3.56	2.68	N-20°-E			(18㎡)	庇付建物。柱穴形は方形、床面からは根石。
I4区	SB426	1×2	3.12×4.12以上	3.0~3.12	1.28~	N-19°-E			(12.85㎡)	柱穴形は円形、柱痕は未検出。

表XI-5 I4区掘立柱建物跡計測表

遺跡名	遺構名	規模		柱間距離		方向	出土遺物	時期	面積	備考
		梁間×桁行(間)	梁間×桁行(m)	梁間(m)	桁行(m)					
下ノ坪遺跡	SB8	2×2以上	4.2×4.7以上	1.8	2.1	N-4°-W			(18.74㎡)	柱穴形は円形。総柱建物。柱痕径18～21cm。
下ノ坪遺跡	SB9	3×7	6.6×17.5	1.8	2.4	N-12°-E	須恵器、土師器、赤彩土師器	I-2	116㎡	SB20と並ぶ最大の建物。P12・13には柱痕下層に粘土。S A11と切り合い先行する。柱痕径25～29cm。
下ノ坪遺跡	SB10	3×4	5.4×8.2	1.47	1.95	N-14°-E	須恵器、緑釉陶器、黒色土器	I-6	(44.28㎡)	SD40・SB20に切られ、各柱穴には礎盤。柱痕径21～24cm。
下ノ坪遺跡	SB11	2×3	5.4×8.5	2.25	2.25～2.7	N-78°-W	須恵器	I-2～3	45.9㎡	SB19・S K30に切られ、各柱穴には柱痕、柱痕径30～39cm。
下ノ坪遺跡	SB12	2×4	5.6×10.2	2.0～2.4	2.4	N-75°-W	須恵器、土師器、赤彩土師器	I-3～4	57.1㎡	柱痕径24cm。
下ノ坪遺跡	SB13	3×6	6.1×14.8	1.8	2.2～2.6	N-17°-E	須恵器、土師器、赤彩土師器	I-3	90.3㎡	SD38を切る。柱痕径24～28cm。
下ノ坪遺跡	SB14	3×2	5.1×4.1	1.2～1.5	1	N-15°-E	須恵器、土師器	I-3～4	(20.91㎡)	柱間距離が短い。梁間に妻柱？P2柱痕部から拳大の川原石多数出土。柱痕径15～21cm。
下ノ坪遺跡	SB15	桁行6	4.6×12.15		2.03	N-18°-E	須恵器、土師器、製塩土器、甕、土錘	I-3	(55.89㎡)	柱痕径24cm。P2・9には川原石の集中。
下ノ坪遺跡	SB16	1×2以上	2.7×4.4以上	1.7	1.95～2.1	N-75°-E	須恵器、土師器	I-6	(10.56㎡)	大部分が調査区外であるが、総柱建物の可能性。柱痕径21～30cm。Pロ3柱痕では4個の完形土師器が重なって出土。
下ノ坪遺跡	SB17	3×3	5.3×6.1	1.3～1.5	1.65～1.8	N-12°-E	須恵器、土師器、甕、土錘	I-4	32.3㎡	総柱建物。SD26・27・28を切る。柱穴形24～36cm。Pイ1底面には川原石。
下ノ坪遺跡	SB18	3×5	6.2×10.7	1.8	1.86～2.25	N-12°-E	須恵器、土師器	I-6	66.3㎡	SB9・S X5・SD35・S K22を切る。P5～11で柱痕、P5・7より礎盤。P8では10～32cmの石が柱痕をらせん状に取り巻く。
下ノ坪遺跡	SB19	3×4	7.1×10.2	2	2.2～2.4	N-77°-E	須恵器、土師器、製塩土器、弥生土器	I-7	72.4㎡	総柱建物。SB11を切る。柱痕径20～24cm。
下ノ坪遺跡	SB20	3×7	6.6×18	1.6～2.0	1.8～2.9	N-13°-E	須恵器、土師器、赤彩土師器、黒色土器、製塩土器、八稜鏡、土錘、鉄	I-7	118.8㎡	最大建物。西側庇付。SB10・SD36・37を切る。P2より八稜鏡出土。柱痕径24～44cm。
下ノ坪遺跡	SB21	2×5	6.9×13.8	2.8～2.9	2.4～2.8	N-13°-E	須恵器、土師器、土錘、鉄	I-7	95.2㎡	総柱建物。柱間距離と柱規模は最大。柱痕径40cm。Pイ2の柱痕より有溝土錘複数出土。
下ノ坪遺跡	SB22	2×5	6.3×12.4	2.6	2.2	N-76°-W	須恵器、土師器、砥石	I-7	78.1㎡	柱痕径24～40cm。
下ノ坪遺跡	SA4		5.2×11.4			N-75°-W	須恵器、土師器、製塩土器	II-1	(59.28㎡)	柱痕径32～48cm。
下ノ坪遺跡	SA9		4.9×5.9			N-82°-W	須恵器		(28.91㎡)	柱穴形26cm。クランク状。
下ノ坪遺跡	SA10		5.0			N-45°-W	須恵器			柱穴形は円形。柱穴形20～30cm。
下ノ坪遺跡	SA11		5.0×12.3			N-10°-E	須恵器、土師器			P5には20cm大の礫、板状の粘板岩と焼土塊出土。柱痕径16～18cm。
下ノ坪遺跡	集石遺構1		10.3			N-75°-W	製塩土器			

表 XI-6 下ノ坪遺跡掘立柱建物跡計測表

XI 古代の掘立柱建物跡と遺物

遺跡名	遺構名	規模		柱間距離		方向	出土遺物	時期	面積	備考
		梁間×桁行(間)	梁間×桁行(m)	梁間(m)	桁行(m)					
十万遺跡	SB1	2×3	4.24×6.56	2.13	2.2	N-60°-E	須恵器、土師器	8C代	27.8㎡	柱穴形は方形及び隅丸方形。柱痕径22～28cm。
十万遺跡	SB2	3×5	6.08×9.6	1.68～2.0	1.80～2.10	N-30°-E	須恵器	8C代	58.4㎡	柱穴形は隅丸方形と円形。柱痕径20～26cm。
十万遺跡	SB3	3×6	4.65×12.7	1.35～1.73	1.85～2.95	N-32°-E	土師器		59㎡	北1間目が間仕切り。柱穴形は方形～不整形。柱痕径25～33cm。
十万遺跡	SB4	3×3	4.6×6.7	1.50～1.70	1.90～1.95	N-33°-E	土師器	8C代	30.8㎡	柱穴形は方形及び不整形。柱痕径は15～33cm。
十万遺跡	SB5	3×5	5.45×20.5	1.65～1.66	1.90～2.10	N-31°-E	須恵器、土師器	8C代	111.7㎡	西庇付南北棟。SB5と重複。柱穴形は方形、柱痕径20～25cm。
十万遺跡	SB6	2×4	5.32×8.35	1.40～3.97	2.0～2.32	N-61°-W	須恵器、土師器	8C代	44.4㎡	柱穴形は方形、柱痕径15～25cm。
十万遺跡	SB7	3×3	4.05×4.75	1.2～1.50	1.50～1.60	N-30°-E	土師器	8C代	19.2㎡	柱穴形は方形、柱痕径15～21cm。P6・8・9には礎盤と思われる石あり。
十万遺跡	SB8	2×2	3.6×3.7	1.6～1.92	1.70～2.00	N-29°-E	土師器	8C代	13.3㎡	総柱建物の可能性。柱穴形は方形、柱痕径12cm。
十万遺跡	SB9	2×2	3.33×3.8	1.35～1.80	1.6～1.78	N-61°-W	土師器	8C代	12.7㎡	柱穴形は方形～不整形。柱痕径18cm。
十万遺跡	SB10	2×3	4.8×5.15	1.60～3.20	1.55～1.85	N-25°-E	土師器	8C代	24.7㎡	柱穴形は方形及び不整形。柱痕径20～25cm。
十万遺跡	SB11			1.83～2.00						柱穴形は方形、柱痕径は28cm。3個の柱穴のみ検出。底面に礎盤あり。
十万遺跡	SB12	2×3	3.65×5.15	1.75～1.90	1.70～1.73	N-31°-E	土師器	8C代	18.8㎡	総柱建物。柱穴形方形及び不整形、柱痕径18～22cm。
十万遺跡	SB13	2×2	4.25×4.75	2.10～2.15	2.10～2.45	N-59°-W	土師器	8C代	20.2㎡	柱穴形は隅丸方形～不整形。柱痕径15～25cm。
十万遺跡	SB14	2×2	4.32×6.97	2.0～2.08	2.50～4.47	N-59°-W	土師器		30.1㎡	柱穴形は円形及び方形。

表XI-7 十万遺跡掘立柱建物跡計測表

遺跡名	遺構名	規模		柱間距離		方向	出土遺物	時期	面積	備考
		梁間×桁行(間)	梁間×桁行(m)	梁間(m)	桁行(m)					
曾我遺跡	SB1	5×3	5.4×10.4	1.60~2.80	1.96~2.16	N-14°-E	須恵器、土師器、丹塗土師器、転用碗、土錘、緑釉陶器、管玉	8C後半~9C初頭	56.16㎡	P11・12の柱根は断面11角形、材質は檜。柱穴形は隅丸方形及び不整形。柱径15~35cm。P14には礎盤。
曾我遺跡	SB2	3×3	4.0×4.7	1.24~1.44	1.45~1.65	N-16°-E	須恵器、土師器、黒色土器、緑釉陶器、古代モモ種子	9C中~後期	18.8㎡	柱穴形は隅丸方形及び不整形。柱径22~24cm。全ての柱穴には石灰岩の礎盤を設置。P7は井戸の可能性。礎盤の材質は檜。
曾我遺跡	SB3	1×3	1.3以上×4.35	1.3~	1.05~1.82	N-15°-E	須恵器、土師器、黒色土器		(5.65㎡)	総柱建物。柱穴形は隅丸方形、柱径17~26cm。
曾我遺跡	SB4	1×5	2.1×10.7	2.1	2.1	N-14°-E	須恵器、土師器		(22.47㎡)	柱穴形は隅丸方形、柱径20cm。
曾我遺跡	SB5	1×6	2.0×12.45	2.0~	1.80~2.20	N-14°-E	須恵器、土師器、製塩土器、黒色土器		(24.9㎡)	柱穴形は隅丸方形及び円形、柱径17~35cm。SB4とほぼ同位置の建て直し。
曾我遺跡	SB6	3×4	4.4×7.3	1.3~1.7	1.6~2.08	N-16°-E	須恵器、土師器、黒色土器、緑釉陶器、古代モモ種子	9C中~後期	32.12㎡	柱穴形は隅丸方形、柱径20cm。柱径17~25cm。
曾我遺跡	SB7	1×2以上	2.2×5.7以上	2.2~	2.2~3.7	N-20°-E	須恵器、土師器、弥生土器		(12.54㎡)	柱穴形は隅丸方形及び不整形。P1に直径15cmの柱痕。
曾我遺跡	SB8	?×2				N-14°-E	須恵器、土師器、弥生土器			3個の柱穴のみ確認。柱穴形は隅丸方形、P1には直径17cmの柱痕。
曾我遺跡	SB9	1×2以上	1.38×3.9	1.84~2.0	1.44	N-14°-E	灰釉陶器		(6.8㎡)	建物東部は調査区外。据住礎石建物、礎石のみ確認。
曾我遺跡	SA1	2以上	5.0以上	2.32~2.56		N-76°-W	土師器、黒色土器			柱穴形は円形及び不整形。SB3・5間に位置する。
曾我遺跡	SA2	3以上	3.9以上	1.3~1.35		N-77°-W	須恵器、土師器			柱穴形は円形、柱径15cm。

表ⅩI-8 曾我遺跡掘立柱建物跡計測表

XI 古代の掘立柱建物跡と遺物

遺跡名	遺構名	規模		柱間距離		方向	出土遺物	時期	面積	備考
		梁間×桁行(間)	梁間×桁行(m)	梁間(m)	桁行(m)					
土佐国衙跡	SB01	2×6	3.9×9.0	1.9~2.0	1.5~1.6		須恵器、土師器、 円面硯			柱穴形は方形。
土佐国衙跡	SB02	2×6	3.8×15	1.75~1.82	1.68~2.24	N-8°-W	須恵器、土師器	平安時代中葉 以前	57㎡	柱穴形は円形。SB03と一 部重複。
土佐国衙跡	SB03	2×3	3.8×4.5	1.62~1.74	1.2~1.38	N-14°-W			17.1㎡	柱穴形は円形。
土佐国衙跡	SB04	2×2	3.7×4.4	1.38~1.62	1.8~0.4	N-12.5°-W			16.28㎡	柱穴形は円形。
土佐国衙跡	SB05	2×3	3.4×6.7	1.08~1.62	1.62~2.34	N-79°-W	須恵器椀		22.9㎡	柱穴上面より出土。
土佐国衙跡	SB06	2×2	3.0×4.7	1.14~1.32	2.22	N-29°-W			14.1㎡	
土佐国衙跡	SB07	2×4	4.5×7.5	1.92~2.48	1.6~1.92	N-77°-W	須恵器、土師器、 土師質土器、砥石	8C後半	33.8㎡	柱穴形は円形~楕円形。 真北とはほぼ直交。
土佐国衙跡	SB08	2×5	4.5×9.3	1.6~2.16	1.6~2.4	N-79°-W	須恵器、土師器、 土師質土器、円 面硯	8C後半	41.9㎡	柱径は20~30cm。真北に 直交し、SB07と同時期。
土佐国衙跡	SB09	3×5	5.7×11.7	1.84~3.6	2.0~2.56	N-12°-E	土師器、瓦器、 土師質土器、白磁	9C前半	66.7㎡	柱穴形は円形~楕円形。
土佐国衙跡	SB10	3×5	3.6×7.2	1.44~1.84	1.6~2.16	N-14°-E	須恵器、土師質 土器	9C前半	25.9㎡	柱穴形はほぼ円形。
土佐国衙跡	SB11	3×2以上	3.9×3.0以上	1.28	1.28~1.76	N-8°-E	土師器、土師質 土器	9C中頃以降 ~11C	(11.7㎡)	柱穴形は円形、柱径は20 ~30cm。
土佐国衙跡	SB12	2×3以上	4.2×5.4以上	1.84~2.16	1.68~1.92	N-75°-W	須恵器、土師器、 土師質土器	9C中頃以降 ~11C	(22.68㎡)	柱穴形は円形、柱径は20 ~30cm。
土佐国衙跡	SB13	2×3	4.5×5.7	1.92~2.64	1.76~2.0	N-14°-E	土師器	9C中頃以降 ~11C	25.7㎡	柱径は30cm前後。
土佐国衙跡	SB14	2×2以上	4.4×3.6以上	2.16~	1.84~1.92	N-12°-E		8C前半	(15.8㎡)	柱径25cm前後。
土佐国衙跡	SB15	2×2以上	4.3×4.2以上	2.08	1.7~2.24	N-9°-E	須恵器	8C後半	(18.1㎡)	柱穴形は方形、柱径は20 ~25cm。
土佐国衙跡	SB16	2×1以上	4.8×2.2以上	2.16~2.56		N-11°-E		8C末~9C初 め	(10.7㎡)	柱穴形は方形、柱径は20 ~25cm。
土佐国衙跡	SB17	2×3	3.3×3.6	1.6~1.78	1.04~1.36	N-9°-E		8C後半	11.9㎡	柱穴形は方形、柱径は20 ~25cm。
土佐国衙跡	SB18	1×3以上	2.2×5.6以上		1.76~2.0	N-12°-E		8C前半	(12.3㎡)	総柱建物。柱穴形は方形、 柱痕20cm前後。
土佐国衙跡	SB19	2×5	4.2×9.0	1.84~2.16	1.6~1.84	N-78°-W	土師質土器	8C前半	37.8㎡	柱穴形は方形、柱径20~ 30cm。
土佐国衙跡	SB20	2×2以上	4.2×3以上	2.0~2.16	1.44~1.52	N-12°-E	土錘	8C前半?	(12.6㎡)	柱穴形は円形、柱径は15 ~20cm。
土佐国衙跡	SB21	2×2	4.2×3.6	1.6~1.92	2.0~2.08	N-8°-E			(15.1㎡)	柱穴形は円形、柱径は15 ~20cm。
土佐国衙跡	SB25	3×2以上	4.2×1.9	1.44	1.92	N-66°-W	須恵器	8C~9C代	(7.98㎡)	柱穴形は円形、柱径は15 ~20cm。
土佐国衙跡	SB26	3×3	5.2×6	1.6~1.76	1.84~2.1	N-25°-E		8C~9C代	31.2㎡	柱穴形は円形、柱径は15 ~20cm。
土佐国衙跡	SB27	3×4	5.1×6.4	1.6~1.84	1.36~1.84	N-59°-E		8C~9C代	32.64㎡	柱穴形は円形、柱径は20 ~25cm。
土佐国衙跡	SB28	1×3以上	2.3×5.7	2.32	1.84~2.16	N-15°-W		8C~9C代	13.11㎡	柱穴形は円形、柱径は30 ~50cm。
土佐国衙跡	SB29	1×1以上	2.0×1.7以上	2.16	1.92	N-31°-W		8C~9C代	(3.4㎡)	柱穴形は方形、柱径15~ 20cm。
土佐国衙跡	SB30	1×2以上	2.0×3.2以上	2	1.6~1.68	N-51°-W		8C~9C代	(6.4㎡)	柱穴形は円形、柱径は15 ~20cm。
土佐国衙跡	SB31	2×4以上	3.9×6.8以上	1.88~2.0	1.8~2.0	N-92°-E		8C代	26.52㎡	柱穴形は方形、柱径は25 ~30cm。

表XI-9 土佐国衙跡掘立柱建物跡計測表1

遺跡名	遺構名	規模		柱間距離		方向	出土遺物	時期	面積	備考
		梁間×桁行(間)	梁間×桁行(m)	梁間(m)	桁行(m)					
土佐国衙跡	SB32	1×4以上	8.5		1.76~2.4	N-0°-E	土師質土器	8C代		柱穴形は方形、柱径25~30cm。
土佐国衙跡	SB33	3×3	3.9×5.4	1.8~2.1	1.8	N-89°-E	須恵器	8C中葉前後	21.06㎡	柱穴形は方形、柱径20~25cm。
土佐国衙跡	SB34	1×2以上	1.8×3.3以上	1.8	1.65	N-37°-W	土師器		(5.64㎡)	柱穴形は方形、柱径15~20cm。
土佐国衙跡	SB35	1×3以上	1.65×4.5以上	1.65	1.5	N-1°-E		8C中葉~9C初頭	(7.425㎡)	柱穴形は方形。
土佐国衙跡	SB36	2×1以上	3.9×1.8以上	1.95	1.8	N-86°-E	須恵器	8C中葉~9C初頭	(7.02㎡)	柱穴形は方形、柱径15cm前後。
土佐国衙跡	SB37	1×3以上	1.5×3.9	1.5	1.2~1.5	N-3°-E		8C中葉~9C初頭	(5.85㎡)	柱穴形は方形。
土佐国衙跡	SB38	2×4以上	4.5×6.9	1.5	1.5~2.1	N-0°-E		8~9C頃か?	(31.05㎡)	柱穴形は方形、柱径15cm前後。
土佐国衙跡	SB39	2×3以上 (2×10)	3.6×5.4	1.8	1.8	N-88°-E	須恵器・土師器	8C中葉前後~9C初頭	(19.44㎡)	柱穴形は方形、柱径は15~25cm。
土佐国衙跡	SB40	2×2以上	1.8×1.8以上	1.8	1.8	N-86°-W	須恵器・土師器	8C中葉前後~9C初頭	(3.24㎡)	柱穴形は方形。
土佐国衙跡	SB41	2×2以上	1.8×1.8以上	1.8	1.8	N-83°-W	須恵器・土師器	8C中葉前後~9C初頭	(3.24㎡)	柱穴形は方形。
土佐国衙跡	SB42	2×4以上	3.9×8.4以上	1.8~2.4	2.1	N-5°-E	須恵器・土師器	8C中葉前後	(32.76㎡)	柱穴形は方形、柱径は25~35cm。
土佐国衙跡	SB43	4×	8.4×		1.8~2.7	N-0°-E	須恵器・土師器	8C中葉前後	(12.96㎡)	柱穴形は方形、柱径は25~35cm。
土佐国衙跡	SB44	2×2以上 (2×10)	3.6×3.6以上	1.8	1.8	N-86°-E	須恵器・土師器	8C中葉~9C前半	(12.96㎡)	SB39につながる? 柱穴形は方形、柱径は40~50cm。
土佐国衙跡	SB45	2×2	3.0×3.8	1.8~2.0	1.2~1.8	N-10°-E	土師器	8C中葉~9C前半	7.6㎡	柱穴形は方形、柱径は20cm前後。
土佐国衙跡	SB46	2×3以上	1.2×6.4	1.2~	1.8~2.4	N-8°-E	土師質土器	8C中葉~9C前半	(7.68㎡)	柱穴形は方形及び不整形。
土佐国衙跡	SB47	×3	×5.0		1.2~2.0	N-8°-E	須恵器・土師器	8C中葉~9C前半?		柱穴形は方形、柱径は20cm前後。
土佐国衙跡	SB49	2×3	3.0×3.8	1.4~1.7	1.1~1.4	N-0°-E	須恵器・土師器	8C後半~9世紀	11.4㎡	柱穴形は方形。
土佐国衙跡	SB50	2×4	3.85×6.3	1.9~1.95	1.45~1.8	N-88°-E	須恵器・土師器・土鏝	8C後半~9世紀	23.33㎡	柱穴形は方形。
土佐国衙跡	SB51	1×3以上	1.8×5.25以上	1.8	1.35~2.1	N-85°-W		国衙盛行期以降	(9.45㎡)	柱穴形は方形、柱径15~20cm。
土佐国衙跡	SB52	1×2以上	1.5×3.6以上	1.5	1.8	N-89°-W	須恵器・土師器		(5.4㎡)	柱穴形は方形と円形、柱径約20cm。
土佐国衙跡	SB53	1×3以上	1.8×5.4以上	1.8	1.8	N-4°-E			(9.72㎡)	柱穴形は円形、柱径約10cm。
土佐国衙跡	SB54	1×3以上	1.65×5.4以上	1.65	1.65~1.9	N-4°-E			(8.91㎡)	柱穴形は円形、柱径約10cm。
土佐国衙跡	SB56	2×2	3.3×4.2	1.5~1.8	1.8~2.4	N-3°-E	須恵器・土師器・弥生土器	9C~10C前半	13.86㎡	柱穴形は方形、柱径は15~25cm。
土佐国衙跡	SB57	2×	4.2×	1.8~2.4		N-2°-E	須恵器・土師器	9C~10C前半		柱穴形は方形、柱径は15~25cm。
土佐国衙跡	SB58	2×	4.2×	1.8~2.4		N-14°-E	須恵器・土師器	9C~10C前半		柱穴形は方形、柱径は20cm前後。各柱穴に礎盤あり。
土佐国衙跡	SB59	3×4	4.5×6.6	1.2~1.8	1.35~1.95	N-4°-E	須恵器・土師器・弥生土器		29.7㎡	柱穴形は方形、柱径18~4cm。
土佐国衙跡	SB60	2×4	4.2×6.6	1.95~2.25	1.5~1.8	N-79°-W	須恵器・土師器	8C末~9C前半	27.72㎡	柱穴形は方形、柱径18~20cm。
土佐国衙跡	SB61	2×2	3.0×4.0	1.5	1.9~2.1	N-4°-W	須恵器・土師器	8C中葉以降	12㎡	柱穴形は方形、柱径18~26cm。

表XI-10 土佐国衙跡掘立柱建物跡計測表2

遺跡名	遺構名	規模		柱間距離		方向	出土遺物	時期	面積	備考
		梁間×桁行(間)	梁間×桁行(m)	梁間(m)	桁行(m)					
土佐国衙跡	SB62	2×4	4.5×8.4	2.25	1.8~2.4	N-82°-W	須恵器・土師器	9C前半	37.8㎡	柱穴形は方形、柱径約18cm。
土佐国衙跡	SB63	2×2以上	4.95×3.45	2.25~2.4	1.5~1.95	N-4°-E	須恵器・土師器	10~11C頃	(17.1㎡)	柱穴形は方形、柱径20cm前後。
土佐国衙跡	SB64	1×4以上	2.1×7.35以上	2.1	1.5~2.25	N-85°-W	須恵器・土師器	10~11C頃		
土佐国衙跡	SB65	2×	3.65×	1.65~2.0		N-25°-E	須恵器・土師器・弥生土器			柱穴形は円形及び方形、柱径15cm前後。
土佐国衙跡	SB66	2×1以上	3.4×1.5以上	1.5~1.9	1.5	N-86°-W	須恵器・土師器	9C頃	(5.1㎡)	総柱建物。柱穴形は方形、柱径10cm前後。
土佐国衙跡	SB67	2×3	3.3×4.35	1.6~1.7	1.25~1.7	N-89°-W	須恵器・土師器	9C以降	14.36㎡	柱穴形は円形及び方形、柱径20cm前後。
土佐国衙跡	SB68	2×3	4.2×5.85	2.1	1.8~2.25	N-86°-W	土師器・弥生土器		24.57㎡	柱穴形は方形、柱径20~25cm。
土佐国衙跡	SB69	1×3以上	2.1×5.7以上	1.8~2.1	1.8~2.1	N-3°-W			(11.9㎡)	柱穴形は方形、柱径20cm前後。
土佐国衙跡	SB70	×35以上	×7.8以上		1.5~1.8	N-29°-E	須恵器・土師器	8C後半~9世紀前半		柱穴形は方形、柱径25cm前後。
土佐国衙跡	SB71	×1以上	×1.5以上		1.5	N-1°-E	須恵器・土師器	8C後半~9世紀前半		柱穴形は方形、柱径20cm前後。
土佐国衙跡	SB72	1以上×	1.8以上×	1.8		N-1°-E		8C後半~9世紀前半		柱穴形は方形、柱径20cm前後。
土佐国衙跡	SB73	2×5	3.3×8.4	1.5~1.8	1.35~2.1	N-86°-E	須恵器・土師器	8C後半~9世紀前半	27.72㎡	柱穴形は方形、柱径20cm前後。
土佐国衙跡	SB74	3×4	4.35×6.3	1.35~1.65	1.35~1.65	N-89°-E	須恵器・土師器・弥生土器		27.4㎡	柱穴形は方形、柱径15cm前後。
土佐国衙跡	SB75	2×3	3.75×4.35	1.8~1.95	1.2~1.65	N-3°-E	土師器		16.31㎡	柱穴形は方形、柱径15~20cm。
土佐国衙跡	SB76	2×2以上	3.28×3.2以上	1.6~1.78	1.6	N-10°-E	土師器	11C後葉~12C前葉	(10.49㎡)	総柱建物。柱穴形隅丸方形。
土佐国衙跡	SB77	2×1以上	3.72×1.72以上	1.76~2.0	1.44~1.76	N-2°-E	須恵器・土師器	11C後葉~12C前葉	(6.39㎡)	柱穴形は隅丸方形から円形。
土佐国衙跡	SB78	2×3	3.52×4.6	1.68~1.76	1.44~1.6	N-76°-W	須恵器・土師器	8C末~9C前葉	16.192㎡	柱穴形は隅丸方形から円形。
土佐国衙跡	SB79	2×3	3.48×4.64	1.68~1.76	1.36~1.8	N-77°-E	土師器	11C後葉~12C前葉	16.15㎡	柱穴形は不整形から円形。
土佐国衙跡	SB81	2×5	4.48×10.3	2.0~2.4	1.84~2.24	N-8°-E	須恵器・土師器	8C末~9C前葉	46.3㎡	柱穴形は方形。
土佐国衙跡	SB82	2×3	4.7×4.88	1.52~1.84	2.0~2.56	N-5°-E	土師器	8C末~9C前葉	22.9㎡	柱穴形は不整形から円形。
土佐国衙跡	SB83	2×2	4.2×5.36	1.36~2.96	2.64	N-88°-E	土師器		22.51㎡	柱穴形は不整形から円形。

表XI-11 土佐国衙跡掘立柱建物跡計測表3

遺跡名	遺構名	規模		柱間距離		方向	出土遺物	時期	面積	備考
		梁間×桁行(間)	梁間×桁行(m)	梁間(m)	桁行(m)					
白猪田遺跡	SB1	3×4	5.3×6.88	1.52~1.96	1.6~2.4	N-46°-E			(36.46㎡)	柱穴形は円形。
白猪田遺跡	SB2	2×2	4.3×4.5	2.0~2.4	2.08~2.32	N-76°-W	須恵器・土師器	8C代	19.35㎡	柱穴形は円形及び方形、柱痕径16~20cm。
白猪田遺跡	SB3	2×2	3.62×3.96	1.84~2.16	1.76~1.92	N-17°-E	須恵器・土師器	8C代	14.34㎡	柱穴形は方形、柱痕径は18cm。
白猪田遺跡	SB4	1×4	4×7.6		1.88	N-88°-E	土師器	8C代	30.4㎡	柱穴形は円形、柱痕は14cm。
白猪田遺跡	SB5	2×4以上	3.8×6.4以上	1.68~1.76	1.68~1.76	N-60°-W	土師器	8C代	(24.32㎡)	柱穴形は円形。
白猪田遺跡	SB6	2×3	4.7×8.58	2.0~2.4	1.52~2.72	N-17°-E	須恵器・土師器	8C代	40.33㎡	柱穴形は不整形。柱痕は16~24cm。

表XI-12 白猪田遺跡掘立柱建物跡柱計測表

XI 古代の掘立柱建物跡と遺物

No.	遺跡名	所在	立地	緑釉陶器	陶硯	主な出土遺物	遺跡の位置付	備考
1	田村遺跡群	南州市田村	物部川下流の右岸・自然堤防上	皿・椀	円面1	土師器・須恵器・赤彩・移動竈・製塩土器	官衙関連遺跡	京都産
2	船戸遺跡	中村市森沢	中筋川右岸の自然堤防上	皿		須恵器・土師器・黒色土器・灰釉陶器・土錘	川津	京都産
3	西分増井遺跡	吾川郡春野町西分	新川川の左岸	皿・椀		須恵器・土師器・製塩土器		
4	馬場末遺跡	吾川郡春野町西分	新川川の左岸			須恵器・土師器・製塩土器・黒色土器・灰釉陶器・移動式竈?	9世紀後半～10世紀において川津として機能	
5	曾我遺跡	香美郡野市町中ノ村曾我	香宗川と山北川の両河川に挟まれた自然堤防上	皿・椀・壺	円面6・転用4	須恵器・土師器・製塩土器・瓦・墨書土器・黒色土器・灰釉陶器	郷家または郡家クラスの役所?	猿投窯1点、京都産44点出土。壺以外は9世紀中頃～後期、壺は9世紀前半。
6	下ノ坪遺跡	香美郡野市町上岡	物部川下流の左岸	緑釉単彩陶器火舎	円面4・風字1	須恵器・土師器・製塩土器・黒色土器・土錘・四仙騎獸八稜鏡	官衙関連遺跡	
7	風指遺跡	中村市森沢	中筋川右岸の自然堤防上	皿		須恵器・土師器・黒色土器	官制的祭祀	京都産
8	土佐国衙跡	南州市比江字金屋	国分川右岸	皿・椀	円面5・風字2・転用1	須恵器・土師器・黒色土器・土錘	官衙跡	京都・近江(平安Ⅲ古段階)東海産(平安Ⅱ新段階)
9	白猪田遺跡	南州市久礼田	新改川と領石川が国分川に合流する扇状地	皿(輪花皿)		須恵器・土師器	国府集落	
10	岩村遺跡	南州市福船	物部川河口から3kmほど上流の右岸	皿・椀		須恵器・土師器・青磁・白磁・篠鉢・瓦質土器・備前	城館跡・川津としても機能	
11	尾立遺跡	高知市尾立	鏡川の中流域左岸	椀		須恵器・土師器・瓦質土器・青磁・備前	鏡川中流域の流通拠点	
12	山根・石屋敷遺跡	吾川郡春野町石屋敷		皿			大寺と種間寺の中間に位置する豪族	
13	宮崎遺跡	幡多郡大方町加持	加持川の支流である猿飼川左岸	皿・椀	転用6	須恵器・土師器・黒色土器・製塩土器・刻書土器	官衙関連遺跡(郷家)	
14	奥谷南遺跡	南州市岡豊町小蓮	国分川右岸の丘陵上	段皿	転用1	須恵器・土師器・黒色土器・白磁・青磁・瓦・移動式竈	寺院関連遺跡	猿投K-90窯式・9世紀後半頃
15	ひびのキサウジ遺跡	香美郡土佐山田町	物部川右岸の河岸段丘上	皿		須恵器・土師器・刻書土器・移動式竈	有力豪族の館?	9世紀後半
16	土佐中村一条氏関連遺跡	中村市小姓町	中村市市街地西側	不明		土師器・青磁・瓦質土器	集落跡	
17	深淵北遺跡	香美郡野市町深淵	物部川河口から上流に3kmの左岸			須恵器・土師器・灰釉陶器・黒色土器	集落跡?	
18	深淵遺跡	香美郡野市町深淵	物部川河口から上流に3kmの左岸	椀・皿	円面1・風字1	須恵器・土師器・刻書土器・墨書土器・二彩陶器・三彩陶器・瓦・鉈尾	官衙関連遺跡?	
19	堀ノ尻遺跡	長岡郡本山町本山字堀ノ尻	吉野川右岸の中段段丘上	杯(椀)		須恵器・土師器	駅関連の遺構か?	
20	西鴨地遺跡	土佐市西鴨地字バダン	高岡平野の西端	椀・皿		須恵器・土師器・黒色土器・灰釉陶器・木製品	祭祀関連遺跡	
21	光永・岡ノ下遺跡	土佐市高岡町	仁淀川右岸の自然堤防上	皿・椀		須恵器・土師器・黒色土器・湖州鏡	官衙・寺院関連遺跡	京都産が殆どを占める(9世紀後半～10世紀前半)
22	天崎遺跡	土佐市高岡町乙	仁淀川右岸の後背湿地	皿		須恵器・土師器・黒色土器・瓦器・青磁・白磁		
23	林口遺跡	土佐市高岡町	仁淀川右岸の自然堤防上	不明		須恵器・土師器		
24	土佐国分寺跡	南州市国分	国分川左岸	皿		須恵器・土師器・瓦	古代寺院跡	平安時代前半
25	具同中山遺跡群	中村市具同	中筋川左岸の自然堤防上	皿?・椀		須恵器・土師器・灰釉陶器・黒色土器・青磁・白磁	集落跡	
26	上美都岐遺跡	高岡郡佐川町	斗賀野盆地東部		円面1	須恵器・土師器・刻書土器	官衙関連遺跡	

表XI-13 県内の緑釉陶器・陶硯出土遺跡一覧表

XII 近世田村遺跡群の景観と陶磁器需要

はじめに

香長平野の中央部に位置する田村遺跡群は、古代末から中世にかけて田村庄が置かれ、15世紀以降には土佐守護代細川氏の居館とその家臣団屋敷地が展開する中世土佐の政治の中心地として発展した。近世初頭には土佐の政治体制の変革によってその景観は大きく変化し近世農村へと移行するが、豊かな土壌を有する田村遺跡と周辺の香長平野一帯は以降も近世土佐の大耕作地帯として発展を遂げている。この時期の農村での比較的豊かな暮らしぶりは今回調査の出土遺物からも推察されるものである。

前回調査に引き続き、今回の調査でも多くの近世遺構、遺物が検出されている。本稿では、これらの調査成果をもとに近世初頭から幕末頃までの田村遺跡群の遺構・遺物を検討し、その景観変遷と陶磁器消費の在り方を追っていくこととしたい。

1. 近世田村遺跡群とその景観変遷

今回の調査では、A10・B1・B4・C1・E1・E2・F5・N3・Q1区他において近世の遺構・遺物が確認されている。ここではまずその遺構検出状況をもとに、田村遺跡群の景観変遷をみていきたい。

(1) 中世末から近世初頭の田村遺跡群

先に触れたように、中世の田村遺跡群では土佐の守護代細川氏の居館である田村城館が立地し、今次調査でも、田村城館の南端付近に位置するA10区から城館に伴うとみられる土塁跡の一部が検出された。また、その南側にあたるB1区では、家臣クラスの屋敷地と思われる溝によって囲まれた15～16世紀代の中世屋敷跡が検出されている。

B1区からB4区にかけて検出された屋敷跡A(XII-1図)は最も規模が大きく、敷地内で14棟以上の掘立柱建物跡が確認されている。屋敷地は二重の溝(外溝B1SD105～B4SD405、内溝B1SD106～B4SD403)によって囲まれ、外溝の規模は東西長66m、南北確認長48m(南部は調査区外のため全長不明)、幅2.3～3.8m深さ0.82～1.30m、断面形態はU字形～V字形を呈する。このうち溝B1SD105・B1SD106では、埋め戻し埋土中から15世紀から16世紀末の土器・陶磁器が多量に出土することから、これらの溝が中世末から近世初頭頃には屋敷地の廃絶に伴って埋め戻されその機能を停止したと考えられる。また、B1区の土坑B1SK110やB1SK120埋土中からは唐津系灰釉陶器や初期伊万里等の近世遺物が出土しており、これら中世以来の屋敷地が17世紀前葉頃まで機能していた可能性も考えられる。

近世初頭は土佐の政治の中心が高知城下町に移る政治上の画期であり、この時期、田村遺跡では中世以来の屋敷地の多くが廃絶し、地域の景観は大きく変化したものとみられる。

(2) 近世後期の田村遺跡群

近世前期から中期の遺構は未検出で、居住域の展開状況などは殆ど分かっていない。しかし、後

述するB1区、B4区検出の廃棄土坑内からは17世紀から18世紀前半の遺物も少量出土しており、周辺に該当期の居住域が存在した可能性も否定できない。

一方、近世後期に至ると遺構の検出数は急激に伸びる。この時期の遺構はA10・B1・B4・C1・E1・E2・F5・N3・Q1区他で検出され、ここからは掘立柱建物跡、溝、貯水機能を備えた埋め桶土坑やハンダ土坑、廃棄土坑、近世墓等が確認されている。

B4区検出の溝は調査区を南北と東西の2方向に延び、南北溝、東西溝とも真北から11°前後東に振る軸方向を保っている。この軸方向は古代条里や中世屋敷地の区画溝の軸ともほぼ共通しており、古代中世以来の地割りが近世まで引き継がれてきたことが分かる。このうちB4区中央を南北方向に延びる溝B4SD407・408と東西に延びる溝B4SD410は木杭や石列による護岸が施され、近代以降も改修整備され存続していく。こうしたことから、これらが一帯への主要な引水溝としての機能を果たしていたと考えられる。一方、その他の区画溝は規模も小さく、幕末から明治初頭頃の居住地移転にともなって埋め戻されている。

埋め桶土坑は、楕円形の平面プランをもつ掘り方の内部に円形の土坑が2～3基組をなして検出されるものである。この円形土坑の床面には周縁をリング状に巡る浅い凹みが残るため、土坑内に木桶を埋め込んだ貯蔵施設であった可能性が高い。貯蔵施設とみられる円形土坑では、この他に、土坑内面を厚さ3～5cm前後の黄色又は橙色の粘土で叩き固めたハンダ土坑⁽¹⁾も確認されている。これらの埋め桶土坑やハンダ土坑は貯水性に優れ、2～3基が組になることが多いことから、人糞などの肥料を貯蔵する施設であった可能性が考えられる。田村遺跡群ではこうした貯蔵施設が耕作地での生産活動を支える重要な付属施設として活用されたのであろう。

一方、掘立柱建物跡はE1区で検出されている。E1SB101は東西4.6m南北4.0mの規模をもつ5間×4間の総柱建物跡であり、ここでもやはり周辺にハンダ土坑や廃棄土坑を伴う。周辺遺構の年代観からみて18世紀末～19世紀代に比定されるものである。

このように江戸後期の田村遺跡では、古代以来の条里を引き継いだ区画溝と耕作地が広がり、その間に掘立柱建物や土坑からなる居住地や一族単位の小規模な近世墓地が点在する近世農村の景観が展開されたとみられる。



XII-1図 B1・B3・B4区遺構全体図

2. 陶磁器組成にみる近世の田村遺跡

前項で触れたように、田村遺跡では中世末から近世初頭に中世以来の屋敷地の多くが廃絶し、大きな景観の変化が訪れる。近世農村へと移行した田村遺跡では、どのような生活が営まれていたのだろうか。それを知る一つの手掛かりとして、ここでは遺跡出土の陶磁器を取り上げ、その遺物組成から当時の陶磁器消費の在り方を検討したい。

(1) 江戸前期～中期の田村遺跡群と陶磁器消費

この時期の一括性の高い遺構出土資料は確認出来ておらず遺物数自体も少ないが、近世前期の土坑、ピット出土遺物、中世土塁跡と江戸後期の廃棄土坑内への混入遺物の内容などから、ある程度の様相はつかむことができる。そこでここでは、A10区、B1区、B4区出土資料(XII-2図)を取り上げ、その内容を紹介しておきたい。

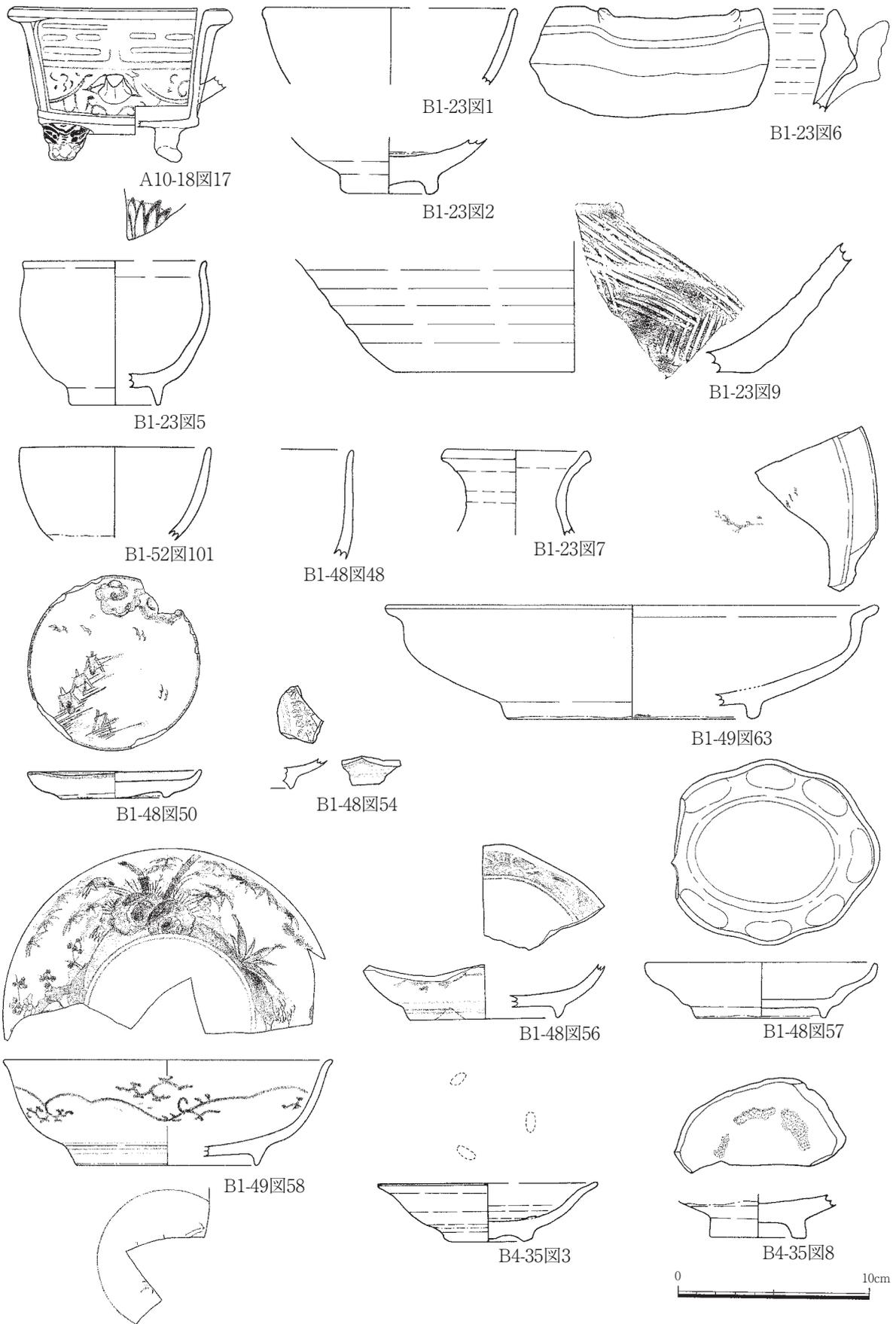
A10区は中世の守護代細川氏の居館であった田村城館の南端部に位置し、城館に伴うとみられる土塁跡の一部が検出された。土塁跡埋土中からは、城館が機能した頃の中世の遺物に混じって、肥前産の青磁香炉(A10-18図17)が出土する。A10-18図17は型作りで、体部外面に陽刻文、脚部に獣面を配する。青磁釉は淡緑色に発色する。^(2・3)

B1区では15世紀から17世紀初頭頃まで機能したとみられる屋敷地内にて、17世紀初頭～前葉段階の土坑が数基検出されている。このうちB1SK110では肥前産の染付碗(B1-23図5)、備前焼播鉢(B1-23図6・9)、備前焼壺、福建・広東系青磁碗(B1-23図1・2)、華南産の褐釉壺(B1-23図7)等が出土する。染付碗(B1-23図5)は畳付に粗い砂が付着するもので、肥前産1630～40年代に比定される。

また、B1区の大型廃棄土坑B1SX113では、江戸後期の遺物に混じって17世紀前半から18世紀前半までの遺物が出土する。その内容と生産年代をみると、内面に帆船海鳥文を描く染付皿(B1-48図50)は肥前産1640～50年代、山水文に雁を描く染付鏝縁皿(B1-49図63)は肥前産1610～30年代、鉄釉丸碗(B1-52図101)は肥前産17世紀第2～3四半期に比定される。口縁部輪花形の青磁中碗(B1-48図48)は肥前産の可能性が高いもので17世紀後半～18世紀前半頃、染付皿(B1-48図54)は内面に型紙刷りによる桐文を描くもので肥前有田1670～1700年代、染付皿(B1-48図56)は内面に墨弾きによる花文を描くもので肥前18世紀前半、染付鉢(B1-49図58)は高台内に字款を伴うもので肥前18世紀前半、糸切り細工による薄瑠璃釉小皿(B1-48図57)は肥前有田産18世紀第2四半期に比定されるものである。

この他、B4区のB4P4103からは胎土目積みによる肥前産灰釉小皿(B4-35図3)、B4SK497からは砂目積みによる肥前産灰釉小皿(B4-35図8)が出土している。

B1区、B4区とも17世紀から18世紀前半段階の建物跡は検出できていないが、当調査区は近世初頭まで中世屋敷地が展開した地点であり、屋敷跡の廃絶後も周辺に引き続いて居住地が存在していた可能性がある。ここに挙げたA10区土塁跡埋土中出土の青磁香炉や、B1区出土の初期伊万里等の遺物内容は、高い経済力をもった居住者が田村遺跡群に引き続き存在した可能性を示唆するものであろう。



XII-2 図 A10・B1・B4区出土遺物

(2) 江戸後期の田村遺跡群と陶磁器需要

江戸前期から中期の遺物内容とは異なり、後期以降は日用雑器が陶磁器組成の主体を占め、遺物所有者層が変化したことが推察される。また、江戸後期には陶磁器の廃棄量も増大し、多様な生産地の製品が見出されるようになっている。

中でもB1区、B4区では、幕末から明治初頭頃の大型廃棄土坑や廃絶遺構内への遺物の一括廃棄が確認されており、当区域ではこの時期に住居移転に伴う遺構廃絶と遺物廃棄が行われたことが分かる。特に、B1区北東部で検出された廃棄土坑B1SX113とB4区南西部で検出されたB4SK442は非常に大型で、B1SX113は全長10.6m、幅3.3m、深さ0.68~2.10m、B4SK442は全長6.7m、幅2.2m、深さ0.39~1.09mを測る。両土坑とも東西方向に長く、床面西側にテラス状の高まりをもつ。土坑埋土中からは炭化物、木片、貝殻、瓦片とともに、土器・陶磁器類が多量に出土している。

そこで、以下では大型廃棄土坑B1SX113の遺物組成を取り上げ、江戸後期における田村遺跡群居住者層の陶磁器需要の在り方を検討していくこととする。

①陶磁器の器種別組成

まず、B1SX113出土遺物中にみられる陶磁器・土器の器種別出土点数⁽⁴⁾と組成比を表XII-1に、用途別出土点数と組成比を表XII-2に示した。これによれば、廃棄遺物中には多様な用途の器種が含まれるが、特に陶磁器では碗、皿、鉢等の供膳具の出土比率が突出している点に特徴が見出せる。

そこで次に、陶磁器の器種組成に注目してその組成内容をグラフXII-1に示し、同じ時期の農村部廃棄遺物データである小籠遺跡廃棄土坑出土遺物組成(グラフXII-2)、幕末期の下級武士層所有遺物である陣山遺跡一括廃棄資料遺物組成(グラフXII-3)と比較検討したい。グラフ1・2・3を比較すると、陣山遺跡一括廃棄資料では、碗・皿・鉢・猪口等が56%程度とやはり供膳具が突出するものの、その他に、供膳具の一部(薄手酒杯や盃台等の酒宴・接待用の器)、文房具(水滴)、化粧具(紅皿、髪油壺、段重)、神仏具(神酒徳利、香炉)等の多種多様な用途の陶磁器類が多く認められる。一方、田村遺跡と小籠遺跡では、ともに供膳具の占める比率が70%近くあり、特に双方とも碗の比率が突出している。水滴等の文房具、盃台等の接待用の器は認められず、薄手酒杯等酒宴用の器、化粧具、神仏具は量、バリエーションとも陣山遺跡のそれに比較して少ない。こうした差異は遺物所有者の経済力や業務の内容などからくる生活形態の違いを反映したものと考えられよう。そして、ここにみられる田村遺跡群B1SX113や小籠遺跡廃棄土坑での器種組成比率は、県中央部の農村における一般的な陶磁器消費の様相を示しているものであろう。

②陶磁器の生産地別組成と在地製品の普及

次に、B1SX113出土資料にみる磁器・陶器の生産地別出土点数を表XII-3に、生産地別組成をグラフXII-4・5に示す。また、比較検討のための資料として陣山遺跡一括廃棄資料の磁器・陶器生産地別組成をグラフXII-6・7に示している。

グラフXII-4によると、磁器では能茶山製品が26%、肥前産・肥前系の製品が67%、瀬戸・美濃と関西系の製品がそれぞれ2%、産地不明が3%の割合で含まれている。⁽⁵⁾ここで在地の能茶山産磁器に注目し、陣山遺跡一括廃棄資料の磁器生産地別組成(グラフXII-6)と比較すると、陣山遺跡一括廃棄資料では能茶山産磁器が41%を占めており、田村遺跡群ではその需要がやや減少しているこ

XII 近世田村遺跡群の景観と陶磁器需要

	磁器	陶器	陶磁器計	陶磁器中の比率	土器 (瓦質・土師質)	軟質施釉陶器	陶磁器・土器計	陶磁器・土器中の比率
碗	201	45	246	41%			246	39%
中碗	143	25	168					
小碗	28	18	46					
小杯	30	2	32					
皿	32	90	122	20%	4		127	20%
小皿	25	83	108		4			
中皿	6	7	13					
大皿	1		1					
鉢	24	2	26	4%		1	27	4%
猪口	16		16	3%			16	3%
碗蓋	28		28	5%			28	4%
播鉢		17	17	3%			17	3%
捏鉢・片口		9	9	1%			9	1%
鍋(行平・土鍋)		17	17	3%			17	3%
釜					7		7	1%
焙烙					7		7	1%
土瓶		11	11	2%		1	12	2%
爛德利		14	14	2%			14	2%
瓶・德利	1	7	8	1%			21	3%
水注	1		1	0.2%			1	0.1%
壺・甕		12	12	2%			12	2%
焜炉・涼炉・七輪					8	1	9	1%
火消し壺・火消し壺蓋					4		4	0.6%
灯明皿・灯明受皿		34	34	6%			34	5%
火鉢		3	3	0.5%	1		4	0.6%
香炉	2	2	4	0.6%			4	0.6%
火入れ	2	5	7	1%			7	1%
紅皿	5		5	0.8%			5	0.7%
髪油壺	1		1	0.2%				
段重・蓋物蓋	3		3	0.5%			3	0.4%
水滴								
仏飯器	3		3	0.5%			3	0.4%
神酒德利	12		12	2%				
鳥の水入れ		1	1	0.2%			1	0.1%
計	331	269	600	99.5%	31	3	634	98.5%

表Ⅻ-1 B1SX113出土資料器種別出土点数と組成比

	磁器	陶器	陶磁器計	陶磁器中の比率	土器 (瓦質・土師質)	軟質施釉陶器	陶磁器・土器計	陶磁器・土器中の比率
供膳具	301	138	439	73%	4	1	444	70%
調理具	0	68	68	11%	14	1	83	13%
貯蔵具	2	19	21	3%			21	3%
火具				0%	12	1	13	2%
暖房具		3	3	0.5%	1		4	0.6%
灯明具		34	34	6%			34	5%
神仏具	17	2	19	3%			19	3%
化粧具	9		9	1%			9	1%
文房具				0%			0	0%
喫煙具	2	5	7	1%			7	1%
飼育具		1	1	0.2%			1	0.1%
計	332	270	602	98.7%	31	3	636	98.7%

表Ⅻ-2 B1SX113出土資料用途別出土点数と組成比

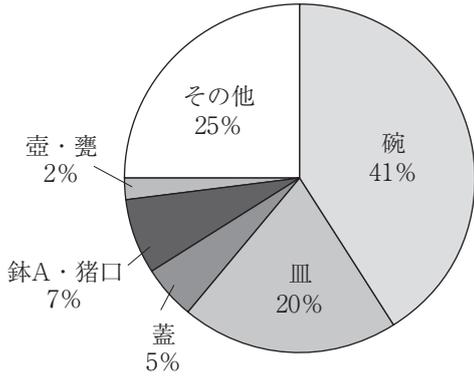
	磁器						陶器							
	能茶山産	肥前産・肥前系	瀬戸・美濃産	関西系	不明	磁器計	能茶山産	尾戸	肥前産・肥前系	瀬戸・美濃産	京・信楽系	関西系	その他・不明	陶器計
碗	66	123	5	7		201	2	9	6	2	13		13	45
中碗	52	86	5			143	1	9	6	2	1		6	25
小碗	14	14				28					11		7	18
小杯		23		7		30	1				1			2
皿		21			11	32	74	4	6	1		1	4	90
小皿		14			11	25	74	1	3			1	4	83
中皿		6				6		3	3	1				7
大皿		1				1								
鉢	11	13				24	1						1志度焼か	2
猪口	2	14				16								
碗蓋	5	23				28								
描鉢												17※堺		17
捏鉢・片口							9							9
鍋							17							17
土瓶								3					8在地か	11
桐徳利													14尾戸又は関西系	14
瓶・徳利		1				1	3	1	1	1	1			7
水注		1				1								
壺・甕							11					1		12
灯明皿							10				5		19尾戸又は関西系	34
火鉢							1			2				3
香炉		2				2								
火入れ	1	1				2	4		1			1		2
紅皿		5				5								
髪油壺		1				1								
段重・蓋物		3				3								
水滴														
仏飯器		3				3								
神酒徳利	1	11				12								
鳥の水入れ							1							1
計	86	222	5	7	11	331	133	17	14	7	19	20	59	269
	26%	67%	2%	2%	3%	100%	49%	6%	5%	3%	7%	7%	22%	99%

表Ⅻ-3 B1SX113出土資料生産地別出土点数

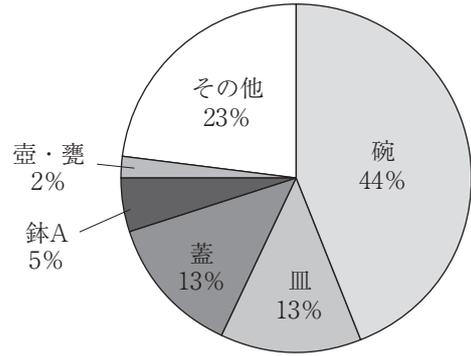
とに気付く。これについては、田村遺跡群が能茶山磁器藩窯閉窯後の明治初頭頃の廃棄遺物であるという時期的な違いも影響しているのかもしれない。対して陣山遺跡は幕末までの廃棄遺物であり、能茶山磁器窯の隆盛期の普及状況を示したものであろう。

生産地別に器種の内訳をみると(表Ⅻ-3)、在地の能茶山磁器製品は碗、鉢、猪口、碗蓋などの日用食器が多くを占めていることが分かる。⁽⁶⁾それ以外の器種では能茶山産の火入れ、神酒徳利が少量認められるのみで、香炉、紅皿、髪油壺、段重、仏飯器などの器種は肥前産・肥前系の製品が、また薄手酒杯では関西系、肥前系の製品が買い求められている。日用品的性格をもつ器種で在地の能茶山磁器藩窯製品が高い比率で購入され、その他の器種は他国製品で賄われるという、こうした傾向は陣山遺跡一括廃棄資料中でもみられた現象である。

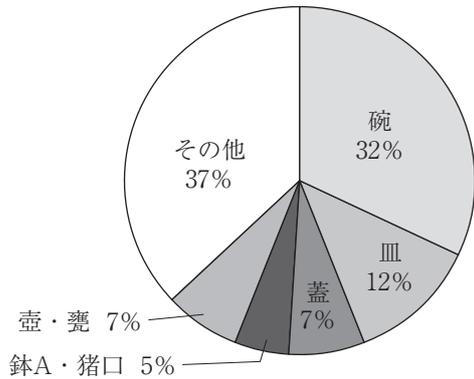
文政3年(1820)に操業を始めた能茶山磁器藩窯は、経営当初、肥前の天草陶石を取り寄せて高級磁器を生産し上方に販売していた。しかし、その後の経営の悪化により、1836年以降は土佐国内の一般庶民層を販売ターゲットとする日用雑器生産へと転向している。農村部で需要されにくい器種、すなわち田村遺跡群や小籠遺跡での出土比率が低かった供膳具の一部(薄手酒杯や盃台等の酒宴・接待用の器)、文房具(水滴)、化粧具(紅皿、髪油壺、段重)、神仏具(神酒徳利、香炉)等では他国



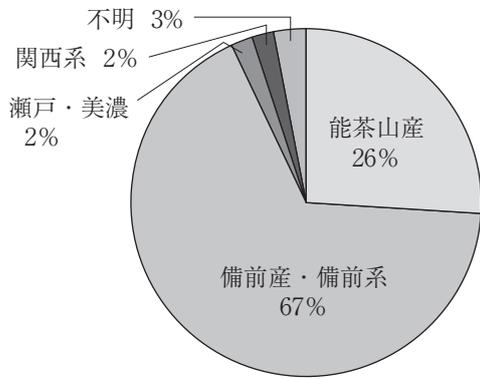
グラフⅫ-1 B1SX113陶磁器器種別組成



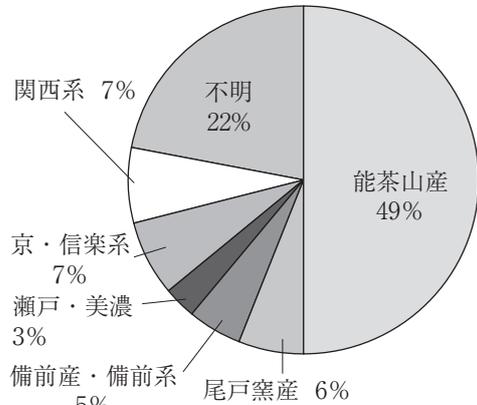
グラフⅫ-2 小籠遺跡廃棄土坑出土の陶磁器器種別組成



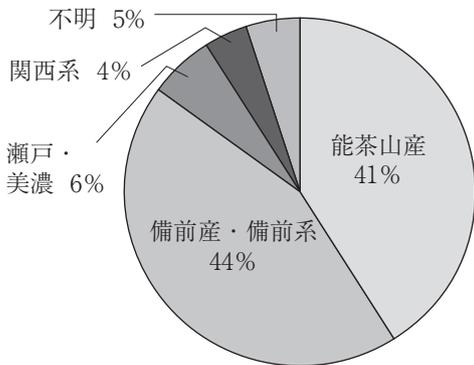
グラフⅫ-3 陣山遺跡一括廃棄遺物の陶磁器器種別組成



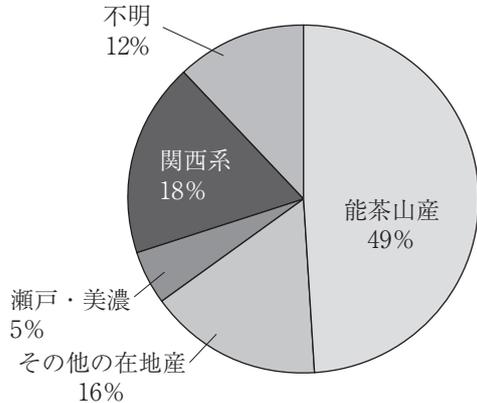
グラフⅫ-4 B1SX113磁器の生産地別組成



グラフⅫ-5 B1SX113陶器の生産地別組成



グラフⅫ-6 陣山遺跡一括廃棄遺物磁器の生産地別組成



グラフⅫ-7 陣山遺跡一括廃棄遺物陶器の生産地別組成

製品に市場を譲り、日用食器など庶民層の間で最も需要の高い器種に絞って量産を行うという藩窯の経営戦略は、田村遺跡群と陣山遺跡での能茶山磁器の器種組成に如実に表れているといえよう。

次に、陶器の産地別組成(グラフⅫ-5)を見ると、能茶山製品が49%、尾戸窯製品が6%、肥前産・肥前系が5%、瀬戸・美濃産が3%、京・信楽系と関西系がそれぞれ7%、その他及び産地不明が22%の割合である。(註7) 日常の生活用具が主体を占める陶器においては、陣山遺跡(グラフⅫ-7)、田村遺跡群ともその産地別組成には大差が無く、居住者の性格差からくる違いは表れなかった。特に能茶山産陶器の占める割合は両遺跡とも50%近くを占めており、その需要の高さが窺われる。

能茶山陶器窯は明治初頭の藩窯閉窯以降も民間窯として操業を継続しており、明治中頃にその最盛期を迎えている。生産器種をみると田村遺跡群B1SX113では(表Ⅻ-3)碗、皿、鉢などの食器、片口、行平、土鍋などの調理具、瓶、徳利、壺、甕などの貯蔵具、その他灯明皿、火鉢、火入れ、鳥の水入れなどがみられ、やはり日用の生活用具を主体とする製品内容といえよう。また食器のうち、鉄釉蛇の目釉剥ぎ小皿と同灰釉小皿はB1SX113出土資料内に70個体近くが含まれ、重ね焼きによるこの量産タイプの小皿が民家日用の皿として重用されていたことがわかる。一方、能茶山窯の製品が普及しない器種もあり、播鉢は陣山遺跡、田村遺跡群とも全て堺産のもので占められていた。

③尾戸窯製品の需要と使用形態

最後にこれまで実態の分かりにくかった尾戸窯の陶器製品については、今回、灰釉碗(B1-52図102~106・108)、灰釉皿(B1-53図121・122)、土瓶蓋(B1-56図140・141)、雲助形土瓶(B1-56図145~147)、徳利(B1-57図152)等が確認できた。

灰釉中皿2点は灰白色の胎土に、浅黄色を帯びる半透明の灰釉を施釉するものである。器壁が厚く雑器ランクの製品と思われるが、高台を削り出した後も高台内外面に丁寧なナデを施している点に、量産をめざす能茶山産陶器との製作上の違いが認められる。

雲助形土瓶3点はいずれも丁寧な薄手の作りで、灰白色の胎土に灰釉を施釉するものである。土瓶(B1-56図145)は体部外面に繊細な筆使いで鉄絵による花文を描く。同一個体の蓋(B1-56図140)には鉄絵で蝶が描かれている。土瓶蓋(B1-56図141)は白化粧土イッチン描きによる文様を上面に施すものである。

こうした繊細な作りの土瓶は、供伴した京都風の白色系土器焜炉や、青竹の意匠の軟質施釉陶器の焜炉などと組合わされ、茶を沸かす際に使用されたのであろうか。今回の田村遺跡群の出土資料全体をみても、小碗(湯飲み碗)、土瓶の出土点数は多く、土瓶には様々な意匠のものが含まれていた。こうした遺物内容からみても、当時、農村部での喫茶の習慣は深く浸透していたものと思われる。近世の田村遺跡群では、意匠を凝らした土器焜炉と尾戸窯産の土瓶に、能茶山産や肥前系の湯飲み碗を組み合わせ、茶が日常的に飲用されたと考えられる。

謝辞

今回の報告に際しては、陶磁器の鑑識について大橋康二(九州陶磁文化館)、東中川忠美(佐賀県教育庁)、船井向洋(伊万里市教育委員会)諸氏より、多くのご教示を頂いた。記して感謝の意を表したい。

註

- 1) ハンダ土坑について『皆山集』には次の様な記述がみられる。「はんだ井戸輪その外はんだの諸器寛政十一年己未江州より来りて揉貫井戸師より浦戸町角屋六平に傳法して作り始め今に至る」。(『皆山集』は明治11年～34年、松野尾章行が古文書・古記録を筆記した史料集。)これによると、ハンダ土坑の出現時期は寛政11年(1799)前後と捉えられる。
- 2) A10-18図-17の青磁香炉は鍋島藩窯跡発掘調査第IV調査地点2トレンチ攪乱層出土の青磁香炉と同汎のものである。ただし鍋島藩窯跡第IV地点出土遺物には周辺の窯場からの混入遺物が含まれている可能性があるということであり、生産年代は特定できない。また、本資料の体部外面に配される陽刻文様は鍋島藩窯跡第IV調査地点近辺に位置する日峰社下窯跡(1650～1670年代)出土品にも共通するという。大橋康二、東中川忠美氏のご教示による。
- 3) 『田村遺跡群Ⅱ』第一分冊P115、7行目の記述…誤「肥前三川内産」→正「肥前産」。
- 4) 推定個体数。個体数の算出は、口縁部点数と底部点数をもとに行った。この場合、接合不能な複数の口縁部片でも形態・調整痕・釉調・胎土等の観察から同一個体とみられるものは1個体とみなしてカウントした。また底部は、同一個体の口縁部を伴わないもののみを1個体としてカウントしている。
- 5) 能茶山産磁器の同定にあたっては、両遺跡とも、銘をもつものと能茶山窯独自の文様構成をもつものを取り上げ、それ以外の染付磁器は肥前系としてカウントしている。また、白磁菊皿は能茶山産のものが含まれる可能性をもつが、無銘のため今回は全て産地不明の遺物として取り扱った。このため、実際の能茶山製品の比率はさらに大きくなるものと予想される。
- 6) ここでは能茶山産皿が含まれていないが、B4区のB4SK442からは在銘の中皿が出土している。
- 7) 肥前産の製品は陶胎染付碗、内野山産緑釉小皿、刷毛目鉢など18世紀前半までの遺物である。肥前系としたものには、呉器手風灰釉丸碗3点が含まれる。灰釉土瓶、爛徳利、灯明皿には尾戸窯製品の可能性をもつものも含まれるが、京・信楽系、関西系陶器と区別の付かないものがあり、産地不明とした。

参考文献

- 藤方正治「小籠遺跡出土の近世陶磁器について」『小籠遺跡Ⅲ』高知県埋蔵文化財センター1997
- 浜田恵子「陣山遺跡出土近世陶磁器の検討－土佐、地方郷土階級の陶磁器消費実態と在地製品の普及」『陣山遺跡』高知県埋蔵文化財センター1997
- 東中川忠美・齋藤潤花・大橋康二『鍋島藩窯』鍋島藩窯研究会2002

XIII 放射化分析による近世陶磁器の生産地推定 －尾戸窯製品の同定をめぐって－

1. はじめに

近世尾戸窯は、土佐の藩窯として承応2年(1653)の開窯から明治3年(1870)の藩窯廃止まで操業を続けた。森田家文書『戸陶値段表』⁽¹⁾からその製品内容をみると、濃茶碗、薄茶碗、茶入、蓋置、香合、風炉、茶碗、奈良茶碗、ひなの蓋茶碗、ひなの膳、菊皿、鱈皿、菓子鉢、猪口、汁こぼし、汁次、盃台、御上酒入徳利、水吸、水次、香炉、花瓶、水指、花生、大砂物鉢、置物、瓶子、硯水入、ぶんちん、火トボシ、引手、たばこ入、鳥の水あひ、鳥の餌入、ひしゃく立、横渡し、白土器などの製品名が記され、茶陶や宴席用の食器を中心に多様な器種の品が製作されていたことが窺われる。しかし、その一方で、森田家と共に作陶に関わった山崎家の製作内容と尾戸雑器については、記録上に残ることは殆どなく不明な点が多い。また、長い操業期間をもつ窯でありながら、これまでその製品形態や意匠の年代の変遷は明らかでなかった。

こうしたなか、近年、近世遺跡の発掘調査が進むにつれ、江戸後期を中心に尾戸焼の出土資料も蓄積されてきた。近世集落が展開した田村遺跡群においては、幕末期から明治初頭の一括廃棄土坑中より、在地の能茶山窯製品とともに尾戸窯の製品が出土している。この他、高知城跡、高知城伝下屋敷跡、家老屋敷である五藤家屋敷跡、地方郷士の屋敷地である陣山遺跡、中村城下町にあたる土佐中村一条氏関連遺跡、近世農村遺跡である小籠遺跡からも良好な資料が出土しており、武家地、城下町、農村での尾戸焼需要の在り方が序々に明らかになってきている。

これらの消費地遺跡出土資料の産地同定は、専ら、窯跡出土資料を基準資料として形態、胎土、釉調、文様意匠、製作技法などの各属性にわたって分析、分類し、それとの対比によって産地同定をおこなうという考古学的手法によってきた。しかしながら、尾戸窯の製品には、京焼風の意匠を巧みに取り込んだものなど、他の主要生産地の製品との違いが見出しにくいものも多く含まれており、そのため、そうしたグレーゾーンにある消費地出土資料はその外形上の特徴から「京都系」「肥前系」といった呼称で包括的に分類されることが多かった。さらに尾戸窯の場合、基準資料となる窯跡出土の資料数が十分でないという点も、産地同定を難しくする要因となっている。

そこで今回は、外見的特徴の観察からでは識別がつけられない陶器片、特に京都、肥前との製品識別の問題や、従来の課題であった尾戸窯跡出土資料内の混入品の抽出に関わって、自然科学的手法による産地同定を試みる。中でも、機器中性子放射化分析は胎土中に含まれる微量元素組成を高い精度で定量することができるため、磁器、陶器片の産地同定においては特に有効である。今回は、縄文時代から江戸時代までの石材、土器、陶磁器の機器中性子放射化分析をてがけられ、特に肥前古窯跡出土陶片の組成分析と古九谷様式磁器の生産地推定⁽²⁾など陶磁器の産地同定で高い成果を挙げてこられた東京学芸大学教育学部の二宮修二氏とその研究グループの方々により、共同研究実施の承諾をいただく幸運を得た。また、肥前側の分析資料の選択にあたっては、佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏から多くのご教示をいただき、伊万里市教育委員会、佐世保市教育委員会より生

産地側の分析資料を提供していただくことができた。

以下では、今回の分析とその結果について報告したい。

2. 尾戸窯関連陶器の生産地推定の視点

今回放射化分析を行う目的は、窯跡、消費地遺跡より出土する陶器片から尾戸窯の製品を同定するにあたって、視覚的な観察からでは生産地の特定が困難であった陶器片の産地同定の問題を、自然科学的手法を用いることによって解決することにある。

(A) 肥前産灰釉丸碗との識別

その一つとして、肥前産の灰釉丸碗との識別の問題が挙げられる。この碗は腰の張った丸い体部に高い高台を有し、高台内はアーチ状に削り出されるもので、その形態特徴から、朝鮮系碗の系譜を引くものとして位置付けられている。釉は半透明で浅黄色あるいは灰オリーブ色を帯び、高台施釉で豊付の釉を拭き取っている。胎土は灰白色のものが一般的であるが、灰黄色に近いものも一部みられる。

この灰釉丸碗は、肥前では伊万里市椎ノ峰の上多々良窯、椎ノ峰窯、伊万里市大川内山の御経石窯、清源下窯、鍋島藩窯、長崎県佐世保市木原地蔵平の木原地蔵平東窯、江永古窯等で生産された。生産年代は伊万里市大川内山の御経石窯、清源下窯で1650年代後半から1670年代、鍋島藩窯で1670年代から18世紀前半、佐世保市の木原地蔵平東窯で1650年代頃から1680年代、江永古窯で1670年代以降18世紀代ということであり、いずれも17世紀後半から18世紀前半の間に生産が行われている。

こうした特徴をもつ丸碗は、土佐の消費地遺跡からも比較的多く出土し、高知城跡、五藤家屋敷跡などの城郭と武家屋敷、田村遺跡群や小籠遺跡等の農村遺跡など、各階層にわたって広く需要されている。しかし、その産地同定については、尾戸窯跡⁽³⁾からの出土品に同タイプの灰釉丸碗(XIII-7 図K-OD11~14)が数点含まれていたこと⁽⁴⁾、またその胎土特徴や釉調も尾戸窯製品によく似ているなどの理由によって、これまで土佐出土の灰釉丸碗は尾戸窯産と認識されることが多かった。しかし、尾戸窯跡出土の灰釉丸碗について、九州陶磁文化館の大橋康二氏に鑑識頂き、肥前側窯跡出土資料との比較を行ったところ、これらが肥前産のものと違いを見いだすことが出来ない程酷似しており、尾戸窯跡出土の灰釉丸碗は肥前製品の混入の可能性があるとの指摘を頂いた。こうした経緯から、これまで基準資料として扱われてきた尾戸窯跡出土灰釉丸碗の再検討を行うこととなった。

また今回は、土佐の消費地遺跡出土の資料についてもあわせて検討する。これには高台形態等にいくつかのタイプが認められるため、タイプ別に形態分類し各々から分析資料を抽出することとした。

丸碗Ⅰ類：高台内を曲線的に削り出すもの。(K-OD-11・13・14、K-G-01~07・10~13・15)

丸碗Ⅰ'類：高台内を曲線的に削り出し、体部外面に沈線を巡らすもの。(K-G-9・14・16)

丸碗Ⅱ類：高台内を鋭角的に深く削り出すもの。(K-OD-12、K-G-08・17・18)

これらのうちⅠ'類には口径が14cm前後の大振りのもの(K-G14・16)も含まれる。Ⅱ類は高台を

鋭角的に深く削り出すという、特異な高台形態を呈している。胎土は灰黄色で、釉調は灰オリーブ色あるいはにぶい黄色を帯びている。

(B) 肥前産京焼風陶器との識別

その他にも、肥前の京焼風陶器に意匠が共通する生産地不明の資料がある。高知城伝下屋敷跡SX2出土の楼閣山水文碗(K-DN-01)は、17世紀後半から18世紀前半にかけて生産された肥前の京焼風陶器碗に共通する文様意匠と形態をもつ。しかし、肥前のそれに比べて楼閣山水文の描き方が精緻であり胎土も白色で緻密である点に、肥前製品との違いが認められるものである。

(C) 京焼との識別

二つめの問題は、尾戸焼には、京焼あるいは「京都系」とされる製品に胎土、釉調、意匠が極めて類似したものがあり、両者の識別が難しい点である。このためこうした京焼風の製品については、「京都系」と呼称して報告することが多かった。

そうした資料の一つに、東京都に所在する丸の内三丁目遺跡出土資料がある。丸の内三丁目遺跡は、慶長16年(1608)以前から幕末までの間、土佐藩主山内対馬守(松平土佐守)の屋敷地が存在した地点である。中でも、寛文11年(1671)以降元禄11年(1698)まで山内対馬守屋敷地として使用されたカ地点では、包含層や遺構内から尾戸焼の可能性をもつ陶器片が多く出土している。今回分析対象となったカ地区出土資料(旧Ⅶ区6号瓦溜出土資料)⁽⁵⁾は、遺構内の共伴遺物の年代幅からみて17世紀末から18世紀初頭頃の遺構廃絶資料とみられる。また出土遺物の多くは二次被熱を受けていることから、元禄11年(1698)の火災に伴う廃棄資料であった可能性が考えられる。

今回は、ここから出土した尾戸焼の可能性をもつ陶器片90数点のうち、特に京焼との区別がつきにくいもの10点を分析対象とした。これらは釉調・胎土等に尾戸焼の特徴を見いだせるものの、対比できる該当時期の窯跡出土資料が存在していないため、生産地特定の決め手を持たない一群であった。胎土分析によって、これら遺物群の生産地同定が可能になれば、これまでほとんど実態の分かっていなかった17世紀後半代の尾戸窯の製品像を知る貴重な資料群になると思われる。

(D) 京・信楽系陶器との識別

この他に、高知城伝下屋敷跡SX13出土の灰釉灯明皿(K-DN-02)は内面に菊花を貼付し櫛目を施すもので、18世紀後半から19世紀にかけて生産された京・信楽系の灯明皿の意匠に共通するが、信楽産のそれに比較して体部プロポーションが大振りであり、胎土にも違いが認められる。今回はこうした生産地不明の一群についても胎土分析を試み、産地同定への手がかりを得たい。

(E) 尾戸窯跡出土資料の再検討

最後に、従来まで基準資料として活用されてきた尾戸窯跡出土資料の再検討を行う。尾戸窯は承応2年(1653)の開窯から文政5年(1822)の能茶山への移転まで、城の北側に位置する尾戸の窯場において作陶が行われた。近世の絵図によれば当地周辺には武家屋敷が展開しており、周辺武家地からの廃棄遺物が物原層に混入する危険性は極めて高い。⁽⁶⁾そのため窯跡出土資料については、焼け歪みや著しい焼成不良、窯道具の溶着など窯場からの廃棄品と考えられる根拠をもつものや、同じ意匠や形態のものも多く多量にする場合を除いては、慎重な取り扱いが必要とされる。

ここで分析対象とするものは、混入の可能性をもつもののうち先述の呉器手風灰釉丸碗を除いた

次の6点である。色絵急須又は土瓶(K-OD-02)は、赤・青・黒他(1色は剥離し不明)の顔料を用いた上絵付によって花文を描くもので、花文は黒絵の具で縁取られる。K-OD-02は胎土特徴に他の尾戸窯製品との共通性がみられるが、灰釉はややガラス質で特異性があり、窯跡からの色絵陶器の出土例がこれのみであるため検討対象とした。天目形碗(K-OD-07)は厚手の体部をもつ高台施釉のもので、施釉法や体部形態は瀬戸・美濃や肥前産のものとも異なる。しかし、尾戸窯跡からの天目形碗の出土はこれ1点のみであり、高台形態も尾戸窯製品の一般的なタイプと異なることから検討対象とした。水入れ(K-OD-08)は円孔のない緻密な胎土特徴に違いが認められる。鉢(K-OD-10)は尾戸窯の製品にしばしば用いられる特徴的な黒褐色の胎土であるが、シャープに削り出した高台形態に特異性がみられる。また、白化粧土で花文等を描く意匠は尾戸焼で多くみられるものの、白化粧土刷毛目による装飾は他に類例がない。灯明皿(K-OD-05)、小碗(K-OD-22)は京・信楽系陶器に同形態のタイプがあるため、検討対象とした。

3. 分析資料

(1) 生産地推定資料(ⅫI-4・5・7・8図)

まず、生産地推定を試みる分析資料として、高知県の田村遺跡群、小籠遺跡、高知城伝下屋敷跡、尾戸窯跡、および東京都丸の内三丁目遺跡から出土した陶器片40点を取り上げた。各資料の出土地点、推定廃棄年代、特徴、分析目的別分類は表ⅫI-1・2に示している。分析目的別の分類と資料点数は次の通りである。

A：高台施釉の呉器手風灰釉丸碗。22点(K-OD-11～14、K-G-01～18)

B：肥前産京焼風陶器に共通した意匠をもつもの。1点(K-DN-01)

C：京焼風の意匠をもつもの。10点(K-MR-01～10)

D：京・信楽系陶器に共通した意匠をもつもの。1点(K-DN-02)

E：尾戸窯跡出土資料のうち混入の可能性をもつもの。6点(K-OD-02・05・07・08・10・22)

(2) 対比資料(ⅫI-3～6図)

次に、比較検討のための資料として、生産地遺跡である土佐、肥前、信楽の窯跡より出土した陶器片32点を取り上げた。このうち尾戸窯跡出土資料では、特に形態や文様意匠に一般的な尾戸焼の特徴を見出せるもの、焼け歪み、焼成不良等の痕跡を残すものを抽出し、対比資料とした。また、尾戸窯と同じ地点⁽⁷⁾から粘土を採取したとされる能茶山窯⁽⁸⁾の出土資料も対比資料に加えた。生産地遺跡出土資料の資料名、推定生産年代とその特徴は表ⅫI-2に示している。

尾戸窯(高知県高知市小津町)出土資料⁽⁹⁾12点(K-OD-01・03・04・06・09・15～21)

能茶山陶器窯(高知県高知市能茶山)出土資料⁽¹⁰⁾2点(K-NU-01～02)

御経石窯(佐賀県伊万里市大川内町)出土資料5点(K-OK-01～05)

上多々良窯(佐賀県伊万里市)出土資料5点(K-KT-01～05)

木原地蔵平東窯(長崎県佐世保市木原地蔵平)出土資料3点(K-KH-01～03)

江永古窯(長崎県佐世保市江永)出土資料1点(K-EN-01)

勅旨窯(滋賀県)表採資料2点(K-TY-01~02)

漆原B窯(滋賀県)表採資料2点(K-UR-01~02)

また、今回の生産地推定にあたっては、より多くの対比データを得るために、北九州市京町遺跡関連の放射化分析(二宮1994『放射化分析による京町遺跡出土陶磁器の生産地推定』)⁽¹¹⁾での肥前の窯跡出土資料24点と大川内町小笠原宅より表採された陶器片1点の分析結果も加え、クラスター分析を行っている。分析資料名とその特徴は、同報告に記載された内容を引用させて頂き表XIII-3に示している。

鍋島藩窯跡(佐賀県伊万里市大川内町)出土資料14点(NB01-01~14)

御経石窯跡(佐賀県伊万里市大川内町)出土資料4点(OK01-01~05)

志田西山窯跡(佐賀県藤津郡塩田町)出土資料2点(SN01-01~02)

内野山南窯跡(佐賀県藤津郡嬉野町)出土資料4点(UN01-01~04)

大川内町小笠原宅表採資料1点(OU01-01)

(浜田)

No	試料番号 出土地点	器種	特徴	胎土	廃棄年代(供伴 遺物の年代幅)	分類	分析 目的
1	K-G-01 小籠遺跡Ⅲ-Ⅳ区 SK2	碗	丸形。高台内を曲線的に削り出す。高台施釉。釉は浅黄色を帯び、貫入が入る。目跡無し。	灰白色。	17C後半	丸碗Ⅰ	A
2	K-G-02 小籠遺跡Ⅲ-Ⅳ区 SK2	碗	丸形。高台内を曲線的に削り出す。高台施釉。釉は浅黄色を帯び、貫入が入る。目跡無し。	灰白色。	17C後半	丸碗Ⅰ	A
3	K-G-03 小籠遺跡Ⅲ-Ⅳ区 SD12	碗	丸形。高台内を曲線的に削り出す。高台施釉。釉は浅黄色を帯び、貫入が入る。目跡無し。	灰白色。	18Cか	丸碗Ⅰ	A
4	K-G-04 土佐中村一条氏関連 遺跡 包含層	碗	丸形。高台内を曲線的に削り出す。高台施釉。釉は浅黄色を帯び、貫入が入る。目跡無し。	灰白色。	不明	丸碗Ⅰ	A
5	K-G-05 五藤家屋敷跡 包含層	碗	丸形。高台内を曲線的に削り出す。高台施釉。釉は浅黄色を帯び、貫入が入る。目跡無し。	灰白色。	17C後半～18 C前半か	丸碗Ⅰ	A
6	K-G-06 五藤家屋敷跡 包含層	碗	丸形。高台内を曲線的に削り出す。高台施釉。釉は浅黄色を帯び、貫入が入る。目跡無し。	灰白色。	17C後半～18 C前半か	丸碗Ⅰ	A
7	K-G-07 五藤家屋敷跡 包含層	碗	丸形。高台内を曲線的に削り出す。高台施釉。釉は浅黄色を帯び、貫入が入る。目跡無し。	灰白色。	17C後半～18 C前半か	丸碗Ⅰ	A
8	K-G-08 小籠遺跡Ⅲ-V区 SB4	碗	丸形。高台内を鋭角的に深く削り出す。高台施釉。釉はにぶい黄色を帯び、貫入が入る。目跡有り。	灰黄色。	18C後半か	丸碗Ⅱ	A
9	K-G-09 小籠遺跡Ⅲ-V区 SB4	碗	丸形。高台は欠損し不明。体部外面に沈線。釉はオリブ黄色を帯び、貫入が入る。目跡の有無は不明。	灰黄色。	18C後半	丸碗Ⅰ'	A
10	K-G-10 小籠遺跡Ⅲ-V区 SK13	碗	丸形。高台内を鋭角的に深く削り出す。高台施釉。釉は灰オリブ色を帯び、貫入が入る。目跡の有無は不明。	灰黄色。	18C後半	丸碗Ⅰ	A
11	K-G-11 小籠遺跡Ⅱ-Ⅱ区 SD78	碗	丸形。高台内を曲線的に削り出す。高台施釉。釉はにぶい黄色を帯び、貫入が入る。目跡無し。	灰黄色。	18C後半	丸碗Ⅰ	A
12	K-G-12 小籠遺跡Ⅲ-Ⅲ区 SD6	碗	丸形。高台内を曲線的に削り出す。高台施釉。釉は浅黄色を帯び、貫入が入る。目跡無し。	灰白色。	18C～幕末	丸碗Ⅰ	A
13	K-G-13 小籠遺跡Ⅱ-Ⅱ区 廃棄土坑	碗	丸形。高台内を曲線的に削り出す。高台施釉。釉は浅黄色を帯び、貫入が入る。目跡無し。	灰白色。	18C～幕末	丸碗Ⅰ	A
14	K-G-14 小籠遺跡Ⅱ-Ⅱ区 廃棄土坑	碗	丸形。高台は欠損し不明。口径14cm。釉は灰オリブ色を帯び、貫入が入る。	黄灰色。	18C～幕末	丸碗Ⅰ'	A
15	K-G-15 小籠遺跡Ⅲ-Ⅲ区 SE5	碗	丸形。高台内を曲線的に削り出す。高台施釉。釉はにぶい黄色を帯び、貫入が入る。目跡無し。	灰黄色。	19C～幕末	丸碗Ⅰ	A
16	K-G-16 小籠遺跡Ⅱ-Ⅱ区 SE11	碗	丸形。高台は欠損し不明。口径14.5cm。体部外面に沈線。釉は浅黄色を帯び、貫入が入る。目跡有り。	灰白色。	19C～幕末	丸碗Ⅰ'	A
17	K-G-17 土佐中村一条氏関連 遺跡 包含層	碗	丸形。高台内を鋭角的に深く削り出す。高台施釉。釉は灰オリブ色を帯び、貫入が入る。目跡無し。	灰色。	18世紀か	丸碗Ⅱ	A
18	K-G-18 田村遺跡群Ⅱ-B1区 SX104	碗	丸形。高台内を鋭角的に深く削り出す。高台施釉。釉は灰オリブ色を帯び、貫入が入る。目跡無し。	灰黄色。	18後半～幕末	丸碗Ⅱ	A
19	K-MR-03 丸の内三丁目遺跡- TAⅦ区 6号瓦溜	碗	半筒形。外面、白化粧土象嵌による二重圏線と暦文、菊花文。灰白色を帯びる透明の釉で、0.5mm前後の細かな貫入が入る。	にぶい黄橙 ～灰黄色。	17C後半～末		C
20	K-MR-04 丸の内三丁目遺跡- TAⅦ区 6号瓦溜	碗	半筒形。外面、鉄錆による二重圏線と白化粧土象嵌による圏線、丸文。釉は被熱し変質。	灰黄色。	17C後半～末		C
21	K-MR-05 丸の内三丁目遺跡- TAⅦ区 6号瓦溜	碗	半筒形。外面、白化粧土象嵌による圏線、圏線間に鉄錆と白化粧土象嵌による鶴文。釉は被熱し変質。	にぶい黄橙 色。	17C後半～末		C
22	K-MR-06 丸の内三丁目遺跡- TAⅦ区 6号瓦溜	碗	半筒形。外面、縦方向の沈線を等間隔に配し、区画内に鉄錆による象嵌文様。灰白色を帯びる半透明の釉。二次被熱を受ける。	にぶい黄橙 ～灰白色。	17C後半～末		C
23	K-MR-07 丸の内三丁目遺跡- TAⅦ区 6号瓦溜	碗	高台内を曲線的に削り出す。高台無釉。高台内に渦状の削り痕。疊付脇を面取る。釉は透明で、0.5mm前後の細かな貫入が入る。	灰黄色。	17C後半～末		C
24	K-MR-08 丸の内三丁目遺跡- TAⅦ区 4号土坑A	皿	盤形。外面、鉄錆による市松文様。高台内を曲線的に削り出す。高台施釉。釉は二次被熱を受け変質するが細かな貫入を認める。目痕無し。	灰白色。	17C後半～末		C
25	K-MR-09 丸の内三丁目遺跡- TAⅦ区 6号瓦溜	皿	小判形。口縁部輪花。高台内を鋭角的に削り出す。高台施釉。釉は透明で1mm前後の貫入が入る。目痕無し。	灰白色。	17C後半～末		C
26	K-MR-10 丸の内三丁目遺跡- TAⅦ区 6号瓦溜	皿	方形。鐔縁。口縁に透かし文様。釉は灰黄色を帯びる半透明の釉。二次被熱を受ける。	灰黄色。	17C後半～末		C
27	K-MR-11 丸の内三丁目遺跡- TAⅦ区 6号瓦溜	鉢	変形形。口縁を折湾形に成形した後四方を折り、方形に形作る。口鏑。内面に呉須による菊花文。高台内は曲線的に削り出す。高台施釉。釉は二次被熱により変質。目跡無し。	灰白色。	17C後半～末		C

XIII 放射化分析による近世陶磁器の生産地推定

No.	試料番号 出土地点	器種	特徴	胎土	廃棄年代(供伴 遺物の年代幅)	分類	分析 目的
28	K-MR-12 丸の内三丁目遺跡- TAⅦ区 6号瓦溜	鉢	端反形。口縁の一部を半円形に切り込む。高台内を鋭角的に削り出す。高台施釉。釉は灰白色を帯びる透明の釉で、0.5mm前後の細かな貫入が入る。目跡無し。	灰白色。	17C後半～末		C
29	K-DN-01 高知城伝下屋敷跡 SX2	碗	外面、呉須による楼閣山水文。高台内を鋭角的に削り出す。高台無釉。透明の釉。目跡無し。	白色。	17C中葉～後半		B
30	K-DN-02 高知城伝下屋敷跡 SX13	灯明皿	内面、櫛目、貼付による菊花文。外面下半回転ケズリ。外面下半無釉。淡黄色を帯びる半透明の釉で、貫入が入る。目痕有り。	灰白色。	18C後半～19C 前半		D

※MR-01・02は空番となっている。

表ⅩⅢ-1 分析資料観察表(消費地遺跡出土資料)

No.	試料番号 出土地点	器種	特徴	胎土	推定生産年代	分類	分析 目的
31	K-OK-01 御経石窯	碗	陶器。丸形。光沢の強い透明の釉で1mm前後の貫入が入る。焼歪みあり。内面に窯壁土が溶着。	淡黄色。	1650～70年代		
32	K-OK-02 御経石窯	碗	丸形。外面緩やかなロクロ目。淡黄色を帯びる透明の釉で0.5～1mm大の貫入が入る。内面に窯壁土が溶着。	淡黄色。	1650～70年代		
33	K-OK-03 御経石窯	碗	丸形。淡黄色を帯びる透明の釉で0.5～1mm大の貫入が入る。	灰白色。	1650～70年代		
34	K-OK-04 御経石窯	碗	丸形。高台内を曲線的に削り出す。高台施釉。灰オリーブ色を帯びる光沢の強い透明の釉で0.5mm前後の貫入が入る。目跡無し。	浅黄橙色。	1650～70年代		
35	K-OK-05 御経石窯	碗	丸形。浅黄色を帯びる光沢の強い透明の釉で1mm前後の貫入が入る。目跡無し。	灰白色。	1650～70年代		
36	K-KT-01 上多々良窯	碗	丸形。外面緩やかなロクロ目。浅黄色を帯びる透明の釉で0.5～1mm大の貫入が入る。目跡無し。	灰白色。	17C後葉		
37	K-KT-02 上多々良窯	碗	丸形。外面ロクロ目。浅黄色を帯びる透明の釉で0.5mm前後の貫入が入る。目跡無し。	灰白色。	17C後葉		
38	K-KT-03 上多々良窯	碗	丸形。外面ロクロ目。浅黄色を帯びる透明の釉で1mm前後の貫入が入る。	灰白色。	17C後葉		
39	K-KT-04 上多々良窯	碗	丸形。外面緩やかなロクロ目。浅黄色を帯びる透明の釉で0.5mm前後の貫入が入る。目跡無し。	灰白色。	17C後葉		
40	K-KT-05 上多々良窯	碗	丸形。外面ロクロ目。淡黄色を帯びる透明の釉で1mm前後の貫入が入る。目跡無し。	灰白色。	17C後葉		
41	K-KH-01 木原地蔵平窯	碗	丸形。高台内を曲線的に削り出す。高台施釉。光沢の強い透明の釉で1～2mm大の粗い貫入が入る。目跡無し。	にぶい黄橙色。	1650～80年代		
42	K-KH-02 木原地蔵平窯	碗	丸形。高台内を曲線的に削り出し、高台端部を双方から面取る。高台施釉。浅黄色を帯びる光沢の強い透明の釉で1mm前後の貫入が入る。目跡無し。内面に窯壁土が溶着。	浅黄橙色。	1650～80年代		
43	K-KH-03 木原地蔵平窯	碗	丸形。高台内を曲線的に削り出す。高台施釉。オリーブ灰色を帯び光沢の強い透明の釉で1～3mm大の粗い貫入が入る。目跡無し。	黄灰色。	1650～80年代		
44	K-EN-01 江永古窯	碗	丸形。高台内を曲線的に削り出す。高台施釉。灰白色の化粧土を掛け、その上に浅黄色を帯びる透明の釉を施釉。釉は0.5～1mm大の貫入が入る。目跡無し。	浅黄橙色。	1670年代～ 18C		
45	K-OD-01 尾戸窯	碗	腰張形。体部外面ロクロ目顕著。高台内を曲線的に削り出す。高台無釉。鉄釉。釉は黒褐色～黒色に発色。目痕有り。	灰白色。N- bタイプ。	1653以降		
46	K-OD-02 尾戸窯	急須又 は土瓶	薄手の体部。内面ロクロ目顕著。把手部は剥離。赤・青(他1色は剥離し不明)の上絵付による花文。花卉輪郭は黒で縁取る。灰釉は灰オリーブ色を帯びる透明の釉で貫入が入る。	灰白色。N- bタイプ。	1653～1822		E
47	K-OD-03 尾戸窯	碗	轆轤形。体部外面に強いロクロ目。高台内を曲線的に削り出す。高台無釉。灰オリーブ色を帯びる透明の釉で貫入が入る。目痕3足。	灰白色。N- bタイプ。	1653～1822		
48	K-OD-04 尾戸窯	皿	端反形。外面ロクロ目。高台内は曲線的に削り出し、渦状の鈍痕を残す。高台脇に焼成前穿孔。体部下位～高台無釉。灰釉は焼成不良で白濁。見込蛇の目釉剥ぎ。焼成不良。	灰白色。N- bタイプ。	1653～1822		
49	K-OD-05 尾戸窯	灯明皿	外底ケズリ。外面下半～底部無釉。灰釉は浅黄色を帯びる透明の釉で貫入が入る。	灰白色。N- bタイプ。	1653～1822		E
50	K-OD-06 尾戸窯	碗	腰張形。見込み凸状。高台内は曲線的に削り出し、渦状の鈍痕を残す。高台無釉。灰釉は焼成不良で白濁。目痕3足。焼成不良。	黄橙色。N- aタイプ。	1653以降		
51	K-OD-07 尾戸窯	碗	天目形。高台はやや鋭角的に削り出す。高台施釉。鉄釉。釉は鉛色～黒色に発色。	灰色。やや 透明感あり。	不明		E

No.	試料番号 出土地点	器種	特徴	胎土	推定生産年代	分類	分析 目的
52	K-OD-08 尾戸窯	水入れ	板作り。内面と外底に強い指ナデ。外側面に斜格子状の圧痕文。内面に白化粧土刷毛塗り後、透明釉を施釉。外面無釉。	黄灰色。やや透明感あり。	不明		E
53	K-OD-09 尾戸窯	火入れ	外面鉄釉。内面下半無釉。外面上位に銅緑釉を流し掛け。	黒褐色。N-aタイプ。	1653以降		
54	K-OD-10 尾戸窯	鉢	高台は鋭角的に削り出す。内面に白化粧土刷毛目と鉄絵による菊文。透明釉はガラス質で粗い貫入が入る。外面下半と高台無釉。	砂質で緻密な胎土。黒褐色。	不明		E
55	K-OD-11 尾戸窯	碗	丸形。高台内を曲線的に削り出す。高台施釉。浅黄色を帯びる透明の釉で貫入が入る。目跡無し。	灰白色。	不明	丸碗Ⅰ	A
56	K-OD-12 尾戸窯	碗	丸形。高台内を鋭角気味に深く削り出す。高台施釉。オリーブ灰色を帯びる透明の釉で貫入が入る。目跡無し。	灰黄色。	不明	丸碗Ⅱ	A
57	K-OD-13 尾戸窯	碗	丸形。高台内を曲線的に削り出す。高台施釉。浅黄色を帯びる透明の釉で1~2mm程度の貫入が入る。目跡無し。	灰黄色。	不明	丸碗Ⅰ	A
58	K-OD-14 尾戸窯	碗	丸形。高台内を曲線的に削り出す。高台施釉。灰黄色を帯びる透明の釉で1mm前後の貫入が入る。外面は焼成不良で白濁。目跡無し。	灰白色。	1653以降	丸碗Ⅰ	A
59	K-OD-15 尾戸窯	香炉	外面呉須による亀文。内面ロクロ目顕著。高台内を鋭角的に深く削り出す。内面と高台無釉。貫入の入る透明の釉。呉須は暗オリーブ色に発色。内底に重ね焼きによる高台溶着痕が残る。焼歪みあり。	浅黄色。N-bタイプ。	1653以降		
60	K-OD-16 尾戸窯	皿	高台内を曲線的に削り出す。高台施釉。透明の釉で細かな貫入が入る。見込みと高台内に径5mm黒褐色の陶器質の目痕あり。	黄灰色。N-aタイプ。	1653以降		
61	K-OD-17 尾戸窯	皿	内面、鉄絵による葦と雁。高台内を鋭角的に深く削り出す。高台施釉。見込みに目痕5足。	黄灰色。N-aタイプ。	1653以降		
62	K-OD-18 尾戸窯	碗	腰張形。外面に鉄絵。高台内は曲線的に深く削り出す。高台施釉。灰釉は焼成不良で白濁。見込みに陶器質の目痕あり。高台脇に「山」銘あり。焼成不良。	灰色、橙色。N-aタイプ。	1653以降		
63	K-OD-19 尾戸窯	碗	外面白化粧土象嵌による菊花文。薄手の体部。外面ロクロ目顕著。白濁する半透明の釉で、0.5mm前後の貫入が入る。	淡黄色。N-bタイプ。	1653以降		
64	K-OD-20 尾戸窯	碗	高台内を鋭角的に深く削り出す。高台無釉。白色を帯びる透明の釉で細かな貫入が入る。見込みに目痕有り。	淡黄色。N-bタイプ。	1653~1822		
65	K-OD-21 尾戸窯	碗	腰張形。高台内を曲線的に削り出す。高台無釉。白色を帯びる透明の釉で細かな貫入が入る。見込みに目痕有り。	灰白色。N-bタイプ。	1653以降		
66	K-OD-22 尾戸窯	小碗	高台内を鋭角的に削り出す。高台無釉。ガラス質の透明の釉で細かな貫入が入る。目跡無し。	灰白色。N-bタイプ。	1653~1822		E
67	K-NU-01 能茶山窯 表採	碗又は 皿	高台は断面三角形。体部下半に削り痕を明瞭に残す。高台無釉。釉は透明で細かな貫入が入る。見込みに目痕有り。	淡黄色。N-bタイプ。	1820以降		
68	K-NU-02 能茶山窯 表採	おろし 皿	おろし目は棒状工具を両側から刺突し成形。白色を帯びる透明の釉で細かな貫入が入る。目痕4足。	淡黄色。N-bタイプ。	1820以降		
69	K-TY-01 勅旨窯 表採	碗	小杉形。鉄絵による若杉文。高台無釉。オリーブ灰色を帯びる透明の釉。底部脇にモミガラ痕。	灰白色。剥離面は滑らかで透明感あり。	19C前葉		
70	K-TY-02 勅旨窯 表採	仏花器	鐏口形。双耳を貼付。内面ロクロ目顕著。高台無釉。鉄釉は黒色に発色する。	灰白色。剥離面は滑らかで透明感あり。	19C前葉		
71	K-UR-01 漆原B窯 表採	カンテ ラ	片口後手形。把手と注口部は欠損。口縁端部と高台は無釉。灰白色を帯びる透明の釉で1mm前後の貫入が入る。	灰白色。剥離面は滑らかで透明感あり。	19C前半~明治		
72	K-UR-02 漆原B窯 表採	徳利	鉄絵。内面ロクロ目顕著。底部と内面無釉。白色を帯びる透明の釉で1mm前後の貫入が入る。	灰白色。剥離面は滑らかで透明感あり。	19C前半~明治		

表Ⅲ-2 分析資料観察表(生産地遺跡出土資料)

XIII 放射化分析による近世陶磁器の生産地推定

No.	試料番号 出土地点	器種	特徴	推定生産年代
73	NB01-01 鍋島藩窯AH11 H110-230	皿	陶器。淡黄白色の精土。焼成良好。高台部無釉。釉に貫入多い。高台内中央に円刻あり。見込みに呉須による山水文。「木下弥」印。	1660～90年代
74	NB01-02 鍋島藩窯 OPトレンチ攪乱	皿	陶器。淡黄白色の精土。焼成良好。高台部無釉。釉に貫入多い。高台内中央に円刻あり。見込みに呉須による山水文。篆書体印。	1660～90年代
75	NB01-03 鍋島藩窯AH11 H110-230	皿	陶器。淡灰白色の精土。焼成良好。高台部無釉。釉に貫入多い。高台内中央に円刻あり。見込みに呉須による山水文。「清水」印。	1660～90年代
76	NB01-04 鍋島藩窯NBH-5 Oトレ770719	皿	陶器。淡黄白色の精土。焼成良好。高台部無釉。釉に貫入多い。高台内中央に円刻あり。見込みに呉須による山水文。篆書体印。	1660～90年代
77	NB01-05 鍋島藩窯AH11 H110-230	皿	陶器。淡黄白色の精土。焼成良好。高台部無釉。釉に細かい貫入多い。高台内中央に円刻あり。見込みに呉須による山水文。「森」印。	1660～90年代
78	NB01-06 鍋島藩窯AH11	碗	陶器。淡黄白色の精土。焼成普通。高台部無釉。釉が汚れている。高台内中央に円刻あり。「木下弥」印。	1660～90年代
79	NB01-07 鍋島藩窯5次 Oトレ東側 770715	皿	陶器。淡黄白色の精土。焼成良好。高台部無釉。釉に貫入多い。高台内中央に円刻あり。見込みに呉須による山水文。篆書体印。	1660～90年代
80	NB01-08 鍋島藩窯AH11 751103	碗	陶器。淡黄白色の精土。焼成普通。高台部無釉。釉に貫入多い。高台内中央に円刻あり。「清水」印。	1660～80年代
81	NB01-09 鍋島藩窯NBH-5 Oトレ770719	碗	陶器。淡黄白色の精土。焼成良好。高台部無釉。釉に貫入多い。高台内中央に円刻あり。「新」字印。	1660～90年代
82	NB01-10 鍋島藩窯AH11 751103	碗	陶器。淡灰褐色の精土。焼成良好。高台部無釉。高台内中央に円刻あり。「善」字印。	1660～90年代
83	NB01-11 鍋島藩窯5次Oトレ東側 770715	皿	陶器。淡白色の精土。本焼前の未完成品。無釉。素焼き状態の素地に見込みに呉須による山水文を施したものの。「新」字印。	1660～90年代
84	NB01-12 鍋島藩窯AH11 751103	碗	陶器。淡黄白色の精土。焼成良好。高台部無釉。釉に貫入多い。高台内中央に円刻あり。「富水次」印。	1660～90年代
85	NB01-13 鍋島藩窯NH5 770725	皿	陶器。淡灰白色の精土。焼成良好。高台部無釉。釉に貫入多い。高台内中央に円刻あり。見込みに呉須による山水文。印無し。	1690～18世紀初
86	NB01-14 鍋島藩窯5次Oトレ東側 770716	皿	陶器。淡灰褐色の精土。焼成普通。高台部無釉。釉に貫入多い。高台内中央に円刻あり。見込みに呉須による山水文。印無し。	1690～18世紀初
87	SN01-01 志田西山窯BT 900606	皿	陶器。淡黄白色の精土。焼成良好。高台部無釉。高台内中央に「の」の字状のヘラ当て。見込みに呉須による山水文。印無し。	18世紀前半
88	SN01-02 志田西山窯1BT 900606	皿	陶器。淡黄白色の精土。焼成良好。高台部無釉。見込みに蛇ノ目釉ハギ。高台内中央に「の」の字状のヘラ当て。見込みに呉須による崩れた山水文。	18世紀前半
89	UN01-01 内野山南窯 770315	碗	陶器。淡黄白色の精土。焼成良好。全釉。釉に貫入多い。高台に砂目積み痕4か所。	1600～30年代
90	UN01-02 内野山南窯 770315	碗	陶器。淡黄白色の精土。焼成良好。全釉。釉に貫入多い。高台に砂目積み痕4か所。	1600～30年代
91	UN01-03 内野山南窯 770315	皿	陶器。淡黄白色の精土。焼成良好。高台畳付のみ無釉。釉に貫入多い。高台畳付と見込みに砂目積み痕。	1600～30年代
92	UN01-04 内野山南窯 770315	皿	陶器。淡黄白色の精土。焼成良好。釉に細かい貫入多い。	1600～30年代
93	OK01-01 御経石窯 物原表採 8306	碗	陶器。灰色の精土。焼成良好。高台部無釉。釉に貫入多い。高台内中央に円刻あり。釉際に焦げが生じている。釉は緑色を帯びる。「清水」印。	1660～80年代
94	OK01-02 御経石窯 物原表採 8306	碗	陶器。灰色の精土。焼成良好。高台部無釉。釉に貫入多い。高台内中央に円刻あり。「清水」印。	1660～80年代
95	OK01-03 御経石窯 物原表採 8306	碗	陶器。灰色の精土。焼成良好。高台部無釉。釉に貫入多い。高台内中央に円刻あり。釉際に焦げが生じている。釉は緑色を帯びる。篆書体印。	1660～90年代
96	OK01-04 御経石窯 物原表採 8306	碗	陶器。淡黄白色の精土。焼成良好。高台部無釉。釉に貫入多い。高台内中央に円刻あり。「清水」印。	1660～80年代
97	OU01-01 大川内山小笠原宅 表採	皿	陶器。淡黄白色の精土。焼成良好。高台部無釉。釉に貫入多い。高台内中央に円刻あり。見込みに呉須による山水文を描き上に赤緑絵具で色絵の笹、土坡などを表す。「木下弥」印。	1660～90年代

表XIII-3 京町遺跡関連分析資料観察表(生産地遺跡出土資料)

4. 分析の方法

分析化学の進歩に伴って、微量分析が可能となってきた。陶磁器の分析を行うにあたって、その濃度(元素存在量、含有率)と分析に供する試料の量との関係は重要である。分析化学においては、試料量と濃度については次のように考えられている。

微量という言葉はやや曖昧であるが、①分析の対象となる物質の量のごく僅かである場合、②試料中の分析成分の濃度(元素存在量、含有率)が僅かである場合、の二通りの意味がある。①の試料量における分類では、その試料の量に関しては概略であるが、100mg以上を常量、10～100mgを半微量、10mg以下の少量を微量と呼ぶ。②の成分の濃度による分類は、一般的に、その存在量が1%以上を主成分、0.01～1%を副成分、0.01%以下を微量成分と定義されている。なお、およそ0.01%以下の含有率の場合を痕跡(trace)成分として指すこともある。なお、これらの成分の濃度の表し方として、百分率(percent,%)や百万分率(parts per million, ppm)が用いられている。これらは、一定質量中に含まれる成分の質量の割合を表す質量分率である。百分率と百万分率との関係は、 $10,000 \text{ ppm} = 1\%$ ($1 \text{ ppm} = 0.0001\%$)となる。

現在、微量成分元素の定量法の一つとして文化財科学の分野で用いられている機器中性子放射化分析(INAA: instrumental neutron activation analysis)は、固体試料中の超微量成分元素の多元素同時定量が可能であり、分析法として精度と正確さに優れているという特長を有する。しかし、原子炉の利用や放射線測定のための設備が必要であるという制限があることも事実である。機器中性子放射化分析は、原子炉内で試料に熱中性子照射し、生成した人工放射性同位元素(核種)が壊変する際に放出する γ 線の強度をエネルギーの関数として測定することにより、物質中に含まれる元素の定量を行う方法である。

本研究では、立教大学原子力研究所の閉鎖に伴い、原子炉等施設の利用が困難状況になり、誘導結合プラズマ(ICP: inductively coupled plasma)–発光分光分析(AES: atomic emission spectroscopic analysis)の導入を行った。

誘導結合プラズマ発光分光分析(ICP-AES)は、プラズマトーチに流したアルゴンガスに高周波の電力を加えると、自ら高温のプラズマ状態(プラズマ中心付近の温度は約6,000～8,000℃の高温)になり、試料溶液を霧状にして導入することにより、溶液中に存在する元素がプラズマトーチで過熱され、原子、または、イオン状態となり発光することを利用したものである。発光源にICPを用いて、元素の光を取り出し、この光を分光分析することにより定量分析を行なうものである。本方法は、励起温度が高温であるためにほとんど全ての元素を測定する事が可能である。測定分光器を波長の順に走査させ、発光線の検出により目的元素の定性ができ、その波長における発光強度を測定することにより定量が可能となる。

両者の分析に供した資料を以下に示す。()内は、表に示されたNo.である。アンダーラインで示したものは両者の分析が行われた陶磁器片資料(尾戸窯の5点)である。

◎機器中性子放射化分析に供した資料(39点)

○生産地遺跡(22点)

尾戸窯12点【(45) K-OD-01、(46)-02、(47)-03、(48)-04、(49)-05、(50)-06、
(51)-07、(52)-08、(53)-09、(54)-10、(55)-11、(56)-12】

御経石窯5点【(31) K-OK-01、(32)-02、(33)-03、(34)-04、(35)-05】

上多々良窯5点【(36) K-KT-01、(37)-02、(38)-03、(39)-04、(40)-05】

○消費地遺跡(17点)

小籠遺跡16点【(1) K-G-01、(2)-02、(3)-03、(4)-04、(5)-05、(6)-06、(7)-07、
(8)-08、(9)-09、(10)-10、(11)-11、(12)-12、(13)-13、(14)-14、
(15)-15、(16)-16】

土佐中村一条氏関連跡1点【(17) K-G-17】

◎誘導結合プラズマ発光分光分析に供した資料(38点)

○生産地遺跡(25点)

尾戸窯15点【(45) K-OD-01、(47)-03、(48)-04、(49)-05、(50)-06、
(57)-13、(58)-14、(59)-15、(60)-16、(61)-17、(62)-18、(63)-19、
(64)-20、(65)-21、(66)-22】

能茶山窯2点【(66) K-NU-01、(67)-02】

木原地蔵平窯3点【(41) K-KH-01、(42)-02、(43)-03】

江永古窯1点【(44) K-EN-01】

勅旨窯2点【(69) K-TY-01、(70)-02】

漆原B窯2点【(71) K-UB-01、(72)-02】

○消費地遺跡(13点)

田村遺跡群1点【(18) K-G-18】

丸の内三丁目遺跡10点【(19) K-MR-03、(20)-04、(21)-05、(22)-06、(23)-07、(24)-08、
(25)-09、(26)-10、(27)-11、(28)-12】

高知城伝下屋敷跡2点【(29) K-DN-01、(30)-02】

生産地推定の基準資料となる生産地遺跡出土陶磁器の識別・分類、消費地遺跡の特徴を見出すための当該遺跡出土陶磁器の分類、さらに、消費地遺跡出土陶磁器の生産地推定には定量された元素存在量を変量とするクラスター分析により検討した。近年、パーソナル・コンピュータの進歩により、たとえば、SPSSなどの市販のソフトウェアでも十分活用できるようになっている。しかし、クラスター分析での変数の選択には、元素存在量や定量における分析誤差の大きさなどを加味して吟味する必要がある。さらに研究の目的を考慮して、距離の計算や分類手法なども検討する必要がある。

5. 実験

本研究では、微量の試料量で、主成分元素から微量成分元素までの多元素の同時定量が可能な機器中性子放射化分析(INAA)と誘導結合プラズマ発光分光分析(ICP-AES)を用いて、前者

では諸種微量成分元素、後者では主成分元素を中心に、近世の生産地遺跡(窯跡)および消費地遺跡から出土する陶磁器胎土の定量分析を行なった。さらに、SPSS多変量解析プログラムを用いたクラスター分析により、尾戸窯製品の特徴について考察した。

(1) 機器中性子放射化分析

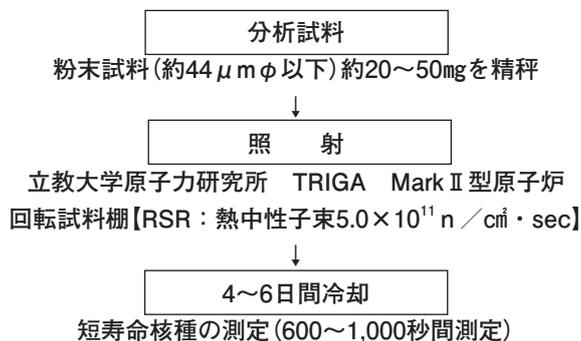
分析に供した陶磁器片資料は、高速ミニグラインダー(株式会社キソパワーツール製ミニルータ)にダイヤモンドを電着した先端ビットを用いて、極微量を削り粉体として回収し、分析に供した(約20~50mg程度)。

本研究に用いた機器中性子放射化分析のフローチャートを以下に示す。ここでは、照射条件、 γ (ガンマ)線の測定条件(冷却時間、計測時間)、諸種元素の定量に用いた核種とその半減期、測定した γ 線のエネルギーについて示した。本条件では、主成分元素であるナトリウム(Na)と鉄(Fe)、および微量成分元素であるルビジウム(Rb)、セシウム(Cs)、ランタン(La)、セリウム(Ce)、サマリウム(Sm)、ユウロピウム(Eu)、ルテチウム(Lu)、トリウム(Th)、ハフニウム(Hf)、コバルト(Co)、スカンジウム(Sc)の113元素の定量が可能であった。

熱中性子照射は、約1cm角のポリエチレン袋に二重に封入し、定量のための比較標準となる標準岩石とともに標準キャプセルに詰め込み、立教大学原子力研究所(神奈川県横須賀市所在：現在は原子炉の停止に伴い閉鎖された)のTRIGA Mark II原子炉の回転試料棚にて12時間断続照射(6時間×2日間)を行った。生成した放射性核種の γ 線照射は、高分解能ゲルマニウム半導体検出器-4096チャンネル波高分析装置を用いて行った。生成核種の半減期により、3回繰り返した。これは、定量される諸種元素の最適測定条件を考慮したためである。

諸種元素の定量は、同一キャプセルにて同時照射したアメリカ合衆国地質調査所より配布された標準岩石を標準とする比較法により行った。定量性の検討には、同じく同時照射した工業技術院地質調査所配布の標準岩石を用いた。

機器中性子放射化分析のフローチャート



元素	核種	半減期	定量に用いた γ 線のエネルギー (keV)			
Na	²⁴ Na	14.659 h	1,368	2,754		
La	¹⁴⁰ La	1.6780 d	487	1,596		
Sm	¹⁵³ Sm	1.946 d	103			

↓

1～2週間冷却

中寿命核種の測定(3,600～5,000秒間測定)

元素	核種	半減期	定量に用いたγ線のエネルギー (keV)			
La	¹⁴⁰ La	1.6780 d	487	1,596		
Sm	¹⁵³ Sm	1.946 d	103			
Lu	¹⁷⁷ Lu	6.71d	208			
Rb	⁸⁷ Rb	18.66d	1,077			
Th	²³³ Pa	27.0 d	312			
Cr	⁵¹ Cr	27.704d	320			
Ce	¹⁴¹ Ce	32.50d	145			
Fe	⁵⁹ Fe	44.496d	1,099	1,292		
Sc	⁴⁶ Sc	83.83d	889	1,121		



1～2ヶ月間冷却

長寿命核種の測定(7,200～10,000秒間測定)

元素	核種	半減期	定量に用いたγ線のエネルギー (keV)			
Rb	⁸⁷ Rb	18.66d	1,077			
Th	²³³ Pa	27.0 d	312			
Lu	¹⁷⁷ Lu	6.71d	208			
Cr	⁵¹ Cr	27.704d	320			
Ce	¹⁴¹ Ce	32.50d	145			
Hf	¹⁸¹ Hf	42.39 d	133	482		
Fe	⁵⁹ Fe	44.496d	1,099	1,292		
Sc	⁴⁶ Sc	83.83d	889	1,121		
Cs	¹³⁴ Cs	2.062y	606	796		
Co	⁶⁰ Co	5.271y	1,173	1,333		
Eu	¹⁵² Eu	13.33y	122	245	779	1,408

(2) 誘導結合プラズマ発光分光分析

I C P 発光分光分析は原子スペクトル分析の中の原子発光分析である。原子は原子核とそれを取り巻く軌道電子からなっている。軌道電子には原子核の近くと遠くを回るものがあり、近くを回るものを内殻電子、遠くを回るものを外殻電子とする。このうち、最外殻電子は量子化されたエネルギー準位をもっており、この準位間の遷移が起こるときに、光の吸収、あるいは光の放出が起こる。エネルギー準位は原子によって特有であることから、スペクトル線の波長もそれぞれ固有な値を持つ。原子スペクトルの波長や強度を測定することにより、元素個々の同定(定性)や定量分析が可能となる。このような方法をスペクトル分析といい、原子蛍光分析、原子吸光分析、原子発光分析の3種類に分類され、I C P 発光分光分析は原子発光分析に属する。

本研究に際し、他元素の発光線が測定元素に影響を与えないことを確認し、感度の優れた波長を選出することが重要である。測定に使用したI C P 発光分光分析装置はセイコー電子工業社製SPS1200Aであり、今回の分析に用いた測定条件を次に示す。

ICP発光分析装置(セイコー電子工業社製 SPS1200A)の測定条件

項目	摘要	
出力	1.32kw	
測光高さ	15.0mm	
アルゴンガス流量	プラズマガス	161 ℓ / m
	補助ガス	0.41 ℓ / m
	キャリアーガス	3.5kg / cm ³
2次アルゴンガス圧力	3.5~4.0kg / cm ²	
走査速度	40mm / 分	
信号積分方法	1.0 秒、3回	

本研究に用いたICP発光分析装置は、溶液試料をトーチ内に噴霧して測定するものであるため、前処理として、固体試料である陶磁器片を胎土のみの粉末試料として回収(前述の機器中性子放射化分析における資料調製と同じ方法)したのちに、液体試料化を行った。試料溶液の調製は、テフロン密封容器を用いた王水-フッ化水素分解と蒸発乾固法を用いた。

標準溶液および定量性の検討には、工業技術院地質調査所(GSJ: Geological Survey of Japan)配布のJB-1a、JG-1aを用いた。テフロン製の容器に試料を約20~30mg精秤し、王水(塩酸:硝酸=3:1)を0.5ml、フッ化水素酸を3ml加えた後、ステンレス・スチール製の密封分解容器に入れ、電気乾燥器 110℃で30~40分加熱した。室温まで冷却し、テフロン製の容器から約20ml程度の純水でテフロンビーカーに移し、ホットプレート上で蒸発乾固を行った。蒸発乾固後、硝酸3.5mlに、純水を加え、メスフラスコを用いて100ml定容とした。なお、本法ではテフロン密封容器で分解したのちに蒸発乾固するためにSiの定量は行えない。

JB-1a、JG-1aを用いて測定目的の10元素[主成分元素であるTi、Al、Fe、Mn、Mg、Ca、Na、K、微量成分元素であるSr、Ba]の主要な3波長のそれぞれの波長ごとに、前述の方法により分解して得られた試料溶液を用いて測定し、干渉等の妨害を受けず、かつ比較的感度のよい波長の検討を行った。本研究で選択した波長と検出限界は以下の通りである。

元 素	波長(nm)	検出限界(mg/ml)	
主成分元素	Mn(マンガン)	257.610	0.3
	Fe(鉄)	259.940	0.8
	Mg(マグネシウム)	279.553	0.10
	Ti(チタン)	334.941	0.8
	Ca(カルシウム)	393.366	0.10
	Al(アルミニウム)	396.152	5
	Na(ナトリウム)	589.592	23
	K(カリウム)	766.490	-
微量成分元素	Sr(ストロンチウム)	407.771	0.10
	Ba(バリウム)	455.403	0.2

今回の測定では多元素逐次(シーケンシャル)分析を行った。多元素逐次分析は、試料中に含まれる目的の元素を分析波長の短いものから順次測定していくものである。あらかじめ用いる元素の既知濃度の標準試料から検量線を作成し、発光強度との比較により試料中の元素濃度を測定した。定量分析用の標準試料にはJB-1a、JG-1aを用い、試料の溶液化と同様の方法により分解し標準溶液を作製した。1試料につき3回測定し、その平均値を定量値とした。

(3) 多変量解析—クラスター分析

クラスター分析とは分類法の一つである。分類するという事は、科学的な研究において基礎となるものである。クラスター分析は、固体、物体および変量などの集団の中で類似性のあるもの同士をグループを見出す事を目的とする。それによりデータの探求・要約、仮説の生成などが可能となってくる。また、分析結果から分けられたグループのさらなる細分化、または、大きな集合にまとめることもでき、このように分類を積み重ねていくと、グループを階層的な構造に導く事ができる。陶磁器の識別、あるいは類似性を知るためには、測定したデータをもとにしたクラスター分析が有効である。

本研究では、SPSS Base 11.5J for Windows パッケージ・プログラムを用い、階層クラスター分析による分類を行った。Z得点で値の標準化、測定方法として平方ユークリッド距離、クラスター化の方法にはWard法を中心に、最長距離法など他の方法も用いて、総合的に検討した。

6. 分析結果と分類

(1) 機器中性子放射化分析による定量と分類

機器中性子放射化分析に供した39資料の定量結果をあとで述べるクラスター分析による分類結果とともに表XIII-4に示す。生産地遺跡から出土したものは、尾戸窯(K-OD)12点、御経石窯(K-OK)5点、上多々良窯(K-KT)5点、計22点、消費地遺跡より出土したものは、小籠遺跡(K-G-01~16)16点、土佐中村一条氏関連跡(K-G-17)1点、計17点である。元素存在量の単位は、NaとFeが%で、それ以外の元素がppmである。

39資料のクラスター分析の結果の一例を樹形図としてXIII-1図に示す。ここで示したものは、Ward法による分類結果である。さらに、その分類結果と諸種微量成分元素存在量との関係を表XIII-5に示す。

クラスター分析の結果から、39資料は大きく3群に分類され、さらに、2ないし3群に細分類された。生産地資料では、尾戸窯(K-OD)12点は、3群に分散されA群には11と08、B群には9資料で、02、05の2資料、01、03、04、06の4資料、07、09、10の3資料の3グループに細分類され、C群には12の資料が分類された。御経石窯(K-OK)5点では、AとCの二群に分類され、C群が主体となり02~05の4資料であり、01の1資料がA群に分類された。上多々良窯(K-KT)5点はいずれもC群にまとまった。消費地の資料は、AとCの二群のみに分類され、G-08、10の2資料のみがC群で、大部分の資料がA群に帰属されている。

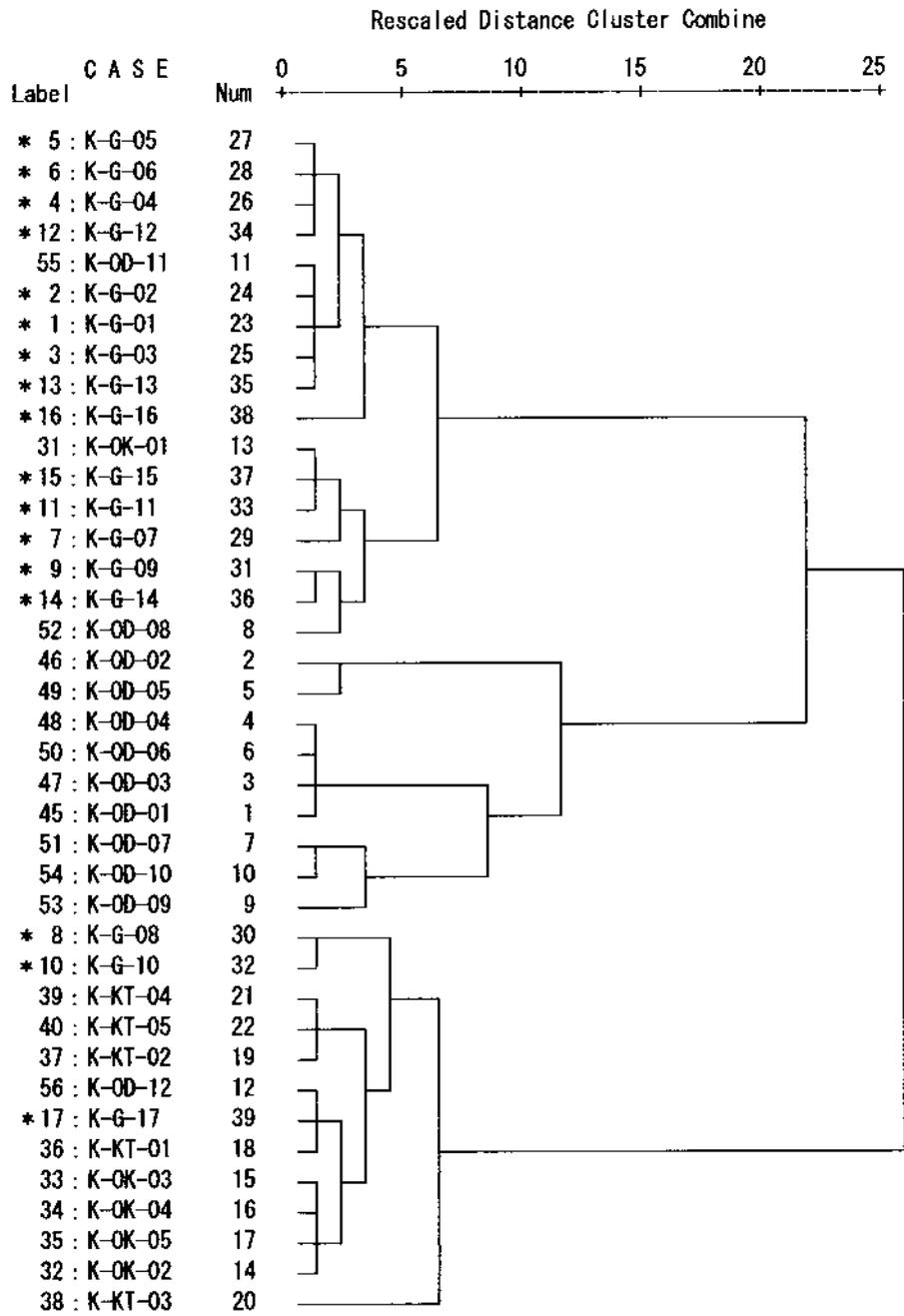
資料番号	Na(%)	Fe(%)	Rb(ppm)	Cs(ppm)	La(ppm)	Ce(ppm)	Sm(ppm)	Eu(ppm)	Lu(ppm)	Th(ppm)	Hf(ppm)	Co(ppm)	Sc(ppm)	分類結果
OD-01	0.13	1.03	200	13	53	81	9.2	1.7	0.5	19	6.8	5.9	14	B- 2
OD-02	0.29	0.58	210	18	21	50	5.7	0.63	1.0	27	6.3	2.1	12	B- 1
OD-03	0.15	1.38	180	13	59	110	10	1.7	0.5	21	8.2	5.8	15	B- 2
OD-04	0.14	1.32	190	15	56	100	7.9	1.4	0.5	22	7.4	3.5	16	B- 2
OD-05	0.65	0.83	160	16	28	59	5.9	0.75	0.9	23	9.5	3.4	12	B- 1
OD-06	0.09	1.25	190	11	55	94	8.6	1.5	0.5	21	8.0	3.9	14	B- 2
OD-07	0.08	1.76	110	7.6	40	75	6.4	2.3	0.5	14	6.8	11	17	B- 3
OD-08	0.35	1.63	110	8.8	36	62	4.9	0.78	0.3	13	5.6	2.6	8.8	A- 2
OD-09	0.25	3.55	160	12	46	86	7.1	1.3	0.5	22	7.0	13	15	B- 3
OD-10	0.26	2.33	130	7.6	36	63	5.0	1.2	0.5	13	7.9	17	15	B- 3
OD-11	0.63	0.68	130	4.1	46	76	6.3	0.99	0.4	18	4.7	1.1	6.7	A- 1
OD-12	0.20	1.33	80	7.4	56	82	10	2.3	0.6	15	5.7	2.8	15	C- 1
OK-01	0.60	1.18	100	8.5	44	74	9.3	1.9	0.6	14	4.5	3.3	13	A- 2
OK-02	0.15	0.97	60	3.5	49	92	8.3	1.7	0.5	10	7.0	4.4	21	C- 1
OK-03	0.28	1.11	80	6.7	54	92	11	2.3	0.6	11	6.0	7.0	18	C- 1
OK-04	0.21	1.03	100	7.3	55	95	10	2.3	0.6	13	6.5	6.5	18	C- 1
OK-05	0.29	1.26	80	6.8	58	98	12	2.4	0.7	12	6.3	6.9	19	C- 1
KT-01	0.48	0.83	100	4.2	55	83	10	2.0	0.6	14	6.0	3.7	16	C- 1
KT-02	0.44	0.71	80	4.1	71	100	11	2.1	0.5	17	9.9	3.8	16	C- 1
KT-03	0.24	1.00	90	4.3	81	120	18	4.1	1.0	16	7.6	4.8	17	C- 2
KT-04	0.22	0.75	90	3.0	71	100	12	2.4	0.7	16	7.3	4.2	16	C- 1
KT-05	0.32	0.72	120	3.8	62	93	11	1.9	0.7	17	6.7	3.5	17	C- 1
G-01	0.53	0.88	110	4.2	47	79	6.7	1.3	0.5	16	4.5	3.8	10	A- 1
G-02	0.47	0.83	110	4.2	47	73	6.1	1.2	0.5	18	5.1	2.5	6.3	A- 1
G-03	0.57	0.60	60	4.2	45	77	6.6	1.3	0.4	16	4.2	2.1	8.1	A- 1
G-04	0.17	0.59	80	8.9	49	82	6.7	1.1	0.4	21	4.6	0.9	5.0	A- 1
G-05	0.24	0.57	80	6.8	51	80	7.3	1.6	0.4	18	5.2	2.0	8.8	A- 1
G-06	0.26	0.66	90	6.7	48	83	7.4	1.5	0.4	18	4.9	1.5	9.5	A- 1
G-07	0.35	0.83	70	4.9	37	61	7.2	1.7	0.4	10	4.3	3.9	16	A- 2
G-08	1.27	0.84	110	6.0	67	94	13	2.8	0.6	15	6.8	1.7	17	C- 1
G-09	1.06	1.16	150	8.1	35	68	4.9	1.0	0.3	12	6.6	4.1	12	A- 2
G-10	1.03	0.86	130	5.7	57	91	11	2.3	0.6	15	6.4	2.6	17	C- 1
G-11	0.74	1.24	140	10	37	69	7.5	1.9	0.5	11	5.4	2.9	19	A- 2
G-12	0.23	0.66	100	8.3	46	71	6.3	1.3	0.5	18	4.7	1.5	6.8	A- 1
G-13	0.83	0.66	90	7.7	41	70	6.2	1.4	0.4	16	4.6	0.9	8.6	A- 1
G-14	0.75	0.87	170	9.4	39	71	5.8	1.1	0.4	11	6.8	3.3	11	A- 2
G-15	0.42	1.15	110	8.5	47	74	7.3	1.6	0.5	17	4.8	1.6	11	A- 2
G-16	0.12	0.62	120	3.4	46	48	6.8	0.34	0.5	13	1.6	1.4	10	A- 1
G-17	0.36	1.33	110	6.5	58	93	10	2.1	0.5	15	6.8	1.9	14	C- 1

表Ⅻ-4 機器中性子放射化分析による諸種微量成分元素の定量

分類	資料番号	Na(%)	Fe(%)	Rb(ppm)	Cs(ppm)	La(ppm)	Ce(ppm)	Sm(ppm)	Eu(ppm)	Lu(ppm)	Th(ppm)	Hf(ppm)	Co(ppm)	Sc(ppm)
A- 1	G-05	0.24	0.57	80	6.8	51	80	7.3	1.6	0.4	18	5.2	2	8.8
A- 1	G-06	0.26	0.66	90	6.7	48	83	7.4	1.5	0.4	18	4.9	1.5	9.5
A- 1	G-04	0.17	0.59	80	8.9	49	82	6.7	1.1	0.4	21	4.6	0.9	5.0
A- 1	G-12	0.23	0.66	100	8.3	46	71	6.3	1.3	0.5	18	4.7	1.5	6.8
A- 1	OD-11	0.63	0.68	130	4.1	46	76	6.3	0.99	0.4	18	4.7	1.1	6.7
A- 1	G-02	0.47	0.83	110	4.2	47	73	6.1	1.2	0.5	18	5.1	2.5	6.3
A- 1	G-01	0.53	0.88	110	4.2	47	79	6.7	1.3	0.5	16	4.5	3.8	10
A- 1	G-03	0.57	0.60	60	4.2	45	77	6.6	1.3	0.4	16	4.2	2.1	8.1
A- 1	G-13	0.83	0.66	90	7.7	41	70	6.2	1.4	0.4	16	4.6	0.9	8.6
A- 1	G-16	0.12	0.62	120	3.4	46	48	6.8	0.34	0.5	13	1.6	1.4	10
A- 2	OK-01	0.60	1.18	100	8.5	44	74	9.3	1.9	0.6	14	4.5	3.3	13
A- 2	G-15	0.42	1.15	110	8.5	47	74	7.3	1.6	0.5	17	4.8	1.6	11
A- 2	G-11	0.74	1.24	140	10	37	69	7.5	1.9	0.5	11	5.4	2.9	19
A- 2	G-07	0.35	0.83	70	4.9	37	61	7.2	1.7	0.4	10	4.3	3.9	16
A- 2	G-09	1.06	1.16	150	8.1	35	68	4.9	1.0	0.3	12	6.6	4.1	12
A- 2	G-14	0.75	0.87	170	9.4	39	71	5.8	1.1	0.4	11	6.8	3.3	11
A- 2	OD-08	0.35	1.63	110	8.8	36	62	4.9	0.78	0.3	13	5.6	2.6	8.8
B- 1	OD-02	0.29	0.58	210	18	21	50	5.7	0.63	1.0	27	6.3	2.1	12
B- 1	OD-05	0.65	0.83	160	16	28	59	5.9	0.75	0.9	23	9.5	3.4	12
B- 2	OD-04	0.14	1.32	190	15	56	100	7.9	1.4	0.5	22	7.4	3.5	16
B- 2	OD-06	0.09	1.25	190	11	55	94	8.6	1.5	0.5	21	8.0	3.9	14
B- 2	OD-03	0.15	1.38	180	13	59	110	10	1.7	0.5	21	8.2	5.8	15
B- 2	OD-01	0.13	1.03	200	13	53	81	9.2	1.7	0.5	19	6.8	5.9	14
B- 3	OD-07	0.08	1.76	110	7.6	40	75	6.4	2.3	0.5	14	6.8	11	17
B- 3	OD-10	0.26	2.33	130	7.6	36	63	5.0	1.2	0.5	13	7.9	17	15
B- 3	OD-09	0.25	3.55	160	12	46	86	7.1	1.3	0.5	22	7.0	13	15
C- 1	G-08	1.27	0.84	110	6.0	67	94	13	2.8	0.6	15	6.8	1.7	17
C- 1	G-10	1.03	0.86	130	5.7	57	91	11	2.3	0.6	15	6.4	2.6	17
C- 1	KT-04	0.22	0.75	90	3.0	71	100	12	2.4	0.7	16	7.3	4.2	16
C- 1	KT-05	0.32	0.72	120	3.8	62	93	11	1.9	0.7	17	6.7	3.5	17
C- 1	KT-02	0.44	0.71	80	4.1	71	100	11	2.1	0.5	17	9.9	3.8	16
C- 1	OD-12	0.20	1.33	80	7.4	56	82	10	2.3	0.6	15	5.7	2.8	15
C- 1	G-17	0.36	1.33	110	6.5	58	93	10	2.1	0.5	15	6.8	1.9	14
C- 1	KT-01	0.48	0.83	100	4.2	55	83	10	2.0	0.6	14	6.0	3.7	16
C- 1	OK-03	0.28	1.11	80	6.7	54	92	11	2.3	0.6	11	6.0	7.0	18
C- 1	OK-04	0.21	1.03	100	7.3	55	95	10	2.3	0.6	13	6.5	6.5	18
C- 1	OK-05	0.29	1.26	80	6.8	58	98	12	2.4	0.7	12	6.3	6.9	19
C- 1	OK-02	0.15	0.97	60	3.5	49	92	8.3	1.7	0.5	10	7.0	4.4	21
C- 2	KT-03	0.24	1.00	90	4.3	81	120	18	4.1	1.0	16	7.6	4.8	17

表Ⅻ-5 クラスター分析(INAAデータ：Ward法)による分類結果と諸種微量成分元素存在量

Dendrogram using Ward Method



XIII-1 図 クラスタ分析による陶磁器の分類(機器中性子放射化分析によるデータ: Ward法)

(2) ICP発光分光分析による定量と分類

ICP発光分光分析に供した38資料の定量結果を後述するクラスター分析の分類結果とともに表XIII-6に示す。なお、主成分元素はケイ酸塩岩石学の慣例に従って酸化物で表記している。

生産地遺跡から出土したものは、尾戸窯(K-OD：このうち01、03、04、05、06の5資料は機器中性子放射化分析も行った)15点、能茶山窯(K-NU)2点、木原地蔵平窯(K-KH)3点、江永古窯(K-EN)1点、勅旨窯(K-TY)2点、漆原B窯(K-UB)2点、計25点、消費地遺跡のものは、小籠遺跡(K-G)1点、丸の内三丁目遺跡(K-MR)10点、高知城伝下屋敷跡(K-DN)2点、計13点である。

ICP発光分光分析による定量値による38資料のクラスター分析の結果の一例を樹形図としてXIII-2図に示す。先の機器中性子放射化分析と同様にここではWard法による分類結果を示した。さらに、その分類結果と諸種主成分元素存在量との関係を表XIII-7に示す。

クラスター分析による分類では、大きく4群に分類されている。生産地に関しては、尾戸窯の4資料(K-OD-01、03、04、06)のIグループ、尾戸窯、能茶山窯、木原地蔵平窯、江永古窯、からなるIIグループ、尾戸窯(K-OD-14)のIIIグループ、尾戸窯2点、勅旨窯2点、漆原B窯2点からなるIVグループである。消費地資料については、小籠遺跡(K-G)1点がIIグループ、丸の内三丁目遺跡(K-MR)10点のうちMR-10を除く9点がIグループであり、MR-10が尾戸窯(K-OD-14)のIIIグループに帰属され、高知城伝下屋敷跡2点は尾戸窯2点、勅旨窯2点、漆原B窯2点からなるIVグループに分類された。

最後に、機器中性子放射化分析とICP発光分光分析の両者の分析を行った尾戸窯(K-OD-01、03、04、05、06)の5資料について比較すると、01、03、04、06のグループと05の2群に分かれている。01、03、04、06のグループは機器中性子放射化分析ではB-2、ICP発光分光分析ではIグループ、05は前者ではB-1、後者ではIVグループに分類され、両者の結果は整合性をもっているものと推察される。

(二宮)

XIII 放射化分析による近世陶磁器の生産地推定

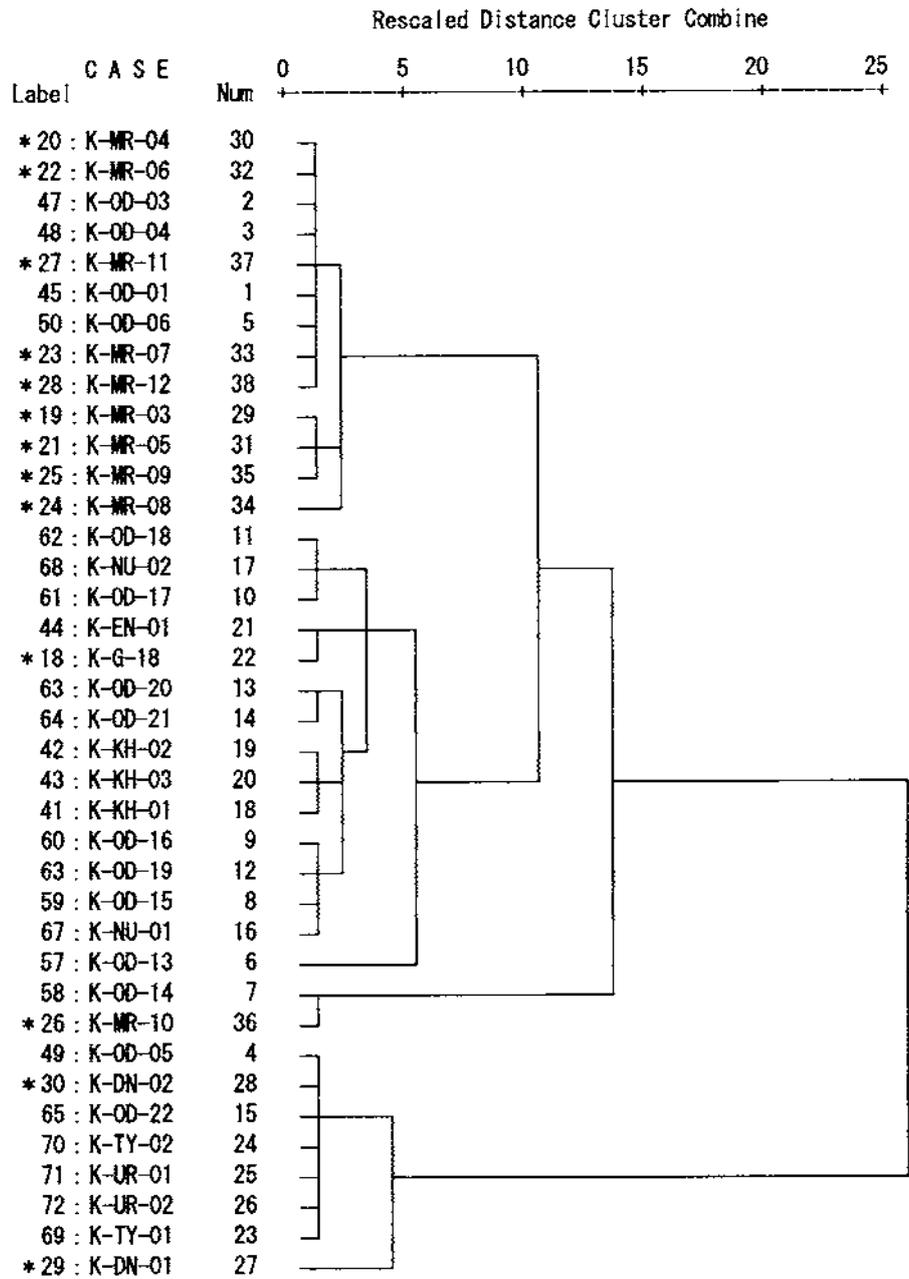
資料番号	TiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	MnO (%)	MgO (%)	CaO (%)	Na ₂ O (%)	K ₂ O (%)	Sr (ppm)	Ba (ppm)	分類結果
OD-01	0.85	22.1	1.84	0.014	0.90	0.13	0.21	3.83	52	520	I
OD-03	0.89	23.0	2.62	0.020	0.82	0.17	0.22	3.79	49	500	I
OD-04	0.90	24.7	2.24	0.013	0.83	0.08	0.19	3.86	39	400	I
OD-05	0.61	29.1	1.39	0.012	0.29	0.50	0.81	3.26	55	400	IV - 1
OD-06	0.75	21.2	2.07	0.012	0.81	0.05	0.13	3.74	45	540	I
OD-13	0.42	17.3	1.67	0.032	0.40	0.47	0.70	2.77	100	410	II - 2
OD-14	0.38	18.6	1.01	0.011	0.35	0.19	0.86	3.64	120	800	III
OD-15	0.77	21.5	2.40	0.020	0.69	0.11	0.16	2.16	31	270	II - 1
OD-16	0.68	18.0	1.71	0.020	0.73	0.17	0.17	3.03	49	460	II - 1
OD-17	0.76	21.9	2.35	0.019	0.86	0.55	0.38	3.82	55	480	II - 1
OD-18	0.91	21.3	2.03	0.014	0.72	0.55	0.17	2.40	37	340	II - 1
OD-19	0.70	21.9	1.97	0.019	0.77	0.20	0.14	2.67	54	400	II - 1
OD-20	0.76	22.2	1.55	0.009	0.54	0.09	0.07	1.45	19	170	II - 1
OD-21	0.66	17.6	1.19	0.006	0.52	0.12	0.16	2.44	36	340	II - 1
OD-22	0.43	27.9	1.30	0.012	0.24	0.38	1.28	3.03	45	380	IV - 1
NU-01	0.75	21.5	2.01	0.013	0.71	0.13	0.11	2.68	32	350	II - 1
NU-02	0.54	17.5	1.97	0.014	0.65	0.46	0.41	2.89	32	450	II - 1
KH-01	0.62	18.3	1.82	0.010	0.54	0.12	0.49	2.81	45	380	II - 1
KH-02	0.73	20.3	2.31	0.011	0.61	0.18	0.50	2.84	52	370	II - 1
KH-03	0.64	18.2	2.55	0.010	0.47	0.20	0.41	2.64	52	370	II - 1
EN-01	0.80	23.7	3.31	0.010	0.47	0.14	0.46	2.59	73	330	II - 1
G-18	0.64	20.4	2.35	0.017	0.46	0.22	0.78	3.26	98	380	II - 1
TY-01	0.52	27.9	1.65	0.013	0.27	0.67	1.67	3.32	74	370	IV - 1
TY-02	0.42	28.2	1.83	0.011	0.21	0.40	1.38	3.65	46	350	IV - 1
UR-01	0.37	30.3	1.35	0.014	0.24	0.47	1.58	3.44	41	260	IV - 1
UR-02	0.38	30.3	1.92	0.011	0.28	0.58	1.77	3.22	51	280	IV - 1
DN-01	0.92	31.9	0.59	0.003	0.25	0.17	0.97	2.16	83	320	IV - 2
DN-02	0.43	28.5	1.15	0.008	0.26	0.41	1.03	4.12	51	440	IV - 1
MR-03	0.68	21.0	2.38	0.020	0.68	0.17	0.23	4.02	68	600	I
MR-04	0.79	22.5	2.02	0.022	0.85	0.18	0.27	3.72	50	400	I
MR-05	0.73	22.4	2.47	0.023	0.71	0.20	0.28	4.19	69	580	I
MR-06	0.81	23.0	2.14	0.023	0.89	0.14	0.30	3.97	49	460	I
MR-07	0.97	25.7	2.28	0.015	0.99	0.13	0.15	4.60	47	390	I
MR-08	0.84	23.8	1.66	0.036	0.82	0.18	0.27	4.14	54	500	I
MR-09	0.70	20.9	1.73	0.013	0.75	0.18	0.26	4.70	68	570	I
MR-10	0.42	17.5	1.21	0.012	0.55	0.10	0.33	5.15	120	1050	III
MR-11	0.88	23.3	2.10	0.017	0.83	0.11	0.21	3.80	43	350	I
MR-12	0.95	26.0	1.95	0.013	1.06	0.12	0.26	4.58	53	510	I

表XIII-6 ICP発光分光分析による諸種主成分元素の定量

分類	資料番号	TiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	MnO (%)	MgO (%)	CaO (%)	Na ₂ O (%)	K ₂ O (%)	Sr (ppm)	Ba (ppm)
I	MR-04	0.79	22.5	2.02	0.022	0.85	0.18	0.27	3.72	50	400
I	MR-06	0.81	23.0	2.14	0.023	0.89	0.14	0.30	3.97	49	460
I	OD-03	0.89	23.0	2.62	0.020	0.82	0.17	0.22	3.79	49	500
I	OD-04	0.90	24.7	2.24	0.013	0.83	0.08	0.19	3.86	39	400
I	MR-11	0.88	23.3	2.10	0.017	0.83	0.11	0.21	3.80	43	350
I	OD-01	0.85	22.1	1.84	0.014	0.90	0.13	0.21	3.83	52	520
I	OD-06	0.75	21.2	2.07	0.012	0.81	0.05	0.13	3.74	45	540
I	MR-07	0.97	25.7	2.28	0.015	0.99	0.13	0.15	4.60	47	390
I	MR-12	0.95	26.0	1.95	0.013	1.06	0.12	0.26	4.58	53	510
I	MR-03	0.68	21.0	2.38	0.020	0.68	0.17	0.23	4.02	68	600
I	MR-05	0.73	22.4	2.47	0.023	0.71	0.20	0.28	4.19	69	580
I	MR-09	0.70	20.9	1.73	0.013	0.75	0.18	0.26	4.70	68	570
I	MR-08	0.84	23.8	1.66	0.036	0.82	0.18	0.27	4.14	54	500
II - 1	OD-18	0.91	21.3	2.03	0.014	0.72	0.55	0.17	2.40	37	340
II - 1	NU-02	0.54	17.5	1.97	0.014	0.65	0.46	0.41	2.89	32	450
II - 1	OD-17	0.76	21.9	2.35	0.019	0.86	0.55	0.38	3.82	55	480
II - 1	EN-01	0.80	23.7	3.31	0.010	0.47	0.14	0.46	2.59	73	330
II - 1	G-18	0.64	20.4	2.35	0.017	0.46	0.22	0.78	3.26	98	380
II - 1	OD-20	0.76	22.2	1.55	0.009	0.54	0.09	0.07	1.45	19	170
II - 1	OD-21	0.66	17.6	1.19	0.006	0.52	0.12	0.16	2.44	36	340
II - 1	KH-02	0.73	20.3	2.31	0.011	0.61	0.18	0.50	2.84	52	370
II - 1	KH-03	0.64	18.2	2.55	0.010	0.47	0.20	0.41	2.64	52	370
II - 1	KH-01	0.62	18.3	1.82	0.010	0.54	0.12	0.49	2.81	45	380
II - 1	OD-16	0.68	18.0	1.71	0.020	0.73	0.17	0.17	3.03	49	460
II - 1	OD-19	0.70	21.9	1.97	0.019	0.77	0.20	0.14	2.67	54	400
II - 1	OD-15	0.77	21.5	2.40	0.020	0.69	0.11	0.16	2.16	31	270
II - 1	NU-01	0.75	21.5	2.01	0.013	0.71	0.13	0.11	2.68	32	350
II - 2	OD-13	0.42	17.3	1.67	0.032	0.40	0.47	0.70	2.77	100	410
III	OD-14	0.38	18.6	1.01	0.011	0.35	0.19	0.86	3.64	120	800
III	MR-10	0.42	17.5	1.21	0.012	0.55	0.10	0.33	5.15	120	1050
IV - 1	OD-05	0.61	29.1	1.39	0.012	0.29	0.50	0.81	3.26	55	400
IV - 1	DN-02	0.43	28.5	1.15	0.008	0.26	0.41	1.03	4.12	51	440
IV - 1	OD-22	0.43	27.9	1.30	0.012	0.24	0.38	1.28	3.03	45	380
IV - 1	TY-02	0.42	28.2	1.83	0.011	0.21	0.40	1.38	3.65	46	350
IV - 1	UR-01	0.37	30.3	1.35	0.014	0.24	0.47	1.58	3.44	41	260
IV - 1	UR-02	0.38	30.3	1.92	0.011	0.28	0.58	1.77	3.22	51	280
IV - 1	TY-01	0.52	27.9	1.65	0.013	0.27	0.67	1.67	3.32	74	370
IV - 2	DN-01	0.92	31.9	0.59	0.003	0.25	0.17	0.97	2.16	83	320

表XIII-7 クラスタ分析(ICP発光分光分析:Ward法)による分類結果と諸種主成分元素組成

Dendrogram using Ward Method



XIII-2図 クラスター分析による陶磁器の分類 (ICP-発光分光分析によるデータ : Ward法)

7. 分析結果からみた陶磁器の生産地推定

各資料の定量結果、およびクラスター分析の分類結果は、二宮氏の論考の通りである。これを受け、以下では各生産地資料の分類と陶磁器の生産地推定について若干の考察を加えておきたい。

また、今回の分類結果を検討するに際しては、二宮氏により、北九州市京町遺跡関連の生産地遺跡資料分析データ(「放射化分析による京町遺跡出土陶磁器の生産地推定」二宮他1994)を加えてクラスター分析が行われているので、それも参照されたい。ここで加えられたものは、鍋島藩窯(NB01-01~14)、御経石窯(OK01-01~04)、志田西山窯(SN01-01~02)、内野山南窯跡(UN01-01~04)出土資料、大川内町小笠原宅表採資料(OU01-01)、計25点であり、その定量結果は表XIII-8に、また今回資料を合わせての計64資料のクラスター分析結果はXIII-3図に示している。

(1) 生産地遺跡出土資料の分類と尾戸窯跡出土地推定資料の検討

① 機器中性子放射化分析の結果と分類

まず、機器中性子放射化分析に供した39資料のクラスター分析による分類結果(XIII-1図)によれば、生産地遺跡である尾戸窯、御経石窯、上多々良窯は、大きくA~C群の3グループに分類されるということである。ここでは、肥前の御経石窯、上多々良窯はA群C群の2系統に分かれ、肥前の胎土には複数系統のものが含まれることが分かる。また、尾戸窯のK-OD-01・03・04・06とK-OD-09はそれぞれB-2群とB-3群に帰属し、肥前資料とは独立したグループを形成している。

一方、生産地推定資料であった灰釉丸碗(K-OD-11)と水入れ(K-OD-08)はA-1群とA-2群に、灰釉丸碗(K-OD-12)はC-1群に属し、これらが尾戸窯以外の製品の混入であった可能性が考えられる。また、B-1群に属するK-OD-05は、並行して行われたICP発光分光分析の結果では京・信楽系の製品と同じグループに帰属していることから、B-1群の灯明皿(K-OD-05)と色絵急須(K-OD-02)がともに京・信楽系陶器など、尾戸窯以外の製品であった可能性も否定できない。天目形碗(K-OD-07)と鉢(K-OD-10)は尾戸窯のB-3群に帰属し、尾戸窯産の可能性が考えられる。

次に、64資料の分類結果、XIII-3図によれば、各資料は大きく1~4群の4グループに分かれ、生産地資料では、鍋島藩窯(NB01-13・14)、御経石窯(OK01-02・03・04、K-OK-01)、上多々良窯(K-KT-01)、内野山南窯跡(UN01-01~04)、尾戸窯(K-OD-07・08・10・11)が1群、鍋島藩窯(NB01-01~07・09・11・12)と大川内町小笠原宅表採資料(OU01-01)が2群、尾戸窯(K-OD-01~06・09)が3群、鍋島藩窯(NB01-08・10)、御経石窯(OK01-01、K-OK-02~05)、上多々良窯(K-KT-02~05)、志田西山窯(SN01-01~02)、尾戸窯(K-OD-12)が4群に分類されている。先のXIII-1図と同様にここでも、肥前の資料は複数のグループに分かれ、尾戸窯のK-OD-01・03・04・06・09はこれらと異なるグループを形成して独立している。

生産地推定資料では、樹形図XIII-1図で尾戸窯のグループからやや離れたK-OD-02・05がここでも別グループを形成している。またK-OD-08・11・12も肥前のグループに帰属し、前図と同様の結果である。ただし、XIII-1図で尾戸窯のグループに帰属したK-OD-07・10はここでは肥前のグループに分類されており、位置付けがし難い。

② I C P 発光分光分析の結果と分類

次に、I C P 発光分光分析に供した 38 資料のクラスター分析の結果、表 XIII-6 では、生産地資料では尾戸窯が I・II 群の 2 グループに分かれている。ただし、K-OD-01～06 が独立して I 群を形成しているのに対し、II 群では、尾戸窯(K-OD-15～21)、能茶山窯(K-NU-01・02)と肥前の木原地蔵平窯、江永古窯の資料が同一グループに帰属しており、肥前と尾戸能茶山窯、両者間での胎土組成の近似性と生産地推定の難しさが窺われる。信楽の勅旨窯、漆原 B 窯は IV 群に分類され、肥前、尾戸、能茶山窯とは独立する。

生産地推定資料である灯明皿(K-OD-05)と小碗(K-OD-22)は信楽の III 群に属しており、京・信楽系の製品であろう。灰釉丸碗(K-OD-13・14)は II-2・III 群に属し、他と独立していることから、肥前など尾戸窯以外の製品の可能性が考えられる。

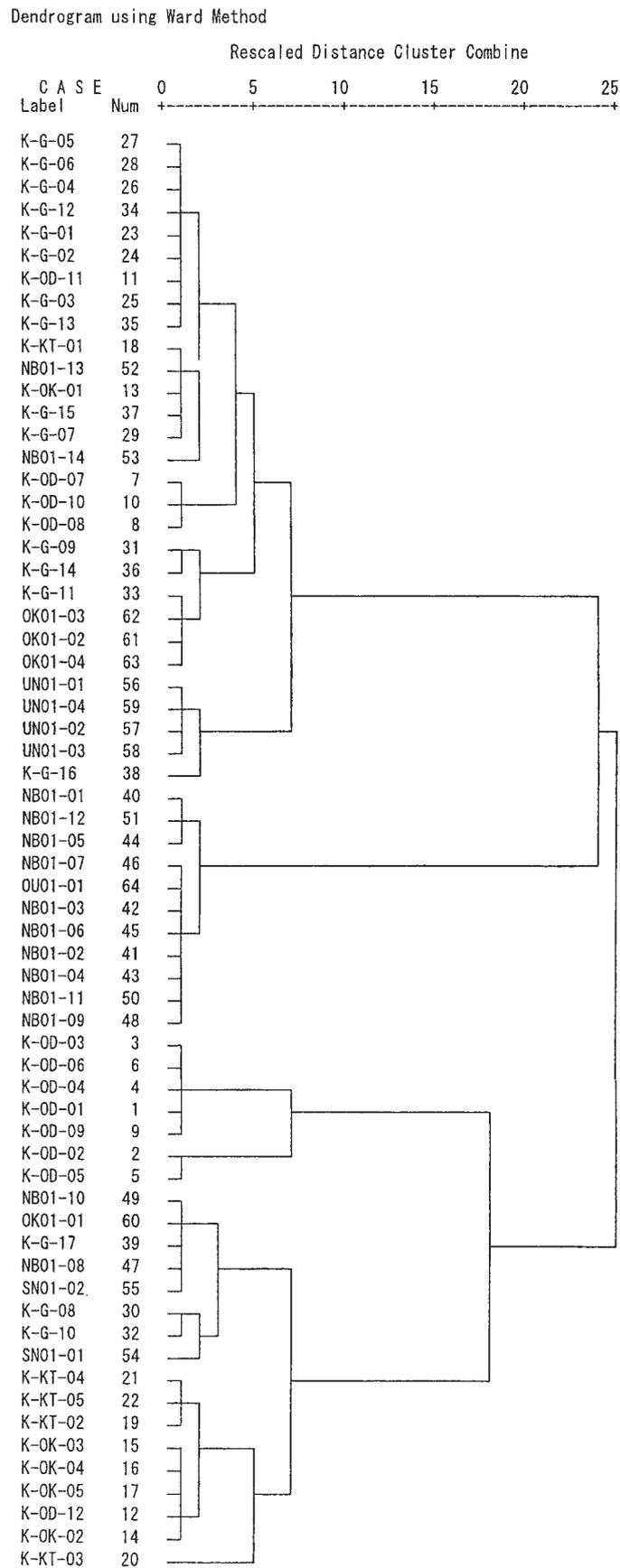
(2) 消費地遺跡出土資料の生産地推定

A：まず消費地出土の灰釉丸碗についてみると、機器中性子放射化分析に供した K-G-01～17 はいずれも XIII-1 図の A 群 C 群、XIII-3 図の 1 群 4 群という、肥前の生産地資料と同じグループに帰属している。また、I C P 発光分光分析に供した K-G-18 も肥前江永古窯の資料とまとめ両者の類似性が高い。こうしたことから、これら灰釉丸碗の殆どが肥前産であった可能性が高い。

ただし、今回の分析結果では、形態分類上丸碗 I 類・I' 類としたものは、K-G-10 が C 群に属する他は K-G-01～7・9・11～16 の全てが A 群、丸碗 II 類とした K-G-8・17 と尾戸窯 K-OD-12 は全て C 群に属するなど、形態上のタイプ差が胎土組成の違いにも一致しており、土佐出土の灰釉丸碗は大きく 2 系統に分かれている。この 2 タイプの碗がともに肥前の製品に含まれるのか、異なる生産地のものであるのかについては判別し難い。前項で触れたように、肥前の胎土には複数系統のものが含まれており、また、尾戸窯と肥前の資料には胎土組成の近似するものがあり、両者の厳密な生産地推定が難しいという側面もある。そのため、特に肥前の生産地資料に一般に見ない高台形態をもつ⁽¹²⁾丸碗 II 類についてはここでは産地特定を見送り、資料整理を重ねながら今後慎重に生産地推定を進めていくこととしたい。

資料番号	Na(%)	Fe(%)	Rb(ppm)	Cs(ppm)	La(ppm)	Ce(ppm)	Sm(ppm)	Eu(ppm)	Lu(ppm)	Th(ppm)	Hf(ppm)	Co(ppm)	Sc(ppm)
NB01-01	0.47	0.67	50	5.1	40	62	7.5	2.1	0.6	7.0	5.9	1.8	25
NB01-02	1.03	0.83	60	3.6	41	70	7.8	2.3	0.8	8.9	8.5	1.7	23
NB01-03	0.95	0.73	60	3.9	37	67	7.1	2.3	0.8	8.2	7.9	1.6	22
NB01-04	0.68	0.67	60	3.9	46	81	8.9	2.2	0.8	8.0	8.0	1.3	24
NB01-05	0.82	0.58	40	2.9	35	48	6.7	2.0	0.4	5.7	5.8	2.0	25
NB01-06	1.01	0.64	50	3.7	37	64	7.2	2.1	0.8	7.1	7.7	0.9	24
NB01-07	1.16	0.72	70	3.6	40	64	7.2	2.1	0.7	7.3	7.4	2.3	19
NB01-08	0.39	1.15	100	8.3	56	85	9.4	2.1	0.6	12	6.1	3.1	20
NB01-09	1.18	0.70	60	4.3	54	69	11	2.9	0.8	7.0	8.1	2.8	24
NB01-10	0.43	1.25	150	11	66	100	9.6	2.0	0.6	16	7.1	3.5	21
NB01-11	0.84	0.70	70	3.9	48	70	9.9	2.4	0.8	7.2	7.4	3.5	22
NB01-12	0.91	0.64	50	3.6	42	65	7.6	2.1	0.7	6.9	6.6	1.9	26
NB01-13	0.40	0.81	80	2.8	54	80	8.0	1.7	0.6	15	5.0	1.7	13
NB01-14	0.18	1.25	70	3.7	52	66	5.2	0.75	0.6	17	5.0	1.3	15
SN01-01	0.37	0.63	140	3.3	75	130	11	2.5	0.5	12	4.8	4.7	8.4
SN01-02	0.42	1.06	140	5.0	65	100	9.4	2.0	0.4	13	6.0	5.8	10
UN01-01	0.08	0.40	50	3.3	31	52	4.5	1.1	0.3	7.0	4.6	0.5	9.6
UN01-02	0.09	0.54	60	2.1	35	59	5.3	1.3	0.3	7.1	5.1	1.1	10
UN01-03	0.10	0.70	50	3.3	35	56	5.2	1.2	0.3	7.2	4.6	2.8	11
UN01-04	0.08	0.56	60	2.6	33	55	4.6	1.1	0.3	7.4	4.6	1.4	10
OK01-01	0.48	1.20	160	11	62	97	9.6	1.7	0.6	16	7.4	2.4	19
OK01-02	0.65	0.95	140	8.1	48	82	7.5	1.4	0.6	13	6.1	3.9	16
OK01-03	1.04	1.05	120	9.4	43	70	7.6	1.5	0.5	12	6.0	2.2	15
OK01-04	0.42	0.85	100	6.5	45	67	8.0	1.8	0.6	11	6.5	3.3	18
OU01-01	1.01	0.70	60	3.9	42	63	7.9	2.4	0.6	7.3	7	1.2	20

表 XIII-8 クラスター分析 (INAA データ : Ward 法) による分類結果と諸種微量元素存在量



XIII-3図 クラスタ分析による陶磁器の分類(機器中性子放射化分析によるデータ②: Ward法)

B：楼閣山水文碗(K-DN-01)はI C P 発光分光分析では、尾戸、肥前とは離れたグループに属しており、尾戸、肥前以外の製品と考えられる。信楽の資料とは同じIV群に分類されるが、グループ内でも独立し他との類似性が低いことから、京都、関西など他の地域で製作された可能性もある。ただし、今回は京都、関西の対比資料を分析できていないため、厳密な生産地推定には至ることができない。

D：京・信楽系陶器に共通した意匠をもつ灯明皿(K-DN-02)についても、I C P 発光分光分析結果では信楽の勅旨窯や漆原B窯と同じグループに属し類似性が高いため、京・信楽系の製品であろう。

C：最後に、丸の内三丁目遺跡出土資料(K-MR-03~09・11・12)は尾戸窯資料群とともに独立したグループを形成しており、高い類似性を示していることから、尾戸窯の製品であろう。ただし、K-MR-10は尾戸窯との類似性が低く、また信楽のグループとも別グループに分類される。

丸の内三丁目遺跡出土の陶器片は高台形態、胎土特徴、釉調とも尾戸窯跡出土資料群に共通するが、薄手で丁寧な作りである点が他の尾戸窯製品とは一線を画している。また、特に碗にみられる象嵌の手法を用いた繊細な立鶴文様や暦手、丸文などの意匠は、江戸後期の出土資料には見られないものである。こうした意匠の違いや精緻な作りは、江戸の土佐藩邸出土資料という製品のランク差、製作年代の違いなどを反映するものであろうか。このタイプの薄手の象嵌文碗は尾戸焼伝世資料にも数点が残されているが、他に白化粧土象嵌による菊花文碗(K-O D-19)など尾戸窯跡出土資料中にも少量が散見される。また現在整理進行中である平成15年度尾戸窯跡調査の出土資料中からも同タイプ象嵌文碗の陶片が確認されている。今回分析対象となった丸の内三丁目遺跡出土資料は17世紀末から18世紀初頭頃の火災廃棄資料であり、ここから尾戸焼の可能性をもつ陶器片90数点が確認されている。これまでこの時期の廃棄年代の確かな資料は確認されていなかったため、今回この一括資料が尾戸窯産の可能性が高いものとの示唆が得られたことは今後の編年研究の上で重要な意味をもつであろう。(浜田)

おわりに

これまで県下の窯跡出土資料の取り扱いについては、明らかに窯跡からの廃棄品と認め得る痕跡をもつものや、同一タイプのものが多量に出土する場合などに着目し、基準資料の蓄積を行ってきた。しかし、良好な窯跡出土資料が数量的に限られる尾戸窯の場合、上記の条件を満たさない出土遺物についてもより有効に活用し、器種、形態、意匠のバリエーションを明らかにしたいという思いもあり、窯跡出土資料の再検討が従来の課題であった。また、消費地遺跡出土の尾戸窯製品同定についても幾つかの問題が残されていた。

こうしたなか今回、これまでの考古学的手法では解決できない陶片の産地同定について科学分析の視点から検証出来たことは非常に幸運であり、このような機会を与えて頂いた二宮氏とその研究グループの方々に深く感謝したい。

放射化分析による陶磁器の生産地推定は、氏の研究の取り組みによってこれまでもその有効性が

示されてきたものである。今回は高知県尾戸窯の製品特定に関連して、肉眼観察のみでは識別が困難なものの産地同定について幾つかの重要な示唆を得られたことは大きな成果であった。今後はこの分析結果をふまえながら、資料蓄積と分類作業をさらに進め、在地窯製品の実態解明の取り組みを進めていきたいと考えている。

謝辞

今回の分析に際して、立教大学原子力研究所所員の方々には、原子炉等利用に関してお世話いただいた。また、伊万里市教育委員会、佐世保市教育委員会より資料提供を受け、肥前側の分析資料の抽出にあたっては、大橋康二(九州陶磁文化館)、盛峰雄(伊万里市教育委員会)、久村貞男(佐世保市教育委員会)諸氏より、多くのご教示を頂いた。記して感謝の意を表したい。

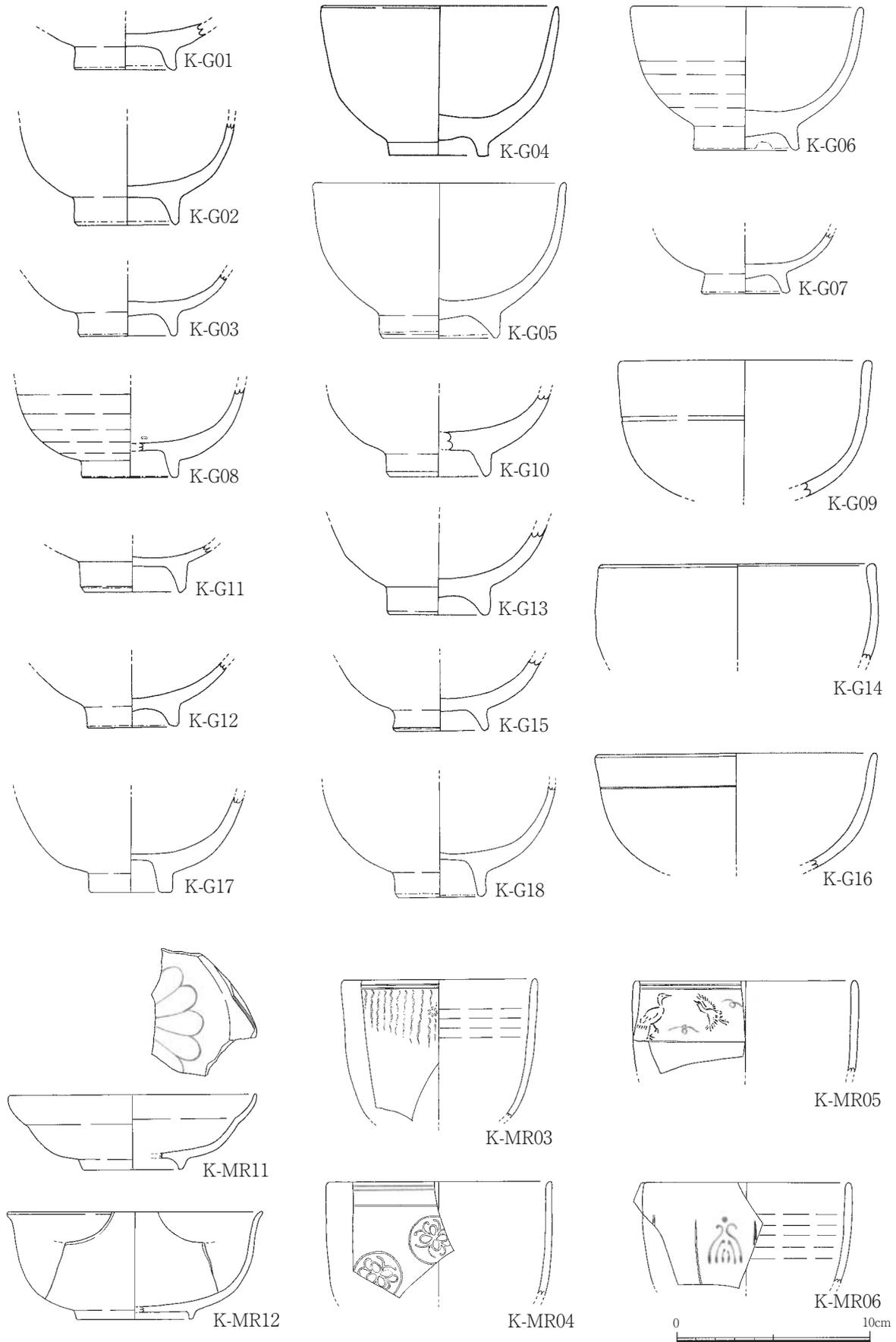
註

- 1) 森田家文書『戸陶値段表』宝永7年、享保18～19年、寛保2年、寛延2年の項(丸山和雄『土佐の陶磁』より引用。) 森田家は初代森田久右衛門から七代鴨助の代まで、藩窯陶工として勤めた。
- 2) 二宮修治・大沢眞澄「理学部7号館地点出土古丸谷様式磁器片の放射化分析」『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書1 東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点』東京大学理学部遺跡調査室1989
二宮修治・羽生淳子・大橋康二・藁科実・網守守・大沢眞澄・長佐古真也「放射化分析による消費地遺跡出土磁器片の生産地推定－江戸時代前期の資料を用いて－」『貿易陶磁研究No.11』日本貿易陶磁研究会1991
- 3) 尾戸窯跡は大正10年頃に行われた江ノ口川改修工事によってその殆どが破壊され、窯体はすでに消失している。現在の江ノ口川南岸は窯場の南端部分に該当する地点であり、昭和30年代に当地点へのビル建設工事が進められた際、当時の研究者であった山本貞彦、竹村脩氏らが建設敷地内での重機掘削によるトレンチ調査を行っている。なお、文献や絵図から、尾戸窯は元禄11年(1698)の大火によって一度焼失し元の窯場からやや南側の地点に改修されたことが分かっている。位置関係からみて、当時の調査で採取された遺物は、改修移転後の第2次尾戸窯に関わるものが主体であると考えられ、元禄11年(1698)から尾戸窯が能茶山に移転する文政5年(1822)までにかけての廃棄遺物が主体を占めるとみられる。ただし、出土遺物中には17世紀前葉の唐津系灰釉陶器や明治以降の遺物も幾分含まれており、周辺屋敷地からの廃棄遺物の混入や元禄11年以前の第1次尾戸窯製品の混在も予想される。
- 4) 昭和30年代に行われた大旺建設敷地内調査の出土遺物のうち、現在85点(肥前、瀬戸・美濃製品の混入約10点を含む)が出光美術館に収蔵されている。また、丸山和雄氏、竹村脩氏から寄贈を受けた74点は高知県埋蔵文化財センターに保管されている。このうち呉器手風灰釉丸碗は出光美術館収蔵資料中に3点、丸山、竹村氏寄贈資料中に4点(K-OD-11～14)が含まれている。出光美術館収蔵資料は2点が焼成不良品であり、うち1点は焼成不良が著しく釉は溶解せず粉状で剥落し易い。
- 5) 『丸の内三丁目遺跡』東京都埋蔵文化財センター1994。Ⅶ区6号瓦溜(調査時の旧調査区名と遺構名)出土資料は未報告資料である。
- 6) 出光美術館収蔵の尾戸窯跡出土資料中には、肥前産唐津系灰釉陶器や瀬戸・美濃産陶器など17世紀前半代の混入遺物が含まれている。

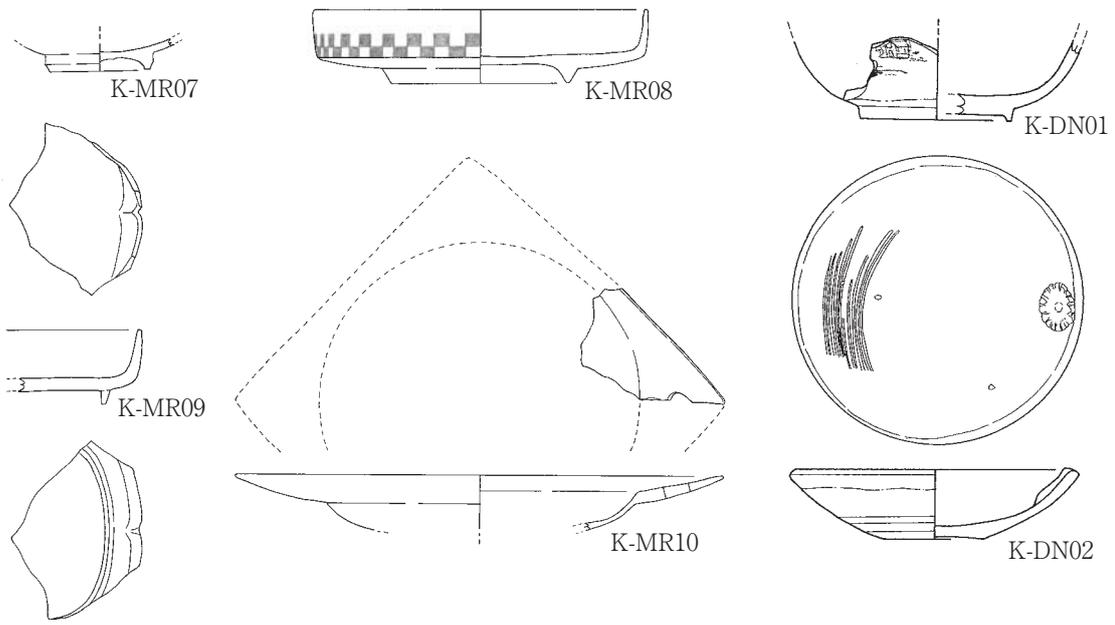
- 7) 能茶山の地質、鉍床については「地質－基盤は古生層で、砂岩・珪岩より構成され、山の東西両端にわずかに露出する。更新世形成層はほぼ水平成層し、石英・長石類の砂及び砂質粘土よりなる。鉍床－能茶山は高さ23m面積5700㎡の小丘で、粘土層は最下部が濃い灰色層、その上層が灰色層、最上部に淡褐色層があり、何れも砂質である。」とある。(今井清方編「高知県の粘土資源について」『高知県工業試験場研究報告第2号』高知県工業試験場1968)
- 8) 尾戸窯、能茶山陶器窯はともに高知市能茶山より粘土を採取したことが文献上に記されている。ただし、その胎土観察からは、能茶山陶器窯製品と尾戸雑記では粗砂を多く含む粘土を使用し、上手の尾戸焼では良好に水簸された精土を用いるという違いがみられ、製品ランクに応じて粘土の使い分けがなされている。また、能茶山の粘土鉍床は採取地点によって鉄分含有量が異なり、製品ランクの違いや文様意匠に応じて発色の異なる粘土が使い分けられるため、分析試料の選別にあたっては陶片の胎土色調別に分類し、タイプ毎に試料抽出を行った。尾戸窯、能茶山窯陶片の胎土特質と色調別タイプは次の通りである。[胎土特質] 0.05mm大以下の円形粒石英細砂を多量に、0.05mm～0.1mm大の角粒石英粗砂を少量含む。稀に0.5mm～0.2mm大の角粒長石粗砂を含むことがある。黒色細粒または赤色細粒が少量混じる。含有する鉍物粒子の割合には個体差があり、水簸の工程を簡略化させた粗砂を多く含むタイプと、良好に水簸された粗砂を殆ど含まないタイプのものに分かれるが、これは製品のランク差を反映したものとみられる。陶片の剥離面は荒く、透明感をもたない。微細な円孔と裂孔を疎らに認める。[焼成後の発色] N-aタイプ：還元焼成で暗灰色から灰色、酸化焼成で明赤褐色から橙色に発色するもの。N-bタイプ：還元焼成で灰白色、酸化焼成で淡黄色に発色するもの。
- 9) 大旺建設敷地内出土資料。ただし丸山和雄氏寄贈資料は、保管の過程で氏が能茶山にて表採された能茶山移転後の尾戸窯製品(文政5年～近・現代)が一部混入しており、注意を要する。しかし尾戸窯では近世から近代を通じて能茶山の粘土を使用しているため、胎土分析上は特に問題がないものと思われる。
- 10) 平成4年度、西和田窯跡発掘調査出土資料。西和田窯は西和田久三郎(大正12年没)が能茶山の北側斜面に開窯した民間経営の陶器窯である。久三郎は明治10年大津の鹿見陶器窯から能茶山の土居窯に移り、その後独立して西和田窯を開いており、明治末から大正期には最盛期を迎えている。
- 11) 二宮修治・那須悦子・高橋孝一郎・網干守・大橋康二・佐藤浩司「放射化分析による京町遺跡出土陶磁器の生産地推定」『京町遺跡3－永照寺跡地の調査』北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室1994
- 12) 大橋康二氏のご教示による。

参考文献

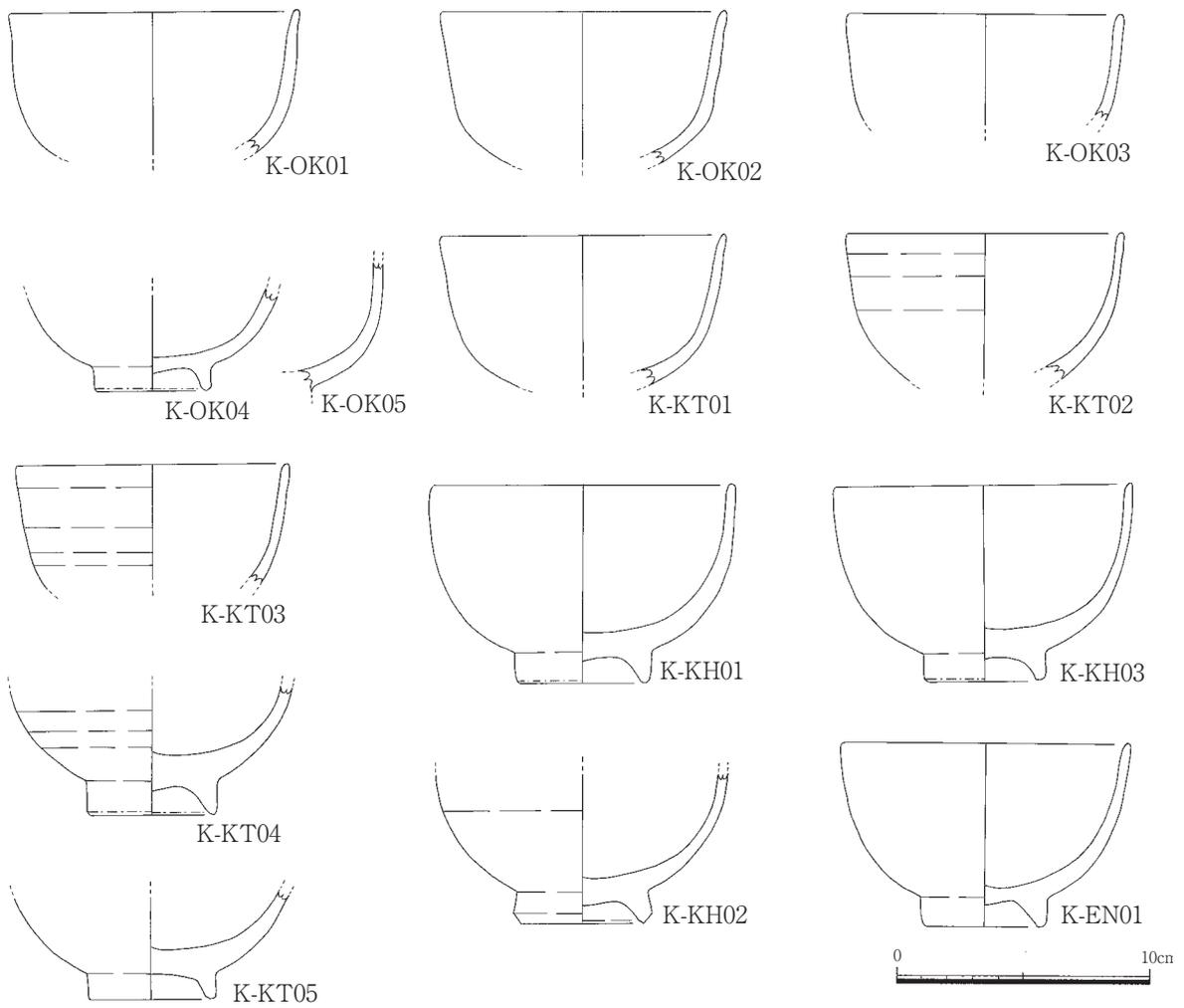
- 二宮修治・那須悦子・高橋孝一郎・網干守・大橋康二・佐藤浩司「放射化分析による京町遺跡出土陶磁器の生産地推定」『京町遺跡3－永照寺跡地の調査』北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室1994
- 二宮修治・大沢眞澄「理学部7号館地点出土古九谷様式磁器片の放射化分析」『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書1 東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点』東京大学理学部遺跡調査室1989
- 羽生淳子・長佐古真也・大橋康二・二宮修治・大沢眞澄「理学部7号館地点出土古九谷様式磁器片の化学分析による生産地推定」『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書1 東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点』東京大学理学部遺跡調査室1989
- 二宮修治・羽生淳子・大橋康二・藁科実・網干守・大沢眞澄・長佐古真也「放射化分析による消費地遺跡出土磁器片の生産地推定－江戸時代前期の資料を用いて－」『貿易陶磁研究No.11』日本貿易陶磁研究会1991
- 今井清方編「高知県の粘土資源について」『高知県工業試験場研究報告第2号』高知県工業試験場1968
- 丸山和雄『土佐の陶磁』雄山閣出版1973



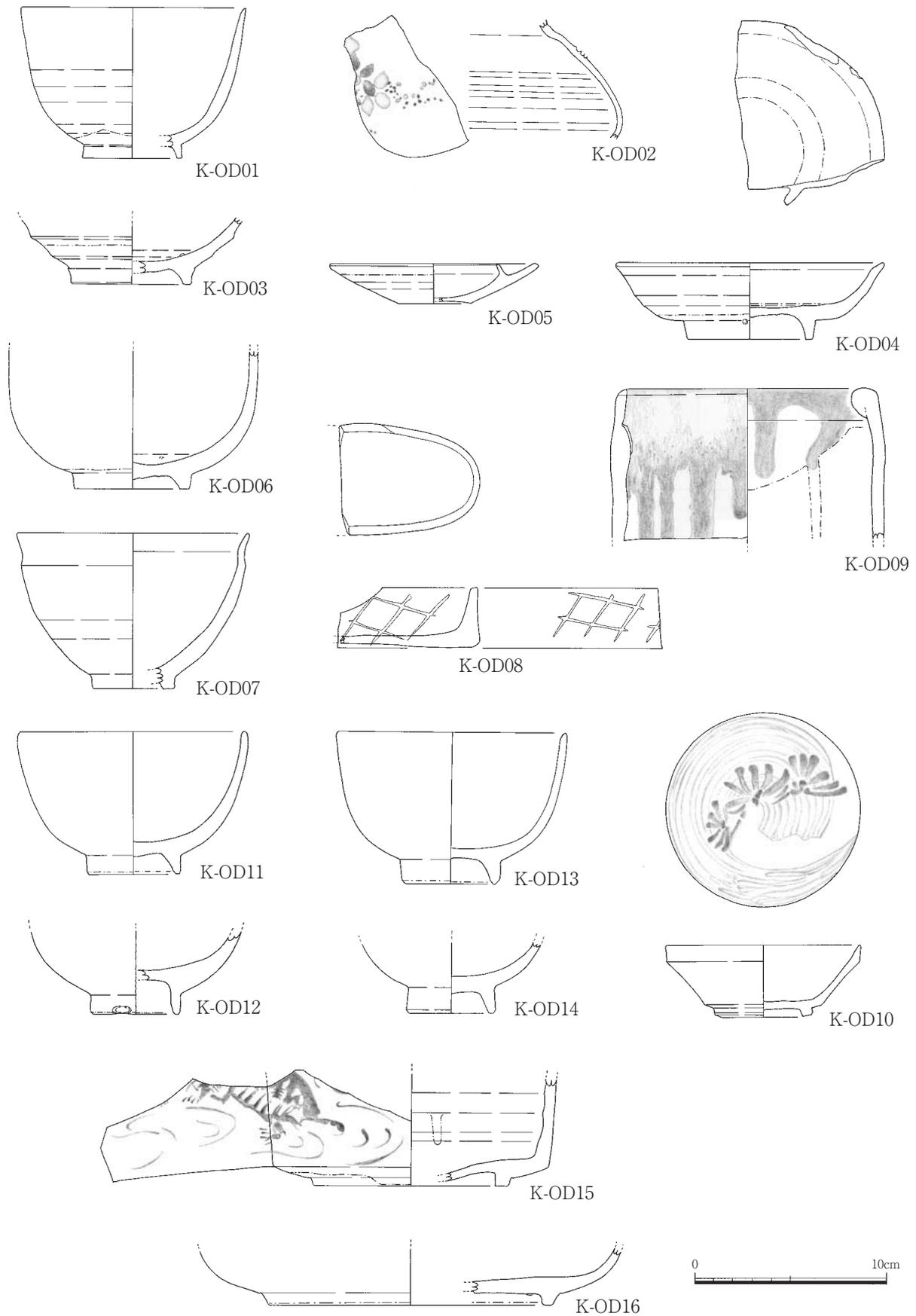
XIII-4図 分析資料その1 (消費地遺跡出土資料)



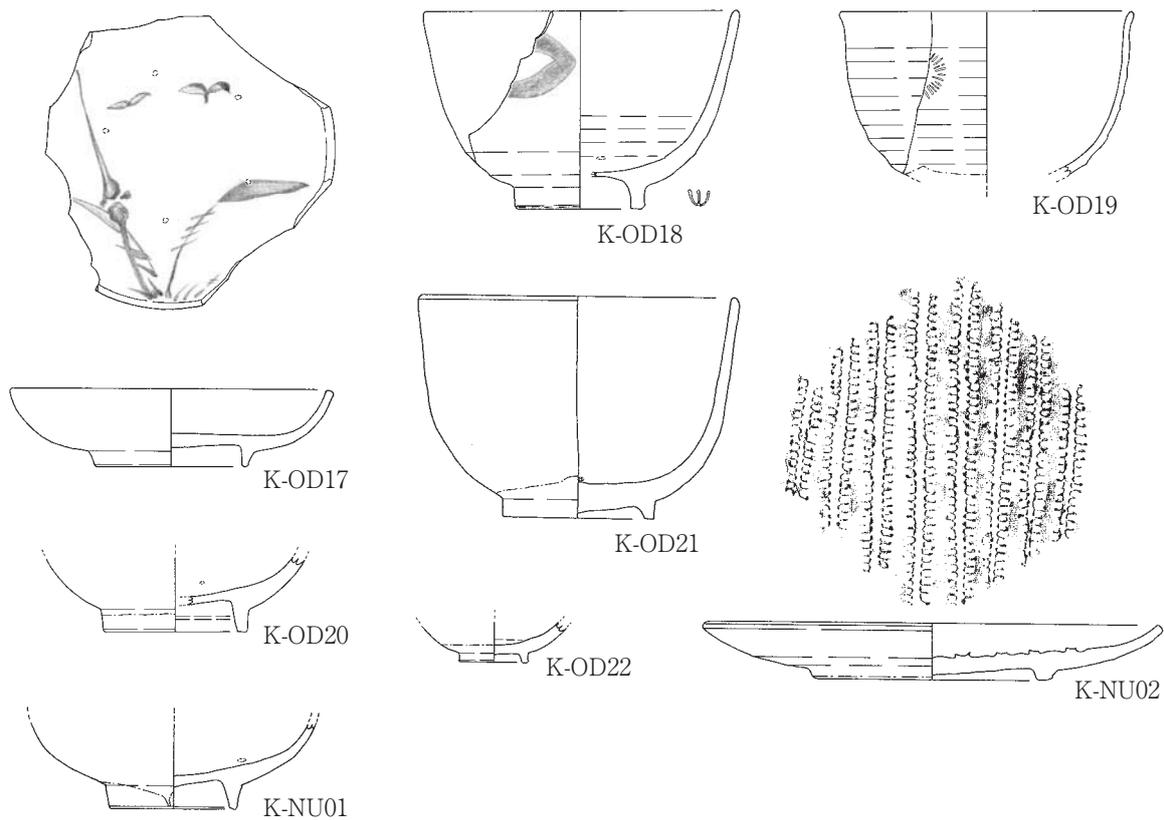
ⅩⅢ-5図 分析資料その2 (消費地遺跡出土資料)



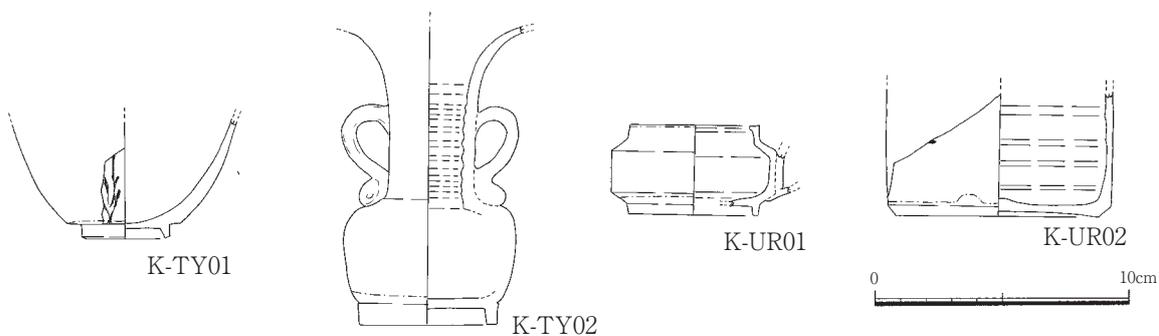
ⅩⅢ-6図 分析資料その3 (生産地遺跡出土資料-肥前)



XIII-7図 分析資料その4 (生産地遺跡出土資料-尾戸窯跡)



ⅩⅢ-8図 分析資料その5 (生産地遺跡出土資料-尾戸・能茶山窯跡)



ⅩⅢ-9図 分析資料その6 (生産地遺跡出土資料-信楽)

XIV まとめ

田村遺跡群は縄文時代から中近世までの遺構と遺物を検出している。時代別に多寡の差はあるものの、新知見を加える多くの成果を上げている。ここでは弥生時代を時期別に概観し、最後のまとめとする。時期区分は前期(I期)、中期(Ⅲ期)、中後期(Ⅳ～Ⅴ1期)、後期(Ⅴ2期以降)とした。前田光雄が集落、久家隆芳が土器、小野由香が石器をそれぞれ分担し、取りまとめた。

1. 弥生時代前期について

(1) 集 落

竪穴住居跡27棟、溝12条(内環濠4)、土坑約420基等である。

竪穴住居跡の時期はI2期3棟、I2～3期2棟、I3期13棟、I4期2棟、I4～5期1棟、I5期3棟である。小期不明なものが3棟である。I4期を除き他の住居跡は環濠外で検出している。I2期の住居跡はC2区に2棟とF3区に1棟認められる。松菊里型住居跡も検出している。C区のものとは円形住居跡と方形住居跡2棟が対になっていた可能性がある。I3期はA10区に2棟でやはり円形住居跡が対となっている。他はF区に集中が認められ、10棟検出している。I4期は前期溝1、2に挟まれた地点で2棟を検出している。共に長方形のやや小型のものである。I5期はF4ST420、調査区の北西部の飛び地にI4ST409、420が構築されている。平面形は円形とならず、楕円、長方形のものである。

I2期の土坑は大部分が環濠内に構築されるものが多く、住居跡、土坑と環濠の関係がどのようなものであるか一目瞭然である。F区では住居跡に近接して、土坑が構築されており、また違った関係を見て取れる。F区ではI3期を主体とする住居跡群で土坑も同時期のものが大半であり、I2期とI3期の間に前期の集落構造の転換期が存在しているようである。C区の環濠内の土坑からは多量の土器と共に磨製石鏃、打製石鏃、楔形石器、打製小型石錐、石製紡錘車、石包丁、土錘等の遺物が出土している。出土点数は少ないもののサメ、イワシ類、ガン、カモ、イノシシ、ニホンジカ、ノウサギ、ニホンザル等の動物遺存体が出土しており、また破損土器が多量に入るものもあり、当初I2期段階では貯蔵穴だったものがI3期頃から廃棄土坑に変化し、環濠内が廃棄帯に転化した可能性がある。

(2) 土 器

Ia期の甕は遠賀川式土器と弥生土器化した刻目突帯文土器が共伴する。各器種ともバリエーションが豊富である。南四国における遠賀川式土器の生成過程を示すものである。

Ib期は刻目突帯文土器が消滅するが、晩期系土器の要素が各器種に認められる。晩期系土器の要素を取り込みながら様式的な発展を遂げる。

Ic・d期は遠賀川式土器が全面的に展開する時期である。Id期には貼付口縁が出現する。

(3) 石 器

いわゆる大陸系磨製石器群の受容と変質期である。前時代の縄文系石器群に、新たに大陸系磨製石器群が加わる。田村遺跡群では、I-1期から石庖丁が出現するのを前回調査で確認している。その後、器種ごとに受容期に差がみられるもののI-2～3期にはすべてが出揃い、前期の典型的な石器組成を構成する。受容期の石器の中には、九州地域の層灰岩などを使用するものがあり、形態的にも他地域から搬入されたとみられる製品が存在する。また石庖丁を小型石斧に転用するなど、後続の時期と比較して、転用品がみられるのも特徴である。

前期には大陸系石器群とは別に、当該期に盛行・消滅する石器群が認められる。これらは打製石錘Ⅱ類、楔形石器、叩石Ⅱ群、円錐状の窪みを持つ台石で、一つのセットを構成するとみられる。楔形石器、叩石Ⅱ群、台石は、打製石錘Ⅱ類の製作に使用されたものと考えられる。これら打製石錘は非常に小型で、全長2cm未満のものが主流である。石材は例外なく、在地で獲得できるチャートを使用するのが特徴である。打製石錘の使用対象物は現時点では不明であるが、他地域の遺跡出土例などから、貝製品、鹿角製品、皮革製品などの加工に使用した可能性が想定される。

前期にみられる石器は、石庖丁、石鎌、大型直縁刃石器、大型蛤刃石斧、柱状片刃石斧、小型方柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、小型石斧、石鎌、石錘、楔形石器、叩石、台石、砥石、礫錘、石剣？、環状石斧？、石製品は石錘紡錘車があげられる。また稲作とともに、田村遺跡群では土錘が受容される。いずれも管状土錘で、この時期に比較的多くみられる。また土錘とは対照的に、縄文時代後期の田村遺跡群で多量にみられた石錘は欠落する。

2. 弥生時代中期について

(1) 集 落

34棟を検出している。内Ⅱ期の可能性のあるものが3棟である。Ⅲ期の住居跡の集中地点は大きく2ヶ所認められ、調査区中央北側部分のD、E区に6棟、K、L区に13棟まとまっている。K、L区では住居跡は環状を呈し、空地中央部に大型の掘立柱建物(L2SB201、203、204、L3SB318、319)が配置している。中期住居跡の形態は中型の円形住居跡が多く、7mを超える大型のものは4棟を数える。小型のものは方形、または長方形で2棟検出している。Ⅲ期の住居跡は後の中後期へと時系列で継続性があり、Ⅳ期へと発展していく。また2棟1対となるものが多く、そのパターンもⅣ期へと継承される。Ⅲ期に限定される溝は2条検出しているものの、L区の南東部を走る大溝2はⅤ3期以降に埋没するまで、本集落のメインとなる大溝であり、Ⅲ期の段階から掘削が開始されたと考えられる。

(2) 土 器

地域色が濃厚になる。南四国型甕が成立する。土器様式が単純。壺・甕の口縁部粘土帯貼付が盛行。壺・甕とも櫛描文・微隆起突帯などで加飾する。

(3) 石 器

遺構数の減少と比例して、遺構出土の石器も減少する。

この時期の特徴として、前期にみられた石器群のうち、磨製石鏃、石鎌、大型直縁刃石器などの器種その他、打製石錐Ⅱ類・楔形石器・叩石Ⅱ群といった石錘製作に用いられたとみられる石器が消滅することがあげられる。逆に縄文時代にみられた打欠石錘に加え、有溝石錘が出現するのは当該期以降である。

前時期から存続する器種にも変化は認められ、打製石鏃は大型化が進行するようである。また石庖丁は依然磨製のみ出土にとどまる。

当該期の遺構から出土した石器は、打製石鏃、磨製石庖丁、太型蛤刃石斧、扁平片刃石斧、小型石斧、石錘、砥石である。

3. 弥生時代中後期について

(1) 集 落

Ⅳ期からⅤ1期までを中後期として捉えると、住居跡はおよそ300棟である。小期で見るとⅣ期98棟、Ⅳ2～Ⅴ1期87棟、Ⅴ1期114棟である。大部分の掘立柱建物跡、土坑、大溝も該期に盛行する。しかしながら、遺構の切り合い関係からすると小期はさらに5、6期に中後期は分かれそうである。しかし、土器編年的には漸移的变化のため明確な線引きは困難で、時間幅を持たせて集落の分析を試みた。

大溝及び自然流路により集落は区画される。視覚上集落は五つの「群」に大きく分けることが可能であり、その中でも本集落は3群としたF、K、L区を中心核として、大溝を隔てて群がそれぞれ展開している。F、K、L区はⅢ期から継承する形で、中心核となる。集落の最小単位は幾つかの類型が認められ、同一規模竪穴住居跡2棟1対のもの、大型竪穴住居跡と小型方形竪穴住居跡の組み合わせのもの、溝状土坑と掘立柱建物跡がセットになり、竪穴住居跡に伴うもの、共同管理的な要素を持つ小型の掘立柱建物跡群等々が認められる。小単位は多様性があり、同一「群」内でも違った類型のものが認められる。北西部分のI、N区では2棟1対の類型は認められず、大小竪穴住居跡と掘立柱建物跡・溝状土坑の組み合わせになる例でほとんどが占められており、他の群と違った様相を呈している。また鉄製品、ガラス小玉を持たないなど遺物からしても違った状況を示している。他のグループではⅢ期からの時間的な継承性が認められる類例が多いものの、I、N区では占地の継承性が認められないなど幾つか他のグループと違った様相を呈している。

(2) 土 器

凹線文の盛行。凹線文系と在地系が共存する。各器種ともバリエーションが豊富。小形鉢の定着。在地系の高杯は極めて少ない。

(3) 石 器

遺構数の増加とともに、石器の出土量も増加する。この時期の特徴としては、成形・調整の粗雑化、法量の小型化などがあげられる。これは石庖丁で非常に顕著であるが、全体的に認められる傾向である。器種は、前時期に欠落していた大型直縁刃石器(打製)、柱状片刃石斧、環状石斧などがみられる他、新たに投弾が出現する。

石庖丁は磨製に、局部磨製、打製が加わり、Ⅰ～Ⅲ群が当該期に全て出揃う。Ⅲ群の磨製石庖丁は、全て有側タイプとなる。成形・調整とも粗雑で、製作途中で廃棄された未成品も比較的多くみられる時期である。

加工斧は減少傾向が看取される。これはほぼ時期を同じくして出現する板状鉄斧・ヤリガンナへと移行していった結果とも考えられる。

当該期の遺構からは、打製石鏃、石庖丁、大型蛤刃石斧、柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、小型石斧、環状石斧、叩石、砥石、台石、石錘、投弾が出土している。

4. 弥生時代後期について

(1) 集 落

V2期からV3期とV3期以降に大きく括ることができる。合計で竪穴住居跡は32棟検出している。内訳はV2期からV3期が27棟、それ以降が5棟である。V3期までで本集落はほとんど終焉を迎える。V3期までは前代の集落構造の継承性が認められるものの、V3期以降となると様相が一変する。しかしながらV2期からV3期の集落構造は、各群で中核を占めてきた中位単位が解体し、3群のK区周辺に住居跡が収斂する方向にある。大型の住居跡が比較的多くなるものの、単独のものは少なく、同一規模の大型住居跡が2棟1対となるケースが残るようである。それに小型方形住居跡が1棟伴う組み合わせ例も認められるようである。V1期まで認められた掘立柱建物跡・溝状土坑がセットになったものは消滅する。また溝状土坑自体も皆無となる。掘立柱建物跡自体は残り、2棟程が最小単位に伴うようである。鉄斧は大部分が袋状鉄斧となり、田村遺跡の時期的な目安となる。

V3期以降は中型、小型の住居跡となり、ほとんどが単発の住居跡である。ガラス小玉は少量持つものの、鉄製品は皆無である。集落としての機能はほとんど持たなくなるものの、破碎鏡がこの時期から多くなり、3点出土している。E区で明治年間に広形銅矛5振と今回の調査で鋒が1振出土しており、青銅器が多くなる。

(2) 土 器

土器様式の単純化。高松平野からの搬入。無文化。凹線文の消滅。貼付・南四国型甕の消滅。

(3) 石 器

V-2期以降、器種は一定みられるものの、石器の出土点数は減少傾向にある。

この時期田村遺跡群では、伐採斧の減少と袋状鉄斧の増加が認められることから、石器から鉄器

への移行が推測される。こういった鉄器化の流れは、前時期の加工斧にも認められる。

石庖丁はV-3期で磨製のもものが消滅する。またIV期に出現する大型蛤刃石斧C類は微増傾向にあり、全体的な成形・調整の粗雑化は一層強まると言える。

当該期の遺構からは、打製石鏃、石庖丁、大型蛤刃石斧、小型方柱状片刃石斧、小型石斧、石剣、叩石、砥石、台石が出土している。

	集落	土器	石器等
前期 (Ⅰ期)	住居跡27棟、環濠4条。Ⅰ2期からⅠ3期が主体となる。Ⅰ2期から環濠内に土坑を多数構築、住居跡は環濠外に。松菊里型住居跡を検出。Ⅰ3期が最も多く、環濠外南西部F区に10棟密集。Ⅰ4期、環濠内に長方形住居跡2棟構築。Ⅰ3期を境に環濠内土坑群は貯蔵穴群から廃棄帯へと転化か。Ⅰ5期は北東部に長方形住居2棟。全般を通じて2棟1対となる傾向が強い。	前期初頭：遠賀川式土器と弥生化した突帯文土器で構成。縄文晩期土器はまったくない。前期中葉：遠賀川式土器のみで構成される。前期末：地域型甕である南四国型甕が製作される。壺の口縁部に粘土帯貼付がはじまる。	・いわゆる大陸系磨製石器群の受容期。Ⅰ-2～3期に前期の典型的な石器組成がみられる。Ⅰ-3～4期に磨製石鏃が減少・消滅へ。 ・打製石錐Ⅱ類・楔形石器・叩石Ⅱ群・台石のセット関係(Ⅰ期のみ)。 ・九州地方など他地域からの製品の搬入。 ・転用品の存在。 ・石錘の不在と土錘の出現。
中期 (Ⅲ期)	住居跡34棟。Ⅱ期と考えられるものが3棟D、E区に。Ⅲ期はK、L区で環状に住居が配置。空閑地に大型掘立柱建物跡を配する。後の集落の核となる。Ⅲ期の住居跡がⅣ期、Ⅴ期へと継承されるグループが存在。他の区でも2棟1対となるものがB、D区に。それぞれのグループの核となりⅣ期へと継承される。	地域色が濃厚になる。土器様式が単純になる。壺・甕とも加飾される。櫛描文・突帯文等。壺・甕の口縁部に粘土帯貼付が盛行する。中期末に凹線文が施されるようになる。	・打製石鏃の大型化。 ・石錘の再出現。 ・石庖丁は磨製のみ認められる。
中後期 (Ⅳ～Ⅴ1期)	大規模集落。住居跡約300棟。小期は5、6期に分かれる可能性有り。掘立柱建物跡、土坑、溝等も多数。掘立柱建物跡と溝状土坑がセットになる特徴的な遺構が出現。大溝含めて集落の景観が出揃う。北側部分のI、N区に新たに集落展開。住居跡の最小単位には色々の組み合わせ。2棟1対も多い。小型方形住居も多くなる。共同管理的な掘立柱建物跡群の存在。鉄製品、ガラス小玉が出土。	凹線文の盛花期である。凹線文系土器様式と在地系土器様式が共存する。各器種ともバリエーションが豊富であり、複雑である。	・石器の出土量の増加。 ・成形・調整の粗雑化、法量の小型化の進行。 ・加工斧の減少と、板状鉄斧・ヤリガンナの出現。 ・石庖丁はⅠ～Ⅲ群が出揃う。
後期 (Ⅴ2期以降)	住居跡32棟。南寄りのK区に多く見られる。他の調査区では消滅するものも有る。掘立柱建物跡・溝状土坑は消滅。住居跡2棟1対のものは引き続き残る。住居跡は大型になる傾向。鉄斧は袋状が多くなる。Ⅴ3期以降は急激に解体へと向かう。大溝の埋没。集住は解体し、散在化。住居跡は中型、小型化。青銅器が出土。	土器様式が単純化する。南四国型甕に象徴される中期的な在地系土器様式が消滅する。凹線文が消滅する。高松平野から土器が搬入される。	・石器の減少と鉄斧への移行。 ・伐採斧の減少と、袋状鉄斧の増加。

表Ⅻ-1 弥生時代時期別概要

弥生時代竖穴住居跡集成図

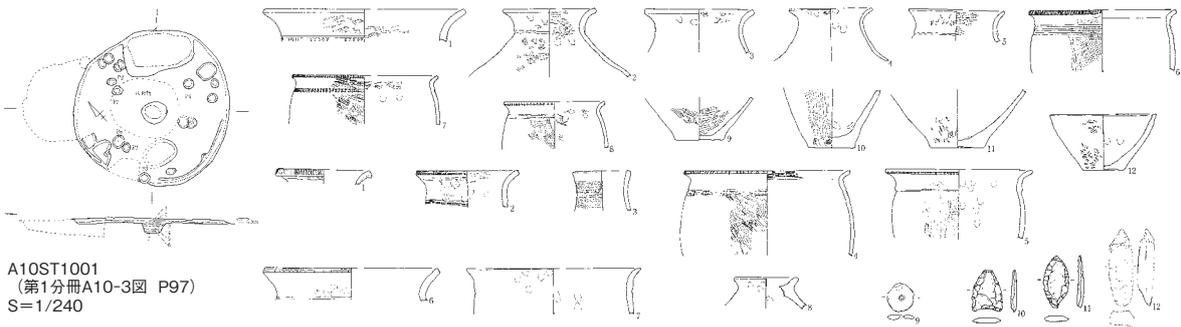
例 言

- 1 『田村遺跡群Ⅱ』より弥生時代竪穴住居跡を抜き出した。
- 2 出典先の分冊名、図版名、ページは表記した。
- 3 縮尺は住居跡について1/240を基本としているものの、それ以外のものもあり、それぞれの数値を表記した。遺物については縮尺数値は表記していないものの、土器は1/12、石器は1/6を基本としている。

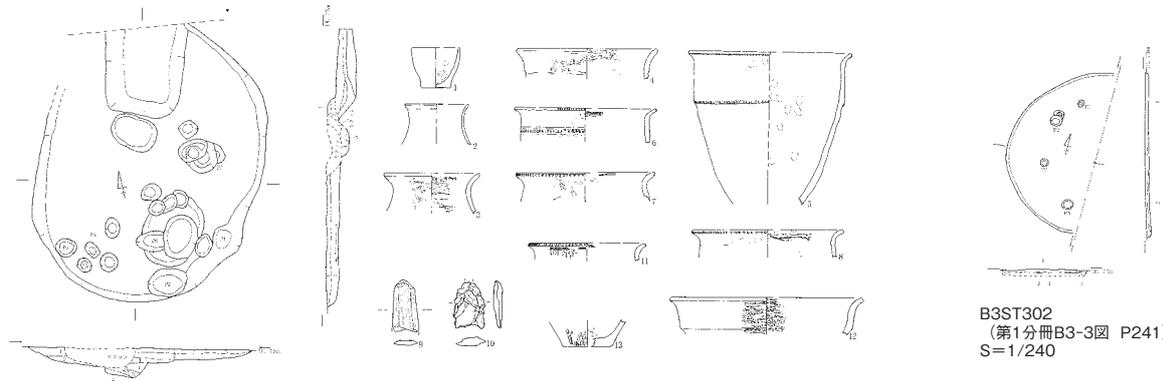
目次

- 住居跡集成図1 A10ST1001・1002、B3ST302～309
住居跡集成図2 B3ST310、B4ST401～409、SX409
住居跡集成図3 B4ST410・SX408、C1ST101～103、C2ST202
住居跡集成図4 C2ST201・203、C3ST301～303・3001・3002、C4ST401・402
住居跡集成図5 D1ST101～106
住居跡集成図6 D1ST107～112・117・118
住居跡集成図7 D1ST113～116・119・120・122・123・SX251
住居跡集成図8 D2ST251・252、E1ST101～103・401～403
住居跡集成図9 E4ST404～410
住居跡集成図10 E4ST411～417・422
住居跡集成図11 E4ST418～420、E5ST501、E7ST701～706・734・740・741
住居跡集成図12 E7ST707～714・716・718～720・725
住居跡集成図13 E7ST715・721～724・726・736
住居跡集成図14 E7ST727・728・730・732・733・735・737・738、E8ST801
住居跡集成図15 F1ST101～105・108
住居跡集成図16 F1ST106・202・203
住居跡集成図17 F3ST107・301～303
住居跡集成図18 F3ST304～308、F4ST201・204・205
住居跡集成図19 F4ST401～406
住居跡集成図20 F4ST408～410
住居跡集成図21 F4ST411・413・415
住居跡集成図22 F4ST414・416～419・421・422
住居跡集成図23 F4ST420・425～428、G1ST102・103
住居跡集成図24 G1ST101・104、I1ST101～103
住居跡集成図25 I1ST104、I2ST202～204
住居跡集成図26 I2ST205～209
住居跡集成図27 I2ST210～212
住居跡集成図28 I2ST213～216・218・219
住居跡集成図29 I3ST302、I4ST401～409
住居跡集成図30 I4ST412～416・418～422
住居跡集成図31 J1ST101～106
住居跡集成図32 J1ST107～110、J3ST301・302
住居跡集成図33 J3ST303～305・307～311
住居跡集成図34 J3ST312・313、J4ST401・402・404
住居跡集成図35 J4ST403・405～412
住居跡集成図36 J4ST413・414・416・417・419
住居跡集成図37 J4ST418、J5ST501～503、K1ST101・102

住居跡集成図38 K1ST103~107・109・110
住居跡集成図39 K1ST108・111~115・117
住居跡集成図40 K1ST116・118~121
住居跡集成図41 K1ST122~125・128
住居跡集成図42 K1ST126・127、K2ST201~206
住居跡集成図43 K2ST207~209
住居跡集成図44 K2ST210~213・215~219
住居跡集成図45 K2ST220~222
住居跡集成図46 K2ST223~227、K3ST302・303
住居跡集成図47 K3ST304~309・312
住居跡集成図48 K3ST310・311・313、L1ST101・102
住居跡集成図49 L1ST104・106・107、L2ST201~203
住居跡集成図50 L2ST204~210・213
住居跡集成図51 L2ST211・212・214・215
住居跡集成図52 L2ST216・218~223
住居跡集成図53 L2ST224~228・230
住居跡集成図54 L2ST229・231~233、L3ST301・302
住居跡集成図55 L3ST303~309
住居跡集成図56 L3ST311~317
住居跡集成図57 N1ST101~106、N2ST201・202、N3ST301
住居跡集成図58 O1ST101、O2ST201~203、P1ST101
住居跡集成図59 P1ST102~104、Q2ST201・202・205
住居跡集成図60 Q2ST203・204・206・207・209

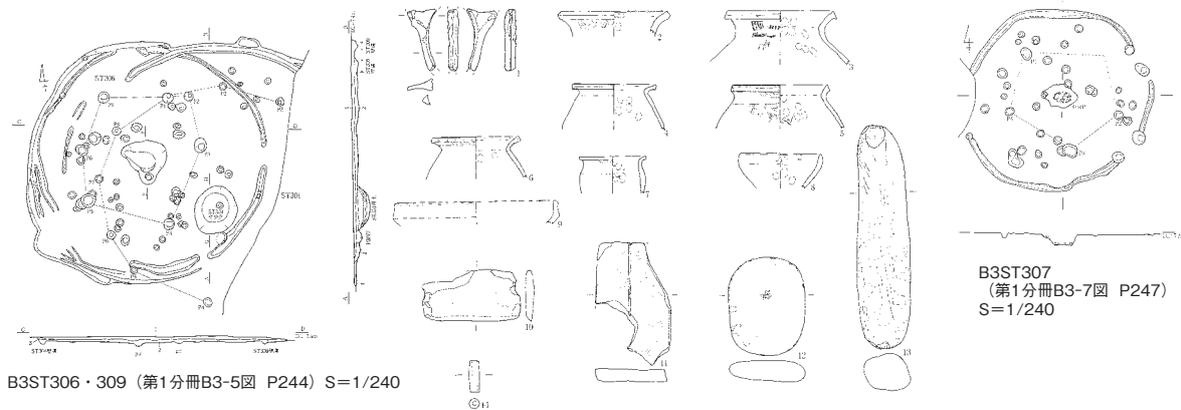


A10ST1001
(第1分冊A10-3図 P97)
S=1/240



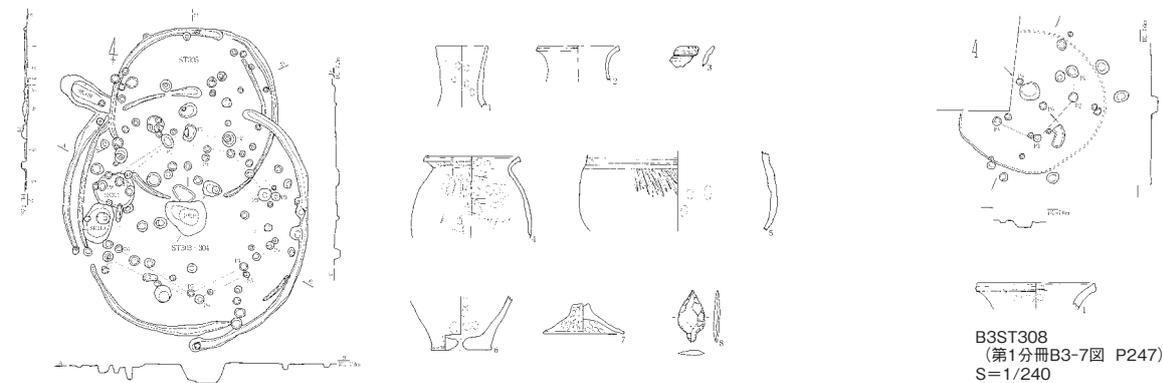
A10ST1002 (第1分冊A10-5図 P99) S=1/120

B3ST302
(第1分冊B3-3図 P241)
S=1/240



B3ST306・309 (第1分冊B3-5図 P244) S=1/240

B3ST307
(第1分冊B3-7図 P247)
S=1/240

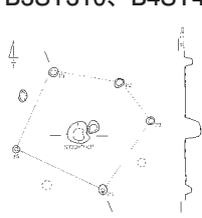


B3ST303~305 (第1分冊B3-4図 P243) S=1/240

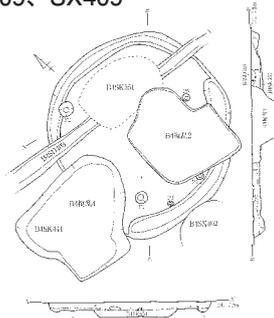
B3ST308
(第1分冊B3-7図 P247)
S=1/240

住居跡集成図 1

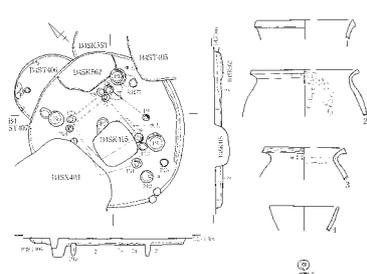
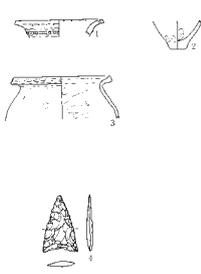
B3ST310、B4ST401~409、SX409



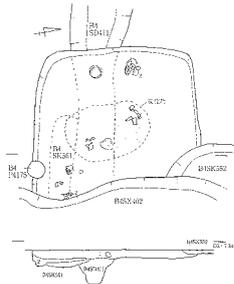
B3ST310
(第1分冊B3-8図 P249)
S=1/240



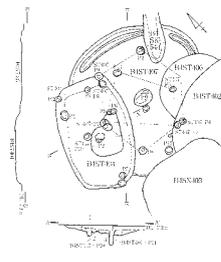
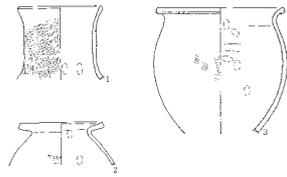
B4ST401 (第1分冊B4-4図 P283) S=1/240



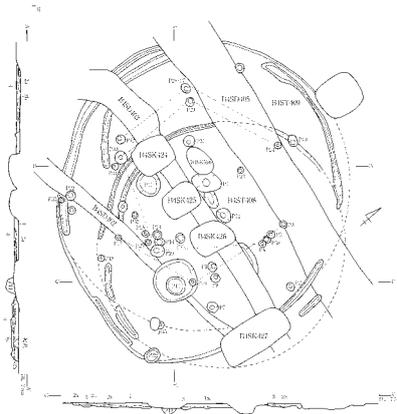
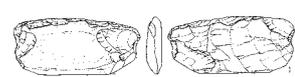
B4ST402・406 (第1分冊B5-5図 P285)
S=1/240



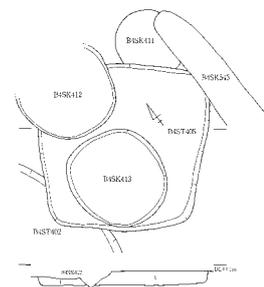
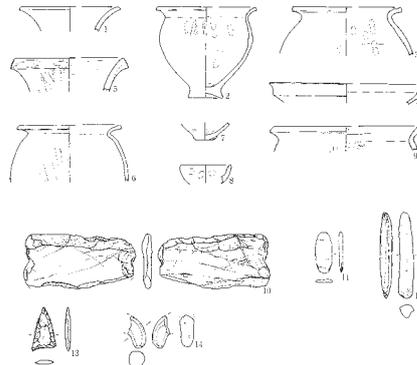
B4ST403 (第1分冊B4-6図 P286) S=1/120



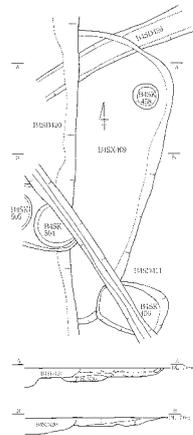
B4ST404・407 (第1分冊B4-7図 P287) S=1/240



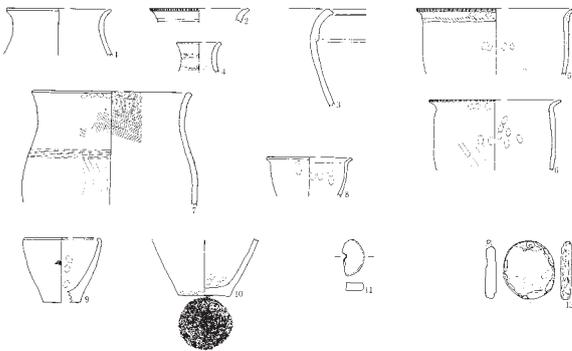
B4ST408・409 (第1分冊B4-9図 P291) S=1/240



B4ST405
(第1分冊B4-8図 P288)
S=1/120

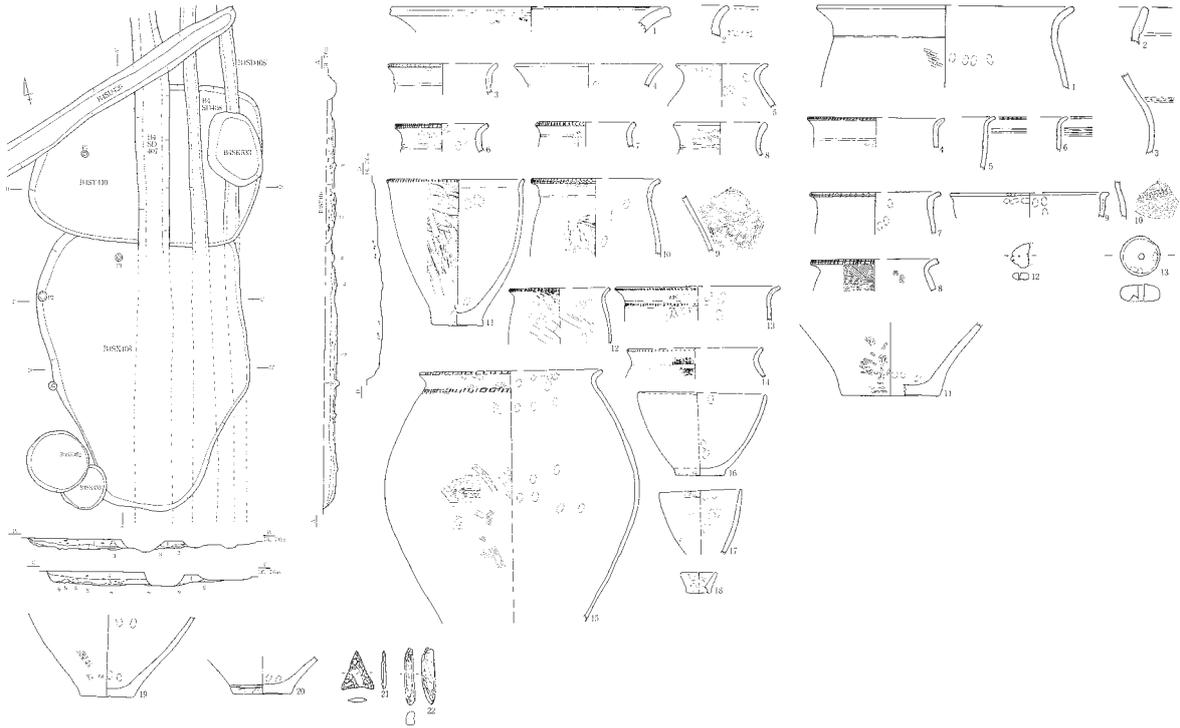


B4SX409 (第1分冊B4-15図 P300) S=1/240

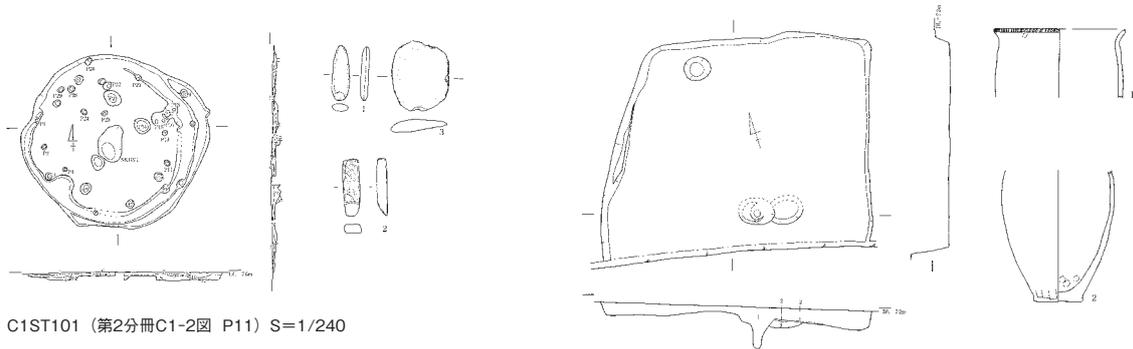


住居跡集成図 2

B4ST410・SX408、C1ST101~103、C2ST202

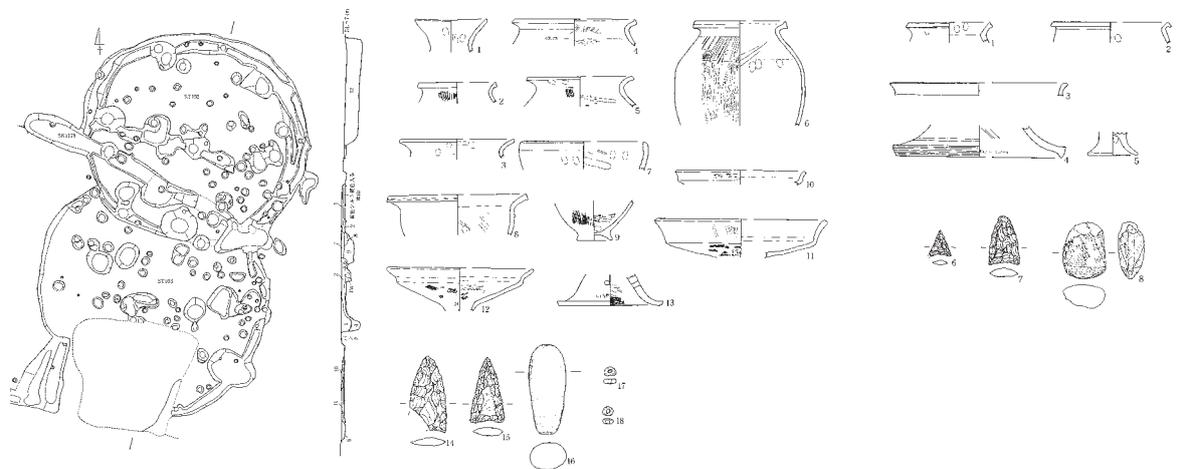


B4ST410・SX408 (第1分冊B4-11図 P295) S=1/240



C1ST101 (第2分冊C1-2図 P11) S=1/240

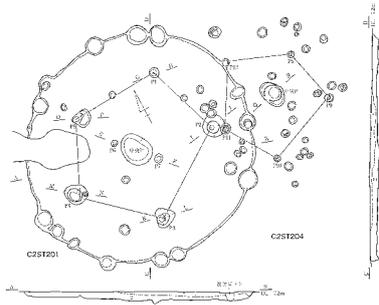
C2ST202 (第2分冊C2-4図 P96) S=1/120



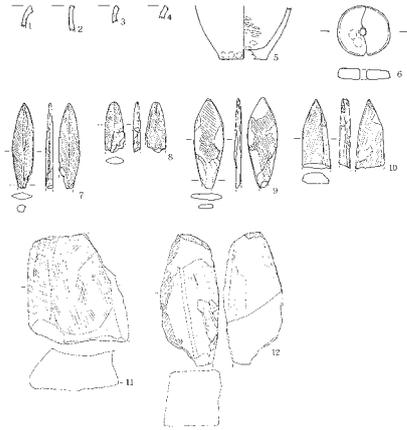
C1ST102・103 (第1分冊C1-3図 P13) S=1/240

住居跡集成図 3

C2ST201・203、C3ST301~303・3001・3002、C4ST401・402



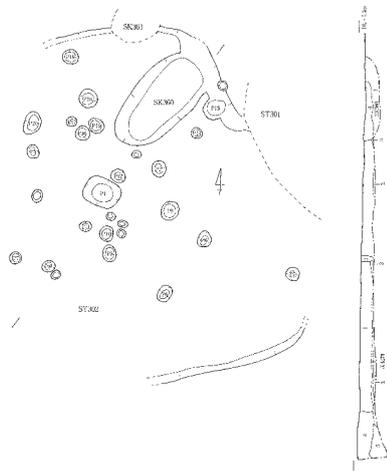
C2ST201・204 (第2分冊C2-3図 P94) S=1/240



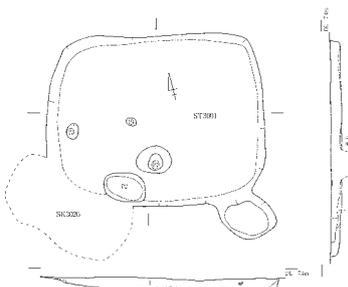
C2ST203 (第2分冊C2-5図 P98) S=1/120



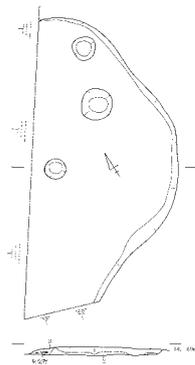
C3-97ST301・303 (第2分冊C3-24図 P156) S=1/120



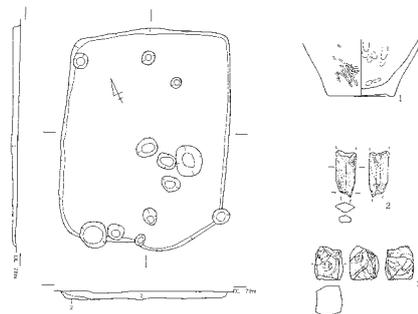
C3-97ST302 (第2分冊C3-25図 P158) S=1/120



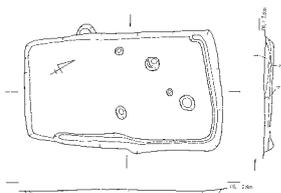
C3-99ST3001 (第2分冊C3-26図 P160) S=1/120



C3-99ST3002 (第2分冊C3-27図 P161) S=1/120

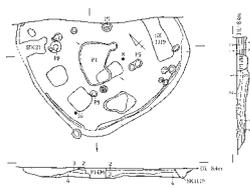


C4ST401 (第2分冊C4-2図 P179) S=1/120

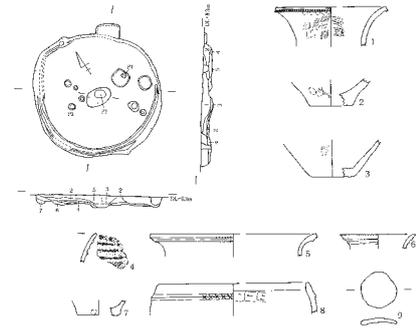
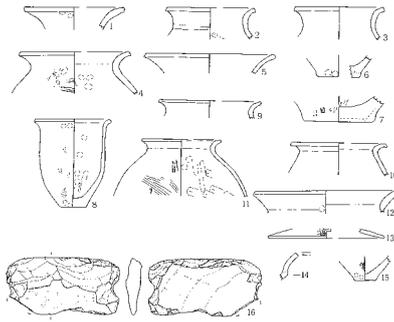


C4ST402 (第2分冊C4-2図 P179) S=1/120

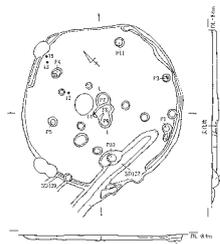
住居跡集成図 4



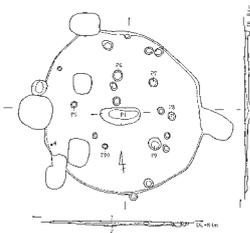
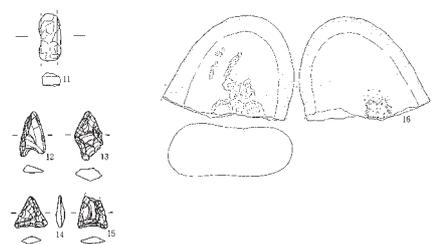
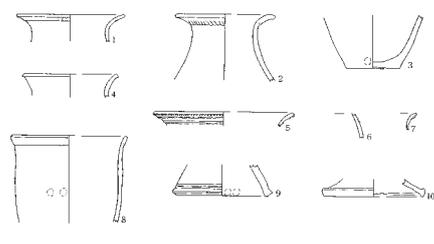
D1ST101 (第3分册D1-3图 P10)
S=1/240



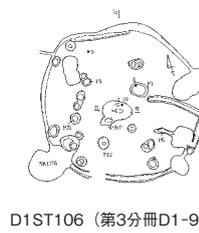
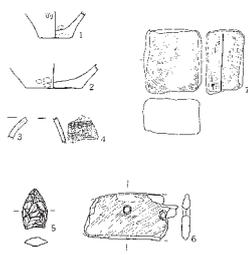
D1ST102 (第3分册D1-4图 P11) S=1/240



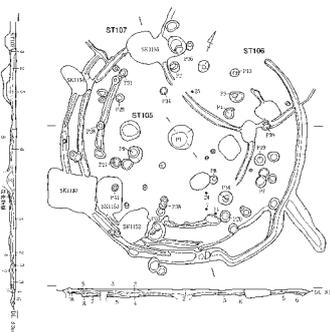
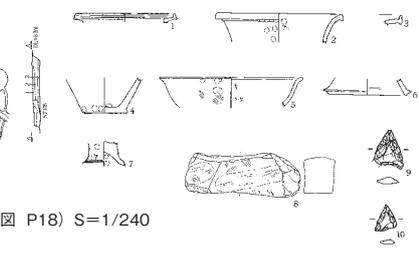
D1ST103 (第3分册D1-5图 P13) S=1/240



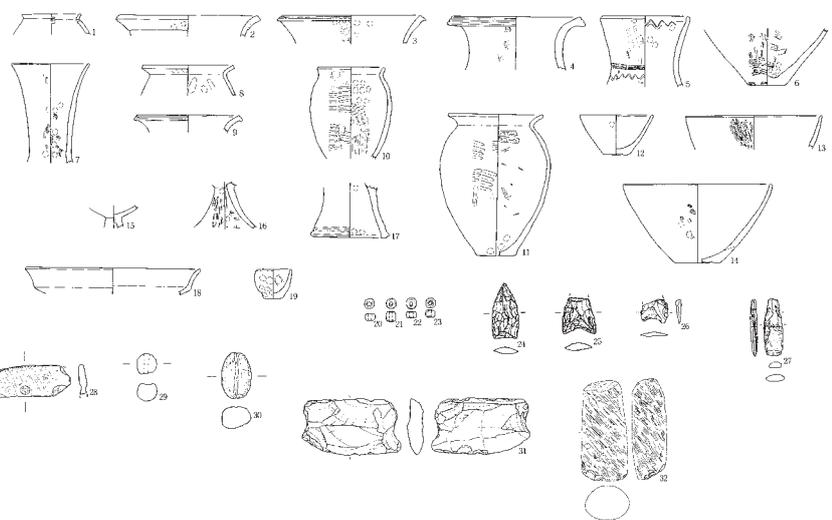
D1ST104 (第3分册D1-6图 P14) S=1/240



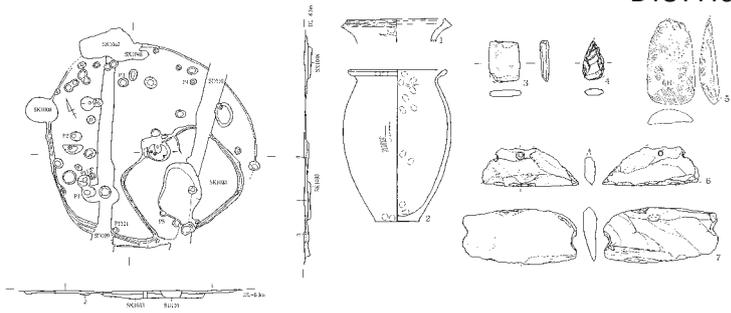
D1ST106 (第3分册D1-9图 P18) S=1/240



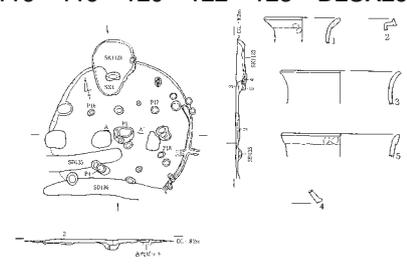
D1ST105 (第3分册D1-7图 P16) S=1/240



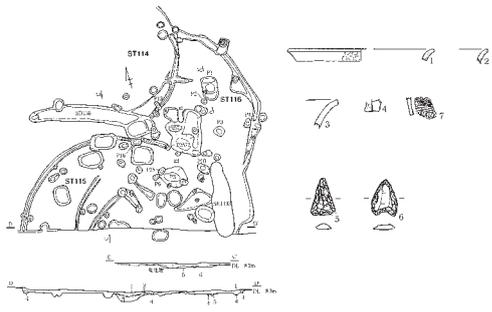
D1ST113~116・119・120・122・123・D2SX251



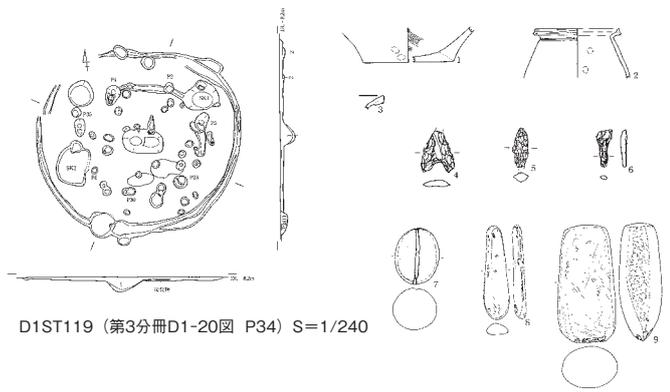
D1ST113 (第3分冊D1-17図 P29) S=1/240



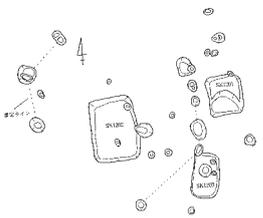
D1ST114 (第3分冊D1-18図 P30) S=1/240



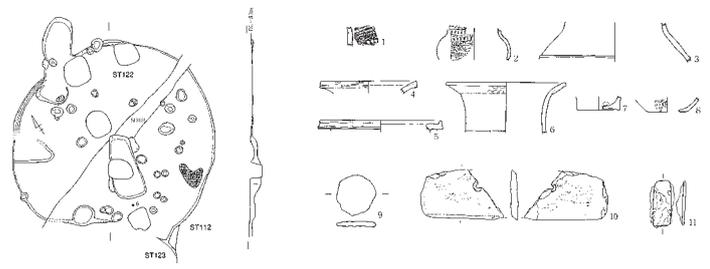
D1ST115・116 (第3分冊D1-19図 P31) S=1/240



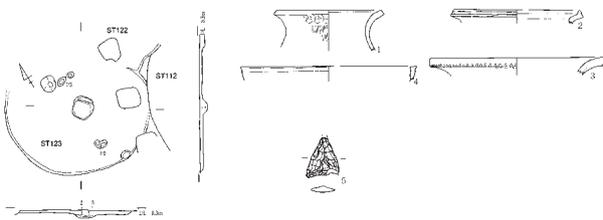
D1ST119 (第3分冊D1-20図 P34) S=1/240



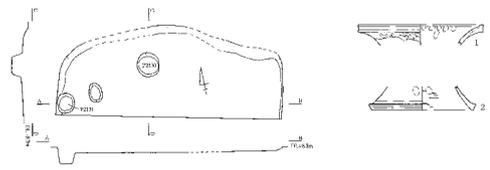
D1ST120 (第3分冊D1-23図 P38) S=1/240



D1ST122 (第3分冊D1-21図 P36)
S=1/240



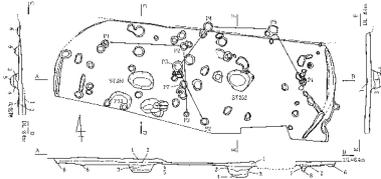
D1ST123 (第3分冊D1-22図 P37) S=1/240



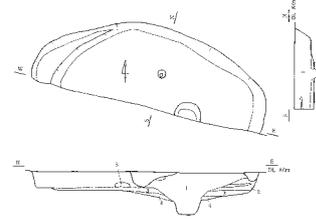
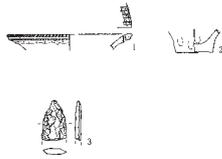
D2SX251 (第3分冊D2-1図 P134) S=1/120

住居跡集成図 7

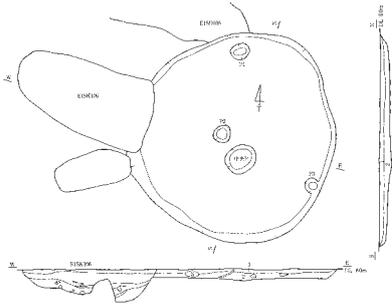
D2ST251・252、E1ST101~103・E4ST401~403



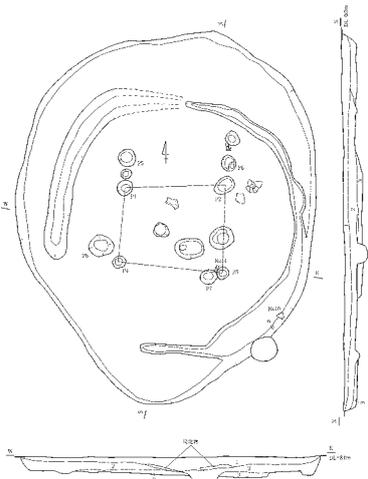
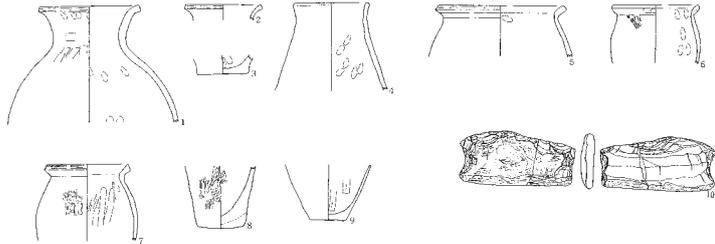
D2ST251・252 (第3分冊D2-1図 P134) S=1/240



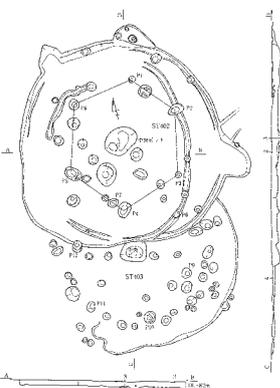
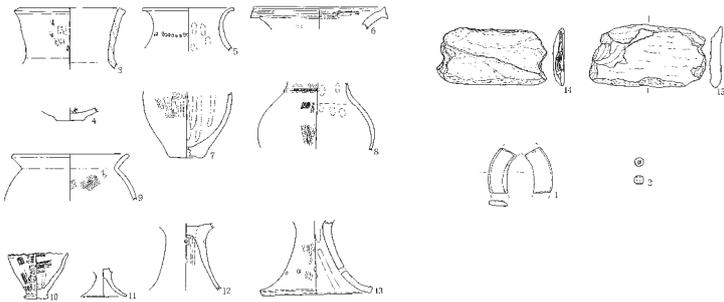
E1ST103 (第3分冊E1-5図 P167) S=1/120



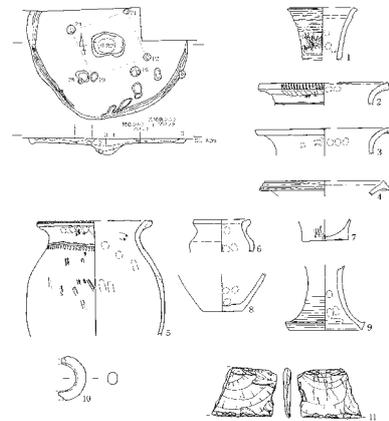
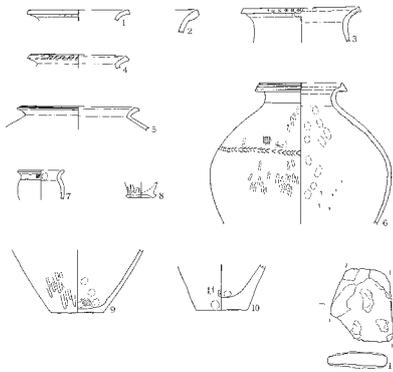
E1ST101 (第3分冊E1-2図 P163) S=1/120



E1ST102 (第3分冊E1-4図 P166) S=1/120

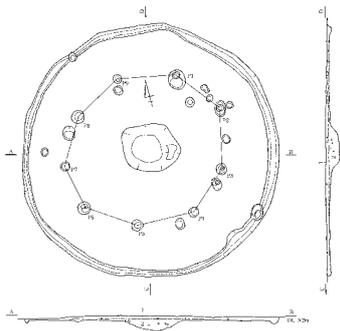


E4ST402・403 (第3分冊E4-4図 P255) S=1/240

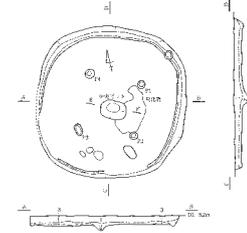
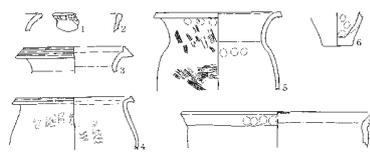


E4ST401 (第3分冊E4-3図 P253) S=1/240

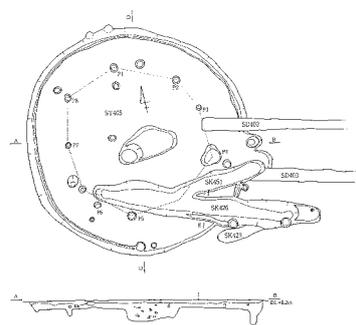
住居跡集成図 8



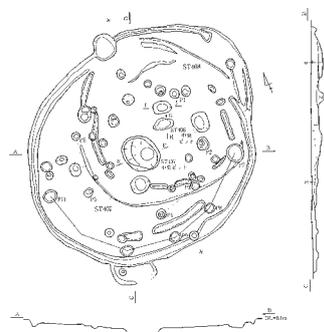
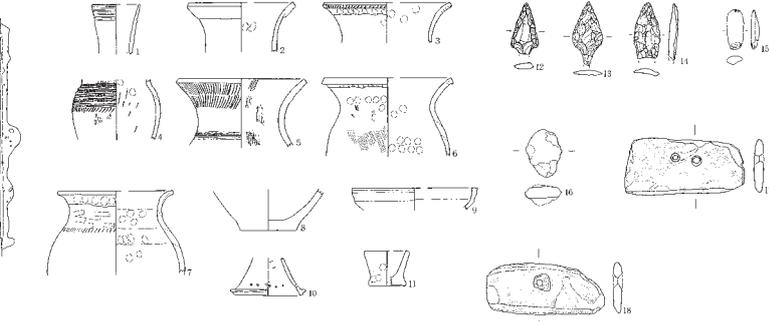
E4ST404 (第3分冊E4-6図 P257) S=1/240



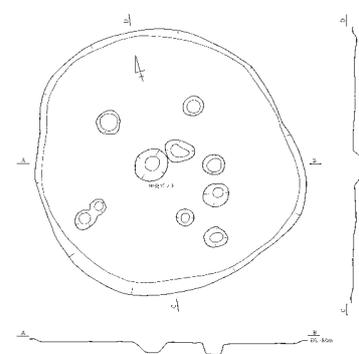
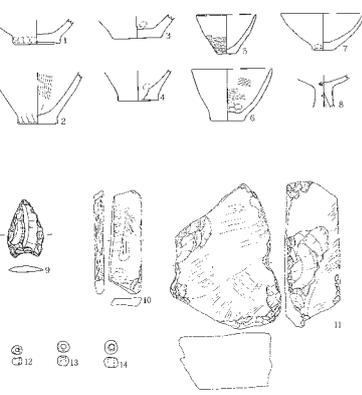
E4ST406 (第3分冊E4-9図 P261) S=1/240



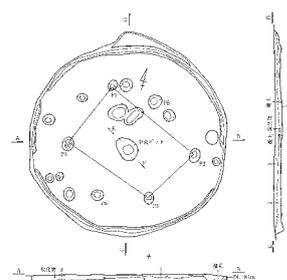
E4ST405 (第3分冊E4-7図 P259) S=1/240



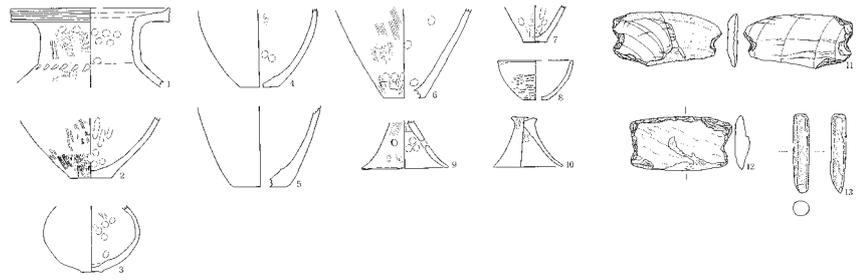
E4ST407・408 (第3分冊E4-10図 P263) S=1/240



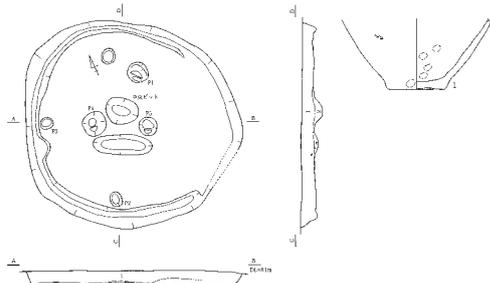
E4ST409 (第3分冊E4-12図 P265) S=1/120



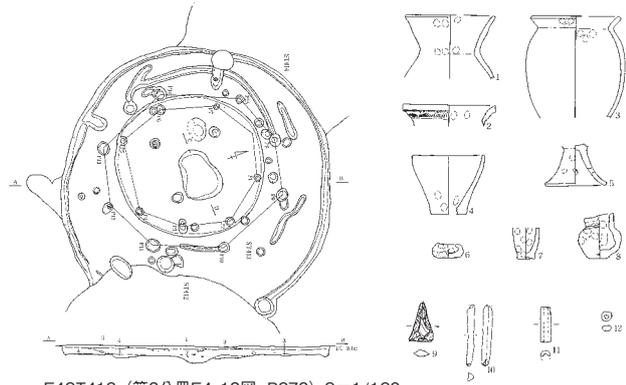
E4ST410 (第3分冊E4-13図 P266) S=1/120



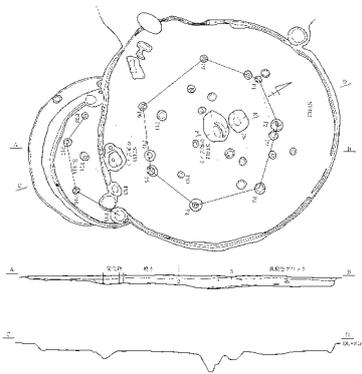
E4ST411~417・422



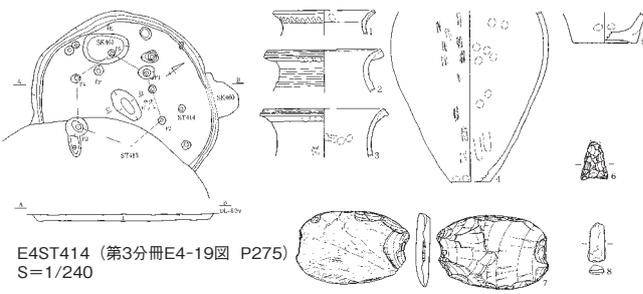
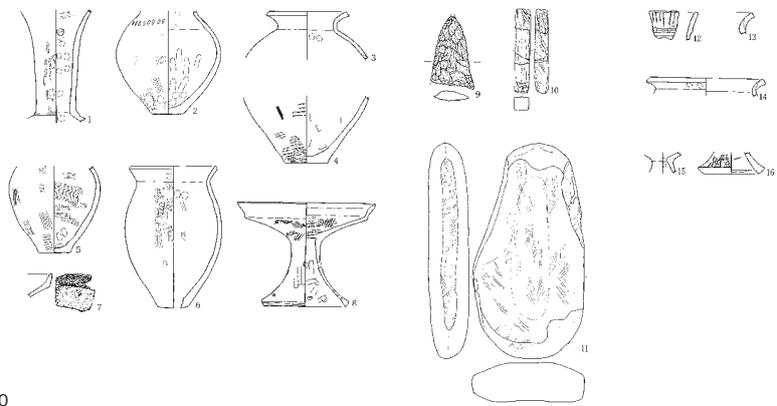
E4ST411 (第3分冊E4-15図 P268) S=1/120



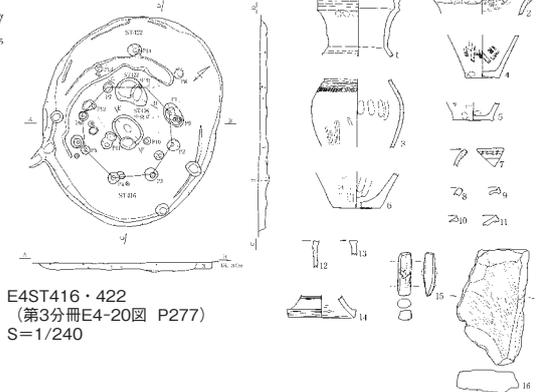
E4ST413 (第3分冊E4-18図 P273) S=1/120



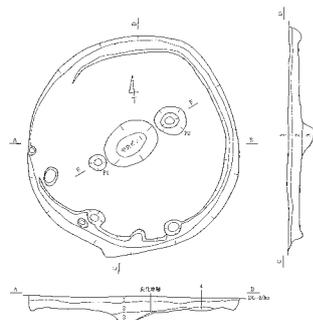
E4ST412・415 (第3分冊E4-16図 P270) S=1/240



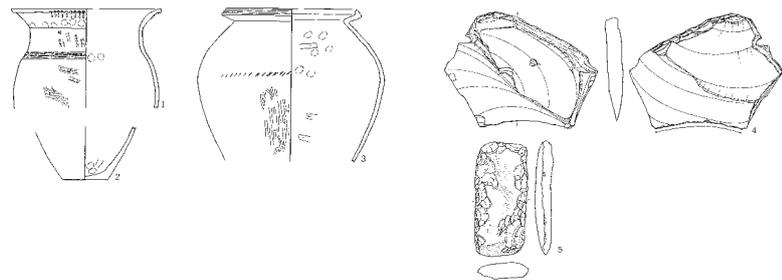
E4ST414 (第3分冊E4-19図 P275) S=1/240



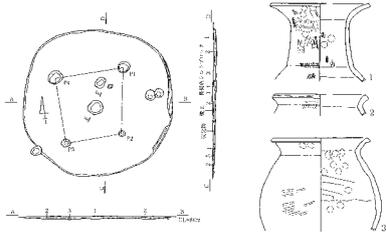
E4ST416・422 (第3分冊E4-20図 P277) S=1/240



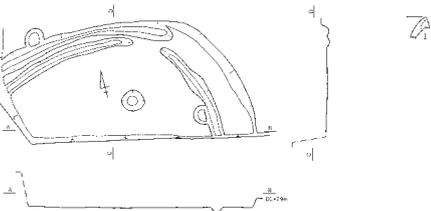
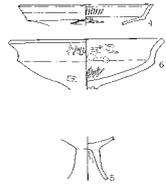
E4ST417 (第3分冊E4-21図 P278) S=1/120



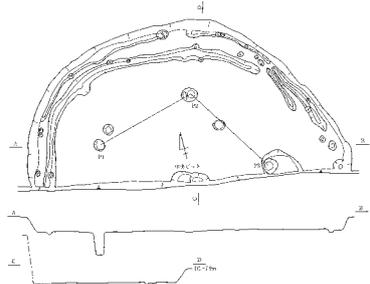
E4ST418~420、E5ST501、E7ST701~706・734・740・741



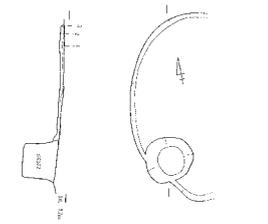
E4ST418 (第3分冊E4-23図 P280) S=1/240



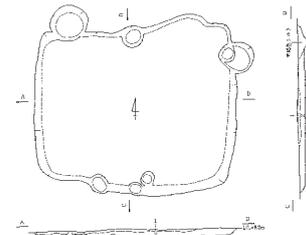
E4ST419 (第3分冊E4-24図 P281) S=1/120



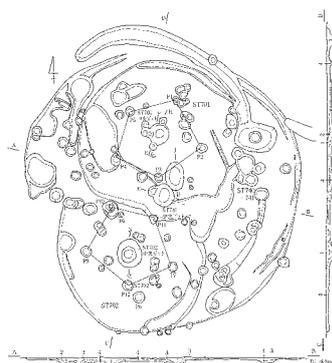
E4ST420 (第3分冊E4-25図 P282) S=1/120



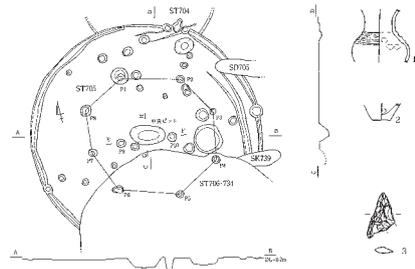
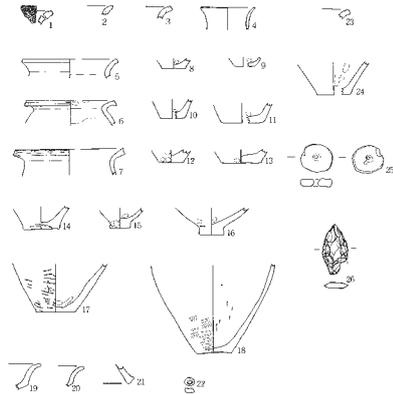
E5ST501 (第3分冊E5-2図 P332) S=1/120



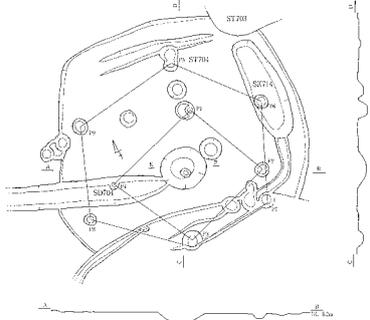
E7ST703 (第3分冊E7-4図 P437) S=1/120



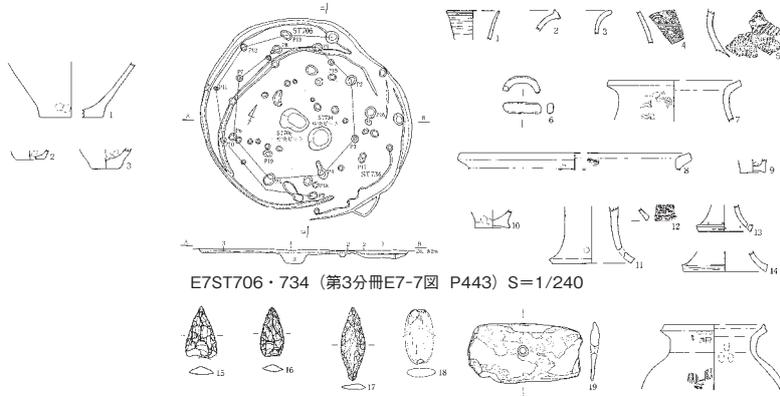
E7ST701・702・740・741
(第3分冊E7-2図 P436) S=1/240



E7ST705 (第3分冊E7-6図 P440) S=1/240

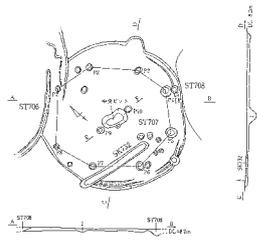


E7ST704 (第3分冊E7-5図 P439) S=1/120

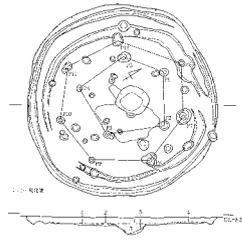


E7ST706・734 (第3分冊E7-7図 P443) S=1/240

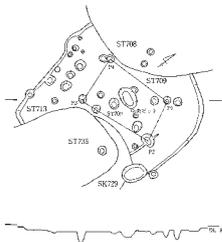
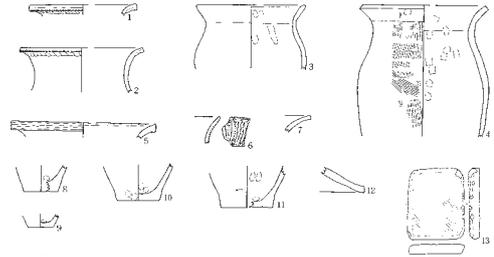
E7ST707~714 · 716 · 718~720 · 725



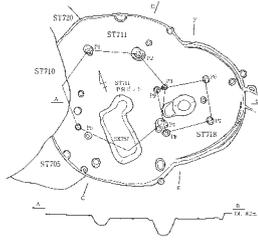
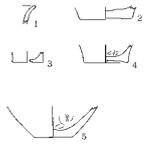
E7ST707 (第3分册E7-8图 P444) S=1/240



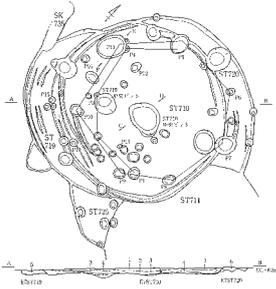
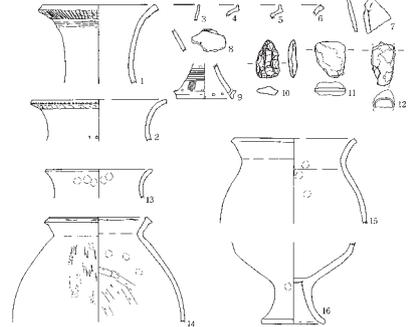
E7ST708 (第3分册E7-9图 P445) S=1/240



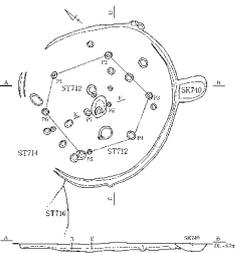
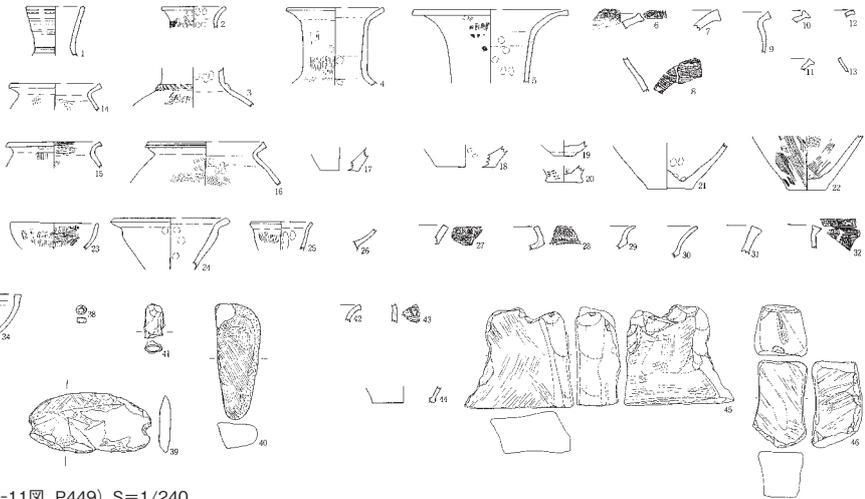
E7ST709 · 713 (第3分册E7-10图 P446) S=1/240



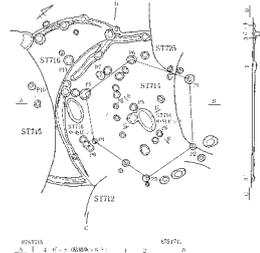
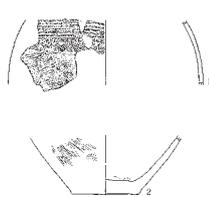
E7ST711 · 718
(第3分册E7-13图 P452)
S=1/240



E7ST710 · 719 · 720 · 725 (第3分册E7-11图 P449) S=1/240

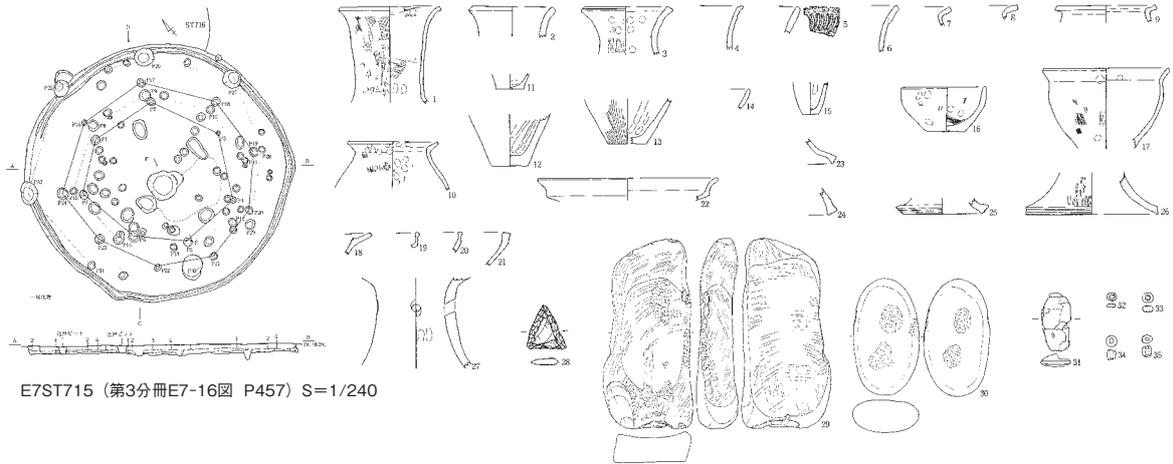


E7ST712 (第3分册E7-14图 P453) S=1/240

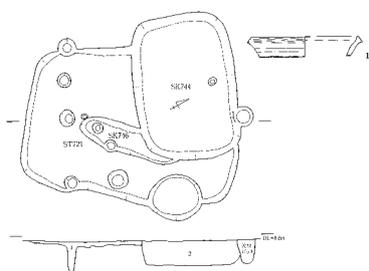


E7ST714 · 716 (第3分册E7-15图 P455) S=1/240

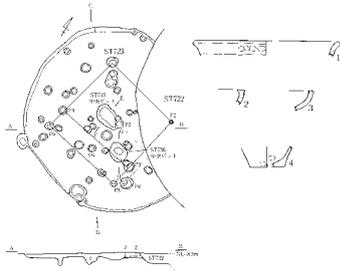




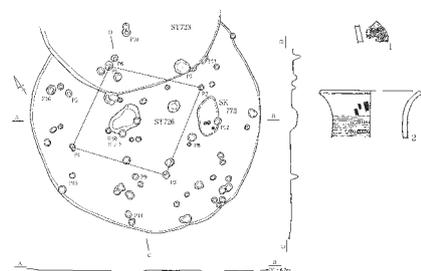
E7ST715 (第3分册E7-16图 P457) S=1/240



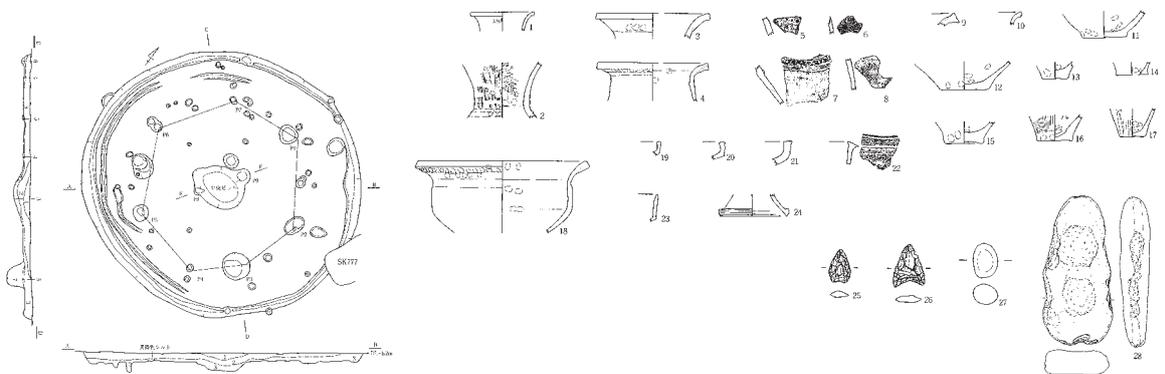
E7ST721 (第3分册E7-18图 P460) S=1/120



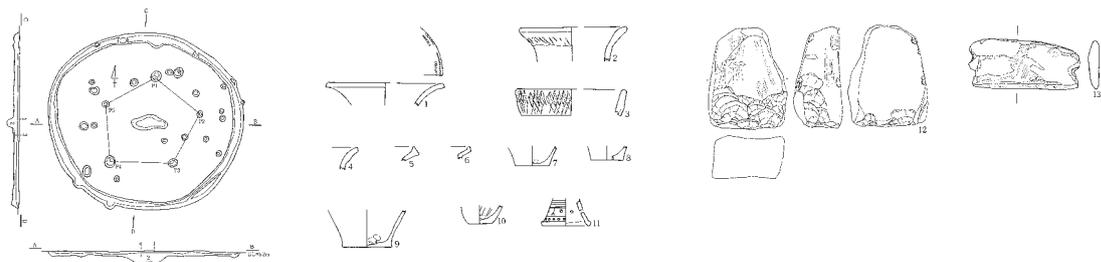
E7ST723 · 736 (第3分册E7-21图 P464) S=1/240



E7ST726 (第3分册E7-23图 P466) S=1/240

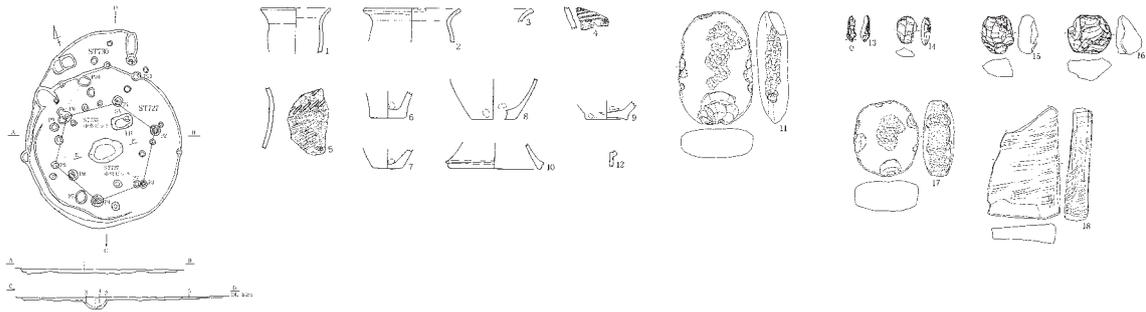


E7ST722 (第3分册E7-19图 P462) S=1/240

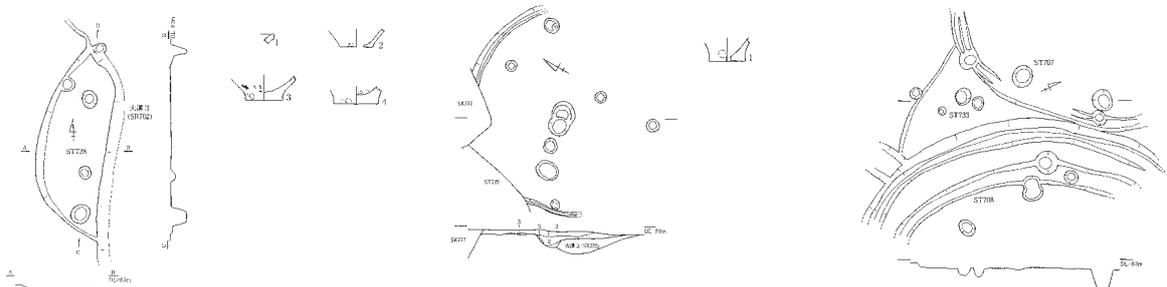


E7ST724 (第3分册E7-22图 P465) S=1/240

E7ST727 · 728 · 730 · 732 · 733 · 735 · 737 · 738、E8ST801



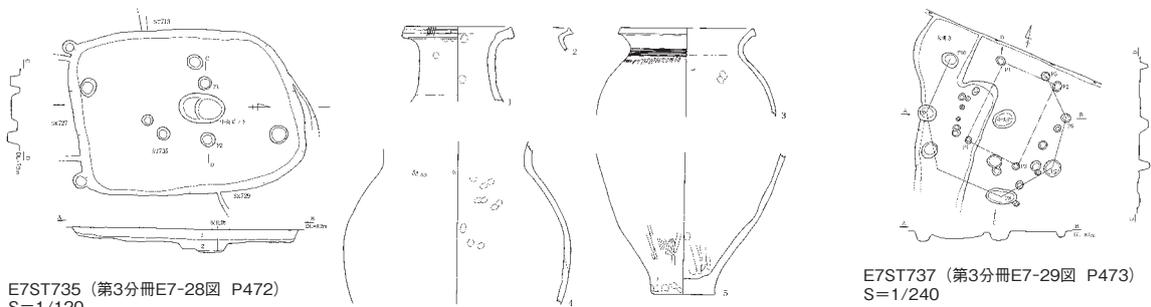
E7ST727 · 730 (第3分册E7-24图 P468) S=1/240



E7ST728 (第3分册E7-25图 P469) S=1/120

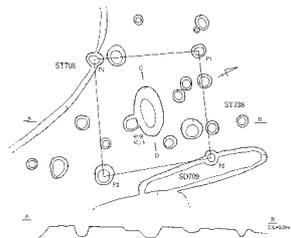
E7ST732 (第3分册E7-26图 P470) S=1/120

E7ST733 (第3分册E7-27图 P471) S=1/120

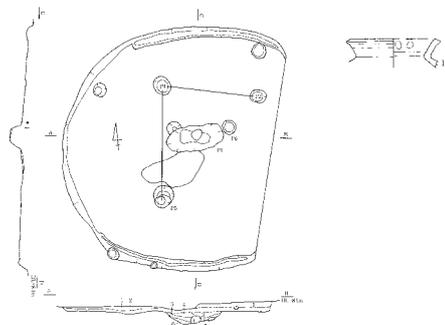


E7ST735 (第3分册E7-28图 P472) S=1/120

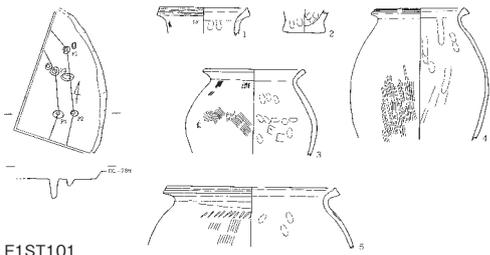
E7ST737 (第3分册E7-29图 P473) S=1/240



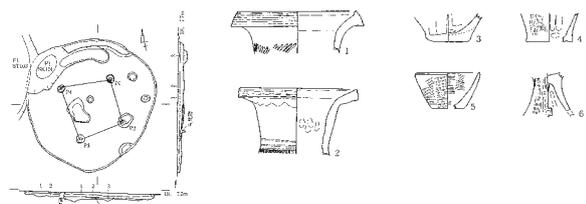
E7ST738 (第3分册E7-30图 P474) S=1/120



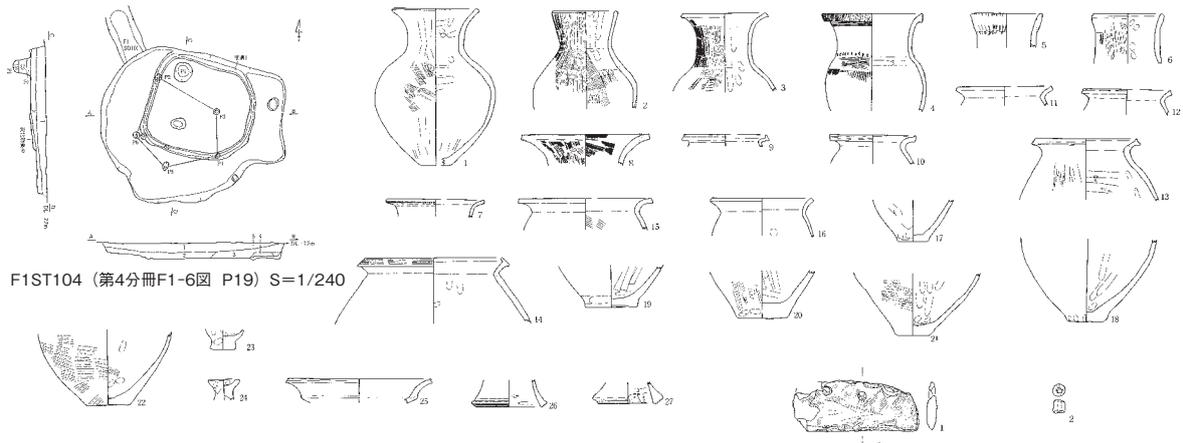
E8ST801 (第3分册E8-2图 P535) S=1/120



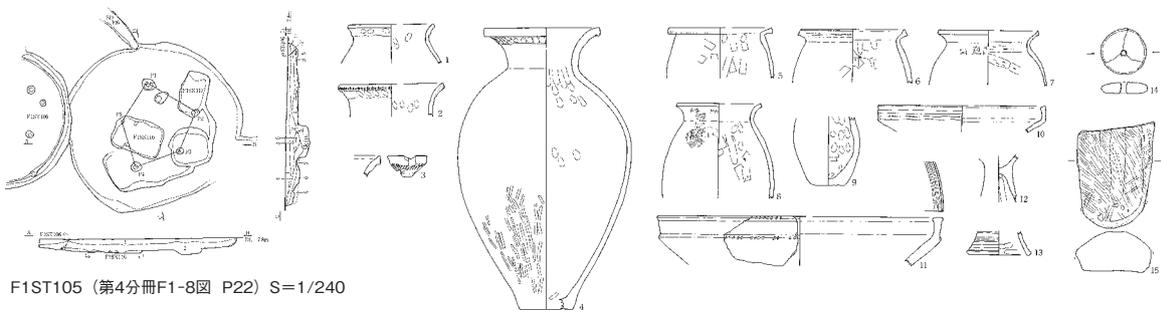
F1ST101
(第4分冊F1-3図 P15)
S=1/240



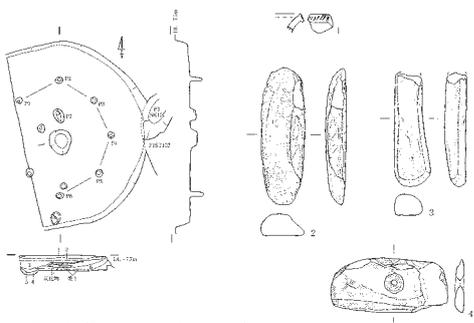
F1ST102 (第4分冊F1-4図 P16)
S=1/240



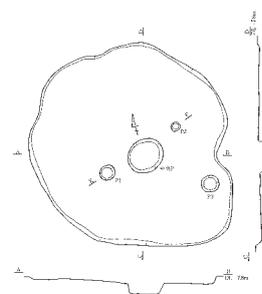
F1ST104 (第4分冊F1-6図 P19) S=1/240



F1ST105 (第4分冊F1-8図 P22) S=1/240

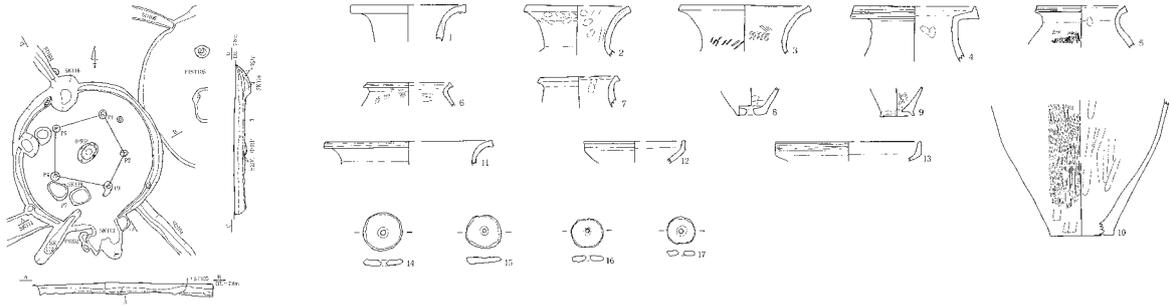


F1ST103 (第4分冊F1-5図 P17) S=1/240

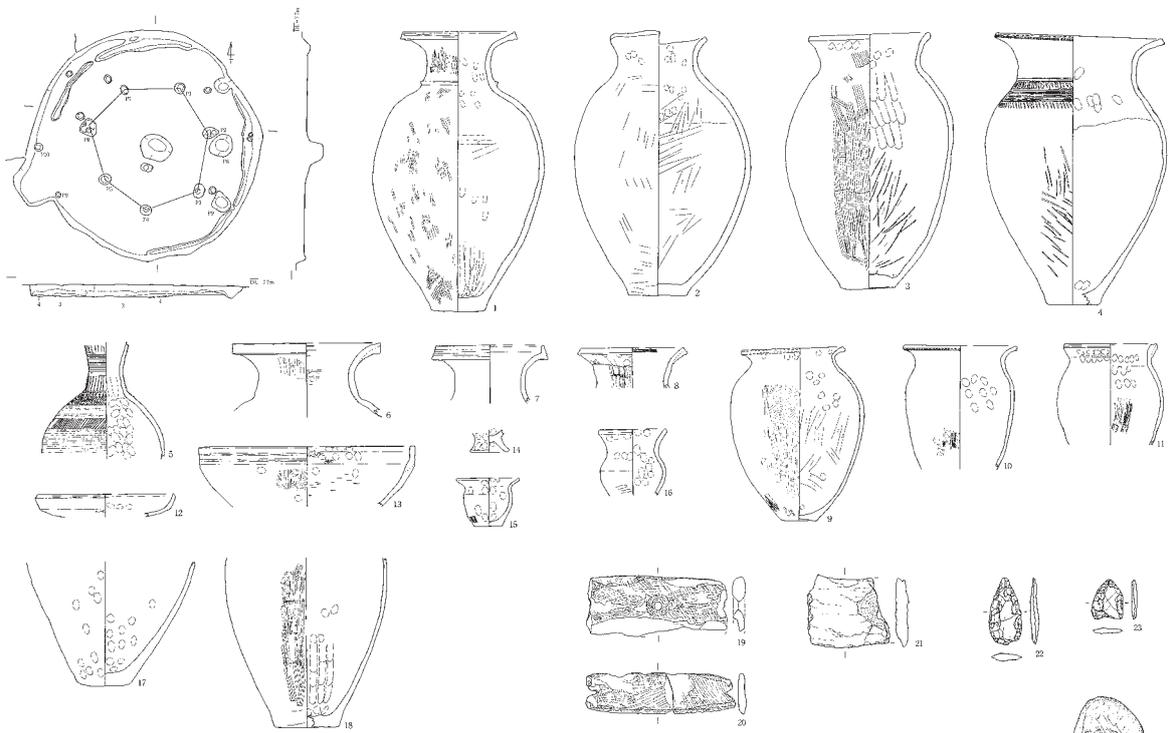


F1ST108 (第4分冊F1-11図 P25) S=1/120

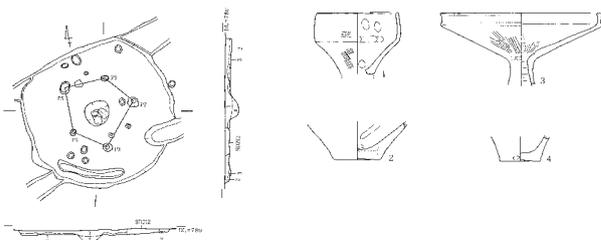
F1ST106 · F2ST202 · 203



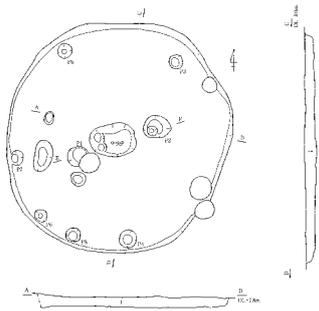
F1ST106 (第4分册F1-10图 P24) S=1/240



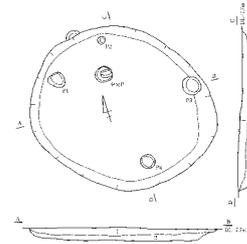
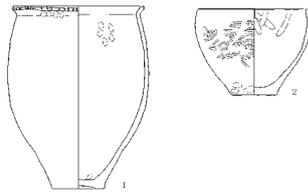
F2ST202 (第4分册F2-3图 P71) S=1/240



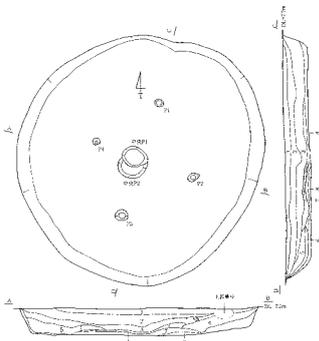
F2ST203 (第4分册F2-7图 P75) S=1/240



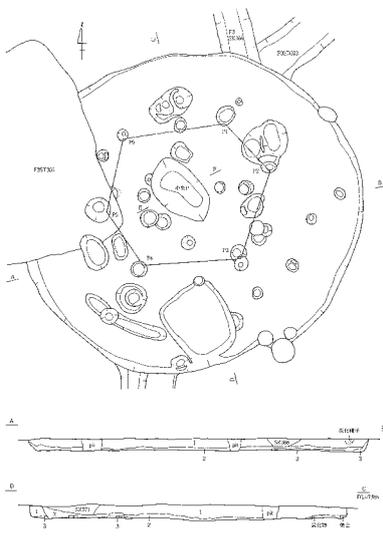
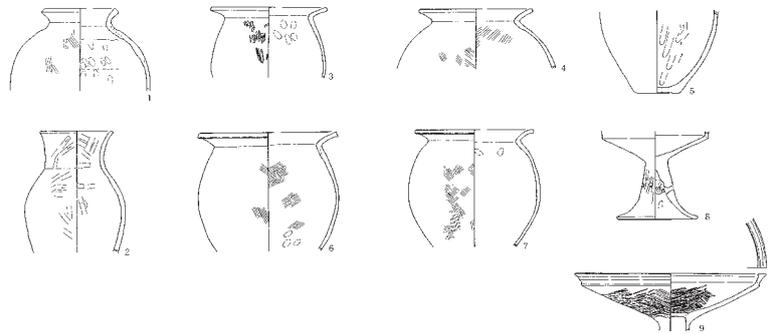
F3ST107 (第4分册F3-3图 P96) S=1/120



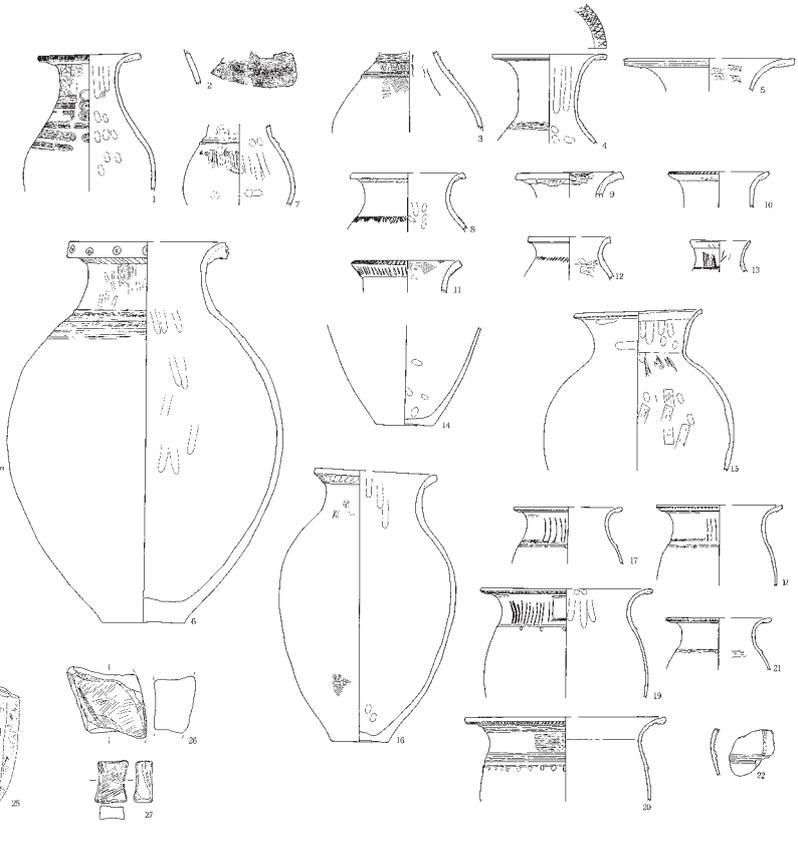
F3ST301 (第4分册F3-4图 P97) S=1/120



F3ST302 (第4分册F3-5图 P99) S=1/120

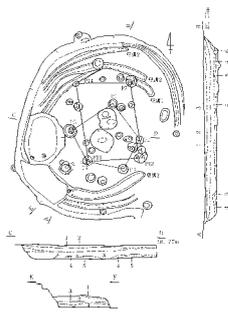


F3ST303 (第4分册F3-7图 P101) S=1/120

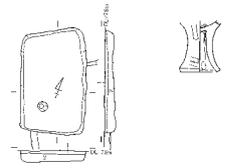
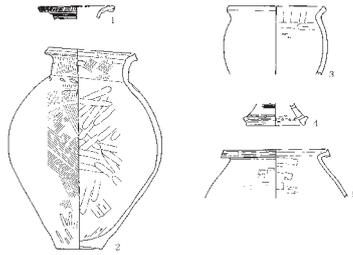


住居跡集成图 17

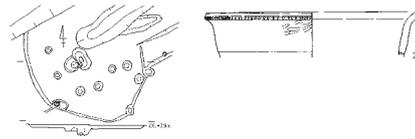
F3ST304~308、F4ST201・204・205



F3ST304 (第4分冊F3-11図 P106) S=1/240



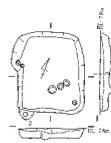
F3ST305 (第4分冊F3-12図 P108) S=1/240



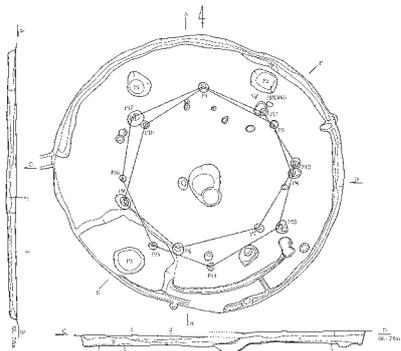
F3ST306 (第4分冊F3-12図 P108) S=1/240



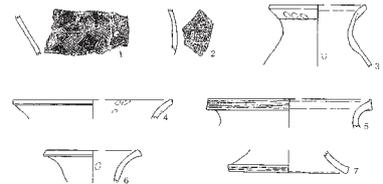
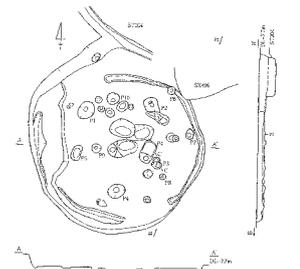
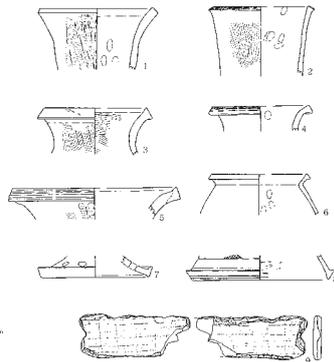
F3ST307 (第4分冊F3-12図 P108) S=1/240



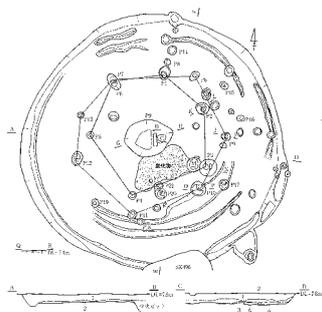
F3ST308 (第4分冊F3-12図 P108) S=1/240



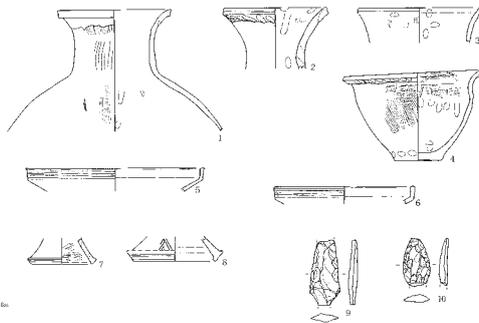
F4ST201 (第4分冊F4-4図 P157) S=1/240

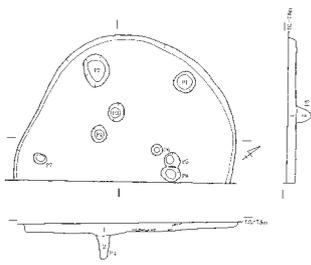


F4ST205 (第4分冊F4-6図 P160) S=1/240

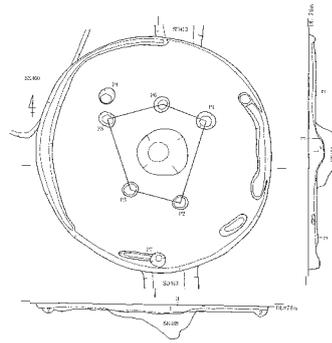


F4ST204 (第4分冊F4-5図 P159) S=1/240

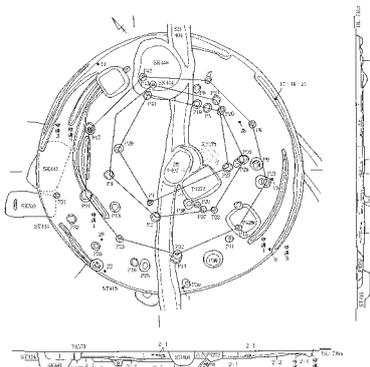
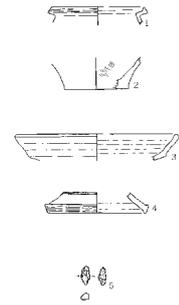




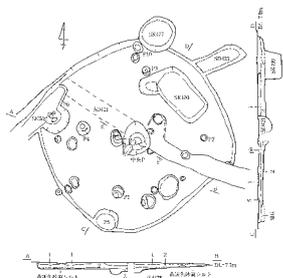
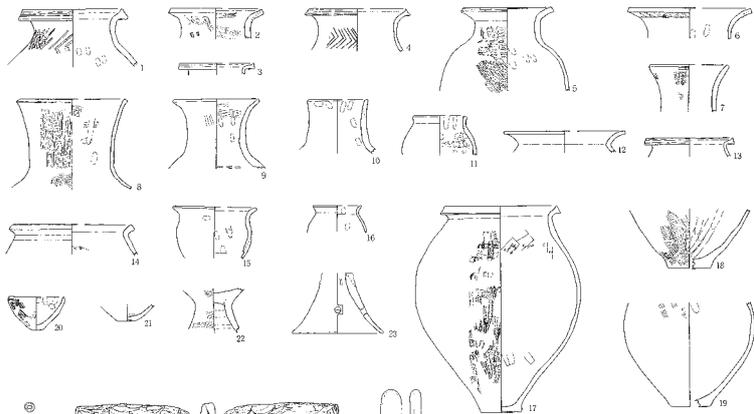
F4ST401 (第4分冊F4-7図 P161) S=1/120



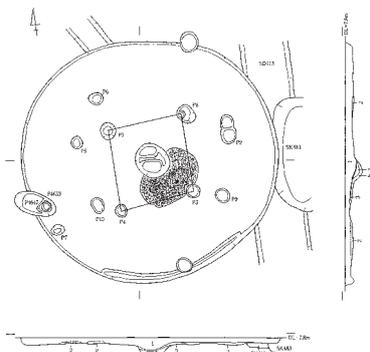
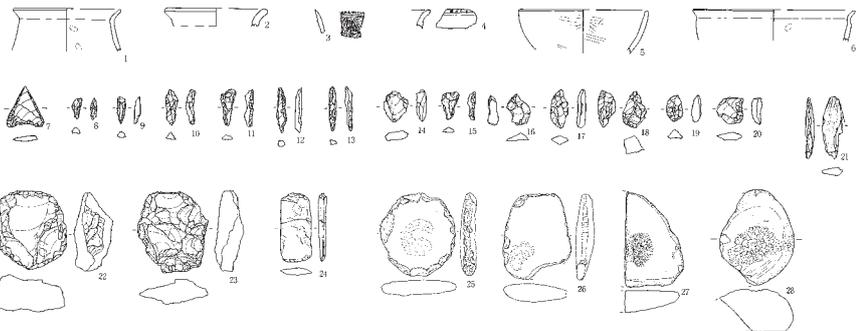
F4ST403 (第4分冊F4-11図 P168) S=1/120



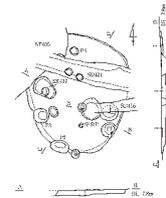
F4ST402 (第4分冊F4-8図 P163) S=1/240



F4ST405 (第4分冊F4-13図 P170) S=1/240

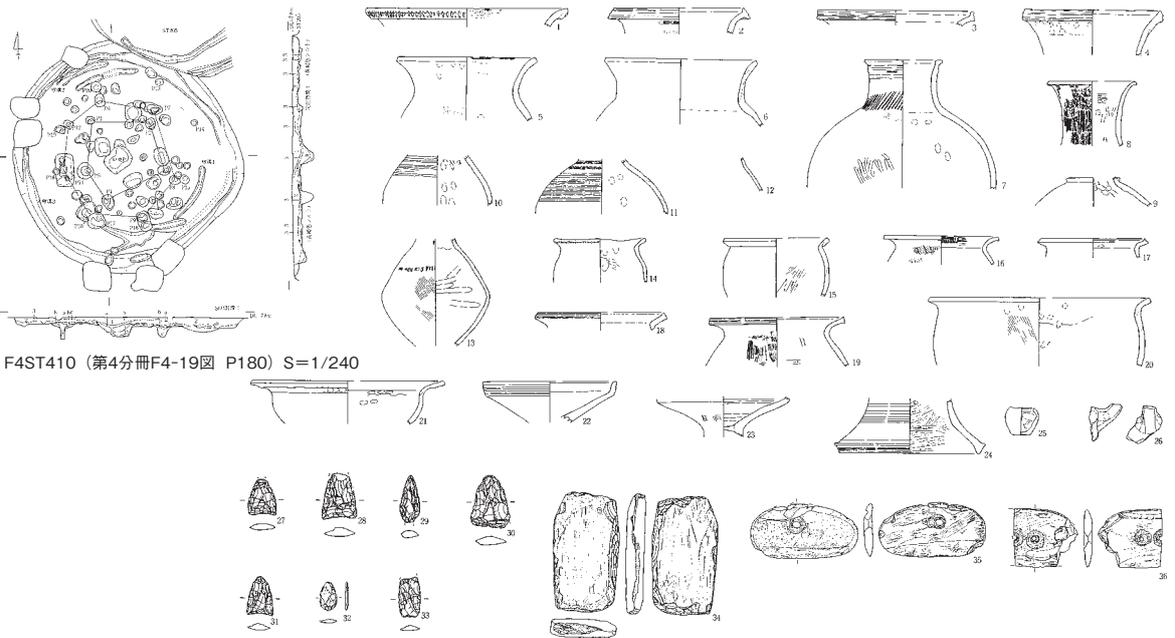
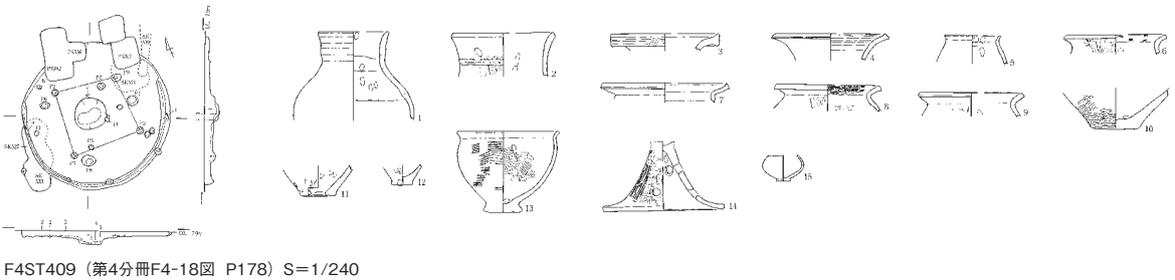
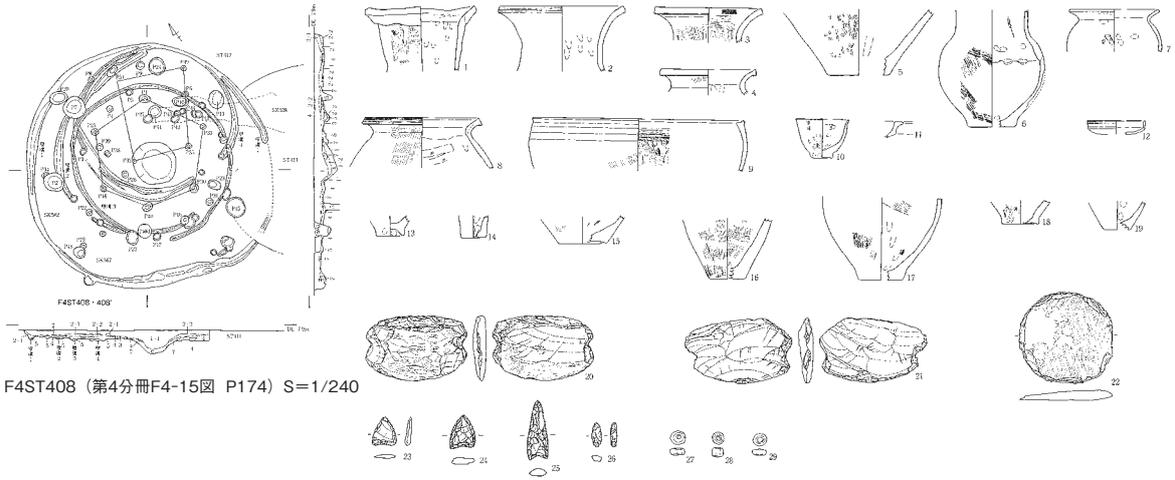


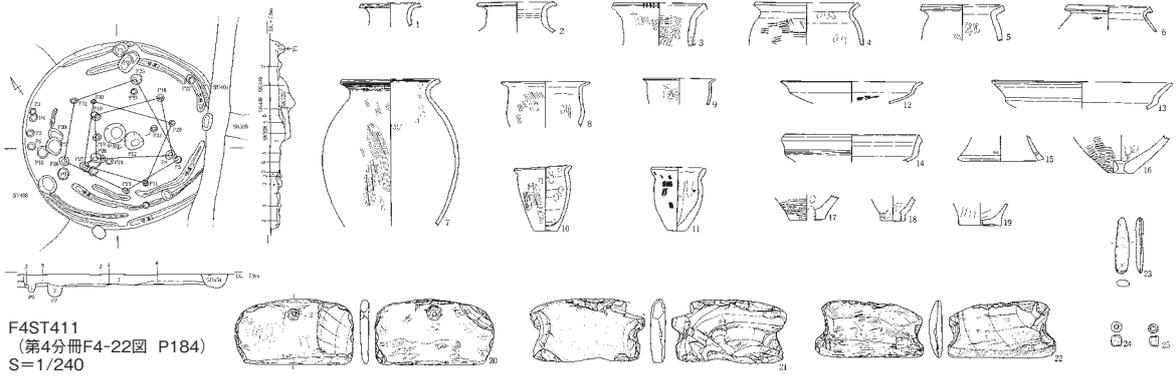
F4ST404 (第4分冊F4-12図 P169) S=1/120



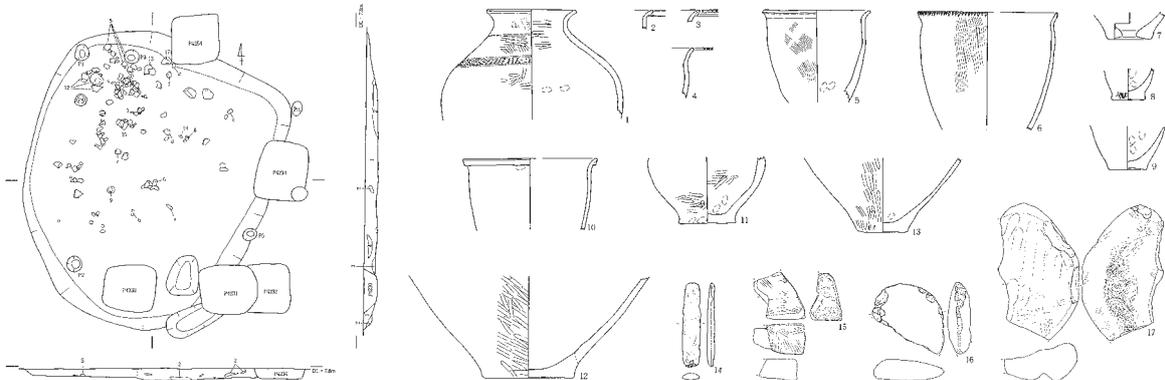
F4ST406 (第4分冊F4-14図 P171) S=1/240

F4ST408~410

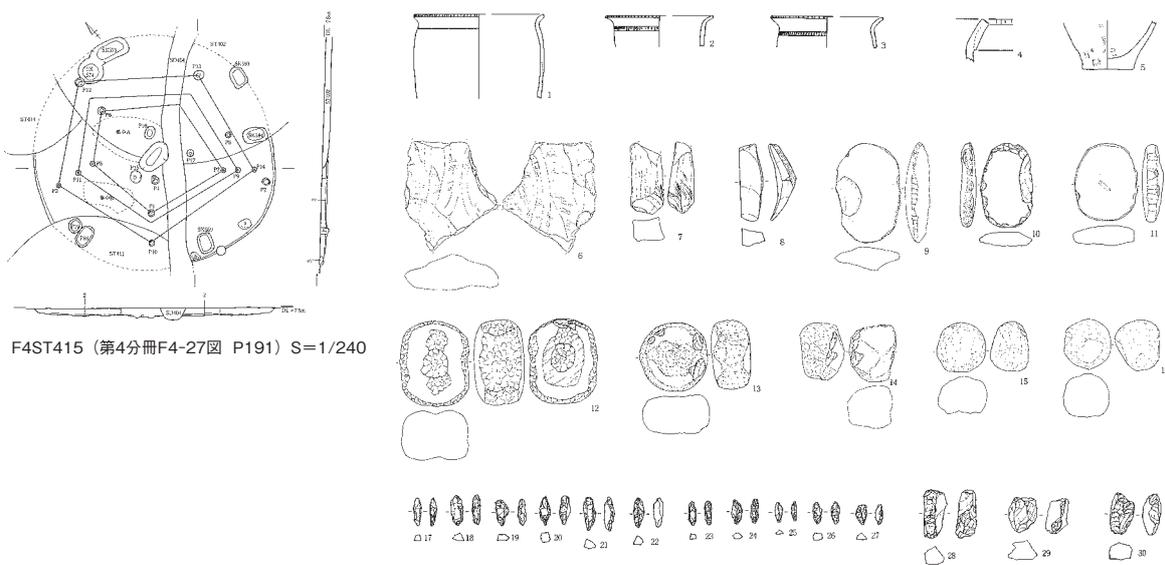




F4ST411
(第4分册F4-22图 P184)
S=1/240

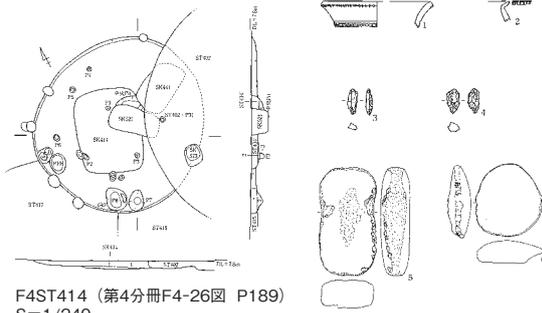


F4ST413 (第4分册F4-24图 P186) S=1/120

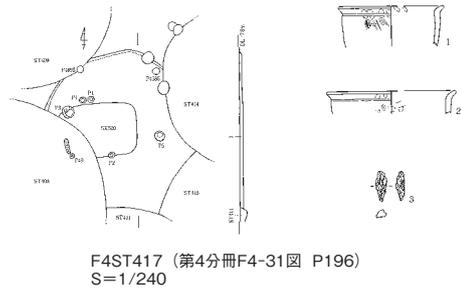


F4ST415 (第4分册F4-27图 P191) S=1/240

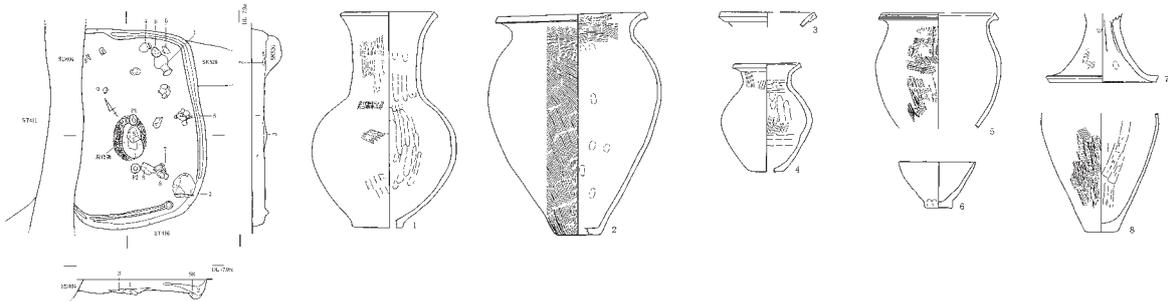
F4ST414 · 416~419 · 421 · 422



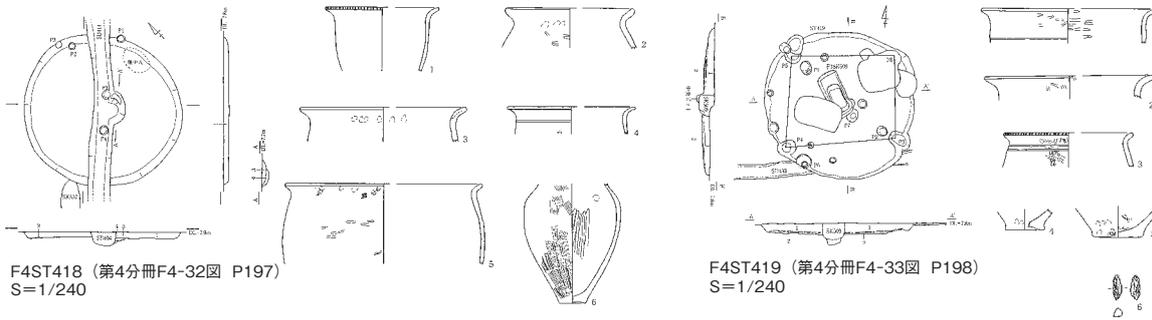
F4ST414 (第4分冊F4-26図 P189)
S=1/240



F4ST417 (第4分冊F4-31図 P196)
S=1/240

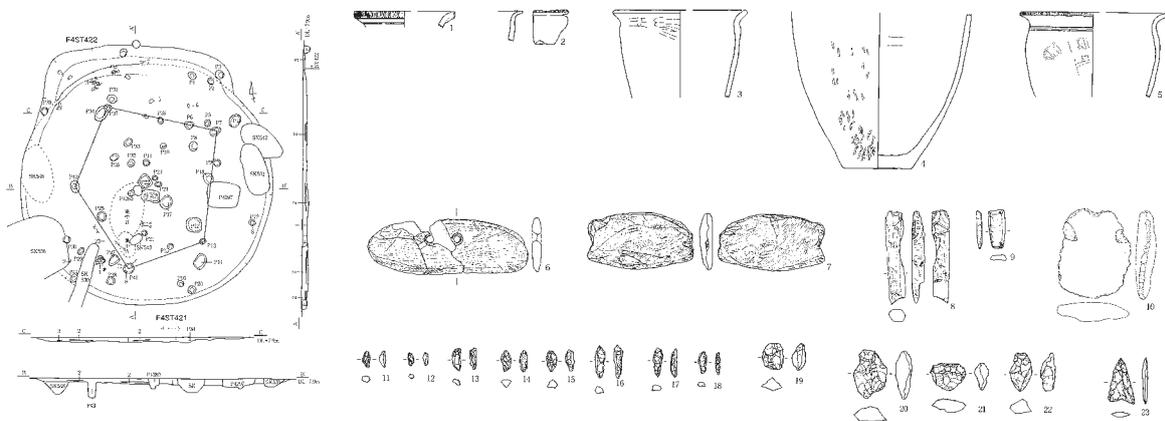


F4ST416 (第4分冊F4-29図 P193)
S=1/120

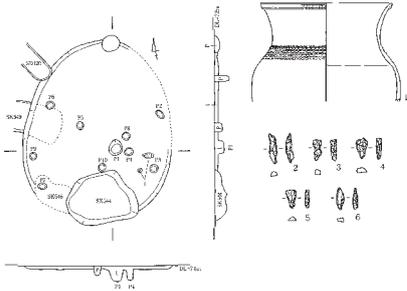


F4ST418 (第4分冊F4-32図 P197)
S=1/240

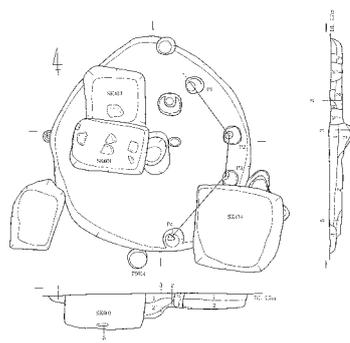
F4ST419 (第4分冊F4-33図 P198)
S=1/240



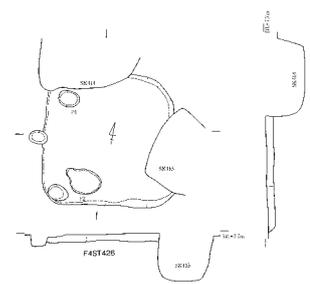
F4ST421 · 422 (第4分冊F4-35図 P202) S=1/240



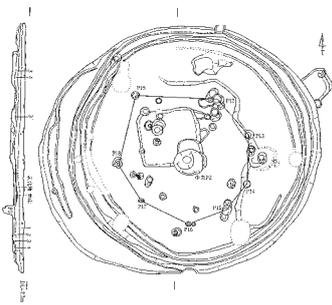
F4ST420 (第4分冊F4-34図 P200) S=1/240



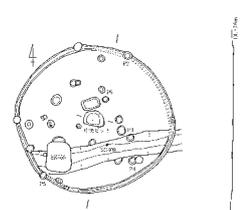
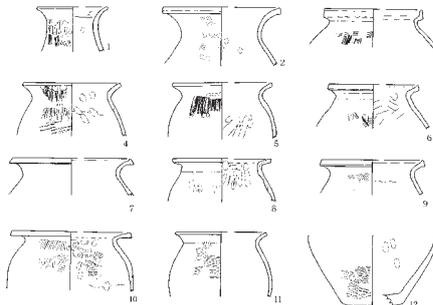
F4ST425 (第4分冊F4-37図 P205) S=1/120



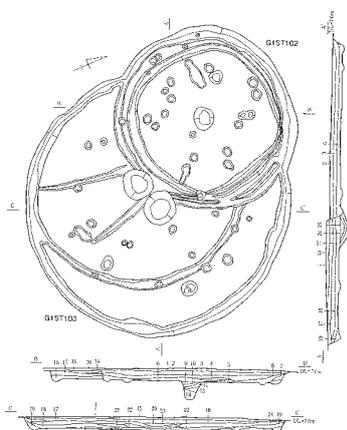
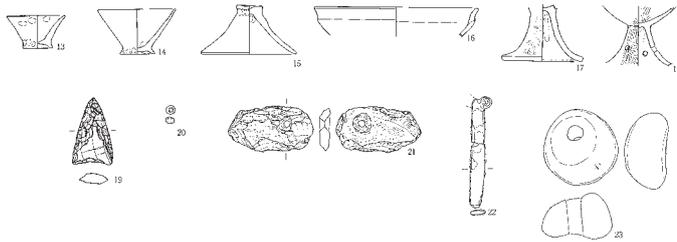
F4ST426 (第4分冊F4-37図 P205) S=1/120



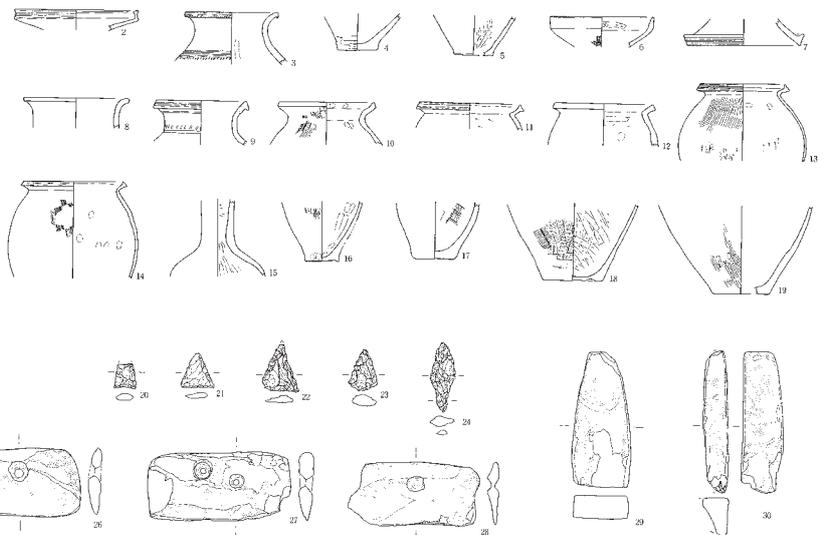
F4ST427 (第4分冊F4-38図 P207) S=1/240



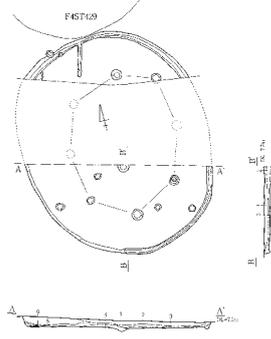
F4ST428 (第4分冊F4-40図 P209) S=1/240



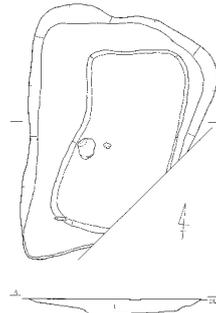
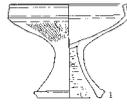
G1ST102・103 (第4分冊G-5図 P394) S=1/240



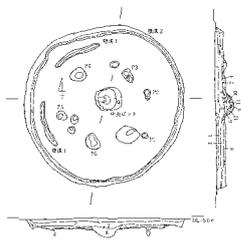
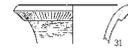
G1ST101・104、I1ST101~103



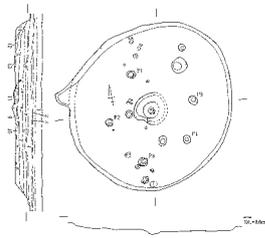
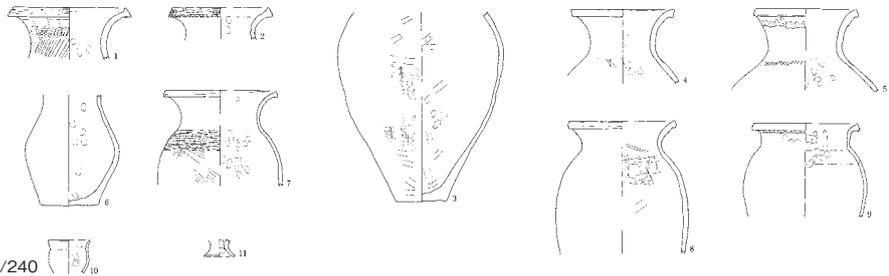
G1ST101 (第4分冊G-3図 P392) S=1/240



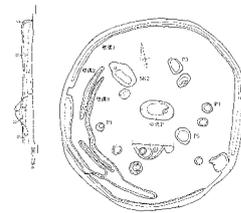
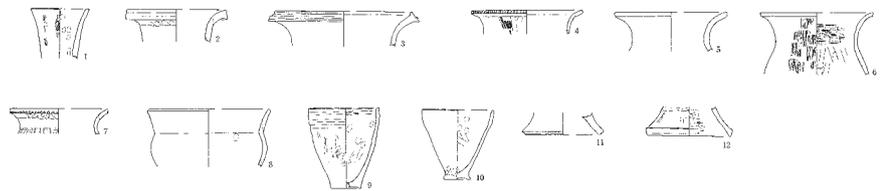
G1ST104 (第4分冊G-8図 P398) S=1/120



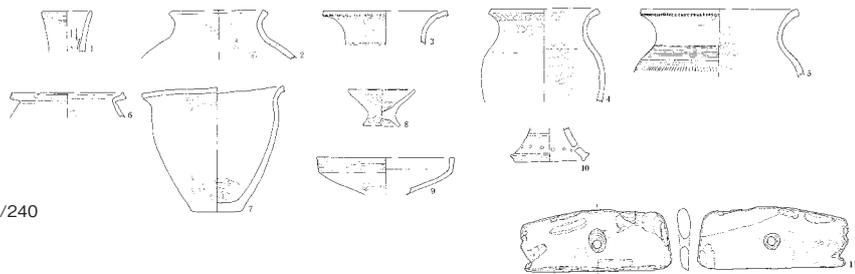
I1ST101 (第5分冊I1-2図 P11) S=1/240

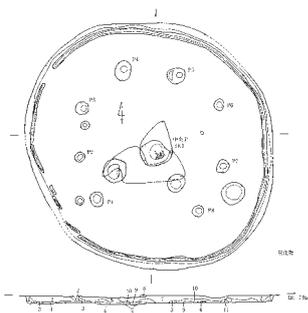


I1ST102 (第5分冊I1-4図 P13) S=1/240

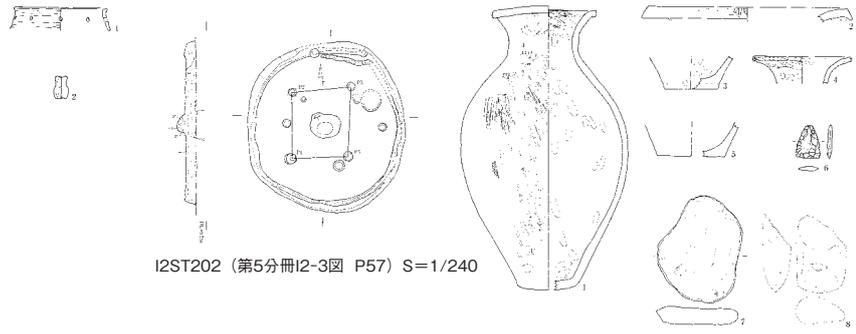


I1ST103 (第5分冊I1-5図 P14) S=1/240

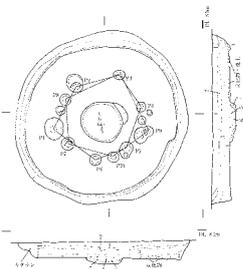




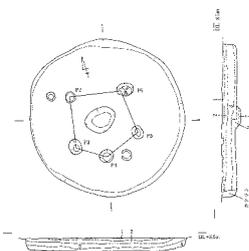
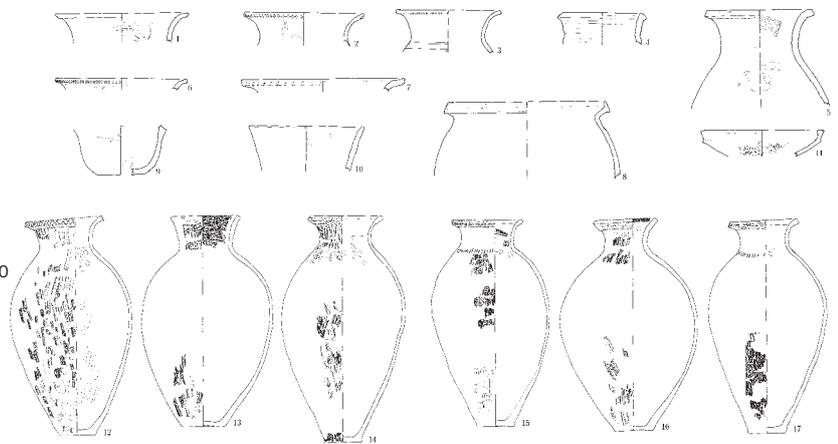
I1ST104 (第5分册I1-6图 P16) S=1/240



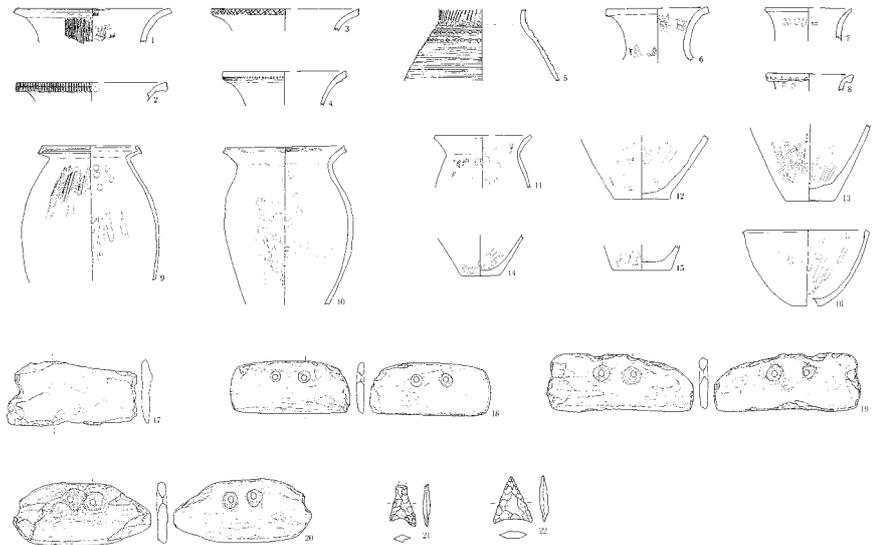
I2ST202 (第5分册I2-3图 P57) S=1/240



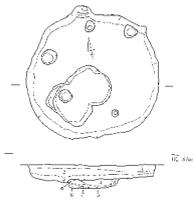
I2ST203 (第5分册I2-4图 P59) S=1/240



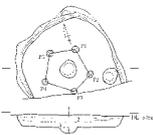
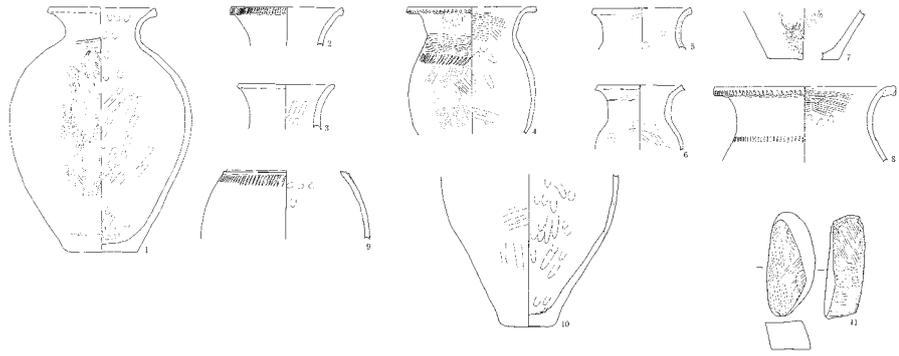
I2ST204 (第5分册I2-6图 P61) S=1/240



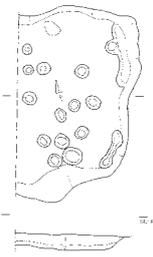
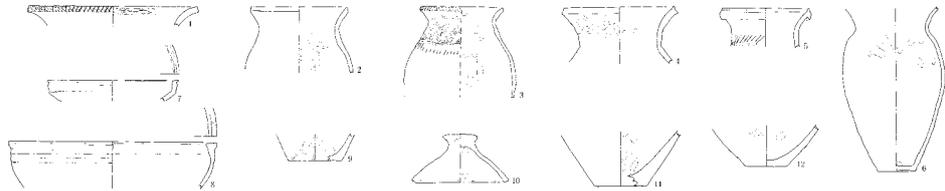
I2ST205~209



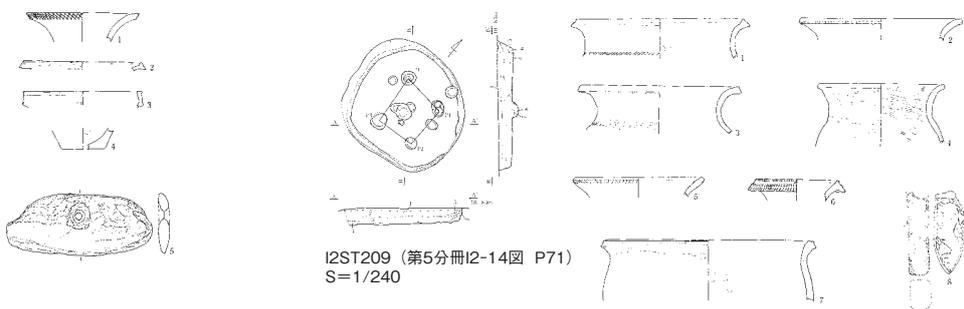
I2ST205 (第5分冊I2-8図 P64)
S=1/240



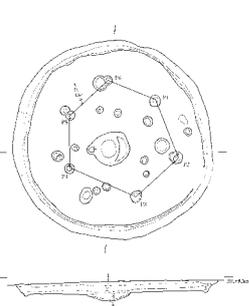
I2ST206
(第5分冊I2-10図 P66)
S=1/240



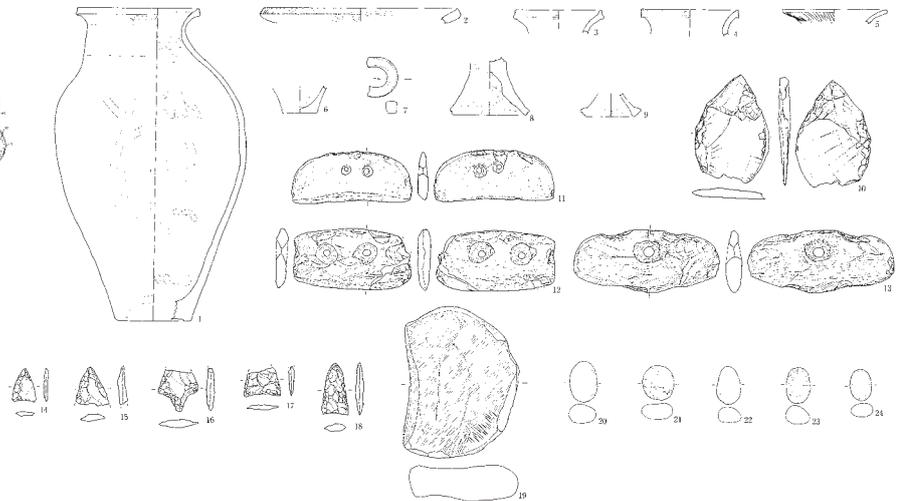
I2ST206
(第5分冊I2-11図 P68)
S=1/240



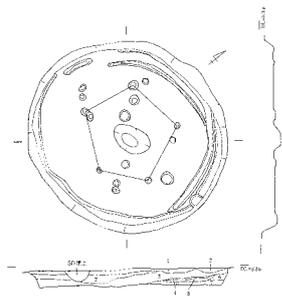
I2ST209 (第5分冊I2-14図 P71)
S=1/240



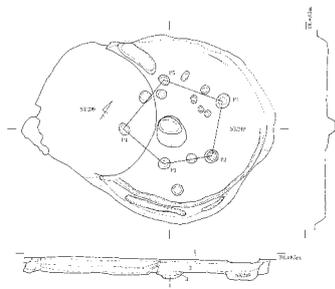
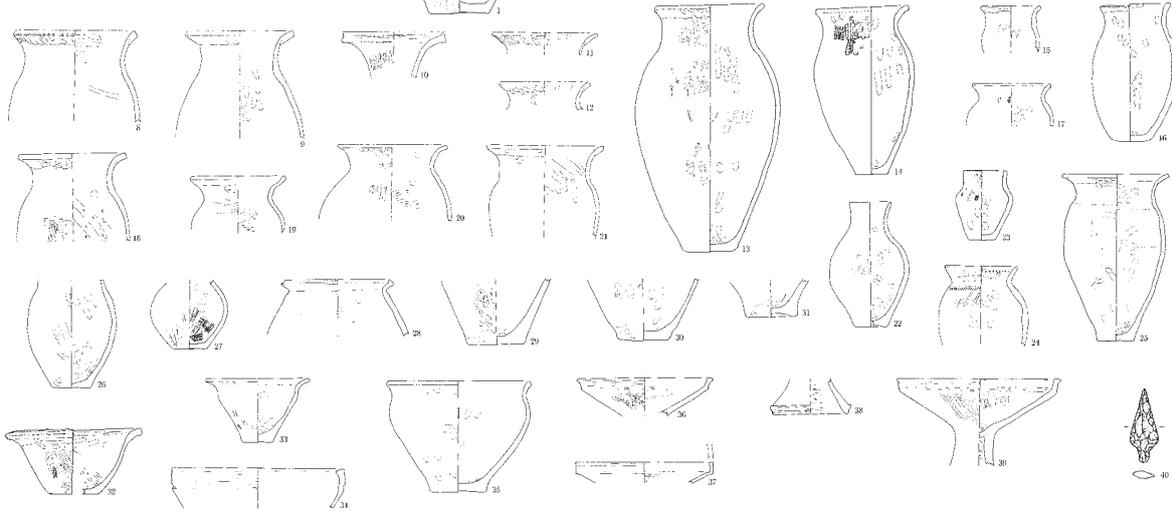
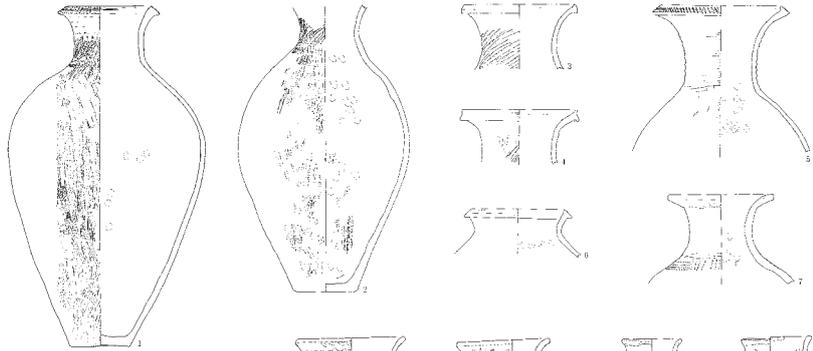
I2ST208
(第5分冊I2-11図 P68)
S=1/240



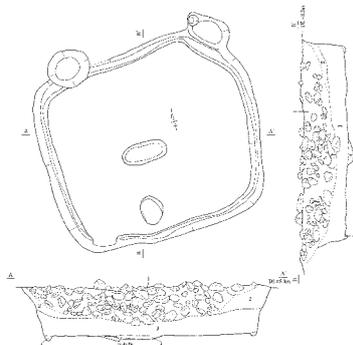
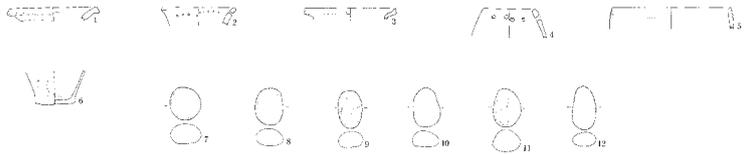
住居跡集成図 26



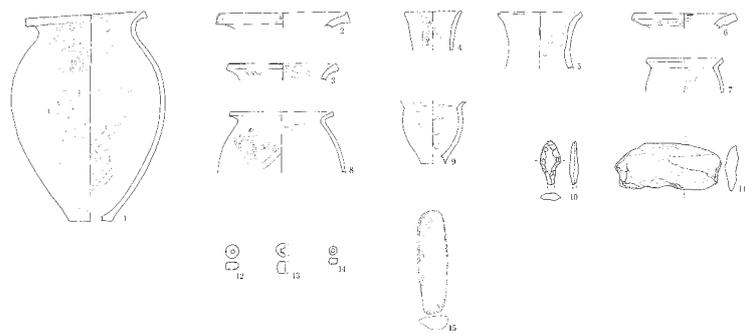
I2ST210 (第5分冊I2-15図 P73) S=1/240



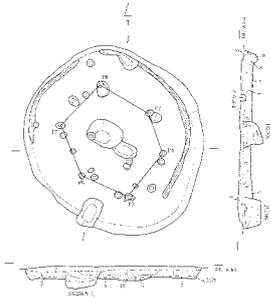
I2ST211 (第5分冊I2-19図 P78) S=1/240



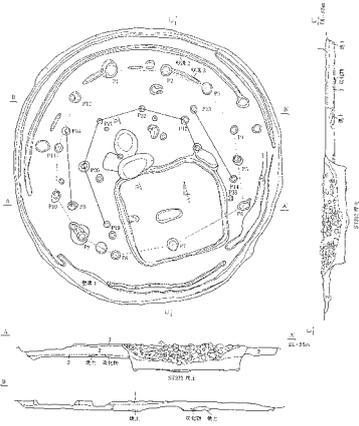
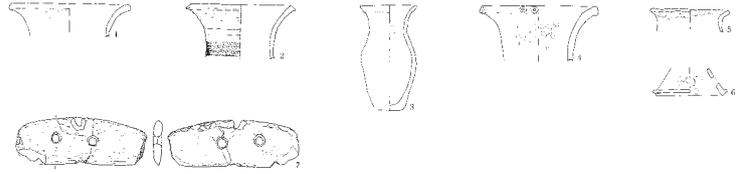
I2ST212 (第5分冊I2-20図 P79) S=1/120



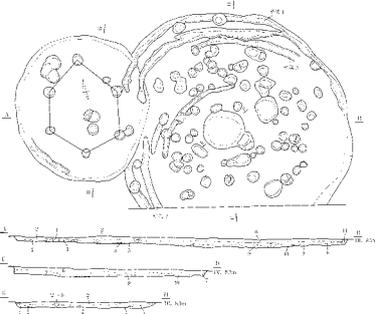
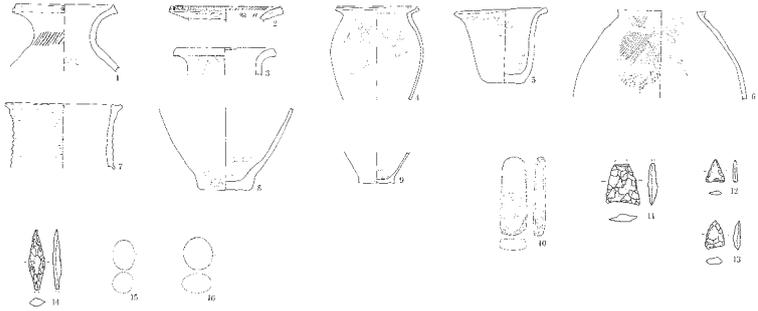
I2ST213~216 · 218 · 219



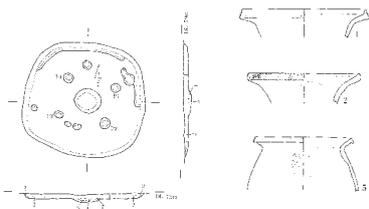
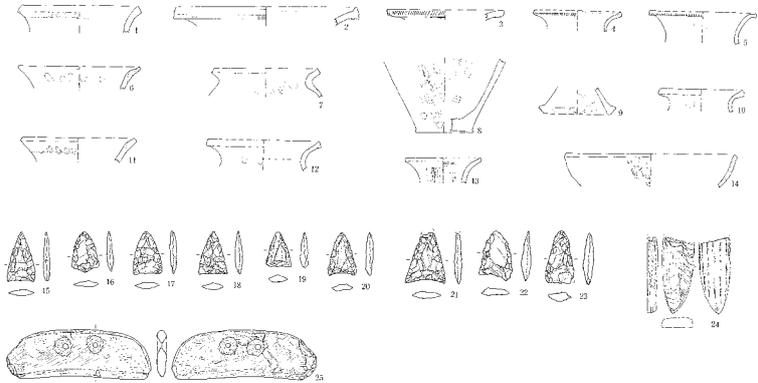
I2ST213 (第5分册I2-22图 P81) S=1/240



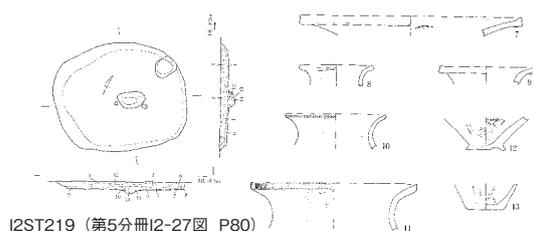
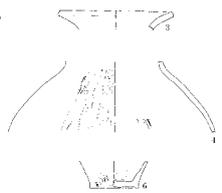
I2ST214 (第5分册I2-23图 P83) S=1/240



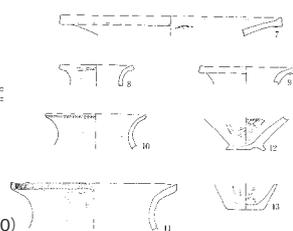
I2ST215 · 216 (第5分册I2-25图 P86) S=1/240



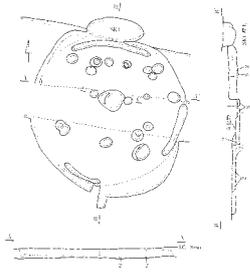
I2ST218 (第5分册I2-27图 P88) S=1/240



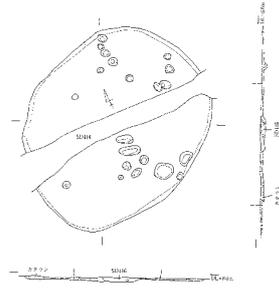
I2ST219 (第5分册I2-27图 P80) S=1/240



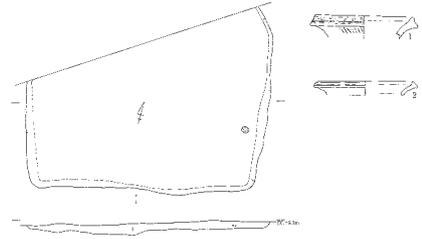
I3ST302、I4ST401~409



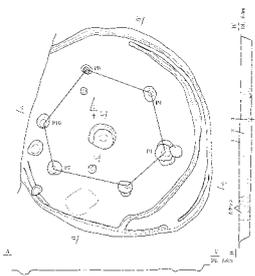
I3ST302 (第5分冊I3-2図 P154) S=1/240



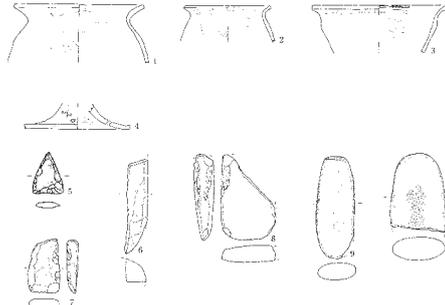
I4ST401 (第5分冊I4-3図 P165) S=1/240



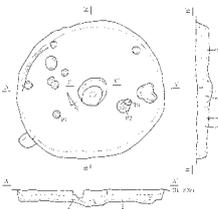
I4ST403 (第5分冊I4-5図 P167) S=1/120



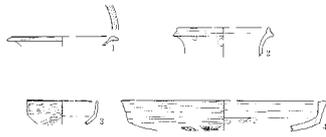
I4ST402 (第5分冊I4-4図 P166) S=1/240



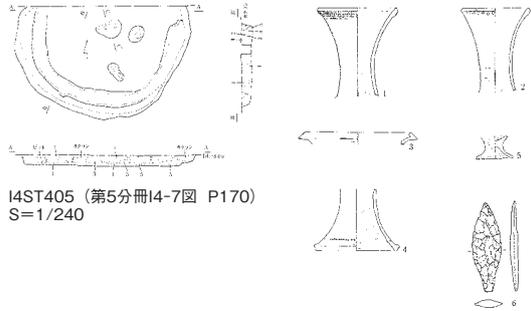
I4ST406 (第5分冊I4-8図 P171) S=1/240



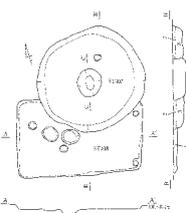
I4ST404 (第5分冊I4-6図 P168) S=1/240



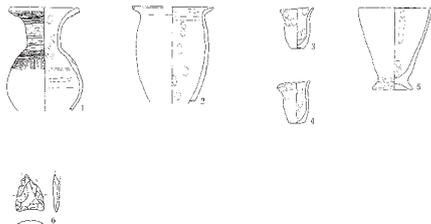
I4ST405 (第5分冊I4-7図 P170) S=1/240



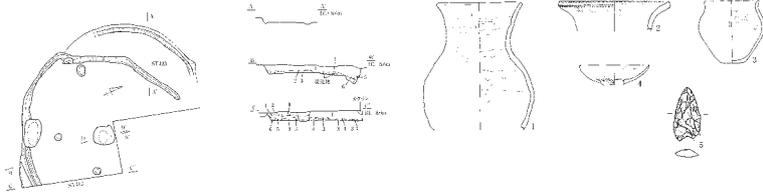
I4ST409 (第5分冊I4-10図 P173) S=1/240



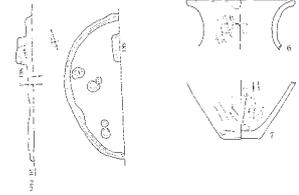
I4ST407・408 (第5分冊I4-9図 P172) S=1/240



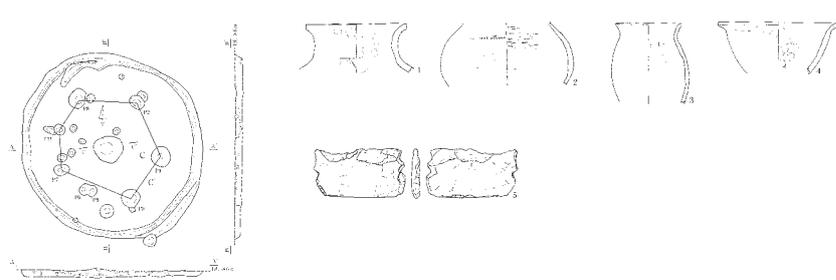
I4ST412~416・418~422



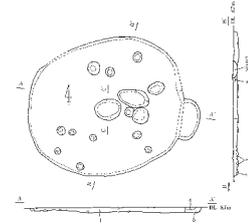
I4ST412・423 (第5分冊I4-11図 P175) S=1/240



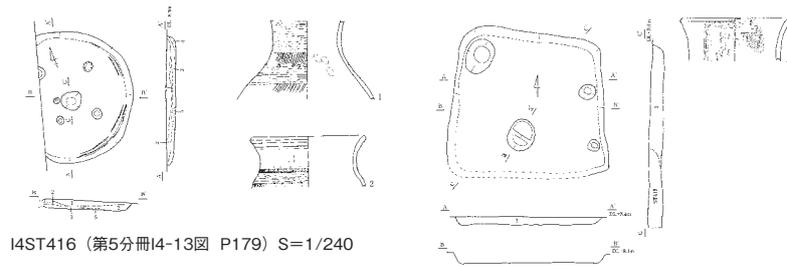
I4ST413 (第5分冊I4-11図 P175) S=1/240



I4ST414 (第5分冊I4-12図 P177) S=1/240

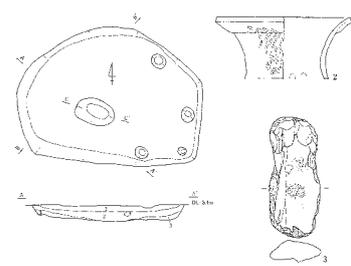


I4ST415 (第5分冊I4-13図 P179) S=1/240

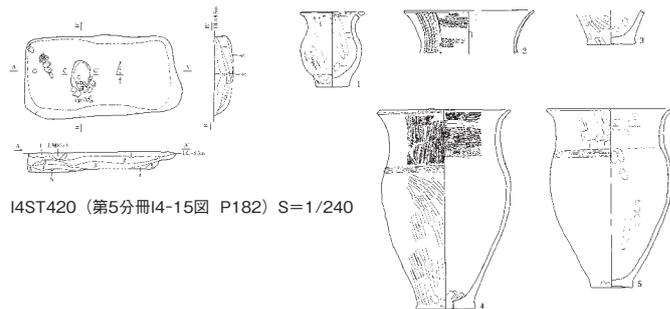


I4ST416 (第5分冊I4-13図 P179) S=1/240

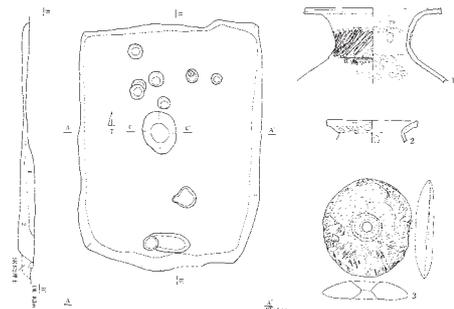
I4ST418 (第5分冊I4-14図 P181) S=1/120



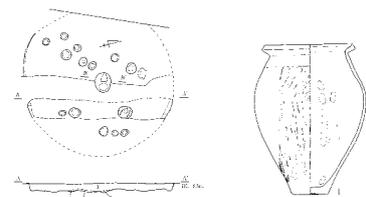
I4ST419 (第5分冊I4-14図 P181) S=1/120



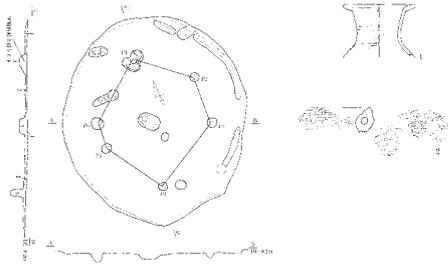
I4ST420 (第5分冊I4-15図 P182) S=1/240



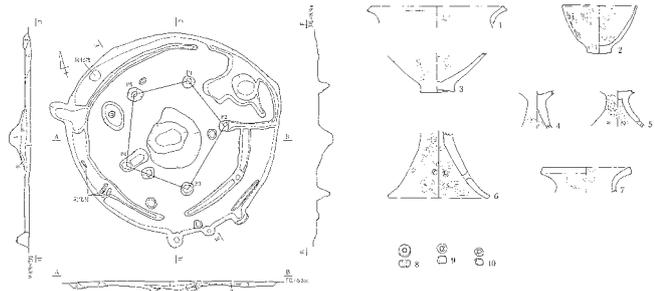
I4ST421 (第5分冊I4-16図 P184) S=1/120



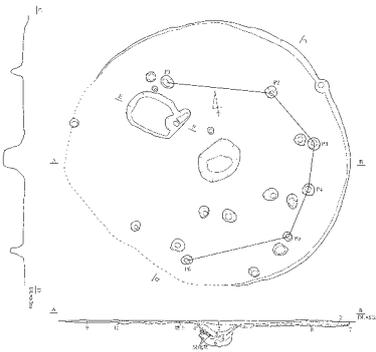
I4ST422 (第5分冊I4-17図 P185) S=1/240



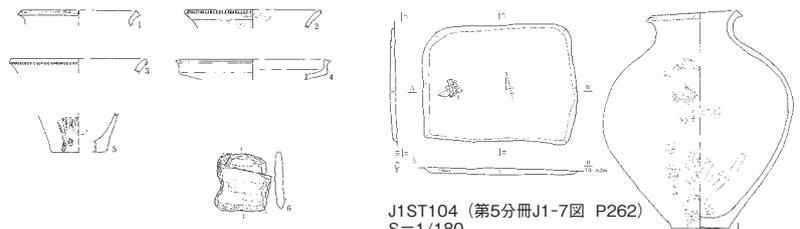
J1ST101 (第5分冊J1-2図 P257) S=1/240



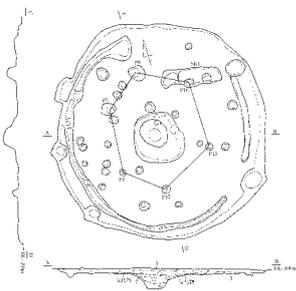
J1ST102 (第5分冊J1-3図 P258) S=1/240



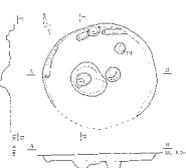
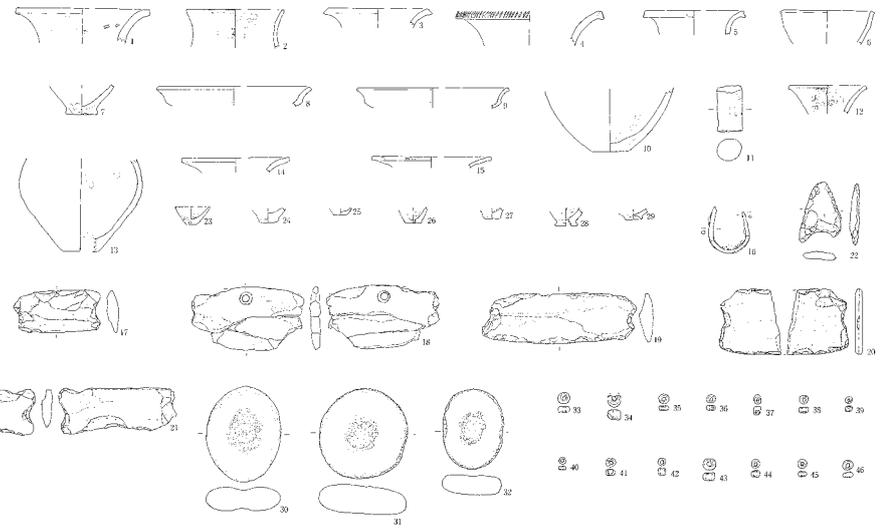
J1ST103 (第5分冊J1-5図 P260) S=1/240



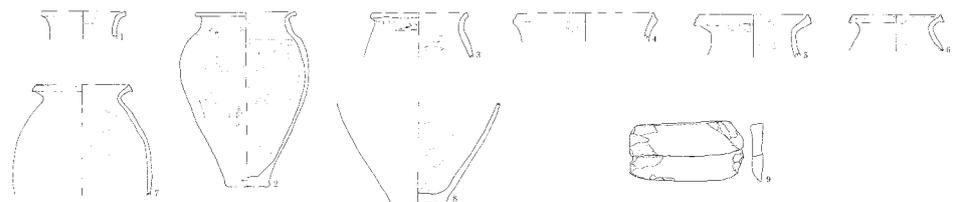
J1ST104 (第5分冊J1-7図 P262) S=1/180



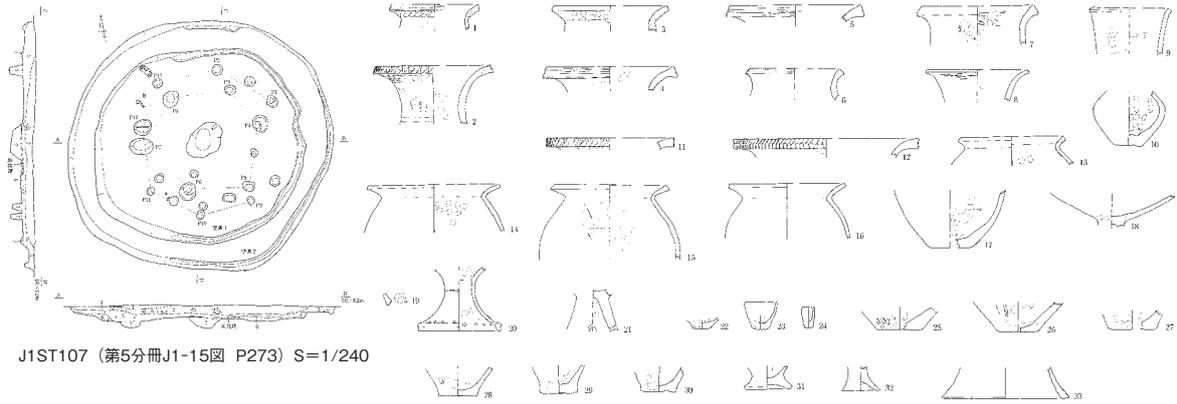
J1ST105 (第5分冊J1-8図 P264) S=1/240



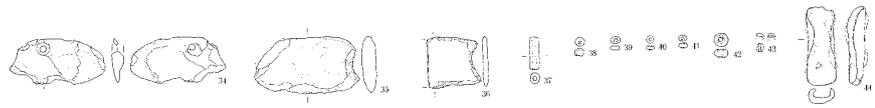
J1ST106 (第5分冊J1-11図 P267) S=1/240



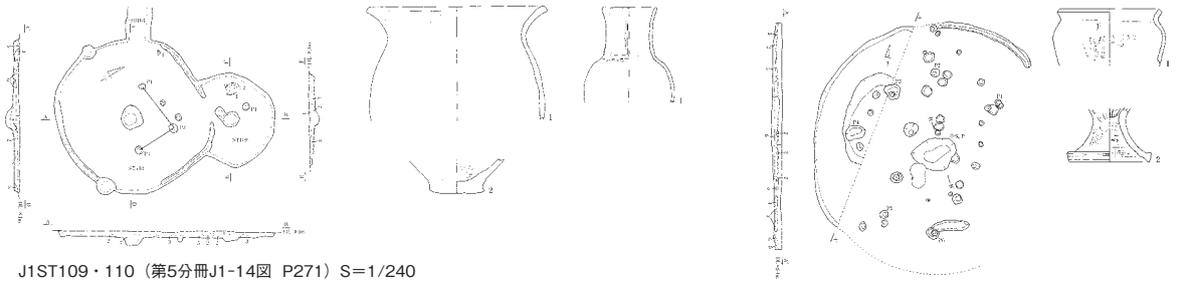
J1ST107~110、J3ST301・302



J1ST107 (第5分冊J1-15図 P273) S=1/240

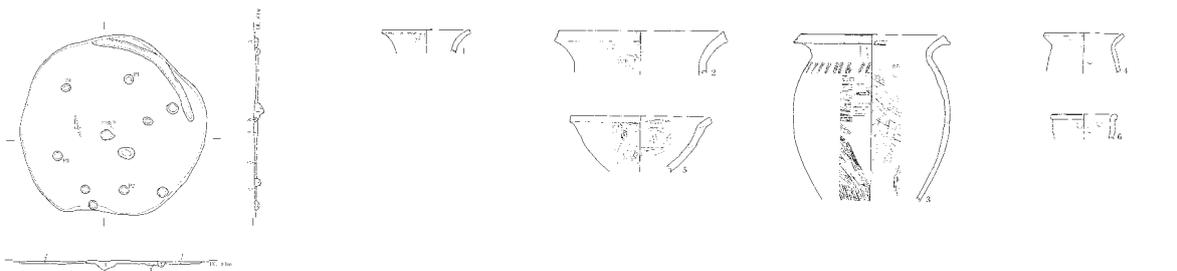


J1ST108 (第5分冊J1-13図 P269) S=1/240

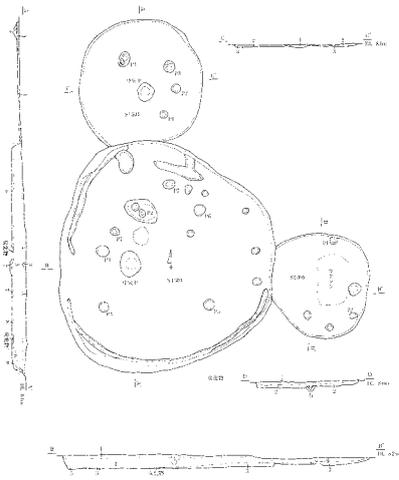


J1ST109・110 (第5分冊J1-14図 P271) S=1/240

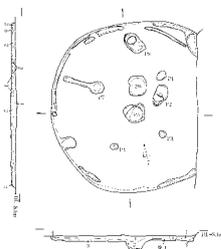
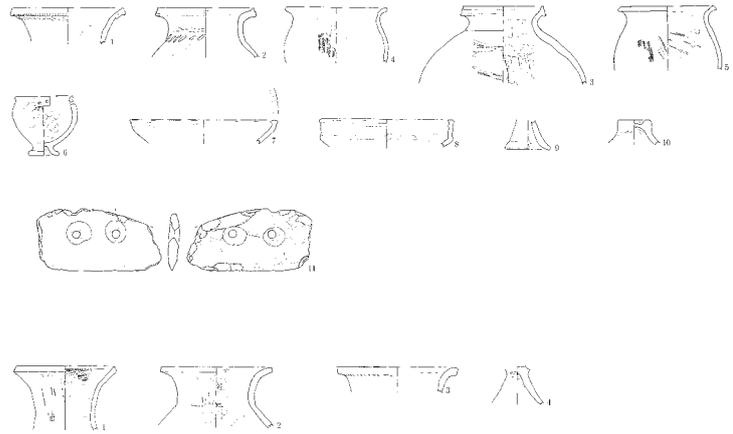
J3ST302 (第5分冊J3-3図 P294) S=1/120



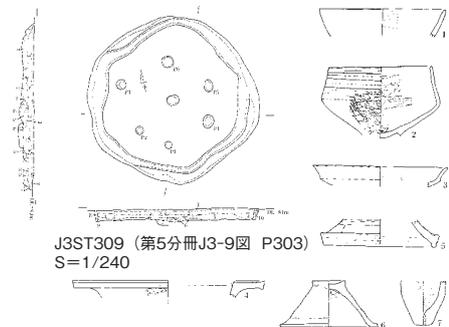
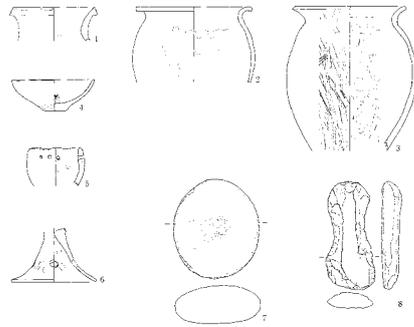
J3ST301 (第5分冊J3-2図 P293) S=1/240



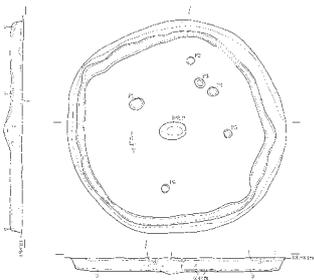
J3ST303~305 (第5分冊J3-4図 P296) S=1/240



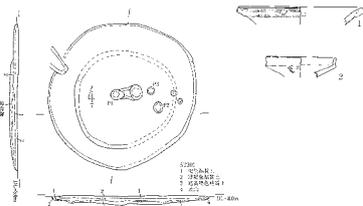
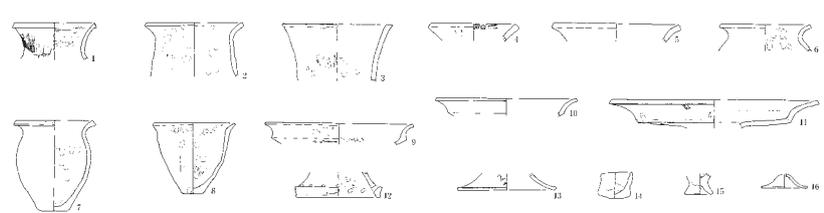
J3ST307
(第5分冊J3-7図 P300)
S=1/240



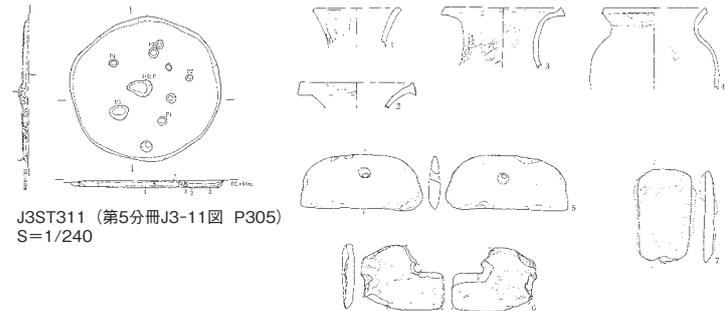
J3ST309 (第5分冊J3-9図 P303)
S=1/240



J3ST308 (第5分冊J3-8図 P302) S=1/240

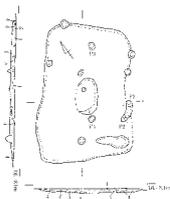


J3ST310 (第5分冊J3-10図 P305) S=1/240

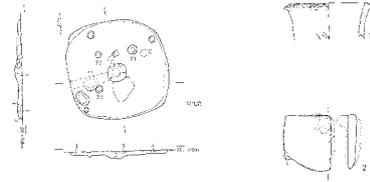


J3ST311 (第5分冊J3-11図 P305)
S=1/240

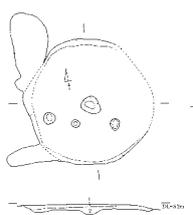
J3ST312・313、J4ST401・402・404



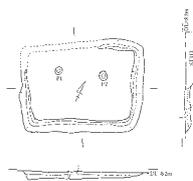
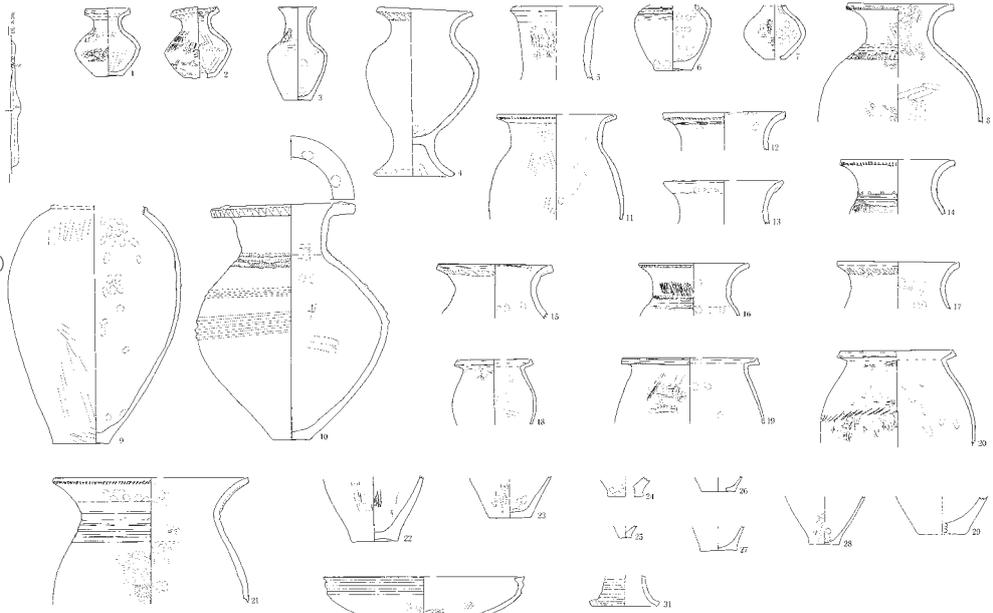
J3ST312 (第5分冊J3-13図 P307) S=1/240



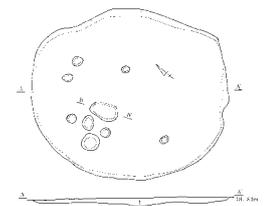
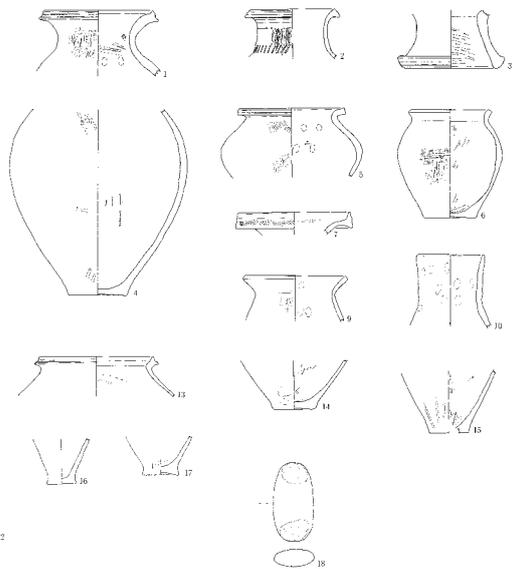
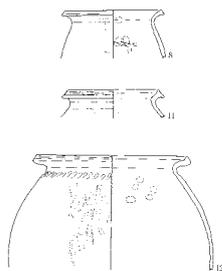
J3ST313 (第5分冊J3-14図 P307) S=1/240



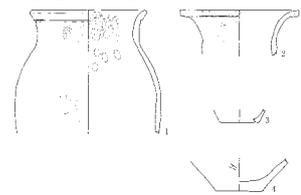
J4ST401
(第5分冊J4-2図 P335)
S=1/240



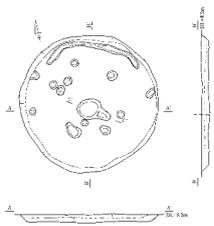
J4ST402
(第5分冊J4-6図 P339)
S=1/240



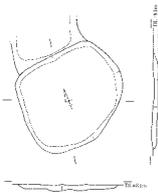
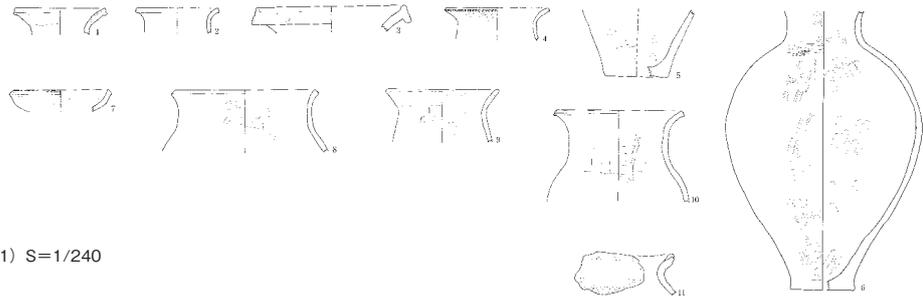
J4ST404
(第5分冊J4-10図 P343) S=1/240



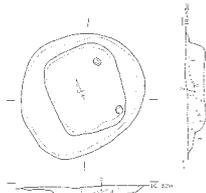
住居跡集成図 34



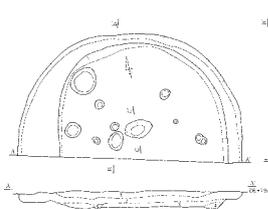
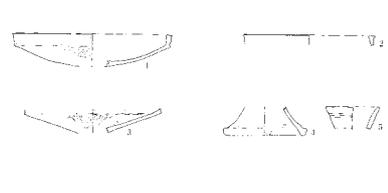
J4ST403 (第5分冊J4-8図 P341) S=1/240



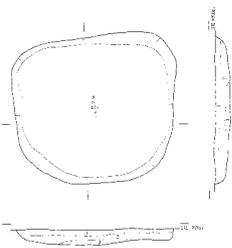
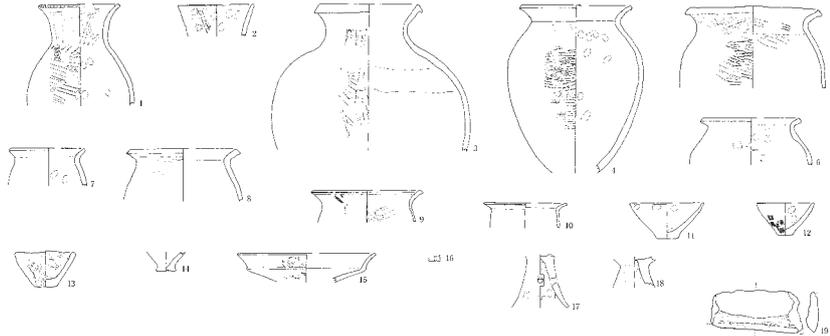
J4ST405 (第5分冊J4-11図 P344) S=1/240



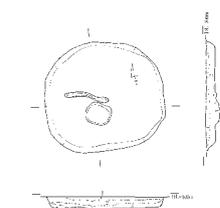
J4ST406 (第5分冊J4-12図 P345) S=1/240



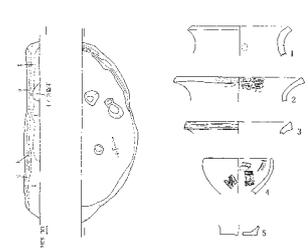
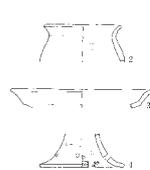
J4ST407 (第5分冊J4-13図 P346) S=1/240



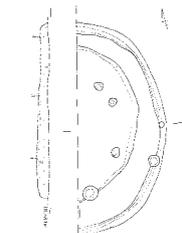
J4ST408 (第5分冊J4-15図 P349) S=1/120



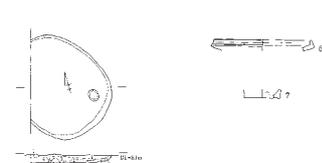
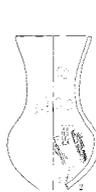
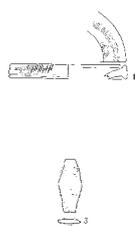
J4ST409 (第5分冊J4-15図 P349) S=1/240



J4ST410 (第5分冊J4-16図 P351) S=1/240

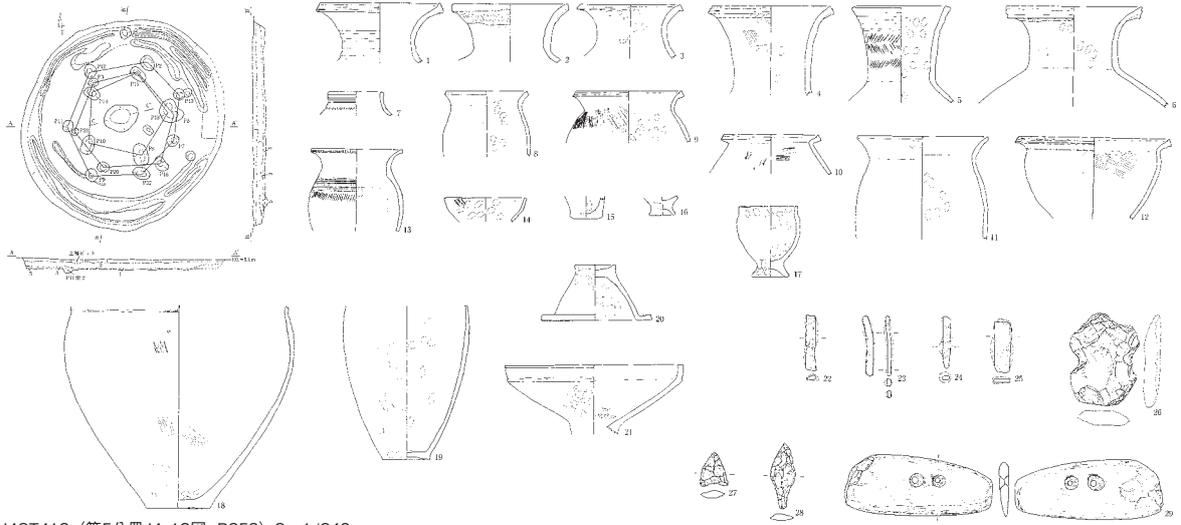


J4ST412 (第5分冊J4-17図 P352) S=1/240

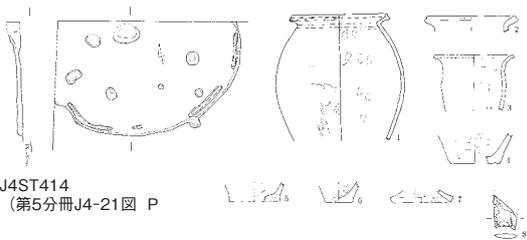


J4ST411 (第5分冊J4-16図 P351) S=1/240

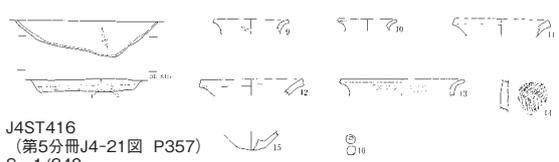
J4ST413 · 414 · 416 · 417 · 419



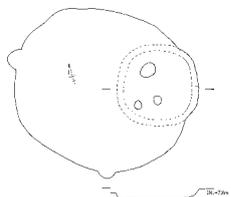
J4ST413 (第5分冊J4-18図 P353) S=1/240



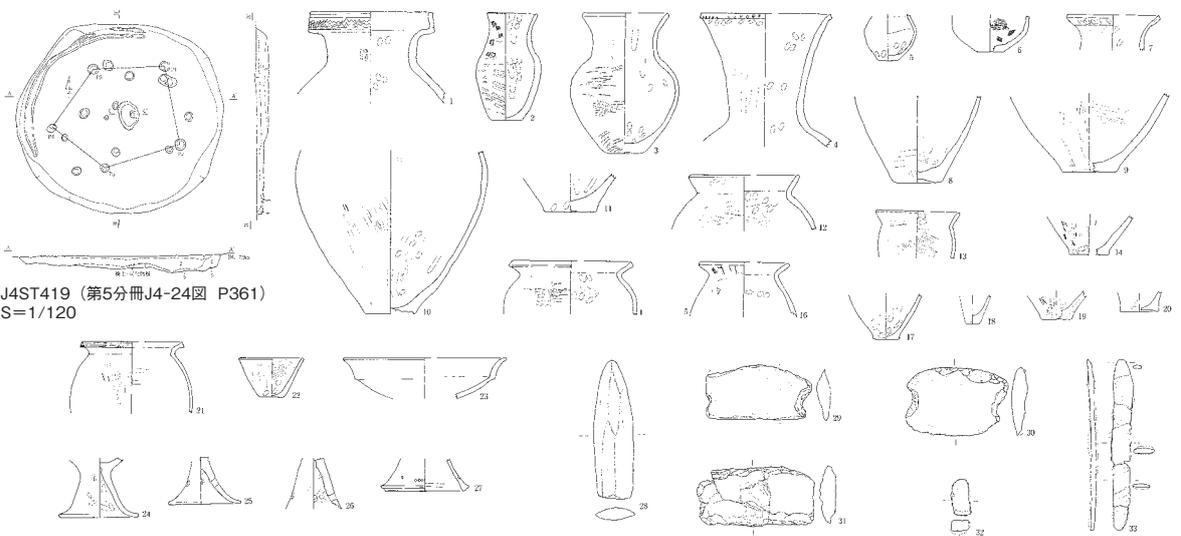
J4ST414 (第5分冊J4-21図 P) S=1/240



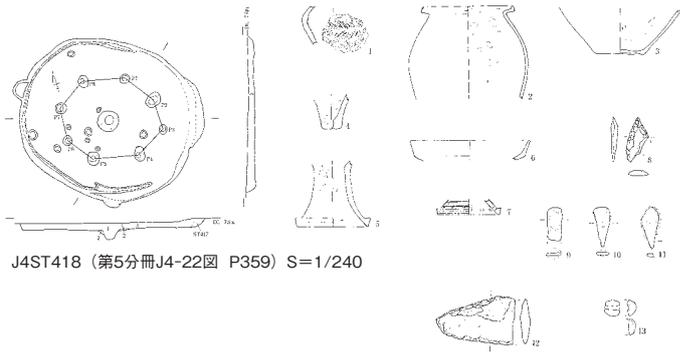
J4ST416 (第5分冊J4-21図 P357) S=1/240



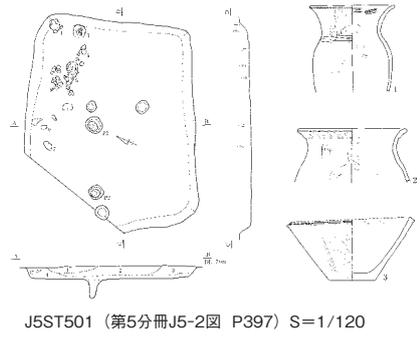
J4ST417 (第5分冊J4-22図 P359) S=1/240



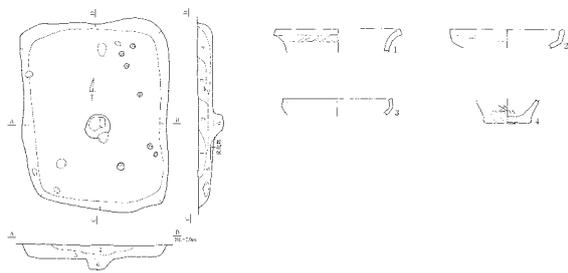
J4ST419 (第5分冊J4-24図 P361) S=1/120



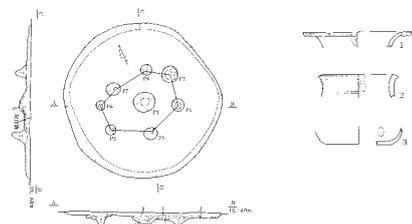
J4ST418 (第5分冊J4-22図 P359) S=1/240



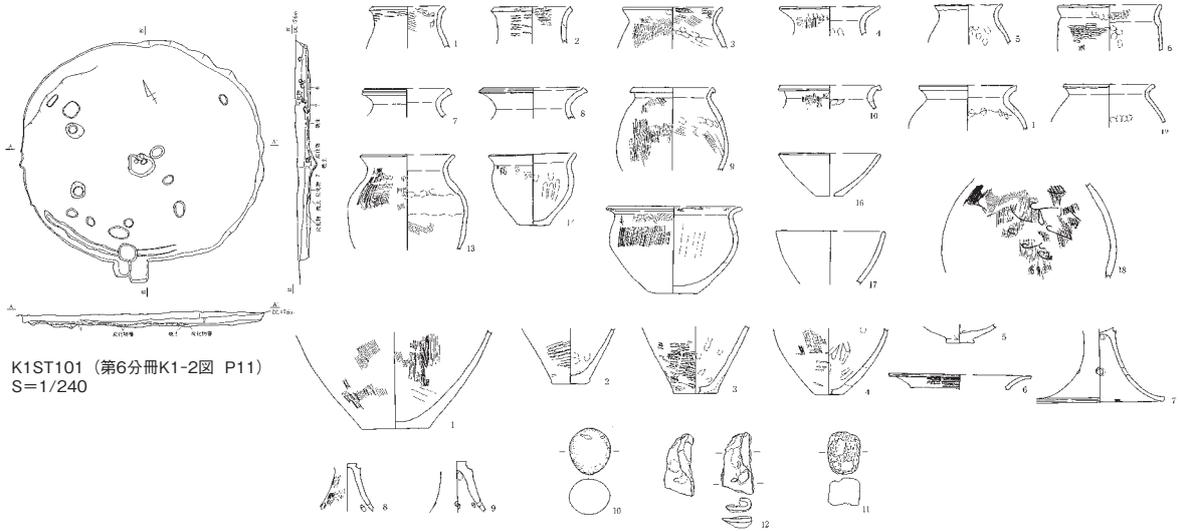
J5ST501 (第5分冊J5-2図 P397) S=1/120



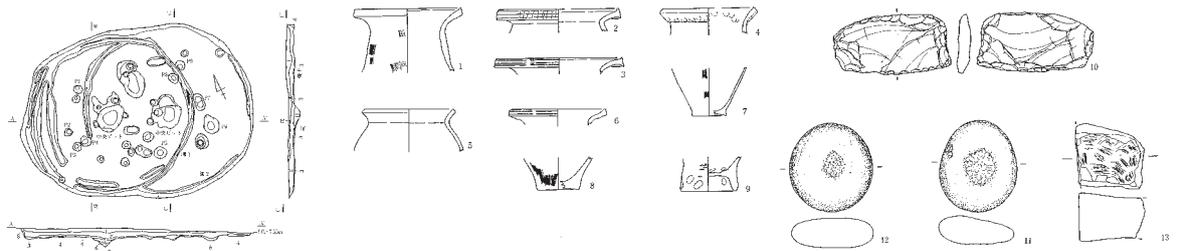
J5ST502 (第5分冊J5-2図 P397) S=1/120



J5ST503 (第5分冊J5-3図 P399) S=1/240

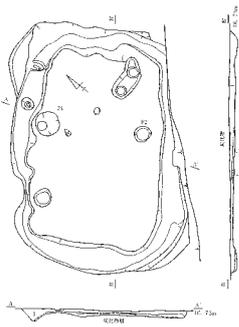


K1ST101 (第6分冊K1-2図 P11) S=1/240

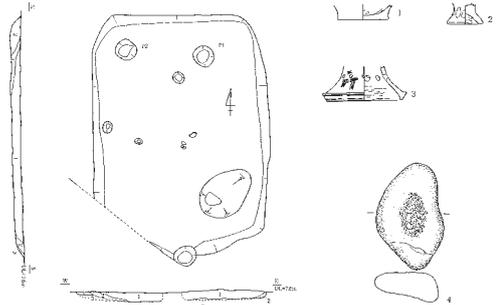
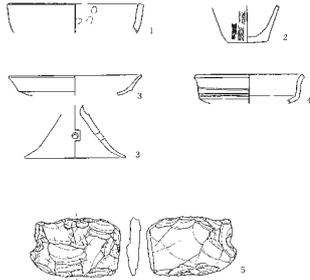


K1ST102 (第6分冊K1-5図 P15) S=1/240

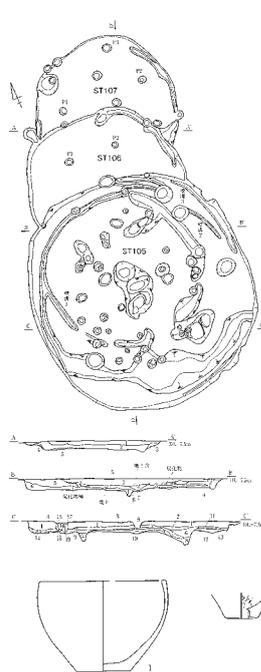
K1ST103~107・109・110



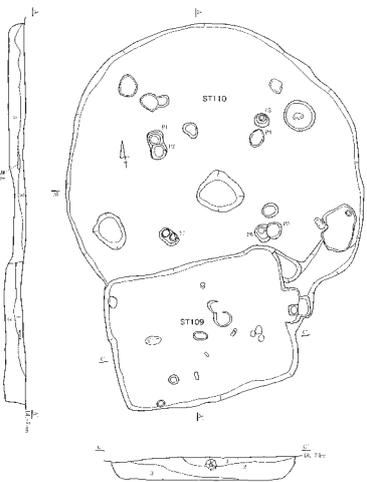
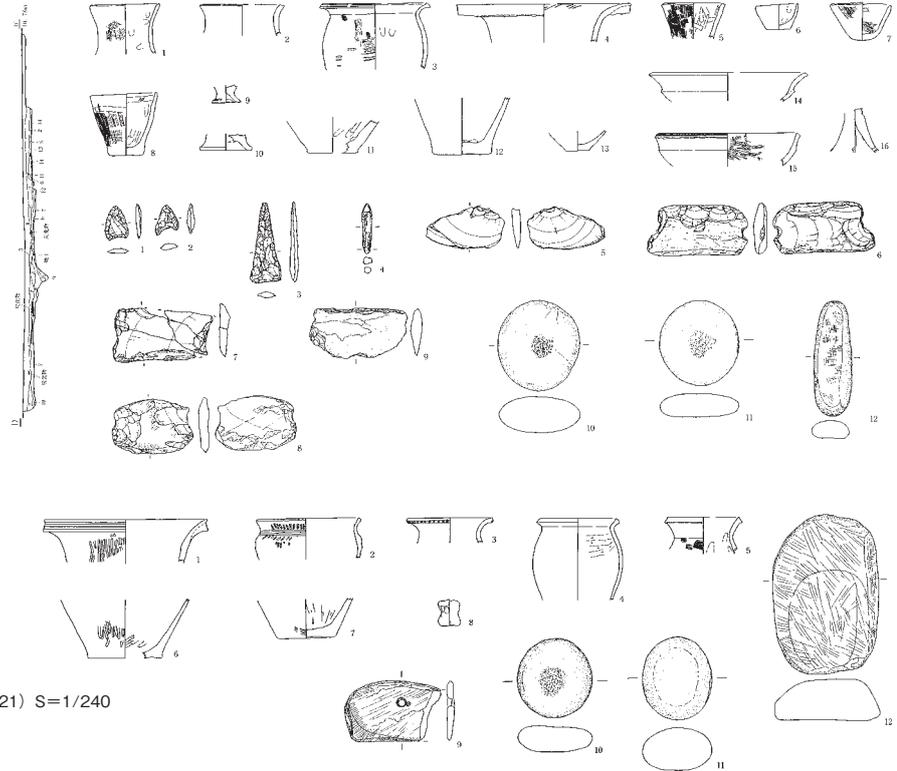
K1ST103 (第6分册K1-7图 P18) S=1/120



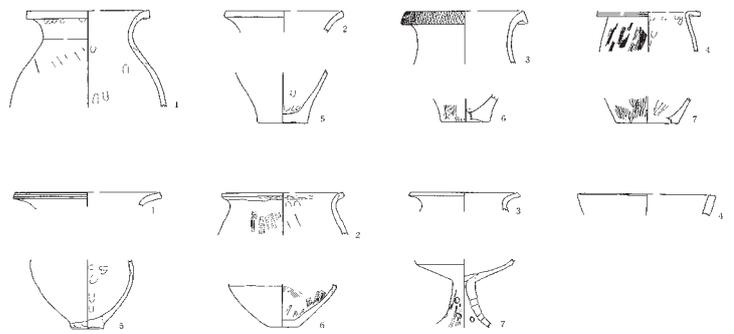
K1ST104 (第6分册K1-8图 P19) S=1/120



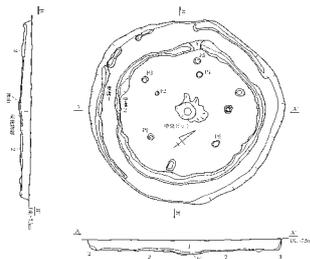
K1ST105~107 (第6分册K1-10图 P21) S=1/240



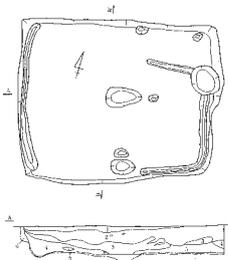
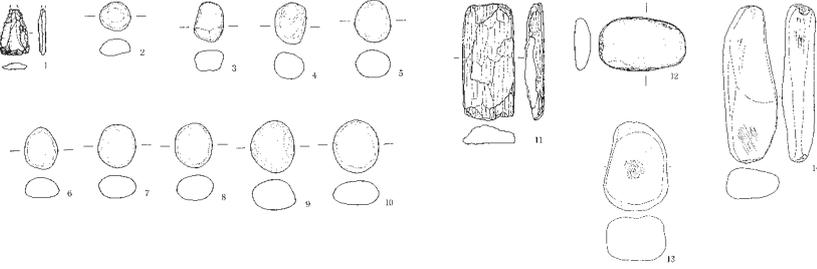
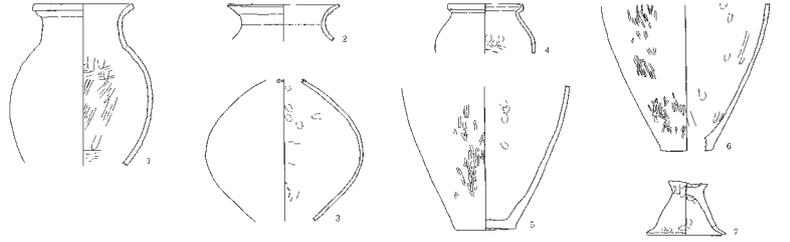
K1ST109・110 (第6分册K1-18图 P30) S=1/120



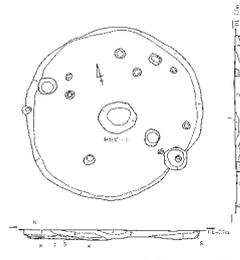
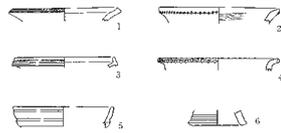
住居跡集成図 38



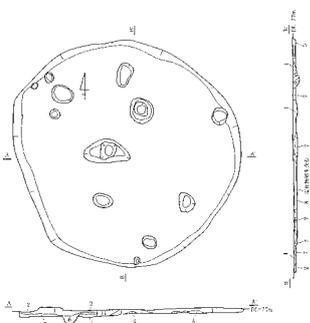
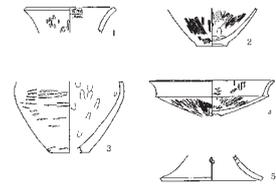
K1ST108 (第6分冊K1-15図 P26)
S=1/240



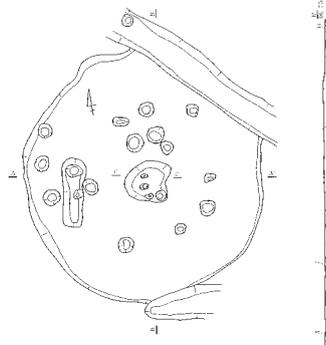
K1ST111 (第6分冊K1-21図 P22)
S=1/120



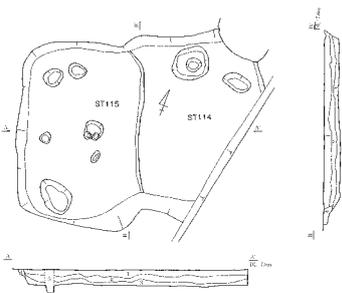
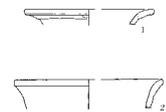
K1ST112 (第6分冊K1-22図 P34)
S=1/240



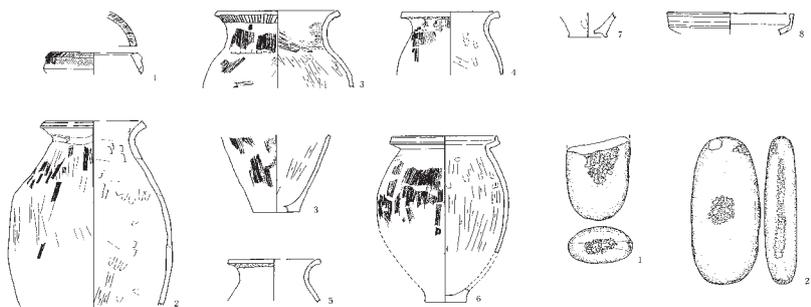
K1ST113 (第6分冊K1-23図 P35)
S=1/120



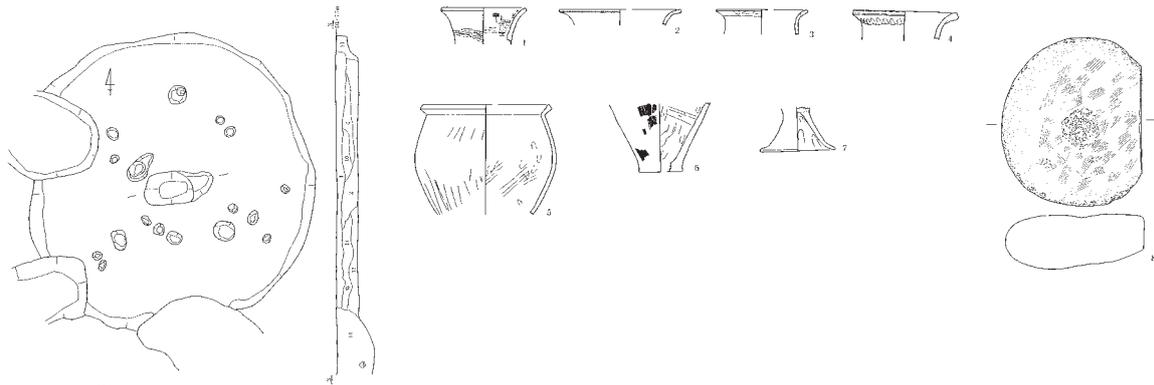
K1ST117 (第6分冊K1-29図 P42)
S=1/120



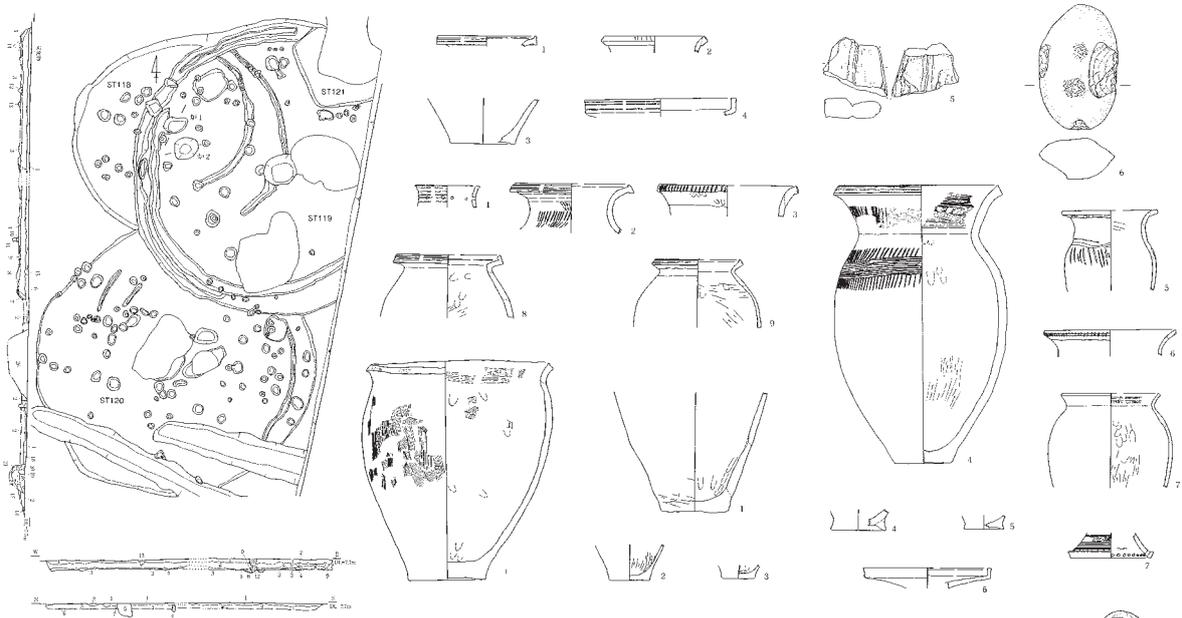
K1ST114 · 115 (第6分冊K1-24図 P36)
S=1/120



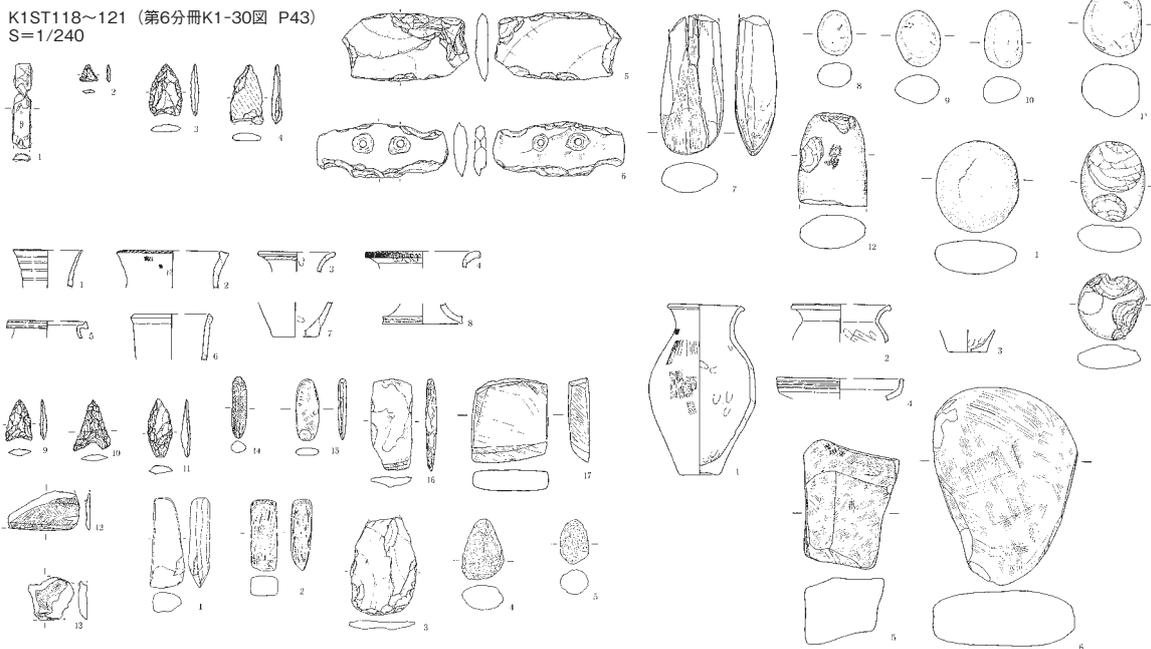
K1ST116 · 118~121



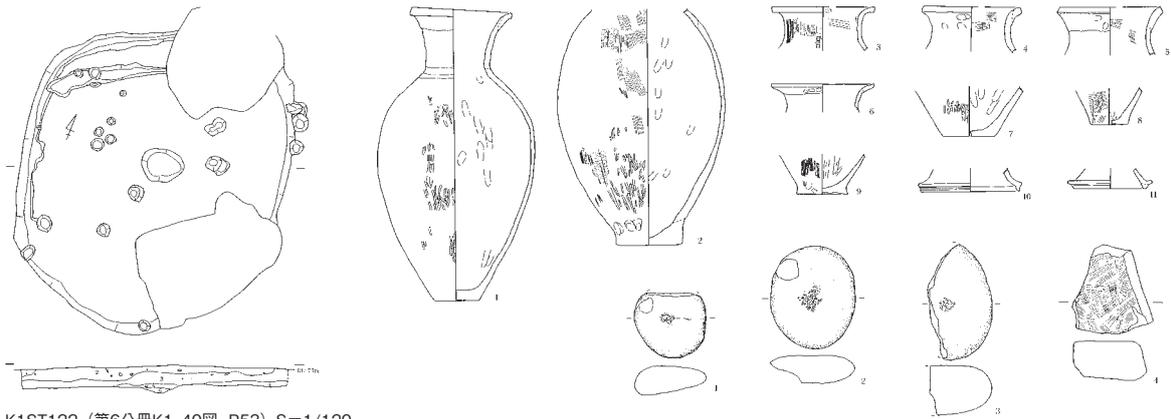
K1ST116 (第6分册K1-29图 P39)
S=1/120



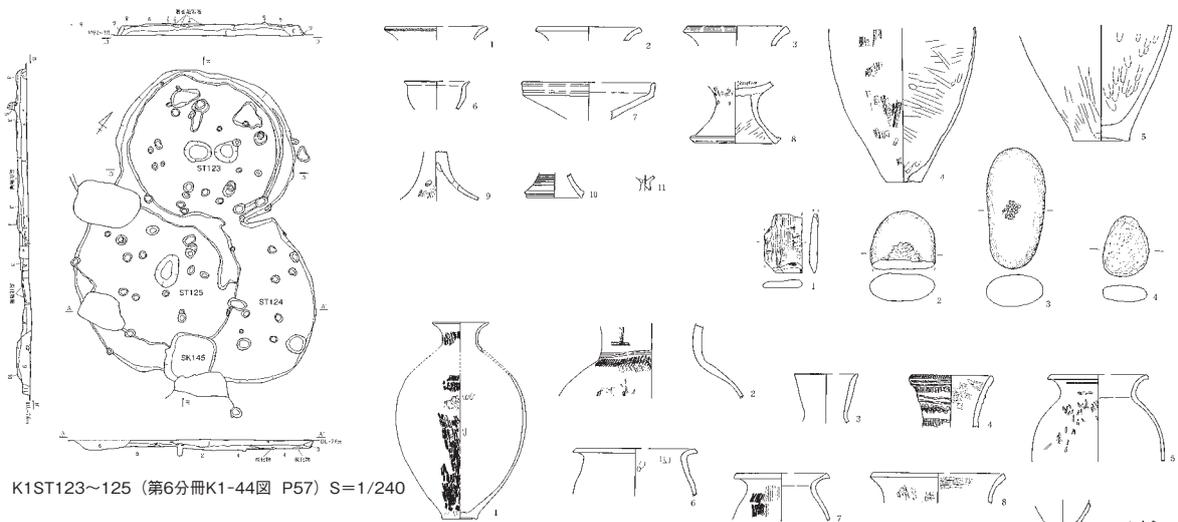
K1ST118~121 (第6分册K1-30图 P43)
S=1/240



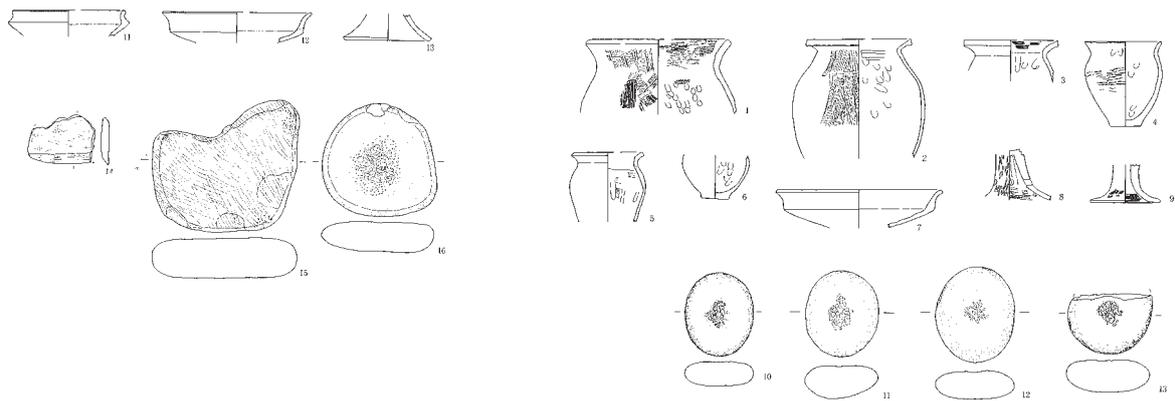
住居跡集成図 40



K1ST122 (第6分册K1-40图 P53) S=1/120



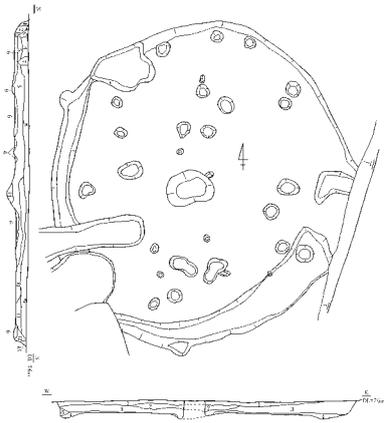
K1ST123~125 (第6分册K1-44图 P57) S=1/240



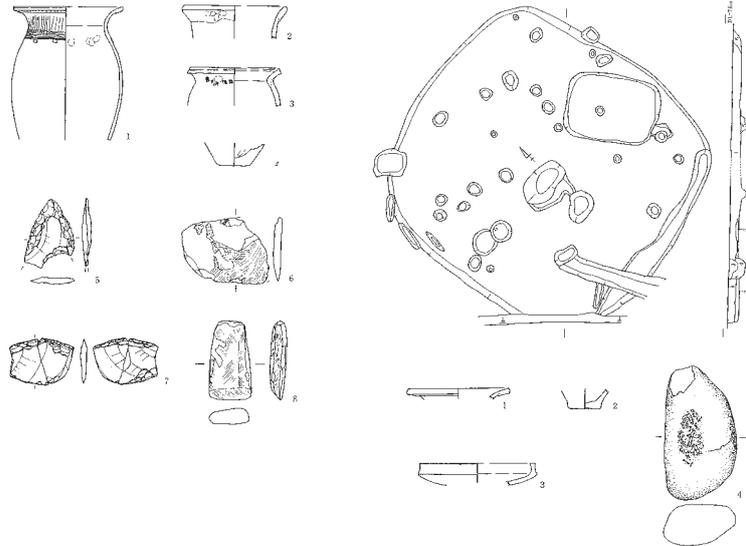
K1ST128 (第6分册K1-52图 P65) S=1/120

住居跡集成図 41

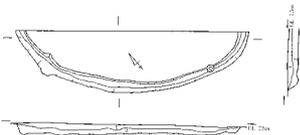
K1ST126・127、K2ST201~206



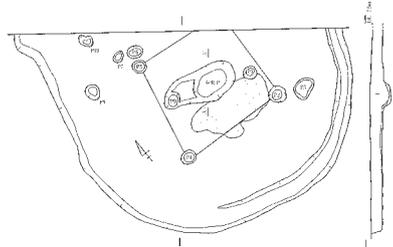
K1ST126 (第6分冊K1-49図 P62) S=1/120



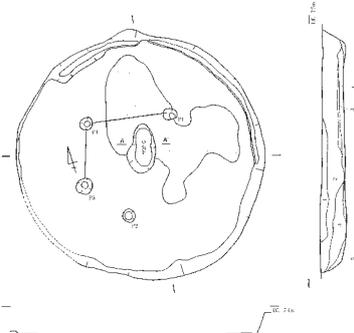
K1ST127 (第6分冊K1-51図 P64) S=1/120



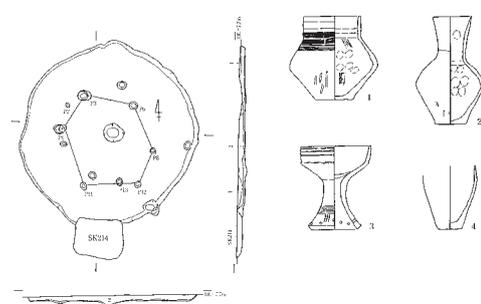
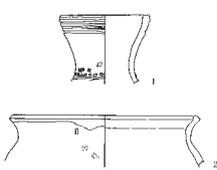
K2ST201 (第6分冊K2-2図 P136) S=1/120



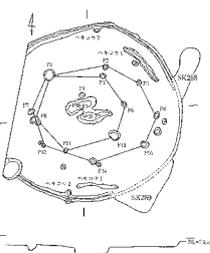
K2ST202 (第6分冊K2-2図 P136) S=1/120



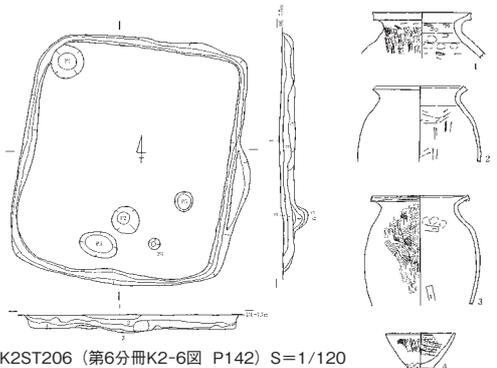
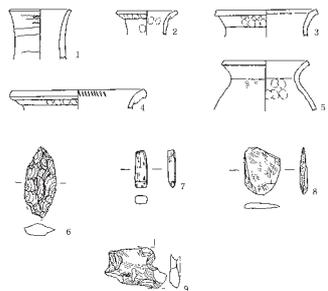
K2ST203 (第6分冊K2-3図 P137) S=1/120



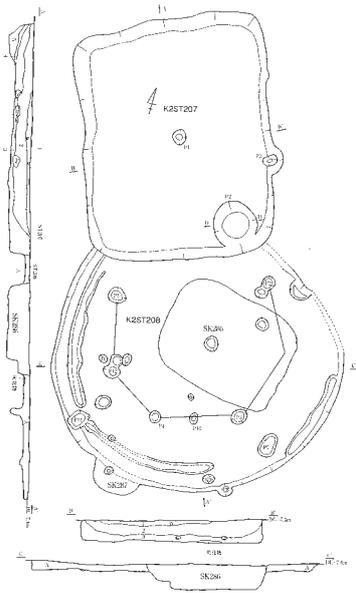
K2ST204 (第6分冊K2-4図 P139) S=1/240



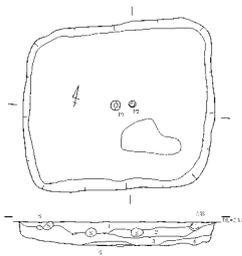
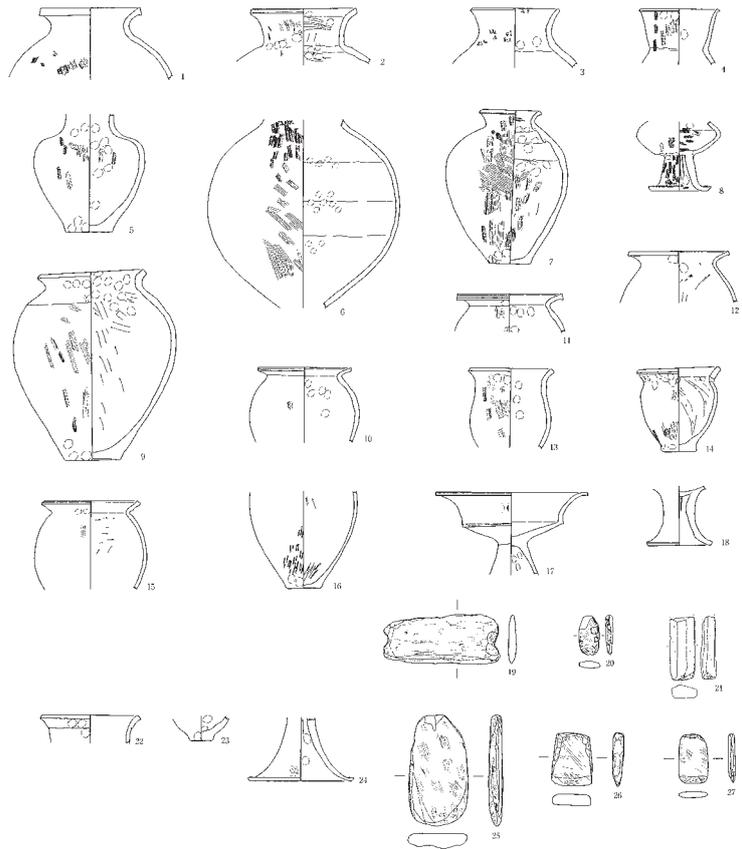
K2ST205 (第6分冊K2-5図 P140) S=1/240



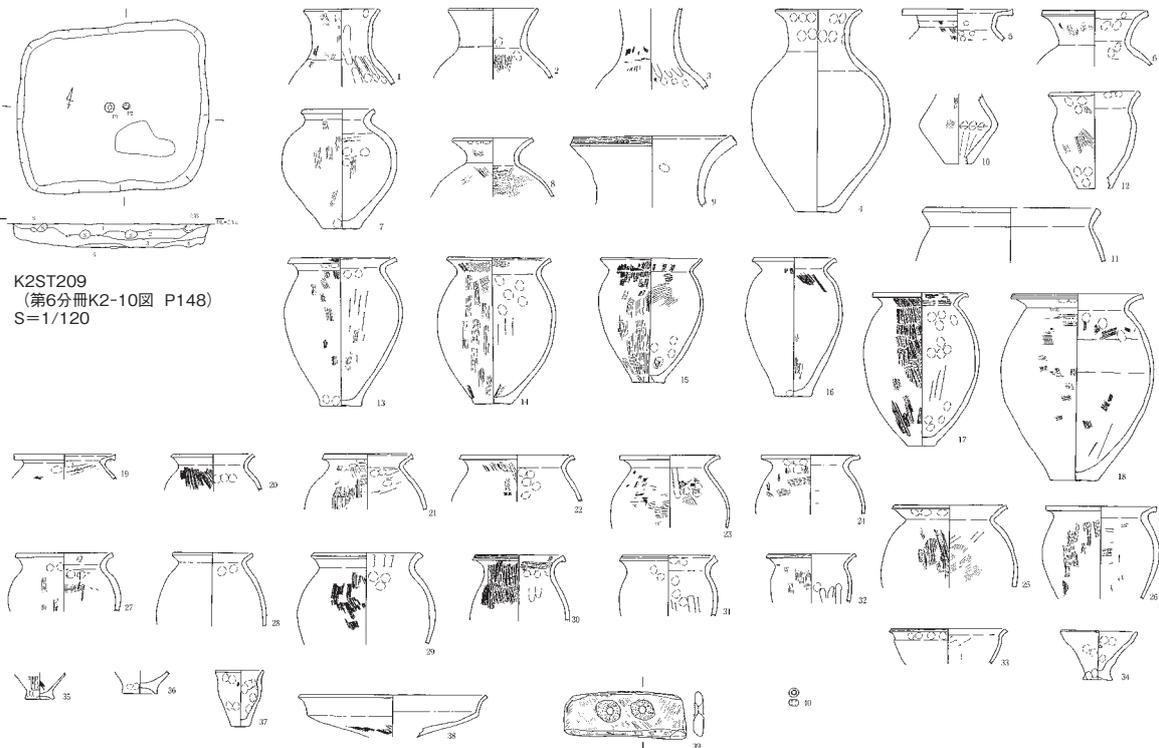
K2ST206 (第6分冊K2-6図 P142) S=1/120



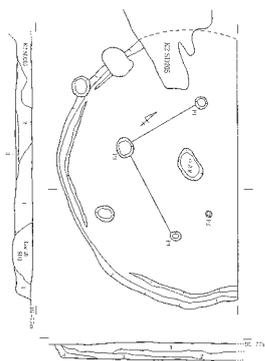
K2ST207・208 (第6分册K2-7图 P144) S=1/120



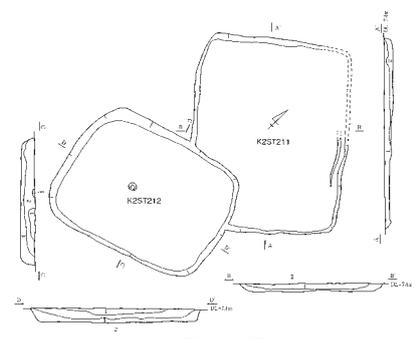
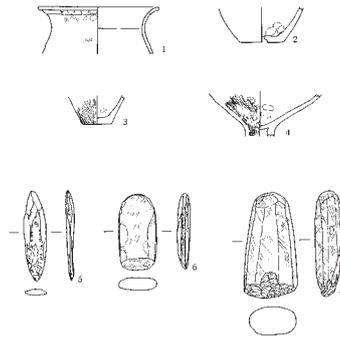
K2ST209
(第6分册K2-10图 P148)
S=1/120



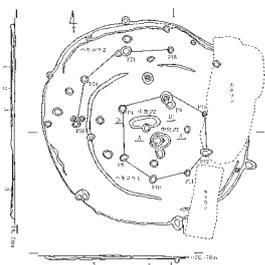
K2ST210~213・215~219



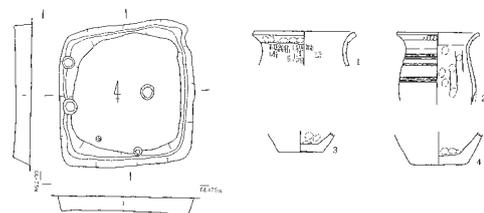
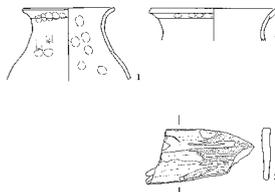
K2ST210 (第6分冊K2-13図 P151) S=1/120



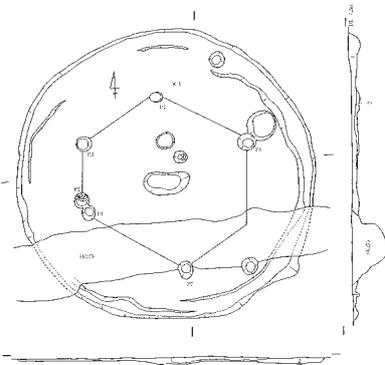
K2ST211・212 (第6分冊K2-14図 P152) S=1/120



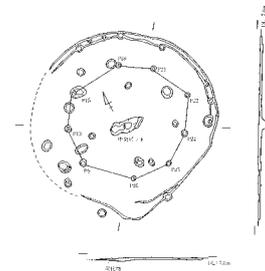
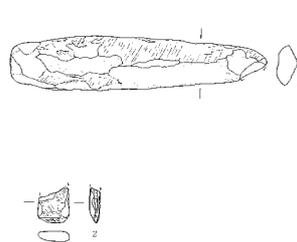
K2ST213 (第6分冊K2-15図 P154) S=1/240



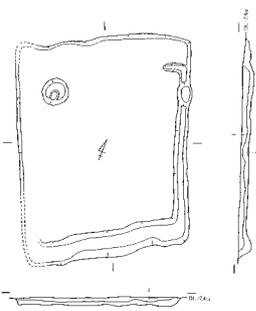
K2ST215 (第6分冊K2-16図 P155) S=1/120



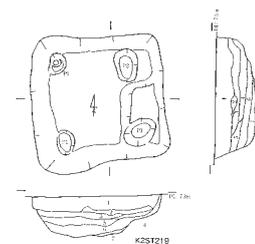
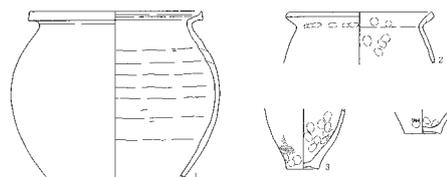
K2ST216 (第6分冊K2-17図 P156) S=1/240



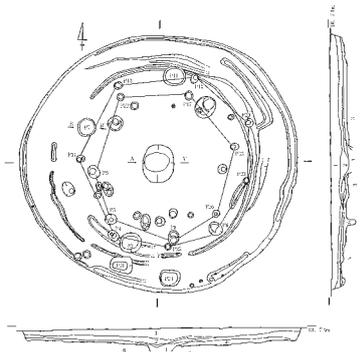
K2ST217 (第6分冊K2-18図 P157) S=1/240



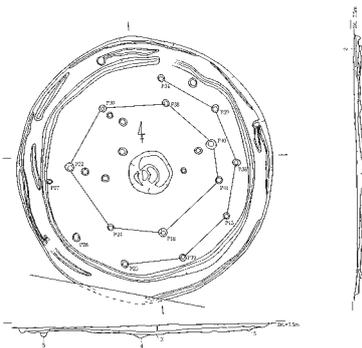
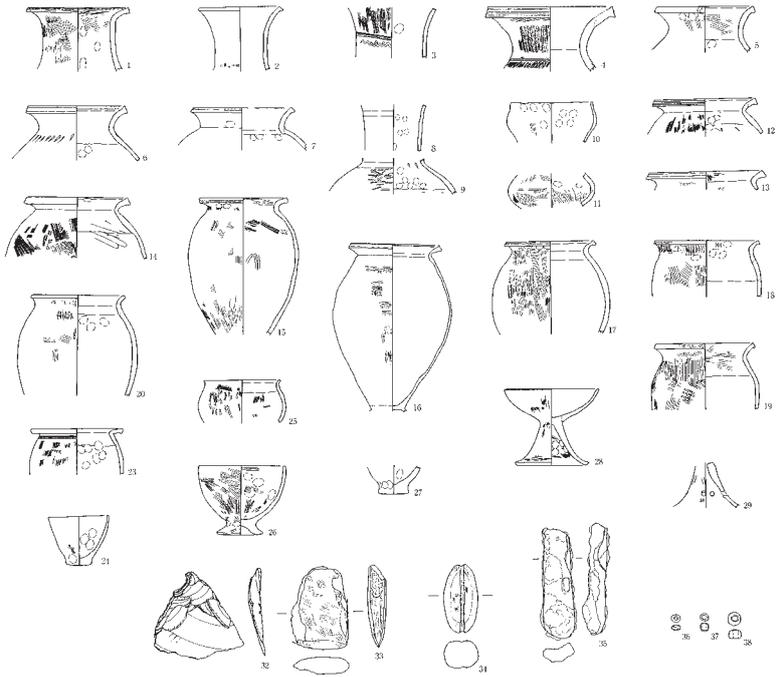
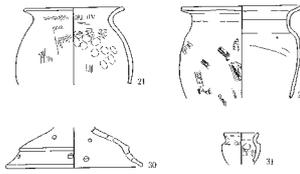
K2ST218 (第6分冊K2-19図 P159) S=1/120



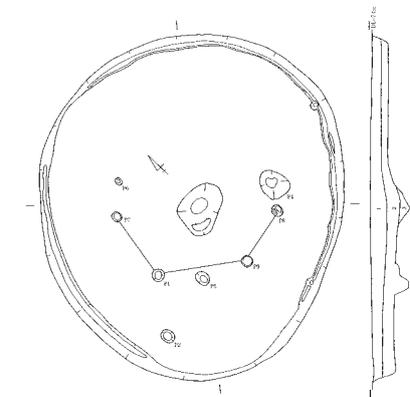
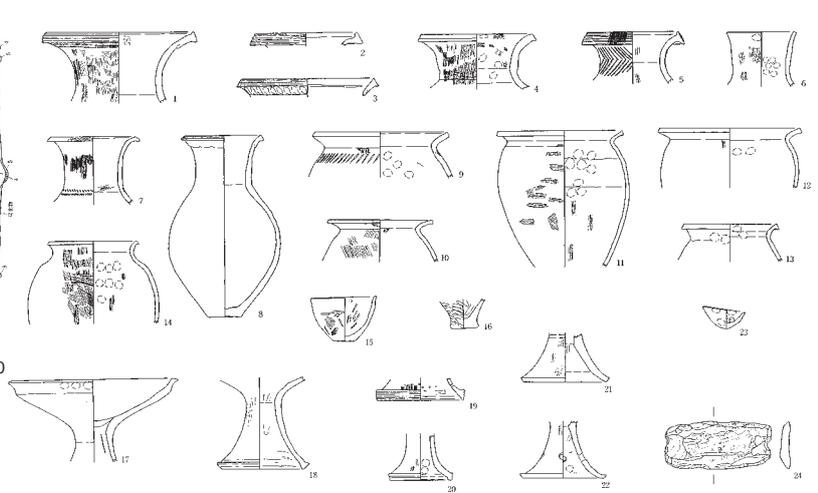
K2ST219 (第6分冊K2-20図 P160) S=1/120



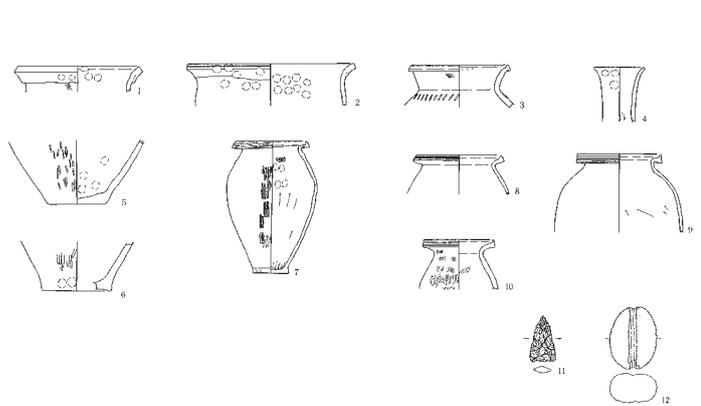
K2ST220 (第6分册K2-20图 P160) S=1/240



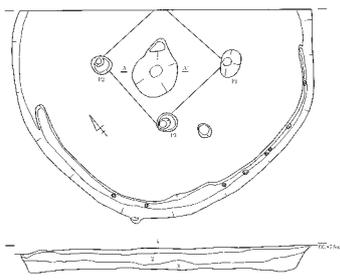
K2ST222 (第6分册K2-25图 P166) S=1/240



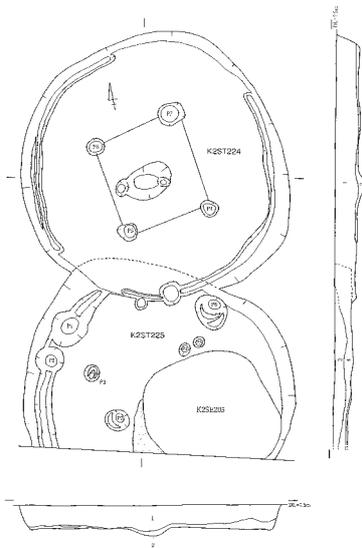
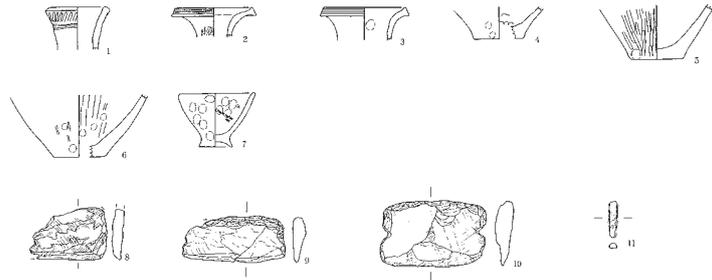
K2ST221 (第6分册K2-23图 P164) S=1/120



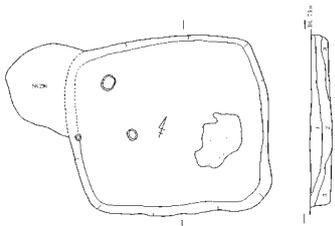
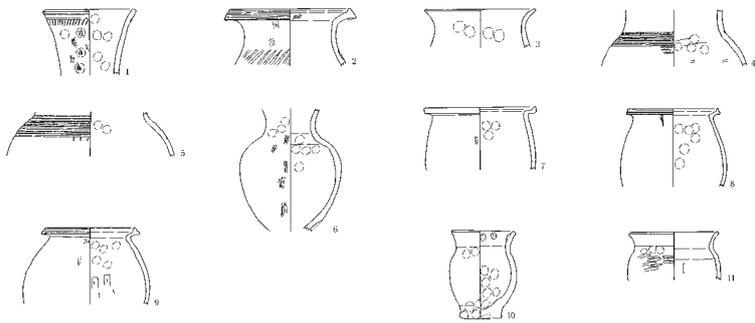
K2ST223~227、K3ST302・303



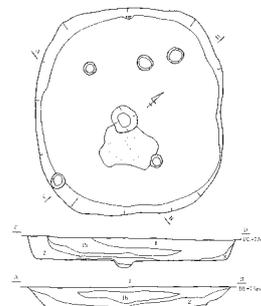
K2ST223 (第6分册K2-28图 P170) S=1/120



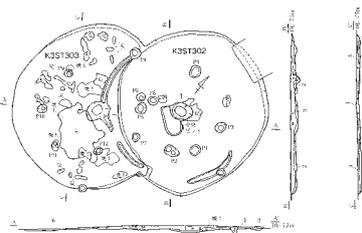
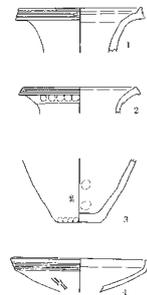
K2ST224・225 (第6分册K2-29图 P171) S=1/120



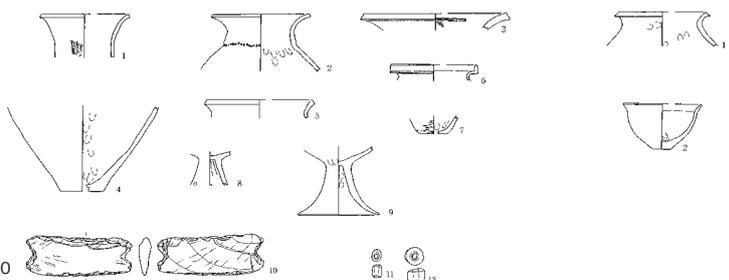
K2ST226 (第6分册K2-31图 P174) S=1/120

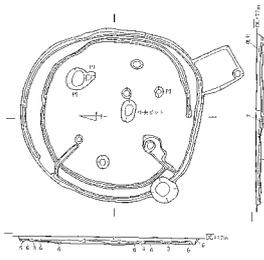


K2ST227 (第6分册K2-31图 P174) S=1/120

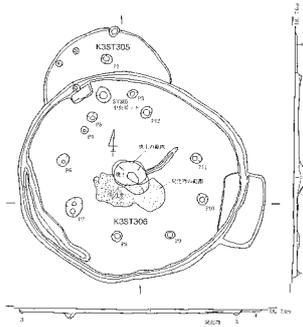
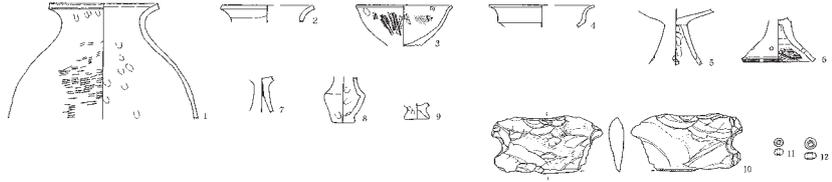


K3ST302・303 (第6分册K3-2图 P231) S=1/240

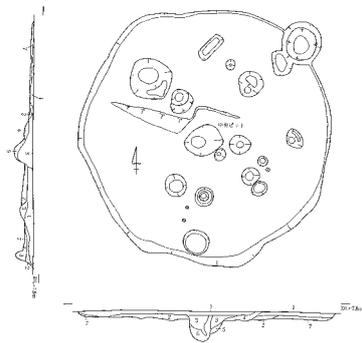
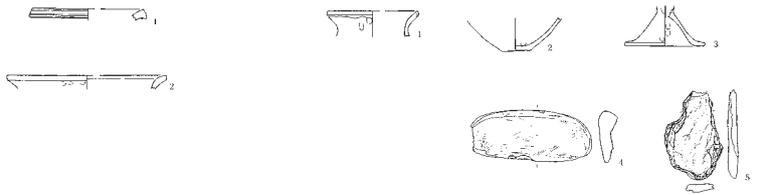




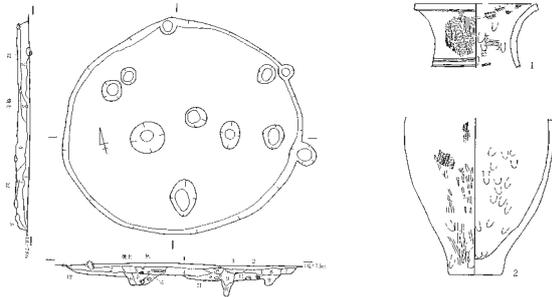
K3ST304 (第6分冊K3-5図 P233) S=1/240



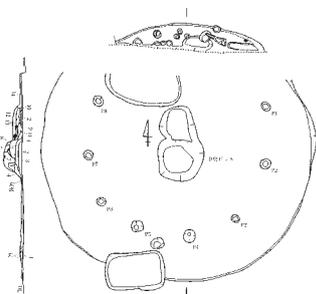
K3ST305 · 306 (第6分冊K3-6図 P234) S=1/240



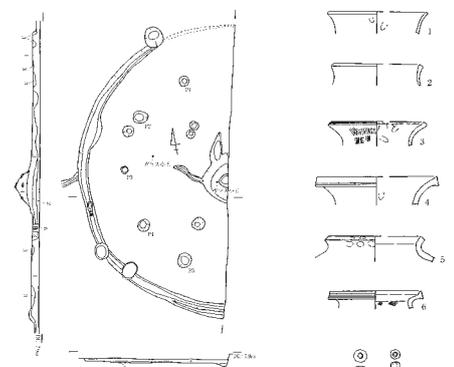
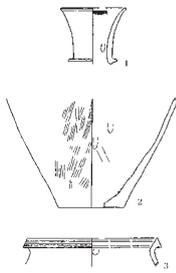
K3ST307 (第6分冊K3-9図 P236) S=1/120



K3ST308 (第6分冊K3-10図 P238) S=1/120

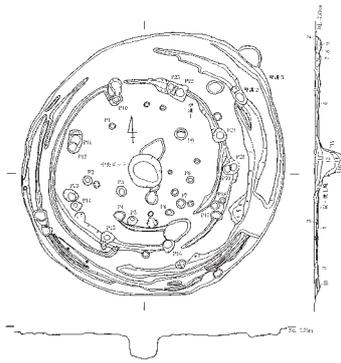


K3ST309 (第6分冊K3-12図 P240) S=1/240

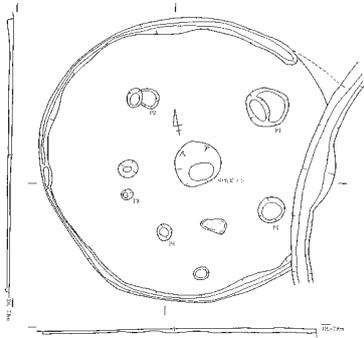
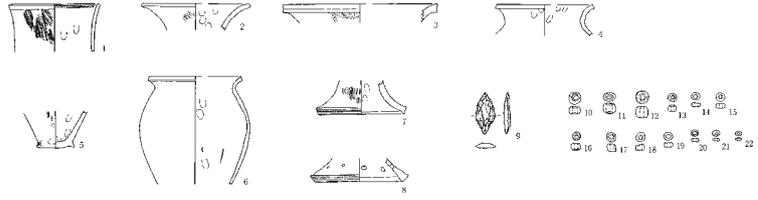


K3ST312 (第6分冊K3-17図 P246) S=1/240

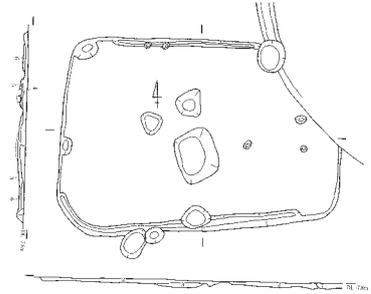
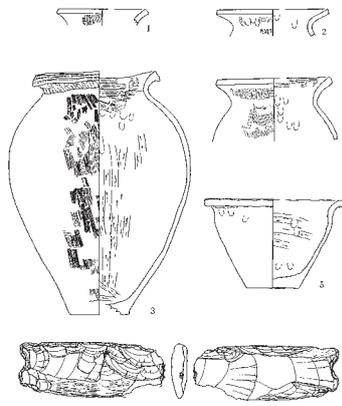
K3ST310 · 311 · 313、L1ST101 · 102



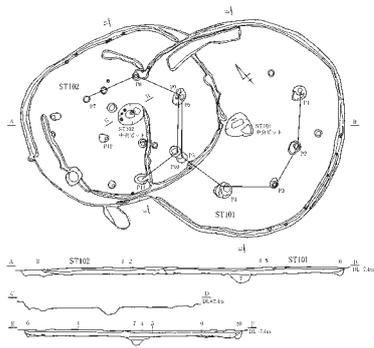
K3ST310 (第6分册K3-14图 P242) S=1/240



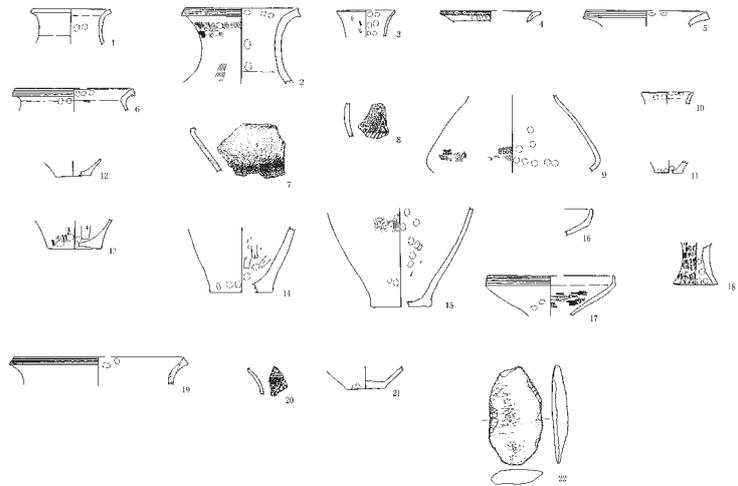
K3ST311 (第6分册K3-15图 P243) S=1/120



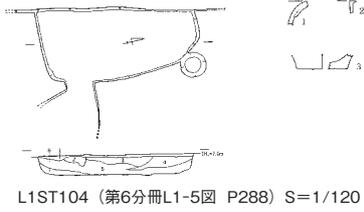
K3ST313 (第6分册K3-18图 P247) S=1/120



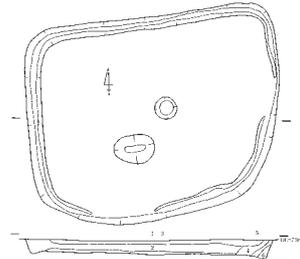
L1ST101 · 102 (第6分册L1-3图 P286) S=1/120



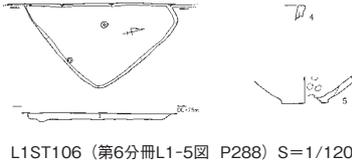
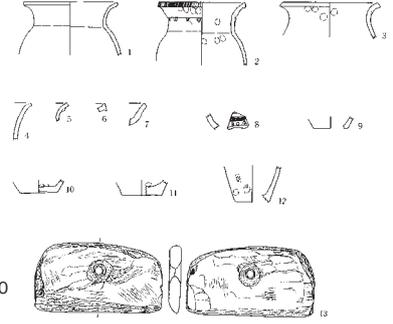
L1ST104 · 106 · 107、L2ST201~203



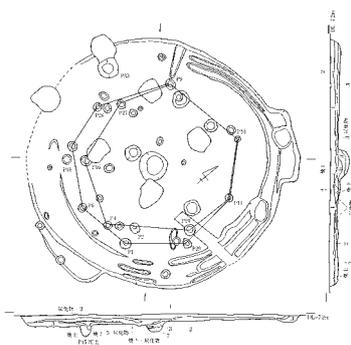
L1ST104 (第6分冊L1-5図 P288) S=1/120



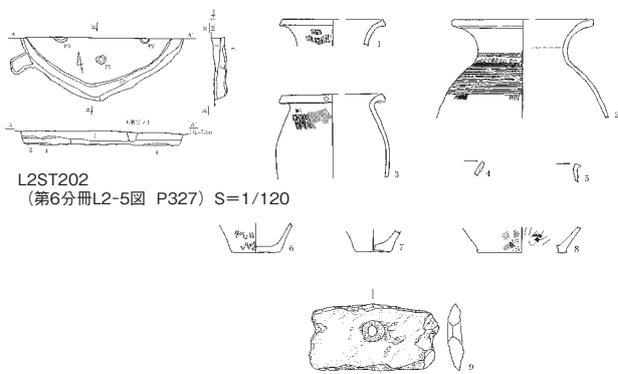
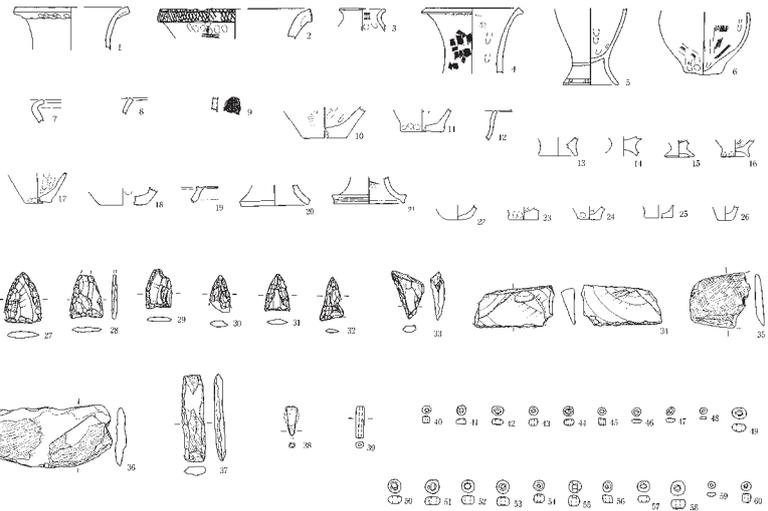
L1ST107 (第6分冊L1-6図 P290) S=1/120



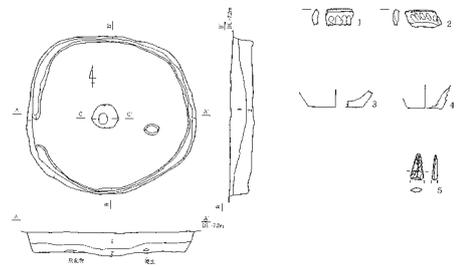
L1ST106 (第6分冊L1-5図 P288) S=1/120



L2ST201 (第6分冊L2-3図 P324) S=1/240

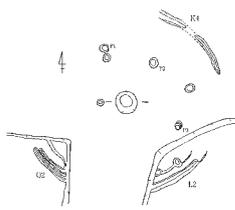


L2ST202
(第6分冊L2-5図 P327) S=1/120

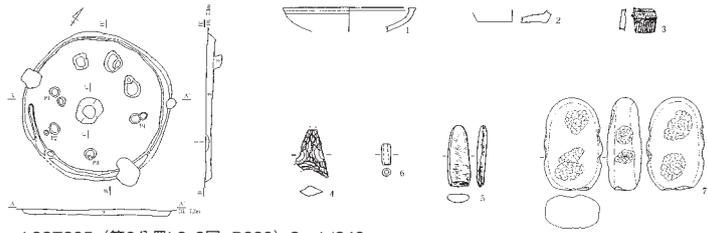


L2ST203 (第6分冊L2-6図 P328) S=1/120

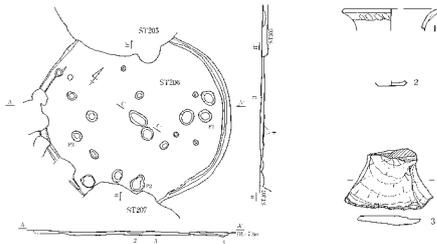
L2ST204~210 · 213



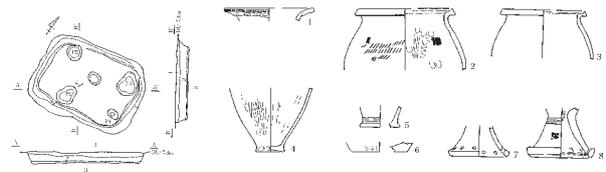
L2ST204 (第6分冊L2-7図 P329) S=1/240



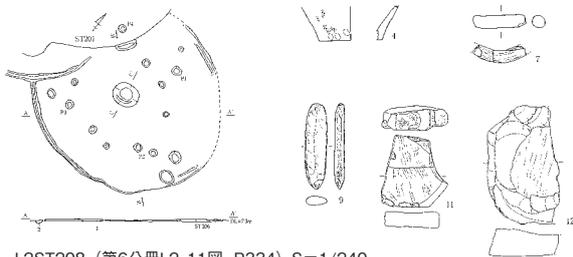
L2ST205 (第6分冊L2-8図 P330) S=1/240



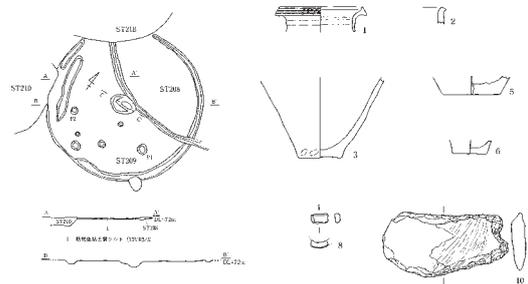
L2ST206 (第6分冊L2-9図 P331) S=1/120



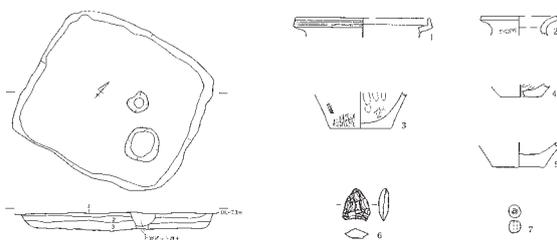
L2ST207 (第6分冊L2-10図 P333) S=1/240



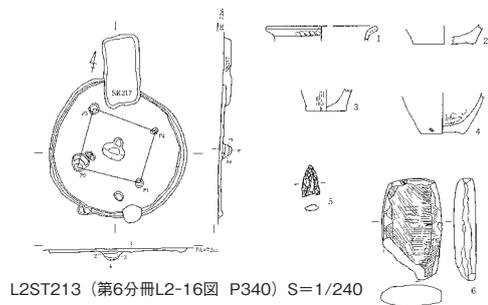
L2ST208 (第6分冊L2-11図 P334) S=1/240



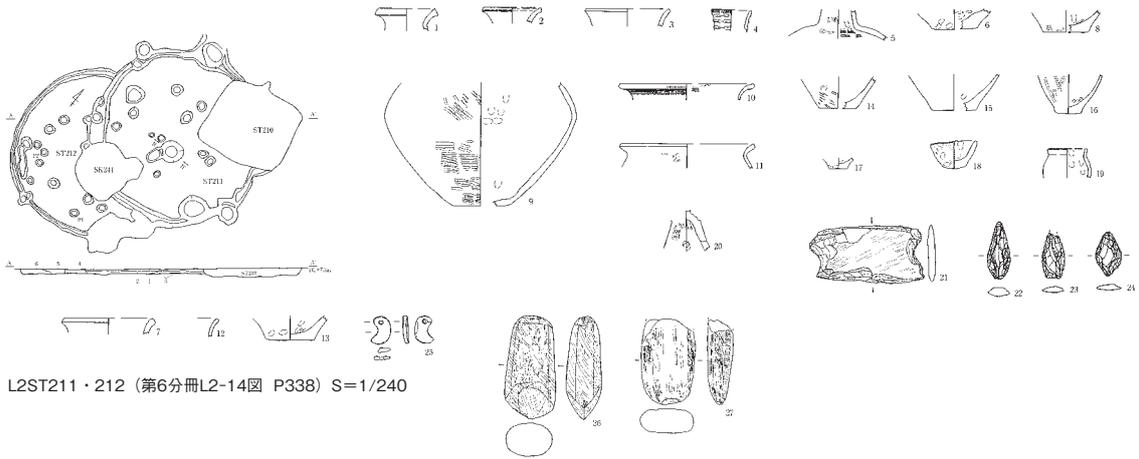
L2ST209 (第6分冊L2-11図 P334) S=1/240



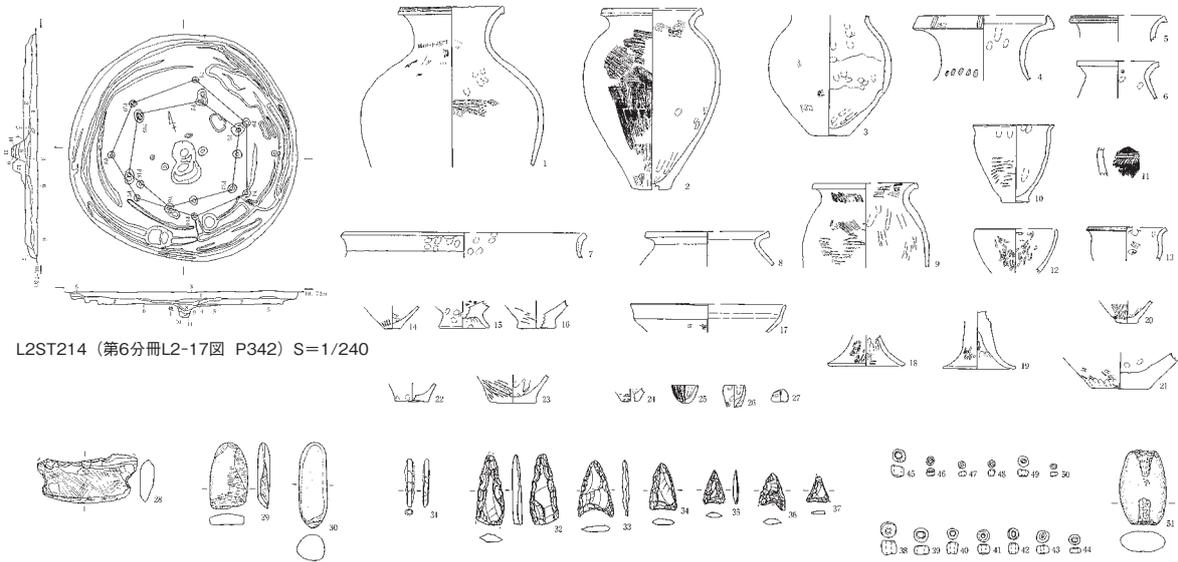
L2ST210 (第6分冊L2-13図 P336) S=1/120



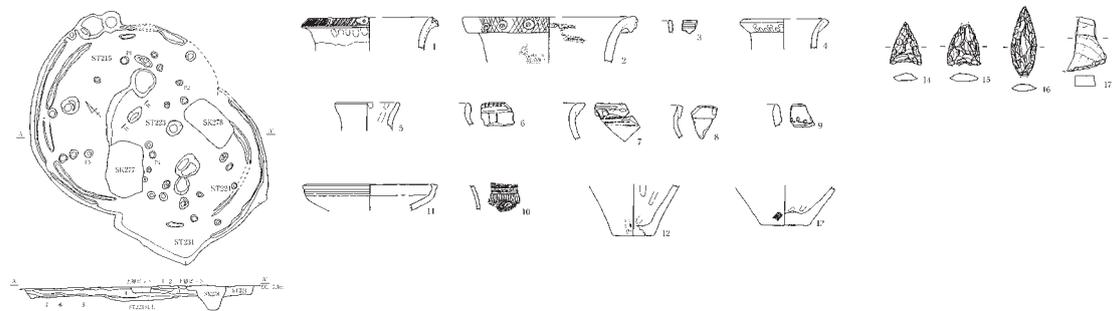
L2ST213 (第6分冊L2-16図 P340) S=1/240



L2ST211・212 (第6分冊L2-14図 P338) S=1/240

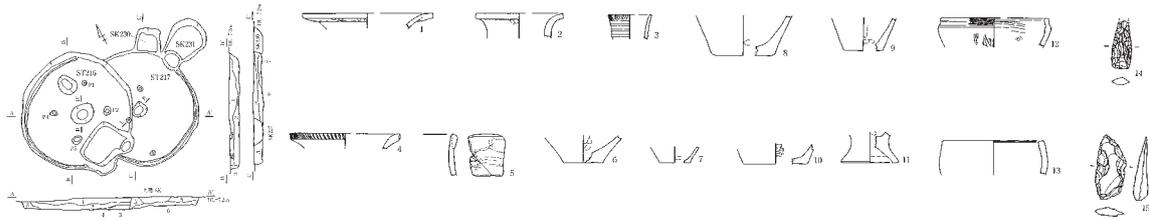


L2ST214 (第6分冊L2-17図 P342) S=1/240

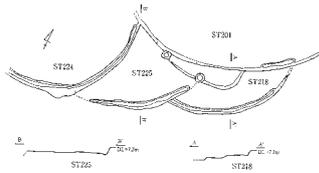


L2ST215 (第6分冊L2-20図 P345) S=1/240

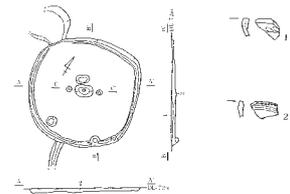
L2ST216 · 218~223



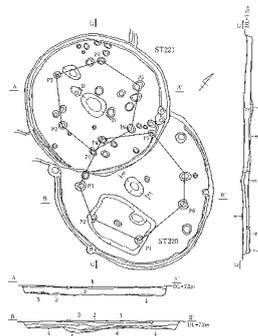
L2ST216 (第6分冊L2-21図 P347) S=1/240



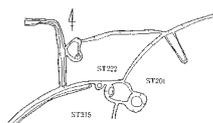
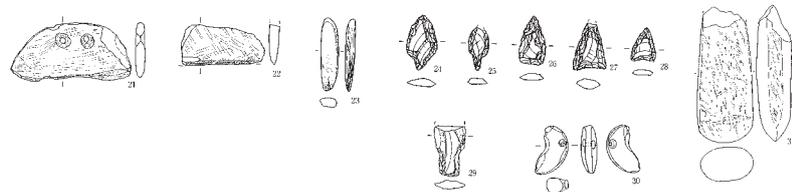
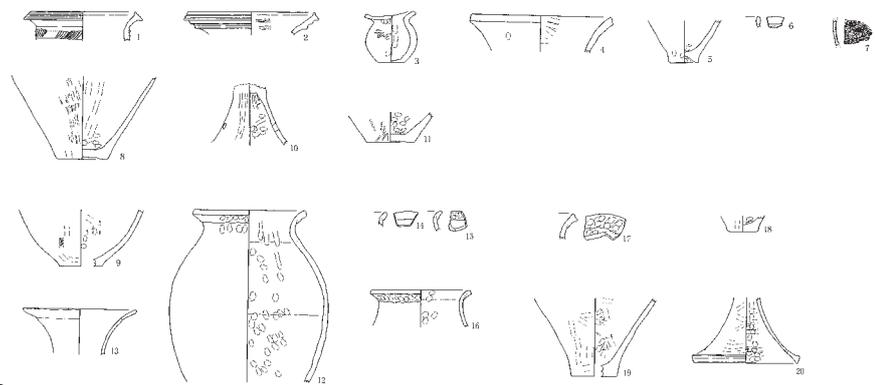
L2ST218 (第6分冊L2-22図 P348) S=1/120



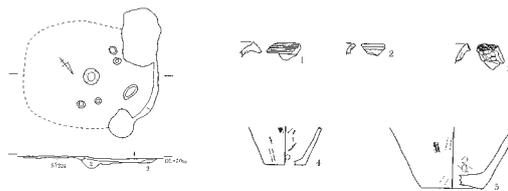
L2ST219 (第6分冊L2-23図 P349) S=1/240



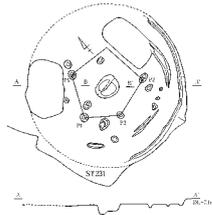
L2ST220 · 221
(第6分冊L2-24図 P351) S=1/240



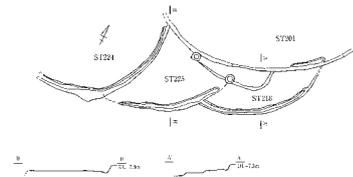
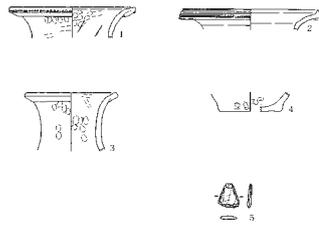
L2ST222 (第6分冊L2-26図 P354) S=1/240



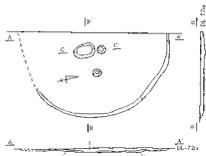
L2ST223 (第6分冊L2-26図 P354)
S=1/240



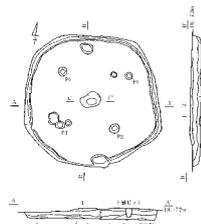
L2ST224 (第6分冊L2-27図 P356) S=1/240



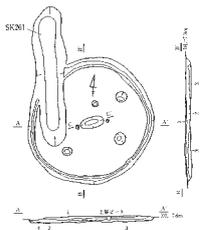
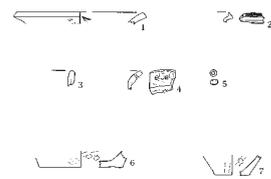
L2ST225 (第6分冊L2-27図 P356) S=1/120



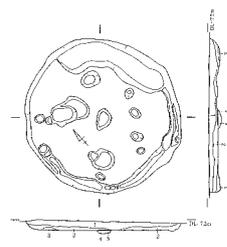
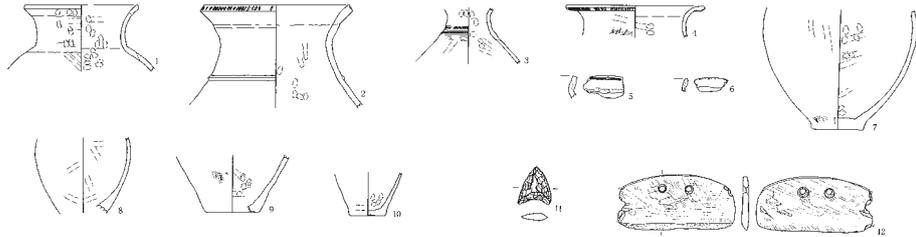
L2ST230 (第6分冊L2-33図 P364) S=1/240



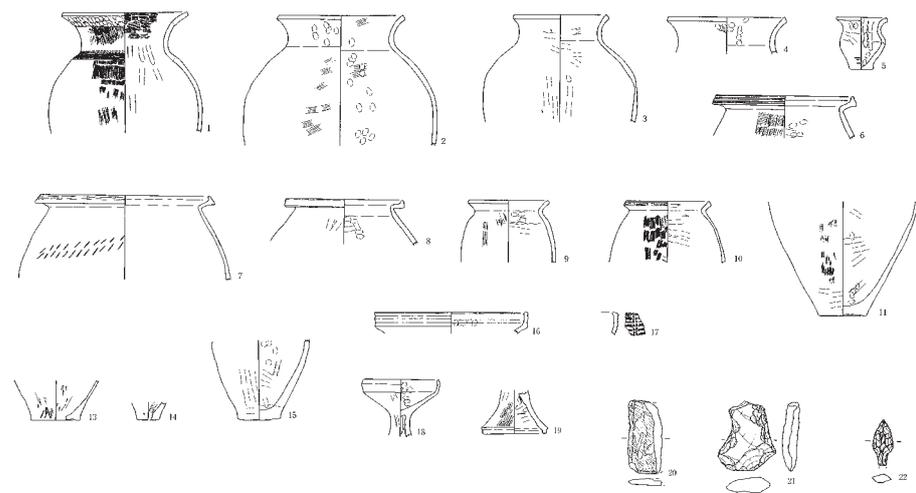
L2ST226 (第6分冊L2-28図 P357) S=1/120



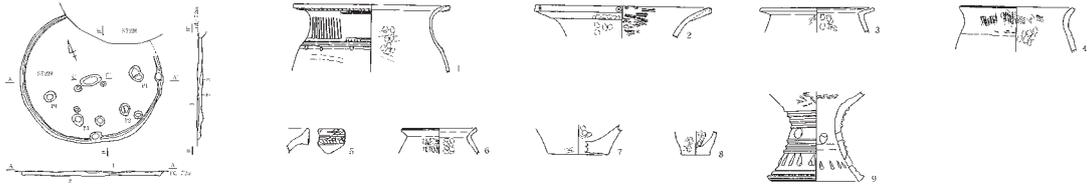
L2ST227 (第6分冊L2-29図 P359) S=1/240



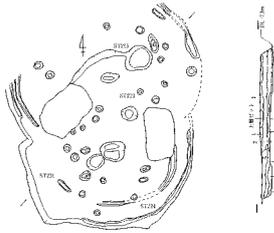
L2ST228
(第6分冊L2-30図 P360)
S=1/240



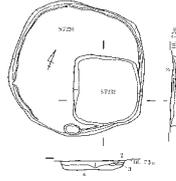
L2ST229 · 231~233、L3ST301 · 302



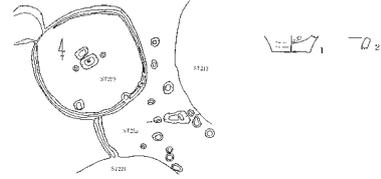
L2ST229 (第6分册L2-32图 P368) S=1/240



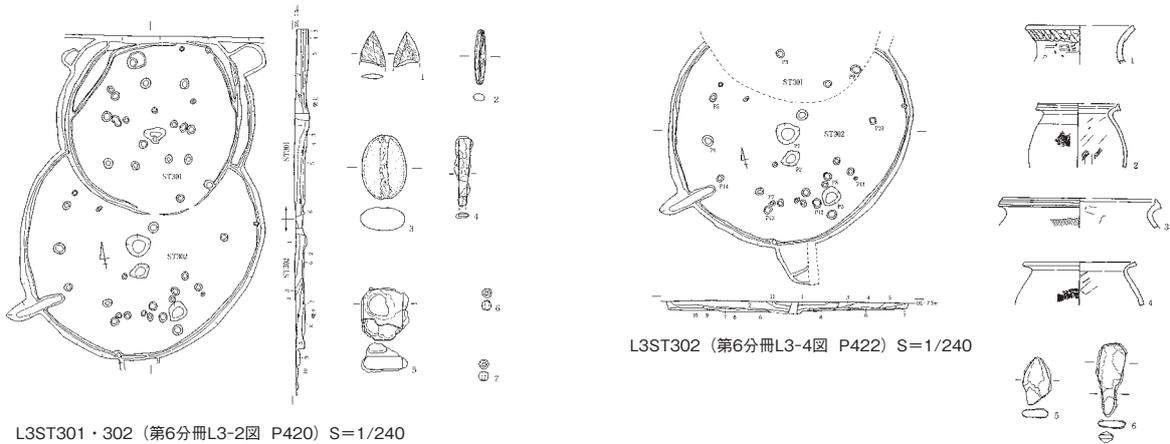
L2ST231 (第6分册L2-33图 P364) S=1/240



L2ST232
(第6分册L2-34图 P366)
S=1/240

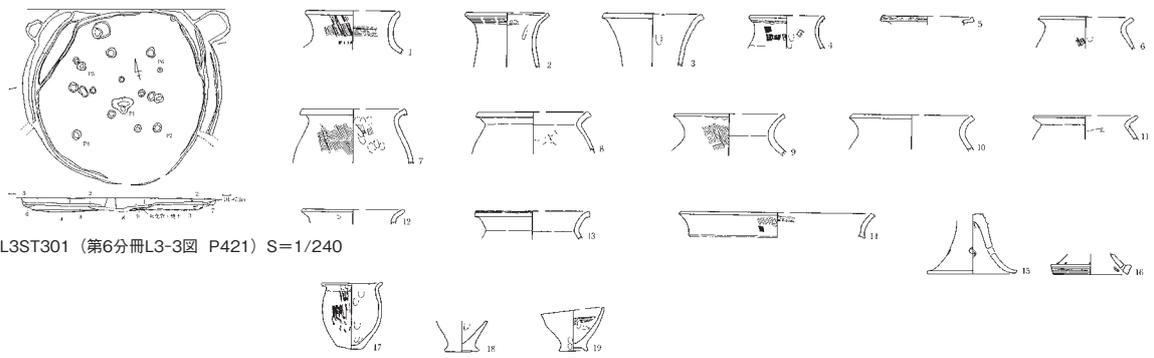


L2ST233 (第6分册L2-34图 P366) S=1/240

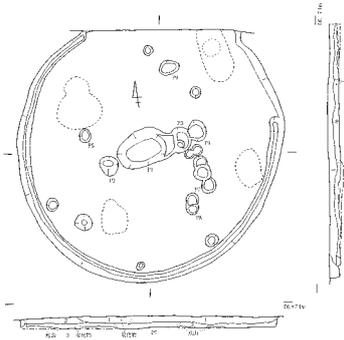


L3ST301 · 302 (第6分册L3-2图 P420) S=1/240

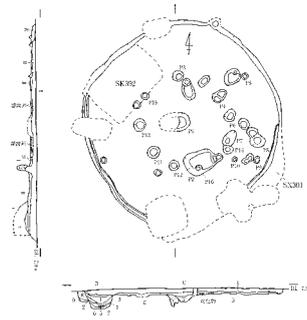
L3ST302 (第6分册L3-4图 P422) S=1/240



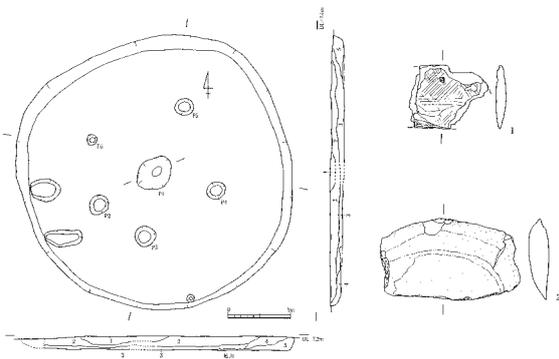
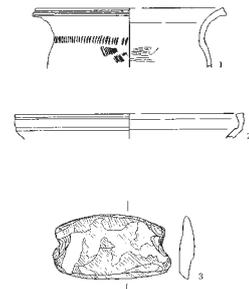
L3ST301 (第6分册L3-3图 P421) S=1/240



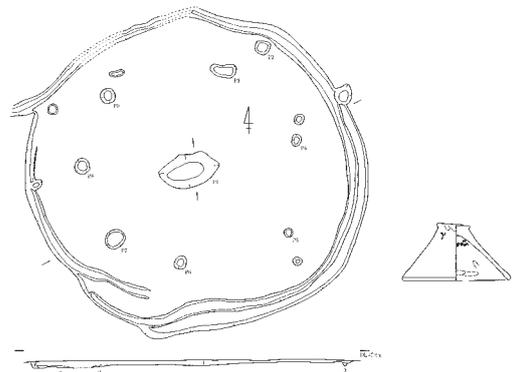
L3ST303 (第6分冊L2-5図 P423) S=1/120



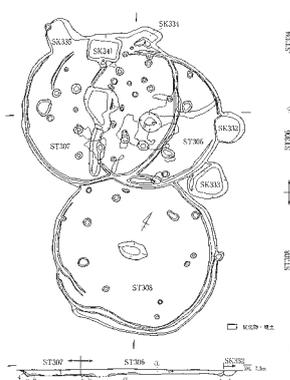
L3ST304 (第6分冊L2-6図 P425) S=1/240



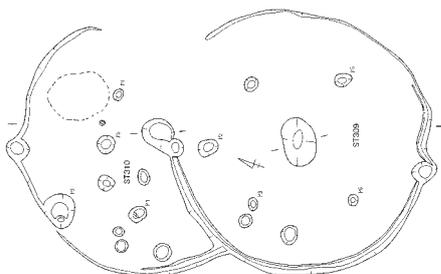
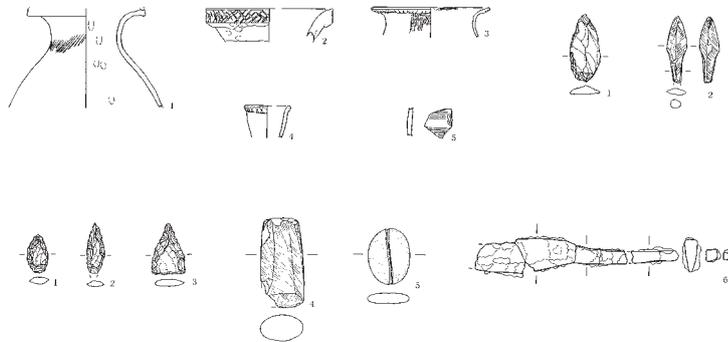
L3ST305 (第6分冊L3-7図 P426) S=1/120



L3ST308 (第6分冊L3-10図 P431) S=1/120

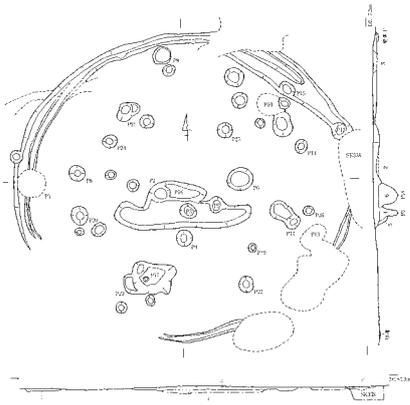


L3ST306~308 (第6分冊L3-8図 P428) S=1/240

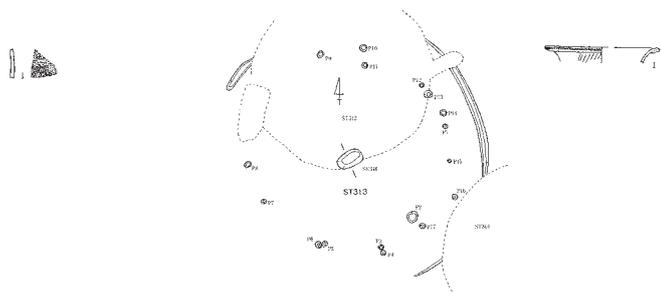


L3ST309 (第6分冊L3-11図 P433) S=1/120

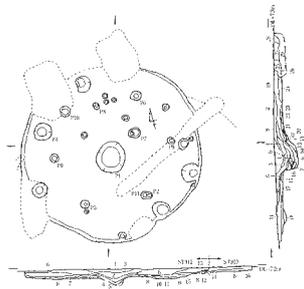
L3ST311~317



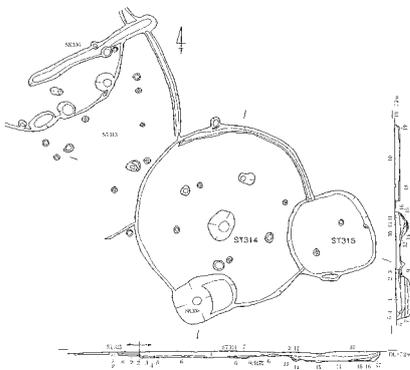
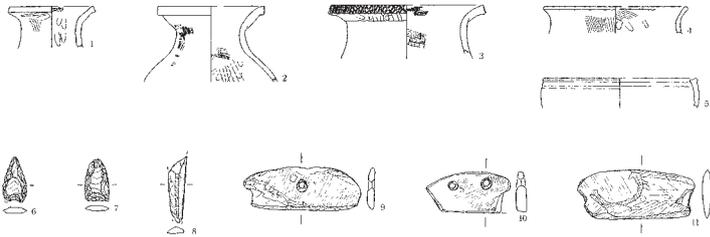
L3ST311 (第6分冊L3-12図 P435) S=1/120



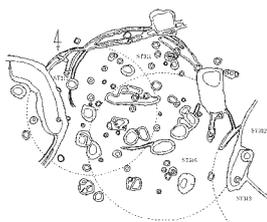
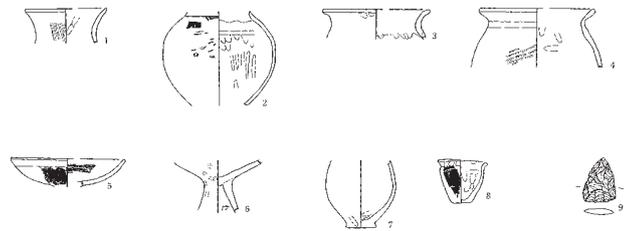
L3ST313 (第6分冊L3-14図 P439) S=1/240



L3ST312 (第6分冊L3-13図 P437) S=1/240

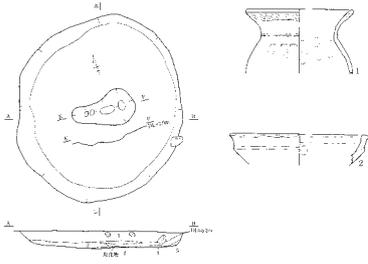


L3ST314・315 (第6分冊L3-15図 P441) S=1/240

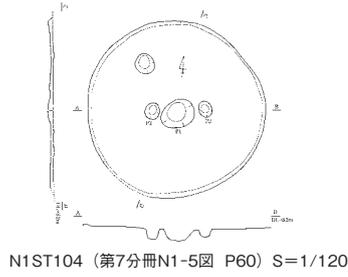


L3ST316・317 (第6分冊L3-16図 P443) S=1/300

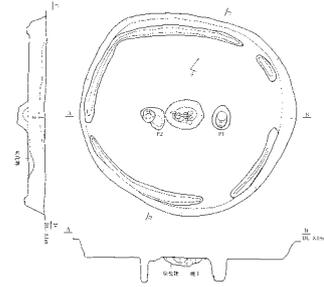
N1ST101~106、N2ST201・202、N3ST301



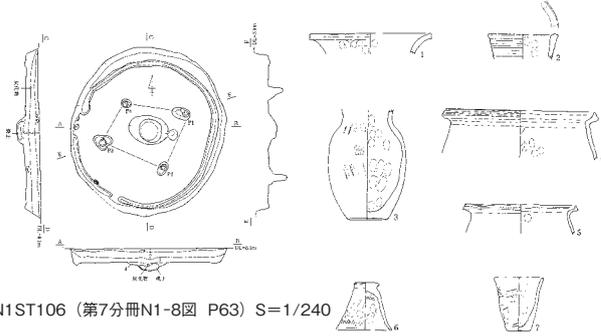
N1ST103 (第7分冊N1-4図 P59) S=1/120



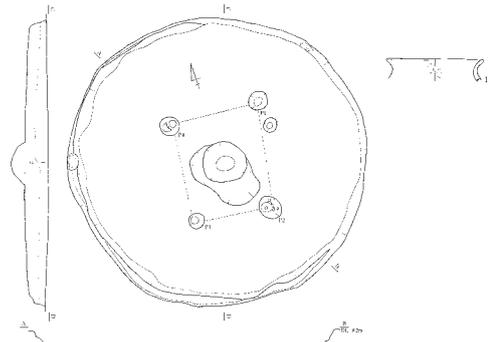
N1ST104 (第7分冊N1-5図 P60) S=1/120



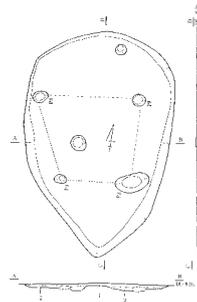
N1ST105 (第7分冊N1-6図 P61) S=1/120



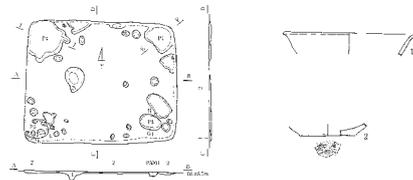
N1ST106 (第7分冊N1-8図 P63) S=1/240



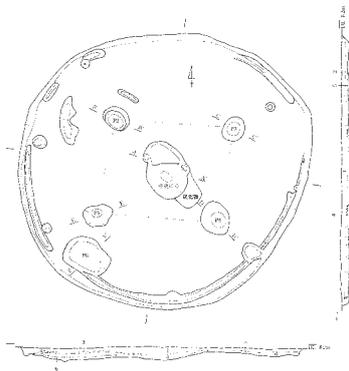
N1ST101 (第7分冊N1-3図 P57) S=1/120



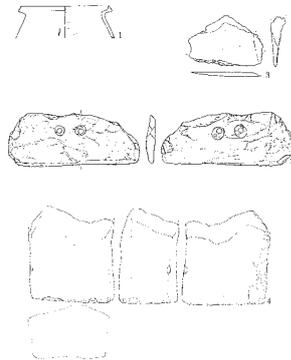
N1ST102 (第7分冊N1-3図 P57) S=1/120



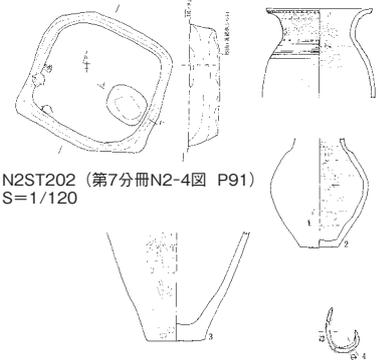
N3ST301 (第7分冊N3-3図 P98) S=1/240



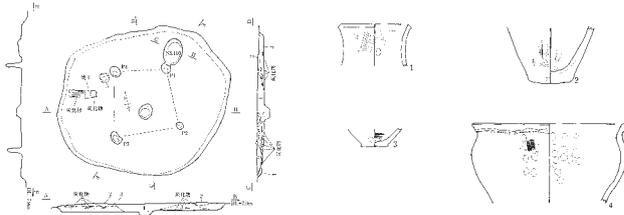
N2ST201 (第7分冊N2-2図 P90) S=1/120



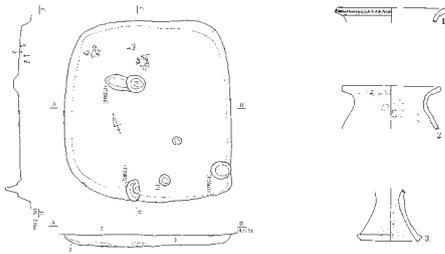
N2ST202 (第7分冊N2-4図 P91) S=1/120



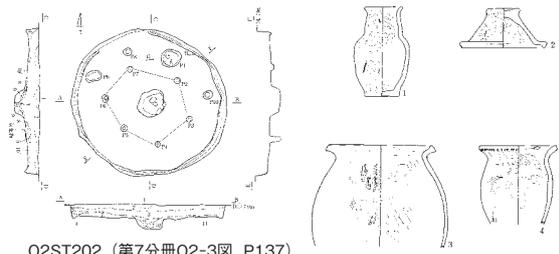
O1ST101、O2ST201~203、P1ST101



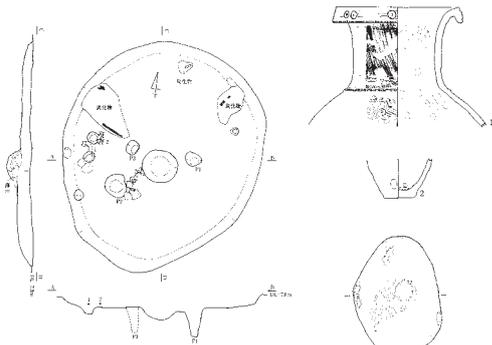
O1ST101 (第7分冊01-2図 P117) S=1/240



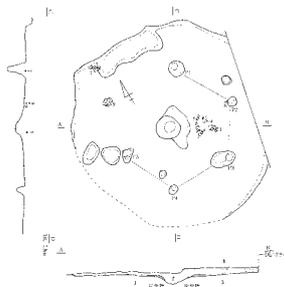
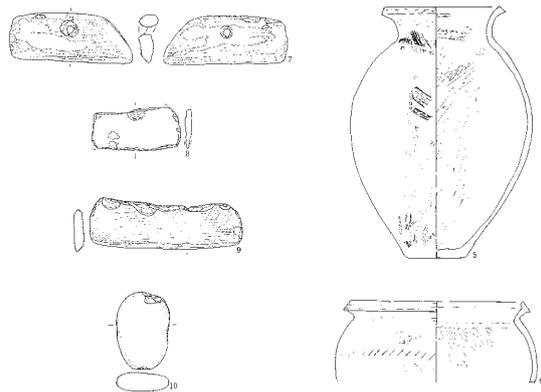
O2ST201 (第7分冊02-3図 P137) S=1/120



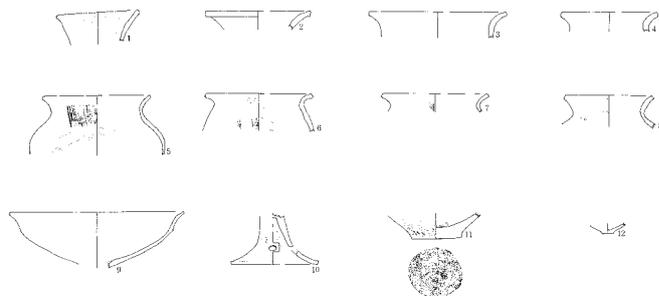
O2ST202 (第7分冊02-3図 P137) S=1/240



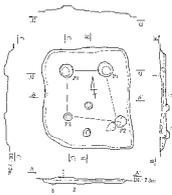
O2ST203 (第7分冊02-6図 P141) S=1/120



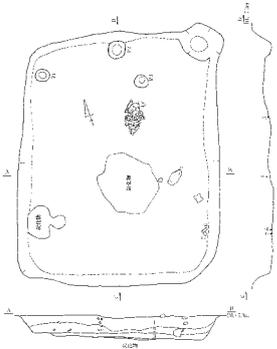
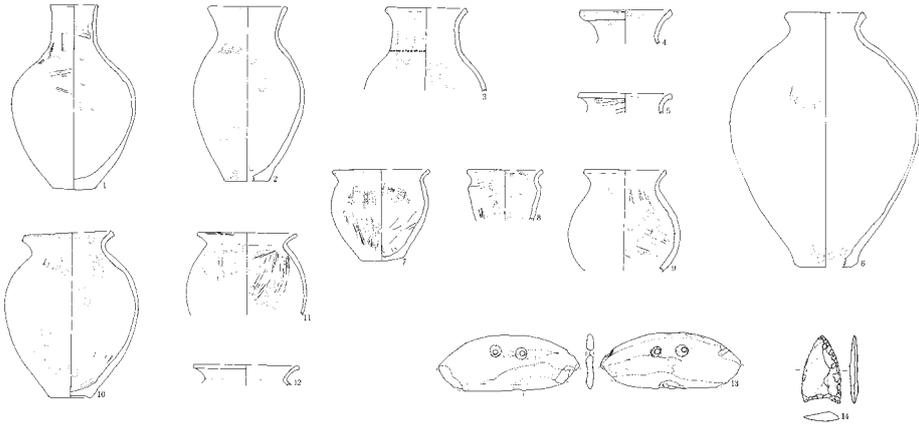
P1ST101 (第7分冊P1-2図 P189) S=1/240



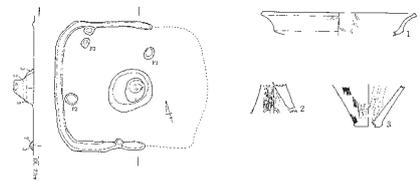
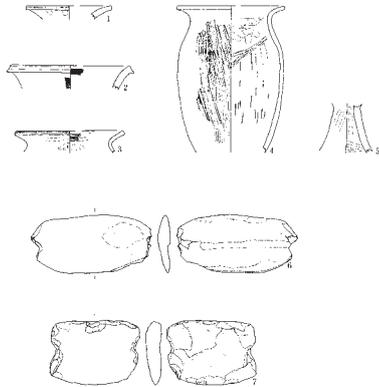
P1ST102~104、Q2ST201・202・205



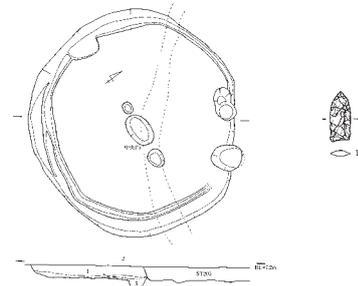
P1ST102
(第7分册P1-3图 P190)
S=1/240



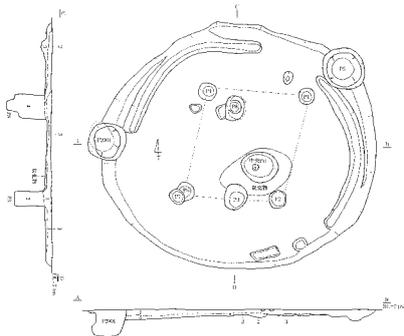
P1ST103
(第7分册P1-6图 P193) S=1/120



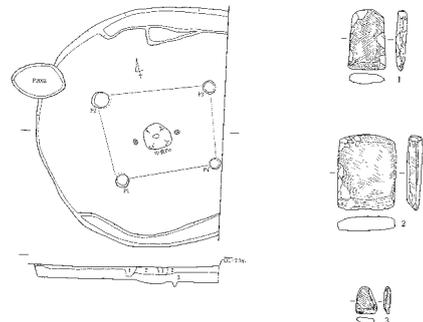
P1ST104 (第7分册P1-7图 P194) S=1/240



Q2ST205 (第7分册Q2-7图 P271) S=1/120

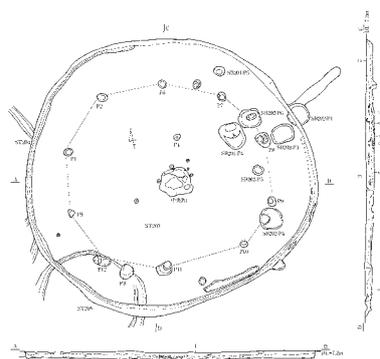


Q2ST201 (第7分册Q2-2图 P265) S=1/120

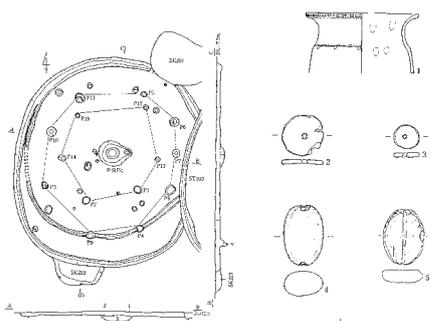
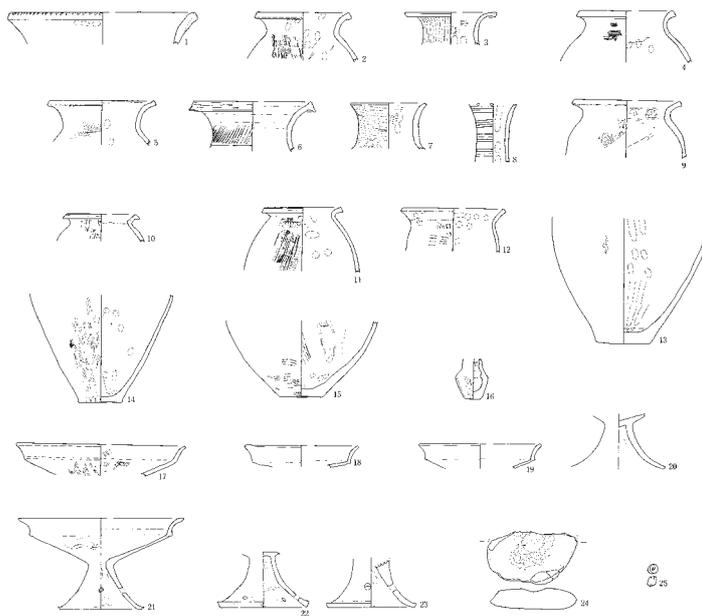


Q2ST202 (第7分册Q2-3图 P266) S=1/120

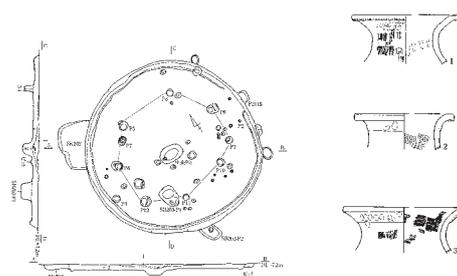
Q2ST203 · 204 · 206 · 207 · 209



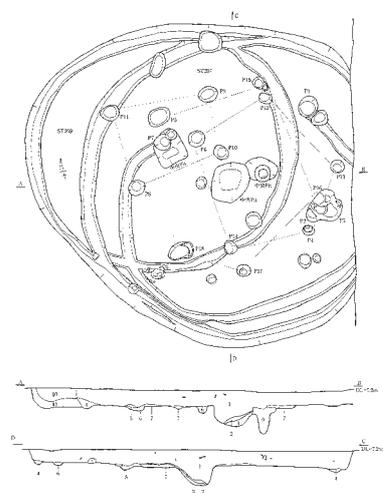
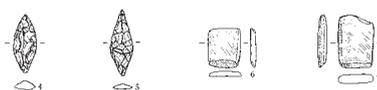
Q2ST203 (第7分册Q2-4图 P268) S=1/240



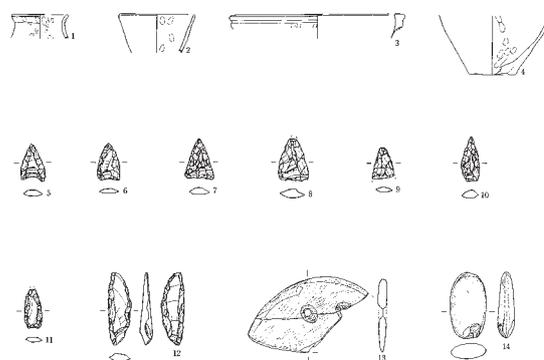
Q2ST204
(第7分册Q2-6图 P270)
S=1/240



Q2ST206 (第7分册Q2-8图 P272) S=1/120



Q2ST207 · 209 (第7分册Q2-9图 P274) S=1/120



住居跡集成图 60

報告書抄録

ふりがな	たむらいせきぐん							
書名	田村遺跡群Ⅱ							
副書名	高知空港再拡張整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	第9分冊							
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第85集							
編著者名	小野由香・久家隆芳・小島恵子・坂本憲昭・坂本裕一・筒井三菜・二宮修治・出原恵三・畠中宏一・浜田恵子・前田光雄・森田尚宏・吉成承三							
編集機関	(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター							
所在地	〒783-0006 高知県南国市篠原1437-1 TEL 088-864-0671							
発行年月日	2006年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たむらいせきぐん 田村遺跡群	こうちけん 高知県 なんこくし 南国市 たむら 田村 あざにほんまつ 字二本松 みなみどい まえ 南土居の前他	39204	040234	33° 33' 8"	133° 39' 48"	平成8年8月 ～ 平成13年12月	154,167㎡	高知空港 再拡張整 備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
田村遺跡群	集落跡	弥生時代 前期 中期～ 後期	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑 溝 流路 ピット	弥生土器 石製品 鉄製品 青銅製品		弥生時代前期～後期 前半の遺構、遺物の 総括を行った。		
	集落跡	古代 中世 近世	環濠屋敷 土塁(田村城館) 掘立柱建物跡 土坑 墓 溝 ピット	土師質土器 瓦質土器 貿易陶磁器 近世陶磁器 石製品 鉄製品		古代、中世、近世の 遺構、遺物の総括を 行った。		

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 85 集

田村遺跡群 II

第 9 分冊

2006 年 3 月 31 日

編 集 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

発 行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県南国市篠原 1437-1

Tel. 088-864-0671

印刷 有限会社 西村謄写堂